THE CENTRAL REVIEW

[illegible][illegible]會

中央公論

十月號

第三十九年第十一號　第四百四十號

此廣告を見て御申込の方は中央公論愛讀者なる旨御申添を乞ふ


白粉
色黑き人
日焦けして色黑くなりたる人
又生來餘り白からざる人は
先づ地肌に紅を
水白粉にて溶きたる
ものをつけそれを暫し乾かし
水刷毛したる上に
何時ものやうに
白の白粉にて化粧すべし
（ミスユタカ）
この頃の化粧には
先づ地肌を調へたく
それにはオイデルミン
クリームを能く〳〵
すり込みて拭き取りたる後に
とき水にて煉白粉を溶きて
初めは薄く次第に
濃く三度ほど
塗りたし
東京銀座資生堂
支店　大阪市東區南久寶寺町四丁目

誰方(どなた)にも調和(うつり)の好い

純品質主義

鷹印帽子

色調各種豊富

東京
大阪
株式會社　高橋製帽所



卑猥なる廣告の申込は謝絶す　中央公論社

▼說　苑


クラブ
ハミガキ
Club
DENTAL CREAM
一日の氣分を爽かにする朝と食后のクラブ歯磨
クラブ煉歯磨
家庭用にはクラブ粉歯磨
旅行用にはクラブ煉歯磨
食后用にはクラブ水歯磨



雨晴　　森田恒友筆

高橋龜吉著

經濟學の實際知識

四六判箱入 四百頁 布裝 定價貳圓（送料十七錢）

忽拾版

社會問題勞働問題の根柢に横はる、經濟問題の根本知識を明快直截に說いた實に本書は一讀直に經濟界の種々相を顯微鏡下に見得るものである。今迄の經濟學は餘りに技術的にのみ說明し、餘りに斷片的にのみ經濟界を見たから實際問題に當面すると死物に陷つたが、著者は綜合的に說き機能的に物を見たから一々我々の實生活とピッタリ合ひ從來の經濟學に失望した人達も本書の前には始めて感謝することが出來る。

山川均譯（エリオット原著）

近代科學と唯物論

四六判箱入 布裝四百頁 定價貳圓五拾錢（送料十七錢）

近代に及んで、人類の知識が、すべてを科學的解決の方途に求めて止まなかつた努力は、遂に其の著しい成業を綜合して一元的唯物論的の宇宙觀を立派に立てることができた。玆に眞の宇宙觀は始めて確立され、延いて正しい人生觀の方向に決定を與へるに至つた。本書は夙に世界的名著として稱あるもの、譯文平明直截、讀者をして盡きざる興味の中に幾多の啓發を與へて止まない。

東京神田美土代町二ノ一

白揚社

振替東京二五四〇〇番

編輯

岡本綺堂
中村吉藏
菊池寛
山本有三
仲木貞一

菊判大本 全十六巻

體裁

菊判 天金 總布製
極美本
全部九ポイント組
紙數五百五十頁余

豫約募集 現代戲曲全集

現代戲曲全集は明治大正の四半世紀に亘る我が劇壇の巨匠大家が、心血を注いだ全劇文學の精粹であり、眞隨である。言ふまでもなく、其の內容と技巧に於いて泰西の名戲曲に拮抗して敢て遜色なく、殊に我が國土に生え拔きの、生一本の純眞無垢なる國民的意志の體現であり、情感の發露である雄篇傑作を網羅したる所に最大の價値がある。

即一切の廣汎なる趣味と、深遠なる智識と、奔放なる情熱と、鋭敏なる感覺との總和總量を藏せる無類の國民的一大寶庫である。

巻	題名	篇數	著者
(1)	桐一葉	外四篇	坪内逍遙
(2)	修禪寺物語	外十三篇	岡本綺堂
	秀吉と淀君	外四篇	松居松葉
	櫻時雨	外二篇	高安月郊
(3)	上杉謙信	外七篇	山崎紫紅
	出雲のお國		伊原青々園
	薩摩歌	外三篇	岡鬼太郎
(4)	剃刀	外七篇	中村吉藏
(5)	父歸る	外九篇	菊池寛
(6)	信西	外八篇	谷崎潤一郎
(7)	その妹	外十篇	武者小路實篤
(8)	布施太子の入山	外三篇	倉田百三
	項羽と劉邦	外三篇	長與善郎
(9)	夢介と僧と	外十一篇	吉井勇
(10)	歡樂の鬼	外七篇	長田秀雄
	和泉屋染物店	外五篇	木下杢太郎
(11)	第一の世界	外六篇	小山內薰
	雪	外六篇	久保田萬太郎
(12)	阿武隈心中	外七篇	久米正雄
(13)	生命の冠	外六篇	山本有三
	新樹	外一篇	里見弴
	第一の曉	外六篇	秋田雨雀
(14)	山賊と首	外一篇	仲木貞一
	科學食料會社	外五篇	藤井眞澄
	城	外三篇	島村民藏
	秦の始皇	外二篇	灰野庄平
(15)	玄宗と楊貴妃		近藤經一
	眞間の手古奈		小寺融吉
	能祇と泥棒		田島淳
	茨木屋幸齋	外四篇	池田大伍
	眞如	外四篇	額田六福
(16)	熊と人と	外二篇	川村花菱
	松永彈正		岡榮一郎
	母親		關口次郎
	次郎吉懺悔	外三篇	鈴木泉三郎

◆豫約申込十月三十一日限

◆內容見本御申越次第進呈

規略

申込金 金五圓 毎月拂込金 四圓

一時拂 金六拾五圓也 外に送本料を要す

送本 大正十三年十二月より毎月一冊十六ヶ月完了

東京市麴町區內幸町一ノ六
電話青山四六七二番
振替東京五二二九八番
國民圖書株式會社

大正十三年

中央公論

十月一日發行

拾月號

第卅九年　第十一號

第四百四十號

昨今の世相

選擧法の改正につき政府與黨間に略ぼ纏つた成案が出來たらしい。政府案にしても三派案にしても大體のところは同一であつたから、吾々に取つては何れに落ち付いても大差はないのだが、實際問題としては各方面の行掛りだの面目だのといふことがあつて事實上の協定がついたと聞くまでは安心が出來ない。昨今協定成立の報を耳にして實は始めて愈近き將來に於ける改正の實現を期待し得ることゝなつたのである。

選擧法改正の眼目は三つある。一は權利の擴張である。選擧權のみならず被選擧權まで擴げられたことは至當の處置である。只官吏被選擧權に就ては、之に關する根本の論點が選擧競爭非に議員兼任が官吏としての職務と兩立するや否やに在るを忘れて、或は絕對 之を許さずと、或は當選の上辭職すればいゝではないかとか、ぎこちなき決定を見んとするのは聊か物足らぬ感がする。二は選擧區及之に關連する比例代表採否の問題である。比例代表はもう少し研究して見るといふことになつたらしく、選擧區は所謂中選擧區に改めるといふに略ぼ一致したやうだ。之等は理論上の判斷に倚るよりも寧ろ實際上の便否を大に斟酌すべき問題で、從ていろいろの方法を實驗して見る必要がある。此意味に於て右の決定は蓋し機宜を得たるものと謂てよからう。三は方法に關する諸問題である。期日短縮の要求、之もいゝ。從來のは餘り長かつた。官廳側の準備とか民間に於ける候補者の物色決定とかに必要な日數以上に間隔を置くは寧ろ弊害の因を爲す。戶別訪問の禁はいゝが保證金は高きに失すると思ふ。選擧費用の最高限の高過ぎることも論はないが其の細目の公表を强制せざるに至ては龍を畫いて睛を點ぜざるの嫌がある。要するに之等の條項の目指す所は、選擧競爭をして黃金や情實やの跋扈する所たらしめず、一に才德の所矚する所たらしめんとするに在る。隣りの人が風引いて襟卷をしたからとて自分、熱さを怺えて襟卷をする必要はない。英國邊でやるにしい効果ををさめた規則に倣ふに結構だが、只之と共に其の根本の趣旨をも併せ取るを忘れざらんことを望まざるを得ない。

× × × × ×

滿鐵總裁の機密費が創立以來三十萬圓であつたのを川村前社長が急に之を八十萬圓に增加したことが問題

となつて居る。八月半ばの新聞に依ると、滿洲視察に往つた政友會四國の代議士坂井大輔氏は、之を「選擧の費用に使つたといふは動かし難い事實だ」と云つて居るし、前關東廳の警務局長であつた中山佐之門氏も、「機密費を何に使用しようとそれは川村社長の勝手で法律的に責任を問はれることはない。選擧費用に使つたとしてもそれは德義上の問題で、そのために川村社長は辭任をしたのだから少しも問題ぢやない」と云ひ、暗に選擧の爲に支出したことを肯定して居る。機密費の增額に付てはそれ〲法規上の手續を經て居るから之には問題がないとしても、之を何に使つたとて構はないといふは驚くべき暴言だ。法律上第三者から責めることは出來ぬとしても、其事實の一端が暴露した以上、之は慥に政治道德上の一醜聞たるに間違ひない。之に依て私等は、從來の多數黨が政權を濫用して腹心の者を特殊會社の首腦部に据ゑ、選擧の際などあんな風にして不正を働いたのだらうとの一つの活きた實例を見せ付けられる。其後の報道に依れば朝鮮の方にも同じ樣な醜怪な事實があるとやら。濱田拓殖局長官の樺太視察談も之と併せて考ふるの必要がある樣に思ふ。斯かる例が現内閣の下にポツ〱あばかるゝなら、夫れだけでも現内閣に存在の理由はある。若し夫れ中山前警務局長とやらが、法規上の無責任と併せて川村社長の辭任と共に德義上の責任も亦完全に解除されたと說けるに至ては、法規の禁令にさへ抵觸せずば何をしても構はないとする最も低劣輕薄な明治官僚型の好代表の言として、永く之を記錄に留むるの價値がある。

× × × × ×

此春頃堺利彦君を捉へて「あなたもいゝ年をして社會運動でもあるまい、風月を樂んで餘生を送られてはー」と忠告して物笑の種を蒔いた檢事があつたといふ。此のことは當時新聞か雜誌かで讀んだ記憶がある。堺君に思ひ止らせることは成程六かしからうが、併し同じ樣な忠告を冷水連中に向ける國家的必要は大にあるといふので、昨今官界の一部に新に風月運動なるものが起つて居ると云ふ投書が來た。發企人の前揭檢事かどうかは殘念ながら不明だが、運動の鋒先を向けらるゝ老人の中に、元老の西園寺公、重臣として伊東巳代治、江木千之、在野政客として大石正巳、軍人として上原元帥、降つて山脇玄なんどが並べられてある所は些か痛快である。但し之等の人々をして風月を樂ましむるは實は、堺君を引退せしむるより猶ほ難い。成功の見込はないが、しかし本當に眞劍にやるのなら、其の意氣だけでも大に買てやるの値がある。



軍艦爆沈と師團減少

―國際平和と軍備縮小―

水野廣德

○

蓼々として斷崖を嚙む怒濤の逆卷も見る人の心によりては、或者は豪快を叫び、或者は恐怖に慄く、啾々として叢根にすだく秋の蟲の音も聞く人の情によりては、或者は幽雅と稱へ、或者は哀愁に泣く。近時世間に喧しき軍艦爆沈、師

團減少の聲も亦、軍國主義者や帝國主義者の耳には末世亡國の呪咀の弔鐘と響き、自由主義者や平和主義者の耳には救世和平の福音の聖經と聞へるであらう。人の心は十人十色と云ひながら、共に横目從縦の人間として、而かも同じ瑞穂の米に生くる日本國民として斯くも心の變はるものか。一方に軍備縮少の叫高ければ他方に軍備縮小反對のき唸もある。何れか是、何れか非、何れか正、何れか邪。之を裁くものは神にあらずして人である。軍備を定め、軍備を設け、軍備を支ゆる國民である。軍備を食ひ、軍備に養はれ、軍備に生くる軍人ではない。知らず、日本國民の耳には軍艦爆沈の砲の音と、師團減少の叫の聲とが如何に響くであらうか。呪咀の鐘か。福音の鐘か。

一昨年春華府會議に於て定められたる海軍制限條約は各國の批准を經つて今や其の實行期に入つて居る。此の海軍制限の華府協定こそ有史以來人間の爲したる最も高價なる、最も神聖なる大事業である。之に依つて歐洲大戰後當然起るべかりし恐るべき海軍擴張の大競爭を未然に防ぎ、各國民就中我が國民をして過大過重而かも有害無益なる軍艦製造費の負擔を免れしめたのである。華府協定あらずとするも、當時我日本は財政窮迫の結果として既定計畫なる八八艦隊の建造をば當然廢棄するの已むを得ざる運命にあつたのである。端的に言へば華府協定こそは實に日本財政の危機を救ふたるものである。若し夫れ曩に華府協定成立せずして後に昨年の大震災あつたりとせんか、我海軍は英米の六割は愚か二割三割に落下したるやも計り知られないのである。何故となれば米國は國費多端とは云へ、其の偉大なる富力は海軍を擴張するに尙ほ充分の餘力を有つて居る。之に反し大震災の深創を蒙つたる我日本には軍艦を製造せんにも今や財政の餘力がないからである。如何に富國の傲慢を呪つたとて恨んだとて、國際共産の實現せざる限り免るべからざる貧小國の悲哀である。米國にして若し害意あらば海軍競爭を以て日本を壓迫するには今日が絕好の機會である。而かも米國が此の好機を捉へながら、敢て其の海軍を擴張せざる所以のものは、實に是れ華府協定が嚴存する爲めである。此の意味に

中央公論



第卅九年 第十一號
十月號
第四百四十號

軍艦爆沈と師團減少

—國際平和と軍備縮小—

水野廣德

○

滔々として斷崖を嚙む怒濤の逆卷も見る人の心によりては、或者は豪快を叫び、或者は恐怖に慄く、唧々として簷根にすだく秋の蟲の音も聞く人の情によりては、或者は幽雅と稱へ、或者は哀愁に泣く。近時世間に喧しき軍艦爆沈、師

團減少の聲も亦、軍國主義者や帝國主義者の耳には末世亡國の呪咀の弔鐘と響き、自由主義者や平和主義者の耳には救世和平の福音の聖經と聞へるであらう。人の心は十人十色と云ひながら、共に旭日從來の人間として、而かも同じ瑞穗の米に生くる日本國民として斯くも心の變はるものか。一方に軍備縮少の叫高ければ他方に軍備縮小反對のき喚もある。何れか是、何れか非、何れか正、何れか邪。之を裁くものは神にあらずして人である。軍備を定め、軍備を設け、軍備を支ゆる國民である。軍備を食ひ、軍備に養はれ、軍備に生くる軍人ではない。知らず、日本國民の耳には軍艦爆沈の砲の音と、師團減少の叫の聲とが如何に響くであらうか。呪咀の鐘か。福音の鐘か。

一昨年春華府會議に於て定められたる海軍制限條約は各國の批准を經つて今や其の實行期に入つて居る。此の海軍制限の華府協定こそ有史以來人間の爲したる最も高尚なる、最も神聖なる大事業である。之に依つて歐洲大戰後當然起るべかりし恐るべき海軍擴張の大競爭を未然に防ぎ、各國民就中我が國民をして過大過重而かも有害無益なる軍艦製造費の負擔を免れしめたのである。華府協定あらずとするも、當時我日本は財政窮迫の結果として既定計畫なる八八艦隊の建造をば當然廢棄するの已むを得ざる運命にあつたのである。端的に言へば華府協定こそは實に日本財政の危機を救ふたるものである。若し夫れ曩に華府協定成立せずして後に昨年の大震災あつたりとせんか、我海軍は英米の六割は愚か二割三割に落下したるやも計り知られないのである。何故となれば米國は國費多端とは云へ、其の偉大なる富力は海軍を擴張するに尚ほ充分の餘力を有つて居る。之に反し大震災の深創を蒙つたる我日本には軍艦を製造せんにも今や財政の餘力がないからである。如何に富國の傲慢を呪つたとて恨んだとて、國際共産の實現せざる限り免るべからざる貧小國の悲哀である。米國にして若し害意あらば海軍競爭を以て日本を壓迫するには今日が絕好の機會である。而かも米國が此の好機を捉へながら、敢て其の海軍を擴張せざる所以のものは、實に是れ華府協定が嚴存する爲めである。此の意味に

於て華府協定こそは實に亦日本海軍の危機を救ふたものである。然るにも拘はらず軍國主義的短見者流は、今春米國議會が排日案を通過するや、華府協定を以て「日本の力を殺ぐ爲めの米國のペテンである」と叫び、愚直なる國民に向つて無益なる敵愾心を挑發するに力めた。吾人より見れば米國排日案の不合理なるは論外なるも、華府協定と排日問題とは全然別個獨立のものである。排日案は華府協定の有無に拘はらず!!敢て必ずしも震災の有無とまでは言はない!!早晩起るべき問題であつたのである。若し米國に於ける排日案の目的が日本を辱かしめ、日本を苦しめんが爲めでありとすれば、米國に取りては自國の海軍力を制限する如き華府協定こそ却て邪魔物である。米國如何に物好きと雖とも何を苦しんで自ら自國を邪魔する如き協定を結ばんやである。それとも又果して米國のペテンとすれば米國民は協定後一年半にして起りたる日本の大震災を豫知して華府會議を開いたのであらうか。或は大震災までが米國に加擔して日本をペテンに掛けたのであらうか。日本國民の多くは大震災を以て天譴と稱へた。果して天譴なりとせば天の自然までが米國に與みして日本を譴めたのである。日本國民たる者人を呪ひ、人を疑ひ、人を責むる前に先づ自ら省みねばならぬであらう。眼疾者は白光線を恐れて常に色眼鏡を用ゆる。色眼鏡を掛けずして世界を正視し得ざるは由來軍國主義者や帝國主義者の痼疾である。自ら弱者を苦しむる者は強者が己を苦しめんことを恐れる。人を呪はば穴二つと云ひ、己を以て人を律すと云ふは彼等の謂である。

◎

華府協定の犧牲として日英米に於ける幾多の主力軍艦が廢棄さるゝこととなつた。即ち日本に於ては十七隻、英國に於ては廿四隻、米國に於ては二十八隻、合計六十九隻、此の排水量約百八十萬噸である。而して此等の軍艦中には未成

未起工のものも尠ない。故に若し此等を悉く完成せしめ且つ若し協定成立せざりしものと假定せば、協定に依り明示たる千年間(大正二十一年迄)に日英米三國の國民は少くも六七億圓の製艦費を負擔せねばならぬのであつた。日本の八八艦隊を完成維持するのみにても、協定十年間に約二十億圓に近き製艦費を餘分に要したのである。七歩の高利を拂つて辛ふじて外債を募集せる我日本に、十年間に二十億圓の製艦費を支出する可能があるであらうか。七億圓の巨財を西比利亞の曠野に撒き棄てゝ惜しまざる我が國民も「無い袖」は振れぬであらう。廢棄せらるべき既成未成を引きくるめたる主力艦百八十萬噸の建造に支出したる經費は十億乃至十五億圓に達するであらう。十九億圓の金は決して少額ではない。併し之を昨年の大震災に依つて亡ひたる我國の損害に比すれば僅に數分の一に過ぎない。而かも之を犧牲に供することに依つて少くも十年間國際の平和を買ひ得たりとすれば誠に廉き買物と言ふべきである。殊に不生産的なる消費十五億圓を棄てることに依つて新しき六十億圓の金を生産的に轉用し得たる經濟上の利益は甚大である。何者の愚か華府協定を呪つてペテンと云ふ?

平和の使節として撰ばれたる華府協定の廢棄艦に、今正に祭壇に供られつゝある。彼等の中には過ぐる戰に赫々の偉勳を樹てゝ滿身創痍の名譽の軍艦もある。纔に呱々の聲を海上に擧げたばかりの新艦もある。工場の船臺に坐して未だ水に浸まざる胎艦もある。解體されて元の鐵塊に復歸するもの、古鐵相場で入札に附せらるゝもの、武裝を撤し丸裸にされて雜用に使役せらるゝもの、僚艦の標的となりて海底に擊沈せらるゝもの、其の末路は何れ秋風落寞悽悲哀の極みである。艦にして靈あらば有爲轉變の無常に泣くであらう。併しながら平和の犧牲となりし彼等の最後は戰爭の犧牲となれるよりも、一層神聖である、一層尊貴である。軍縮手當に懸岡る人間よりは默々として運命に從ふ軍艦の方が遙に高尚である。砲聲殷々天に轟き、砲煙漠々空に漲り、海波跳り水煙龍卷く其の中に何の抵抗も爲さず、何の不平も言

はず、從容として斃れながらに沈み行く此等の尊き犠牲艦の最後の光景を目に描く時、心からなる敬禮の意を表せざるを得ない。一度なりと自ら乘りたることのある軍艦に於て殊に然りである。軍事當局者が何時かは「御國の用」にと苦心慘憺作り上げ、築き上げたる軍備の縮減を欲せざるは情に於ては諒とするに足りる。

◎

人盛なれば人天に克ち、天定まれば天人に勝つと云ふ。國々民の輿論は天の聲である。我國民は茲に數年來陸軍縮小の必要を唱へ來つた。然るに軍閥の勢力尙ほ熾んにして彼等は憲政の本旨に反せる帷幄奏上權を塹壕とし、軍部大臣官制を鐵條網とし、陸軍の牙城に據つて頑強に、執拗に、國民に對して抗戰し來つた。勇敢と云へば勇敢である。緩慢と云へば緩慢である。併しながら若し彼等にして情實因緣我慾の私心を有せず、眞摯に、誠實に、衷心國家を思ふの念慮に出てたりとすれば、吾人は彼等の頑愚を憐むと共に其の忠誠の厚きと、其の信念の固きとに對して敬意を表するに吝なるものではない。

時は總てを解決する。陸軍縮小に對する國民の輿論は今や定まつた。流石に頑強なる軍閥も四面楚歌裡に部の內外の挾擊を受け、遂に城門を開きて自ら師團減小を聲明するの止むを得ざるに至つた。從令減師の動機と理由と目的とが大震災後に於ける財政緊縮の外的作用に出るとするも、將た又時世に後れたる我が陸軍の內容充實の內的自覺に出るとするも、何れにしても昨年の議會に於て時の陸軍大臣が「國防の見地に於て我が陸軍は最早や此上一兵一馬を減ずるを許さず」と昻然として放言したるに拘はらず、今日若干師團の廢滅の可能を聲明するに至れるは、軍閥に對する國民の勝利にして正に是れ天定まつて人に勝てるものである。國家としては政治上の一大進步にして陸軍としては國防上の一

大犠牲である。

傳聞する處に依れば、陸軍に於て今回減小せんとする師團の數は四個と云ふことである。國民は之を以て未だ決して滿足するものでないと信ずる。現に不完全ながらも國論の代表機關とも認むべき議會の大多數は、六個師團乃至十個師團の減小を主張して居る。吾人は世界の大勢に鑑へ師團半減の可能を信じ、帝國の現狀に照らし師團半減の必要を認むるものである（昨年本誌に掲げたる拙論『新國防方針の解剖』參照。）併しながら玆に吾人の先づ攻究すべき問題は減殺せらるべき師團の數にあらずして、陸軍當局者が昨年の言明を裏切り今回僅に四個師團減小を唱ふるに至りし事の眞相である。素より之が直接近因の一は昨年の大震災に依りて被りたる我が經濟上の大損害が、國費の極度緊縮を餘儀なくせしめたるに存することは疑ふまでもない。抑も災後復興の第一は經濟復興でなければならぬ。經濟復興の第一要件は國内の資財を不生産に節して生産に轉用することである。之が爲めには先づ國家の財政よりして緊縮整理を行はねばならぬ。而して國家の經費中陸海軍の軍費は最も多額を占め、而かも直接關係に於て最も不生産的なるものである。是に於てか經濟復興を實現せん爲めには、國家は先づ第一に尨大なる海陸の軍備費に向つて大斧鉞を加ふることは最も當然にして而かも最も有効なる策である。若し此の意味と目的とに於て現陸軍當局者が四個師團（之に要する一個年經費約二千五百萬圓）の減小を決行するとせば、尚ほ不充分ながらも聊か其の英斷を多とするに足るものがある。

○

併しながら更に一歩を進めて論ずれば、凡そ國家の經費は國政の運用に支障なき限り、常に最少限度、最低限度に切り詰めたものでなくてはならぬのである。理想を言へばそこに一錢一厘の冗費の存することを許さざる性質のもので

る。衝突ありしが故に節約し、衝突なければ濫費すると云ふ如き性質のものではない。就中不生産的なる軍備費の如きは特に然りで、軍事當局者にして眞に愛國愛民の誠があるならば、一師一艦の大は勿論一小隊の兵、一小蒸汽艇の微と雖ども必要以外に浪費濫費すべきでない。「兵力は多々益辨ず」などの口實の下に、國民の膏血より成る國費を自家權勢維持の爲めに濫費し、壯丁の汗涙たる勞働を不經濟なるォ一二に徒消される如きは、國家國民の能く堪へ得るところではない。是に於てか自ら疑は生ずる。昨春前陸軍大臣が「一兵一馬を減ずるを許さず」と議會を通して國民の前に放言してより以來今日に至る迄、吾人は我が陸軍兵力の減少を促がすに足るべき何等の國際變動を認めない。日露關係は依然として依然たり、支那は相變らず混沌として内爭に耽りつゝあり、日米關係は寧ろ險惡を增して居る。現陸軍當局者は如何なる國際的見地に於て、如何なる對外的理由に依つて今日俄に四個師團の兵力を減少し得るに至つたのであるか、陸軍當局者今日の言が正であり實であるならば、昨年の言は僞であり虚である。前陸軍大臣は口を國防の必要に藉りて國民を瞞着し、不要なる四個師團を存置して一ヶ年二千五百萬圓に近き民の膏血をば、自己の事ごつこに浪費したるものであるとの譏に對して何の辨解の辭があるであらう？國民は明確に彼の責を問はねばならぬ。

併しながら吾人は前陸相の人格を信じて然かく斷定したくない。然る時爰に更に第二の疑を生ずる。乃ち陸軍現當局者は災後復興の要求に迫まられて國防上に於ける陸軍々備に大缺陷を生ずるを知りながら、一兵一馬を減じ得ざる我が陸軍より、みすみす四個師團の兵力を減ぜんとするのであるか。然る時現陸軍大臣參謀總長等は現行制度の下に於て何ぞ能く陸軍國防の責に任じて其の官に止まり得るか。若し夫れ現陸軍大臣に於て、前者は前者、我は我、陸軍々備に對する兩者見解の相違に過ぎずと云ふならば、吾人は現陸相宇垣氏の政治的識見が前陸相より遙かに大なるに敬服すると同時に遺憾ながら前陸相を以て巨額の國費を不必要に浪費したる最も不適任なる最も不忠實なる陸軍大臣であつたと

斷ぜざるを得ない。尚ほ之と同時に從來陸軍々閥を中心とせる陸軍々人に依つて唱道せられ、固守せられたる我が陸軍の國防方針なるものは、昨是今非何等の權威も無くなるのである。立憲國日本として夫が正道である。吾人は斯くならんことを切に望むものである。由來我國軍人は封建的因襲により國防を我物顔に振舞ひ、其の計畫を迄も專斷せるは大なる間違ひである、潜越である。國防は素と國家の國防、國民の國防にして、斷じて軍人の國防ではない。殊に國防は國家の重大なる政務であつて、決して單なる軍務ではない。凡そ事物の計畫を定むるは其の責任の衝に當る者でなければならぬ。國防の責に任ずる者は軍人であるか、又は國民であるか。戰爭が軍人の手より國民の手に移りたる現代に於ては、之が責に任ずるものは言ふ迄もなく國民である。然るにも拘はらず國防の計畫をば軍人の專斷に托して顧みざる我國民の如きは、國防に對して極めて不忠實と云ふべきである。左れば國防計畫を定むるものは國民の信任ある政治的識見高く、國際的眼界廣く、經濟的知識大なる人々でなければならぬ。徒に敵愾心のみ强き軍閥主義帝國主義の軍人のみに任かすべきでない。軍人は寧ろ定められたる國防計畫の範圍内に於て作戰用兵のことを策れば宜いのである。軍人がヤレ一兵一馬を減ずるを許さずとかヤレ四個師團以上減小する能はずなどゝ頑張るは非立憲時代の遺弊風である。

◎

陸軍當局者は或は言ふであらう。「今回四個師團を廢減するは、震災の爲め支出の途を失ひたる新兵力新兵器の充實費をば之に依つて捻出せんが爲めである。而して四個師團の減小に依つて生ずる兵力の缺陷は、新兵力新兵器の充實に依つて補ふことが出來る」と。一應は尤もである。素人を諭すには誠に宜い口實である。併しながら歐洲大戰後、我が陸軍が其の編制に於ても、其の武裝に於ても、陳腐貧弱にして歐米の新式軍隊に對して恰かも骨董軍隊の觀あるは世間周知

んど公知の事實である。此の點に關しては部の內外兩方面より陸當局に對する忠言を耳にした。我が現陸軍の內容が如何に時代遲れにして如何に不眞面目なるかは、最近時事新報紙上に連載せられたる小林陸軍大佐の論文「陸軍の改造」を讀めば思半ばに過ぐるものがあるであらう。吾人は理想として地球の表面より一切の軍備なるものゝ絕滅せんことを希ふものである。左れど既に國家が巨費を投じて軍備を設置する以上、國民的情操に於て其の出來得る限り經濟的に、出來得る限り有力ならんことを望まざるを得ない。嘗て光輝燦かなりし我が陸軍をして今日の骨董的軍隊に墮落せしめたるは抑も誰の罪であらうか。惟ふに陸軍當局者としてよもや我が陸軍の實情を知らぬことはあるまい。若し知らずとせば三宅坂に高祿を食む幾百の陸軍々人は何を爲しつゝありしや、年々巨額の費用を消費する我が駐外武官は何を調査しつゝありしやを問はざるを得ない。大戰終了後既に滿六年を經て居るではないか。若し夫れ知つて而かも尙ほ之を爲さゞりしとせば、彼等は尸位素餐國家の祿盗人たるの謗を免れぬであらう。

○

我が陸軍の內容の改善充實は大震災に依つて初めて判つたのではない。大戰進行中に於て既に明らかであつたのである。若し大震災なかりせば陸軍當局者は一方に自ら認めて不要と爲す四個師團を存置しながら、他方に軍內容の改善充實費として更に多額の經費を國庫より貪らんとしたのである。彼等にして眞に國軍を愛し、國家に忠なりしせば、昨年の震災に依つて國庫の窮乏を待つまでもなく、數年前に於て四個師團は愚か、師團を半減してなりと軍內容の改善充實に力め、以て國軍の眞價を維持すべきであつたのである。國民精神の鼓吹者、國民道德の維持者を以て獨り自ら任ぜる我が陸軍當局者の國家に對する不誠意、陸軍に對する不忠實斯くの如しである。由來誤魔化しと賄賂とは戰國策士の常

套手段である。昨年の議會に於て陸軍從卒問題に關する某議員の質問に對し、陸軍當局者は現在我が陸軍に從卒と稱するものなしとて一言の下に跳ね付けた。吾人は之を聞き我が陸軍の一進步として當局の處置を稱讚した。然るに其後數月、東京の某大新聞紙に「ヒヤシビール」なる題號の下に在營一兵士よりの左の投書を見た。

陸軍の將校はいつになつたら兵卒を奴隷の樣に私用にこき使ふのを止めるのか知ら。おれは……隊の一兵卒である。大尉の當番（昔の從卒）をしてゐる。朝夕臺所の手傳ひから洗濯や子守その外にこゝでは申上げられぬことまで强ひられて働いて居る。

十日の夕方將校集會所に酒を飲んでゐる主人大尉からヒヤシビールを二本買ふて來いと命ぜられ外出して驛前の洋食店をたづねたが、生憎冷たいのがないので冷さないのを持參すると威丈高になつて叱り飛ばされ命に從はぬ故で胸をつき飛ばされた。

（中略）

おれももう數個月で除隊だ。在鄕軍人になつたら兵役はつらくないと鄕里に宣傳せよとよく將校は言ふが、どつこいさうは行かぬ。將校の樣に現役の時不法に兵卒をこき使つて休職になつてから恩給や金鵄勳章の增額を叫んで飯を食ふ人とはおれだちは違ふ。

在鄕軍人中の兵卒よ。眞相を見て全國の當番を救つて呉れ。おれは除隊したら死を決しても此不法なる兵卒の廢止と入營中戰時中の兵卒の家族の生活保障につくす考へだ。

之をしも陸軍當局者は得意の逆宣傳法に依つて社會主義者等の惡宣傳であると云ふならば、吾人は他に幾多の實例を聞いて居る。議員某氏の質問は從卒なるものゝ內質に關してゞあることは常識の存する限り推し知ることが出來る。然

るに陸軍當局者は從卒なるもの〻名に拘はれて甚だ不親切なる答辯を爲して居る。其の不誠意驚くべきではないか。事は微小なりと雖ども一班を窺ふて以て全豹を知るに足りる。加之我陸軍には軍務に從事せざる幾千人のおさんどん兵士があるのである。陸軍當局者の不誠意既に斯くの如しである。昨年は一兵一馬を減ずるを許さずと云ひ、今年は四個師團を減じ得ると云ふ。明年又更に五個師團を減じ得ることを誰か保證することが出來る？　四個師團の減小は現陸軍當局者の頭を以てしては非常の英斷と思惟せるならんも、師團半減の可能を信ずる吾人より見れば尚ほ甚だ姑息の縮減である。之を以て今年減小せらるべき四個師團の經費は國家經濟復興資金として全部之を國庫に返納せしめ、來年更に五個師團を減じて内容の改善充實費に充てしむべきである。大戰後六ヶ年間無爲に拋置したる内容充實が其後國費多端の此際、後一年待てぬと云ふ理由はない筈である。現内閣の與黨たるもの、其の自稱せる護憲の名に負かず、堂々軍閥の壘に肉薄して更に徹底せる陸軍縮小を斷行せしめんことを望むものである。而して之が爲には先づ第一に彼等が據つて以て不可侵の鐵條網と頼める軍部大臣官制を改革して陸海軍大臣の範圍を軍人以外にまで擴張することが必要である。此の鐵條網の破られざる限り、我國に立憲的國防策を樹立することは出來ない。我が衆議院は嚮に滿場一致を以て軍部大臣官制改革の建議案を可決した。現内閣は之を實現せしむるに最も力ある最も適當なる政府である。若し之をしも實現し得ずとすれば國民に對して議會の言責を如何せん、議會の面目を如何せん。更に政黨内閣の威信を如何せん。議會に於ける議員の言論は徒に空論美言を弄して内閣を乘り取る爲めのものではあるまい。

◎

陸軍縮小、師團減廢は今や我國民の輿論である。否軍備縮小は世界識者の輿論である。ゼネバに於ては英佛の首相を

始めとし、列國著名の政客が集つて今正に軍備縮小の爲めに大獅子吼を爲しつゝある。然るに何者の惡戯ぞ、陸軍縮小師團減廢を以て國家の基礎を危ふする暴擧であると杞憂を抱く者がある。其の愛國の情や諒とすべきも其の頑迷の見や度すべからずである。彼の地方繁榮の爲めに師團徹廢に反對する如き徒に至つては眼中唯地方的小利あるのみにして國家の大益を念とせざる眞の非愛國者である。師團の存在に依つて地方の繁榮を圖らんとするの心理に、戰爭に依つて一身の巨利を博せんと希ふ投機者と同一心理にして、平和人道の上より見れば陋劣卑低唾棄すべきものである。國家の爲めと聞けば最愛の兒さへ犧牲に供して惜しまず恨まざるが日本國民の誇ではないか。師團の廢止に依つて多少の地代家賃が下落するとも、國家大局の利益と思へば、寧ろ自ら進んで師團徹廢を出願するこそ眞の愛國の民である。

然れども地方人士が師團廢止を憂ふるのは情に於て猶ほ大に諒とするに足る。陸軍當局者が陸軍縮小に依つて國防に對する民間の疑惧を云爲したり、偕行の高官が陸軍の縮小に依つて國威の失墜を憂慮するに至りては正氣の沙汰とも思はれない。當局自身が爲めにせんとする宣傳さへ無くば、民心は決して動搖するものでない。國民の大多數は軍事當局者が思惟する程時代に盲目ではない。昨年大震災の時流言蜚語に迷はされて民心の動搖を來したるは或る方面の惡宣傳に基づけることは今や掩ふべからざる事實である。軍事當局者の杞憂にも増して滑稽の悲哀を感ずるは、師團減小に對する偕行社側の意見として新聞に傳へらるゝところの説である。彼等は曰ふ「何一つ優秀な力を持たぬ我が日本が今日列強の間に伍し世界を相手にして五大國中に數へられる所以のものは一に陸海軍の力に負ふものである……」とて暗に師團減小に反對の意を洩して居る。吾人は曾て若年の頃、老將軍より之と同一の言をば耳にタコの出來る程聞かされた。そして當時に在つては「成る程」と考へたこともある。是れ將校・將佐・貴賤の別に問はず、我國老人の頭に通有なる假作概念である。此の概念たるや、或る條件の下に於ては確に眞である。歐洲大戰前、戰後大陸海軍のみに依つて

行はれたる時代に在つては殊に然りであつた。然らば或る條件とは何ぞや。曰く、我が陸海軍の背後に之が活動運用に堪ゆべき充分なる國力の存する場合に於てのみ眞である。嘗て斯んな談を聞いたことがある。

或時或處に一人の武士があつた。臂力强く劍道に達し、殊に居合拔の名人として座右常に三尺の大刀を備へ客若し無禮の言行あらば拔く手も見せず坐ながらにして切り棄てた。唯彼は他人の前に於て決して起立したることなく、何時も端然として正座して居た。里人は彼を劍道の大達人として畏敬し、彼に對して無禮を働くものは無つた。然るに或日一人の惡戯者が外人より借りたるピストルを携へて入り來り閾居の外より彼を侮辱した。劍道先生怒るまいことか、「己れ無禮者め」と紫電一閃鞘を拂ふと共に我を忘れて立ち上つた。哀れむべし彼は足疾者であつた。刀を振り上ぐると共に腰が拔けて倒れて仕舞つた爾來彼は「腰拔けの大太刀」として村童さへも輕侮するに至つたと云ふのである。

日本は陸海軍といふ太刀を持つて居る。大和魂とかいふ劍道にも達せるであらう。座敷で小手先の切り合には是まで常に勝利を得た。併しながら日本は立ち上つて大刀を振ふだけの腰力か果して有るや、否や判らない。殊に日本はまだピストルと云ふ新武器を持つて居ない。日本の國力が如何なるものであるかは世界の公知せるところで、知らぬは寧ろ日本國民自身であらう。一朝有事の秋、其の老大なる陸海軍の大刀を振り廻はす際、日本國力の腰は挫けはせぬであらうか。活動の能力なき陸海の軍備のみに依つて世界に虚勢を張らんとするは「腰拔の大太刀」の嘲を招くばかりである。殊に何一つ優秀な力を持たぬが故に、せめて軍備の力に依つてなりと世界に活躍せんとするは、最も忌むべき、最も恐るべき時代錯誤の軍國主義なるのみならず、何一つ優秀なる力を持たぬ貧弱者が如何にして優秀なる現代式科學的軍備を保持することが出來るであらうか。現代の軍備は腕の力、氣の力にあらずして金の力智の力である。彼等老人の唱ふる處は貧乏なるが故に世間を嚇かす爲め、せめて家だけなりと立派にせんと云ふに等しき自家撞着の「出來ぬ希望」で

ある。そこに滑稽の悲哀を感ぜざるを得ない。我國は今や立ち上つては振り切れぬ而かも手入に巨費を要する骨董的大刀を賣り拂ひ、其の金の一部を以て有利有効なるピストルを買ひ、殘りを以て腰の治療を行ふか、夫とも亦振り切れぬと知りながら、「刀は武士の魂」とか云ふ封建的舊想に固着して融しの利かぬ「腰拔の大太刀」に妻子を飢やすか、二途其の一を擇ぶべき時である。

○

我が國民中には今尙ほ國防と軍備との區別を明かにせざる錯覺者が尠くない。前述の如く現代の國防は國民全體の任ずる處にして、軍備は軍人の掌る處である。之を譬ふれば國防は本隊にして軍備は前衛である。而して本隊たる國防の力は一定量である。故に前衛に力を殺ぐこと大なれば大なる程、前衛を支持し、援助し、補給する本隊の力は弱くなるのである。國防の力即ち國力を顧慮せずして獨り軍備のみを强大ならしめんとするは、恰かも本隊の力を計らずして前衛のみを强くすると等しく、無謀にして且つ極めて危險なる國防策である。而して前衛の力を定むる標準は本隊の力と戰場の狀況に依ると等しく、軍備の力を定むる標準は國力と國際の狀勢とに應ぜねばならぬのである。國力と國際の狀勢とを知れる者は軍人にあらずして政治、經濟、外交に通ぜる者である。

師團減小に對し、貴族院の有力なる或方面及び衆議院の某政黨の如きは、餅は餅屋、軍備の事は軍人に委せと云ふ意見があると云ふことである。然り餅は餅屋である。素人の猥りに喙を容るべきでない。軍人は軍事の專門家である。作戰用兵術の專門家である、併し國防と云ふ國家の大政務に關しては素人である、局外者である。國防上幾個師團を減ずるかを決定するは政治家の掌るべき任務である。何處々々の師團を廢するかに至つて始めて軍人の任務に屬するのである

る。貴衆兩院に席を有する政治家が國防に關する自己の重責を回避して軍人に一任するが如きは、國政に對して不忠なるのみならず自己輕侮の甚しきものである。

英國の新嘉坡軍港建設は最初軍人に依つて提起せられたる國防上重大問題である。然るに軍事に素人なるも政治に玄人なる現首相マクドナルド氏の高邁なる政治的見識に依り、强硬なる軍人派の反對を排斥して斷然之が建設を中止し、仍つて以て日英間に發生せんとしたる暗雲を排除することが出來た。若し英國が我日本の如く、餅は餅屋、軍事は軍人の專斷に任かす國なりしならば、英國軍人は斷じて新嘉坡軍港建設を中止することなく、日英の關係は今日頗る不愉快なるものになつて居るであらうと信ずる。賢明なるマクドナルド氏は新嘉坡に軍港を建設して日本と不和ならんよりも、之を中止して日本と和親を保つことが英國の國防上妥當有利なることを知つて居る。國防を論ずるものは常に此の大局に立たねばならぬのである。戰ふて勝つが國防の最善ではない。戰はざるこそ國防の眞の最善である。斯くても尙貴衆兩院の餅屋主義者は軍事は軍人に任かすべしとして、日英間の不和を未然に防ぎたる英國首相を愚なりとし、日英反感の種子を蒔かんとしたる英國軍人を賢なりとするか。

由來軍備の計畫を軍人の專門に任かすが故に不必要過大の軍備を設定し、國際猜疑より延いて國際不和を誘發するのである。自國の軍備を以て出來得る限り他國の軍備よりも優勢ならしめんと欲するは、其の愛國心に出づると、私慾に出づるとを問はず、古今東西を通じて一貫せる軍人心理である。華府協定に於ける自國海軍力に對する不滿は獨り我國の軍人のみではなかつた。米國軍人は日本の海軍力が過大なりと不服を唱へ、英國軍人は英國海軍力が小に失するとて不平を並べたのである。斯くの如き心理を有する軍人に對し軍備の縮小を要求するは、嬰兒より母乳を奪ふと同樣無理な注文と云ふよりも寧ろ殘酷なる要求である。

今日文明國に於て謂ふ所の軍備とは専ら對外兵力を指すのである。素より對外兵力と雖ども時としては國内の治安維持の爲めに對内的に使用することと無きにあらざるも、斯くの如きは治安警察力の不足を一時軍隊に依つて補ふに過ぎずして寧ろ稀有の例外に屬し、軍備の眞目的ではないのである。國内問題に軍備の力を使用する如きは文明國の恥辱とする處で、そこには必ず大なる政治の失態、社會の缺陷が存在せることを表明するものである。昨年大震災當時帝都の治安を保持する爲めに六個師團の大兵を動かしたる如き、陸軍當局者は之を軍隊の功績として軍備充實宣傳に利用せるも、其實輕擧妄動、常規を逸する國民性の弱點を中外に暴露したるものにして、國家としては大なる恥辱である。米騒動と云へば軍隊を繰り出し、勞働爭議と云へば軍隊を差し向く我國の如く對内的に軍隊を使用する國は文明國中蓋し稀であらう。

國内に於ける治安維持の爲めに備ふ警察的軍隊に就きては爰に說かず、對外的軍備は一國のみの絕對にあらずして、常に必ず四圍の狀況に應ずる相對のものである。故に我が作戰可能範圍内に於ける總ての國が軍備を有せざる時は我も亦之を設置するの必要はないのである。而して海軍の作戰可能範圍は海洋が世界共通なるが爲めに全世界である、之に反し陸軍の作戰範圍は輸送給養等の關係に於て著しく局限且つ錯綜されて居る。故に海軍は世界の唯一國のみが海軍を有する場合と雖ども我は之に備ふるの必要がある。然るに陸軍に在つては輸送力なき遠國が如何に大陸軍を擁するとも、我は之に備ふるの必要がない。凡そ戰爭の見地に於て一國軍備の理想は全世界を敵として戰ひ得るにある。而して此の場合海軍に在つては一國を以て全世界の聯合海軍に當るの力が無ければならぬ。左れど陸軍に在つては我國に侵入し得る丈の聯合陸軍に當るの力があれば足りるのである。一國と一國との場合に於ても亦同理である。例へば我國に對等[illegible]

の關係なき南米の或る一國が大海軍を擁したる場合に於ても我は之に備ふるの必要があるに反し、如何に大陸軍を擁するも彼は輸送力無き限り、我は必ずしも之に備ふるの必要はないのである。故に海軍兵力の標準を定むることは比較的單簡容易なるも、陸軍兵力の標準を定むることは頗る複雜多難である。是れ國際聯盟が多年陸軍縮小に關して攻究論議しながら、今尙ほ解決の具體案を發見し得ざるに反し、海軍縮小が唯一回の華府會議に依つて決定したる理由の一であると信ずる。當初難産を唱へられたる華府協定が案外容易に成立したる因由を列擧すれば大要に於て左の如きものであらうかと思はれる。

一、歐米就中會議國米國に於ける平和熱旺盛なりしこと、

二、艦體の增大と物價の暴騰に伴ふ製艦費の激增に依り各國民共に經濟上の負擔に苦みたること、

三、主催國米國が强大なる國力を有し、協定不成立の場合海軍大擴張を爲すの覺悟と實力ありしこと

四、軍艦の艦種艦型は世界殆んど共通なるが爲め、協定比率の基礎となるべき一定時に於ける各國の現在勢力を精確に計算し得たること

五、大戰の創痍深き英國が其の千年傳統の世界第一海軍政策を潔く拋棄し、米國と同率を以て滿足したること

六、日本が財政狀態と日米關係とに顧み、日米海軍競爭を避けんが爲め英米の六割標準を承認したること

七、日本を除く外參加大國が何れも米國に對して戰時債務を負ひたること

八、米國大統領ハーディング國務卿ヒューズ氏を始め參加國全權の政治的識見高かりしこと

九、日本全權加藤氏を除く外各國主席全權が軍備に執着せる軍人ならざりしこと

十、海軍々人は其の職任上比較的世界知識廣く國際心發達し、協同と互讓の精神に富み、且つ國内に於て愚惡の宣傳

を爲さゞりしこと

此等の諸條項中特に海軍に事關するものゝ外は、陸軍縮小の協定にも亦必須の條件であらねばならぬ。

◎

國際軍備を撤廢し、世界の永久平和を以て窮極の目的とせる國際聯盟は其第五回總會を九月一日よりゼネバに於て開催した。英國首相マクドナルド氏、佛國首相エリオー氏は親ら會議に列し、米國亦非公式ながら前大統領タフト氏をして之に參列せしめたるは、國際聯盟に一段の光彩を添ゆると共に一段の權威を加へたるものである。マクドナルド氏は開會の劈頭先づ起つて滿場の喝采を浴びつゝ約一時間に亘り

「予は全力を盡して平和の基礎を建設するに力める覺悟である」と冒頭し、曩に聯盟の提案したる「相互援助條約に贊成せざりしは英國が國際の平和保障に冷淡なるが爲めにあらず、唯現在の國際社會は未だ斯る條約を締結し、之を實行するに足る準備を缺ける爲めである。」と軟かに之を却け、進んで獨露兩國を國際聯盟に加入せしむる必要を說き、更に轉じて國際安全保障問題に就きては「個々の國際戰爭に就き果して何れが侵略國なるやを決定するは極めて困難事である。故に予は先づ此際國際仲裁々判制度を確立することの必要を主張する者である」と說き、「抑も仲裁裁判の目的とするところは軍備の縮小に在り」と斷案を下し、最後に「予は本會議の散會に先ち別に委員を設け、之をして『平和の憲章』とも云ふべき一文を起草せしめ、大に國際聯盟の精神を各國民間に宣傳し以て平和の輿論を喚起せんことを欲する」

と結んだ。英首相に尋ぎて佛國首相エリオー氏も亦滿場の喝采裡に起つて

「本聯盟總會の決定が仲裁々判の神聖なる原則とならんことを切望する」と説き起し、「仲裁々判の必要なるは更に之を繰り返へすの必要を認めない」と英首相の聲明に贊同し、「世界各國は今や頻りに平和を渇望して居る。吾人は國際的協調を確立して彼等に安全なる平和を與へようではないか」。「吾人の希望する平和は國家の權利と尊嚴とを毀損せざる平和である」。「今や兵力を以て國境に侵入することが勝利の最上策たりし時代は過ぎた。其代り嚴格なる規定に依り仲裁々判及び正義を支持する必要が擴大されて來た」と喝破し、最後に「佛國は戰爭を防止し、目下各國に行はれつゝある軍備競爭を阻止する爲めには如何なる手段に對しても飽くまで贊成する覺悟である」と宣明した。各國代表亦英佛首相の聲明に贊成の意を表し、我日本代表も亦「國際聯盟が過去に於て相互的援助を促進したる精神を諒とすると共に、基本的原則として各國家の安全と軍備制限とは相關聯せることを認む」と述べ、尚ほ「各國間に局部的協定を結ぶことは此際相當の基礎を缺くものとして」之に反對の意を表し、「若し斯かる協定を許さば聯盟加入國間にも互に相反對せる團體を起さしむる虞がある」と警告した。唯遺憾なるは此の國際重大問題に關し、非公式參列とは云へ米國代表より未だ何等の意見を聞くを得ないことである。斯くて聯盟總會は英佛首相の提議に基き滿場一致を以て軍縮會議促進の決議案を可決し、左の二項を議決した。

一、速に國際聯盟をして國際軍備縮小會議を招集せしむるが爲め國家の安寧及軍備縮小に關する一切の資料を調査すること、

二、平和手段に依つて一切の國際紛爭を解決し世界各國の協同一致及安全の基礎を強固ならしめ得べきや否を調査すること

右決議に先ち英國首相は起つて「世界大戰の苦き經驗は國際聯盟をして斯くの如き決議を必要とするに至らしめたのである」と火の如き熱辯に滿場を壓し、國際軍備縮小の氣運と世界平和の精氣とは各國代表の熱烈なる喝采と共に聯盟總會の議場に漲つたのである。

○

吾人は從來屢國際聯盟會議に於て歐洲の責任ある政治家より世界平和、軍備縮小を唱ふるの聲を聞かされた。時に宏辯卓犖流石に一世の北語と敬服に堪へざるものも尠くはなかつた。併しながら之を熟く彼等の多くは平和主義の假面を被れる帝國主義者や資本主義者にして、眞の人類愛平和愛の熱情より溢出せらるゝ言ではなかつた。否らざるも彼等の欲する處は自國第一の平和であつて、人類協同の世界の平和ではなかつた。今回の聯盟總會に於ける英佛兩首相の言は、其の述ぶる處、其の說く處、多くは前人の既に言ひ古したるところにして特に新奇獨創の卓說にあらざるも、マクドナルド氏と云ひ、エリオー氏と云ひ、共に心髓より人類愛に燃ゆる平和主義者である。其の述ぶる處悉く其は彼の半而虎身者の蓄音機的平和論ではなく、腹のドン底より迸り出づる眞の生きた平和論である。我慾に立脚せる自國の爲めの平和でなく、博愛人道に基礎せる世界の爲めの平和である。

中にも吾人の最も欣快とするところは佛國が現首相の下に翻然として、世界平和の障害たりし軍國主義の悪夢より覺め、大戰以來踏襲したる對獨强壓政策を拋棄して協調政策を取るに至つたことである。彼の「佛國は戰爭を防止し軍縮の競爭を阻止する爲には如何なる手段に對しても飽くまで贊成する覺悟である」と大膽なる聲明の如きは、ポアンカレー、ミルランの如きに聞くを得ず、獨りエリオー氏に於てのみ初めて聞き得る聲にして、錚々として金石の響がある。其

のルール撤兵を宣明して　久しくラインの空に鬱結低迷したる暗雲を開き、歐洲の和平に一道の光明を導きたるが如きは　樺太撤兵に趦趄逡巡せるものに正に鑑とすべきものであらう。吾人は現在の國際聯盟なるものに就いて餘りに多くの缺點と弱點とを見出すものである。先づ第一に米國の不參加は勿論、獨露の如き大國を除外したる國際聯盟が果して能く其の規約の實行を世界に向つて强要するの權威あるや否やを疑はさるを得ない。第二絕對平等なるべき獨立國家の聯盟に於て、大小國の間に權利の不平等を設けたるは、大國の横恣と小國の不平とを招き、世界平和を確保するの途に適ふや否やを疑はさるを得ない。第三は世界平和を目的とせる神聖なるべき聯盟規約と、過酷非道勝者の復讐條約とさへ稱せらるゝベルサイユ講和條約とを同一嚢中に包みたる點に於て聯盟の尊敬を疑はざるを得ない。是等の疑惑と、過去に於ける聯盟主腦人物とよりして、從來吾人は聯盟に對して多くを期待することが出來なかつた。然るに今や幸に英佛首相の如き平和の眞人格者の參列指導を見て、聯盟に對する吾人の信賴と期待とは自ら增加せざるを得ないのである。

◎

世界平和は今や文明國民の輿論的熱求である。如何なる侵略的軍國主義と雖とも顧みて一たび歐洲戰爭の慘禍と苦痛とに想到すれば、戰爭を呪咀せずには居られぬであらう。然るに拘らず國際戰爭の黑煙の聲は今尚ほ屢世界の各方面に於て、或は叫ばれ、或は囁やかれ、國際聯盟會場一步を出づれば、都と云はず、鄙と云はず、劍光銃影、白日の下に殺人の訓練が行はれてゐる。抑も現代戰爭の起因は、國際間に於ける政治上或は經濟上に屬する或種侵略欲の衝突か、否されば一國が他國に對する侵略欲の强行に因るものである。國際禮儀の進步したる今日、理義單明なる國家面目問題に依つて戰爭を惹起する如きことは殆んど絕無と云ふもかなりである。而して過去の歴史に徵すれば何れの場合に於

ても、交戰國は互に他を侵略者と云ひ、自己を正當防衛と稱へ、之が眞相を辨知することは極めて困難である。世界は今日尙ほ未だ之を判決する如き權威ある機關を有しない。是に於てか勝てば官軍、マイト、イズ、ライトで、正義を湮め、暴力萬能の世となるのである。凡そ暴力跋扈して正義湮沒するの時、個人間に於ても、國際間に於ても、眞の平和は保たれない。力の對立は結局衝突に終る、國際に在つては戰爭である。軍備の對立は暴力の對立である。軍國主義者帝國主義者が軍備の必要、維持、充實、擴張の唯一の口實とせる武裝平和なるものは、其の實平和にあらずして戰爭の準備に過ぎない。武裝平和は暴力是認の一轉語である。

戰爭の未發に方りて國際紛爭を裁判し、之が正邪を裁いて、邪を邪として之を制壓し、正を正として之を擁護し、以て正しき世界の平和を保持するのが國際仲裁々判の精神であり　任務であり、目的である。故に仲裁々判は如何なる强國に對しても必ず其の判決を貫徹するに足るべき國際的實力を具備せねばならぬのである。斯かる實力を保有するには世界的協同動作を必要とする。而して現在に於ける世界的協同團體中最も大にして又最も有力なるものは、不完全ながらも國際聯盟に如くものはない。之を以て國際聯盟を改善し、發達せしめ、之に依つて權威ある國際仲裁々判を確立することは、國際平和を確保するの捷徑路である。

旣に國際紛爭を仲裁々判に付し、之に依つて正邪を判別し問題を解決し得るとせば　判決貫徹に必要なる聯盟軍備以外に各國各自の備ふる對外軍備なるものは自ら無用の長物となるの道理である。之を以て國際仲裁々判の確立は各國軍備の縮小撤廢を促し、同時に各國軍備の縮小撤廢は國家保安の爲め有力にして權威ある仲裁々判の確立を必要とするのである。即ち仲裁々判の確立と各國軍備の縮小とは密接不可分の關係を有するものにして、假令仲裁々判を設くるも軍備を縮小せざれば、强暴國は其の判決を蹂躙すべく、又單に軍備を縮小するも、仲裁々判なくば國家の安全を確保する

ものが無い。

○

力が物言ふ現代世界に於て、仲裁々判と軍備縮小とは永久平和に達する唯一の而かも最も有効なる法途たることは、論理として理義明白一點の疑惑を挾む餘地を存しまい。併しながら實際問題として之が實現を見るに至るまでには尚ほ幾多の迂餘曲折を經ねばならぬであらう。之が成功を見る迄には尚ほ幾多の蟠根錯節を切り開かねばならぬであらう。而して其の第一の難關は『正義』の解釋である。精神文化尚ほ低き現代の人間或は國家には劣者を苦しむることを以て優者正當の權利であると信じておるものが尠くない。此處に人種平等問題が存して居る。或者は所有の權に依り自然の國土資源を獨占することを以て正義と信じて居る。こゝに資本主義の現實がある、或者は生存の權に依り他人の所有を犯すを以て不法ならずと信じて居る。こゝに社會主義の主張がある。米國の排日問題、英國領地の門戸閉鎖問題、朝鮮問題、印度問題等皆之に類するものである。仲裁々判は果して如何に之を解決するであらうか。國際聯盟參加國の殆んと全部が資本主義や帝國主義を固執せる現代に於て、果して能く合理的『弱者の正義を強者と對等に擁護する』なる解決が出來るであらうか。

第二の難關は陸軍縮小問題である。海軍縮小は華府會議に依つて不完全ながらも既に其の大綱が協定せられ、殘る處は寧ろ枝葉の問題である。來るべき軍備縮小會議に於て陸軍問題こそ難問である。聯盟委員に於て之が研究に從事すること既に數年、未だ具體的成案がない。抑も各國が軍備縮小の決行を難ずる主なる理由は軍縮後に於ける國家の保安に對する憂慮の爲めである。併し軍備の量は絶體でなく相對である。十對六も、五對三も、國家の相互防衛の上に於て相

違はない。故に各國にして或度程の相互信用と協調の精神だにあらば、軍備の縮小は理性の上に於ては不可能事ではない譯である。殊に各國の安全にして確實に保障せらるゝに至らば、軍備の撤廢すらも可能であるべき筈である。

併しながら反面より論ずれば軍備は相對であるが故に、地形國情を異にせる諸國の間に於て其の協定の比率標準を定むることが困難である。例へば日本と佛國とは假りに國土の面積人口富の程度が同一なりとするも、尚ほ隣邦との關係、用兵の難易等により同一比率を強ゆることは出來ない。各國を通じ陸軍兵力は秘密に付せられ居るが爲め、協定比率の基準となるべき一定時期に於ける各國の現在兵力を確知することが出來ない。是れ縮小協定の容易に成立せざる理由である。加之各國の保守派政治家中には今尚ほ軍備立國主義を固執せる者もある。或は軍備の力に依つて天下に號令せんとする野心家もある。殊に軍閥一派の如きは自家擁護の爲め「軍縮亡國論」を宣傳して國民を惑はし、以て政治家を牽制する者も無いではない。

海軍制限協定の比較的容易に成立したるに拘はらず、軍備の片割たる陸軍の縮小が何故然かく困難なのであらうか。正しき觀察に於て、地形と國情とに依り陸軍と海軍とは戰時國家を防衛する上に於て輕重の差は存する。例へば日本及英國の如く戰時自給自足の能力なき島國に於ては陸軍よりも海軍を重しとする。

此等の國に於て海軍の敗亡に依り海外補給の途を絶たるれば端的に國家の破滅である。之に反し海上よりの補給を多く必要とせざる大陸國に於ては海軍よりも陸軍を重しとする。海陸軍は必ずしも車の兩輪鳥の兩翼ではなく、時に協同動作を必要とし、時に獨立行動の機能を有して居る。而して地球上には海軍に依つて衛らるゝ島國よりも、陸軍に依つて護らるゝ大陸國の方が遙かに其の數が多い。此の陸軍國の數が多いと云ふことが論難討議を繁くし、陸軍協定を困難ならしめる第二の理由である。

日本及英國の如き島國に於て海軍の敗北は陸軍の敗北以上に國家を危ふするものである。然るに海軍は近世の發達に屬し、世界は海戰の歷史に乏しく、且海戰は常に國民の耳目に遠き海上に於て行はるゝが故に國民は海戰の悲慘を目擊しない。殊に近世海軍の最大戰略とも云ふべき敵國封鎖の如きは最近の產物にして、大戰中の獨逸國民と旅順の籠城兵以外は其の苦痛の體驗を有しない。就中戰時敵の海軍に依つて直接損害を蒙るものは沿海地方に在る少數の國民のみにして、海岸を離れたる大多數の國民は個人として直接何等の損害を被らない。之に反し陸戰は常に國民の目前に於て遂行せられ、其の一たび敗北するや直に自己の生命財產に危害を及ぼすのみならず、陸戰敗北の慘狀は或は數百千年に亙る歷史の物語りに依り、或は困苦缺乏の自己の體驗に依り其の恐るべきことを深刻に知得して居る。之を以て國民は海軍よりも陸軍に信賴するの念强く、從ふて陸軍の縮小をば海軍の縮小以上に重視する傾がある。是れ理由の第三である。

多年の歷史的關係と日常の接觸とに依り、何れの國民も軍備と云へば直覺的に陸軍を意味し、國家を防衞するものは陸軍であるとの錯覺がある。英語のミリタリーと云ふ文字が陸海軍併用の言葉でありながら、多くの場合に於て陸軍のみに用ゐらるゝが如きも此の爲であらう。軍備に對する此の錯覺が暗々の裡に陸軍縮小を恐るるの力となるのである。是れ理由の四である。

何れの國に於ても、數百年來海軍第一主義を執り來れる英國に於てすらも、陸軍々人は海軍々人よりも政治上に勢力を有するが常である。而して陸軍々人は其の環境と生活の然らしむるところか、海軍々人よりも一般に軍國主義的思想強く、其の利己的と否とに拘はらず、軍備の縮小を好まざる傾がある。是れ理由の五である。

海軍の世界的に開放せらるるに反し陸軍は國内的に保たるるが故に、假令協定に依り各國陸軍の比率を決定するも、不正なる國家は種々の名目と手段とを以て秘密に軍隊を養成し、秘密に兵器を製作貯藏することなきを保し難い。從ふ

て國際間に於ける猜疑的不安を除去することが困難である。是れ理由の六である。

之を以て國際的に陸軍を縮小するには一方には仲裁々判の如き機關を設立して各國家の安全を保障し、一方には各國陸軍の比率標準を決定するの原則的基礎條件を定むることが最も重要なる問題である。若し此の二問題にして解決すれば他は多く意とするに足りない。今回聯盟總會が軍備縮小會議促進の爲めに決議したる二調査項目は誠に能く肯綮に中れるものである。

○

今や世界を擧げて平和の叫び高く、平和の欲求大なるにも拘はらず、平和の殿堂に上る第一階段たる軍備の縮小すらも尙ほ容易に行はれざるは果して何故であらう？　是れ一方には力を頼んで侵略を志すものなきにあらざると同時に、他方に之に對する猜疑心に依り國家の安全を憂ふるものあるが爲めである。侵略は優越慾の積極的發動にして優越慾は人類の第一本能である。猜疑は恐怖心の消極的潜動にして幾百千年間の歴史に依つて養はれ來れる人類の第二天性である。而して此の侵略と猜疑とは無意識の間に一は國際紛爭の種子を蒔き、一は國際不安の醸母となり、表裏相待つて世界の平和を攪亂阻害するものである。

侵略と云ひ、猜疑と云ひ、國際紛爭不和の直因子が人類の本能と天性に屬する以上、之を内心的に改善消滅することは十の國際聯盟を以てするも不可能である。是に於てか外科的手段に依つて一面には强者の侵略を抑壓し、他面には弱者の猜疑を除去するの外に途はない。强者の侵略を抑ゆるには軍備の縮小が必要である。弱者の猜疑を除くには仲裁々判の確定が必要である。而かも之を實施するに臨んでは少くも前記の二大難關がある。强者の支配權と富者の獨占權と

が正當として是認せらるゝ現代の國際道徳と社會制度の下に於て、國際聯盟は果して能く此の難關を切り拔け得るであらうか。

強者の支配權を是認するは帝國主義である。富者の獨占權を是認するは資本主義である。帝國主義と資本主義とは共に利己主義である。利己主義は非協同である。非協同は非平和である。故に帝國主義資本主義を是認しながら國際平和を望むは、石を抱いて水に浮かんことを望むと同一の矛盾である。現在の國際道徳、社會制度が存續する限り、國際にも、社會にも、決して眞の平和は到來せぬであらう。

國際聯盟は今年の總會に於て軍備縮小會議促進の決議を爲した。之が成果に就きては今尙ほ豫測を許さない。唯幸に反帝國主義、非資本主義者にして、而かも世界の平和に熱情を有せるマクドナルド、エリオ兩氏が時を同じふして英佛首相の位に在り、相扶けて聯盟を指導して居る。此等平和の兩雄にして永く其の地位に止まり互に肝膽相照して世界平和の爲めに盡すならば、多年の懸案たる國際軍備の縮小、仲裁々判制度の確立の如きも或は解決の機運に達するかも知れない。併しながら兩氏にして其の地位を去らんか、之に代はる者は必ずや帝國主義と資本主義の色彩強き右黨の人物たることを疑はない。然る時マ、エ兩氏に依りて折角眞面目化したる世界平和運動も再びジンゴイストの翫弄物に復元するであらう。是れ人類の不幸、世界の損失である。

併しながら世に逆手と云ふ術があり、雨降つて地固まると云ふ諺がある。若し夫れ世界平和に進むの他の手段を問はゞ、世界大戰を尙ほ兩三度繰り返へすことである。唯斯かる逆手に依つて贏ち得たる平和に幾干の價値があるかは別問題である。世界の現狀は不知不識の間に寧ろ逆手を擇びつゝあるのではないかと疑はれる。併し又吾人の逆手と信ずるものが或は却つて神の本手であるかも圖られない。

莊子に曰く、

人有畏影惡迹而去之走者。舉足愈數而迹愈多、走愈疾而影不離身。自以爲尚遲。疾走不休、絕力而死。不知處陰以休影、處靜以息迹。愚亦甚矣。

試に之を軍備に代用すれば

國有疑外國患外敵而設之備者。設軍愈大而外敵愈多、備愈嚴而外國不悅我。自以爲尚少。嚴備不休、絕力而滅。不知弛軍備以安外國、進文化來絕外敵。愚亦甚矣。

嚴備不休、絕力而滅べる者に西に獨逸がある。東に之に倣ふ者が無ければ幸である。難い哉、眞の世界の平和！

（一三、九、一〇）

日本の封建農奴

有元英夫

―自由農民と奴婢農民―

よろずの職業のうちで、農業ほど、人間生活に直面した大切な生産業でありながら、しかも最も不潔で、最も苦痛多く、最も無趣味な仕事は、他に多くの類を求めることは出來ぬ。人間の本性として、生活の上に清淨を欲し、安寧を求め、趣味を望むに從つて、漸次農業勞働を嫌避し、出來るだけそれから遠ざからんことに努めるやうになる。そこで、何れの時代に於ても農民階級は社會の最も下層に置かれ、農業勞働から脫れることの出來ぬ人々、社會から虐げられた人々によつて農民階級は組織され、常に彼等は不滿のうちに生活を續け、遂にはその不滿が免疫となつて、子々孫々、不平もなく同じ場所で耕耘に從事し、來る年も來る年も、春種子を播き秋收穫し、千遍一律の作業に倦まぬやうになる。

農業は不潔な賤しい、多苦多勞の仕事ではあるが、併し國民一日も缺ぐことの出來ない食物を生産する重大な職業である。農民のみが國民食糧解決の重任を雙肩に擔ふのは、今も昔も變りはない。若し食料生産階級たる農民が、自分の生活の用に供した殘りの生産物を他の人々に供給してくれなかつたならば、食料の消費階級たる貴族、軍人、商工業家等は實に大恐慌を來すのであらふ。故に何れの時代に於ても、農民に對しては、彼等が食糧生産を廢せぬやうな、反逆されぬやうな、そして毎年無事に農民から食料を供給せしめるやうな方策を講ずるのである。その最も原始的の方法は、農民を全然土地に喰付けてしまつて、人格の自由も、職業の自由も、はた又居所の自由も與へないで無條件で農産物を消費階級が搾取する策である。そのため農民は遂に一種の奴隷、即ち農奴の地位に置かれるのである。消費者階級にとつては、農民を農奴の地位に置ほど食糧問題、即ち生活問題が安定する方策はない。併し農民としては、それほど無慘な目に遇はねばならぬ社會はない。かくして消費者階

級の生活が安定すればするほど、農民は慘苦のどん底に墜ちて行くのである。尤も農奴階級でも、社會の變遷と共に漸次進化する。農奴と普通の奴隷との區別は、農奴は土地については何等の權利を持たぬが、農業經營に對してはやゝ獨立した企業權を持つてゐる點であるが、併し農奴の最初の形は單なる僮僕として、普通の奴隷と少しも變りは無かつた。其後、農民が武士階級から農業企業の上に解放されて獨立した生活を築くるに至つて、普通の農奴の地位に進み、更に封建時代にあつては、農民は或る程度社會的に解放され、玆に「封建農奴」の一の社會制度が構成さるゝに至るのである。

古代に於ては國民の大部分は、自ら食料を生産して自ら消費する自給自足の階級であつた。官吏、武士の類と雖も矢張職務の傍ら農業に從事した。故にこの點からいへば古代の國民は總て農民であつたと稱し得る。けれども純粹の農民が農奴といふ一の社會制度のうちに圍込まれる間に、武士官吏の職を持つ農民は土地に關する權利その他について、農奴よりも自由な生活をなし得る地位に立ち得るに至つた點に於て、彼等は自由農民と稱することを得る。故に封建時代以前には農民は自由農民とそして奴婢農民、即ち農奴との二階級に分れてゐたのである。

其後、社會の形態が複雜になつて、武士が專門的軍人階級として全然農業から遠ざかるに從ひ、普通農民は純然たる奴隷的地位から進んで、農業企業權を獲得し、土地の所有權を有する武士との間に一種の隷屬關係を結んで農奴小作民の地位につくことを得た。故に王朝時代の農民から比較すれば戰國時代以後の農民、即ち封建農奴はこの點に於ては可なりその社會的地位が高まつたと稱し得る。

古昔は武士と云ふもの別になし、諸國より出て五年京都に居りて歸るなり、歸れば百姓なり、衞門、兵衞などの名の諸國にあるはこれよりの事にして、一度武士に召されて上京して歸國すれば、自ら人の用ひもよく、某の兵衞、某の衞門と云て、これを榮び、その官名を呼名の如くせるは理なり云々(況濟雜話)かくの如く、王朝時代には武士農民は一種の自由農民で、普通の農民に對して一段高い階級であつた。かくして奴婢農民は常に自由農民たらんことを欲し、後には「兵衞」とか「衞門」とかいふ株が農村で賣買されたのは、今日ある地方で士族株が平民の間に賣買されるのと同樣であつた

又いにしへ、位田、職田、口分田等の制あり、この事はさしをき、後世良民は武家となり、奴隷は農人となり、其分相隔に及んでも……(分田雜考)

古は公田を耕す民を良家とす、是即ち武士也、正税も一町の田より一石一斗づゝ出して、外に賦役をつとむ、私田を耕すものは奴婢也、耕田の米は残らず主人のものとなる。おのれ公分田といふものを持て、是よりは税をいたさぬ也、良家の公分田は二反づゝ也、現米五石とる、是より税一斗五升出る也、奴婢の公分田はその三分一也、現米一石六斗なり、今の百姓は此の奴婢の類也、(古今自他農業問書)

兵農分れて士族にて奴隷を耕作させ、收穫の半を收納し、其十分一を軍役に當るは、今の農、田畠余りあるもの我田を不足の者へ佃作せしめ、其收穫の半を取り其内にて公税を輸し高がかり、夫役を勤むと同意なり(御内々申上覺書)

これによると、王朝時代の良家、賤民の區別は後に武士、農民の二階級を生み、土地の權利の上からいへば、武士は地主階級で農民は小作階級に屬し、兩者の關係は封建時代にあつては一の隷屬の狀態を保つてゐた。併し戰國時代にはそれは恰かも奴隷と主人と近い程度のものであつた。この慣習は德川の後代にまでも、大して破壞されないで殘された地方もある。例へば長野縣、愛知縣地方に特に多い一種の小作制度たる「被官百姓」の如きはその一例である、

――封建地主と企業地主――

戰國時代には社會的必要から、武士は大部分直接農業から離れた專門的軍人階級を組織してゐたが、なほ地方によつては半武半農的の階級も無いではなかつた。殊に兵馬倥偬の間にあつては、普通の農民と雖も、時には軍務に服し、或は生命財産の保護のために平常武を練り、兵器を備へるの風もあつた。「農業全書」にも戰國時代には「此時農人田を耕し稻麥を刈にも必ず田の畔に兵具を立置て其事を營めりとなん」とある如く、耕作に出る時まで兵具を携へたといふ。その他、王朝時代の半武半農的の遺風を傳へた慣習が戰國時代にも各所に殘されてあつた。土佐に於ける「一領具足」の如きは、その著しい例である。

抑、一領具足と申すは、僅の田地を領して常に守護へ勤仕もなく、役もなく、唯己が領地に引籠り、自ら耕し耘り、諸士の交もせざれば、禮儀もなく、作法もなく、明暮武勇のみ事として田に出づるにも鎗の柄に草鞋兵糧を括り付け、田の畔に立置き、すはといへば鎌鍬を投捨て走り行き、鎧一領にて差替の領もなく、馬一疋にて乘替もなく、自身走り廻りければ、一領具足と名付けたり、弓鐵砲太刀に調練して死生知らずの野武士な

り、されば天子も將軍も知らばこそ（土佐物語卷十九）

戰國時代には、可なり多數の專門武士を發生したが、德川家康が一度天下を平定し、泰平無事の世となると、それほど多數の武士の需要は無くなり、全國に亙つて大規模の軍備縮小が行はれた結果、「武士の歸農」が流行し、ために農村の社會狀態は甚だ複雜となつた。また武士階級に於ても「家中」と稱する常務武士の他に「鄕士」と稱し、平常は農村に居住して農業に從事し、時々藩廳に出仕する制度が各地に發達し、軍備の充實した大藩は軍縮の際に過剩武士の處分法として多くは鄕士制度を採用した。例へば仙臺藩、毛利藩、薩摩藩の如きはそれで、殊に薩摩藩に於ては普通の農村の他に鄕士のみの農村が形成さるゝに至つた。こゝに於て德川時代には一部の地方に、王朝時代と同樣、自由農民と奴婢農民との二階級が農村に對立する如き現象を呈するに至つた。

武士が農業から離れて、單なる土地の所有者となると、土地の社會價値を利用して社會的權力を得、地主から進んで封建領主として、領內の人民を小作人の代りに領民として支配し、小作料の代りに租稅を徵集するやうになる。けれども政治的には彼等は領主であるにしても、經濟的には一の封建地主であつて、領民は即ち彼の封建農奴である。併し武士の一部が純然たる領主として一定の政治組織の主導者の地位に置かるゝに至ると、領民の間に、土地の經濟價値を利用する一の企業地主が發生した。即ち彼等は政治的權力は欲せぬが、土地を兼併して經濟的權力を把持し、遂に封建領主と封建農奴との中間に小作料の收得を唯一の目的とする企業地主が出來て農民を經濟的に農奴の地位に陷入れた。けれども地主と小作人との關係は、封建地主と企業地主との間に變化を生じ、隷屬的關係は漸次、單なる經濟關係に進み、かくして封建農奴は次第に自由農民の地位に近づくやうになつた。

慶長元和の比までは、兵農既に分ると雖も、古風に近く、村村の草ぎりなどいふ大百姓は、必ず武士の浪人したるもの、其譜代の家來どもを引連れ田舍へ隱れしが、草萊をきりひらき、田畠をこし、大分の高を持、家來の養ひにくらせし輩多し、故に寬永檢地の比までも、掃部や主水など、かはりたる名を付居るは、昔の武士の名殘にて、古き百姓村の小百姓をば奴僕の如く呼びなすも、其謂れなり。檢地と云も其者どもの持分を改め、土地相應に年貢取付せし迄にて、其初より持居たる田畠を、多過ぎるとて奪ふべきやうもなし、且又譜代の家來ありて耕作怠らず、田主も百姓業より勤むれば、手に餘りて荒すこと昔はなかりし事也。後には譜代と云ふもの絕果

て、奴婢は皆毎年季の出替奉公にて元は並々の百姓困窮して身賣質物に出たる也。年季の奉公にて眞の主人に非ず、なるたけ尪弱をし、骨折ぬ工夫をすること尤もなり、農家の奉公は骨折る業にて、人の嫌ふに乘じて、年ごとに給金高くなるも尤なり。小作人も貧にして良田を持たずといふ計にて、兼併の家も御百姓なれば、巳も亦御百姓なり、もとより彼が奴隷に非ず、相對にて作徳少なければ、作らざること尤なり、且昔の豪民の脊きものは今は多くつぶれて、今の兼併は大半新らしきものども也、然るに古今の時勢人情にかわり有ことを知らずして、今の田地高持の百姓が、元和寛永時代の大百姓の形にて暮さんと欲するは大なる過なり、今は今の時宜あるべし。（勸農或問卷上）

――名田制度と名子百姓――

封建地主は武力に起源を發し、企業地主は經濟力に起源を發するが、封建地主の土地經營の中心形態は「名田制度」である。尤も名田制度と雖も、その由來するところは、矢張經濟關係から發生したものである。即ち、莊園時代に於て農民が新墾地を開拓して耕地を得、當時農民は直接土地を所有する權利を有ち得ぬとか、脫税とかの目的で、表面は或る特權階級の所有地とし、自分はその「名主」として「何々名」といふ風に、事實上の所有者たることを表示するために、耕地を開墾者の名を冠して呼んだ故に之を「名田」（ナダまたはミヤウデン）と稱する。而して農民の企業熱が勃興すると共に、可なり大面積の名田が簇生し、一部落、一村の名田をも生じ、名主は土地の事實上の所有者たるばかりでなく、後代の庄屋の如く、村長の如き地位に進むに至つた。（故に後には名主は村長の職名となつた）。而して名田内の農民は名子と稱し、恰かも武士と下臣との關係の如く、名主と名子との間には一種の譜代的主從關係を結ぶに至り、時には名子を幾組かに分ちて、これに名子長、即「名頭」または「長名」（オトナまたはオツナ）と稱するものが出來、もと經濟的地主、即ち企業地主であつたところの名主は、遂に名内の警察權、司法權、收税權等を握り、一領主の支配下にある封建地主の地位に進んだ、そして表面上の土地所有者たる特權階級の勢力が衰へると共に、名實共に土地に對する權利を獲得するに至つた。かくして封建地主は戰國時代に於て大名小名として名と名との間に鬪爭が行はれ、後に知行制度發生の一過程となつた。鹿兒島藩に於ては德川時代まで名田制度の遺風が傳へられ、今日でも同地方では農民のことを「名子どん」と呼ぶことがある。

名田制度から來た名子の制度は、徳川時代には一種の小作慣習として各地に存在してゐる。併し名子百姓は普通の百姓よりも一段低い階級に置かれ、純然たる農奴であつた。大地主は多數の名子百姓を持ち、之を誇る風があり、明治時代になつても、名子百姓の制度は各地に殘つてゐた。熊本縣のある地方では名子百姓と特殊民とを混同してゐるほどである。

名子百姓は全然地主に隷屬した小作人であつて、地主に對しては單に小作料を納める義務があるばかりではなく、必要の時、例へば冠婚葬祭等の際、または地主の直營する農業の仕事の多忙な時は地主の家に行つて家事、農事等の手傳をする。その代り、地主は特に名子の生活を保護し、時としては農業經營上の資本の一部を提供することとすらある。名子は世襲的に一地主に屬するものであるが、場合によると貧窮の者を擧げて自分の名子とし山番に從事せしめ、その附近の土地の開墾を許して農業に從事せしめることもあり、また永年自分の家に忠實に勤めた奉公人を獨立した農家たらしめて名子とすることもある。中國地方、熊本縣地方の山間には名子百姓甚た多く、昔しは、あの家は何十人の名子百姓を持つといつた風に名子百姓の數を以て家の格を定める標準とするところもあつた。

佐野儒士の話、阿波にて租谷山の邊、深山幽谷に村里多し、村といふことを名といふ、其所にて然るべき者を名頭とよぶ、下の民を名子といふ(阿州雜誌)

四國邊には今でも部落のことを「名」といふ地方が間々ある、是等は全く王朝時代の名田制度の遺風を傳へたものであらふ。

名主と名子との關係は、王朝時代の自由農民(武士)と奴婢との關係と類似のものであるが、その關係が隷屬關係から契約關係に進化した後に於ても生家に對する奉仕の意味で、勞力提供が慣習として殘る。たとへば村民が庄屋に對して一定の勞力を提供する風もこの一形式と見ることが出來る。

唱に、庄屋殿のわさ植(早稻?)と申。考にいふ、上代庄屋の給田といふことあり、是は初に植るを「わさ植」といふ故此歌殘れるものにや、今も村によつて庄屋へ一人宛の手間を合力することと奧村に殘れり、當村も寛政の末よりいつとなく此例廢れたりといふ。(徳地宰判、掴村——風土注進案)

農奴の勞力奉仕の順序に關して、それを想像すべき文獻は「飛州志」にある森八幡の「行の祠」である。

先づをのしをやとやれ(未解)先づ一番に神の御神田を打侍らへ。二番に田口殿の田を打侍らへ。畏名衆の田も打侍らへ。

(按ずるに畏名衆他の場所には威名衆とある)は州内に於…

功名あるものを稱する號也）長衆の田も打侍らへ。（按ずるに家の長、村の長なるべし）廠むくり稗むくり（按ずるにむくりは耕作のことなり）堀田（深泥田を云ふ）まつぼり（堀の末也）まで打侍らへ。

この勞力奉仕は契約關係に於ては一の勞力小作料として殘される。例へば薩摩國入來村地方の「田奉公」島根縣鹿足郡地方の「三日役」等の風習はそれである。

――水呑百姓、頭實百姓、間人百姓――

封建時代の農民は擧げて農奴の地位にあつたとはいへそのうちにも種々階級があつた。殊に農民のうちに企業地主が發生して土地を兼併し、小作制度が確立すると共に、自らの土地を自ら耕作する自作農、耕作する土地を保持し得ぬ小作農、また小作農地すら求め得られぬ農業勞働者の三階級が生じ、他方には土地を保存しながら農業に從事せぬ地主階級が發生した。地主には地方によつて種々の名稱がある。例へば「をやかた」「徳者」「きんぬし」「田主」等また小作農が地主に納める小作料も、地方によつて「毛徳」「徳米」「纏米」「掟米」「生租」「中租」「餘米」「生米」「賦料」「恩米」「家徳」「預米」「下作米」「加地子」「地利米」「加調」「當口米」「定め」「中年貢」「入上米」等種々雜多の名がある。

小作人のことは普通に水飲百姓といふ。これも地方によつて「散田百姓」「亡土百姓」「下作人」等と稱する。この階級は所謂「無高」で直接藩主に年貢を納めないから、「本百姓」即ち「高持百姓」の如く公民權がない。この無高百姓と高持百姓、即ち小作農と自作農との間には社會的地位の上に顯著なる階級差別があつた。明治初年、司法省で調査した報告「全國民事慣例類集」に記されてある差別的慣習の二三を擧げると

△小作人は無高と稱し、自ら高持に齒するの權なし（尾張國愛知郡）

△惣體小作人は村中にて一等降る者とし、組合の長に撰擧することなし（遠江國佐野郡）

△町方の借家人、村方の小作人皆一等權の劣る者にして、町村の寄合の席には、家持、高持のみ皆列席し、小作人借家人は共行酒の役に供する例あり（越前國足羽町）

△無高にて小作のみする者は「浮過」と唱へ、村寄合のとき末席に詰くことあり（備後御調郡）

△居村にて無高の者は、たとへ他村に何千石の持高あるも、間人と稱へ、百姓並に取扱はざる例あり（讃岐國香川郡）

また甚だしきは、小作階級が一の家筋となつて、今日でも他の人々から特別扱ひにされる例も各地にある。

水飲百姓――此家筋の者は雨の降るに傘をさし、足駄を穿く事を許されず、家を作るに床の間を付ける事叶はず、村の祝儀不祝儀、祭禮等人の集まる所に出ても、村の門地ある家の主人に何どん、某どんと呼ばれ、さん、さま杯とは云はれず、誠に慘めな者なりしが、四十年此方、今は平等となれり、そのため今も床の間の無き家、折々見受けらる。併し縁組だけは家が富みても、今猶昔しの通り門地ある家にては取合はぬ事となり居れり（埼玉縣比企郡――民族と歴史七ノ三）

鹿兒島縣地方には「頭貢百姓」と稱する一種の農民階級があつた。それは、藩時代には絶對に土地賣買を禁じてあつたから、農民が困窮すると、土地を携へて一家を擧げて、或る富裕な農家に身賣をして、一種の隸農となるものをいふのである。舊加賀藩にも「頭振り百姓」と稱する階級があつたが、これも恐らく「頭貢百姓」と同じ起原を有するものであらふ。阿波藩には「頭入り百姓」といふのがある。

阿波藩では御藏百姓、族知百姓の二種があつて、御藏百姓は藩主に年貢を納めるもので御藏本百姓、御藏百姓の二種がある。族知百姓は藩臣の族領内の百姓の義で、年貢をその隸屬の藩臣に納める。これを頭入といふ、棟附帳には族知百姓の文字を用ひず、頭入百姓と記してある。（田所市太氏談）

その他に德川時代には「間人百姓」といふのがある。中國四國地方にあるが、阿波ではマニンといひ、山口縣では亡土、門男等と書く、一種の小作百姓で、時としては水呑百姓と同意義に用ひられることもある。中國のある地方では、今日でも「土百姓」がと百姓を卑下する時に「マウドどもが」といふことがある。

間人百姓は無高で公民權のないことは水呑百姓と同じであるが、彼等は必ずしも常に貧民ではなく、相當裕富な百姓もあるが、一の家筋として、如何に財力に於て優つてゐても永久に間人百姓として本百姓の下位に置かれてある。山口縣では間人百姓の數は可なり多く、「風土注進案」にある吉敷郡中下郷村の一例を擧げると、總戸數七百二十一軒のうち、亡土百姓三百五十七軒、本百姓三百六十一軒、即ち約半數を占めてゐるのである。

「風土注進案」には亡土百姓を說明して曰く

亡土の字、通例は門男の字を相用候、本百姓と門男とは貴賤の別有之、門男の字義を考候に、元來本百姓召仕候門男の類を仕分候事にて、其家門の下男と申儀にても有之御座候や、於只今は本百姓にも難澁者有之、門男にも相應の身上にて遂御百姓候類多く御座候こと

とある。また末松謙澄氏の編纂した「防長回天史」には「門役を納めざるを亡土百姓とす。門役を納めざれば假令幾百石の地を所有するも亡土百姓とす」とある。門役といふのは一種の戸別割税で、一戸分の門役を負擔するものを本軒百姓、半戸分を負擔するものを半軒百姓、其他七歩五厘百姓、二歩百姓等の區別があつた。要するに間人百姓といふのは、當時地方〳〵で一定の數量丈けしか無かつた百姓株を持つて居らぬ百姓を稱したものと思はれる。故にこれも小作農の一種に屬するものである。

――農業勞働者（譜代者から出替者へ）――

農業勞働者、即ち奉公人には（一）住込奉公人（二）日雇取の二種がある。

耕地の擴張が人口の增殖に伴はぬやうになり、且つ耕地の分配が農家の間に不平均を來すに至ると、或る農家には勞働の餘剩を生じ、一部の子弟は奉公人として他の農家に雇はれて行く。裕富な農家は比較的大面積の耕地を經營し、常に數人の是等の奉公人を雇入れるを常とする。彼等奉公人の生活は實に悲慘なもので、衣食住ともに劣等で、通常屋根裏（ツシ）または畜舍の隣りのうす暗い室に寢起し、報酬は殆んど問題にならぬほど小額で、たゞ食はして貰ふだけでも恩惠と考へられてゐる。近年まで是等奉公人の給料は普通に、一ケ年米十俵を標準としてある。それは壯年男子の給料であるが、子供、女子等の給料に至つては更に小額である。奉公人と雇主との關係は國民經濟の發達と共に身分的從屬關係から經濟的契約關係に進んだのであるが、王朝時代の奴婢の遺風を殘してゐるものは「譜代」の制度である。

封建時代の君臣關係に於て、世襲的の家來を譜代の臣と稱したが、勞働制度に於てもまた、終生、若しくは數代連續の世襲的奉公人を譜代と稱した。

むかしは、子を山に捨て、淵川へなげ、もらふ人あらば譜代にもくれたりし、或人の下男にめじかといへる男有り、是は古へ午未の飢饉に、めじかと云ふ魚一つに替へたりしが故に、かく云けるなり。（民間省要）

鹿兒島縣地方には、往時「生やし者」といふ奉公人があつた。これは丁度幼者を飼育して大きくするやうに子供を貰ひ受けまたは買い入れて成育し奉公人たらしめるものである。

田舍にて百姓の家に生れたる、てゝ無し子を箇譜代と云ひ殊の外陋しむることとあり云々（政談卷一）

日州（日向）は平野田畑多ければ、この米良等にかぎらず、

他國他所よりも男女の子供を買ふなる故に、富有の農民などは、奴婢あまた持てり、その中には相應に夫婦とすれば出生の子供あり、これを庭の子といひて、我が子同樣に撫育す。戸喜栗云、甲州なども如レ斯、下女、子の出來るもかまはず、戸明けはなしなり。子出來れは養ひて僕とす、これを家の子といふ。（笈埃隨筆卷四）

日向邊の農民富有なる者は、一生買切にしたる奴僕を多くもてり、いかなることぞと問に、米良五個其他近國の山中より出る奴僕の親たるものへ、鹽一俵、米五升計りをあたへて、其の子をぶつゝに買切る事なり、山中の者は賑かなる地へ出ることを面白たのしみとして、親たるもの子の出世することのやうに覺え、子たるもの悅び進みて出ることとなり、かくの如くして一生を買切りたる奴僕は、たとへ打殺しても其主人の心任にして、親もとより一言のうらみいふこととなし、男女ともに其通りの奉公人甚だ多し、田地多く持たる農民は、多く召かゝへ置くゆゑに、其者ども私通して出生する子をも深くは禁ぜず、主人よりも厚く世話して養ひそだつるなり、……主人家の娘を嫁せしむる時には、かならず此婢女を添へてつかはすなり。

徳川時代を通じて、譜代勞働制度は漸次衰微して、一定の契約による雇傭關係を有する「出替者」制度に進展したが、其期限は一ケ年若しくは半ケ年を一期とし、其契約が更新（重年契約）され、地方〳〵により奉公人の出替期が公定され、時としては奉公人の勞働者市場が出現し、或る地方では、祭日に宮の前で奉公人の契約が行はれ、雇傭希望者は赤い手拭をかぶつて目印とする風習もあつた。鹿兒島縣のある地方では、近頃まで奉公人の勞働者市場が毎年定期に立つてゐたといふ話である。「出替者」奉公人の發達は農村よりも都會に於て、一層早かつた。武家に於てすら奉公人は譜代者が減じて出替者を雇ふやうになつた。

出替者は歲々に主家を替ゆる故に、是を使ふ者も、恩を施す心薄く使はるゝ者も主人に忠を致す心少し、殊に江戶には四方の亡命無賴の者多く來て、出替者となりて世を渡る故に逃走する者甚だ多し、是を保つ者も亦無賴なる市人なれば恃むに足らず、出替者を使て、金錢財貨を損亡する者年々其の數を知らず……是日本にても、古來なきことにて、當代に始まること也。今の世に市民の大なる患は是也。畢竟民に戶籍なく、譜第者を使はざる故也……萬一國家に事有りて軍旅征伐の役に赴く時に、此出替者何の用にか立つべき……願くは是を改めて、古代の如く奴婢をば多く使ふ樣にあらまほし。

きもの也。(政談)

政談著者は雇傭勞働制度を排し、王朝時代の奴婢制度を大ひに賞揚してゐるが、文化の發展による勞働者の地位の向上は如何ともすることが出來なかつた。

奴婢制度にあつては、奴婢は恰かも家畜の如く、一の動産として主人に所有さるゝもので、奴婢に對しては私有財産をつくることは許されなかつた。たゞ主として宗教上の必要に起原を置く一定の公休日を利用して、自分のために自分の勞働を使用することは許されたから、時としては公休日を利用して土地を開懇して幾分の收穫物を私有し、またその土地を私有することもあつた。例へば「まつぼり」「しんがい」「よまき」等の慣習は奴婢の間に發生した私有財産の芽萠と見ることが出來る。また時としては奴婢に對しては、收穫の際田圃に散落する落穗を收得して私有する權利が慣習的に與へられた場合もある。これを「落穗ひろひ」「筒穗」(竹の筒に稻の穗を入れる)といふ。

伊勢物語新釋四「うちわびて、おちぼひろふときかませば、我も田づらにゆかましものを」……毛詩に彼有遺秉、此有滯穗、用寡婦之利とあるこれなり、又延喜式の雜式に凡百姓被刈稻之日、不得令人拾穗とあるを、此の歌にあはせ見れば、こゝのいにしへにも、世にわびたる人のひろはんためにとて、田に落穗をのこしおくならはしのありしなりけり(原文序)

——當局の對農民策——

徳川時代の對農民方針は「百姓を生かさず殺さず」に置くといふ語につきてゐるが、家康が何かの機會に訓へたといふ「難儀にならぬほどにして、氣まゝをさせぬが百姓共への慈悲なり」が徳川家の農政の根本方針で、總ての下臣、領主は、この權現樣の遺訓を三百年間續けて遵奉して來たのである。當時の地方官吏は百姓を馬にたとへ、井水にたとへ、茶の葉にたとへて、百姓は愛撫せねばならぬ。なぜならば、彼等は國民の日常缺くことの出來ない食糧の生産者である。否、我々の俸給たる米を生産するもの、即ち年貢の收納者であるから、その生産力を枯らさぬやうに愛撫せねばならぬ。けれども、あまり愛撫に過ぎると、付け上つて反抗し、或は生活の程度が向上して、遂には賤しい農業を廢するものが現れるから、社會的には彼等の行動を十分に取締り、且つ出來るだけ農民の生活の向上を抑制して奢侈に流れぬやうに、最低限の生活に慣れしむるやうにする。尤も、あまり極端に壓迫しては、財政上最も大切な米の生産力を殺ぐ恐れがあるから、そこは或る程度の自由は與へねばなら

ぬ。即ち、恰かも農民を乳牛の如く、及ぶだけ粗末な飼料を與へて、出來るだけ豊富な乳を搾り取らふといふ方針である。

同農の役人甘くては、年々收納方減ずるに至るなり……百姓は馬と同じことにて、一度惡しき癖を付ければ、其癖除きがたくして、甚だ六つか敷相成ものなり。

土井大炊守その所領古河へ歸省の折、家老共を呼出して、之に告げて曰く「權現樣御代には毎年御代官衆をして、其支配所へ御暇被下候節、何れも御前へ召させられ、御直の上意ありて、郷村百姓共をば、死なぬやふ、生きぬやふにと合點して收納申付候樣にと仰付けらるゝ事にて候。然るに先年我れ當所地を拜領の節は何れの郷村に於ても百姓の住宅に家らしき家は一軒も無かりしに、此度歸來りて所々を巡視すれば、何れの村々にても一儀の家作りの百姓相見へ候は不審に思はるゝなり。若し生き過ぎたるには無之哉（地方落穂集）

夫、年貢を納の道、恵を先にして獲ることを後にすれば、百姓足つて貢納滯らず、縱へば茶園を治るが如し（正享問答）

百姓は井の如し、井の水、程よく吸む時には一つの井にて田家を潤すべし、是則ち吸に猶豫ある時は水生ずる故なり、然るは萬代も盡ることなし、火急に吸立れば、水勢忽ちに凋れ泥混して水の勢を失ふ。百姓の貢を納るものまた如斯するときは百姓不痛（地方落穂集）。

胡麻の油と百姓は絞れば絞るほど出るものなり。（本多正信獻策）

農は納なり、貢を納むるが第一の心得なり。（士農工商心得草）

公役年貢等の事は至極大切の義なれば、神佛に祈り開落なき樣貢賦に勤め云々（農家慣行）

凡天下の人は皆王者の民なれば、租税を出し、徭役に使はるるは民の道也（經濟錄）

郷村互に議と道とを以て睦み合、定まれる貢を献じ國家の安全を祈り奉るを百姓の忠義と云ふ（佐家制令詳解）

百姓は天下の根本也、是を治むる法あり、先づ一人〳〵の田地の境内を能立て、扨て一年の入用作食をつもらせ、其餘を年貢に收べし、百姓は財の餘らぬ樣に、不足なき樣に治むること道なり（本佐錄）

これでは百姓は全く年貢を納めるために出來た機械のやうなものである。官吏が平常最も研究することは、如何にして敵を擊退せむべきかと同樣に、如何にして百姓から年貢を澤山取上ぐべきやにあつた。故に當時の對農民策は、如何にして農民を幸福に導くべきかに非ずして、如何にして安全に永久に農民か

ら年貢を取立つべきかに在つた。假りに政府が農民を尊重したにしても、それは人間としての農民でなく、單なる米の生産者としての農民である。かくして當局は全然農民を封建農奴の地位に置いたのである。

――農民の生活狀態――

封建時代の農民ほど悲慘な生活を營つてゐたものは無い。彼等の多くは農民といふよりも、寧ろ貧民階級(ペーパリーテース)に屬するものであつた。政府は極端にその生活を壓へ付け、年々の生産物の大部分を租税として取り上げ、しかも今日の如く農會や農事試驗場を設置して農業を改良して土地收益を增すことについては少しも考へない。故に一朝農民が不慮の災厄に遇ふ時は、土地を賣り、家を賣り、尙ほ足らずして愛する子までも他に賣る百姓も珍らしくなかつた。殊に時々農業を見舞ところの凶作は戰慄すべき餓饉の慘狀を各地に演出した。しかも農村人口の增殖は如何ともすることは出來ない。彼等の一部は職人遊藝人として他國を流浪せねばならなかつた。農村の食糧問題解決のためには産兒制限の流行もまた已むを得ぬところであつた。

昔の農は水にて髮をたで、科(シナ)にて結び、元結油は婿入嫁取ならねば用ひず、中農夫より以下は家に四壁なく、たゞ柱と柱との間に苫を包み云々(病間長話)

田舍の髮結上るに、一度宛村中を廻り、月代は名主年寄の類の公用を勤むる者ばかり、一月に二度づゝ剃て、其外は皆な月に一度づゝなり。(民間省要)

軒ばに雨も風もふせぎかね、わかこもだれのうち媛にふすぼり、打ゐぬるも牛馬に床をならべ、裘などは誰の頭かきみだせるたゞ糠のみぞ、おのこならぬ兒のおほきなる、たなへものも公にいだし盡くせば、その味を知ることとなし、きぬをるところも糸のいろや麗はくし織なして直いやしくして上へ召され、あきう人へ賣るも其幾分か上へさゝぐれば、殘るものいくばくぞ、さておのれは、つゞれをきたり、さる上に寒へたり、こゝのえだちかしこの公事といふ事さへ加はれば、遂に頭の霜をのみ我がものとして、おもひ出もなき世を渡るめり。(とはずかたり)

先づ百姓の身儀を可申上候、百姓の身體と田ものは、隨分地ふく宜田地五反も所持仕候て……夏は暑に身をさらし、冬は霜雪に肌を破り候事をもかまい不申、一身の油をしぼり出精仕、水旱の難に逢不申候得ば、一年に米七石計、麥も七石計出來申ものに御座候、扨其米を先づ半分は御年貢に納め　殘の三石餘賣拂一年中雜用に仕候、只今の直段に仕見候

得ば、漸く金子三兩餘りに相成り候、其内にて村入用と申物を、田地の二段に錢三百文程出申候。漸三兩ならでは殘不レ申、夫にて衣類の、農具の、世帶道具のと申物を拵らへ、法事、市ひ、よめ取、聟入の祝儀とも相濟申候、扨一日の飯米は麥を喰申候、麥と申物は、早く腹のすく物にて、其上百姓は骨折の業を仕候間、一日に付一人前一升も喰不レ申候ては働相成不レ申に付、家内の七人も之有ものは七石計の麥にては不足仕候間、或は芋頭の、大根のと申物を雜にて焚き候て喰申候處も御座候。又はきんか粥と申候て、粟もみに(もみと申すは米の皮に御座候)十分一も米を加へ粉と仕り、夫を湯にてかため候處も御座候 右の如く艱難の身上にて又其上の飢饉水旱に逢候か、又は病煩は、臨時の物入に御座候得ば、一年に錢の百文も餘慶に出し申候は、誠に骨髓の油をしぼられ候よりは悲しき物にて御座候(栗山上書)

――農業生產維持策――

食料の消費者階級と雖も、食料の生產階級たる農民が、現に多苦多勞の農事に從事し、しかも薄利の爲め慘目な生活を續けてゐることは知らぬのではない。けれども、如何に農業が多苦薄利であつたとしても、誰かが農業に從事しなければ、日常必要缺くべからざる食料の供給を授ける事が出來ない譯であるから、彼等は何うにかして食料生產を維持しやうと努める。併し彼等は農業生產維持策として、農業の進步を圖り、農家の負擔を輕減し、農產物の價格を高める等の積極方法は執らないで、一「農民運命論」と「農業讚美論」とを宣傳して之を解決しやうとした。即ち彼等の農民を指導する根據はこうである。成る程農業は賤しい職業だ、けれどもお前達が農民として產れて來たのは全く自分の運命であるから、諦らめるより仕方がない、しかもお前達が粒々辛苦して食物を生產するのは社會に對する人間としての義務であるから、たとへ農業が不愉快でも不平を云はずに耕耘に精を出して働けと云ふのである。

農人はもと、露にて髮を結び「家に居ては筵織り、縄をなひ、耕地の往來にも馬糞を拾て溜め、道に捨る古沓、古草鞋、切繩迄拾ひ集め、寢食をわすれて農に働き、極寒にも田の水に寒さを知り、極暑にも畑に汗をかき、千辛萬苦するは庶人の常道なり。(農隙餘談)

世上の華美、多くは町人の風俗より始まり、花車風流のあそび多ければ、いつとなく百姓はいやしく見えて人に侮られ賤しめらるゝ世となれり、この賤しき風俗こそ、百姓長久の幸の本なりとおもひ、いよいよ稼穡耕作のふるまいなく、四民

の下座にへりくだりて、公の掟に恐れ謹しみ云々（百姓嚢）」

昔から農業は盛んに讃美賞揚され、持ち上げられた。「農は國の本なり、農民は國の寶なり」とは、いつでも出る標語である。徳川時代の農學は何れも「夫れ農は國の本なり」から始つてゐる。そして種々の理由を付けて、農民を農業に親しませやうとする。全く彼等の唱ふるところは子供だましに等しいが、しかもその子供だましが利くほど當時の農民は愚直で、そしてよく「御公の掟」に馴らされてゐた。かゝる方法で當時は農業を奬勵し、農家に力行を强要し、土地の生産力を高め、農業收益を多くする等のことについては少しも考へるところがない。たゞ農民を鞭打つて勉勵せしむるに過ぎなかつたのである。

四民の内にて農人ほど氣樂にて心のいたまざるはあらじ。主君に遠ければ氣かねもいらず、日々郊野に出で、山水の風景に馴れ、土より湧出づる金銀を取て、年貢は取箇がつらきなど、云つても、内實に至つては作法の充分ならぬといふ迄にて、公納は聊かのもの也（農家重寶記續編）

身に織れを纒ひ、肩に糞を擔ぎ、雨に浴し、風に梳り、足所賤しき至り、又力を勞するの極、商家手を懷にし、居ながら利倍を得て千金を積み、たとへ美服美食に傲るもとも、四民を序す時は農の上に立つべからず。（農家重寶記）」

商人はその視る所は榮耀に見ゆれども、心の辛苦は農民に劣れり、農業は體を勞すれども心を勞せず、故に長壽といふものは市中には稀にして田舍に甚だ多し。（家職要道）

――農民生活の壓迫――

封建時代には、農民の生活向上を極力壓迫するに務めた。その理由は、（一）全國の農民の生活が向上すれば、國內の消費が多くなり、國家は衰亡に向ふであらう。（二）農民の生活が向上すれば、農業を嫌忌する度が高まり、遂には農業を廢する者が多くなり、或は農業に不熱心となるであらう。（三）農民の消費節約は、道德上からいつても、國民經濟上から云つても、極力之を奬勵せねばならぬといふ主張で、之によつて農民の衣食住のあらゆる方面に向つて拘束を加へ、奢侈は農民として最も惡むべき罪惡であると敎へた。

百姓は分別もなく、末の考へもなきものに候故、秋になり候はゞ、米をむざと妻子のものに喰せ候……麥、粟、稗、菜、大根その他、何にても、雑すいを作り、米を多く喰ひ候はぬやうに可仕候、飢饉の時を存出し候へば、大豆の葉、あづきの葉、さゝげの葉、いもの葉など、むざと捨て候儀はもつ

たいなき事に候（徳川禁令考）

向後百姓ども、無断の肴買候ほど曲事に可申付候、此旨在々へ可レ有二御觸一候不宜、（土佐藩、野中兼山時代）

百姓は米を食つてはならぬ、生の魚を買つてはならぬなぞは、あまりに百姓の生活を壓迫するものである。然らばなぜ百姓が次第に生活が向上するかといふ原因に就ては、當局の意見は、都市の町人の風儀が次第に農村に入り込んで農民に感染するからであるとし、村を都市から引離し、農民を町人から隔離することが農民奢侈防遏の重要なる手段であると解し、極力農民と都市とを引離すことに努めた。

百姓たらん者、かならず、町人をまねぶべからず、町人は急に富む事多き故、急に失ふ事多し、百姓は急に富むこと少き故、急に失ふ事少なし、いづれも足ることを知つてをのをの分際に安んじ居らば、たのしみつくることとなし。（百姓嚢）

農家は市中商人と婚姻を結ぶ勿れ、往來萬事に付て自然と其の風に移るべし。（家職要道）

農人は町人遊民の驕奢を見習ひ、花美を好み米錢を使ひすて、食物の好へなき鳥獸にも劣れり。（勸農和訓抄）

農民を特別扱ひにして、その運命に滿足せしめ、決して身分不相應のことをしてはならぬ。即ち農民は低級な生活をするのが當り前であるといふ思想に徳川時代を通じて一般に行はれたものであるが、それが明治の時代になつても久しい間、之を唱道するものが多く、極力農民の生活向上を否認したものである。その一例として、明治十五年頃の發行の「栽培經濟問答新誌」といふ雜誌に書いてある一節を記すと

農民が縦まゝに美服を用ひ、美食をいたす。これほどの大害あるべからず、是實に亡國の大害なり……年中我儕を大小二便にまぶれ汚穢物を取扱ふが農民の仕事ではないか……そこで農民は七八歳の頃より大小二便を取扱ふことに慣込むやうに育てねばならぬ、それ故農民には徳川家以前から粗衣粗食いたすやうに致させ、美服美食いたすことを重く禁ずる規則があつた……近來農民の衣服器械を制する道が弛みたる故、遠國邊鄙の山奥まで農民が洋縮緬や毛繻子などを妄りに用ひ、剰さへ、南京繻子の帯をしめ、甚だしきに至つては南部織、米澤織を用ひ、三圓、四圓の蝙蝠傘を指し、一圓以上の表附きの下駄を踏き、二圓、三圓の靴を踏き、高シヤツポを冠ぶり、金皮銀皮の時計を用ゆる樣の奢をいたすよふな悪弊が出來ては、遠からず全國の農民は農業を怠がり、農産を賤する者多くなること鏡に掛けて見るが如し。

右の著者が今日まで生きてゐて、現在の農民の風俗を見たら

果して何といふであらうか、明治十五年頃から見れば農民の生活も築くべき向上を來してゐる。けれども幸にもまだ農民が皆無にもならず、著者が心配したほど農業は衰亡して居らぬのは不思議である。

農民は何時までも低級の生活に置く手段の他の一つは、農民の經濟活動を制限し、營利主義による富の集積に關する行爲を禁ずることである。さうすれば農民は永久に經濟上の餘力を持つことが出來ぬから、勢ひ生活の向上もなし得ず、從つて奢侈にも流れないであらふ。即ち農民を永久に貧困狀態にあらしめることは、農民を何時までも農業に親しましめ、農業生產を維持する有効な手段である。かくして封建時代の消費者階級は、最も極端なる農奴搾取法を講じたのである。故に農民は、たゞ米を作りさへすれば好い。米を高く賣らふとする如きは以ての外のことである。或る學者は農民に「そろばん」の使用を禁ぜよとすら唱へてゐる。歐洲に於て農奴に對して都市人が、その反抗を防ぐために先づ武器を奪ひ、更に經濟的搾取を行ふために農民に度量衡の使用を禁じたのと同樣の意味の手段が日本の封建農奴時代に行はれた。尙ほ當局は農民の間に經濟的智識の發達することを極力剪除に努めたのである。

農人として利に走れば程なく田地も人手に渡るべし、出世をなさんと思はゞ、第一、穀物の直段を知ること勿れ。(家職要道)

米昂ければ時を得たりとせり賣り、秋に至らば下直の米を買んと心散亂して、竟に本職を忘れて、田畠登らざるやうになるべし、故に米は、一貫は十貫に昂るとも米は米と思ひ、世間の相場に拘らず、利に目を觸れず、田畠に目をふれて能く培養して云々(同)

農民は五穀の價を知らざるを良農とす……全體農民はそろばんは入らざるものなるに、今は農民少しく富めば皆そろばんを床に置く云々。(經濟秘錄)

農は商賣を殊にして、才略伶俐の者は下手なり、緩氣魯鈍の者は上農なり。村里に商氣ありて、博覽の者一人もあれば、一村之が爲に化せられ、自然に懈怠するゆえ、早く市町に移すべし。(同)

これでは、今日の所謂農業經濟學の根柢はめちやくちやである。五穀の價を知らざる者は良農である。魯鈍の者は上農なりと、當時の相當の學者が唱ふるに至つては、全く、今日の農學から見れば驚くの外はない。けれども當局は、かゝる方針の下に、農業政策の必要から、農民を何時までも低級無智の農奴の地位に止めることに成功したのである。農民よ、君等の祖先は

かゝる政治の下に、あわれな生活を續けてゐたものだと云ひたくなる。

――百姓一揆――

戰國時代には農民が領主の苛斂誅求にあへば、その對抗策として團體移住、即ち逃散を企てた。それは領内の生産力の根元を枯す原因となるが故に、農民のこの威嚇方法は領主に非常に應へたに違ひない。そこで所謂「武家の民政」なるものが起つて、民は愛すべきもの、無闇に誅求すべからざるものといふ感念が武士領主の間に生じた。然るに徳川時代になつて、社會の秩序が立ち、國民の移動が嚴重に取締られるやうになると、農民は自家防衛策として團隊逃散の消極策を採用することが困難となり、遂に窮鼠猫を嚙む如く、積極的に暴虐な領主に反抗する直接行動を取るより外に無かつた。そこで徳川時代、殊に後半期には百姓一揆なるものが至る所に勃發したのである。

百姓一揆の原因は主として藩主の極端なる苛税にあるか、時には收税官の無理解、または私慾によつて農民の反感を買つたのが原因したこともある。

百姓一揆の最初の有名なるものは例の承應年間の佐倉騒動として知られてゐる百姓一揆であるが、其後の百姓一揆は農民が現れること、殘忍な官吏の現れること、その結果、強大な抵抗者に終る總て同じ形にはまつた道筋をたどり、佐倉宗五郎が神様として後世に崇敬された如く、各地に之を模倣した小佐倉宗五郎が現れて、犠牲的の行動によつて地方民に永く崇敬されるやうになつた。故に今日でも百姓一揆の犠牲者の記念碑、墓等は到る所に見出すことが出來る。かくまでに百姓一揆の犠牲的人物が各所に現れるやうになつたのは佐倉宗五郎の事件が、劇となり歌となり全國の人口に膾炙された宣傳が間接に預つて力があつた。例へば徳川時代に佐倉宗五郎の芝居をすると何時でも大入滿員を打つたものであるといふ。「經濟問答秘錄卷十一」に「近年是事を江都戲場に致し、老職役許人を拷問する所に於て、數千の見物人ども宗五に化たる俳優に叢錢を投與すること、舞臺に堆高く積立ると聞く」とあるは、一は役人への面當てもあつたらふが、當時の農民が宗五郎の壯烈なる行動に非常な感動を與へられたがためであらふ。

百姓一揆に對する當局の意見は無論強硬で、百姓が徒黨を組んで御上に反抗する如きは以ての外で、斷然たる防遏手段を取り、之が首動者は嚴刑に處すべしといふ取締方針であつた。一般の學者も多くは強硬なる意見を持つて居た。

役人きびしく吟味を遂げ、其の源を塞ぐべし、此の時に付

けこまれ、役人たる者びくつき恐れて、百姓歎願の收納などを多分に免すことあり、右やふなることは決して慈悲にあらで柔弱なり。(破れ家のつゞくり)

けれども中には百姓一揆に對して同情を持つものもあつた。

抑この事(百姓一揆の起るを考るに、後にいづれも下の非はなくして、皆上の非なるより起れり。今の世百姓町人の心もあしくなりたりとはいへども、よく〳〵堪えがたきにいたらざれば、此の事はおこるものに非ず。たとひ起さんと思ふ者ありとても、村々一致することはかたく、又惡黨者ありてこれをすゝめありきても、かやふの事を一同にひそかに申合すことは、もれやすきものなれば、中々大抵の事にては一致はしかたかるべし、然るに近年此の事の所所に多きは他國の例を聞きていよ〳〵百姓の心も動き、又役人の取はからひもいよ〳〵非なること多く、困窮も甚しきか故に一致しやすきなるべし。(秘本玉くしげ)

右の說は比較的正鵠を得た議論である。當局に於ても後には、百姓に對して嚴刑を行つたばかりでなく、一揆の起つた領主に對しても相當の制裁を加へるやうになつた。故に時としては百姓一揆か動機となつて、御家斷絕を言渡された藩主もあつた。(廢絕錄に上げてある)。故に藩主として も百姓一揆が領內に起ることは他藩に對し面目なく、中央に聞えても都合がわるいといふので、及ぶだけは內密に鎭撫せんことを心掛けた。けれども一度大一揆か勃發すると藩は戰鬪準備を整へ、一揆を擊退するために遂に大砲を放つて百姓の群を追ひ拂ふ場合さへ生じた。尤も德川時代には武士も久しき間の泰平になれて、一揆の勃發の際は非常な狼狽をする場合もあつた。例へば「近頃羽州山形邊には百姓の騷ぎし時、米澤の家中には武器帶びて乘馬せしに、馬驚きて乘せず、甚だ難儀せしとなり」(野叟獨語)などの滑稽が各所に演出された。かく百姓一揆が各所に勃發するものだから、藩としても之が對應策を平常講じて置かねばならぬが、百姓一揆軍を擊退するのは却々に困難であつたらしく、後には百姓一揆擊退術が軍學の一科目に加へらるゝに至つた。

治世にても、何時に足許より起るべきも知れ難きは一揆なり。近世は扱を掛け穩便に濟すを趣意にすれども、事に因り打つて出て切散らすこともある也、百姓一揆は却つて常の合戰より仕惡きものと聞及べり、其子細は、追立つるには難からねども、又元の如く起り返り晝夜の分ちもなく攻寄せ、遠矢射かけ味方より合戰を仕懸る時は忽ち逃散り、追止めば又聚る、恰も飯の上の蠅を逐ふが如し、大將定まらねば勝つことも無く又負くることもなし、(武學拾粹)

一　米食と農民——

わが國では米は、昔しから國民一般の常食であつた如く考へる人もあるが、實は決してさうでは無い。古代に於て米作がはじめて朝鮮から我國に輸入された當時は、米作は朝廷を取まく上流階級のみの職業であつて、一般の農民は米作の術を知らず、主として陸田耕作をやり、從つて米は高貴の階級の食料で農民の如きは之を口にすることすら出來なかつた。けれども其後歷代の政府は極力米作の奬勵を行ひ、米を租税として收納するに至つて、米作は全國に普及し、自然米は一般の農民の口に入るやうになつたが、それでも多くの場合は農民は雜穀を常食とし、米は租税として政府に納めるためにのみ栽培された。けれども米產が增加するに從つて農民の間にも米食に對して熱烈なる嗜好を持つに至つた。が、それでも農民は常食として毎日米食をするところまでは行かないで、寧ろ麥類を常食とし、時々高等食料として米食をなしたのである。

かゝる狀態であつたから、農民が米を食ふことを一の贅澤と考へ、時には農民の米食を禁ずることすらあつた。寛永二十年の「德川布達士民仕置第四條」にも「百姓たるものは宜しく常に雜穀を食むべし、濫りに米を食むことを得ず」とある。尤も當時は米は財政上一種の貨幣の如き性質を持つてゐたから、農民は貨幣の生產者で、農民が米を食するのは貨幣を食はれるやうなものであるから政府もこれを好まなかつた關係もあらふ。農民の米食に對する熱愛心は年と共に益々つのつて來るが、德川時代に於ても風土の關係から米作の不可能な土地に住む農民は、一生米を口にしたことのない者すらあつた。「百姓傳記」に「寛永年中の頃まで、信濃、飛驒、出羽、奥州の奥山家に住む七十八十に及ぶヂヽバヽ、米と云ふものを見ざるもの多しとなり」とある。是等の米無き里の人々の米食に對する熱愛心は非常なもので、また米食をせぬ地方の人々を米作地の人は輕蔑する風があつた。天草地方の歌に「魚貫（地名）米の飯、正月か、盆か、親の年忌か、嫁入りか」とあるのは、この地方では特別の場合にしか米食をせなかつたことを冷かした歌である。また豐後國の南海部郡八戸地方では「振米」といふことがある「その地方は昔しは米が出來なかつたから、米は頗る貴重な食料となり、竹筒に米粒を入れて、餘年幾何もなき病人のまくらもとで之を振つて米の音を聞かせたものである」といふ。また井上圓了博士の「日本周遊奇談」の中に次の如きことが記してある。

志州の米食、志摩國は日本中の最小國にして三面海を繞ら

し、耕地に乏しければ、村民多く漁業に從事して居る。常食は廿△と麥のみであつて、米は盆正月にあらざれば用ひぬ處である。然るに他國より此地に來りて小學敎員を勤め居るものがある。彼は麥飯を嫌ひ、毎日米食のみを食して居つた。さうすると近隣の者が爭ふて其家の下水兩便を與へられんことを賴みに來る。其譯は百姓等は平素米食をなすものゝ下水兩便は之を肥料に用ふるも一層効驗のあるべき道理なりと信じて居る爲だ。

米食者の糞尿まで重寶がられるに至つては、我國民の米食に對する愛好心の如何に强烈であるかを知り得る。實際に德川時代には農民は米を作りながら、米食をする餘裕すら無かつたほど慘目な生活を續けてゐたのである。

——農村の自活、協同・社會制裁——

封建時代の農村自治機關としては、庄屋、年寄、五人組等の制度があるが、併し是等は政府が主として收税上の便宜のために[illegible]必ずしも自治機關として眞の機能を發揮し得なかつた點がある。而して、當時の農村に於て事實上の自治機關としては「寄合」の制度がある。村内のあらゆることは、この寄合によつて決せられた。それは恐らく英國中世紀の農村に於ける「村會」と似た性質のものであらふ。寄合は多くは神社に於て行はれた。中國邊の「申し」の風習の如きは當時の自治機關の一例である。中國邊では村の小祭のことを「申し」といふ。例へば「地神申し」とか「荒神申し」とかいつて、一定の日に村民が寄合つて御祭りを行ふ。その時に種々の村治上の事が協議されるのであるから、謂はゞ「申し」は一種の村會のやうなものである。今「風土注進案」に書いてある、山口縣地方の「申し」の風習のことを記すと

△正月の内村々「地神申し」と號し寄集り、社人或は坊主を相招式仕、其上にて地下内諸締等申談仕候（熊毛宰判、下久原村）

△正月は「地神申」と號し二十軒程宛に講組に分け、百姓を招き祭式相調後には地下中諸締申談、人々田植日取相定仕候（岩田村）

△秋分に地神祭と申會合之由にて[illegible]き……耕作の[illegible]作よりの儀申合、若輩の者共へは作物の成立の氣付申聞、御又平生心得不埒者へは共に教導仕、地下和順之申合仕成之事（都濃郡久米村）

これは單に一例に過ぎないが、他にも之に類した自治機關が

必ずあつたことゝ思ふ。

封建時代には農村に於ては相互扶助が盛んであつたが、殊に、農業上の勞働協同作業は到る所に行はれたやうである。殊に田植の如きは「ゆひ田植」と稱して村民が協同で從事したものである。その他勞働の交換は農村に於ける普通の慣習で、「かせい」「手間がへ」「人もどし、かたやり」等の風習も到る所に見出すことが出來る。次の記事にある風俗は恐らく舊時代の習慣を今日まで傳へたものであらう。

農作上に於ても仕事のさばけぬ處には「加勢」とて近親より出掛くるを常とせり。或は「カタヤリ」とて比較的仕事の閑散なものが忙がしき家に加勢し、自己の農業忙がしくなりたる時、其所より屆ふ。是を「ヒトモドシ」といふ。加勢またはかたやりの際の食事は自己の家にてなすもあり、又なさぬもあり。(熊本縣下益城郡誌)

麥搗き、九月、月明の夜、農隙時に兩三軒一組となりて麥を搗く、之を味噌搗き麥といふ。(下益城郡誌)

それから、當時の農村では嚴格な社會制裁があり、それは法制よりも道德よりも重要な、共同生活の整調をなした。福岡縣の或る地方では、村人の或者が村の申合に反し、または共同精神に違背したものは「宮座にすわらせぬ」制裁がある。これは村民の最も恐れるところである。「村八分」の風習は全國に行はれたが、之については地方によつて種々の異つた面白い風俗がある。愛媛縣新居郡地方では之を「ハワセキ」といひ、福岡縣地方では「鍋カルワス」鹿兒島縣地方では「チヨケ（豬口）カルワス（負はす）」また「ゴバナシ」（御放し？）」、大分縣では「ヤカンニスル」または「エンシヨ」（遠慮）？、宮崎縣地方では「ヤカンメシ喰はす」その他「村ハズシ」「組ハズシ」等の種々の名がある。是等の郷土史慣習を調査すれば、封建時代の農村生活の實際を知る上に有益な材料を得ることが出來やう。要するに、以上は「封建時代の農奴」についてその概要を摘記したに過ぎぬが、更に詳しくこれを研究することは頗る趣味のあるものと思ふ。

現內閣の行う緊縮の程度と景氣恢復の時期

法學博士 堀江歸一

財政緊縮と國民經濟

財政を緊縮することの財政其ものゝ爲めに將た又國民經濟振興の爲めに、必要であることとは、夙に具眼者の承認した所であるに拘はらず、永く政友會の標榜する積極政策に妨げられて、今日に至るまで其實現を見るを得なかつた。政權の所在の一政黨に偏倚することの如何に有害であるかは、此一事に依つて、私の遺憾なく論證するを得る所である。今や時運は正に一轉し加藤內閣は財政の緊縮を以つて、其重要なる政綱の一とし、行政財政の整理に依つて、其目的を果さんとするものゝ如くであり、流石の政友會も漸く輿論の趨く所に制されて、加藤內閣と共に、財政の緊縮に從はんとするものゝ如く見へる。此事が果して政友會の本心から出て來つたものであるか、加藤內閣の下に、飽くまでも政權の一部分に與らうとする私心に基くものであるか、政治家の考へは私共の理解するを得ざる所であるが、兎に角一兩年前までの積極論者が遂に發心して、消極論者と爲つた一事は要するに時勢の然らしめる所と認めざるを得ない。

財政の緊縮と云ふことは、消極政策の一面である。隨つて其消極政策であるの故を以つて、之を喜ばざる者があるのは、自然の勢力である。殊に我國に於て、國民の間に行はれる一の傳習として、積極とか、進取とか云ふ言葉に對しては、無條件の贊成を表する代りに、其反對の消極とか、退嬰とか云ふことは面白くない、何か維新以來の國是に一致しないように考へる。政友會一派が多年積極政策を標榜して、地方民の愚なる感情に投じようとしたのも、亦偶然でありとしないが、斯る考へは事物の一面のみに就て、下した斷定に過ぎない。國家の財政は一の國家に存する經濟の一部局であつて、此以外に國家財政と相並んで行はれる國民經濟なるものがある。隨つて一國に存在する富なり、所得なり、資本なりは國家財政(地方財政を含む)と國民經濟との間に、其れ〲分配されて、其需要を充すこと

ゝ爲るのであるから、國家財政に於て、富や、所得の需要されざる場合には、其れだけ國民經濟に供給される富や、所得を潤澤ならしめる道理と爲り、國家財政に於て消極政策の行はれることは、同時に國民經濟に於て、積極政策の行はれる餘地を作るに至る所以と爲るのである。財政に於て偶々消極政策が行はれたからと云つて、我國經濟生活の全體が總て消極を事とし、退△を旨とし、國力の發達に大なる障害を來すと考へるが如きは、一國の經濟に國家財政あるを知つて、國民經濟あるを知らざる僻說と云はなければならない。一國の財政にして國力に比較して、膨脹して居るとすれば、之に對して緊縮を加へるに、何等憚る所ある可からざるものと考へられる。殊に我國の如き大正九年の恐慌以來經濟社會は不景氣の狀態に陷り、商工業の萎靡、農業の不振に依つて、國力の減頽するもの甚だしきを告げたのである。然らば國家の財政も此國力の減頽に比例する程度に於て、緊縮されることが當然であつて、斯く緊縮されてこそ、國家財政と國民經濟との間に、調和を保たしめて、兩者の並進的發達を期するを得る道理であるのに、我國に於ては國民經濟疲憊の時代に臨みながら、財政は常に膨脹し、殆ど其極まる所を知らざるの趣きであつた。近年我國に於て、如何に永き歲月を經ても、經濟社會が不景氣の狀態を脫するを得ず、却つて不景氣の次第に深刻たらんとするが如き、一に斯く上から國民經濟に加へられる壓迫の然らしめる所と認めざるを得ない。如何に不景氣に爲つたと云つても、其不景氣に國民經濟上の事だけであり、又如何に事業が不振であると云つても、其不振は民間商工業だけに限られて居り、國家財政に於ては、年々十數億圓の經費を支辨し、積極政策の下に、幾多の事業を經營するの有樣であつては、不景氣の如何に拘はらず、物價の騰貴することも、金利の上進することも、亦敢て怪むに足らない。財政の放漫が國民經濟に打擊を及ぼし、其振興を妨碍したことの幾何であるか、殆ど測り知るを得ないのである。

斯る狀勢の下に、財政緊縮論の起るのは、當然であつて、私の如き我國の財政を整理し、經濟を振興するには、財政緊縮を除いて、他に求め可き方策はない、假に他に何等かの方策はあるとしても、其れ等に先だつて、財政を緊縮しなければ、如何なる方策も遂に效果を奏さざることを論じて、今日に至つたのである。故に加藤內閣が財政緊縮を以つて、其政綱の一に揭げたことに對しては、私は贊成を表するに躊躇しなかつた。唯加藤內閣の下に、如何なる程度まで其標榜する財政緊縮が行はれるかゞ一個の問題に屬したのである。

財政の緊縮を標榜したものは、必ずしも加藤內閣のみには止

まらない。加藤(友三郎)內閣も多少此點に努力し、行政整理を試みたようであつたし、山本內閣も震災の後を承けて、財政を緊縮せざる可からざるの必要を認めて居つた。凡そ原、高橋兩內閣の如き純政友會內閣に非ざる限り、我國に於て積極政策の下に、放漫を財政上に事として、可なりとするものはない、他の內閣は財政の緊縮を當面の急務とし、之に肝膽を碎くものと認められるが、然も今日に至るまで其事に成功を收めるを得なかつたのは、何故であるかと云へば、其處に種々の原因の存することが認められる。

財政緊縮に對する妨碍、其一軍閥の勢力

財政緊縮に對して、第一に妨害を爲すものは、軍閥の勢力である。陸軍なり、海軍なりの內部に於ては、其統率者の出身地なり、其他の關係なりに依つて、自ら種々の閥があり、互に抗爭し、排擠することがあるようであるが、固より內部に於ける出來事であつて、一旦外部の勢力に臨み、又は外部の勢力に對する場合には、一個の軍閥としての團結力は極めて强く、其强大なる力を利用して、常に軍閥の繁昌を永久に續けるとに努力して已まない。思ふに此事たる、第一我國の軍人が少年時代から、特殊の教育を授けられ、軍人としての思想感情を植付けられ、軍閥以外に、一歩だも踏み出す能はざる爲めに、自然軍閥なるものゝ發生を促すこと、第二斯の如く特殊の教養を受けた軍人は軍事の擴張に依つて、自家の榮達を求めるの外に、何等處する道を得ざる故に、自ら軍閥を作り、軍閥の實力を强大ならしめんとすること、第三陸海軍には帷幄上奏、大臣武官制の如き、幾多特殊の制度あつて、動もすれば時の內閣以外に獨立して、軍事費の要求に、軍政の方針に特殊の威力を揮うとするのである。斯の如きは軍國主義の下に、軍事萬能を旨とした時代に於ては、必須の要件を以つて、目されたに相違ない。從來陸海軍大臣が時の內閣と國防上の問題に就て、意見を異にして、辭職したならば、之に代る可き後任者を軍部內に求め難きに至る事情を以つて、內閣をして軍部當局者の要求を容れるに至らしめたとか、又は內閣組織の際、軍部から或る要求を內閣組織の當事者に致し、其承認を得て、始めて軍部代表者をして入閣せしめるとか云ふが如き軍部の橫暴なる態度は屢々實際に發現して、國民をして憤慨せしめること少なしとしなかつた。先年豫備籍に居る軍人を陸海軍大臣に任用するを得る改正は漸くにして行はれたが、文官大臣の制度は容易に實現するに至らす、豫備軍人の大臣任用も制度の上だけの話であつて、果して此制度が活用されて、軍部の所爲を掣肘する一助と爲るを得る

や否やは、實際に問ならず、近年陸海軍大臣の選任するや、軍部に於ける元帥軍事參議官等の推薦した者を以つて、之に充てるの例さへ開かれた如くであつて、軍部が動もすれば一般政治の圏外に獨立しようとするの風は今も昔も渝らざるやに見受けられる。現に今回加藤内閣の下に、各官廳が行政を整理して、經費を節約するや、陸軍亦若干の節約を爲したに拘はらず、斯く節約し得たる財源を以つて陸軍自身の計畫する兵器改良の經費に投入する方針を立て、經費の節約と兵器改良の要求とを關聯した條件とし、一般歳計に財源を供用することを拒否しつゝあるが如き、最も露骨に陸軍平生の態度を表白したものとしなければならない。或は先例に徴すれば、陸軍が或る新事業を計畫して、之に經費を要するや、其財源を陸軍部内に於ける經費の節約に求めしめたことはあるであらう。財政當局者の意は斯の如くして平生濫費を事とする陸軍に自發的節約を行はしめるの一事に在つたものと想像される。然しながら斯の如きは財政當局者自ら陸軍當局者をして其行政に獨立特行の端を開かしめ、財政統一を傷けるの緒を發したものであつて、甚だしき輕擧を以つて、見なければならないのみならず、今回の如き場合に右の事例を準用せんとするが如きは、主客顚倒の嫌なきを得ない。蓋し行政を整理し、經費を節約することは、多年財政の放漫に流れた積弊を刷する必要に出でたものであつて、此點に陸軍であると、他の官廳であるとに依つて、何等差別の存するものはないのである。陸軍にして國防の必要上、或る計畫を遂行しなければならず、之に對して若干の經費を要するとすれば其經費は一般國民に對して、加へる負擔と均衡を保つや否やに依つて、支出の當否を決定しなければならない。陸軍自ら財源を捻出した故を以つて、如何なる國防上の計畫も之を陸軍の案出するに任せて、實行せしめる、而して其實行に經費を要する以上は、行政整理に依つて、生じた財源は全然之を一般歳計の用に充てないと云ふことは、陸軍を一般政治の圏外に超然たらしめんとする年來の筆法を應用するものである。

右の如き陸軍の慣用手段は從來多くの場合に於て成效し、爲めに歴代内閣の行はんとする財政整理の計畫をして水泡に歸せしめた。畢竟斯る結果を齎らしたのは、軍閥の威力の大なるに對して、一般政治の衝に當る内閣の微弱なるが故であつた。然も軍備縮小軍事費削減は國民の輿論であり、師團の半減、一年兵役制の主張される一方に、加藤内閣は護憲三派を基礎とする政黨内閣と稱されるものではないか。此勢に臨み、此内閣に依つて、軍制改革、軍事費整理の行はれるのは、當然の事と考へられるが、果して如何なるものであらう。陸軍の主張する所と

內閣を支持する三政黨の要求する所とを比較して、其間に相當の徑庭があり、陸軍經費の節約に對して、一方に兵器の改良を行んとする陸軍側の要求の頗る熾烈なること、世間に傳唱されるが如くであつて、果して能く陸軍經費の節約を財政整理に資せしめるを得るかどうか、其れとも陸軍が依然として財政整理に對する障碍と爲るであらうか、現內閣の行はんとする緊縮の程度が此一事に依つて、解決されることの多きは、吾人の注目す可き所である。

其二　官僚跋扈の弊

第二に我國に於て、年來行政整理若しくは財政緊縮に對する妨碍と爲つたものは、官僚の勢力である。官僚の間にも軍閥と同じく、一の閥が組織されて居る。往年山縣內閣が文官任用令や、文官分限令を制定し、官吏の自由任用を極端に制限して、一方に任用資格を限定したることは、當時政黨の不節制なる獵官熱に對抗し、官界に無智無經驗の政黨員の闖入し來ることを拒否して、官吏の能率を維持するに必要の處置であつたに相違ないが、斯く官僚の門戶を閉鎖し、官吏社會と政黨との關係を隔離したことは、自ら官僚なる一個の閥を作る勢を醸成した。官僚の頭目を以て目される政治家は官僚を率いて、超然內閣を組織する官僚として行政上の吏務に才幹を現はした者が何時の間にか登用されて、國務大臣となる、自由任用に依つて、政黨員が國務大臣と爲り、政黨內閣が組織された場合にも、行政を擔當する官僚は官僚政治の精神を以て、事に當り大臣の經綸も施すに所なからしめるに至ると云ふのが我國に於て政界官界の實情である。加藤內閣が政務次官の制度を設けたが如き、斯る流弊を杜絕する精神に出でたものであらうが、其效果は幾年かの後に現はれるのを待つ可きであつて、直に之を望むを得ない。故に政黨內閣が組織され、其政綱の一として財政緊縮經費削減を實行するとして、何人が立案工風の衝に當るかと云へば、其れは各官廳に蟠居する官僚其人であつて、整理削減の根本方針も亦官僚に依つて取捨され、國務大臣の如きは所謂大綱を統ると云ふ美名の下に、官僚の成案に盲判を押捺すること多きが如くである。而して官僚の立脚地から考へれば、經費を削減するとか、財政の規模を縮小するとか云ふことは、彼等に向つて與へられる官職の數を少なくして、其登龍門を閉塞すると異ならない。彼等一身の利害から云へば、財政は出來る限り、其規模を膨脹す可く、斯く膨脹された規模の下に於て、成る可く多數の官職を設け、吏僚の數を多くし、事務を繁多にし、立身出世の容易に行はれる道を開くと共に、吏僚としての

積弊を絶ならしめなければならない道理である。行政整理、財政緊縮、經費節減とか云ふが如きは、總て官僚の懷抱する畢生の希望を蹂躪し、挫折するものである。然も此最も不利とする所を官僚をして立案し、工風せしめるのが從來多くの內閣に於て、行はれた行政整理の實際であるとすれば、其效果の不充分であつたのも、亦怪むに足らない。即ち私が行政の整理にして財政緊縮の目的を達する方便として、行はれたものである以上は、閣議に於て、宜しく各官廳に向つて、經費の天引的削減を命じ、其削減された經費の範圍內に於て、之に適する行政整理を各官廳の責任を以て、行はしめることを可なりとした所以である。加藤內閣が此點に於て、幾何の成績を擧げるかは政黨政治の官僚政治に對して勢力の如何を示すものであつて、最も興味ある問題である。然も加藤內閣は護憲三派聯合の政黨內閣であると稱されるに拘はらず、官吏の任命に於て、直轄會社首腦の任選に於て、動もすれば官僚の勢力に左右される跡の著しきものあるのみならず、內閣と政黨との關係に徵しても、後者の經綸が直に前者の施政に採用されてこそ、政黨內閣の實が發現される次第であるのに、內閣の行はんとする所と政黨の唱へる所との間に、徑庭の存するが如き、多くの點に於て、政黨內閣の實質に遠ざかる憾きなきを得ない。斯る內閣が行政を整理し、財政を緊縮するに當つて、能く官僚の勢力を排除し、政黨の生命とする民衆の意嚮を代表するに至るかどうかは、一個の疑問たらざるを得ない。

其三　實業界の我欲的精神

第三に財政緊縮に對して、大なる障害と爲るものは、實業界の利害關係である。一國の財政と經濟との間には、本來密接の關係を有し、又關係の生ずることを免かれない。財政に於て、最も大なる規模の下に、物貨を購入し、勞務を雇傭することは、一國の國民經濟に取つて、大なる利害關係を生ずる所以と爲る。國民經濟が財政に依つて、毫も動かされないまでに發達する。換言すれば財政に於て購入し、雇傭する位の物貨や勞務であれば、私人經濟に屬する某々會社や某々商館に於ても、之を購入し、雇傭すると云ふ有樣であれば、財政の規模の大小の如きは、經濟社會の趨勢を左右する上に、大なる力を持たざる道理であるが、今日の經濟組織は必ずしも斯る狀態に詣ることを許さない。現に我國に於ても、實業界を通じて、大規模の營業を爲すものであるとか、世間に著名の富豪であるとか云ふが如き者は或は現在政府に向つて、勞力や物貨の供給を請負つたり、或は既往に於て此種の業務に從つて居つたりした次第

である。故に斯る輩にして自家の營業に繁昌を告げ、取引の間に莫大の利益の生ずることを期する以上は、政府が經費を支辨するに當つて何等の制限を施さゞることを希望しなければならない。斯くて政府の爲めに事業の請負を爲す者は財政上に於て濫費の行はれることを可なりとし、其緊縮整理に對して反感を持つに至るのである。或は斯く事業請負人の如く、政府の經費支辨に對して、密接の關係を有せざる一般世人であつても、政府が經費を濫費して、物資や勤勞を需要し、其之を需要することに關聯して、物價の騰貴し、賃銀の上進する勢を盛ならしめたならば、自ら外面的に經濟社會に好景氣を刺戟するが如くに思はれる爲めに、經費の膨張に對して、何等介意せらざるのみならず、寧ろ之を可なりとする傾向を生ずるのである。請負業者を以つて、所謂コントラクターとして、一般に社會的輕蔑を掃はざること、英國の如くであれば、請負業者をして遂に社會に跋扈するの力なきに至らしめるであらう。然るに我國に於て、社會が富豪に對するや、其何故に今日の富を爲すに至つたか、其所以を探究せず、單に其富豪であり、其支配する事業の大なる故を以つて、彼等を尊崇する一方に、富豪の如き其事業の一部として、政府の爲めに、請負を爲すことを憚らさるの趣きであり、斯くてコントラクターの內には實業上に於て、社會上に於て、相當の勢力者あるを見る以上は、彼等が陰に陽に一團と爲つて、政府の緊縮方針に反對し、以つて各自の利益を擁護し、發揚するに熱心であることも、亦敢て異とするに足らないのである。此外に政府の濫費に依つて、當面の景氣の刺戟されることを可なりとする實業界の一般の人心の働くものありとすれば、政府の行はんとする財政の緊縮に困難の加へられるのは、論を俟たない。政友會が原、高橋兩內閣時代を通じて、行つた積極政策は高橋內閣の頃には既に幾多の矛盾に接し、破綻の收拾するを得ざるものを生じ、識者をして其濫妄を嘆ぜしめたし、實業界に於ても、聊か心ある者は斯る政策の更新されざる限り、我國に襲來せる不景氣を一掃する見込みなきことを認めしめたのであるが、原內閣の前半殊に大正九年三月の恐慌以前に於ては、多數の實業家は原內閣の積極政策に依つて、浮華なる狀態の經濟社會に現出することを喜んで居つた次第であるとすれば、積極政策の如何に俗耳に投じ易きものであるかは、之を知るに難しとしないであらう。現に財政緊縮の一端として、從來積極政策の下に行はれた治水事業の經費に削減を加へ、又繰延を施すの說あるや、此事業に密接の關係ある諸多の地方に於ては、之を以つて容易ならざる事として、其維持を希望し、是等地方に根據を置く政黨亦地方的利害を重として、此希望を

實現することに努力するが如き、又陸軍師團の所在地中、今回の軍備縮小に依つて、師團廢止の豫定された地方に於ては、其廢止を以つて、地方の經濟的興廢に大なる關係あるものとし、頻に其存續運動に從ひ、之を貫徹する爲めに、地方選出の議員を動かせば、議員亦其事の所屬政黨の支持する内閣が政綱の一として行ふ財政緊縮の一方策であることを顧みず、地方的利害の爲めに、地方民に聲援を惜まざる有樣である。如何に國民の多數が自家の利害に顧みて、經費の膨脹を可なりとし、政府をして濫費を致さしめるに力を致しつゝあるかの一斑が看取されるであらう。世間には加藤内閣を以つて、三菱内閣と呼ぶ者がある。如何にも我國の富豪岩崎氏に特殊の縁故を有する者が閣班に列して居るには相違ないが、斯の如きは一個の私事に過ぎない。此私事に依つて、加藤内閣たるものが衆人環視の間に、一岩崎に利益する政治を施すが如きは、何としても吾人の想像する能はざる所であり、又我國の政治は斯くまで低劣のものとも認められないが、然し之を全體から云へば、加藤内閣にせよ、其他の内閣にせよ、凡そ、我國に於て政權を掌握した者が能く金權の外に超然とするを得た事例があつたかと云へば、私は不幸にして然るものゝあつたことを認めるを得ない。原内閣の如き、我國に於て組織された政黨内閣の嚆矢であると云はれたが、此内閣は、金權者階級の利益を代表して、民衆の希望や、要求を蹂躙し、邁進したものは、他に類例を見なかつた。此事たる、我國に於て、政黨が民衆に依つて支持されず、其存立に就て、金權者階級の援助を藉ること多きの結果であつて、誠に已むを得ざる所と考へられる。加藤内閣の關係に金權者流と密接の關係を有する者のあると否とに拘はらず、加藤内閣其ものが金權者階級に支配され、金權を尊重する方嚮に向つて、政治を動かすことは、我國現下の形勢に於て、免かれ難き所である。加藤内閣が護憲三派を基礎とするの故を以つて、恰も民衆の友であるが如くに考へた人々は往年の原内閣が政黨内閣であるの故を以つて、政治上の積弊を除掃す可しと信じ、後日に至つて、事毎に裏切られたと同樣の嘆を免かれないであらう。而して金權政治を行ふ内閣に向つて、金權者流の利益に反する財政の一大緊縮が望まれるであらうか、或る程度の緊縮は行はれるとしても、多くの場合に、金權者階級の希望や、意嚮に左右されて、事の半途に停頓するが如きことなきを得るであらうか。眞に國民を基礎とした政治、金權を排斥して、民衆の利益を重しとする政治の下に於てこそ、又政治家が民衆の利益を發揚することに確乎たる信念を懷いてこそ、經費の削減、財政の緊縮は之を望み得るが、然らざる場合には、頗る困難なりと

しなければならない。

其四　不景氣に關する概念

第四、財政緊縮、經費削減が當今の急務であつて、政府自ら是等の點に於て、事功を擧げやうとする以上は、同時に物價問題を解決することが政府に取つて、緊要事であるとしなければならない。蓋し今日まで政府の經費が膨脹して、殆ど其底止する所を知るを得なかつたに就ては、種々の理由がある。積極政策に依る職務の膨脹、官僚政治下に於ける官權の伸張、軍備の飽く所なき擴張、充實の如き、何れも其原因として見る可きものであるが、是等以外に到底閑却することの許されざるものは、物價騰貴の大勢である。蓋し今日の財政組織に於て、國家の經費は對人經費と對物經費とに分たれ、前者は俸給賃銀の形態に於て、後者は物資の價格に於て支拂はれる。此場合に一般物價騰貴し、物價騰貴の勢に制せられて、賃銀亦上進するとすれば、經費支拂高の加重することは免かれ難き所であり、同時に斯る狀態の下に、財政を緊縮することも亦不可能事たらざるを得ない。故に財政の緊縮を實行するには、同時に物價問題の解決が之に伴はなければならない次第であつて、物價問題に對する解決の雁行せざる財政の緊縮であつては、徒に勞多くして、功少なきの嘆を免かれないであらう。英米兩國が歐洲戰爭後經費の節約に於て、最も著しき成效を遂げたことは、既に世人の熟知する所であるが、兩國に於て、經費の減縮すると共に、物價の底落した事實は大に注目を要する所であつて、而して兩者の間には、正に因果關係の動かす可からざるものがあるとされる。即ち經費が節約されて、物資に對する需要の減少した爲めに、物價の底落したことは、一面の道理であるが、斯る物價の底落に依つて、更に經費の縮小する勢の促されたことも、又之を掩ふを得ない。私が財政緊縮の道程に於て、物價調節の特に重要視され可きものであるといふ所以であつて、此要訣を缺いて、財政の緊縮を行ふ場合に、幾多の矛盾、衝突の生ずることを免かれないであらう。然るに我國に於ては、財政緊縮の必要が朝野に於て絶叫され、政府亦之を遂行せんとしつゝあるに當つて、物價問題が全然閑却され、其解決に對して、一顧だも拂ふ者のないのは、何故であらうか。固より財政さへ緊縮されたならば、其曉に物價下落の生ずることの待望されるのは勿論であるが、從來の物價騰貴たる、必ずしも一の財政膨脹の然らしめたものではない、財政以外の事情に依つて、物價の騰貴し、又其騰貴の繼續しつゝある以上は、此勢を制することが即ち財政緊縮を可能ならしめる所以と信ずるのである。然も急

速に物價を暴落せしめたならば、假令ひ其れが景氣を恢復する過程の一であるとしても、目前に於ては、却つて不景氣を甚だしからしめる所以と爲りはしないであらうか。既に此點に於て危險を感ずるとすれば、政府亦強いて物價調節に力を注がざるに至るものと思はれる。財政緊縮の叫ばれる今日、政府に依つて、物價調節問題が閑却され、全然高閣に束ねられるに至つたのも、亦怪むに足らないものゝ、斯の如くして財政の緊縮に對して、一の障碍が横はり、政府をして其爲さんとする所を難からしめる一時は、吾人の注目す可き事實である。

英吉利に於ても、近頃銀行業者の間には早く紙貨に對して、磅貨の價値を引上げ、國際間に於ける英國の金融的權勢を恢復するに就ては、英蘭銀行をして金利歩合を引上げしむることを必要とすると云ふ議論の行はれるに對し、斯くては通貨の縮小を來して、經濟社會に不景氣を誘導し、失業の害惡をして救う可からざるに至らしむ可しとして熱心に反對を試みる一派がある。是等の議論の孰れを以つて、正しとするかは外國の事であるから、姑く之を他日に讓るが、我國に於ける財政緊縮の經濟社會に及ぼす效果に就て、國民の懷く感想は前述の英國に行はれるものと類を、同じうしはしないであらうか。即ち急劇なる財政の緊縮は固より經濟社會に波動を及ぼすことを免かれないであらうし、其波動の一として、不景氣の招來することも亦已むを得ざる所であり、殊に政府の事業と關係を有する實業家の間に、斯る説の強きを致すであらう。其際に政府が能く此勢力を壓倒するを得るかどうか。此點に於て、我國にも亦英國と相類する問題を生ずるのである。

斯の如く種々の方面から、觀察すると、政府が財政緊縮を標榜し、世人の注目を惹くに足る程度まで、徹底的に之を遂行するのは、甚だ困難であつて、英米兩國が能く財政緊縮に就て、效果を擧げるを得たのは、要するに第一之を敢行する勇氣と誠意とが當局者に備はり、第二政黨亦目前の利害を顧慮せず、國家將來の爲に、政府の爲す所を援助し、第三世間亦一時の不景氣を意とせず、政府の方針に對して、冷靜なる態度に出でたことを以つて、重な原因としなければならない。英吉利に於て失業問題が一時世間注目の焦點と爲り、其際政府に依つて、經費が縮小されたならば、却つて失業の勢を甚だしからしめるであらうと云ふことが憂慮されたに拘はらず、政府は何の憚る所なく、經費を縮小したし、續いて通貨の收縮をも行はうとして居るやに見受けられる。北米合衆國に於て、一時彼の如き巨額の金を國内に擁し、又物資の輸出亦相當に行はれるに當つて、國内に一時不景氣の聲を生ずるに至つたのは、畢竟財政に緊縮を行

はれた結果に外ならないのである。即ち英米兩國に於ても、財政の緊縮は大なる覺悟と決心とあつて、行はれたものであることが理解されると共に、此覺悟と決心とを缺ける我國に於て、同一程度の縮小の行はれるかどうかに就て、自ら疑惑を挾まざるを得ざるに至るのである。

財政緊縮と景氣恢復

財政緊縮と景氣恢復との間には、固より直接の關係を存するのであるが其關係の現はれる程度の强弱に至つては、自ら時の、狀況に依つて、相違せざるを得ない。試に此問題に關係ある諸種の事項に就て、考へたいと思ふ。

第一緊縮の行はれる程度。前述の如く、私は、加藤內閣に依つて、行はれる財政緊縮を以つて、目覺ましき程度に上るものと考へて居らないが、假に其れが相當の程度に達し、從來の經費に對して、三割位の削減が加へられ、我國の經費が十二億圓に爲つたとしたならば、如何であるか。人件費に於ては、其節約に依つて、官吏の淘汰される者を生じて、失業者の續出する勢に接するであらうし、物件費に於ては、其削減に依つて、物資に對する需要を減じて、供給の過剩を見るに至るであらうし、斯くて今日の不景氣に上塗りをする形勢を免かれないであらうが、然し是れは單に一時の事相に過ぎない。斯く財政に於て節約された金額は國民經濟に殘り、國民に依つて、資本として活用されたならば、自ら國民經濟の活躍を促し、此の方面に於て、物資や勤勞に對する需要の增進を見るに至つたならば、彼此相補うを得るの道理であり、單に財政と國民經濟との間に、需要の轉換を生ずる暫時の期間だけ、不景氣の襲來を見るに止まる。寧ろ國民の間に、斯る財政の緊縮の行はれた結果として、近き將來に於て、國民經濟の活躍を促す機運の到來するものであると云ふ自信の懷かれるだけ、人心をして自ら安定せしめるを得ることゝ思はれる。又緊縮の行はれる程度が存外寡小であつたならば、一時的不景氣の來る虞れのないと共に、近き將來に國民經濟の振興を刺戟する力も餘りに大なることを望み得ないのである。

第二、財政緊縮と金融との關係。然らば財政緊縮の程度の寡小である場合には、國民經濟に於て、景氣の恢復を刺戟する力は殆ど絕無であるかと云へば、必ずしも其然ることを斷言するを得ない。財政緊縮の程度は餘り大なるものでないとしても、政府は從來の公債政策が我國の金融市場に及ぼした影響に就ては、餘程深く考へる所あつたものゝ如くであつて、現に本年度の豫算に於て、公債の一般市場に於ける募集を廢止したが如

く、明年度に於ても、此方針が繼承されたならば、金融市場の安定を得て、幾分か金利歩合を下降せしめ、事業の振興に向つて、一歩を近づけるを得るものと考へられる。此上物價が下落したり、輸出が增進したりしたならば、景氣の恢復は眞實の道程に就くのであるが、斯る事は寡小なる程度の財政緊縮には望まれないかも知れない、唯望み得る所は金融市場の安定する一事であつて、寡小なる程度の財政緊縮であつても、此位の利益は期し得ると考へられる。斯る利益すら伴はない緊縮であつては、加藤内閣の政綱とする財政緊縮は羊頭を懸けて、狗肉を售るものゝ譏を免かれないであらう。

第三、景氣恢復と外國の經濟社會。我國の經濟社會が從來不振に不振を重ねたのは、必ずしも國内の事情に禍された爲めのみではない。外國の經濟社會が歐洲戰爭以來混沌たる狀態に居つたことが其一原因であつたのは、論を俟たざる所であつて、現に我國輸出貿易が停頓したことの如き、其證左とするに足りる。故に我國に於ける景氣の恢復は財政の緊縮にも依る所あるが、同時に外國に於ける經濟上の狀勢の恢復に依つて、自から定まるのであつて、兩者の力が孰れが大であるかは、今後の實際に就て、判斷するの外はないのである。唯多年問題であつた獨逸賠償金の案件も漸く過般の倫敦會議に依つて解決され、所謂ドーズ案の實行を見る以上は、其緒に就くに隨つて、第一、合衆國は其國内に充實する資力の一部を以つて、獨逸の外債を引受ける一方に、自國製造品の販路を對外的に擴張すること、第二、獨逸は賠償金支拂の財源を得て、其負擔を輕くすると共に、産業振興の資金を收め、内國經濟社會の安定を得ること、第三、獨逸と聯合諸國との通商上に於ける關係次第に圓滑と爲つて、經濟の發達に資することとの諸點を通じて、歐洲經濟上の狀況に有利に展開されるに至るものと見なければならず、殊に右の諸事實中、合衆國の商工業が活氣を帶びる一事は必ず我國の對米輸出貿易に刺戟を與へ、輸出品製造に從ふ諸種の事業に利益を及ぼすことを通じて、全體の經濟社會を潤ほすに至るものと考へなければならない。

景氣恢復を迎へる準備

唯此場合に於て、我國の經濟社會に果して外國經濟上の恢復に伴ふ利益を享受するの準備があるであらうか。我國に於ては、近年物價の連續して昂騰して居つた結果、製造工業界を通じて行はれる所は粗製品を濫造する一事であつて、當業者は此惡法を利用し、生産費の加重に依つて、賣價の騰貴する勢に對抗しようとした。我國の物資が粗製濫造であつて、加ふるに其價格

の高値であるの故を以つて、諸外國に於て排斥され、歐洲戰時に漸く擴張するを得た販路を喪失するに至るのも、亦偶然でありとしない。隨つて今、諸外國に於て經濟上の秩序が恢復して、外國の物資に對する購買的能力が増進するに至つたとしても、我國の物資が從來の如く依然として粗製品濫造品であつて、其上に價格が不廉であつたならば果して能く輸出の増加を期待し得るであらうか、一個の問題たらざるを得ないのである。

更に一考を要するは金利の問題である。經濟社會をして常調に復せしめ、更に進んで其振興を謀るには、金利歩合が低廉と爲り、其歩合の下に、若干の資金の繼續して、供給されることを必要とする。我國現時の如く、金利歩合の高きこと、世界の群を抜くが如き狀態であつては、如何に事業の振興を念とした所で、其目的を達し得るの道理はない。最近政府が財政上に非募債政策を取ることを聲明して以來、金融市場に多少の緩和を告げるに至つたやうであるが、更に一段の金利低落を來し、殊に斯く低落した金利が、或る期間を通じて、繼續する見込みが立たなければ、眞の金融緩和に接したものとするを得ない。其れには先づ日本銀行に於て、率先金利歩合を引下げることを必要とするのであつて、過般來世間に日銀引下げ論の行はれる所以であるが、日本銀行と雖も、漫然一時の狀勢のみに動かされて、金利問題に輕卒の態度を取ることは、許されざる所であつて、同銀行をして金利引下げを行はしめるには少なくとも

第一、財政の整理緊縮が徹底的に行はれ、又は其行はれる見込確立し、財政上の關係より、金融市場を壓迫する危險の除却されるに至ること

第二、物價が漸次下落の緒に就き、物價の關係から、資金に對する需要を増進せしめる虞れなきに至ること

第三、外國貿易順調と爲り、貿易上の關係から、正貨を取付けられて、金融市場に脅威を加へる掛念なく、寧ろ外國から正貨の流入する、狀態の馴致されるに至ること

を必要とする。是等の狀況の備はらざる際に、或は日本銀行に於て、早くも金利を引下げることはあるかも知れないが、斯の如くして行はれた金利の引下げが果して第二回第三回に亘る引下げを誘致して、眞實の金融緩和を導くに至るかどうかは、私の豫言するに苦む所である。

故に我國の如き從來幾多の經濟的秕政の並び行はれた爲めに紛更した經濟社會の局面を一新し、不景氣から好景氣の狀況に移らしめるのは、至難の業であつて、唯一の財政的緊縮を以つて、足れりとするものではない。財政的緊縮が多くの條件中の

重要條件であることは、吾人の認める所であるが、他に之に伴つて幾多解決を要する案件の存する。況や財政的緊縮が徹底したものでなく、種々の障害に會して、未熟の程度に止まるようなものであつたならば、其景氣恢復に資す所の淺かる可きは論を俟たない。行政財政の整理緊縮は今日の時勢に於て、題目としては甚だ可なるものである。然も其實行にして徹底的に亘らなかつたならば、要するに退ける所に相するものであつて、逆に經濟社會を匡救するに寸効の存する所なきに至るであらう。三派聯合の勢力を基礎とする護憲內閣にして行政財政の整理に財政の緊縮に爲す所なしとしたならば、吾人は唯我國政治家の無力に驚くと共に、遂に我國政治組織の根本に就て、一考せざる可からざるに至るのである。

東京市長辭任事件の批判と新市長に對する希望

法學博士　渡邊鐵藏

一　東京市長辭職事件の批判

九月五日、東京市電氣局長選擧の市會の結果は、意外の大波瀾を惹き起して、遂に市長、助役、電氣局理事等總辭職の重大事件を生んだ。帝都復興事業が最も困難な頂點に達して居る時期に、斯かる事態を生じたことは最も遺憾千萬であると共に、東京市民は事の經過に就いて眞實目に之れを觀察批判せねばならぬ。斯くの如き不祥事が再三發生することは市政を混亂せしめ、市の事業の伸展を阻害し、市民の生活を脅威するものであるから、此機會に於て十分正邪の別、責任の所在を明にし、且將來の對策を考へて置く必要がある。

東京市長が責任を以て事業を遂行して行く以上は、其部下に屬する者は固より其意中の者を自由に選擇し得ることになつて居らねばならぬ筈である。現在の制度の批判は後に之れをすることゝして、假え現制度に於て助役並びに市參與の任命は市會の選擧になつて居ればとて、實際問題としては此選擧權の行使

は固より市長の意志を尊重して行ふべき筈である。此事は市會自ら選任した市長に對する德義上の責任と、市政を圓滑に運轉せしむる爲めの市民に對する責任の一點よりして市會が十分考慮せねばならぬ事である。市長の推薦した候補者に特に非難すべき點でもあればいさ知らず、さうでないに拘はらず、別に甲乙のなき他人を拉し來つて、市長の推薦した候補者と雌雄を決せしむる如きは、市會議員としての責任觀念も又德義の觀念もないものと云はねばならぬ。萬一市長に對して不信任の事があれば、堂々と其事項を指摘して、市會の席上に於て公然辯難することが當然であり、又市民に對する義務である。今回の市會の行動は勿論明確な市長排斥運動であるが、市會が公然と市長の不信任を議事堂に於て議論することを爲さず、此度の如き間接射擊の方法に出た事より推測すれば、今回の市會の市長排斥運動は市民に揚言し得る市長不信任の理由あるに非して、市會の一部野心家が何等か竊かに計畫する處あつて行つた利己主義の醜惡な行動と斷する外はない。良藥口に苦しと云ふ諺があるが、從來東京市會議員は屢々醜名を蒙り、最近にも多數連つて獄に繋がれたことがある程であるが、前に辭職した長尾電氣局長、又今回辭職した永田市長の如きも清廉剛直を以て聞ゆる人である。從來の歷史から見れば、或ひは水清ければ魚棲まずの譬えに洩れず市會議員の喜ぶ處とならなかつたのかも知れぬ。之れは餘り穿ち過ぎた言ひ方かも知れぬが、それにしても最も清廉剛直の士を求むる東京市長の椅子が、其樣な人では務まらぬといふ事が想像される樣では將來の東京市のために甚だ惜まねばならぬ。

永田市長の辭職に就いて、或は說をなす者があつて、一電氣局長の選擧が自己の意志通りにならなかつたからとて、此復興の重大時期に輕々しく辭職するのは責任の感に乏しいものであるといふ者がある。例へば九月十日の報知新聞の社說、及び市會の新友會の宣言の如きは之れである。市長が其部下に自己の意志に反するものを置かれて、責任を以てどうして職務が行へるか。又自己を選擧した市會から斯かる事を仕向けられ、不信任の意志を表示されながら、何として安閑として其位置に居られやうか。如何に厚顏無恥の者と雖も左樣なことは出來ぬ。又假りに市長の椅子に噛り付いて居たとしても、將來部下の統卒、事業の執行、市會との折衝に於て破綻を生ずべきは疑を容れぬ事であるから、斯る狀態に於て市長の重任に在ることは單に市長として快くないといふ問題ばかりでない、結局市政の圓滑なる運轉を見ないものとすれば、即ち市民の迷惑となるのである。此故に市長が此際速かに勇退することは、單に理論の上からのみならず、實際の上からも當然爲すべき事である。斯か

る亂暴な連中の分らぬ者は恐らく東京市民の中にも多くはあるまい。今回の問題に關して、假りに東京市民全體の意見を求めたならば、十中の九以上は必ず東京市會の無謀な行動を非難し、東京市長に同情し、且つ東京市民の迷惑を慨嘆するに相違ない。大道氏推薦に狂奔した市會議員が市長の辭職を非難して、圖々しくも宣言書まで出すに至つては沙汰の限りである。俗に云ふ「盜人猛々しい」といふ諺は丁度其批判に當る。譬へて見れば切角自分が選んだ嫁を散々いぢめ拔いて、最後に其展がる養子まで引きつれて居た堪れないやうにして置いて、結局嫁が家出したからとて、子供が大勢居て病人まであるのに、それを捨てゝ家出するとは無責任だと嫁を非難するのと同じてとだ。眞意は嫁を追出したいが、公然追ひ出す理由もなく、結局之れを居た堪まれなくして追出した後で、世間體を繕ふ爲めに嫁の無責任呼はりをするのと丁度同じことだ。此復興の難關に艱苦、努力した市長をいぢめ出したのであるから、成程世間體極まりは惡からうが、同じてれかくしをするにしても、せめて遺憾の意を表しでもすれば未だしも、追つかけて脊中を毆りつけるやうな遣り方は益々紳士的でない。

今回市會の選擧に勝つて電氣局長になつた大道氏にしても、勿論まかり違へば市長辭職の結果になることは百も承知のことであらうから、東京市民としては其自由行動は甚だ迷惑なことである。大道氏は電氣局長として最も適任な一人であることは疑ないことであるが、併し氏と同樣の適任者は東京市内に三十人でも五十人でもある。岡野氏は明かに其一人である。然るにも拘はらず、此帝都復興の、殊に區劃整理の難事業が、其具體的事業著手の時期に達し、最も困難な段階に達して居る時期に當つて、東京市長の辭職を豫期しながら、或は進んで計畫してやつたのかも知れぬが、自ら電氣局長候補として目的の到達を強行して、今回の紛亂を生ぜしめたことは、一身の利害のために東京市民の迷惑を顧みない專橫な態度であると非難することを憚らない。私は大道氏とは知己の間であるが、私の考へることは恐らく大多數、或は大道氏を推薦した一部の市會議員を除く他の全部の市民の考へる處であらうと信ずるから、一言之れを表明して置く。

二　市民輿論振興の必要

今回の電氣局長選擧に關聯して、遂に市長の辭職、市政の混亂を生ぜしめた一部市會議員の行動は、市民が之れを嚴正に批判せねばならぬが、斯かる市會議員の跋扈することは、市會議員の選擧の際に市民の監督が足りないから起ることである。又

平素市會に於ける議員の言動を監視することは市民の怠つてならぬことであるが　此點に就いて餘りに東京市民が冷淡である爲めに、市會議員は自己が市民より選ばれた市民の代表者であることを忘れて、單に自己の利害や感情のみに依つて行動することになるのである。斯かることでは市會の組織は選擧の手續きに依りデモクラシーの制度と云ひ得るであらうが、其實際の活動に至つては何等市民の意志、希望、利害と關係なく、市會議員は單に自己の爲めの市會議員となり了るのである。今回の市會の行動の如きは東京市民の意志に反するものであることは云ふまでもないことである。元來デモクラシーを標榜する選擧制度、議會政治は、其制度の動機、組織は民意の伸張にあることは疑ないが、實際の運用の結果は必しもさうでなく、或場合には官僚政治より一層民意に添はないやうな結果の生ずることのあるのは屢々認められることであつて、我帝國議會も屢々其譏りを受けたこともある。東京市會に於て更に此缺點が增大するとすれば、市民は之れを矯正することに就いて相共に十分熟慮せねばならぬ。少くとも此際市民の利害を顧みず、市政を紛糾せしめた一部市會議員の責任に對しては、健忘な東京市民と雖も其責任を十分腦裡に刻んで置くべきである。

從來東京市會は市民の利害を代表し、市の事業を促進する効果よりは、寧ろ市の理事者を制肘し、市の事業を阻止する作用の方が多いと觀察し批評する人が多くあるが、折角今日迄成育し來つた自治制度を止める譯には行かぬ。此市會を正しく活動せしむるためには、選擧の際に市民が十分覺醒するのみならず、優良な市會議員の選出されることに就いて積極的の努力をすることも必要であるが、同時に一方市會の外に、市政に關して研究し、又市政を擁護する活動を爲すやうた團體の存在することが必要であると思ふ。現在の如く帝國議會と云はず、自治體の議會と云はず、自黨に熱狂し巨額の選擧費を費して漸く當選する議員を以て成立する以上は、其議員の資格を得た後に於てまゝ利己的行動を爲すことは免れ難い實狀に在る。此故に之等の代表者に對する輿論の批判は必ず別に存在せねばならぬ。此輿論の批判の勢力が旺盛であり、且つ嚴格であれば議員の行動は或程度迄監視し得ることゝ思ふ。帝國議會及び地方議會に於ける腐敗は我國に於て輿論の批判の勢力の弱いことに基いてをる。輿論の勢力の弱いことは即ち國民、市民の政治的自覺が足りないことを示すものである。換言すれば國民の政治的自覺、自治精神の覺醒、普及が未だ十分でない　に先立つて議會政治、自治行政の制度の方ばかりが輸入的に早く出來上り過ぎた爲めに、其間に運用上の缺陷が生じたのであるとも云へる

だ、去れば今更ら近寄りをする譯には行かないから、極力國民市民の政治的自覺、及び輿論の勢力の伸張を圖らねばならぬ。輿論は勿論新聞雜誌と演說會等に依つて發表されるものであるが、我國の議會政治に對する輿論の勢力は、最近數年來かなり强大になつたやうな傾向があつて、喜ばしいことであるが、東京市政に關しては輿論はいつも眠つて居るやうな狀態である。地方の新聞紙は反つて其地方の政治に關して最も熱心な議論をするが、東京の新聞紙は全國民を讀者とし、全國的の記事に力を集中する故、東京の市政、事業等に關して强烈な輿論が出て來ない。簡單な報道的な記事はあつても、東京市民の爲めに其意志を代表して言論を續けて行くやうな熱がない。又一般市民も所謂有識階級或は上流と稱せられる人は、多く國務に興味を有し、或は專門的な學藝、職業に從事し、或は大規模の企業を經營して居るために、地方の所謂代表的人物と異つて、東京市政に關しては頗る冷淡である。何處の國でも、何處の地方でも、政治の組織がどういふ形でも、實際に於ては輿論を指導する者は有識階級若くは所謂中流以上の人士である。我國の地方自治體の現狀を見てもさうである。然るに我東京市に於ては、此階級の人士は市政に冷淡であり、又一般市民は輿論を作成するに就いて何等の組織も團體も作つて居ないし、又數百萬の人口を有する大都市に於て、特別の熱心家でもなければ斯かる團體も出來ないから、結局東京市民の輿論といふものは強い力となつて現れる事はないものと見ねばならぬ。輿論の勢力が微弱でありとすれば、又市會議員が優良、眞面目な人ばかりの集合でないとすれば、市會の行動、市政の運轉が市民の期待に添ふ筈はない。時々新聞で輕く非難されたり、又二三の個人から批評されたとて、輕く之れを聞き流して居れば人の噂も七十五日で濟むことであれば、東京市政には全く輿論の監視といふものはない結果となる。

此機會に於て東京市民の輿論を作成する組織を作ることは最も急務であると考へる。特に市政に興味あり、熱を有つて居る有識者其他一般の市民が集つて、或は市政擁護會、若くは市政革新會とかいふ種類のものでも好いが、平素から團體を作つて置いて、せめて一年二回位でも會合して市政の現狀を研究し、討議し、意見を作成するやうな方法を講じ、或場合には市理事者を鞭撻し、或は市會を監視し、或は政府に献策し、希望を述べる等のことを行へば、東京市民の希望、輿論は組織的に、而も力强く、發揮されるものではないかと思ふ。外國の都市にはよく長老團體といふものがある。市參事會や、商業會議所のやうな性質を持つて居るものもあるが、之れに似た長老團體、或

は長老も青年も交へた團體が特に市政擁護革新のために生れ出ることは、恐らく震災後の復興のために悶え、多數の難事業を控え、財政困難の極に達し、而も餘り信頼することの出來ない市會を有つて居る東京市としては最も有意義なことではなからうか。

三　東京市政の改革及び新市長への希望

市會の內容の良くないこと、輿論の力の弱いことは東京市政の一の重大な缺陷であるが、制度其物にも大きな缺點がある。市長の權限の小さいことは其一つである。元來デモクラシイの主義は近世の政治機關の組織には必要であるが、此事は此主義の下に成立した政治機關の權限の問題とは全然別箇のものである。選擧された市長だからとて權限が小さくては仕事が出來ぬ。否寧ろ民意を代表して選擧されたことであれば、之れに信頼して其權限は出來得る限り强大にするのが當然である。デモクラシーと專制との差異は政治的の權力を掌握せしむる徑路に差異があるばかりである。既に政治上の權力を與へた後に、權限を餘り制肘することは反つて活動を鈍からしめるものである。外國でも政治組織はデモクラシイであつても、政治機關の權力は決して官僚政治、專制政治より弱い譯ではない。此故に既に市長として選擧した以上は、之れに十分な活動の自由な力を與へねばならぬ。我國の自治制度上に於ける市長の權限擴張問題に就いては、今は之れを論ずることを避けるが、東京市今回の事件に就いても、市助役、市參與等の選擧權を市會に與へてあることが抑々制度上の誤りである。既に市長選擧權を市會が有する以上は、其部下の選任は之れに一任するに非れば屢々今回の如き紛糾した問題を生じて、市長が部下の選任さへ市會に制◇されるとすれば、責任を以て市政に當り得ないのみならず、斯かる紛糾のために市民の迷惑をする機會を多くするものである。

併し總てが目下の問題としては事後の繰言に過ぎない。今は只此復興の難局に當り得る良市長を迎へることに全力を盡し、且つ此機會に於て、將來東京市政及び事業が圓滑に進展するに就いて必要な制度の改革を主張することが最も肝要である。新市長は復興事業の眼目である土地區劃整理、及び耐火建築普及の二大問題の解決に理解あり、政策のある人で、殊に困難な東京市の財政を巧みに料理する手腕のある人であることを必要とする。新市長には何人がなるかは固より今日より逆睹し難いが、新市長としては先づ第一に土地區劃整理事業に十分の理解があり、之れを斷行し得る熱誠と實力のある人でなければならぬ。土地區劃整理のことは既に計畫を確定し、帝國議會に於て第一

文豫算及び追加豫算まで取れて居ることであり、復興局に於ても、又東京市に於ても全力を盡して其遂行に當り、殊に一時熾烈な反對運動があつたにも拘はらず、當局並びに有志團體の熱誠な宣傳の努力に依つて漸く反對運動も終熄し、今や將に計畫の現場事業を一部分づつ實行せんとする時期にまで達して居るのであるから、何人が新市長になつても此事業を中止する譯に行かないが、併し之れに對して幾何の熱意と斷行力を有するかは、此事業の、從つて復興事業の成功に重大な關係がある。土地區劃整理に對する從來の反對運動は、單に理論的のものであり、或は誤解に基いたものであつたが、今や既に震災後滿一年を經過して、猶何處にも區劃整理の現場事業が行はれないのみか、換地設計も多くは確定して居ない。斯かる遲延を見たことは主として數次の政治的故障に原因したものであつて、決して區劃整理關係者の怠慢でないことは屢々私の論じた處であるが、併しそれにしても一般市民、又區劃整理事業に十分の理解を有つて居る人ですら、餘りの遲延に身にかゝる迷惑から不平の情が鬱勃として漲つて居るのであるから、愈々事業の實行に着手する際には、再び前回よりは根強い反對や困難の事情が起るかも知れぬ。斯かる事情であるから、此頃の難局に當つて誤なきを得る實力を持つて居る人が是非とも市長の職に當ることが必要である。猶帝都建坪五百萬坪の木造建築を徐々に改造し、殊に防火地區に對する耐火建築を強制し、實行せしむるためには、固より市民の自力のみに依ることは不可能であるから政府の助力を仰がねばならぬ。此點に關しても新市長は安全な帝都の復活のために、耐火建築の普及が絕對的な條件であることを十分理解し、又之れを實現せしむるために金融の方法、企業の組織等に就いて適當な考案を廻らし、十分政府の諒解を求めて市民のために奮鬪する熱誠と實力のある人でなければならぬ。今日永田市長が市長を辭するに當ても、呉々も區劃整理の大事業の中途にして職を去ることを甚だ遺憾として、愛兒に後髮を引かるゝ思ひを洩らして居られるが、又吉田助役留任運動が市會議員其他の方面に起つたことも亦區劃整理事業に就いて最も熱心であり、通曉して居る同氏の去ることを遺憾としたのであつて、孰れも區劃整理事業が目下の東京市のなすべき事業として最も重要なものであることを證明して居るのである。又本建築、殊に耐火建築の助成の點に就いても、復興局、東京市內の有力な公共的團體及び建築關係者、金融關係者等が會合して、度々案を練つて稍々實現の可能力のあるやうな案が出來上る處まで進んで居たのであるから、市當局の更迭は此問題の解決には忽ち一頓挫ではあつたが、併し新市長にして熱心努力すれば、市に

の關係する此問題も解決の曙光を見出すことが出來る。

其他道路の鋪裝、地下埋設物の整理完成、公園の増設、中央市場の設置、高速度鐵道の敷設、東京築港、京濱運河等爲さねばならぬ事業は、復興計畫の內容に含まれて居るものと然らざるものとを問はず、多多新市長の手腕を期待して居る。

玆に一々東京市の施設事業に就いて希望を述べる考はないが、道路の擴張と、市街の建設の關係の事に就いて一言したい。從來我國の都市で道路の新設、擴張を行ふ時には、道路ばかり作つて、其兩側の市街の合理的建設の事を考へない。又反對にどんな町を建てゝも、前面の道路の規格設備を之れに適合せしむることを考へない。一言にすれば家屋と道路が連帶的に考慮されずして、別々に計畫されるために都會の建設上之れを經濟的に見ても、又市の財政上から見ても甚だ不都合な結果を生ずる。殊に今回の復興都市計畫の如く一時に多數の路線が擴張され、或は十八間、二十間、二十四間等の大道路が新設されるに當つて、其兩側の市街の建設に關して何等か誘導或は制限の組織、手段を講ぜずして、之れを自然に放任する時は、斯かる一等道路の使命に添ふ丈けの商業街が現出しないで、兩側に個々に二階建或は平家の小屋が立並んで、此一等大路に面する土地の經濟的利用が全からざるのみならず、其路面の鋪裝費の支辨、其他財政上の負擔に於て、東京市は益々困難な地位に陷る違ない。譬へば假りに路面の鋪裝費を沿道の特別負擔の方法に依るとして、其負擔額を鋪裝費の五〇%と定めるとすれば、二十四間道路の兩側の者は各々路幅十二間分の鋪裝費の半額を負擔しなければならないことになる。即ち六間分の鋪裝費を出す計算になる。そこで奥行六間の建築敷地の所有者は、丁度敷地一坪に就いて路面一坪分の鋪裝費即ち四十圓を負擔することになる。假りに五間間口の家とすれば、宅地三十坪に對し千二百圓の鋪裝費を負擔せねばならぬことになる。此二十四間道路の兩側の家が三階或は四階建であり、又其營業の種類、取引高も大規模であり、負擔力の大きいものであればよいが、然らずして蕎麥屋や、仲宿や理髮店が二階建や平屋で、此大道路の兩側に散在したとすれば、到底右の數字のやうな鋪裝費を負擔することは出來ない。結局路幅擴張のため巨額の費用を國民及び一般市民に負擔せしめた上に、鋪裝費まで大部分迷惑をかけることになる。然らずんば大道路の鋪裝は出來ない勘定になる。要するに道路の規模、設備と之れに面する敷地割と、其上の建物の規模、樣式とは三位一體として考へなければならぬ事は都市計畫の原則であるが、今回の復興計畫の實行に當つては、徹底的に此理想を實行し得ずとしても、なるべく此理想に近

ようしむるやうに、せめて部分的にでも之れを實行することが必要である。然らずんば復興計畫に依つて路幅丈けは廣くなるが、政府の費用で鋪裝しない限り、鋪裝費の負擔に窮して、東京市の道路は現在より以上に惡道路となる恐れがある。若し新設大道路が一流の商業街として發達せず、道路の鋪裝を行はないとすれば、自動車は鋪裝した道路を選ぶから、新設大路の隅々には札幌の市街に見るやうに草が生えるやうなことになるかも知れぬ。即ち大道路を作つて兩側の市街の建設の促進組織を考へなければ、一般市民に不合理な負擔を課するか、若くは鋪裝が出來ずして其道路の効用を沒却するか、二者孰れかに歸着するであらう。

後藤前市長は時々警句を吐かれるが、東京市の路面工事に砂利を敷くのを見て「底無し袋に金を注ぎ込むのと同じことだ」と批評されたが實に面白い譬えである。德川幕府以來東京市の道路の吸ひとつた砂利代といふものは實に莫大である、東京市は地質の關係上敷かれた砂利が段々下に沈下するから、砂利を敷いても効能が少い。且つ砂利だとて其費用は侮り難い高價なものになるばかりでなく、決して寸時たりともそれに依つて完全な道路は現出しない。斯かる不合理な、不衛生な、而も決して經濟的でない方法は速かに棄てねばならぬのであるが、何事よりも東京市より數歩を先んじて居る大阪市では、[illegible]道路には殆ど鋪裝工事が完全に行き亘つて來た。東京市でも一層奮發して是非とも此鋪裝工事を速かに完成して、東京市を泥濘、砂塵の巷であるといふ汚名から逃れしめねばならぬ。

四　特別市制の施行

市民として新市長へ特に希望すべき事業は前記の外に勿論多々あるが、此際特別の盡力を希望したい大問題がある。それは特別市制の事である。此問題は既に內務省に大都市制度調査會も出來て、東京市に就いては其假案まで出來て居るが、此次の議會に其法案としての成立に努力することは新市長として最もやり榮えのある仕事であり、又東京市の發展のために根本的の意義のあることである。東京市は從來內務省と東京府の二重監督に苦み又隣接町村との事業及び財政の關係に於て多大の不便を感じて居る。抑々人口二百萬以上ある大都市で、而も一國の首府であるに拘はらず、之れを人口三萬、或は五萬の小都市と同じやうな組織權限の下に經營して行かうといふことは、根本から誤つたことである。東京市政は市町村制の規定を劃一にするといふ丈けの理由で、重大な拘束を受けるやうな[illegible]々しいものではない。單に二百萬の人口といふばかりでなく、其[illegible]

は一國の政治、文化、經濟、財政を支配する程の重要さのあるものであるから、此市民生活を合理的に運轉せしむる爲めには當然特別の制度を必要とする。歐洲の首府は孰れも多く特別の制度が布かれて居る。例へば我國が行政組織の範を取つた獨逸の首府伯林の如きも特別の市制を布いて居る。伯林の特別市制に關しては長い沿革があるが、最初千八百八十年に伯林市はブランデンブルグ州から離れて、別の行政區劃を構成するやうになり、又隣接町村編入の儀は千八百九十一年頃から起つて屡々不成功に終つて居るが、千九百十一年には大伯林組合法に依り伯林外六の市、二の郡が聯合して大伯林組合を作り、交通機關の整頓建築線の指定、公園廣場等の取得維持の三の目的を行ふこととし、之れに依つて電車系統も、建築線も、公園も理想的の計畫に基き作られるやうになつた。然るに隣接町村の發達が著るしく、經濟上からも、交通上からも伯林市と一體を成す區域が擴大したゝめに、右に掲げた目的のみに依る聯合では不十分になつて來た。大伯林の水道、瓦斯、電氣事業等は幾多の團體に依つて分掌されて居るために、工事及び利用の點に於て種種の不都合が生じ、又保健衛生の設備、其他の點に於ても種々差支が生じた。其爲め大伯林を一の統一した行政區劃にすることに就いて種々の議論が行はれたが、結局千九百二十年の議會に於て、大伯林を一個の獨立行政區域とする法案が通過した。これに依つて伯林市を合せて八の市と五十九の町村とが一體を成し、面積三百四十方里、人口三百八十萬を包括することになつた。新伯林市會議員の定數は二百二十五人に定められ、滿二十歳以上の男女は均しく選擧權を持つことになつた。新伯林市は二十の行政區に分れ、或程度の地方分權を認めて居り、市會議員は分れて各區の區會議員を兼任することになつて居る。勿論市會議員ならざる區會議員もある。此新制度に依つて、戰時戰後、殊に複雜となつた大伯林の行政は圓滿に運ばれるやうになつた。我東京市に於ても特別市制の區域、組織、權限等に關して勿論種々考へ得られやうが、既に東京都市計畫區域といふものも認められ、殊に隣接町村との關係は益々密接となり、水道、電車等の關係に於て、郊外住民は目前に種々の不便を感じ殊に財政上の負擔に於て市部と郡部は種々不公平な事情も生ずる場合が多く、就中今回の大震災後、從來東京市内に居住した者が郊外に移住し、若くは店鋪より住居を分離して郊外に定住する者が頗る多きを占める狀態であるから、單に都市計畫事業執行の便宜からのみでなく、市内と市外の經濟、交通及び財政上の關係の益々密接になる機運に適應して、此機會に於て出來得る丈け速かに帝都に特別市制を布く必要がある。又此制度の實行と同時に當然市長の權限は擴張されることであらうから、從來の如く市長の權限の弱いために市政の澁滯するやうな恐れもなく、又今回の事件のやうに馬鹿氣た事で、市長が更迭せねばならぬやうな悲むべき喜劇を生ずることもなくならうから孰れにしても帝都の外形の復興と共に、市の政治組織に就いても此際根本的の改革を加へることが最も緊急な問題である。

米國大統領の改選と第三黨運動の成功

澤田謙

ラフオレットが、第三黨を組織して、米國における進歩主義者を、政治的に獨立せしめたがために、今年の大統領選擧は、全くの混亂戰に陷つた。いまや、米國の政界の興味が、第三黨を圍繞せるごとく、その趨向もまた、第三黨を中心として、動くもののやうに思はれる。しかも第三黨の出現は、共和黨の大統領候補クーリッヂと、民主黨の大統領候補デーヴィスとの當選を、結局において不可能ならしめ、このデッドロックより脫出するの途は、民主黨の副大統領たる、チヤールス・ブライアン（老ブライアンの弟）をして、大統領たらしむるより他なき**やの豫想を、可能ならしむるのである。これ選擧界の大番狂はせといはんより、むしろ、第三黨の進步主義の勝利である、わ**たくしはもとより豫言者ではない。從つて斷言はできぬ。しかしこの豫想が不自然でないことは、以下すこしく詳說せんとするところである。

一

六月、クリーヴランドにおける共和黨大會は、壓倒的多數をもつて、現大統領クーリッヂを、黨の大統領候補に選擧した。各州の代表者が、狂せんばかりに起ち上り、帽を振り手を拍いて、「クーリッヂ！　クーリッヂ！」を連呼せるとき、獨り大勢に反抗して、共和黨進步派の頭目ラフオレットを推せる、二十八名のウイスコンシンの代表者は、默然とベンチに坐したまゝであつた。

「起て、起て、ウイスコンシン！」

四方から、罵る聲が起こり、怒號は大波のやうに會場に擴がつた。しかもウイスコンシン二十八名は、この罵聲の裡に、面に冷笑を浮べつゝ、平然と座席を動かなかつたのである。ラフオレットの獨立――第三黨組織――この豫想は早く會衆を目睫した。

かくして、一九二四年における、米國政界の迷語は、その第一の謎を解いた。

このときまで、全國の政治的興味は、次の三つの謎に集中してゐた。

第一、ラフオレットは、獨立の旗幟の下に、十一月の大統領戰に臨むであらうか。

第二、かれは、そも〳〵、大統領戰において、何票を獲得し得るであらうか。

第三、かれの出現は、民主黨と共和黨をして、ともに絶對多數を得るに至らしめず、從つて、大統領の選擧權を、**議會に移すに至らしむることはないか。**

五月二十八日、ラフオレットはすでに一つのステートメントを發表して、若し民主黨大會や共和黨大會が「その長い間とりつかれてゐた惡慣を追ひ拂はないならば、」「長き惱みと正義に怒れる人民は、來るべき選擧戰において、この舊二大政黨から獨立し、政治の支配權を奪還して、政治を眞に人民代表のものとなすべき、有効なる手段をとるであらう」と提唱した。これ第三黨組織の威脅である。クリーヴランド大會における出來事は、この威脅が空しき威脅にあらざるを示した。ラフオレットの第三黨組織は、いよ〳〵既定の事實となつた。すなはち、米國政界第一の謎は解けたのである。

政局の興味は、從つて第二と第三の謎に**移る。**――第三黨**は、果して幾何の成功を收めうるであらうか。**

二

ニウ・ヨーク・ウオルド紙（民主黨）は、その社説において曰く。――

「もし二舊政黨にして、ラフオレットの個人的勢力を、あまりに低く評價するが如きことあらば、非常なる過りに陷るであらう。かれは異常の追從者を有するのみならず、より以上に異常なる同情的聽衆を、人民のうちに有する。人民は、必らずしもかれの政見に同するのではないが、かれの勇氣を嘆賞するのあまり、一つの抗議として、かれに從はうといふ氣になり勝ちなのである。本年かれが出馬せることは、大いなる政治的事件として、一九一二年におけるルーズベルトの叛逆と、その重要を比せらるべきであらう。なぜなら、ラフオレットは、國家的英雄としてこそ、はるかにルーズベルトの下位に立つものであるが、ミシシツピー上流沃野におけるかれの奮戰的地位と、東部の勞働中心地におけるかれの個人的勢力とは、來る十一月の結果に、決定的役割を占めるであらうから。」

その論調を觀るとき、民主黨は、一方、ラフォレットの蹶起に、畏怖の念を喚起しつゝあるとともに、これを一九一二年のルーズベルトの『國民進歩黨』の出現と比較することによつて、多大の興味と滿足とを覺えつゝあるを了解する。なぜなら、民主黨が、十六年の長き忍苦の後、はじめて政權を得たる當時の事情は、もとよりタフトの治世に對する人民の倦怠にもあるが、民主黨の候補ウイルソンの勝利をして決定的ならしめたものは、ルーズベルトの新政黨が、共和黨の勢力を二分せしめたるに基くものであるから。

かくの如く民主黨が、一九一二年の大統領選擧を回想するの自然なる如く、また別の意味において、ラフォレットは、一九一二年の選擧戰を回顧するであらう。なぜなら、當時において、新政黨運動に第一鞭をつけたる功者は、實は大簇ルーズベルトにあらず、却つてかれラフォレットであつたので、かれの言によれば、かれはルーズベルトのために、「欺かれ」、そしてルーズベルトは、「予の成功を見て立ち、予の成功の大部分を奪ひ去つた」ものであるからである。

ラフォレットの第三黨運動はふるい。而していま、かれを『欺き』、かれの『成功を奪ふ』べき、ルーズベルトはゐない。わがラフォレット、もつてその政治的活動を、最後の一滴まで試むべき秋は來つた。

かれはいまや米國の政治的頂上に立つ。

三

ラフォレットは、ウイスコンシンの出身で、一八五四年の生れである。すなはち、一九一二年の選擧の際、すでに五十八の高齡であつたかれは、本年において、完全に七十の老齡に達してゐて、而してかれが米國の政界における進歩派の指導者たる地位は、年齡の進むとともに進みつゝあるのである。

かれは、州立大學の業を卒へたる後、直ちに辯護士として公生涯に入つたのであるが、以來五十年に近きかれの生涯は、終始一貫して、金權に對する反抗の歴史であつた。一八八五年に、はじめて選ばれて下院議員となり、これが政治の檜舞臺を踏んだ最初で、一九〇〇年には州知事に選擧され、一九〇六年にはつひに上院議員に選ばれた。その公生涯の前半が、ウイスコンシンの政界革新にあり、就中、鐵道課稅問題に對するかれの成功が、名を全國に知れたるものとして推奬さるゝが如くに、その政治的地位が年と共に躍進するに從つて、革新運動の範圍も漸く擴大し來つた。かれが上院議員としての地位は、共和黨進歩派の頭目であつて、その人物、經歷ともに進歩派中、

最も傑出せるものと稱せられた。かれの活動によつて、進歩派は完全に黨内の一敵國と化し、殊にタフトの失政に嫌らざる共和黨一般の人氣は、期せずしてラフオレツトの上に注がれたのである。

一九〇八年、大統領ルーズベルトの任期がつき、タフトが代つて次期の大統領に選ばれたとき、もとより多くをタフトに期待したものはなかつた。しかしその人格は八面玲瓏、珠の如き温良な紳士であり、また黨内黨外に多くの敵なく、加ふるにその政治的手腕は未知數であつたので、或は大過なきを期待されたのである。しかるに、一たびかれがホワイト・ハウスの主人公となるや、まづ共和黨内の保守派金權派と握手したことは、進歩派を激怒せしめたのみならず、推薦者たるルーズベルトをすら、顯るしく失望せしめたのである。かれは大統領の椅子につきたる最初の日において、すでに全米國を率ふるに足らざるのみならず、共和黨をすら、統率し得ざる人物なることを曝露したのである。

しかもその後の執政は、ます／＼共和黨分裂の勢を助長した。第一、關税法改正問題において、黨内の進歩派は、完全に政府の反對黨と化し、第二に、トラスト問題において、民主黨に好個の攻擊材料を提供した。これが當時の『第三黨運動』の遠因である。しかしタフトに最後のとどめをさしたのは、一九一〇年秋の、州知事及び下院議員の改選であつて、この選擧戰において、共和黨の長き榮華の夢は、根柢から破り去られたのである。すなはち、この年の改選に當つては、マサチユセツト、コネテイカツト、ニウヨーク、インデイアナ、ニユジヤーシーなど、從來共和黨の本據と稱せられたる諸州において、民主黨をして、悉くその知事選擧に成功せしめたるのみならず、下院においては、共和黨の百六十三、社會黨の一に對して、民主黨は實に二百二十七の多數を獲得したのである。一葉落ちて天下の秋を知る。況んや、この形勢にして持續せば、二年後の大統領選擧は、まさに逆睹すべからざるものがある。何人か起つて共和黨の亂れたる足並を立てなほし、共和黨の頽勢を既倒に挽回するものぞ。

このとき、ラフオレツトは敢然として起つた。

四

それは十二年前の話である。

共和黨の進歩派が、自ら代表者を立てゝ、總選擧を爭はんとする形勢は、一九一一年の春から、すでに分明であつた。すなはち、四月のワシントンにおける進歩派協議會は、來るべき大統領

選擧において、タフトの再選を排する決議を發表した。たゞ何人をしてこの運動を率ひしむるかが、未知數であつたのみである。もとよりラフオレツトの名は、當時においてすでに最も有望な候補者ではあつたが、別にアイオワのカムミンスが、未だその態度を決せざるあり、さやうに最大の疑問人物として、オイスターベイに閑日月を送りつゝありしルーズベルトは、依然として形勢を觀望しつゝあつたので、何人もあへて形勢を逆睹するものはなかつたのである。

　かくの如く、二人の疑問人物が、事毎に躊躇逡巡して、つとめて態度を曖昧にしつゝあるとき、ひとりラフオレツトに至つては、最も公明正大な立場にあつた。かれが平常の激越なる論調は、米國政治の平和を害する危險なるデマゴーグとしてたゞ保守派金權派の嫌厭の的となつてゐたのみならず、進步派の同志の間においてさへ、その圭角多き人物が、果して大統領候補として、國民の輿望を負ふに適するや否やを疑ふものが多かつたのであるが、それはかれの意とするところではなかつた。ラフオレツトは、かれの選擧委員長ハウザーの名によつて召集したる進步派の國民大會において、公然と候補の承認をうけ、その十月十六日のシカゴ大會において、かれはつひにルビコンを渡つたのである。

　ラフオレツトの運動は、熱心そのものであつた。そしてその活動は、各地に豫想外の成功を收めた。かれの活躍は眞に天馬空を駈くるがごとく、一九一一年も暮に近きころに至つては、幾多の情報が、タフトの勢力の、全國、殊に西部において全く失墜しつくし、進步派の人氣の、豫想以上の速度をもつて、增大しつゝあることを傳へつゝあつたのである。而して、この情報を、オイスターベーに手にせるルーズベルトこそ、密かに快心の笑をもらしたるものであつた。

　ルーズベルトの策戰は、まづラフオレツトをして進步主義運動の烽火をあげしめ、それが一定の階段に達せるとき、機に乘じてかれと妥協し、その勢力と地盤とを、全部引き受けやうとするにあつた。すなはち、一九〇八年、すでに「予は三たび大統領たるの意志なし」と宣言し、さらにラフオレツトの蹶起するや、極力これを援助すべく誓言したるかれは、ラフオレツトの成功を見るや、人を通じて、ラフオレツトに地盤の讓渡しを申し込んだのである。しかるに、意外にも、ラフオレツトは、この申出に激怒した。

「予は主義のために戰ふもので、ルーズベルトの傀儡ではない。ルーズベルトそも何者ぞ。かれは進步主義の假面を被れる金權派の犬ではないか。かれはトラストを攻擊しつゝ、却つてトラ

ストを保護したではないか。現在かれの背後にあつて、盛にかれを援助しつゝあるものは、ウオール街の金權黨ではないか。」

ルーズベルトの第一策戰は、ラフオレツトの一喝によつて破れた。こゝにルーズベルトは、第二の策戰に入らざるを得ず、すなはち、自ら起つてラフオレツトの地盤を奪ふことである。

ルーズベルトが、いよ〳〵立候補の宣言を發したのは、一九一二年二月二十六日のことである。しかも、かれが一たび立ち上るや、全國は忽ちにしてかれの下に風靡したのである。何といつても、國家的英雄としては、ルーズベルトは、當時の第一人者であつた。進步派の謀將連が、續々とかれの下に走り去つたのみでなく、ラフオレツトの苦心して集めた人氣も、悉くかれのために奪はれた。而して、ラフオレツトは僅かにウイスコンシン一州を守つて、孤城落日を觀るに至つたのである。「ルーズベルトは、はじめ、「貴君にして失敗せば、予これに代つて立ち、大いに進步主義のために戰ふべし」と、さも好意を有するものの如くに語つたが、その實かれは、予の失敗を待たず、却つて予の成功を見て立ち、予の成功の大部分を、奪ひ去つたのである」とは、ラフオレツトが、後に至つて、その回想錄中に記すところである。

その後の形勢は、世人の詳しく記憶するところである。ルーズベルトは、タフトと共和黨の候補指名を爭ひ、しかも僅かにして破れた。一たび破るゝや、かれは直ちに豫定の方針により、自ら「國民進步黨」を建て、民主共和兩黨の間に、選擧を爭つたのである。そしてその結果は、共和黨の投票を、完全に分裂せしむるに終つた。すなはち、兄弟の門內に爭へるとき民主黨のウイルソンは、漁夫の利を占めたる絕對多數をもつて、大統領の榮冠をいたゞくに至つたのである。

五

しからば、本年の大統領の選擧は、果して、一九一二年のそれを再現するであらうか。

一九一二年のタフトに對して、本年の共和黨大統領は、カルヴイン・クーリッヂである。現在の大統領もまた、その政治家としての資格について、種々の疑問をもたれてゐるが、それはしばらく問題外として、その公正なる性格は、タフトの圓滿なる人格と對比さるべきものであり、政治家としてよりも、むしろ事務家として推奬さるべき人物である點において、兩者はたしかに共通點を有する。しかも、兩者とも、共和黨內における保守派と進步派との中間にあつて、よく兩者の妥協と黨內の統一を計るべきことを期待されたるにも拘らず、兩者とも、次第により右

力なる保守派に傾き、ために進步派の怨を招きたることが、類似の第一點である。すなはち、すべての點を除外しても、大統領が、共和黨を統率する力に欠けたることは、蔽ふべからざる事實である。一九二三年度における大統領の行動は、或は失敗でもあり成功でもあらうが、政府が、與黨內部にある進步派の反抗のために、異常なる困難に陷りたるの事實は、財政法案についても、ボーナス問題についても、行政整理についても、關稅問題についても、事每に現はれつゝあるのであつて、これクーリッヂの政治的弱點であるといはねばならぬ。そして同時にまた共和黨の弱點でもある。

かくの如く、クーリッヂが、與黨の進步派を制御する力なき如く、またかれが、保守派をも統率するに無力なることは、一九二三年の議會において曝露された。殊に保守派の頭目ロッヂの、ボーナス問題、パアサム法案、世界裁判所、排日法などに關する橫暴な態度は、世人をして保守派に惡感を生ぜしめたばかりでなく、またクーリッヂの鼎の輕重を問はしめたものである。大統領が、必しも金權派保守派の代表者でないことは、これを認めるとしても、もし保守派の命令の前に無力であるならば、何の異るところがあらう。「大統領クーリッヂの統率力は零である」といふ、ニウヨーク・イヴニング・ウォードの制定は酷評であるとしても、「共和黨は、二者その一を選んでこれに從はねばならぬ。——議會に反して大統領につくか、大統領に反して議會につくか」（ニウス・プレス）といふ煩悶は、依然として共和黨內にあつたのである。

「カルヴイン・クーリッヂは、全國の瞭解するところによれば、小都會の政治家であり、『メーン街』の生產物であつて、米國中流階級の、すべての狹量と偏見とを共有する。かれはルーズベルトでもウイルソンでもなく、第二のルザフォード・ヘーズである。かれは石油疑獄とドハテイ問題を處理するにあたり、勇氣の德の欠如せることを曝露した。しかもまた饒舌の人としても失敗である。彼れの論風は單調であり、論旨もすこぶる平板的だ。共和黨が、かれを『偉大なる大統領』と稱する如き、全國をして嘲笑せしむるにすぎぬ。大統領は『大實業家』や『大銀行家』の間に伍して、かれ等よりさらに偉大となりうるものである。しかるにかれは、人民の間にあつて、かれの政黨よりも弱力なのである。」（ブルックリン・シテズン）

六

クーリッヂが、租稅改革及びボーナス問題について提出した議案は、共和黨の容るゝところとならず、「かれが單なる傀儡に

すぎぬ」ことは、明かとなつた。そこに突發したのが石油疑獄である。『公正』をもつて鳴る大統領が、全人民の前において、全人民を代表して、この事件を『公正に』處理すべきことは、國民當然の期待であつた。人民が大統領の公明たる聲明を望んだばかりでなく、大統領もまた、斷乎たる聲明を、發するつもりであつたといふ。しかるに、或る一夜、上院における有力者が、かれに少しの壓迫を加へただけで、「一言もホワイトハウスからは聞かれなかつた」のである。

共和黨が、クーリッヂを推す所以は、かれの偉大なる人格にあらず、またその政治的手腕にもあらず、もつて進歩派の叛逆を壓制して、ラフオレツトの第三黨運動を、阻止せんとするのにあつた。しかもかれが、この點においても、明らかに失敗したことは、何よりも、ラフオレットの第三黨組織によつて、明白にされたのである。

「クーリッヂ氏が、いかに進歩主義の假面をかむつても、それは駄目だ。金融閥、いかなる魔術使と雖も、勞働者や西部農民に對して、かれを進歩主義らしく見せることはできない。……進歩主義とのすべての關係を絶ち、外面上共和黨の歴史とのすべての關係を絶ちたるクーリッヂは、而してかれ自身の保守主義によつて固つてるクーリッヂは、たゞ共和黨なる全國的組織によつて勝利をかちえんとするのである。……クーリッヂ氏は、完全に『大實業』の見解を反映する。かれは急進派にヂヤれつくものでもなければ、また保守派と軌道を共にするものでもない。ルーズベルトに提唱されて以來、『大實業』が、これほどに徹底的に滿足たる候補を有したることはない。……從つて本年の戰においては、一方斷然たる大保守主義のカルヴイン・クーリッヂあり、他方斷然たる進歩主義の西部急進ロバアト・ラフオレットがある。この二つの極端は、いまや明らかになつた。『大實業』がその候補者を出すなら、叛せる農夫もまた、その候補者を立てねばならぬ。」(ニューヨーク・ウオルド)

七

はじめ共和黨には、クーリッヂのほかに、二人の有力な候補者があつた。一は多年保守派の頭目として、黨のために盡瘁し來りしロッヂであり、他は進歩派の實際的指導者ラフオレットである。しかしラフオレットの進歩派は、飽くまで黨内の叛逆者である。或はラフオレットによつて、西部、北西部の小數投票を集めることはできるかも知れない。しかし共和黨成立以來の地盤たる、東部と北部とは敵の鉄腕にまかせねばならぬ。賢明なる策士が、その點に出すべしとは考へられない。

しからば翻つてロッヂはいかに。これもまた駄目である。かれが保守派の公然たる頭目たる地位は、陰然たる代辯者としてのクーリッヂより、候補者としては、はるかに劣るものといはねばならぬ。共和黨は、一九一二年の苦い經驗を有する。狩獵い分裂は共和黨の致命傷である。もし選擧に成功を收めんと欲するならば、どうしても二兎を追はねばならぬ。そしてその獵師は、少くとも表面上において、中立を標榜するクーリッヂではないか。

その上クーリッヂには、次の如き得點がある。

一、かれの私的生活の純潔なること。

二、國民は、少くとも、その行政的手腕に信頼してゐる。

三、かれには個人的偏頗心がなく、國家に對する義務をもつて、最高の道德と心得てゐる。

四、その穩健な政治は、樂天的なる一般の人氣に投じてゐる。

ニウヨーク・タイムスに從へば、かれには、「演説をなす大膽と天稟とが欠けており」、また「華美な人氣取りの資質もないが、」たゞ一點において、國民の興望を擔ふに足るものがある。「唯一つことゝは、かれが非常な勉强家であるといふことである。或る仕事にぶつつかると、すぐそれに徹底しやうと努力する。毎日日々、夏の暑さも冬の寒さも厭はず、ワシントン以外からの招待はすべて斷はつてまで、自分の役目たる仕事に集中してゐるといふこと、その精神が、國家の仕事をもつて、かれの第一の專心となし、また最大の熱意となせる人のそれであるといふことを、國民が知つてゐるからである。

「かれが演説を好まぬごとく、同時に、その決斷において、冷靜であり、質實であり、控え目であり、注意深くあり、周到であるといふことは、その見解の廣さに欠けてゐるためではないし、また現在の國家的必要を充分に研究してないためでもない。或は熟慮の結果到達したる確信を、公言し支持する勇氣に欠けたるためでもない。クーリッヂにおいて、群衆の熱情を刺戟するに適する如き大統領を望むことはできないが、頭の穩健な市民の確信を得るには、最も適當なる人物である。」

ギルバート氏は曰く。

「假りにかれは、將來のために建設するの精力と想像力とに欠けてゐるとしても、かれには、今日の仕事を爲し遂ぐるに足る偉大な技能がある。……かれこそは、痩せた土壤を耕して、やつと生活を糊するところの、かのウエルモントの農夫の如くに、努働するものである。大統領の仕事は、實際痩せた土壤である。クーリッヂ氏はその土から、良い收穫を擧げつゝある。」

「商業上の文句でいへば」と、パブリック・レッヂヤーはいふ。「クーリッヂ商店の商品は、ショー・ウインドウにこそ並んでゐないが、その倉庫には、全國の需要を充すに充分な持荷が、しまつてあるといふことを、全國は發見したのである！」

この意味において、現大統領クーリッヂを先登に立てゝ爭ふことが、共和黨としては、最も策の得たものであつたにちがひない。尤も、ニユヨーク、ウオードのやうに、「盲目の王國では、片目が王様に選擧される」といふのは、少々酷評であらうが、クーリッヂが、その幾多の欠點をもつてして、しかも、最も適當な候補者であつたことは、爭はれぬ事實である。從つて、一たび共和黨大會が、クリーヴランドに開かるゝや、かれは壓倒的多數で候補に指名され、一たび候補に決するや、遞信長官ニウは叫んだのである。

「クーリッヂが即ち共和黨の政綱である！」

八

共和黨のクーリッヂに對して、民主黨は何人を立てて、選擧を爭はんとするか。一はウイルソンの女婿として、辣腕の聞え高きマッカドウであり、他はタマニー・ホールの推すスミスである。他の候補者は、大會における指名戰において、二雄の決戰の歸趨を觀、ダーク・ホースとして出現するより他なき、弱勢の徒であつた。殊にアルフレッド・スミスは、その人物において、その經歷において、「今日の公的生活における最も有爲なる人物」（アッシュヴイエ・タイムス）として、最も囑目されたる候補者であつた。

「アルフレッド・スミスは、非常な人物である。かれは好意を吸收し、そして好意を放射する。かれの隠すところなき力强く正直なる意見。人望のために妥協せざること。選擧戰において提唱せる政策を、官職につきたるとき、つねに忠實に實行せんと努力せること。國家の仕事について、最も複雜で曖昧な細目まで、多年の經驗により練達せること。公の問題については、つねに長計を立てて、永久的利益なりと信ずるところは、飽くまでこれを遂行しつゝあること。その手腕と果斷と勇氣とについて、一般の信望を有すること。政治的競爭者ですら、かれを尊敬しまた畏敬させること。それに加ふるに、かれは言ふに言はれぬ愛嬌があつて、人格の精力的で積極的なことと、その事業の堅實なことは選擧戰において、非常な强味となるのである。……勝つても負けても、とにかくかれは、候補者としては一流の人物であり、共和黨にしても民主黨にしても、もつて紐育の誇となすに足る人物である」（ニユヨーク・タイムス）

おそらくは恐らく、たゞかれの唯一の欠點は、その後援者だ、タマニー・ホールのボス團であるといふことである。ボルティモア・サンによれば、かれが「タマニーの人間であつて、同時に「進步的民主黨」だといふ、一つのパラドックス」に陷れることである。

「かれが特に魅惑的なる自助的人格であるといふ事實は、民主黨大統領候補として、一つの衝動と色彩を與へ、或は奇蹟の如くに、かれを團繞するすべての政治的タブーを洗ひ去るかも知れない。しかし紐育州知事スミスの友人達は、これらのタブーの存在を、あまりに低く評價してはならない」と、ボルティモア・サンは言ふ。しからば、政治的タブーとは何であるか。實にかれがタマニー・ホールの人であるといふ事實である。

すなはち、スミスについて、問題となるのは、かれが禁酒法に反對であるといふことと、タマニーの人間だといふことである。これがかれの政治的長點であることは、言ふまでもない。しかし同時に、西部と南部とには、禁酒法反對者に對する偏見が盛であり、さらにタマニー反對の感情は、より全國的に旺盛であるといふことは、さらに忘るべからざる事實である。従つて、三分の二の多數を要することになつてゐる民主黨大會において、果してスミスが候補者として指名されるか否かについては、すでに多大の疑がもたれたのである。

ここにスミスにとつては、致命的な事件が起つた。それはタマニー・ホールのボスの親方、マアフイが、民主黨大會を數週の前に控えて、突然に死んでしまつたことである。

九

ボスの親方マアフイが、民主黨大會を目睫のうちに控えて、突然長逝したことは、「タマニーが、こんどこそは、いよ〳〵その代表者を大統領候補として指名させて見せると、大いに意氣ごんでゐた。その最大の野心を實現すべき曉において、その機を失つたものである。」そして同時に、それはスミスにとつても、また大打擊であつた。「ニウヨーク州は、アル・スミスのために、九十票を投ずる！」といふマアフイの宣言が、いかなる效果を民主黨大會に與へたか、それは姑くおくとしても、スミスとしては、實際片腕をもがれた以上に感じたにちがいない。或はボルティモア・サンや、トロイ・レコードのやうに、マアフイの死は、却つてスミスに好結果を與へるであらうと豫想した新聞もあつたが、マアフイの死は、決してスミスがタマニイ出身だといふ事實を、拭ひ去るものではない、その汚名はかれに終始つきまとう。しかもかれは、事實において、有力なる支持

者を失つたのである。

「州知事スミスが指名さるゝといふことは、たとへマアフイが大會を指導するとしても、とてもできさうにはなかつた。しかしマアフイが死によつて除かれたことは、スミスの運命をして、これから消々と非運に向はせるであらう。」（トペカ・キヤピタル）

とかく言ふうちに、民主黨大會は來た。豫想の如くに、マッカドウとスミスとは、二大競爭者として、指名を爭つた。しかしいづれも、三分の二の多數を制することはできなかつた。投票を重ぬるに從つて、二人の互角の勢は、いよ／＼明かとなつた。「だれか、ダークホースをさがさねば、解決はできない」その考へが民主黨大會を支配するに至つた。

そこに突然デーヴイスがあらはれた。そのときまで、誰もデーヴイスの名を知るものはなかつた。しかも一たび現はるゝやかれは消々として地歩を占め、そしてかれは、選擧人たちの啞然たるうちに、つひに大統領候補者として指名されたのである。

再びいふ。デーヴイスが候補者に指名される最後の一秒まで、かれの名を知る人は少なかつた。デーヴイスとは何人であるか。これ、民主黨と共和黨と、そして全國の人民が、齊しく知らんと欲したるところである。かれは果して第二のウイルソンであるか？　一九一二年、タフトとルーズベルトとの間に伍して、ウイルソンが奇勝を制したるごとくに、クーリッヂとラフオレツトの爭を利して、漁夫の利を占めることができるか？　デーヴイスとはそも／＼何人であるか。

一〇

デーヴイスが民主黨の候補に指名されたとき、或る皮肉な記者は言つた。

「また一人クーリッヂがとび出したぜ」

デーヴイスの舊師、モアランド教授の言は、最もよくかれの性格を物語るものである。

「ジョン・デーヴイスは、單に普通の青年であつた。かれは、一たえず、同級生間に紛擾をつくり、刺戟を與へるといふでもなければ、他の儀表として、級內に雄視するほどの、異常な勉强家でもなかつた。」

かれは、要するに『紳士』である。平凡なる紳士にして、また好運なる紳士である。

この好運なる紳士は、一八七三年、四月十三日、ウエスト・ヴアージニアのクラアクスバアグに生れた。十九のとき大學を卒業するや、下院議員にして辯護士たる父の下にて、直ちに辯

議士生活に入り、一八九九年六月には、州の下院議員に選ばれた。それから、聯邦の下院議員となり、ウイルソンに拾ひ上げられて、大訟師となり、その政治的地位は、順調に向上はしたが、いづれにあつても、決して頭角をあらはすことはなかつた。かれは徹頭徹尾『平凡なる紳士』であつた。

かれが始めて全國的な人物になつたのは、ウイルソンによつて、駐英大使に任命されたときである。ワシントンの消息通によれば、聖ゼームス宮に送れる米國大使中、最も華々しき成功を收めたりと稱せらるゝペーヂの後任に、何人を選ぶべきといふことは、實際當時の難問であつた。その日も、ウイルソンとランシングの二人は、例の通り額を集めて、例の通り相談をやつてゐた。このとき「デーヴイスでは如何なものでせう」と、おそる〳〵申出たのが、國務省の一秘書官であつたといふことである。デーヴイスが任命されたことは、もとより政治家の驚異であつたが、その驚きは、とんでもない人間が駐英大使になつたといふよりも、どこの馬の骨ともわからぬ奴が、　あんな重任に就いたといふ驚きであつた。しかし今日デーヴイスが、民主黨の大統領候補として、ともかく指名さるゝに至つたのは、一九二一年まで、まる三年を、駐英大使として、無事に勤め上げたおかげである。

由來、米國の大統領の候補者としては、無能な人間が最も適當である。何者かを代表し、何事かをなせる人間は、それだけ敵があり、それだけ投票數を減殺する。共和黨にしろ民主黨にしろ、政黨の投票數はすでに確定してゐるのである。それほど米國の選擧制度は完備してゐる、從つて、要はその投票數を減ぜざらんことだ。この點において、わが『單に平凡なる紳士』は最も適當な候補者であるかも知れぬ。唯一の缺點は、かれがフランシス・ラインド・ステツツオンの顧問辯護士であるといふことにすぎない。

「モルガンの辯護士を、合衆國の大統領に指名するなんて、もつての他だ！」と老ブライアンは言つた。この點において、デーヴイスは、クーリツヂと同樣に、ウオール街の『大實業』を代表するものとして、民衆に了解されてゐるのである。『辯護士といふ職業は、公平にして神聖なる職業であるから、かつて社會主義者デブスの辯護に成功せる如く、またモルガンの辯護士たること、何ぞそれ妨げんや」と、デーヴイス自身は辯解してゐるけれども、それは理窟であつて、かれの金權的代辯者たる汚名は、少くとも選擧戰中は、拭はれないであらう。

そこに第三黨たるラフオレツトの、乘ずべき間隙がある。

二

ラフオレツトの第三黨出現の政治的意義は、舊二大政黨が、老大化したことにある。すなはち、共和黨と民主黨とは、別に爭ふべき政綱の差あるにあらず、たゞ建國以來の傳統と、惰勢と、そして名目とによつて、選擧權をごまかし去らんとしつゝあるのである。從つて選擧と政治とを『合理化』せんと欲するならば、將來の老大政黨に對抗する第三黨が、對抗的なる政綱を提げて、これに戰を挑むよりほかない。

尤も、民主黨と共和黨とに、表面上、政綱の差なしといふことはできない。例へばが、外交政策である。民主黨が、依然として、國際聯盟加入を提唱し、米國の國際的孤立を攻擊するに對し、共和黨は世界裁判所案をもつてこれを反駁し、ドーズの歐洲恢復案の成功を、誇大に廣告しつゝあるのである。しかもこれ事實においては、手段と時期の問題にすぎないではないか、所得稅改正法にしても、政府の提出したメロン案と、議會の通過したシモンズ・ロングウオース案との間に、何の相異があるか。たゞ共和黨は、稍々資本家に好意を表するに對して、民主黨は、稍々民衆的なりといふに止まり、本質において、なん等の差異があるのではない。その他鐵道運賃、農村振興、移民法、宗教自由、フイリツピン獨立など、政治問題は多いけれど、老大政黨が、互に五十步百步の政綱をかゝげて、あたりのいゝことを言つてる點では、すべて同樣である。

そこで、民主黨は、何によつて選擧を爭ふのかといふと、例の『石油疑獄』である。こんどの選擧戰は、つねに民主黨が攻勢に出て、共和黨が守勢の地位にあるといはれてゐるが、その所以は、この問題があるからである。もとより、國務大臣が、國家の資源を、恣に實業家に讓渡して、私利を營むだといふことは、實に政界の醜惡事であり、民主黨がこれを糾彈するのは、もつとも千萬な話であるが、大統領の選擧を、この問題によつて爭ひ、もつて政權の餌としやうとするのは、大政黨の態度でないばかりでなく、いかに戰ふべき政綱が、二大政黨に缺けてゐるかといふ事實を、如實に物語るものである。

民主黨が、石油疑獄の一本槍で、共和黨の壘に迫るに對して、共和黨は「經濟」なる大旗を一枚看板にして、天下に呼號しつゝある。「私は經濟に贊成する」と、クーリツヂは宣言した。「そしてその次には、より以上の經濟に贊成する。このときに當り、現在の事態の下にあつては、これこそ國民のすべてに奉仕する途であるといふのが、私の觀念である」

國家の繁榮の基礎が、經濟的繁榮にあり、經濟的繁榮が、人

民の繁榮であることは、民主黨と雖も、それが社會主義化せざる限り、否定し得ざる事實であつて、また『社會主義』といふ名は、共和黨の極度にこれを嫌厭するが如く、民主黨のつとめて回避せんと欲する名稱である。從つて、この點において、民主黨と共和黨との差は、經濟的繁榮の利得の二割を、社會政策的に用ふるか、それを三割に增額するかといふことにすぎない。

この點においても、第三黨成立の可能性はある。

三

かういふ形勢であり、また前にも述べた通り、政黨內のすべての投票者を滿足さすやうな、適當な候補者を得ることは、結局において不可能であるから、各政黨は、大統領候補者の缺點を補ふものとして、いづれも副大統領の候補者に苦心した。由來、米國の政治組織としては、副大統領といふのは、全くの空位であり、從つて副大統領候補には、町會議員で澤山だとさへ言はれてゐたのであるが、こんどの選擧では、さうは行かない。

共和黨の副大統領候補者は、近頃メツキリ男を上げたドーズである。ドーズは一八六五年八月二十七日、オハイヨ州マリエツタの生れで、技術屋であり同時に法律家である。マリエツタ大學で工學を學んで、十九のとき卒業して以來、叔父の工場で仕事をし、またシンシナテイ法律學校で、法律をも學んだ。かれが有名になつた始めは、一八九四年に、『合衆國の銀行制度』といふ書物を著はしたことで、この書はいまに一のオーソリテイとされてゐるが、それがかれの專門ちがひであることはいふまでもない。

しかしその後のかれの立身は、全く專門ちがひの方向へ進行した。まづ瓦斯會社の社長となつたかれは、一九〇二年には、イリノイ州トラスト會社を設立し、漸く實業界にその名を知られた。かれが一九一七年から一九一九年の間において、一般購買事務局長として、アメリカ軍に對する物資の供給を掌つたのは、その經驗によるものであり、一九二一年から一九二二年の間に、豫算局長官として、その辣腕を揮つたのも、かれの並々ならぬ事務的才能をあらはすものである。

かれは二つのドーズ案の作者として有名である。すなはち、一は米國豫算編成上におけるドーズ案であり、他は歐洲恢復に關するドーズ案である、一は行政事務の整理を敢行して、米國の豫算を非常に經濟化し、他は賠償問題の骨子として、倫敦會議により、歐洲の經濟恢復を進行せしめつゝある。いづれもこれ『經濟』である。エコノミー一點張りで行かうとする共和黨

が、ドーズを副大統領に選んだのは、適當な戰略であるといはねばならぬ。たゞ『經濟』といふ言葉が、あまりに資本的であり、ドーズがあまりにクーリッヂ的色彩に富める點が、積極的には利益であつても、消極的に、進歩派の引留策としては、いかゞと思はれる點が、疑問として殘るだけである。

一三

民主黨は、副大統領の指名において、共和黨と全然反對な戰法に出た。すなはち、共和黨が、ドーズによつて、クーリッヂの長所を、さらに强化せんとしたに對し、民主黨は、副大統領によつて、デーヴィスの弱點を、帳消しにせんとしたのである。

デーヴィスは、前にも述べた通りに、民主黨の長老ブライアンから、猛烈な反對をうけた。若しブライアンに背かれることになると、民主黨としては、大打擊である。そこで、策士連の反間苦肉の策は、副大統領として、老ブライアンの弟、チャールス・ブライアンを指名することであつた。

弟ブライアンを副大統領に指名することは、民主黨に二つの利益をもたらす。一つは兄ブライアンを完全に黨の私有とすることで、二つには、民主黨内の進歩主義者を、滿足さすことである。

尤も、兄ブライアンが辯解するところによれば、かれが前の態度をあらためて、デーヴィスを助けるに至つたのは、必らずしも、自分の弟が副大統領に指名されたからではない。「わたくしがデーヴィス氏の指名に反對したのは、いつも說明してゐたやうに、個人的の反對ではない。わたくしは、はじめから、人間としてのかれに對しては、最高の評價をなしており、かれが特別に能力ある人間であるといふことも認めてゐた。わたくしは、國家問題についての、かれの個人としての態度を問題としたことはない。唯一の反對は、かれが職業上、大會社と關係あることが、民衆に誤解を生ぜしめ、その誤解は甚だ解きにくいといふ點であつたのである。それで、かれが指名されるとすぐ、わたくしは、かれを援助するといふ意志を發表した。……デーヴィス氏が指名さるゝや否や、わたくしは、ウエスト・ヴアージニアの代表者に對して、デーヴィス氏の選ぶ副大統領は、だれであらうと援助すると告げたのである。」弟のブライアンの指名が、兄ブライアン豹變の原因であつたか否か。それは姑くおくも、とにかく老ブライアンの態度は、民主黨の利益に決定した。

次に民主黨内の進歩派であるが、これもブライアンの指名

に、全く滿足した、尤も弟ブライアンが、兄と同一の性格者であるか否かについては、多くの疑がある。兄が詩人肌の想像力にたけたる熱情家であるに對して、弟は理論に長ずる計算家だ。かれが好んでかむる大黒頭巾も、かれの語るが如く、「これは伊達でも、しやれでもない。一つの必要なのだ。數年前、わたくしの事務所で、日光が頭の頂邊の神經に、影響するといふことを發見した。そして眼が非常に痛み、またひどく頭痛するのである。それ以來、自然光線でも人工光線でも、とにかく光線といふものは、わたくしに有害であるといふので、帽子を脱ぐ必要のあるときは、いつでも大黒帽子をかむることにしたのである。」大黒帽子にすら、理屈と計算をつけるかれは、とうてい兄の如き放浪詩人ではない。

しかし、ブライアンの名は、直ちに老ブライアンを聯想せしめる。これが進歩派をして滿足せしめる所以である。加ふるに、かれは西部の出身だ。稍もすれば、ラフオレットに奪はれんとする西部農民の投票を、かれは幾分か奪還するであらう。ことに、かれは、二十九歳のとき以來、兄の選擧事務長として、政治に干與し、ネブラスカ州知事として、相當の令名を博してゐる。おそらく、民主黨としては、これ以上の好適副大統領候補を探しだすことは、困難であつたらう。然り、たゞ一人を除けば。

一四

その一人は、ホヰーラーである。民主黨の副大統領候補として、最初から意中にあつたのは、上院議員ホヰーラーであつた。しかるにかれは、民主黨の候補たることを斷つて、第三黨に走つた。

「わたくしは民主黨員である。しかしウオール街の民主黨員ではない！」

第三黨が、モンタナ州の民主黨主領を、副大統領候補として得たことは、その努力を異常の高さにまで上げる所以である。かくして、第三黨は、ひとり共和黨內の進步派を代表するのみでなく、實に民主黨內の進步派をも、代表することになつた。いまや第三黨は、殆んど完全に『進步黨』となつたのである。

第三黨の成功のために、いかに民主黨進步派の援助が必要であるかといふことは、四年前におけるモンタナ州の選擧戰が訓へてゐる。このとき、農民勞働黨と非黨派聯盟とが、ラフオレットの主唱する主義に從つて同盟したのであるが、そのためには、是非とも民主黨內の進步派を、抱きこむことが必要であつた。このときモンタナ州の民主黨進步派は、保守的民主黨を去

つて、進歩運動に加盟した。「上院議員ホキーラーは、この加盟の張本人の一人であつて、一九二二年、上院議員に選出されたのは、このときの盡力に報ゆるためであつたのである。だから、名目上は民主黨であるけれども、實際はラフオレツト主義の代表者なのである」と、プロヴイデンス・ジヤーナルは言つてゐる。

ラフオレツトの叛逆に、雀躍りして喜んだのが、民主黨であつた如く、ホキーラーの出奔を、拍手して野次つたのは、共和黨であつた。「大統領選擧にあたつて、ホキーラーが出奔したので、民主黨の幹部が、啞然たるも無理はない。かれはラフオレツトの陣に、モンタナの民主黨の一部を土産としてもつて行くだらうから、この州における共和黨の捷利は確實となつた。それだけではない。この實例に勇氣づけられた、他の民主黨内の急進者は、きつとかれの足跡について行くものといはねばならぬ。特に、現在問題となつてゐる、中西部と北西部とは、どうもモンタナの二の舞らしい。」

ラフオレツトが共和黨を二分せしめ、ホキーラーが民主黨を二分せしめる。これを總計すれば、第三黨は、共和黨と民主黨とに對する、共同の脅威である。もとより第三黨に、絶對多數の得票が集るであらうと、豫想することは不可能だ。しかし、第三黨の出現が、二大政黨に恐慌を來さしめ、その向背如何によつて、米國政界の歸趨が定まるであらうことは、次第に明白な事實となつた。第三黨こそ米國現下の政治的中心である。

しからば、第三黨は、何によつて立つか。

一五

第三黨とは、金權萬能に對する叛逆者の集合である。ラフオレツトの一生が、金權に對する反抗に終始したる如く、第三黨もまた、二大政黨内部の金權派を、脅威する進歩運動である。

「ラフオレツト黨は、憎しみによつて結合される。勞働方面は、資本と聯邦裁判所を憎み、その社會主義者は賃銀制度を憎み、農夫は鐵道と銀行を憎み、鐵道友愛會は鐵道會社を憎む。そして當のラフオレツト氏は、共和黨を憎んで、つひに公式に脱黨したのである。」（シヤトル・タイムス）

第三黨の政綱は、次の要項を見てもわかる如く、恐く反金權的である。

一、少年勞働法改正案を、直ちに裁可し、產業上、少年を保護すべき聯邦法を發布すべきこと。

二、法律上、婦人に對する差別待遇を撤廢すること。

三、すべて聯邦裁判官は選擧することとし、勞働爭議に對す

る干渉を停止すること。

四、肉類罐詰業を、國家が監理すること。

五、エッシュ・カミンス法を廢すること。

六、鐵道を國有とし、民主的管理によつて、これを經營すること。

七、全國の水力を國有公有となし、國家的配電制度を敷くこと。

八、すべての資源を永久的に保存すること。

九、不況時代には、公益事業を起すこと。

一〇、政府が販賣機關を興して、農業生産者より、都市消費者への直接通路を開くこと。

一一、中央政府の力をもつて、私有獨占業を粉碎すること。

一二、不當利得に對する超過稅制を起し、超過所得稅、株式配當稅、積立金稅などを復活し、財產稅、相續稅には急激なる累進法を執り、且つ國稅を廢止すること。

一三、聯邦準備銀行と聯邦農業貸出制度を改造して、國家の富と信用とを、人民をして管理せしめ、すべての人が、公平なる條件にて、融通をうくるやうにすること。

一四、農夫及び工業勞働者に對して、團結權及び集合契約の權利を認むべき、適當なる法律を發布すること。

一五、財政的帝國主義者と、石油獨占者と、國際的銀行業者との勢力を、外交政策より驅除すること。

かくの如く、第三黨が、進步主義者を中心とするといふ條、その投票の基礎が、勞働者と農民とにあることは、政綱を見ても明らかであらう。

ところが、ラフオレットにとつては、とんでもないことが起つた。それは「雨」である

一六

今年は、例年にない雨で、その雨のおかげで、大分農作物がいたんだ。そこで、農產物の價段は、ラフオレットが立候補しかけたころから、だん〳〵と上向きになつて來たのである。元來ラフオレットは、農產物安値のために困しめる農夫を、救濟すると稱して出馬したものであるから、若し農業が、ラフオレットをまたずして、天候のおかげで救濟されることになると、第三黨としては大打擊にちがひない。

これをも少し詳細にいふならば——

世界の小麥の作柄は、今年は比較的に惡い。カナダ政府の七月一日の調査によると、昨年の四億七千四百二十萬ブッセルに對して、今年は三億一千八百六十四萬ブッセルである。合衆國

でも、七月一日の調べが、七億四千萬ブッセルで、昨年に比し少くとも四千五百萬ブッセル減である。そこで、小麥の値段は、シカゴで、一弗三十仙に上つた。昨年の同期に比すれば、三十二仙高である。馬鈴薯もまた、ブッセル一弗三仙といふ、一九二〇年以來の高値を出してゐる。從つて、豚肉も罐詰も騰貴するといふ具合である。

ところが、農産物價格の騰貴は、畢竟不作のためであるから、差引勘定、農夫の困難は、依然として存續するわけであるが、こゝに皮肉なことには、「四年間に亘つて、破産の淵に沈淪せんとしてゝありし地方」(アイオン・トレード・レヴユー)――すなはち、第三黨の有望なる地盤たりし地方――では、却つて農産物の作柄が、例年よりはいゝのである。ミネソタ、ノースダコタ、サウスダコタ、モンタナの四州では、現在の値段と作柄が續く限り、昨年よりは、結局一億八千五百萬圓だけ增收される筈である。さらにカンサス・シテイに集る、カンサス、ネブラスカ、オクラホマ、コロラド四州の農産物は、昨年の一億六千百萬ブッセルに比して、二億四千三百萬ブッセルの收穫が豫想され、すなはち、八千六百萬ブッセルの增收がある上に、この値上りだものだから、結局昨年に比すれば、農夫の收入が二倍になる見込である。

事情實にかくの如し。蓋し投票は氣分のものである。事實經濟的壓迫で困しんでゐればこそ、ラフオレットの宣傳も、神の福音とこそ聞け、四年に亘る不況から、急に繁榮に解放されて、有頂天になつてゐる農民達が、力強いけれども悲觀的なラフオレットの聲に、いつまでも雷同するであらうか。喉元すぐれば暑さを忘る。或は「僞はれる豫言者の口に、泥をつめこむ」(イヴニング・ポスト)のやうなことが、ないとも限らない

この點について、フライデー博士は、興味ある觀察をしてゐる。

「一八九六年の選擧のとき、六月頃の形勢では、ブライアン氏が當選しさうな様子であつた。そのころ小麥の値段は一ブッセル五十六仙で、農民は危機に瀕してゐた。そしてかれ等は救を求めて政治に走つたのである。ところがその頃から、小麥の値段が上りはじめた。もとより政治とは無關係な理由で上りだしたのである。すなはち作が惡いから、需要供給の法則で、値段が上つたのだ。とにかく、選擧日までには、農民は小麥一ブッセルについて、一弗近い收入を得たのである。……わたくしは、小麥値段のおかげで、マッキンレー氏が當選したのだとは言はないが、しかしこの結果を生むについては、一つの重大な原因であつた。

「これと全く同じ事情が今日存在する。小麥の値段が安いので、農民は餘分の小麥をもつてゐながら、非常に困難してゐるのである。數千の農民はすでに破産狀態に陷つてる。そこで、かれ等は救を求めて、再び政治に走つたのである。

「ところが、今日また小麥値段が騰貴しつゝある。クリスマスまでに、ブツセル一弗五十仙まで行つても、あへて驚くには足りない。耕作反別の縮小と、天候の不良とで、作柄はどこでも悪いのだ。この農産物騰貴の、大統領戰に對する影響は、注目すべきものがあらう。なぜなら、農民の不平が、ラフオレツト運動の背骨であるから。」

一七

最も頼みとせる農民方面について、意外の打撃を蒙れる第三黨は、勞働方面においても、多少の損害がないでもない。すなはち、米國勞働總同盟内にあつて、多年インダストリアル・ユニオニズムの驍將として名あるフオスターが、自ら「勞働黨大統領候補」と稱して、選擧界に名のりを上げたことである。しかしこの損害は、あまり大くを見積る必要はない。なぜなら、勞働黨なるものが、米國人（勞働者をも含めて）の一般に嫌厭する社會主義黨であつて、ソヴイエツト露西亞駐米大使といはるゝフオスターを目して、『赤色』大統領となしてゐるばかりでなく、フオスター黨そのものが、クリーヴランドにおける「全國農勞黨」大會の崩れの一部——左傾派——の、結合したものにすぎないからである。

詳しく言へば、全國農勞黨大會に面して、ラフオレツトとフオスターとの代表する、右翼と左翼との妥協案が、種々の策士の間にめぐらされたのであるが、事實において、形勢はラフオレツトに順調であつた。そこでフオスター派は、第一にクリーヴランド大會を不成立に終らしめ、（すなはち、農勞黨の成立を妨げ）次に自ら第四黨を立てたのである。

フオスター曰く、

「われ等は、多くの投票を集めんと欲するのではない。むしろ全國の勞働者をして、急進的第三黨の必要を自覺せしめ、ラフオレツトが、中流階級の代辯者にすぎざることを、曝露せんと念ずるのみである。」

一方において、ラフオレツトは、農民黨の援助を受けつゝあるのみでなく、他方において、クリーヴランド大會が不成立に終つた結果、勞働組合の大部分が、自由行動をとり得ることとなつたため、勞働組合員の援助は、却つて確實となつたのである。「かの大規模なる鐵道友愛會の幹部が、政黨的政治不干渉な

る傳統的政策をすてゝ、ラフォレットの立候補と、ラフォレットの政綱とを援助するため、積極的の盡力をなすといふことは、政治史上はじめてのことである。」(クリーヴランド・コムマアシャル・タイムス)

これを要するに、第三黨は、農民と勞働者との投票を根本とし、これに全國的なる進歩主義者の自由投票を加へて あなどり難き實力を示しつゝある。その後の社會的事情の變化は、不慮の損失を第三黨に與へぬとも限らず、或は却つて、思はざる利益をラフォレットに齎らさぬとも限らぬ。たゞ、ルーズベルトの進歩黨に比して、興味ある點は、第一に、かれの如く共和黨のみを二分せるにあらずして 民主黨の一角をも切り崩しえたことと、第二に、かれの如くに、自由投票のみを集めるのでなく、農民または勞働者といふ、確定的地盤を有することである。

それだけこの度の第三黨運動は、底力があるのみならず、それだけ政治的影響も大である。

一八

しからば、ラフォレットの第三黨は、どれだけの投票を集め、いかなる影響を米國の政治界に及ぼすであらうか。

「ラフォレット氏は、若しうまくゆけば、東部と中西部において、民主黨の勢力のうちに切りこみ 北部において 共和黨の勢力のうちに切り込むやうなことに、どうもなりさうである」と、ザ・ウォードは言ふ。

然り、『若し』である。何人も選擧戰を豫想 うるものはなく、またかゝる點について、豫言者たる危險を冒すことを、好むものはない。しかし『若し』が許さるゝならば、相當興味ある豫想ができぬでもない。

第一の『若し』は、ラフォレットの第三黨が、選擧戰において、豫想通りに、相當の投票をうることである。最も、米國の選擧法においては、大統領の選擧については、直接選擧でなしに、二重選擧法をとり、人民がまづ選擧人を選擧して、この選擧人がさらに大統領を選擧することになつてゐるから、問題は何票を得るかといふことではなくて、第三黨の選擧人を、何人うるかといふことである。ところが、選擧人の數が、各州下院上院議員數と同數で(下院議員數は人口に比例し、上院議員數は各州二名)あるのはいゝとして、この選擧人は、連記投票により、比例代表的ではないから、十人あれば十人までが、同じ政黨の選擧人が選ばれるわけである。換言すれば、選擧人を一人でも得やうと思へば、一州でもよいから、最高投票を得なくて

はならぬ。すなはち、問題は、第三黨は、はたして何州の州を支配しゝるかといふにある。

そこで、第三黨の、最も有望視されてゐる州の名を擧げてみると、

ウイスコンシン	一三
ミネソタ	一二
サウスダコタ	五
ノースダコタ	五
ネブラスカ	八
モンタナ	四
合　計	四七

すなはち、最も有望な選擧人票數でも、四十七である。或は十二十でとゞまるかも知れないが、また六十、七十には上らないだらうとは誰も斷言することはできない。そこで第二の「若し」である。

第二に、若し共和黨と民主黨との得票が、非常に接近してゐた場合には、第三黨の出現は、いづれの政黨にも、絶對多數を許さぬこととなる。これはまた、考へ得られぬ豫想ではない。なぜなら、この度びの選擧では、共和黨と民主黨との勢力は、ほゞ伯仲してゐると觀るのが穩當であり、しかも、第三黨は、兩黨を公平に、切り崩したのであるから、民主黨が多數となるにしても、共和黨の得票の方が多いにしても、第三黨に四五十票を奪はれたために、兩黨ともに、絶對多數を得られぬこととならないとも限らない。

さうなると、面白い結果が生ずる。

一九

なぜ面白い結果になるのかと疑ふ人は、一八〇四年九月二十五日に公布された、修正米國憲法第十二條を讀むがいゝ。

「大統領トシテノ最大ノ投票ヲ得タルモノヲ以テ大統領トス、但シ右ノ投票數ハ、任命サレタル選擧人數全部ノ絶對多數タルヲ要ス」

すなはち、大統領となるには、單なる多數では駄目で、選擧人の絶對多數を得なければならぬ。若し共和黨も民主黨も、絶對多數が得られぬといふことになると、大統領として選擧されるものがないといふことになる。そのときはどうなるか。修正憲法第十二條は續いて規定する。

「若シ右ノ絶對多數ヲ得タルモノナキトキハ、大統領トシテ投票サレタルモノノ氏名表ノナカニテ、最高投票ヲ得タルモノノ三名ニツキ、下院ハ直チニ、投票ヲ以ツテ、大統領ヲ選ブベシ」

すなはち、その場合には、選舉權は「選舉人」から「下院議員」にうつり、この度の場合でいへば、クーリッヂとデーヴィスとラフォレットとの三人が、決戰するわけである。しかるに、

「但シ大統領ヲ選ブニツイテハ、投票ハ州別トシ、各州ノ代表權ハ、各々一票トス、右ニツイテノ定足數ハ、三分ノ二ノ州ノ代議士ノ出席ヲ要シ、選舉ニツイテハ全部ノ州ノ絶對多數ヲ必要トス」

とあるから、共和黨か民主黨かが、二十四州以上を得なければ、下院においても、大統領は選舉されえないことになる。この場合、第三黨が、民主黨か共和黨か、いづれかに讓歩すれば、問題はない。しかしラフォレットが、どこまでも頑張るとなると、問題は厄介である。

「而シテ若シ下院ガ、選舉權ノ委託サレテアル期間内、即チ翌年三月四日マデノ間ニ、大統領ヲ選舉セザルトキハ、大統領ガ、死亡其ノ他ノ憲法上ノ不能力ニ陷リタル場合ト同樣ニ、副大統領代ツテ大統領トナルヘシ」

言葉をかへて言へば、翌三月四日まで下院は幾度も大統領を選舉することとなる。しかし期限が來たら、大統領はつひに選舉されないことになる。米國の政治史上において、第一次の選舉により、絶對多數を得るものがなく、下院に選舉權が移つたといふ例は、たゞの一度しかない。それは一八二四年の選舉で、ヂヤックソンが九十九票、それからアダムス、クロフォード、クレーの三人で、合計百六十二票を得たのである。しかしそのときは、下院において、ヂヤックソンの七票、クローフォードの四票、合計十一票に對し、アダムスが、十三票を得たからよかつた。このたびは、下院においては、ラフォレットの勢力が、選舉人會におけるより、ずつと大きくなる可能性がある

なぜなら、第三黨の地盤は、選舉人數の少ない小州に多いから、選舉人會で絶對多數が得られぬくらゐなら、下院においても、二大政黨ともに、絶對多數を得られさうもない。

さて、下院で大統領が選舉されぬとなると問題はますます厄介である。

二〇

選舉人會においても、下院においても、大統領を選舉しえざるときは、副大統領が代つて大統領となると言つたが、しからば副大統領は、いかにして選ばれるか。

「副大統領トシテノ最大ノ投票ヲ得タルモノヲ以テ副大統領トス。但シ右ノ投票數ハ、任命サレタル選舉人數全部ノ絶對多數

タルヲ要ス」

こゝまでは、大統領の選擧と同様であらう。

「若シ右ノ絶對多數ヲ得タルモノナキトキハ、其ノ名表中最高點者二名ニツキ、上院ガ副大統領ヲ選ブヘシ」

すなはち、副大統領選擧權は、上院にうつる。そして大統領の場合の如く、候補者は三名でなく二名である。從つて問題は簡單である。

「右ニツイテノ定足數ハ、上院議員全數ノ三分ノ二ニシテ、選擧ニツイテハ全數ノ絶對多數ノ必要トス」

具體的に言ふならば、共和黨のドーズと、民主黨のブライアンとの間に、副大統領が争はれることになるのである。この場合、候補者は最高點二名に限られてゐるから、決定はすこぶる容易である。そして、第三黨が、より進歩派に近いブライアンを選ぶことは、必然の形勢である。而して共和黨内の進步派は、現在において、上院のキャスティング・ヴォートを握つてゐるから、ブライアンが副大統領に、從つて大統領に選ばれるのは、既定の事實と言はねばならぬ。これわたくしが、本年の大統領選擧において、ブライアンの或は大統領たるべきことを、豫想したる所以である。

しかし、第三黨運動の、政治上最も重要な點は、大統領選擧にあらずして、却つて上院下院の議員選擧にある。現在の形勢にして、激變せざる限り、第三黨が、上下兩院に、キャスティング・ヴォートを握ることは、既定の事實といつてよからう。然らば、第三黨は、このたびの大統領選擧にあたつて、政治的興味の中心であるばかりでなく、來るべき數次の議會においても、依然として中心的地位を占めるであらう。かくして、米國の進步主義の聲は、はじめて決定的に政治的勢力となる。

ラフオレットの健在を祈るものは、ひとりわたくしだけではあるまい。

（完）

成功者は何れも熟慮果断の人！

煙草の害を知りつゝ永年禁煙の出來なかつた人も

一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

先年十月十五日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主事に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて與れました、其處で榮川堂主は自身來叶せる苦衷を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、そして先づ一社員の煙草好な方に御試しを願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですね―、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立ちになつて「カロット」を取上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね―」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の苦衷を述べて暇乞をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

特徴

外見人も煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適度朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを少體に與ふると同時に温雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは譬き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する一き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

カロット（凡百日分）

パイプ ベークライト付 金貳圓五十錢

パイプ 象牙製サツ入ク付 金參圓五十錢

送料 内地 十八錢 臺、朝、樺 四十五錢

引替送料 内地 三十錢 臺、朝、樺 五十五錢

印註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京府大森不入斗四五一

榮川堂

振替東京五二一九壹壹

東京市京橋區瀧山町十三番地

代理店 天下堂

消極的節約宣傳より積極的生産奬勵へ

反省と意志に相當する節約と生産

杉森孝次郎

人性の本質的傾向、したがつて生活の理想的狀態が、節約と生産との二方法が注意される限りに於いて、節約によつてよりも生産によつて代表されることは、歴史と心理がこれを保證する。

節約は、それ自身としては、或る制限だ。生産は、それ自身、制限の或る打破であり、自由の或る擴張だ。節約の聰明、または節約の善は、それをしないならば、もつと大きな制限が必至である場合に、それをすることによつて、制限をその程度にとどめ、もつと大きな制限を豫防する力としてそれが作用する場合に限つて成り立つ。節約は豫防注射を聯想させる或る價値だ。

現に有る財物を成るたけすくなく消費することが節約だ。節約はすこしも加へる方法ではない。それは出來るだけすくなく引く算術だ。それは有意義的に最も細心な減除算ではあつても、有意義的に最も大膽な加乘算ではない。

生産は科學的、機械的發明に於いて比較的に新式だ。過去およそ百年間の世界が、科學的、機械的發明の結果として、生活必需品及び贅澤品の持ちかたを、あるひは持ちたかを、いかに長脚化歩式に加乘し來たつたかを見ることは、これの價値を見ることだ。近代人がどんなに節約しても、それだけの努力によつては、かれらはかれらの生活必需品だけをすら發見しえなかつたにきまつてゐる。十九世紀に及んで人口が劇増したといふ事實の一因は發明による生産の飛躍にあつた。

消費は人に取つて不斷の、しかも増進的傾向ある必要だ。

の必要を滿たす供給が單なる自然的環境に期待される程度は、人生が進歩するにしたがつていよ〳〵有限化する必然が明確だから、人は、かれの個人的、種族的、社會的發達を目的要件とする限り、かれの消費的必要を滿たす供給を代表的にはかれ自身の勤勞に期待する必要がある。ひと〳〵に節約を方針とすれば、節約するだけの財物なき狀態がまもなく到來するにきまつてゐる。欲求の節約、生活の節約、死が節約第一主義の事實的結論だ。

個人生活の原則としての如く、社會組織の原則としても、節約と生產が關する限り、生產は節約に對して常に支配位を保ち、節約は生產に對して必ず被支配位を保つことが最自然態すなはち至當態だ。個人生活及び社會組織の原則としてさうだから、現代の日本の國策としてもさうだ。

發明よりも遂逹的な生產はない。たとへば現代の一國が國際的高度需要ある新機械を發明したら、そしてそれが日本であつたら、それは日本を富榮に導くためにもあざやかに有價だらう。あるひは新機械の代はりに善質品を想像して見てもいい。國際善質品の生產にむかつて現代の日本が誠心誠意をつくすことは、單なる國家的財政の興味點から考察してさへも最も有智な一事だとして確認的に注意される。

節約は反省だ。生產は意志だ。反省を缺く意志はつまづく。日本はいま、深い反省を必要とする時機にある。しかし、それは、根柢ある意志に再生するための部分的方法としての意義をそれの結論的意義とする。

儉約より生產

石川半山

近頃消極論が大分盛になつて來た、口を開けば、儉約を說く者が多くなつた、政府も各省爭ふて、整理緊縮を事として居る、政府に冗費の多いことは、僕も能く知て居るから、成るべく整理緊縮を行ふことは、必ずしも反對ではないが、此の如く

にして、上下共に消極主義に傾く結果、國民の志氣銷沈して、段々萎縮する形勢の有ることは、僕の贊成する能はざる所だ。

進歩的國民

全體儉約をして貯蓄すると云ふことは、決して惡事ではないが、進歩的國民の行爲ではない、米國は盛に借金をして、其の國を開拓した、歐洲戰爭の始まる迄、尚九十億圓の債務を負ふて居た、戰爭中に此の借金を返却して、今では歐洲に對して二百億圓の債權者となつた、借金は恐るゝに足らない、それを以て有利の事業を起し、盛に生產を行へば、元利は拂へる者だ、唯小さい規模の中に在て、僅少の事業に從事し、生活費を儉約して、其の殘餘を貯蓄すると云ふが如きは、實は前途に大なる希望を持たない人の行爲だ、旣に働き得るだけは働き、老後何等の希望のない人は、それでも宜しい、恩給生活者の如き類は、儉約をして質素に生活し、靜かに餘命を送くるも宜しいで有らう、然かし國民の大多數は、必ず進取的でなくてはならぬ、旣に進取的氣象を具へて、活潑々地に行動せんとする人々が、質素儉約、貯金の一天張りで有るべきではない、特に國として、民族として、こんな方針を取れば亡滅の外はない。

臥薪と嘗膽

尤も貯金にしても、將來大に伸ぶるの目的を以て、之を行ふのは贊成で有る、佛國が千八百七十年に獨逸に負けて、五十億フランの償金を課せられ、之を拂ふが爲めに、佛國人が勤勉にして其の得る所を貯蓄し、忽に償金を拂ふた上に、多くの貸金を諸外國に出す迄の富國になつたのは、全く獨逸に負けたる復讐心の發揮した所で、決して萎縮したのではなかつた、東洋には臥薪嘗膽と云ふ語が有る、それは吳と越との爭ひの間に起つたことだ、現に江蘇の齊燮元と浙江の盧永祥と爭ふて居るが、あのあたりは昔から爭ひの有つた所だ、吳は今の蘇洲の地である、越は今の浙江省會稽で有つた、臥薪と云ふのは、吳王夫差が朝夕薪中に臥し、出入する毎に人をして『夫差よ、汝は越人が其の父を殺せるを忘れたるか』と言はしめた、それから時が來て、越の國に攻め入り、會稽山に餘兵を保てる越王勾踐は、降參したが勾踐は講和成るや、膽を坐席に懸け、仰て之を甞めつつ、自ら罵しつて『汝は會稽の恥を忘れたるか』と言つた、而して其の後終に能く吳王夫差を擊破したと云ふ話が有るのだ、そこで臥薪嘗膽は、何れも目的が有てやることで、唯萎縮するのではない、薪中に臥するは、夜具を儉約する爲めではな

い、腹を責めるのは、之に依て食料を節約するのではない、どうも愚昧なる連中が、臥薪嘗胆を單純なる儉約と誤解して居るのは、困まつた者だ

奢侈とは何ぞや

奢侈と云ふ語が、近頃頻りに流行するが、これはハツきりと分らない言葉である、政府では奢侈品と必要品とを區別して、輸入關税を奢侈品にかけることにしたが、本來から言ふと、世の中に奢侈品と云ふ者のあるべき筈はないのだ、皆人間に必要だから、それが市場に現はれて買はれるのだ、若し唯人間の生存と云ふことを基準として、生きて居るに必要な者の以外は、悉く奢侈品と云ふならば、米なり麥なりの食料品以外は、悉く奢侈品と云ふことも出來る、衣類も更紗は奢侈品で、裸體で暮らすことが出來る、殷の紂王が象牙の箸を作つた、箕子が歎じて『彼れ象箸を造れり、必ず土鑑を以つてせず、將さに玉盃を造らんとす、玉盃象箸之に稱へて以て求めば、天下も足らず』と言て、殷の滅亡を豫言したが、今日の日本では玉盃象箸位は、僕等の如き貧乏書生の家にも有る、之を用ひても、誰れも奢侈と云ふ者は有るまい、北條高時が宴會を開く毎に、酒九獻おれば、肴九種を用ひた、楠正成が之を聞て、『北條氏久しかるべからず』と言つたが、今日東京でも地方でも料理屋で宴をしたら、九種位は何でもない、個人でも晩餐には九種位の料理を用ひて居る人は多いで有らう、堯の平陽の宮殿は、茆茨剪らず、土階三等と云ふ粗末な者だ、これに比して、世界の現代の帝王の宮殿を悉く奢侈と謂ふことが出來る乎、そんな馬鹿な理屈はない、されば奢侈と云ふことは、其の時代の文化を考へ、其の人の身分を調べてから、始めて決定すべきことだ、實を言へば、人間は少しでも向上したい希望を持つて居る者だから、能く働いて、多く儲けて、良い生活をなすことは、寧ろ勤むべきことだ、百姓が絹張の蝙蝠傘をさすのは奢侈だ、若かい者が、帽子を被ぶるのは贅澤だと云ふ小言は、今から二十年ばかり前には、能く聞いた者だが、今日ではモウそんなことは言はなくなつた、要するに奢侈は身分不相應の事をすることで、それは身を滅し、家を亡ぼすの基となるが、一概には言はれないことだ、

生産の獎勵

國家として國民に節儉貯蓄を教へ、貯蓄債券を發行し、五圓十圓の少額の債券に應ぜしめ、以上濫費を防止するのは、僕も決して反對ではないが、同時に大に生産を獎勵しなくてはなら

ぬ、さて生產となると、第一に食料の事から話して見たい。

自給自足の國

日本は元來自給自足の國で有つた、維新開國の時まで、外國と沒交涉で、自分で食料を作つて、それで生活して居た、近年頻りに米の不足を高唱する者があるが、如何に辯論を巧妙にしても、事實を欺くことは出來ない、僕は米の生產額が、人口の增加と作ふて、能く增加し、今日でも自給自足の出來る國たることを見る者だ、明治の初年頃、日本の人口は三千萬人と稱してゐたが、其の頃日本米の產額は、二千五百萬石乃至三千萬石で有つた、人口の四千萬人に增加したる明治二十年から三十年頃迄、米の產額も四千萬石に達した、それから人口五千萬人に達した頃、米の產額も增加し、一昨年五千五百萬石、昨年は六千萬石に達した、凡そ人間の米の消費高は一人一年一石とした者だ、病人や小供や老人は少食であるから、青年活氣の徒輩にして、一日に五六合も食ふもの と平均して、一年一人一石あれば良い、又地方へ往くと米ばかりは食はず、麥や粟や薯を食ふ所が多い、米が六千萬石も取れる上に、麥や粟や薯が有るから、日本は食料は自給自足の出來る國で有る、獨逸の如く、開戰後露國から食料が來らなくなつて、忽ち苦しむことはない、そんな薄弱な國ではない、英國の如く、大西洋に獨逸の潜航艇が活躍すると、忽ち食料に苦しむ樣な國ではない、これは多年外國と沒交涉で、自給自足をやつて來たお蔭で、此の點は、僕は決して悲觀しないので有る、國土の面積は狭小だ、然かしただ開拓すれば、生產はいくらでも增加する、米價が六十圓にも昇騰したら、マーチ、オフ、カルチヴエションは、更らに擴大して、農產物を增加する餘地は十分にある、內地がいよ／＼狭小になつて、米の生產高が、人口を養ふことが出來なくなつても、北海道が大分開けて來た、朝鮮の湖南三道の日本米が、年々に增加して居る、滿洲にも水田が出來た、臺灣米もある、食料は餘り多く心配を要しない、勿論之を增加するに努力しなくてはならぬが、幸ひに日本は農本主義で久しい間堅めた國だ、全國一千萬戶の國民中、五百七十三萬戶は農民だ、これが皆農業を樂しんでやる所が、我が國の强味である、要は此等の農民の精神を鼓舞して、其の業に倦まざらしむるに在るのだ、種子の改良、耕作の改良、機械の應用等で、我が農產物を增加せしむる方法は、イクラも有るから、農村振興の方法は、先づ生產增進を目的とすべき者だ。

養蠶製絲

米價に次て、蠶絲業は我が生産の大なる者だ。年々六百萬石以上の繭を産出し六百萬貫以上の生絲を作り出す、屑糸迄も入れると、尚多い數になる。生絲の輸出高が、四億圓以上の金を日本へ持ち込む所は、何としても立派な産業だ、米國あたりでも生絲は贅澤品の様に云てゐたが、今では必要品になつて居る、戰時中之を贅澤品として輸入を禁止すると云ふ說の有つた時、僕はワシントンの政府で、商務大臣、レッドフヰルド氏に會して、問ふたら、生絲は現に我が米國の必要品となつて居る、之を取扱ふことに依て生活する者、三十萬人に達してゐる、決して輸入を禁止はしないよ」と言つた、今や米國を始め、世界各地に人造絹絲の流行を見るが、此の際、我が製絲業者が、大に勉強して、絲質を改良し、生産費を成るべく減少し、從て價格を成るべく低廉にして競爭すれば、優良なる天然絲は、決して人造絹絲に壓倒されるとは思はない、現在の日本の製絲業者は三千戶、職工三十萬人、養蠶三十萬戶、然るに生絲の相場が、少しく低下すると、直ちに悲鳴を揚げて、政府にすがり附かんとするは、誠に不甲斐ない話だ、米價が少しく低下すると、農民が農村救濟を叫び、絲價が少しく低下すると、製絲業者が蠶業救濟を唱へ出すのは平生の用意の足らざるを示す者で、甚だ恥づべきことだ、米國で四年毎に大統領の選擧の有ることは、建國以來創定の制度で、此の選擧の有る年に、生絲の賣行が惡るくて、絲價の低下するは、常例のことだ、僕等は日本の生産業者が、モウ少し落ち付いた態度を取り、其の自尊心を養ふて、景氣の良い時に逆上せず、不景氣の時にも、泰然自若として居る様に望む者だ。

綿絲は如何

綿絲の方も、六十餘の紡績會社が、四億圓以上の資本を以て二百以上の工場に、四百萬錘以上の錘を働かして居るのは、誠に結構な事だ、之に依て日本人の衣類を供給し得るのみならず、尚多額の輸出を見て居る、唯僕等が遺憾とするのは、其の原料の大部分が、印度と、米國から來ることだ、日本の氣候風土が紡績に適する棉花を作り得ないとしたなら、せめて朝鮮に於て、大に之を作りたいものである、尤も現在でも、朝鮮から百萬貫位は來て居るが、迚てもそんなことでは仕方がない、衣類の原料を外國から買はねばならぬとは、誠に憐れな話で、これは我が生産の大缺陷として大に講究しなくてはならぬ。

支那との提携

ビスマルクが十九世紀は鐵と石炭の時代なりと云つた、十九

世紀はそれではない、二十世紀も鐵と石炭の時代で有る、二十世紀になつてから、石油が馬鹿に威張り出して來て、殆んど鐵と石炭を壓倒せんとする勢が有るが、然かしながら鐵と石炭の地位は、決して崩れたとは思はれない、不幸にして日本には鐵と石炭が如何にも貧弱で有る、之れは支那大陸から供給を受けなくてはならぬ、幸ひに今や揚子江沿岸の大冶鐵山と滿洲の撫順炭坑は、我が勢力範圍の物となり、我が缺陷の一部を補ふて居る、石油も支那には豐富で有る、英米諸國が既に着手を打つて居る樣だが、日本が大陸伸展の政策を抛棄せずして進むならば、尚之を見出すに難くはない、天産物の少ない日本國民は、飽く迄も支那人と提携して、此の大陸の資庫を開き、以て共存共榮の實を擧げなくてはならぬ、然るに近年政府の政策は、大陸抛棄の方針の如くに見ゆる、支那大陸を抛棄して、日本は如何にして生存し得る乎、假りに生存し得るとするも、所謂消極的方針にて、衣は木綿三等、非衣奢らず、食料は麥飯、粟飯、德川時代の如く、子供の出來ることを心配して、避姙、墮胎を事とし、外國からあらゆる侮辱を受けても、之れに抵抗する勇氣なく、平和主義、享樂主義、刹那主義で、青年男女が五色の酒でも飲んで、ダンスに其の日を送くることになつたら、日本は遠からずして、米國の領土となるで有らう、殷鑑遠からず、布哇に在る、僕は二十餘年前渡米し、布哇の亡國を實見したる一人で有るから、特に消極方針に反對するので有る、サンガー夫人の避姙論の如きは、何も珍らしいことではない、德川氏三百年の間、各地方の村民中に行はれたことで、其の手段に巧拙こそ有れ、彼女の思想は、我が日本には少しも珍とするに足らないのだ、僕は此の消極方針に反對し、今尚大陸伸展主義を主張する者で、今後國民の努力に依て、大に日支の提携に進み、生産の原料は、多く支那より得る樣にしたいと思ふ。

科學の應用

それから我が生産業者の最も注意すべき要點は、生産に科學の應用で有る、獨逸が千八百七十年に佛國に勝ち、獨逸帝國を建設してから、教育に重きを置き、科學を奬勵した、伯林大學は百年前ナポレオンに苦しめられた時代に創立された位で有るから、況んや千八百七十年に戰勝國となつて、教育を進めたのは、當然のことだ、軍閥の統領モルトケからして、教育に重きを置いたので、日本の閥族官僚が、民衆の愚かなるは治め易し、となせしとは、大に趣を異にして居た、而して獨逸工業の發達せざる間は、獨逸品が世界の到る處に輕蔑されたが、科學の進歩と共に、製品の改良を行ふたる結果、漸次に其の聲價を

高めた、僕がポーツマス會議の後、英佛諸國を漫遊した時、獨逸品と云ふと『價は安いが品が粗末だ』と言はれた、其の頃は既に餘程改良して居たけれど、それでも需用者は、尙ジヤーマン、メードに對して、輕蔑の目を投じて居た、恰かも今日の日本品が、世界の市場に於ける聲價と同じことだ『廉價だけれど粗品だ』と云ふので、高くても良品たる英國品と競爭が出來なかつた、然るに獨逸科學の進步は、生產品に大改良を現はし來り、歐洲戰爭前に至ては、『獨逸製品は廉價にして精巧なり』と云ふ評判になり、之が爲めに、英國製品の大敵となつた、若し此の駸々たる進步の勢を以て、歲月を經過したならば、遠からず世界の經濟市場に於て、英國品が獨逸品に壓倒さるべしと見たから、英國人は斷然として歐洲大戰に參加し、終に獨逸を擊破するに至つたので有る、今や我が日本の製造工業は、世界の先進國に比して、如何にも幼稚で有るが、今後はどうしても科學の力を加へなくてはならぬ、而して其の生產力を增さなくてはならぬ。

世界的大規模を要す

回顧すれば大正三年の冬、歐洲大戰の結果として、日本へ種々の注文が來たが、其の數量の法外に多いのに驚かされた、露國から第一回の軍需品の注文として、靴を六十萬足、牛肉を二十五萬噸、鑵詰を五千萬個と來たが、此等の數字は、我が製造工場の能率に比して、總て桁違ひで有つた、二十五萬噸の牛肉と云つた所が、日本には食用牛はイクラもない、荷物を運搬する牛迄入れても五十萬頭しか居らなかつた、それを殺してやつては、日本には牛が居らなくなる、急速に六十萬足の靴を作る器械もなければ、皮革も足らなかつた、全國の鑵詰業者が其の頃一日に四十八萬個作るだけの能率さへなかつた、五千萬個では百日もかゝる、米國からクリスマス用の玩具の傘を三十萬ダース注文して來たが、應じ切れなかつた、其頃から見れば、日本の製造工業の規模も、大に進步したけれど、未だ世界的大規模に達して居らない者が多い、歐洲戰爭の起つた時、農商務省で調査した所で、東洋南洋に獨逸と墺國の製品の來て居た者が、凡そ五百餘種有つた、之れが戰爭に依て來らなくなつたのだから、其の代用として日本から賣り込み、彼等の市場を占領したことは盛な者で有つた、單に敵國ばかりではない、英佛伊露諸國も戰爭中は、東洋や南洋へ物を賣る餘裕がなかつた、それで日米兩國の製品が大に賣れた、大正八年歐洲からの歸途、僕は埃及のポートサイドに於て、全市の商店の賣品の大部分が、日本品なるを發見した、それから印度へ上陸して、コロム

ボからマドラスを經て、カルカッタに亘り、ダーヂリング迄横斷したが、日本品は到る處に盛に賣れて居た、此の年日本品の印度へ賣り込んだ高が、壹億五千萬圓で有つた、二十餘年前大隈侯が、日印協會の會頭になられた時、「印度に三億の人民が居る、これが一年一人一圓づゝの日本品を買ふて呉れるなら、三億圓を印度へ賣ることが出來る」と言はれたが、侯爵の理想の半分は、大正八年に達せられて居た、唯何分にも日本品の粗製濫造の非難が、到る處に高かつた、僕は我が製造工業が、今後科學を應用し、世界的大規模の者となり、世界の各市場に於て、列強の製品と角逐して遜色なく、日本製品と云へば、「廉價にして堅實且つ精巧なり」との聲價を博する樣にしたいと思ふ、僕は政治的にも外交的にも、經濟的にも、進展主義で有て、消極的萎縮は大反對だ、此の進展主義こそは日本の生きる唯一の道で有る。

消極的節約より積極的生産へ

文學博士　三宅雪嶺

一

種々の問題で氣付くが、特に經濟に關し、日本國民が久しく世界から離れ、太平に醉ひ、適當の練磨を缺いたのを遺憾とせずに居れぬ。誰を咎めやうもなく、成るべく迅速に不足を補ふの外ない。今から一世紀前、英國で産業革命を遂げたのを顧れば、我國で餘程覺悟する所なくてならないのに、平氣で目の前の仕事のみして居ることは、何といふ事か。歐大陸で英國に後れを取り、佛國及び獨逸で別の方針を指して進み、中にも後者が新に帝國を建設した勢に乘じ、特殊の保護を以て英國を凌がうとするに至つた事、一時列國を驚かした所である。日本は英國の例を見、又獨逸の例を見、相應に施設したが、比す割合に得るところ少く、積極的に進むかと思へば、早くも消極的に陷るの餘儀なきに及ぶ。其處に眼が利く所あると共に、當局者及び一般民衆の練磨を缺くのを惜しい限りとする。

□いくら負債が累なつてもよく、後は野となれ山となれといふ程國事に無思慮でなく、それ膨脹に過ぎた、それ財政が行き詰つた、何とか整理しようと力めるのは、甚だしい困難に陷らず亞細亞大陸の國と異なるを示し。然し昔から豪族が爭ひ、封建制度で治つたものの、國土を各藩主の領地とし、公有私有の區別の判明しない結果、公の爲めにするところが私恩私利を混ずることになつてゐる。國家の爲めに事業を興すと共に、藩主關係の利益を求めることを忘れぬ。江戸城で賄方が鶴二羽を盜み外へ持出さうとした時、久世大和守が同僚と共に之を見、同僚が取つて押へようとしたのを制して云ふやう、城中の鶴は吾等の術と同樣であつて、術の爲めに人を罰するに及ぶまいと。成程名言と傳へられて居るのは、幕府が財政困難に陷り、勝海舟が幕府を捨て置いても二十年で財政の爲めに倒れたらうと明言した所以でないか。明治になつても政府當局者に此の調子が殘り國家の爲めに圖る時、必ず何程か分け前を取らうとした。强ち自身の懷に入れるでなく、權力を維持するが爲めに費した事少くない。征韓論が破裂し、有力者が辭職し、殘る連中が位置を守るが爲めに隨分と苦心し、國家の爲めに事業を興しつゝ、其筋から機密費類似のものを取り出した。三菱會社を保護したのは、國家の爲めであつても、三菱で保護金を他に流用して利殖するやうな事があつた。三菱はともかくも汽船で成功し、近海の外國船を驅逐したけれども、單に主人の身代を殖やすのみになつたのがいろいろあり、御用商の攻擊が烈しくなつたのは、それよりの事である。後にいろいろ變遷しながら、その勢が衰へず、政黨が擴張する爲め、國家的事業を起し、それで融通をつけることが腕利きの仕事と認められた。次第に國費が膨脹し原内閣の下に著るしい額に上り、其の儘にして何處まで上るか知れず、或は破産に陷るまいかと云ふので、緊縮案が出て來つた。特別會計を合せて三十億圓に上るとあつては、捨てて置かれず、大地震火災が起り、國債が增加しては、尙ほ更らの事、少くとも一割減を實行すべしといふのに異議を唱へ難い姿になつた。戰時の利得もあつたにせよ、國費膨脹は勢ひ民間に札を降らし、前に百圓札を見た事もない者が何枚も貰ひ、何時となしに心が大きくなり、それも安い、あれも安いと札びらを切らうとする。世間でも何となく怪しまずに居れず、この儘で押して行けるかどうか、聊か變調子でないかと云ひ、そこで震災は天譴であると云ひ出したのがある。一時差控へたものの、暫くして天譴も何も忘れ、どんどん寶石類が輸入する有樣である。何の内閣でも此の邊に氣付かずに居れず、加藤首相の下に緊口

藏相が出で、その勢を食ひ止め、財政立て直しを決行しようとの意氣込みである。他の閣員も心を合せ、仙石鐵相はパスを取上げ、何百萬圓を得やうとする程であつて、眞劍とも大懸りとも云へやう。政府で儉約を決行すると同じく、世間でも儉約して行き詰まらぬやうにせねばならぬと觸れ出した。

□

然し今會計が三十億に上り來つたのは、白痴風癲が取扱つたのでなく、相當に思慮分別あつての事であつて、それが今更ら多きに過ぎ、何とか減ぜねばならぬといふは何ういふものか。若し金に餘裕あれば、悉く遂行したいのであつて、それだけの金が難しくなつたのは、費す割合に利益がないと察したのに出る。鐵道や港灣や治水や、何れも必要であつて、出來上れば早晩相當の利益あるべき筈ながら、考へて見ればさう行かぬらしく、繰延べ得るだけ繰延べれば、何とか思案もつかうと考へて居る。企てられた事業に全く利益ないのがなく、餘つた金があれば着手するに如くはなけれど、無理した金で進行するほどの利益が無い。それと云ふのも黨派關係で、それぞれ割前を取るべき計算になつて居る。今少しく國事は國事、私事は私事、之を區別したならば、今まで費した所で可也の効果を舉げて居らう。政黨爭ひの爲めに利用され、利が損を償はぬと思はれるのがいろいろある。高松築港で憲政會と政友會との駈引があり、何處でも論議立てすれば何かがある。若し眞に國家を念としたならば、意外の手違ひない限り、消極的節約を必要とする事のあるべきでない。

□

今は日本の伸びかゝつた貿易が各地で抑へられ、支那でも困難を來しつゝ、更に消極的に傾き、何處まで萎縮するか、測り知れぬでないか。輸出を盛んにしようとしても、勞力が高くて價格が高く、勞力の高いのは通貨膨脹の爲めか、金解禁を行はぬ爲めか、是非の議論ありながら、緊縮を斷行するに至るのも、金のある所に情弊が伴ふに定まつて居るからである。何處もいくらかの情弊があるとし、英國は固より獨逸でも日本ほどでない。英國にて政府の保護を蒙らず、自力で多くの發明を仕遂げたのは、固より賞揚せずに居れず、獨逸で保護を蒙り、英國で爲し得ない所、他國で爲し得ない所を産出したのも賞揚せずに居れぬ。英國で世界戰役後製作品を取調べ、獨逸品の餘りに多く輸入したのに驚き、嚴に制限を加へた。獨逸は他國の企て得ない精巧品を造ると同時に、模造品を以て競爭して已まぬ。粗製しても濫造を愼み、同じ物品で獨逸製は廉價と云ふので引き取られる。粗製の必要なる土地には、粗製品を送り出すのがよく、

只濫造しては信用を失ひ、容易に取返すことが出來ぬ。日本では保護を蒙らねば工夫を凝さず、保護を蒙つても餘り働かず、粗製品で間に合ふと見れば、濫造に繼ぐに濫造を以つてし、日本品は惡り〳〵と云ふ事になる。何會社の何人かが儲けたらうが、日本の信用を傷ける事少くない。保護を蒙らずに發見發明に力を注げば、申分ないが、保護を蒙つて外國品と競爭するに至る事獨逸の如くなればそれでもよい。粗製して濫造せぬだけでもどれほどよいか知れぬ。戰役で靴の需用が多く、日本から春りに輸出したが、踵を糊付けにし、直ぐ剝れるので呆れられてしまつた。眼前の利巧で先のことを考へぬのは、何とも仕方がない。日本人は他國人に比べて不正直かと云へば決してさうでなく、珍しくいほど正直な根性があり、それで不正直極まる事を敢てするのは、世界に觸出しして經驗が足らぬに過ぎない。明治に入つても教育は特に此邊に注意を拂はねばならなんだのに、その邊の事を打捨て、半世紀を經ながら、何程の向上があるかを知るに苦しむ。學校で教へる倫理修身は何の爲めにするか看板ばかり仰山で看板倒れになつて居るでないか。忠孝も叫いて涙を流すでないか。

□

日本で消極的節約を宣傳するのは、無分別を孕ましめるによいけれど、鄰國の支那は政府こそ何うでもよいとすれ、例へば消極的節約は日本に過ぐると遠いでないか。但だ鐵と石炭をへながら、世界に力を伸すに至らぬ。日本は支那に比して積極的生產を事とし、世界に打出し得たけれど、努す所に比して生產の見るべきものに乏しい。他國と交はらず、練磨を經なかつたので無理もないと云はゞ云へ、世界はさう云ふ事に遠慮して呉れず、良いものは良い、惡いものは惡いとする。何が何でも日本品は必ず信用すべきものとなるやうにせねばならぬ。此邊は農相よりも文相が力を振はねばならぬ所であるが、小刀細工では到底間に合はぬ。今は容易の時でないと心付き、大奮發するを要する。

奢侈禁止の消極政策より産業發達の積極政策へ

安部磯雄

最近奢侈取締に關する問題が多くの人々に依つて論ぜられて居る、此問題は昔から何れの國に於ても起つた問題であるが、私共も之れに就いて愼重に考へる必要があると思ふ。私の此問題に對する考へは極めて簡單である。それは自分一個の問題として、自分の生活を何ういふ風にやつて行くかといふことに關しては、無論奢侈の生活を抑へて行くばかりでなく、大體奢侈其物が厭ひなのである。私は常にエマーソンの簡單な言葉を座右の銘として居るが、それは質素の生活、高遠の理想といふ言葉であつて、即ち生活は質素であるが、思想に於ては高遠なる理想を持つといふことである。若し人間が高遠なる理想を抱かうとするならば、努めて質素な生活を送らなければならぬ。奢侈の生活をする人間は高遠な理想を持つことが出來ない。此兩者は相容れ難いものであつて、高遠な理想を抱く爲めには、一方に於いて必ず奢侈の生活を抑へて行かなければならない。要するに奢侈生活は一の流行であつて、自分自身の要求ではない。

といふのは、自己の周圍の他人の生活を見ないで、自分丈で自分の生活をやつて行くといふ態度を人々がとるならば、十人の中九人までは質素な生活を送ることが出來るであらう。私共は、私共の生活の慾望を滿足させることに關して、單に衣食住の點に於てもそれを輕んずることが出來ない。併し又同時に生活の慾望も、或程度迄行けば人は容易に滿足することが出來るものである。それ以上の贅澤を人間が考へるのは全く自己の爲めではなくて、自己以外の他人の生活の振合を見ることから起るのであつて、即ち他人と競爭する心理が奢侈生活を生ずる所以である。で、若し私共が獨立自由の思想に富んで居るならば、世の習慣に左右されるといふことは、其事が自由獨立人の恥辱である。私は自由、獨立を愛するが故に、世間の人の如何なる生活でもが私の生活の標準ではない。自分には自分の生活の標準があつて、それに依つて生活をするのであるから、斯くの如き意味に於て自分丈けは質素な生活もすることが出來る。乍併一

度社會といふ廣い立場から考へる時には、寧ろ奢侈生活の禁止といふことは、其事自身が馬鹿らしい事に感ぜられるのである。又昔からの歴史に就いて見ても奢侈生活を禁壓することに成功した例はない。最近我國の問題たる奢侈品課税は、全く人情といふものを考へない、政治家の、淺薄なる思想の表れであることを思はざるを得ない。私共は今日の時代は如何なるものであるかといふことを考へたならば、此問題は直ちに理解することが出來る。今日の時代は一口に云へば資本主義の時代である。資本主義の時代は、換言すれば物質主義の世の中である。何故に人は働いて金を儲けるかは、百人の中九十九人まで、その得たる金に依つて物質的に十分な生活をすることが目的であるが爲めであつて、そのことが人間の最上の幸福と思つて居るに違ひない。從つて彼等の理想はエマーソンの所謂高遠の理想即ち質素の生活ではなく、奢侈の生活である。これは私の理論丈けではなく、今日の社會の實際を見れば何人も否定し難い事實である。茲に於て私は斯う云ふ結論に達する。今日の時代に於て、奢侈生活を禁止し得る人があれば、其人は同時に資本主義をも倒すことの出來る偉大なる人である。資本主義と奢侈生活とは常に相伴ふものであつて、一方を立てゝ一方を倒すことは到底不可能である。此意味に於て、法律の力に依つて奢侈を禁止することが出來ると考へる現代の政治家は、無法もないことを企てゝ居る冒險家と云ふより外はない。

私の奢侈問題に就いて考へて居る處は次の二點であつて、其第一は以上述べた理由に依つて、奢侈生活を禁止することは不可能であるのみならず徒勞であるといふことである。が、第二の點に於ては、奢侈禁止其事が甚だ消極的な事柄であつて、其意義が勤儉貯蓄の主義に外ならないといふことである。勤儉貯蓄といふことは、少數の人のそれを爲し得る例外はあるが、大多數の人にとつてはそれは實行が困難である。最も遺憾なことは、勤儉貯蓄の如き主義は、消極的にさういふことを許り考へて居ると、人間が引込思案になつて、遂には進取的な精神を失ふに至ることである。で、私は決して奢侈生活を讃美する者ではないが、それを禁止するよりも進んで今日より多くの富を作ること、即ち總ての人間が誰もが富を作ることが出來るやうになつて、積極的な生活を爲し得るやうになることを考へることが望ましいのである。奢侈生活禁止といふことは、それ自身言葉が旣に不景氣であつて、總ての國民がさういふ消極的な考へを持つことは喜ぶべき傾向ではない。現內閣は奢侈を禁止するばかりではなく、又一方に於て財政整理を企てゝ居る。それは即ち財政の削減であつて、金を使はぬ分別に外ならない。それも

惡くはないが、其方針は大體に於て消極的である。政府內閣はも少し景氣よく積極政策を執つて進んで行つたならばどうであらうか。此財政整理に就いて多少心配なのは、疲弊して居る地方に其影響が及びさうに思はれることである。それには中央政府が地方の種々な事業に對して毎年支出して居る補助費の問題がある。地方の事業には巨額の費用を要して一時に出來ないものがあるから、繼續事業として何年間と時期を定め、中央政府がそれに對して補助をして居る。その主たるものは鐵道、港灣、治水、道路等の事業であつて、それに對して國庫から支出する金が毎年少くない。然るに今回の財政整理の結果は、地方に約束してある其等の事業の繰延べとなり、或場合にはそれを全然廢止することになる虞がある。假りに此點に財政整理の影響が及ぶとすると、それは消極政策の甚しいものと云はざるを得ない。勿論地方の事業の中にも或は必しも急を要しないものもあるであらう。或は以前の內閣が自己の政黨擴張策として、地方人を籠絡する手段として約束したものもあるであらう。さういふものには財政整理の關係を離れて公平に整理を加へる必要があるが、大體に於て鐵道、港灣、治水、道路等の事業は國家の生產事業に大なる關係を持つものであつて、國家が生產事業を殖やさうとする考のある時期に當つては、斯くの如き方面の整理には愼重なる考慮を要する。茲に述ぶべきことは、現在の內閣が生產事業の發達に關して如何の意見、如何なる方針を有するかといふことであるが、それに就いては明確なる說明することが出來ない。即ち現內閣のそれに關する政策には是れといふ目新しいものを見出すことが出來ない。それは必しも此度の內閣に限つたことではないが、歷代の內閣が、所謂民力の充實、(勿論それは國家財政の充實の意味ではない)國富の增進に就いて幾何の方針を持つて居るかは疑問である。政治の目的は國民の生活問題の解決でなくてはならぬ。國民の中から多くの失業者が出るといふこと、即ち貧乏人の數が多くなり、一國の富が不十分である時には、其缺陷に對して全力を注ぐのが政治の精神でなければならぬ。從つて外交問題も、政黨の勢力も、其の政治から見れば第二義であつて、其第一義は國民の生活問題である。此立場から見れば、歷代の內閣に特に經濟上の大方針があつたとは思はれぬ。無論日本にも農商務省と云ふ者があつて、產業に直接の關係は持つて居るが、其等が如何なる仕事をして居るかといふことを考へれば、徒に仕事の末節に拘泥して產業の大綱を摑むことを知らない。我國に於ては今日は僅かに或物を除いて、總ゆる產業は個人經營に委ねられて居る。そして國家は大體個人の事業を監督する位置に在るに過ぎない。こ

れは日本に於ける事實のみではなく、或は現代の世界を通じて居るの大勢であるかも知れぬが、日本は殊に極端に行き過ぎて居るやうに思はれるのである。生産事業の中の或物は、直接國家がやらねばならぬものゝあることは、學理と實際の上からも決定されて居ることである。それを國家が行はずして、國家が必ずやるべき事業を個人經營に任せて居ることが多い爲めに、日本に於ては發達すべくして產業が發達しないのであるが、それは又政府の監督の宜しきを得ないことにも原因する。今日我國に於て行はれてゐる產業は、大體に於て營利主義の組織の下に行はれて居る。營利主義の行はれる時には、一階級の爲めに他の階級が犧牲になるのを常とする。營利主義であるが故に、れは自己の階級の利益のみを考へて、社會全體の利益を考へない。總ゆる個人の事業は斯くの如くして皆自己の利益のみを目的として行ふところの營利事業である。斯くの如き現代の營利主義の經濟制度は、出來るなら根本的な變革を必要とするが、現在の日本に於てはそれは望み難いことである。若し此經濟制度を改めることが出來たならば、如何に我國の產業が發達を見るかは想像を許さない程であつて、其後に於ける產業の狀態は、恰も夜の世界から晝の世界に移れるが如き變化を呈するに違ひない、當面の問題としては、或特別な事業に營利主義の營業を許すことの不都合を指摘しなければならぬ。其特殊なるものは獨占的性質を有する事業であつて、之れが營利主義の組織の下に於て行はれた時には大なる弊害を生ずる。是れが爲めに一國の產業が其發達を阻害されて居ることは大きいものがあるが、之れに對して國家が十分に監督權を振はないことは甚だ無責任であり、又國家自身直接に其經營の任に當らないことは大いなる不都合である。今日は何人も產業獨占の弊害に堪へないことを認めて居るが、國家は猶茫然として爲す處を知らず、依然として一國の產業を個人の手に委ねて其爲すが儘に放任して居る。今玆に獨占といふ言葉を使つたが、それは必しも經濟學上から見た獨占事業ばかりではなく、それから見ればさうでないと思はれるものに、人爲的に作り上げられて居る獨占事業がある。トラストは即ちそれである。それは獨占事業と同じく一人舞臺であつて、其上に立つ人間が營利主義の下に働くのであるから、其弊害は恐るべきものがある。我々人間の要求するものは出來る丈多く生產されて、其質の廉くなることが理想であり、それが國民生活の幸福を增進する所以でもある。然るに今日の營利主義の經濟組織の下に於ては、假令十分に其力があつても、生產額を制限して、殖やすことをしない。殊に競爭のない獨占事業に於てさうであつて、なるべく生產高を少くして價格を釣上げる

ことに悩むする、斯くの如き不道理はない而も商人が、より多く求めて居るものに對して、獨占事業においては少しく生産し、高く賣るのであつて、有力者にしてさういふことをする者もあるが、之れに對して國家は法律や、警察權を以て臨まず、多く看過して居ることゝは、政府の監督權を使用しないものと云はねばならぬ。實例として我國の紡績業者に就いて云へば、紡績業者は聯合して一種のトラストを組織して居る。紡績糸の價格が下がれば、彼等のやることは、集會をして生産高に制限を加へることを相談する。其方法として、晝夜やつて居る仕事を、夜業を廢止することに依つて幾らでも出來る紡績糸の生産を制限し、糸の價格が下落することを防ぐのである。之れは彼等の常套手段であつて、之れに依つて見ても彼等の不都合なことが分るのである。又石炭に就いて云へば、滿洲の撫順炭坑は非常に有利な炭坑であつて、深く掘らないで石炭を採ることが出來ること、或場所に於ては石炭層が厚いといふことなどの特色があつて、一日平均一萬噸の石炭の採掘が出來るが、それを二三萬噸の量にすることはさう困難ではない。然るに其石炭を日本内地に澤山輸入することになると、石炭の價格が下落して内地の石炭業者の間に大恐慌を引き起すことになる。新聞の報する處に依ると九月廿五六日頃に内地石炭業者の主なる者が撫順炭坑の當局に出かけ、其販途大連に於て何等を聞くといふことであるが、其結果は南滿鐵道に掛合つて、撫順炭坑の出炭に制限を加へることを申込むことになるであらう。それはありさうな話である。石炭が多く採掘されるならば其價格は下がり、消費者の利益であるが、殊に石炭を多く消費する工業は恩惠に與り、從つて生産費も廉くなり、品物もそれに伴れて安くなる譯であるが、石炭業は營利事業であるが故にそれを苦痛と感じるのである。其處にも亦一つの不合理が存する。（茲に別問題ではあるが殖民政策に就いて注意したい事は、殖民地を擴げることを以て國家の强味を増すと考へる人もあるが、滿洲を手に入れて撫順を日本のものとすることは非常に有利のやうであるが、自國の一部分である撫順に石炭坑があるがために、内地の石炭業者が困るやうな結果を見ることは、殖民政策の大失態を暴露するものと云はなければならぬ。）更に臺灣砂糖の問題がある。之れあるがために日本人は又非常な不利益な地位に陷入つて居るのである。何となれば、我々が若しハワイに行くたらば、上等の白砂を一斤十二錢で買ふことが出來る。然るに我々は内地に於て一斤の白砂糖に三十錢を拂つて居るのである。若しハワイ、ジャバ、キユウバ等の砂糖が自由に日本に輸入されるならば、運賃を見ても一斤十五六錢の砂糖を我々に買ふこと

が出來るであらう。我々は何故に一斤の砂糖に對して三十錢を拂はねばならないか。それは臺灣砂糖を作つたが爲めであつて、其爲めに我々は砂糖に二倍の金を拂つて居るのである。それは臺灣に於ける十二會社がトラストを作つて、政府に哀願した結果、外國から輸入する砂糖に對して政府が重税を課して居るために我々は高い砂糖を嘗めし居るのである。玆に見逃すことの出來ないのは臺灣砂糖會社の利益に就いてゞある。大正九年下半期の報告に依れば、十二會社の中一番高い配當をしたのは十割七分であり、最も低いものでも一割五分に當り、十二會社の配當率を平均すれば五割一分となる。大體政府が斯くの如き事實を見逃して居るのは非常に怪しからぬ話であつて、政府が臺灣砂糖會社を保護するために我々に一斤三十錢の砂糖を嘗めさせ、而も其保護を受けて居る砂糖會社が平均五割一分の配當をして居ることは許すべからざる事實である。最後に一言したいのは水力電氣に就いてである。之れは當然國家が經營すべき性質の事業である、日本は世界有數の水力電氣に富む國であるが、それは我國の地勢の然らしむる處であつて、中央山脈に依つて、兩側から屋根の上を流れる雨水の如く、比較的に傾斜の多い土地を水が流れて居るがためである。而もそのために、一方に於て常に禍害も見て居るのであつて、堤防の破壞、田畑の荒れることを免れない。年々堤防の修繕、治水のために多額の金を費し、中央と地方とを合して土木費六千萬圓にも上り、少くも三千萬圓を下らない實状である。此水力から生ずる損害は國民全體の負擔であるが、其利益は全部少數の株主が受けて居るのである。斯くの如き矛盾は少いが、若し國家が自身で水力電氣の事業を經營するならば、それが營利事業でないが故に、單に資本に對する利子だけを支拂ひ、電力を廉く供給することが出來るから、反つて一國の產業を發達せしむる上に於て著るしい効果があると思ふ。明治三十四五年頃、私が水力電氣國有論を唱へた時には、水力電氣事業に投ぜられて居た資本金は四億圓に過ぎなかつたが、今や二十五億圓となつた。現在それを買收することは容易でないが、國家に其考があれば、有利な事業であるから、利拂ひに困難を感じるやうなことはない。假りに今迄の分は個人にやらせるとして、今後の日本の水力電氣は現在よりも、四倍、五倍、となる可能性があるから、政府自ら夫れの經營に當れば、國民全體に大なる利益を及ぼすことにならう。

之れを要するに國家が奢侈禁止の消極的策に依るよりも、產業發達の積極的政策を執ることの良策であること勿論であるが、其如何にして產業を發達せしむべきかに就いての大體方針

ぬ定つて居ないばかりでなく、現在は無方針な其日暮しの狀態である。斯くの如き狀態に於ては產業の發達を期することの不可能なるは當然である。政府は監督者としての地位に在る責任から、或物は政府自身事業の經營の任に當り、然らずして個人の手に事業を委ねるとしても、嚴重に之れを取締る方針に出づべきである。斯くて此方針の下に於て、我國の產業の發達は著るしきものがあるに相違ない。然らば我々は全體生活に於いても消極政策を行ふ必要を見なくなるであらうから、此點當局者の一考を煩したいと思ふのである。

消極的節約宣傳から積極的生產奬勵

法學博士 堀江歸一

加藤內閣は昨今頻に國民に向つて、節約宣傳を試みようとするやに見へる。本來我國民ほど節約心に乏しく、浪費癖の盛なる者は世界を通じて、殆ど其匹を求めるを得ないであらう。實力あつての消費であれば、別に咎立てをするに足らないが、我國民の爲す所は實力に伴はない、實力に超越した消費であつて、生產よりも先きに消費を志し、生產する所よりも遙に大なる消費を致さうとする。其消費慾が一方に生產に對する刺戟と爲れば甚だ結構であるが、時には投機射倖の精神を盛ならしめる所以と爲ること少なしとしない。昨年の震火災は聊か社會全體に鐵槌を下し、浮華輕佻を事とする國民をして警しめる所あらしめるやに見へた。斯くては禍を轉じて、福と爲すを得るの道理であつて、幾年かの後には、震火災に伴つて生じた損害も恢復するに至るものと考へられたのであつたが、災後一年の今日に爲つては如何であるかと云ふに、國民の浪費癖は再び勃興し來り、婦人の被服に、一般市民殊に有產者階級の住居に、實業家紳士と稱される者の社交に浪費の伴うこと甚だしく、或る場合には識者をして顰蹙せしめるものも少なからざるが如くである。

之に對して政府は何事を爲したかと云へば、第一は輸入奢侈品に對する關税の重課であつて、第二には昨今實行しつゝある節約宣傳である。前者に就ては今、取立てゝ批評をしない。後者に就ては、私は種々の考へを插つことを禁ずるを得ない。

第一政府は果して節約宣傳の適任者であるかどうか。節約宣傳とか、勤儉奬勵とか云ふことは必ずしも加藤内閣に依つて、始めて試みられた次第ではない。歴代の内閣殆ど此事を企てざるものなき有様であるのに、其效果の充分に與らないのは、節約宣傳を爲す政府自身が大なる浪費者であつたからである。節約とか、勤儉とか云ふことは、必ずしも純乎たる經濟上の問題ではなく、倫理上、道德上に關係する所淺しとしない、倫理道德に於て、重要なるは躬行實踐の一事であつて、如何なる教訓も空理空論であつたならば、此の價値を認めるを得ない。我國の政府が自ら經費を緊縮することに勉めず、財政上に放漫たる政策を縱にして、獨り國民に向つて、鹿爪らしく勤儉の重んず可きことを説いた所で、何人も之に耳を傾けようとしないのは、怪むに足らない、從來政府に依つて試みられた節約宣傳が多く失敗の外なきに至つた所以である。

第二、節約宣傳は何處までも正しき道を踏まなければならない。節約にして既に倫理上に、道德上に關係を有する問題である以上は、之を國民に奬勵し、勸誘するに當つて、何處までも正法を以つてするのが當然であつて、奇道を以つてすることは之を避けなければならないのみならず、時に奇道を用ひたならば、其結果の恐る可きものがある。政府が復興貯蓄債券に富籤式の割増金付償還法を用ゆるのは、之に依つて、貯蓄を奬勵する趣意を織するものであるかも知れないが、低利に拘はらず、之に滿足して、右の貯蓄債券に應募する者は割増金に當籤して、萬一の僥倖を收めようとするのであつて、而して割増金を獲得した曉には、其れが正當の勞働に伴つたのでなく、一場の僥倖に依つて、手に入つたものである以上は、其手に存する間、濫費を事とするのは免かれ難きのみならず、斯く人心をして投機射倖に向はしめることは、勤儉力行の精神を推折するの嫌なきを得ないのである。

第三、貯蓄奬勵に強制的手段を用ゆ可からざること。節約の宣傳と共に、節約の方法を強制することは、從來我國に於て屢々行はれた所であつて、今回も尋常の宣傳　果の見る可きものが現はれなかつたならば、或は年來の手段が慣用されることゝ爲るかも知れないが、斯る強制手段たる、多くは下級官公吏の俸給支拂に於て、適用される。即ち俸給の幾分の一に相當する金額を官廳に於て天引して、保管の任に當り、特別の事由が

許にならない限り、之を引用することを許さない、屢々引用を請求する者は長官から素行不修と云ふような考へを持たれるので、之を恐れ、金錢を必要とする場合にも、貯金を引出さずして、却つて高利を支拂つて、他から借入金を爲すと云ふような馬鹿々々しき矛盾に接することがあつたと傳へられる。斯くては貯蓄の奬勵[illegible]なきを得ない。貯蓄は何處までも本人の自由意思に待たなければならないのである。

斯の如く節約の奬勵には種々の條件の伴うものを要するが、節約の手段として、最も重大なるは、生産の奬勵である。節約又は勤儉を奬勵するに當つて、常に間違を生ずるのは、此消極的手段のみに趨つて、肝腎の基本たる生産奬勵と云ふ積極的手段を閑却する一事に存する。貯蓄の行はれる基礎は人々の所得と生活費との差額であつて、此差額が大なれば、大なるだけ、貯蓄の行はれる餘裕は豐に爲る。勤儉は人の生活費を減縮する所以であつて、我國上流階級に屬する人々の生活に就て云へば、此方面に於ける餘裕亦相當に存するやに認められる。節約論は此階級に向つて、適用されて、相當の效果ありと考へられるが、中等以下の階級例へば月收二三百圓以下の人々に對して、今日以上に生活費を節約して、勤儉に力めよと云ふことを勸むるのは、甚だ無理なる注文であつて、彼等をして貯蓄に依つて、資本を増殖せしめようとする以上は、政府自ら積極的に生産を奬勵して、彼等の所得を豐富にし、其生活費に對する相違を大ならしめることを以つて、指標とする。然も今日まで、此方面に於ける政府の施設に見る可きものなく、消極的節約宣傳に[illegible]して居るのは、私の不滿とする所である。

然らば如何にして事業を奬勵するかと云へば、第一財政に於て、出來得るだけ經費を節約し、國民經濟に於て、利用し得られる資金の供給を潤澤にし、第二、金利の低廉を謀るの外に道はない。金利歩合の低廉と爲ることは、貯蓄の奬勵に牴觸するやに思はれるが、一方に財政の整理に依つて、經濟社會が順調に進み、放資に伴ふ危險が減じたならば、此點に於て、金利低落に於ける放資者の損失を償ふに餘りあるに至るであらうし、他の一方に生産奬勵され、人々に貯蓄を爲すの餘裕を生ずると共に、資金増殖の目的亦之を達するに、容易なるものあること、爲るであらう。

勤儉貯蓄の宣傳必ずしも不可なりとしない、唯根本の政策の相共に行はれるものなきの結果、一場の空言に終ること、例に依つて例の如くなるは、私の喜ばさる所である。

節するには餘りがない 働くには仕事がない

法學博士　吉野作造

日比谷公園の前を電車で通ると、鐵の柵上に額を出して居る白ペンキ塗の掲示板が眼につく。「貯蓄にしませう、能く働きませう。能く考へませう」と大きく三行に書き並べてある。政府でも頻に勤儉貯蓄を奬勵して居る時節柄、この掲示板もエライ方々が骨折て作られたものであらうが、實効が擧るかどうかと考へると些か心細い感がしないでもない。

× × ×

上流社會の人々が骨折てうまい標語を發見し、民衆の耳目に觸れ易い樣にさへさうして置くと、相當の効果が必ずあがるかに考へて居る人がある。さう信じて居るかどうかは姑く別問題として、少くとも斯くすることに依て識者としての指導任務は盡し得たと考ふる人は決して尠くはない。全然無用とは思はないが、今日の社會はそんな標語で容易に動くには餘りに複雜だと私は思ふ。

封建の昔に在ては、民衆の一切の生活は悉く上司の示す規範に依らなければならなかつた。上司の命令を假りに法律と謂ふべくんば、當時の法律は則ち民生の道德的規範を完全に其の內容とするものであつた。換言すれば、上司の命令に盲從することが法律的にも道德的にも正しいことなのであつた。從て上司はまた權力者たると同時に道德の嚴格なる意味に於て德行家でなければならなかつた。是れ即ち政治を以て君子の任なりとせし所以である。斯う云ふ時代に在ては、如何にして上司の命令に民衆を從はしむべきかは政治家の主なる問題ではない。上司に對する民衆の盲從は始めから懸念するの必要はない。寧ろどんな方向に民衆を動かすべきかゞ最も大事な問題なるのである。乃ち爲政者はその時々の要求に應じてうまい簡潔にして適切な標語を發見作用することに專ら骨折つたわけである。さうすると民衆は必ず其の赴くべき所を教へ込まれ、斯くて勤儉でも貯蓄

でも爲政者の思ひの儘に命令を擧げることが出來たのである。

但し今は封建の昔とは大に事情が違ふ。上司の一令で多數を手足の如く動かし得るは、軍隊の外には最早何處にもなくなつた。軍隊流を實社會の一般生活に應用するの妄なるは言ふまでもなく、封建時代のやり方で今日の實務を處うし得ると考へるも亦大なる誤りではあるまいか。幸か不幸かあゝした時代錯誤的宣傳は今日でも我國に大に流行る。總理大臣の告諭だの内務大臣文部大臣の聲明だの、一體あんなものが何になる、私が問題とした節約勤儉の標語だつて無論御多分に洩れない者である。

× × ×

斯く云へばとて私は昨今識者なるものゝ頻りに叫ぶ節約宣傳や勤儉奬勵やをたゞ漫罵するを快とするものではない。況して斯種の努力を無用とするものでは決してない。併し之等の手段に依て達せんとする目的が、實に之れ丈けの手段方法で遂げられるかどうかを思ふとき、私は甚だ惑はざるを得ないのである。節約もいゝ、勤儉もいゝ、併し之を有効に行はれしめんとせば、外にもつと急施設行すべきことがないだらうか。只漫然と『近時輕佻浮薄の風都鄙にあまねく』などと叫んだ丈けでは何にもならぬ。若し聲を大にして叫んだ丈けで目的が達せらるゝものなら、之位扱うの昔に解決されて居なければならぬ筈だ。何となれば此種の叫びは何時の時代にも世々の人から叫び返されるを常として居るからである。

明治十五年度の東京學士會院雜誌に大内[illegible]氏の「一位妄論」といふ論文が載つて居る。其中に「而して維新後既に自由自主の論發り、古來の制度廢を掃ひ、衣食住共に上下の別なく貴賤の度無く、隨意放恣貧賤の浮薄をも顧ず外貌の虛飾を粧ひ、都下は勿論、田舍山村までも此弊習に摸擬し、資を擲ちて虛を飾ひ、前年は自家手織の綿服ならでは著ざるものも、或は綢帛を衣ひ貴しきものは金銀の時價を帶び自若として得色あり、而して後世子孫の謀を顧ざるもの、如し」とあるなどは、今の風と思想の變とを結び付けるあたり、當節の議論とよく似て居る。わざ〳〵之を茲に掲げたのは、右の點に於て面白いと思つたのと、又一つには斯んな風に何時の時代にも國民質素の聲が揚つて居つたといふことを列證せんが爲である。而して時勢の進みは常に之等の議論に頓着なくどん〳〵前方に進んで抑遏さるゝを見るとき、吾々はつく〴〵大言壯語の更に價値なきを思はざるを得ないのである。

× × ×

外の人のことは姑くおき、私が直接節約しろ、ヤットやれと責められたとしてさて之に對してどう思ふかと反省して見る

第一に私は私共に取て生活の必要品と目すべきもの、多數が贅は却て贅澤品になつて居ることを指摘しておきたい。自分の收入に比して不相當に高價なものを假りに贅澤品と云ておくと、詰り私の收入は未だ十分に私の生活必需品を具備するに足らないと云ふ事になる。豆をかぢツて勉强したといふが學者の理想であり、足るを知るが處世上の重要德目であつた時代はイザ知らず、生を樂み凡ゆる方面に生存の意義を充實しやうといふ現代に在て、我國今日の社會狀態は、吾々をして餘りに生活上の便益から遠からしめて居るのではなからうか。贅澤どころではない、一片の肉一冊の書物だに我が懷の計算を顧慮することなしに輕々求め得ない有樣ではないか。斯く考へると、世間は廣いから不當に贅澤して居るものもないではあるまいが、一般論として今日の日本人は決して贅澤はして居ない、大なる節約の餘地ある生活は決してしてゐないと謂はなければならない。

× × ×

自分の經驗からいふと金のない時程、案外節約は出來ぬものだ。合理的な生活をするには相當の收入あるを條件とする。早い話が、金に餘裕があれば其日〱の生活も現金で始末することが出來るが、之が乏しいと帳面で取ることになり、為に同じ物を高い金で買はされる結果になる。即ち貧乏は最大の不經濟なのだ。私は自分で非常に貧乏だとも思はないが、慾にはも少し金があつたら、御勝手を斯んな風に、風呂場はあんな風にと、種々の改良を加へて女中も減らし大に冗費を省くことが出來やうにと考へることが屢々ある。要するに最も合理的に最も經濟的に生活を整理するには相當の資本を固定せねばならぬのだが、今日の日本人には之が許されてゐない。收入が少い爲に最も能率の上らない遣り方で生活すべく餘儀なくされて居るのである。故に以上節約する餘地はあまりないやうに思ふのである。

× × ×

併し今日の眞の憂は、收入の少いといふ點よりも寧ろ働く機會の乏しいといふ點にあらう。乃ち廣義の失業問題の解決せらるゝを要する所以である。

『能く蓄へませう』たつて貯へる餘裕なければ仕方がないではないか。税金だつて碌に出せない人は隨分に多いと思ふ。私は昨年度貳百四十圓餘の所得税を納めた。雜誌の原稿料なんどいふものが加算されたのだらうが、大學教授であつた時代の月給が三百圓なにがしで而も一家十口を支へねばならぬ者の負擔として右の税額は決して輕易ではないと思ふ。而して私などはま

たいゝ方とする。いゝ方ですら斯んな風だから、況して一般常民の様子は言はずして明かだ。とても貯へる餘裕なんどあるものではない。

夫れでも多少の定收入あるはまだいゝ方だ。働きたくつても格好の仕事の見付からぬ人の如何に多きかを考ふると、私は悚然として一種の恐しき[illegible]「能く働き

ませう」もいゝが、夫れには先づ「働く機會」を潤澤に提供しなくては嘘だ。社會主義者の口吻をまねるのではないが、最近の日本はことに勞働の機會に乏しきの事實を暴露して居るではないか。

× × ×

此間古い友達に久し振りで遇つた。元來働きのない怠け者であつたが、見た所時節柄にも似ず馬鹿に景氣がよささうだ。どうしてると聞くと、近頃馬鹿に忙しいといふ。譯を立ち入て訊くと斯うだ。久しくうまい仕事もなくて困つて居つたのを、先年總選擧の際さる有名なる代議士の運動員となつて必死に働いたのを緣故に、或る役所に左る物を一手に賣り込む會社を作て貰ひ、今其重役になつて居るといふ。之を私の言葉で分り易く說明すると、役所で商人から自由入札で安く物を買ふ代りに、商人が連合して會社を作れば彼等自身も面倒がなく、且つ若干の遊食の徒に職を授けることも出來る。中間の者に於ても相當で少々高く買ふので算盤が合ふといふわけだ。之も一種の「勞働機會」の提供に相違はない。

田舍の百姓が其の作つた大根を賣る價段は一本二錢だとする。而して私共が之を買ふ價段は十五錢を下らない。彼と我との[illegible]に大に便利だらうと思ふけれど、さう思ふ樣に行かぬのは其間に小賣商人が介在して居るからである。公設市場の發達を小賣商人が喜ばぬ如く、途中で餘計な事をして飯を食つて居る者の多い爲に、私共の生活が如何に不經濟にされて居るか分らない。

そこで我々は所謂「勞働の機會」の提供にも二種類あることを忘れてはならぬ。上には貴衆兩院議員などを始とし、下は田舍の自稱有力家輩に至る迄で其の求むる所又現に提む所の仕事は多くは右示すが如き行つて益なき類が多い。斯う云ふ仕事が多くなればなる程本當に實のある方の仕事は壓迫される。つまり斯んな連中に跋扈されると、百姓も眞面目に大根を作る氣になれぬといふわけだからである。

× × ×

遊食の徒の多いことと相並んで「勞働の機會」を乏しからしむる最大の原因は、恐らく産業に對する財政の壓迫であらう。經

濟財政の技術に亘ることは詳說するを避けるが、今の樣な狀態で進んでは、とても日本の經濟は日本の全人口を養へ切れまいと思はるゝ。而して財政的壓迫の筆頭に來るものが龐大なる軍備であることは亦絮說するまでもない。

× × ×

此頃亞米利加のドーズ氏の評判が馬鹿に高い。彼の我國に於ける名聲は獨逸賠償問題に關する一大難問に巧妙適切なる解決を與へたるに依るが如きも、彼地に在ては早く既に米國中央政府の會計制度に一大改革を立案敢行したる事に因て大に令名を馳せたのである、其案の細目は玆に說く必要もなからうが、一つ之に關連して見逃し難いのは、彼の案は米國なればこそ實行されたれ、他國ではなかなか困難だらうといふ點である。それは彼の案の實行は當然に多數の冗員陶汰を必要とするが、之が處置をどうするかは一種の失職問題として頗る重大だからである。然るに米國では、官吏は概して大統領の改選と共にピンからキリまで代るものと始めから覺悟して居る。從て一旦の就職に終生の生活を托するなどは毛頭考へて居ない。だから途中で陶汰することも心易いのである。之等の背景がなくては米國の樣な思ひ切つた改革は實行甚だ困難なのである。

更にもう一ツ溯つて考へると、米國では役人などをして飯を食はうとは土臺誰れも考へて居ない。食ふ位のことは外の何かで立てゝ行く。外の仕事で立派に喰て行けるものが時々役人になつて見る譯なのである。面倒なら役人をやめて本職に復へるまでだ。日本の樣に役人をやめると陸に上つた河童同樣に困り拔くのとは事が違ふ。此點も能く注意するの必要がある。

さて米國の國狀が右の如くなる事の一面の理由は、『勞働の機會』の潤澤なることに在る。仕事は幾らでもある。人手は幾らでも要る。故に相當の收入は譯もなく得られるのだ。是れ米國に於て有爲の青年がオメオメと何時までも學校に留り得ざる所以でもある。我國もあんな風になつたら嘸働き甲斐があるだらう。能く蓄へる氣にもなるだらう。節約も質素も、要するに斯くなつての上でないと言つても甲斐ないことではあるまいか。

以上與へられた問題に對し自分一己の感ずる所を憚りなく書いて見た。一般社會のひろい問題に對する答案としては無論不完全なものに相違ないが、節約勤儉の目的を達するには今日先づ豫め爲すべき事多しといふ主張には、世人多く異議はあるまいと考へる。

節約の不道徳と生産の不合理

長谷川如是閑

經濟心は必ずしも人間特有の心理ではない。一定の目的を追求する行動が、最少の勞力を以つて最大の效果を得ようとするのは、その最も簡單な形に於ては凡ての物理的運動に現はれてゐる。運動が所謂直線運動を取るのは、即ち直線が出立點から目的までへの最短距離だからである。『經濟心』とはこの二點間の距離を直線を以つて結び着ける過程である。この過程は物理的過程である。

この經濟的過程は實際の運動に於てはそのまゝに現はれることが出來ない。直線は畢竟空想的な線である。如何なる運動も、實際に於ては、何等かの障碍に遇はないことはない。障碍に遇つた場合には、運動は即ち所謂最小抵抗線に沿ふて進むのである。そこで凡ての運動には振動が伴ふ。振動は即ち最も經濟的な場合には旋廻運動となる。だから實際に於ては運動の最も經濟的なものは旋廻運動である。『急がば廻れ』といふ諺があるが、眞つ直ぐに進むよりは廻る方が速いのは、砲彈が旋廻運動を以つて進むように工夫された所以である。

この經濟的物理過程が生物の行動に現はれた時に即ち經濟的行動となる。それが人間の意識的行動となつた時に即ち經濟心となる。

この頃頻りに唱道される節約といふことは、經濟心の發現と云はれる。日本人が近頃經濟心を失つて贅澤に流れ、濫費を行ふ習癖を生じたので、大いに經濟心を鼓吹しなければならないと云ふのである。

而かも本來節約といふ經濟的行動が社會的生活の上にどういふ意味を有つたのであるか、今日節約を強制されてゐる人々は、果してその強制的節約を實行することが、彼等の生活に於て理想的であり、道徳的であり、人間的であるかどうかといふことを考へなければならな

動物が節約を行ふ場合を觀察して見ると、彼等は自分の生存を支へる資料を決して削減してはゐない。又節約するが爲めに彼等の生存様式を特に萎縮させてはゐない。蟻が食料を蓄へ蜂が蜜を貯へるに就いても、蟻や蜂は決して自己の生存を支へる資料を削減してはゐない。又貯藏する爲めに特に消極的な生活をしてはゐない。彼等の勞働は自己が日常の生活を支へる資料以上に將來の生活に資すべき分量の果實を收得するのである。それだけ彼等の勞働が一時的の資料のみならず、一定期間の窮乏に備へるだけの資料を得る力を與へられてゐるのである。彼等は即ち自己の勞働が持ち來す全收穫を自己に收めることによつてそれだけの餘裕を得てゐるのである。言ひ換へれば、節約なることは彼等に取つては決して日常の生活を削減することではない。犬が與へられた食物を食ひ剩した場合には、何處かに埋めて置く。猿は食ひ飽きると自己の兩方の頬に食物を貯蓄する。又それを吐き出して或る容れ器に入れて置く。嘘か誠か知らないが、その猿が吐き出した食物が發酵して一種の酒を醸すに至つたのが酒の起源であるといふ説さへある。人間が酒を發見したのは僅かに同じ過程によつたらしい。『嚙む』といふ語が酒を『醸す』といふことと同じ意味であるのを見ても分る。多くの動物には所謂反芻の習慣がある。それがやはり一種の、胃の中に於ける貯藏である。犬の母親はさうして貯藏した食物を小犬に與へる。

而かもこれらの貯藏は、決して貯藏者の生活を削減してまで行はれてゐるものではない。さうするに拘らず、貯藏者は十分自分の慾望を充たしてゐるのである。若し少しでも貯藏する爲めに貯藏者の生活を削減するならば、その結果は元來種の保存であるところの貯藏の行動が、種を衰滅せしめるに至る筈である。一つの習癖は年代と共に昇進するものであるから、若し貯藏が少しでも生活を削減する働きであつたなら、貯藏の習癖が昇進すればする程、貯藏者の生活は削減され、その結果衰滅を招くのが必然である。

節約は生活を削減して貯藏するといふ意味でないのが生物界の節約である。然るに人間の社會に於て鼓吹されてゐる節約はそれが宣傳される場合を見ると、必ず節約を強制される側の者は、生活を削減することなしには節約することの出來ない地位にあるのである。即ち一方に於ては生活の向上を抑へるといふ意味で削減的であり、尙ほ他方に向上を抑へるばかりでなく、今の現在の標準を引下げねばならぬといふ意味で一層削減的なのである。日本の當局者が數十年來鼓吹してゐる『貯金のすす

め」なるものの主旨を見ると、その日暮しの浪費者に向つて萬一の場合に備へろとすすめてゐるのであつて、所謂富裕階級の餘裕を貯蔵しろと云ふよりは、餘裕のない階級が一層貯蔵の必要を有つてゐるといふ趣意である。それで一定の廉い賃銀を同じやうに得て居るものの間に於て、一方が多少とも貯蓄し、他方が少しも貯蓄してゐないといふやうな例を盛んに擧げて、廉い賃銀を得てゐるものでもこの通り貯蓄してゐると云つて、貯蓄の出來ないものが恰かも浪費者であるが如くに説かれてゐる。

このことはいろいろの錯誤を含んでゐる。根本的には貯蓄は個人的行爲ではない。貯蓄が出來ると出來ないとは、極端に云へば個人的心理に基くものではない。前の例でも察しられる通り貯蓄は社會的環境が集團の生活に當然持ち來す行動である。環境が貯蓄に適する場合には、馬鹿でも阿呆でも、極端な浪費者でも尚ほ貯蓄する。大食ひの犬でも、有り餘つた食料は、やはり地中に埋めることをする。今日の資本家階級の多くの人は勞働者に比ぶれば、極端な浪費者であるが、それでも尚ほ彼等は莫大の貯蓄をしてゐる。貯蓄は寧ろ環境の作用である。個體はこの環境に應じて、或は貯蔵し、或は貯蔵しないのである。夏は生活の資料が到る處に豐富であるから、蟻や蜜蜂の勞働が餘分の資料を貯蔵することを得て、自ら冬季の欠乏に備へる貯蔵となるのである。夏でもそれほど資料が豐富でなかつたなら貯蔵は不可能である。從つて彼等は冬季にはその貯蔵によることを得ないから、自ら別な組織で冬季の資料を集めるやうな生物學的な機關を發達せしめたであらう。人間が平常一杯一杯の生活をしてをつても、資料が豐富でなければ決して欠乏を備へるだけの貯蔵をするに至らない。日常の收穫が豐富であれば、さういふ欠乏の時期があるなしに拘らず、人間は本能的に貯蔵するのである。日日規則的に食物を與へられてゐる犬は、餘つた食物を貯蔵する必要はないのであるが、それでも餘裕さへあれば彼等は本能的に食物を埋めるのである。

日常の生活に窮乏してゐる人々の中にも、貯金をするもののあるのは、乞食でさへも莫大の貯金を持つて行倒れになつてゐるものがある位で、必ずしも不思議なことではない。然しさういふ行動は決して人間的生活の正態ではなく、「貯蔵」といふ一種の本能的行動が病的に昂進して、生活を犧牲して ― 生存の目的に反して ― 貯蔵するといふ病的變質者である。これは決して奬勵すべきことではなく、寧ろ絶對に矯正さるべき病狀態である。

今日月百圓の收入の者が、三人の子供を有つたとすると、彼の

くその子供達を饑ゑさせないだけに殆ど全收入を投じても、決して生活の慾望が十分滿される譯には行かない。況してそれらの子供に今日の生活に堪へるだけの教育を施すことは殆と不可能である。夫婦懸け向ひでも、その收入では生活の維持が困難で、とても向上などは難しい。さういふ人々が若し貯蓄するとなると、生活の必要は極端に削減され、彼等は日本人として正當の生存力を維持する能力を自分で削つて行かなければならない。千人の中に一人や二人は自分の體を削つてさういふ貯蓄をしてゐるものもあらう。然しそれは變質者である。

ところが今日日本人の最大多數はこの程度以下の生活をしてゐるのである。百圓の月收を得るまでには十數年辛抱しなければならないといふのは大多數の運命である。さういふ國民が若し莫大の貯蓄を——何かの宣傳又は一般の習癖信仰等によつて——積み立てたとすると、その國民は生活力の正常の發達を抑壓してそれを貨幣に換へてゐる譯である。その貯蓄高を見ると、その國民は如何にも富んでゐるやうであるが、その削減された生活力のことを考へると、それは誠に戰慄すべき狀態である。恰度乞食が貯金の殖えるのを樂しみながら、野垂れ死をしなければならないやうに自分の體が衰弱して行くのに氣付かないのと同じである。

故に近代に於ては貯蓄は次第に個人的貯蓄を離れて、社會の貯蓄に移つて行きつゝある。保險の發達は即ちそれである。けれどもその保險料がまだ社會的に拂はれないで、個人的に拂はれてゐる。多くの工場にはそれぞれ保險的の制度があるが、何れも保險料を勞働者から取る。國家が保險を強制する場合にも亦さうしてゐる。これ亦一種の削減である。結局貯蓄がさういふ生活削減である限りは、——本來の生物界に於ける貯蓄の性質に反する限りは——貯蓄は畢竟亡國的である。

けれども元來今日の組織は生産者の多くはその階級の生活を削減されながら、他の階級の生活を充足せしむる働きをしてゐるのである。所謂賃銀の鐵則は即ち生産者の生活を削減せしむる制度であり、他方の利潤獲得は資本階級の生活を充足せしむる組織である。根本に於いて生産者の生活を削減せしむる組織であるから、更にこの生産者の生活を一層削減せしめて貯蓄せしむるといふことが不生産者の目的に叶ふ限り、無遠慮に貯蓄が宣傳される譯である。この宣傳は僅かに國民の多數に貯蓄の爲めに生活を削減して憚らない一種の病的心理を起さしめるものである。殊に小學兒童に貯金を奬勵する如きは、最も能くこの目的に適つてゐるのである。何等の收入も、又支出の目的も持つてゐない兒童が貯蓄する場合には、全く本能的の病的貯蓄

心を以てする外ない。政府や教育者はこの變態心理の涵養に努めてゐるのである。

そこでヨーロッパの戰後に各國に於て貯蓄よりは寧ろ猛烈な生産奬勵の聲が起つた。貯蓄は畢竟生産の剩餘から來るのであるから、この西洋各國民の宣傳の方が意味がある。それは戰爭の爲めに生産が荒廢したお蔭で物資の缺乏となり、物價の騰貴となつたので、當然生産がそれを救ふ外ないと考へたのである。日本人の消極的な態度よりはその方が合理的ではあるが、然しその時に勞働者達は、たゞそれを所謂ちやんちやら可笑しく思つたに違ひない。その當時のポンチ畫に肥滿した大紳士が多勢安樂椅子に臥轉んでシガアを吹かしながら皆で『生産、生産』と合唱してゐる畫があつた。全くその當時の肥滿した紳士等は、さういふ聲を揚げるより外生産に協力する力も資格もなかつたのである。丁度今日の日本の政治家が自動車を飛ばして待合に集まつて節約宣傳の歌を唄つてゐるのと同じである。

生産を豐富にすることが今日の組織に於て多數者の間に生活の充足を持ち來す道であるかどうかといふことは、今更ら問題にするさへ愚なことである。資本主義的大生産の勃興以來生産は非常の勢を以て量的に豐富となり、十年毎に生産物の大洪水が起るといふ商業上の暦數が定まつた位である。さういふ風に生産が豐富になつた結果、各國民の生活がどれだけ豐富になつたかと云へば、その反對に各國共富者と貧乏者との比率が猛烈な勢で變化して行つて、古來の如何なる時代よりも貧乏者の比率の高い時代を持ち來たしたのである。國民の多數はもはや生産を豐かにすれば自分達の生活が救はれるといふやうな迷信に胡魔化される筈はない。彼等は生産が豐かになればなる程、それを消費する資格を奪はれるのである。

この事は現代の組織に於ては生産といふことが社會的消費の目的に於て行はれてゐるのではなく、個人的の利潤獲得を目的として行はれてゐる爲めであるといふことは、既に社會主義者のみならず、一般の認めるところである。但だこの組織の下に於ては、生産の衰退は、それが爲め物質が乏しくなつて多數民に供給されないといふことを恐れる爲めではなく、生産の手控への結果、多數人民を失職者にすることを恐れなければならないのである。失職者が現代の組織の特徴であるのは、畢竟生産が生物界に於けるやうな社會的意義を有つた勞働と結び着かないで、言ひ換へれば、生産と勞働と離るべからざる關係に於て全社會の生活行動の組織となつてゐないで、生産はその果實を收得する階級の生活目的の爲めの機械的手段として組織されてゐる爲めに、この目的の爲めには多數の人間を機械的に或は

轉させ、或は休止させるといふことの結果である。人間が一つの手段となつた場合には、前に云つた如く、その生活の正態を發達せしむることさへ抑壓され、生存が極限され、又衰退さしめられることは、古代の奴隷の例に於てその極端に達したのであるが、生産が特殊の階級の生活目的を充足せしむる手段である限り、生産者はさういふ組織の内に於ける一種の機械であることを免かれない。だから如何に生産が豐富になつても、その機械に取つてはその生産物は沒交渉な生活資料である。如何に絹が豐富に生産されても、それは紡績女工の生活と沒交渉な資料である。

今日の國民の多數の生活難は、要するに生産と勞働とが右のやうな關係にあつて、ただ手段的に結びつけられることとなつた結果である。生産と勞働とが生物に於けるやうな社會關係で結び着けば、生産勞働者はその生産者としての運命の爲めに消費を制限されるといふことに就いても そこに社會的な理由があつて、生産者の人間的生活の壓迫とはならない。生活の分業上或る仕事を取つたものは 仕事の關係上自ら生活の様式が制限される。野外勞働者は健康な肉體を得、座職者は不健康になるのは已むを得ない。さういふ運命の相違は、生活が分化される限り免かれないであるが 然しそれらの異つた運命にある人々が、さうした協同的に造り上げた生産物を協同に享樂することによつて始めてその異つた運命が平均に決算される。野外勞働者は米をたんと食ふ 座職者少しか食はない。即ち米に就いて云へば、座職者は消費を制限されてゐるのであるが、その代り、野外勞働者の享樂することの出來ない或る物は座職者は享樂することが出來るであらう。協同の生産と協同の消費とが行はれる場合に、少く取つた者も多く取つた者も誰も不平と感じないのは、即ち自己の生活の様式に從つて、各自分だけの滿足を得るからである。

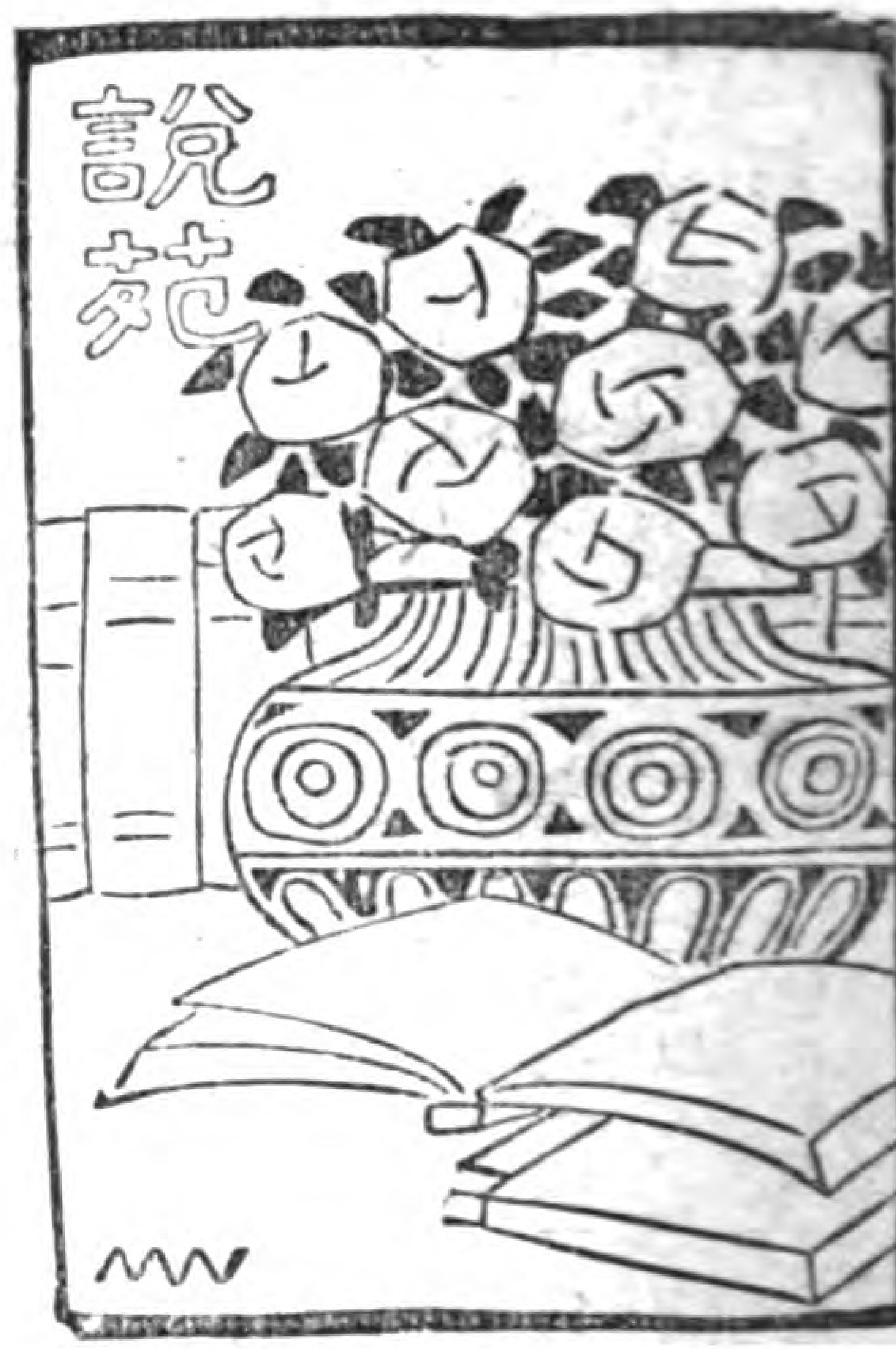
生産は今日に於ても協同である。各の分業がそれぞれ人間の特殊の生活様式に運命づけてゐる。工夫は暗い坑の底で、電信工夫は高い空の上で、それぞれ異つた空氣を吸はねばならぬ。さういふ運命の不平等に支配されながら、人々は協同して生産に從ふ。この不平等が平等的に決算されるには、即ちその異つた運命にある人々と雖も、それぞれその異つた生活の様式に從つて生活を充足せしむるの外はない。今日の組織はそれが缺けてゐる。だからこの組織の下に於て、如何に生産を押し進めても、窮乏者の比率の高まることは依然として已まないのである。

失職者を生ぜない爲めに生産を躊躇するといふことにしても、統計の示す通り、産業の發達した程度の高い國ほど失職者

の數は殖えてゐる。それはつまり如何に產業が進んでも、それは多數人の生活を豐富にする目的ではないのだから、利潤獲得の必要から　何時でも工場を閉鎖し、事業を縮小しなければならぬ。又生產手段を改善して、ますます僅少の勞力で多大の生產をする機械なり組織なりに進むから　失職者の數は常に增して行く外はない。生產奬勵といふことは、結局失業者を增すことである。即ち多數者を窮乏に導くことである。

生產が社會的に行はれ、消費が生產と社會的に結びつけば、人間は、特に節約を宣傳されなくとも、冒頭に述べたやうな自然の本能から『經濟心』を働かして、立派に節約をし　又同じく自然の本能から『生產心』を働かして立派に生產にいそしむ。此本質から離れた組織の下では、節約も生產も　必ずしも人間を幸福にするものではない。從つて人間が生產を厭ひ　節約を嫌ふ。

節約から生產に進むことは當然であるのは云ふまでもないが、その生產が大局に於てどういふ結果を持ち來すかは、要するに今日までの實際の例によつて明かである。あのやうな大戰爭が再び起るかどうか斷言はされないが、あの戰爭が起る間際までの各國に於ける多數民の窮乏狀態は今後も依然とし、續くであらう。



群雄割據の支那とその統一

黒頭巾

一

◉今や、突如として、支那政局の第一線に現はれ來りしものを齊燮元とす。彼が、此の一擧に地歩を占め得ば、恐らくは、彼は、一代の風雲兒たるを得ん。

◉蘇浙の一戰は、彼の爲には、秀吉の尼ケ崎合戰に比すべし。此の一戰に、直ちに、能く天下に主たるを得るにあらずと雖、…者たるの地盤は、則ち此に定まらん。

◉此の一戰は、單に、齊燮元と盧永祥との折衝にあらずして、實質に於て、奉直戰たるが故に、興味深し、而して齊と盧とが、ともに奉直の群雄中に於ける代表的人物たるが故に、ますく感興、深し。

◉齊と盧とは、年輩、閱歷に於て逕庭あり。盧は、すでに完成し、爛熟し、既成品たり。齊は則ち年壯氣鋭にして、新進の未成品たり。老練勝つか。英氣勝つか。二人者の對抗の、興味の一は此にも存す。

◉張作霖と、吳佩孚とは、奉直の中心勢力にして、またすでに、半ばは偶像たるを失はず。未だ偶像の域に入らずして、實力を以て重きを爲すものは、齊と盧となり。

◉兎も角も、張と吳との二人は、兩虎並び立たず。互に、勝たば、天下を取るの志なきにあらず。然れども、此の二人の爲に尤も惜む所以のものは、才の足らざるを憂へず、兵の少にあら

す。二人の年齢、ともに相敵し、ともに天下を取るには、もう少年、若からんことを要す。此の點に於て、盧もまた既に老頭兒に屬す。

●此の際、齊燮元、年齢ひとり若く、僅に四十を過ぎたるばかり、體力、頗強にして男盛りの元氣勃々、まさに大に爲すあるべきの秋なり。石を水面に投じて波瀾を起すべきは、彼の使命ならずとせんや。

●支那の群雄のうち、雄傑の資を抱くは、齊燮元を推して第一とす。彼れの著はれざりしや久し。今や錐の穎脫する如く、春筍の伸び出づるが如く、頭角を拔くとともに、齊燮元の名、忽ちにして人口に膾炙す。彼の前途、果して如何。

二

●齊燮元は宣言して、兵を動かすも亦た平和の爲なりと稱す。戰には名分なかるべからず。唯だ此の一言、此の際、齊の口より出るに於て注目に値す。

●彼の言ふ平和とは何ぞ。平和の裏に、擴張と統一とを意味せずんばあらず。彼の勢力を擴張し、由つて以て、支那の統一に到致す。擴張は統一の階段なり。此の意味に於て、蘇浙の對抗は、吾人に感興を與ふ。

●袁世凱の失敗以來、支那の國情、日に分裂に赴けるは世人の知るところなり。各省の軍閥の雄なるもの、悉く半獨立の形勢をなし、支那は殆んど聯邦の如くにして、これを統一するの政府あることなし。

●名は支那にして、事實に於て獨立國をなすは、第一に、張作霖の滿洲なり。張作霖は、自から東三省自治保安の總司令と稱すれども、その實は滿洲王なり。

●滿洲王と稱せずして總司令と稱するは、支那のうちだいにて、北京政府の統治を受けざることを意味す。奉直戰の敗北の後、北京政府に對し、自衞の爲め、自立して總司令となりしを以て、未だ獨立國をなすの準備なかりしなり。

●張作霖の立場としては、獨立國となるよりも、その形に於て、支那の一部たるを以て、彼の爲めに便利たりとす。彼をして、呉佩孚と對抗して、支那の範圍の中にあらしむるが、日本の爲にも利益なるべし。

●支那の本土に於ける實力者は呉佩孚なり。然れども彼の地盤は專ら北支那にありて、南支那は未だ彼の縄張に入らず。齊燮元の手を借りて、南方を直隸派の圏内に入るるを得んことは、呉佩孚の至願たらずんばあらず。

●支那の南北を控制するは、必らず揚子江を失ふ可らず。本

奉、張と齊と[illegible]なく、[illegible]なし。今日以後、呉、その[illegible]を[illegible]に及んで、堅く齊に結ぶは、長江を失はざらんが爲に外ならず。

●張作霖は、塞外の東三省に居り、自から割據の形勢を作ること易し。呉佩孚は洛陽に居り、直魯豫三省の巡閲使と稱すれども、その地勢、割據に便ならず。

●張は、進んで本土を掌握するを得ざれば、退いて滿洲王たるに安んずるを得べし。呉は、則ち、勢、本土を總攬せざるを得ず。

●山西に閻錫山あり、一省を固守して、事實に於て一國を爲すといふも可なり。山西一省の文化と政治と、支那に於ける異彩たるを失はず。山西の境に入れば、一見して風氣の優れるを見るべし。然れども、即に大望なく、その經營、全く一省に留まり、大勢に關係少し。

●支那の將來に大關係を有するは、南方の均衡とす。蘇浙の抗爭は、均衡の安定を解決するの鍵たらずんばあらず。齊、勝つか。盧、勝つか。その結果は本位の興廢に關す。齊、勝たば、支那の統一の機運を促がすべし。

三

●中華政局の將來をトするは、必ず先づその形勢の變遷を洞觀

するを得ん。[illegible]

分ちて、凡そ三期となすべし。第一は袁世凱、次は徐世昌、現在は曹錕。

●孫文、黎元洪、及び[illegible]が[illegible]たりし時は、皆、短かし。此の三者に分局せしむるを妨げず。

●李鴻章、左宗棠、張之洞は、清朝、最後の三元老とす。此の三人のとき、その則するところ、悉く精誠を盡して、清朝の命脈を維持するにあり。革命は孫文を以て始まる。

●支那の開闢以來、政體を變更して、前朝の安全に保存せらるるものは清朝の外にはなし。支那歴史の一大奇觀とすべし。此の意味に於ては、支那の六千年來、此の革命ほど人道的なるはなかりし。

●宣統帝が北京にあるは羅馬法王がローマに居るが如し。依然として帝室を存し、帝室の財産あり。法王と異なるところは、法王には權威あり、宣統帝には唯だ名譽あるのみ。一箇の大紳士といふにもあらず。徹底的に、現代を超越して、限られたる宮殿のうちに、日を送るものは宣統帝なり。

●王國なくして、但だ財産あるのみの王者は、宣統帝を以て世界的に嚆矢とす。現代の支那に於ける一の驚異は、則ち宣統帝ならずんばあらず。

●清朝帝室の理想は、唯だ安全の二字あるのみ。古美術の支那に保存せらるると同じく、過去の歴史の象徴たるものは、宣統帝なり。宣統帝は支那の骨董的裝飾たるに過ぎず。

●但だ、此の光榮ある裝飾は、屢、世人の貪慾を引き、政變の動機となることあり。袁世凱死し、民國の成績擧らざるを以て、殊に世人をして帝政を追懐せしむるものありし。若し、張勳をして、深謀、熟慮して、事を擧げしめしならば、復辟運動は成功せしやも知れず。

●宣統帝に復辟の野心　し。共和國に骨董的裝飾としての唯一の貴族を以て自から甘んずるが爲に、宣統帝は、政變の動機とあらず。

●清朝の保存は、袁世凱の野心の副作用たらずんばあらず。袁、天下を取るを急いで、清帝の圓滿退位を誘致す。帝室の無事なるを得るは、それが爲のみ。

●袁世凱の洪憲皇帝、失敗して以後、復辟の運動遽かに已まず。張勳の失敗の後、復辟の希望絶え、徐世昌自から大總統となるに及んで、支那の軍閥に、復辟の影、消ゆ。

●復辟は、皇帝を以て支那を統一するの意味なり。共和の地盤、今や、すでに確定す。統一の象徵は、皇帝にあらずして、一箇の風雲兒、軍閥の精粗のうちより起らん。そは　して誰ぞや。

四

●大總統の公府のうちに、園中に、一の石室あり。袁世凱、自から嗣後の大總統の名を勒して、石に刻せしところなり。それ等の名の中に、段祺瑞なく、固より曹錕なく、大總統となりしものには、僅かに徐世昌一人あり。

●袁の時、曹錕、僅に、一介の將官たりしに過ぎずして、未だ袁の眼中に映ぜず。袁は、歿後五六年にして、此の小卒が民國の覇者たらんことを、到底、想像する能はざりし。

●袁の歿後、民國の形勢、急轉直下す。當時の群雄、なほ存すといへども、概ね老衰し去る、鞍に據つて顧盼するの勇あるものなし。十年ならずして別世界となれり。

●民國の始より咆哮して已まざるものは、南に孫文あり。行盡くして行き詰まり舞臺を退けるものは、黎元洪と徐世昌とあり。

●孫文は未だ理想境に達せざるが故に、健闘を續く、志を得ざるが故に、猶ほ氣力あり。黎元洪は意外の光榮に浴し、大總統を得たるは、自から夢の如し。固より、此の上に活躍するの志あることなし。徐世昌は、自から期するところを贏ち得たり。默笑して晩生を送るあるのみ。

●其の一部分に於ける活躍者は、段祺瑞、馮國璋なり。而して其の器には、段祺瑞、吳佩孚の如きも大なるべし。然れども此の大國の盟主たるには拘らず。帝と梁との間にある俊才は孫文なり。これを以て、月桂冠を得るに至らずといへども、十五六年來、第一流の間を彷徨して、支那政局の一開展たるを失はず。

●孫文の生涯は、恐らくは、いつまでも、かくの如くなるべし。或意味に於ては、彼は終生、名譽ある未成品として終はるならん。日本の政客に對照すれば、その經歷、或は尾崎咢堂と似たるもののなきにあらず。

●若し思想、辯論を以て天下を得ること、米國に於ける如くならしめば、孫文は、月桂冠を得ること必ずしも難きにあらざるべし。彼が留學して歸り來りしとき、心中、三寸不爛の舌、能く天下を得べしと思ひしに相違なし。

●六千年來、劍にあらざれば天下を得可らざるは、支那の常態なり。今、猶ほ古の如し。支那を統一するものは、軍閥の雄ならざる可らず。此の見地に於ては、孫文は、天下を爭ふの資格あることなし。

●孫文の出現に後るること十數年にして、袁世凱は始めて第一線に立つ。無論、その閱歷、名聲に於て、遙に孫文の後備なり。然れども孫は舌を振つて立ち、袁は劍を提げて立つ。前途

[illegible]

五

●孫文の聲名、長く續くは、思想、辯論を以て生命となせばなり。支那の大學々生に、大總統を投票せしむれば、つねに第一位に居るものは孫文なり、此の點に於ては、群雄のうちに、孫文の肩を摩するを得るものなし。

●支那の南北を通じて、青年學生に人氣ある政治家は孫文なり。若し支那に普選を實行するとせば、彼は尤も有力なる候補者の一人たるを失はず。孫文學說の一書は、彼の思想、辯論を見るべきものなり。群雄に、此の如き書あるものなし。

●然れども學生は勢力にあらず。故に、孫文には人氣あり、勢力なし。必らず話題に上るの名にして、年を逐うて、ますます大總統の候補たるに遠ざかる。

●或は、支那人には孫文を目するに大山師を以てするものあり。徒手空拳にして天下を取らんとするを、支那にては大山師なりとせば、彼は則ち大山師たらずんばあらず。

●彼は、時と推し移り、思想界の先頭に立つて青年を招く。その政治運動は十五六年に渉り、百戰百敗にして人氣は衰へず。一敗する每に、却つて凱旋將軍の態度あり。

●其の實力なく、つねに辯論を以て、煽動を事とし、游星的態度を以て、一方の雄となり、支那の政局に影響しつゝある點より見れば、咢堂居士と相似て、或は勝さるべし。

●學問思想を以て、政界に立脚し、一箇の元老とたれるものには康南海あり。その學殖文章は孫文に勝さるや勿論なり。然れども政治家としての素質は孫文に及ばず。

●康有爲に随つて起るものを梁啓超とす。器局小さし。章炳麟、蔡元培、胡適の諸人、學者として一代を動かすといふとも、みた政治家にあらず。

●革命の爭亂起りし以來、學問、思想に立脚して政界に出入する者のうちにては、孫文、學問としては尤も淺く、政治家としては尤も熟練あり。

●孫文の全盛は、革命の初年にあり。袁世凱の生時、彼は袁の敵にはあらずといへども、天下の孫文たらずんばあらず。彼の意氣たほ盛んになるに、時勢は變遷し、今や、彼は南方に偏安するを免かれず。

●試みに、中央の曹錕、南方の孫文、塞外の張作林の三人を以て、三國の形勢に對照せば、ともかくも曹錕は魏の曹操たるべし。たとへ天下を統一せずとも覇者たるを失はず。

●張作霖は、東三省を固めて深く自から守ること、呉の孫權に似て、孫文は却つて蜀の劉玄德たるべし。革命以來、共和の正統は孫文に存するやも知れずといへども、聲威は第三に落つるならん。

●曹錕の地位を繼承する者、呉佩孚にせよ齊燮元にせよ、塞外の張作霖を制するを得ば、則ち天下を統一するを得ること、三國が終に魏に歸したるが如くなるべし。

六

●直隸派の中心勢力たる呉佩孚、若くは次いで起れる齊燮元が、果して天下を統一するを得可きやは、則ち支那の將來に於ける尤も興味ある問題たるはいふまでもなし。奉直戰に呉佩孚、勝ちしが故に北京政府は直隸派の手にあり。然れども北京を得たると否とが、天下を統一すべき決定的の要件にはあらず。

●抑、支那は終に統一せらるべきや、これ世人の、つねに口にする問題なり。統一せらるべしとせば、何ものかこれを能くすべきや。

●支那を統一するものは、唯だ一の劍あるのみ。劍は軍閥を象徴す。劍の外に、能く統一するを得るものあるべしと思はれず。これを以て、支那の政局を論ずるものは、軍閥を考察せず

[illegible]ならず。

●[illegible]に、形に於ては藩鎭たり、其の質は聯邦なり。將軍には儼然として王者なり。藩鎭の併呑に次ぐに併呑を以てし、非常に段勢なる一大將軍、出るに及んで、天下、始めてこれに歸せん。

●袁世凱の晩年以來、分裂の精神、支那を支配し、四分五裂して、幾多の有力なる將軍を生じ、以て今日に至る。現在に、その雄者を呉佩孚と張作霖とす。その餘は悉く鈍栗といふを妨げず。鈍栗の錚々たるものを、齊燮元と盧永祥の二人とす。

●袁の歿後、四分五裂したる支那は、春秋戰國の再現なり。唯だ思想界に諸子百家の輩出するを缺くのみ。諸子百家の輩出せざるは、支那の民族の振はざるを證す。

●今の支那が、春秋戰國の如くに、つねに交戰を事とするなきは、外交關係に拘制せらるゝが爲なり、外交團の力なり。昔は、中華の外に世界なし、今の支那は、世界の大勢に制せられざるを得ず。

●支那、自から諸子百家を有せずといへども、海外の思潮、あらゆる方面より支那に流入す。今の支那人は昔の支那人にあらず。新思想は、支那の新勢力たらずんばあらず。

●然れども此の新勢力が、春雨の大地に浸み込むが如く、民族間に地盤を作り得る後、始めて支那の統一を期するを得べしと思ふに誤なり。

●[illegible]は天下を得たるにあらず、[illegible]代の帝王、[illegible]を[illegible]するなしといへども、畢竟、これを以て[illegible]位を[illegible]するに[illegible]の珠玉たるに過ぎざるなり。

●今なほ昔の如し、將來に、支那の政局を統一するもの、必らず新思潮と提携するならん。新思想は統一の同行者にして、提灯たるを得べし、統一の王者たるを得可らず。國體は共和を以て進み、新思想は共和を照すの燈明たるに過ぎざらん。

七

●春秋戰國の終に一に歸せしが如く、民國の藩鎭、分立の勢、窮まりて統一の機運生ず。合從連衡は則ち其の道程なり。張作霖、段祺瑞、孫文、盧永祥の連絡運動は是れなり。

●百川の漸次、合流して遂に一に歸し以て海に朝宗するが如く、天下の藩鎭、しだい〳〵に奉直二派に連合し、支那を舉げて、此の二大勢力の抗爭となり、結局、一虎斃れて、一虎の天下とならん。

●春秋戰國が、唯だ七國に縮まりしまでには、幾多の經緯あり。保元、平治が源平二氏に、元龜、天正が豐臣、德川の二大流に合流するに至るまでに、波瀾曲折ありしが如く、支那の[illegible]

北を通じて、奉直の二大勢力の對立と定まり、すべての將軍、旗幟鮮明となるまでには、なほ若干の歳月を要せん。然れども早晩、かくの如くならざるべからず。

◉前に張と吳との奉直戰爭あり、今や齊と盧との蘇浙抗爭あり、一戰爭ごとに、支那統一の機運を醸成す。

◉十年前、張作霖、東三省に蟠居し、地盤を固め、始めて一方の雄となる。然れども未だ天下の雄にあらず。安福戰に段祺瑞を逐ひ、羽翼漸く成るに及び、始めて天下の雄となる。これより天下に志あり。將軍の中、始めて統一を夢みし者は則ち張作霖なり。

◉安福戰は、二の風運兒を生む。第一は張作霖にして、第二は吳佩孚なり。此の時、張は曹錕と雁行し、吳は未だ張の敵手にあらず。吳は、張に次いで起りしにあらず、張を追うて起りしものが吳なり

◉安福戰が段祺瑞の勝利に歸せしならば、南北の統一は、或は成功に近づきしやも知れず。段が失敗せしが爲に、群雄、一擧に、一人の段に歸宗す可かりしものが、張と吳との二人に分流するに至る。統一運動の一大頓挫とす

◉段祺瑞は、武力統一の大旗を建つ。而して彼は、その適材なり。袁世凱の歿後、群雄に、一頭地を拔くものは段にして、彼が、武力を以て、その志を行はんとしたるは尤も可し。

◉段の後、張も吳も、武力統一の信者に非るはなし。此の二人、信玄と謙信との對峙と同じく、共に、天下の志ありながら、互に、力、匹敵するが爲に、その精力を、對峙に盡くし、懸命に對抗するのみにして、その志、天下に伸ぶるに遑あらざるなり。二人ともに、段祺瑞より一枚下の役者なり。

八

◉民國以來の政治家は、袁世凱を第一とするは勿論なり。堅忍不拔にして、度胸あり、愛嬌あり、萬人を籠絡するの魅力を有するは、日本の桂公と相似たるものあり。その天分は、李鴻章に及ばず、然れども修練は、その上に出で、實行としては、支那近代の英雄たるを失はずといへども、晩年を善くせざることも桂公と同じ。

◉袁世凱の次に、徐世昌と段祺瑞とあり。徐世昌は清朝の遺老にして、潜かに復辟に志あり、民國、近來の巨頭のうち、尤も陰險にして、處世に巧なるものなり。徐を女性的とすれば、男性的の雄者を段とす。

◉段祺瑞は、革命以來、一意、共和の信念を以て一貫す。南北の統一に急にして、武力主義を標榜すといへども、純乎たる共

和の政治家にして、孫文は舌を以てし、段は劍を以てするを異なりとするのみ。

◉段は、共和の爲に、袁世凱の民國創立を助け、袁が皇帝の志あるに及びて忽ち彼に反對し、徐世昌が陰に復辟を謀るに當り、一擧して張勳を破り、以て復辟を挫く。民國の歷史に功勞あり、實力あり、而して遂に大總統となるを得ざるは、彼の運、足らざるなり。

◉段に比すれば、馮國璋が大總統たるを得たるは僥倖のみ。然れども馮は南京に據り、武力を擁す、幸運に乘ずとはいへ、また、多少の資格なきにあらず。

◉馮公の才の美なるも、驕、且つ吝ならしめば何ぞいふに足らん。況んや馮の如きにして、才なく、吝なるをや。彼をして吝ならざらしめば、あれだけの兵力を擁して、尙ほ多少の成功を占むるを得可らざりしにあらざるべし。

◉革命の幸運兒は黎元洪にして、風運兒は則ち張作霖と梅蘭芳となり。支那の俳優は、河原乞食たりしを失はず、一たび俳優となれば、三代、擧試に應ずるを得ず。民國以後、四民平等、梅蘭芳、一躍して支那の人氣者となる。

◉凡そ福德の大なる、古來の英雄、黎に及ぶもの一人もなかるべし。自から期せずして大總統となる、眞、未曾有の果報者にあらずや。

◉支那の制にて、尤も人望ある英雄は、則ち趙匡胤。趙は則ち宋の太祖なり。士卒强ゐて黃袍を彼に着せ、擁立して天子となせしと傳ふれども、かくの如きは、修飾の文章のみ。實は、趙匡胤自から太祖たらざる可らざる仕掛をなしたるに外ならず。黎元洪は、則ち、これと全く異なり。

◉黎元洪は、革命の勃發地に、旅團長たりしが故に、偶、革命の首領、その人なく、乃ち偶然、推されて金看板となりしに過ぎず。餅を搗くところに居合はせたるを以て、餅を食ふを得たる作客は則ち黎元洪なり。當時、彼をして北方、いづれか、とにかく革命の舞臺に遠隔の地にあらしめしならば、彼は、漠然として不得要領なる一武人として終はりしなるべし。

◉彼は、仁愛なること、梁山泊の首領宋江に似たるものなきにあらず、これ彼の長所なるべし。然れども、優柔不斷なること、民國以來、第一なり。彼と、今の曹錕とは、好々爺の好一對なれども、曹は、黎の如く愚図々々ならず。

◉鈍根は成功の要素たることを立證するものは黎元洪なり。出る釘は打たれ、銳敏なれば却つて伸び難し。然れども鈍重、

ず、無力なること黎元洪の如くにして、尙ほ能く天下を得たり。大總統にもなるほど故、何か非凡の點あるべしと思ふ者少からざるべし。彼は、全く平凡なり、眞に、運鈍根の三拍子揃ひし好漢たるに過ぎず。

◉機敏にして、剃刀よりも切れる張作林は、嘗て、副總統を以て誘惑されしことあり、然れども大總統たるには却つて縁遠し。敏捷は、群雄のうち張作霖第一。張の眼中には、悪や、黎や、曹錕や、すべて恐らくは痴呆漢のように見ゆるならん。

◉遲鈍と思はれしものが、何時の間にか大將となる。張作霖、徐樹錚、梁士詒の如きは、智、餘あり、德足らず。德者は、現在にては、曹錕なるべし。

◉曹錕は、武將を以て出身す。その人物、譬へば、漢の高祖の小なる者なり。將軍にして勇武を以て著はるれども、未だ嘗て用兵の妙を示せしことなし。彼の勝ちし戰には、吳佩孚、つねに、その智勇を盡せり。然れども能く吳佩孚の上に立つべき器は、やはり曹錕なり。

◉蔡鍔が南方に奔つて討袁軍を起せしとき、曹錕、乃ち袁世凱の命を受け南伐す。蔡鍔の爲に逆襲せられ、僅に身を以て免かる。此の時、吳佩孚なかりせば、曹は危うかりし。

◉或は傳ふ、當時、南方に美人あり、花寶寶といふ、芳紀まさに十八。曹錕、その名を聞き垂涎すること久し。陣中、此の明珠を得て耽溺し、大に油斷を生じ、則ち蔡鍔の爲に乘ぜられしなりと。

◉曹錕すでに年六十、鞍上の勇氣は伏波將軍に讓らず。體格、屈強にして、頗る精力あり。美人を貯ふることも少からず。當年、愛幸せし美少年、今、權柄を取り、彼の德を累すること少からずといふ。

◉袁世凱が練兵大臣となり、天津に調兵小站を設けしとき、曹錕、すでに營長たり。袁、彼の人物、渾厚たるを看破し、初めてこれを拔擢すといふ。

◉實に、曹錕の長所は、その寬厚なるにあり。此の點に於ては、群雄に一頭地を拔き、自から上長たるの態度あり。市井に生長し、貧困にして無學なり。少年の時より、寬厚にして人に愛せらる。彼の出世は、唯だ此の二字にあり。

◉彼の兄弟五人、弟を曹鋭及び曹鍈とす、彼は第三子なるを以て、當時、人、呼んで曹三爺といふ。無能にして酒を好み、酒の外に道樂なく、但だたわいなく酒肆に沈湎し、勞働して得るところ悉く酒に抛つといへども、醉うて亂はず、寬厚を以て酒徒に愛せらる。

◉觀相の老人熊珍といふもの、曹三爺を相して、極貴人の相あ

りとし、これを激励して、斷然、家を去り、兵營に投ぜしむ。曹錕が立志の動機は此の如し。彼は一兵卒より起り大總統となれり。

十

◉政海を遊泳して身を保ち地を占むるの巧なるものは徐世昌に若くなし。巧ならんと欲するが故に、自から險險ならざるを得ず。たとへ自から陰險に志ざすに非ずとも、その形跡、陰險に渉らざるを得ず。或意味に於ては、彼は支那官人の代表的典型たらずんばあらず。

◉徐世昌は官僚の權化といふべし。彼の如くならしめば、日本の官海に在らしむるとも、必らず富貴を致すを得べし。彼は、野黨の首領たるべき人にあらず。

◉彼は翰林の出身にして、初めより學問を以て立ち、文官なり。民國以來の大總統にして、軍閥以外に出づるものは彼一人なり。軍閥の天下にありて、武力なくして天下を取る、彼の才を見るに足る。然れども彼は策士なり。偉器にあらず。

◉徐は直隷省、東海縣の人。世人呼んで徐東海といふ。張之洞を張南皮、袁世凱を袁項城、黎元洪を黎黃陂といふ如き、支那人、みな人物を呼ぶに鄕里を以てす。同鄕同省相結んで黨をな

す。且、馮國璋を中心とする直隷派といひ、張作霖の奉天派といひ、段祺瑞の安徽派といひ、軍閥は皆滿開ならずんばあらず。徐東海が總統たるを得たるも、直隷人たるにあり。

◉徐世昌、字を菊人といふ。人、溶として菊の如しの古句を折つて、菊人といふならん。名に必ずしも實の賓ならず。彼の淡泊ならざること太甚だし。

◉民國の初、彼は舊思想を抱きながら、共和の世に立ちて、時代に後れず、而して自から袁世凱よりも先輩なりと信じ、袁の下風に立つことを潔よしとせず。此に於て、清朝の遺老を以て標榜し、袁世凱、これを徵すに大臣を以てすれども出でず。

◉清朝の遺臣、聲望あるもの、袁世凱に招かれ、皆、出でて大官に就く。徐世昌、ひとり高蹈して出でざるを以て、内外ともに、その高風清節を稱す。實は、徐の志、首相たるにあり、それ以下には出でざるのみ。

◉民國、創立後、十年を經て、徐は、なほ舊思想を抱いて、しかも政局の第一流たるを失はざるは、偏へに、その出處、進退の巧なるに由らずんばあらず。

◉東海は、詩文書畫ともに視るべし。畫人としては、現代支那の一名家たるを失はず、書は蘇東坡を學び、東坡の變化と神味となしといへども、また善く東坡に似たり。作家の文章、たく

のくにして、その餘裕を示すに足る。

●徐東海の言行、悉く表裏あり、その言は變化なしといへども、その策略は頗る變化あり。袁世凱、段祺瑞、馮國璋の諸雄、みな、その操縱するところとなる。但だ袁は梟雄、徐と互に利用す。その他の諸人は、徐の爲に翻弄せられ、或は手玉に取らる。

十一

●魚が水を離るること、政治家が權勢を離るると同じ。寂寞に堪えざるにあらず、生存と煩悶に堪えざるなり。況んや支那の如き、官人萬能の國に於てをや。徐東海が、清朝の遺老として高臥せしは、一時、その聲名を賣るが爲のみ。

●支那歴代の革命に、前朝の遺老と稱して隱遁するもの、後、遂に徵命に應じて出でざるもの殆んど稀なり。北京に謝疊山の祠あり、彼や遂に事へずして餓死す。彼の詩に、人間何獨伯夷淸と歌ひしは彼の心の聲なり、彼は伯夷以來の淸節といふべし。

●徐東海、何んぞ謝疊山の事を識らざらん。彼は、疊山の如き人にあらず。彼は權勢、名利の人。彼の苦しむところは、權勢、名利の爲に起つに非ざるの態度を示すにあり。

●凡そ世上の、高風淸節といひ、淸廉潔白などと稱するもの隨分、當てにならざるもの少からず。何んぞ必ずしも徐世昌一人を責むべけんや。彼は、王莽の如くに大規模ならず、袁世凱の如くに圖太からず。陰險、老練にして志を得たるに過ぎず。また是れ過渡時代の一人物といふべし。

●揣摩、揣度は政治家の能事なり。これを能くするもの必ず成功す。彼の思ふところ、我、これを知つて、言を出して、暗にこれに中つるときは、その說、行はれざることとなし。かくの如きは智者に非ざれば能はず。徐東海の、袁世凱に於けるは智者といふべし。

●若し初期の大總統をして袁世凱以外の人物ならしめば、徐世昌の機鋒は、かくの如くに現はれざりしやも知れず。然れども、いかなる場合にも、魚は水を離るる能はず。いかにもして彼は權勢に近づかんとせしならん。

●民國すでに成立し、袁世凱、早くも帝政を思ふ。民國の制、國會は大總統を牽制し、適意の首相を任命するを得ざらしむ。かくの如きは、袁の甘んずるところにあらず。此の時、その機微を察し、袁に說いて、國會を解散して、適意の內閣を作らしめたるものは徐世昌なり。而して初めて國務卿となれるものが徐たるは勿論なり。

●國務院を改めて政事堂とし、大命を徐世昌に下して内閣を組織せしむ。則ち事實に於ける袁世凱皇帝の最初の政府たり。

●徐世昌大命を承け、毅然として草廬を出で、首相の印綬を帯ぶ。此の政變に際し、時局を收拾するの名目あり。かくの如くにして、始めて、その出處は高風清節たるを傷けず、而して彼は豫期の國務卿を贏ち得たり。

●此の時、徐は舊任の閣員を悉く罷め、新に孫寶琦を外交に、朱啓鈐を内務に、段祺瑞を陸軍に、劉冠雄を海軍に、周學熙を財政に、周自齊を農商に、梁敦彦を交通總長に任命し、民黨の出身を一切用ひず。

十二

●袁と徐とは、その志を異にすといへども、その精神共和にあらずして、帝政に存するは則ち同じ。徐は帝政を愛し、袁は必らず自から帝たらんと欲す。

●李鴻章の晩年に、或外人、彼に勸むるに、彼自から帝たるべきを以てせしに、李、憮然として色を失ふ。袁は李鴻章の部下なれども、その人物、時代とともに變遷す。

●袁が天下を取るを得しは、火事泥の類なるものならずんばあらず。孫文、黄興の徒、盛んに御馳走を作つて、御馳走のでき上りし頃、孫を用して、箸に取りしは大總統たり。

●清朝の末年、袁世凱、項城に退きしき、徐乃ち袁を待つ、いなか大官に倣うて、油揚げの通るを伺うが如きは彼の態度なり。

昔より巧みに天下を取りしものなきにあらずといへども、鳶が油揚をさらつた如くに、世人の呆然たる間に、一瞬に、天下を取りしは袁世凱あるのみ。

●袁世凱と孫文との關係は、譬へばインチキの如し。インチキは詐欺賭博なり。巧に、速に、勞少くして、時局を一變し、理想的の天下となさんとして、妥協、利用の野心は同じことなり。袁の方、賭博に巧みにして、孫はインチキに失敗したるなり。

●負け角力は苦情をつけるといへども、その心中暗に、自己の敗北を自覺せざることなし。孫文の、袁世凱に於けるも、當さに、かくの如くなるべし。

●此の事、百年前、帝政時代に起りしたらば、孫文の苦情は苦情にならず。袁世凱、その儘、皇帝となりすまして、孫文は蹋天蹐地、その安全さへも期し難かるべし。

●民國、成立して日尚ほ淺く、共和の勢、水の出端の如し。此の際、忽ち皇帝たらんとせるは、餘りに時勢に逆抗するものなり。巨人の力といへども、いかんぞ眞正面に時勢を制し得ん。

●況んや、袁世凱は、力を以てせず、術を以て巧に天下を得

といへども、世人、未だ、その力を認めず。凡そ天下を取るの前には、先づ、その力を天下に示さずんばある可らず

●那翁一世ほどの、大なる力を示したるすら、尚ほ、大總統の任期を延長し、これを終身とし、世襲とし、ともかくも形式的にもせよ、一通りの順序を踏んで皇帝たるに至る。袁世凱が、一躍、皇帝たらんとしたるは、時勢を知らず、また自から力を量らず。その失脚は寧ろ當然過ぎたり。

●九仞の功を一簣に缺くは、英雄といへども免かれず、一簣に缺くといへども英雄たるを失はず。袁世凱の失敗は、彼に勁敵なく眼中に一世を空しくしたるにも由る。

十三

●張作霖、吳佩孚の徒が、今日に於て、隱忍、持重して大過なきを得るは、互に勁敵あるが故あるのみ。群雄のうちに、一頭地を抜くこと、袁世凱の如きものなし。合從、連衡して、以て均勢を保つに過ぎず。

●袁世凱は、餘りに容易に天下を得たり。內には段祺瑞等をして、軍閥を聯盟して、清朝に退位を勸めしめ、外には孫文に交渉するに帝政の改廢を以てす。內外の對策、密ならざるに非ずといへども、その成功が、かくまで速かならんとは彼といへども豫期せざりし。

●袁世凱の末年、彼に關する俗說、頗る多し。逸話、秘話の多きほど、その人物が世上に映ずる影の大なることを證す。此の意味に於ても袁は近來の獨步なり。

●世說に、彼は、七個の婦人を妾とし、巧みにこれを統御したりと傳ふ。彼は、これを以て、その才を練りしともいひ、また、それだけの襟度ありしとも傳ふ。

●彼は笑容と温言とを以て士に接し、人言を聞くに吝ならず、これを以て輿望を得たること、篡奪以前に於ける王莽と異ならず、既にして皇帝となるの後、温良恭謙譲を忘れしことも亦王莽と同じ。

●張錫鑾は、また當代の一遺老、私德の清白なるを以て聞ゆ。鳳凰城にも居り、奉天にも居り、今の張作霖は、彼の眷遇を得て立身す。官を守ること清廉、家に餘財なし。その子は則ち官に居て富をなし、巨廈を作つて父の老を養はんとす。

●錫鑾、その子の扶養を受くるを屑しとせず。いはく盜泉の水を飲まずと、自から陋居を天津に營み以て居る。將軍は則ち巨富なるの世に在[illegible]は一の異材と稱すべし

●彼は　袁世凱の父と相識る　父、豫め彼に托するに、項城の輔佐を以てす。錫鑾、人に語つていはく、項城、洪憲皇帝たら

んとする中より、毫も人言を聞かず、專ら自から用ひ、諫を容るるの餘地なかりしと。

●項城、意滿ち、氣驕る。聰明すでに塞るの後、絕代の才藻ありといへども、自ら守るに足らず、皇帝たらんとするに急にして、鹿を逐ふの獵夫、山を見ざるに似たり。その爲すところ、疎漏多し。徐世昌の巧言を喜び褒錫を逸す。生平の項城と別人なり。

十四

●春秋の筆法を以てすれば、孫文、黎元洪の徒、袁世凱をして皇帝たらしむるものなり。若し、彼等の意氣、能く袁を牽制するに足りせば袁は、かくの如く、急に、皇帝たらんとはせざりしならん。

●民國の大總統は、代々公府に入る。公府は、帝室の宮殿にして、その園池には、南海、中海、北海を控へ、殿廊、莊館にして、居然として帝王の氣あり。代々の大總統、袁以後に敢て自ら皇帝と稱するものなしといへども、事實に於ては、大總統は、皇帝の氣分あり。

●徐世昌は帝政を復活するを得ざりしといへども、自から帝王の氣分に滿足したるべし。自餘の大總統、また此の如し。孫文といへども、此に居らしめば、欲化せざるを難しとすべし。

●支那は、六千年來、帝王の國。宮殿の堂々として、帝宮の宮殿を誇るは、至らざるなく、盡さざるなし。あれを以つて人心を威壓するものありといへども、またこれを以て、英雄の野心を挑發するに足る。梟雄の姿あるもの、世變に際し、直ちに王座に登るの野心專たるを想ふ。

●支那代々の革命に、國初の、財政の一半は、恐らくは宮殿を作るが爲に費されしならん。北京の宮殿といへども、これを時價に換算せば、定めて莫大の巨額に上るべし。

●秦始皇、六國を統一して、阿房宮を作る。阿房宮は、啻に、宮殿の莊嚴にして民力を竭すを誇しるの意あるべし、然れども、滿目劉斷の國にありては、聖人の外、土階茅茨を以て人心を服せしむるに足らず。

●民國と爲るの後、大總統、直ちに代つて、帝王の宮殿に居るは、理に於て、得たるものにあらず。民國創立の元勳、此に思ひ到らず、袁世凱をして、王座に上り、皇帝たらしむるに至る。

十五

●袁世凱、皇帝たるを思ふ。徐世昌、その帝政を贊し、勸むるに登位を以てす。袁、微笑して、徐を以て知己とす。袁に叫

て帝政の復活するは、徐に於て甚しからず。若し、袁が失敗すとも、徐は苦しまず、徐は、袁の先鞭にして、屈して臣と稱するを屑よしとせざればなり。

●袁、乃ち梁士詒、朱啓鈐、周自齊等をして、籌安會を組織せしめ、上表、勸進して、袁をして皇帝たらしむ。抑、袁、大總統たるの以後、未だ國威、民福に貢獻すること少なく、袁の聲望、未だ南北を壓倒するに足らず。各省將軍の反對は、帝政といふよりも、袁世凱に對するの反感ならずんばあらず。

●若し、此の時、各省將軍をして、一齊に、帝政に反對するものならしめば、これより以後に至つて、安んぞ張勳の復辟運動をして、力あらしむるを得ん。

●清室の退位は、その衰弱に由り暴政に由るにあらず。これを以て、世情、清室を提れずとも、悪むに至らず、その退位には若干の同情あり。故に、帝政の復活とせば、袁が國を竊つて皇帝たるよりも、寧ろ清室の復辟を以て可とすべし。

●袁世凱、大總統たるの後、殿中に居て、自から帝王たるの氣分あり。未だ國内に向つて帝と稱せず。既にして、洪憲皇帝となるといへども、未だ外國に向つて、皇帝を稱するに至らず。

●洪憲皇帝は、自から朕と稱し、詔勅を下し、貨幣を鑄る。皇帝たるの事宜、悉く備はり、蹤跡すでに明らかなり。その衣冠、遺物、悉く天津に存す。

●革命運動は南方より起り、革命以前、南北、一たび決裂し、民國の創立に於て、暫らく南北の統一を見る。洪憲皇帝現はれて、反對の急先鋒は南方に起り、南北、再たび決裂して、以て今日に至る。

●袁世凱、神妙に大總統を守るとも、南北の融合は、容易にはあらざりしならん。寧ろ南北、表面の苟合を保つよりも、局面を打破して、一大勢力の出現して、根本的に、渾然たる統一を期するに若かず。段祺瑞の武力統一は、此の精神に本づく。

十六

●支那歴史に於ける南北の決裂は屢、繰返さる。固より今に始まるに非らず。對峙の時期も亦た甚だ長きに渉りしことあり。而して、その統一は、必らず武力に由る。今や、統一に値する一大武力を缺く。則ち天下を取るに足るの大軍閥なきなり。

●支那の南北の決裂は、米國の南北戰爭を思ひ出さしむ。若し袁世凱をして、グランド將軍たらしめば、或は皇帝たるを得しならん。

●袁世凱は、清朝を退位せしめたりといへども、ワシントンの

如く、戰つて其國を贏ち得たるに非ず。投票に臨み、四邊に大總統を贏ち得たるを以て、ワシントンにもあらず、グラントにもあらず、彼に威重なし。

◉淸朝の未だ亡びざりし前、彼は、淸朝の命を奉じ、戰つて孫文を破り、南方を壓し、而して後、時勢を見て、共和の旗を掲げて、自から革命を成就し、大總統となりしならば、那翁一世を以て自から擬するも、甚だ難きにはあらざりしならん。

◉項城以後、續いて大總統となりしもの、悉く濡手で粟を攫むものにあらざるはなし。その大總統たる、たとへ選擧に出るとも、天下を服せしむるに足らず。漫に傀儡たるに過ぎざるもののみなり。

◉商人として實力ありしものは、歴代、大總統の中、袁項城一人のみ。彼は、神經衰弱を以て斃れしといへども、その功を急ぎしとき、その心神、すでに衰微を生じ、生平の健全と、冷靜とを失ひ、唯だ病と名づくるに足らざりしのみなるを思ふ。

◉一箇の英雄としては、近代の支那人のうち、尤も評論に値するものは項城なり。凡そ國民性の常習を超越するものは、傑物たるを失はず。此の意味に於て、彼は傑物なり。

◉支那人の常習、沒法と不要緊との二語に盡く。これ支那人の、尤も短所とするところなり。沒法は方法なきの意、仕方なしといふに同じ。不要緊は、差支へないといふに等し。

◉支那人の宿失、悠長にして、伸びくしたる裏に、不要緊あり。諦らめの極めて好しと見ゆる裏に、沒法あり。一は、粘ばりの足らざるを示し、一は、用意の缺けたるを示す。

◉死を視る歸るが如きは、人間の、殊に、難しとするところなり。然れども、支那人には此の事、敢て珍らしからず。

◉俎上の鯉、その目を蔽へば則ち鬧動せずといふは、觀念の結果に出るにあらず。支那人、斷頭臺に上るに當つて、毫も懼れざるは、必ずしも宗教上の信念に出るにあらず、唯だメーファーズと發語するに過ぎず、メーファーズは沒法なり、無法なり。

◉袁世凱は、生平、斷じて此の二語を排斥す。沒法と不要緊とは人生の敵なりとなせり。而して彼は、自から勵行するを得たり。那翁一世が、不能の一語を辭書より除去せんといへると、併せて双美とするに足る。

◉吾輩は、彼の才よりも、猛毅の意氣を多とす。彼が一世の雄たるは、その成功にあらずして、此の人格の力に存せずんばあらず。故に、彼の生平、百事、すべて粘はりあり。折れず、撓けず、終に天下を取るに至る。

◉彼には威質を缺く。奸雄たるを失はず。然れども、その幕僚

の大なるは、群雄の上に出づ。これを古英雄に比するに、曾國藩の德器なく、王陽明の學問なく、曹操の餘裕なしといへども、また支那史上の一傑物たるを得べし。

◉彼の最後は慘憺たり。悲觀と煩悶と、ともに、その極に達し、暗殺を恐るゝことも太甚し。或は、地下の石室に隱れたりと傳ふれども、信ずるに足らず。英雄の末路は、屢、美人の晚年と似たるものあり。その全盛時を評價すべし。必ずしも末路を責むべきにあらず。

◉英雄の最後、神經衰弱に陷るもの少からず。那翁一世これなり。秀吉も亦た然り。いかに精神旺盛なるとするも、人間の心神の力、限あることを示す。況んや袁世凱の如き、不休の野心漢、その過勞、その大分を賦するものに於てをや。

十七

◉袁項城と徐世昌との關係は、尙ほ語るべきものあり。袁、蹤跡すでに著はるに及び、四方、反對の聲、起る。彼、深く宮中に居り、群小に包圍せられて世間を見ず。徐も亦反對の電報を押留して示さず。かくの如くにして、袁、皇帝となる。

◉徐世昌、袁に對する各軍の反對、盛にして、時勢、日に非なるを見て、久しく留まるの不可なるを見、老衰を以て、強ゐて排斥し去る。袁に請ひ、盛世の民として、晚年を目睹するを得ば願足るといへり。その意、袁氏の渦中に投ずるを避くるにあり。

◉項城、遂に東海の、強ゐて留む可らざるを見て、外交總長の陸徵祥を擧げて國務卿とす。徐東海、退いて家居し、笑を含んで言はず、靜かに袁の失脚を觀る。若し巧みに身を保つを以て明哲とせば、徐世昌は明哲たるを失はず。

◉袁皇帝、登位の後、徐世昌、趙爾巽、李經義、張謇の四人を擧げて、嵩山四友とし、以て暗に商山四皓の意に比す。入朝するに、臣と稱せず、拜跪せず。以て元老優遇の意を明らかにす。かくの如くにして、元老としての徐世昌の地位、定まる。彼が世變術に、その地步を進むるの巧なるを見るべし。

◉元老は、東洋の特有にして、政局調節の機關たり。然れども支那と日本とは、元老の內容、同じからず。皇帝に對するときは、支那の元老尊とし。政界に對しては、日本の元老、力あり。支那には、日本の元老に比すべきものなし。

◉支那の元老は媒妁人の如く、日本の元老は舅姑なり。支那の元老は、政界に出沒するといへども、圈[illegible]の人にして、日本の元老は則ち當局にあらずといへども、圈內に居り、當局者を監視す。

◉袁世凱、徐東海を得たるとき、喜悦していはく、嚴子陵は光武帝の故友なれども、尚ほ臣と稱す。吾、今、國の爲に、民の爲に、皇帝となる。心事、天地に愧ぢず、君、甘んじて嚴子陵たらずやと。東海、遂に去つて留まらざるに及び、これを元老とし、臣と稱せざらしむ。これを以て見れば、今の民國には、かくの如き元老なき筈なり。

◉秀吉の五大老は崇山四友と同じからず。五大老は秀吉の部下にして、秀吉に拜跪す。五大老は、明治、大正の元老に近し。

◉袁皇帝、洪憲の詔を發するに及び、南方、雲南、貴州、廣東、廣西及び諸方、一齊に獨立して討袁軍を起す。袁乃ち内閣を改造してゝ、世論を緩和せんとし、陸徴祥を罷め、再び徐世昌を起して國務卿とし、自ら皇帝を罷め、大總統と稱す。

◉袁、憤悶して疾篤きに及び、徐世昌を招いて後事を托す。孤兒、寡婦もつとも心に關するといひ、涙下る。夫人をして諸妾及兒女を率ゐて、徐世昌を羅拜せしむ。世昌、忙がしく答拜し、玉體、自重せよ。後事は、請ふ憂ふる勿れといひ、辭して出づ。

◉袁が訣別の一幕、徐世昌に對するは、恰、秀吉が家康に於けるに似たらずや。東海、必らずしも項城の天下を奪はず、然れども、また、その孤兒、寡婦の爲に、その背景とはならず。袁の歿後、袁氏の家族、僅に安全を保つのみ。固より當年の餘威あることなし。項城の子、袁克定、蟄居に[illegible]たるを以て知らる。

十八

◉袁の歿後、副總統黎元洪、繼いで大總統となる。徐東海、人をして黄陂に說かしむるに、黄陂は北洋系に非ずして項城を繼ぐが故に、北洋系を統御し難し、北洋系の先輩を徐東海とす、宜しく東海を元老として師事し、以て、一切の難題を解決するを得しむべきことを以てす。

◉黄陂は、餘りに愚直にして策なきを以て、東海を元老とせず。東海、大に黄陂を罵り、必らず黄陂を排斥せんことを計る。時の國務卿を段祺瑞とす。段、たび〳〵に東海の畫策に中てられ、黎と段との感情、日に遠ざかる。

◉王を射るは、先づ馬を射よ。徐の策、此に出づ。黎元洪は朴念人のみ、段祺瑞に出つて、その地位を保つを得る。段、倒れ去らば、黎の起つ可らざるや知るべし。

◉蓋し黎黄陂の人物、張子の虎の如し。遠く望めば、頗る威容あり。故に、先天的の傀儡的人物たらずんばあらず。彼は、民國以來、屢、革命の第一線にあり、而してその出處、進退、悉

く、純然たる被動的にして、未だ曾て、彼が主動的たりしことなし。

●神輿は自から動くこと能はず、然れども動くときは必らず人の頭上にあり。黎黃陂は神輿的人物なり。善く擔つぐ者は、實力ありて後に隱くれ、善く擔つがるゝものは、顯はれて要あり。神輿たるには、それだけの資格あるを要す

●黃陂は正直にして阿ねらず、德行は時流に冠たるの評あり。これ彼の半面なり。彼は木强漢にして軍人なり、剛々たる才子にはあらず。その主張は悉く他人に由り、民國以來、聲望、天下に滿つれども、未だ曾て實權を掌握したることなし。

●彼や、湖北を擁する兩歲なりしも、實權なく、袁に强招されて北京に來りし後、幽禁せられしと同じく、社會と接觸なく、元首たること一年なれども、何等の施設なし。彼の如く、要路に立つて、無能、無爲なる者も稀なり。

●彼は、硬直なる如くにして、一面には頗る怯懦なるところあり。一度、正義を主張すれども脅迫に逢へば、必らず挫く。彼は武人と婦女との兩性を有す。ピストルに屈し、騷動に屈し、最後には、自働車を驅つて、北京より天津に逃走せしは、世人の知るところなり。

●世人、彼を長者なりといふに、彼が德人にして、與みし易きことを意味す。彼に許すに、統帥の器を以てする所以にあらず。

●黎黃陂は、羊質にして、段芝泉は則ち虎骨なり。此の羊、此の虎に由つて、完全に守護せらるべし。若し兩者の感情、一旦、背反するときは、羊は忽ち虎に制せらるべきは言に及ばず。黃陂は、己を虛しくして、一意、專心、唯だ芝泉に信賴するを、彼の爲に得策としたるなり。

●今の黃陂は、もはや風雲兒たるの望ある可らず。彼が、民國以來、再び元首の位に上りしは、勿怪の幸にして、德人たる所以。彼や風月を樂んで、民國の貴客として、老年を送るを要す。

●此の如き大なる傀儡的人物、その人、恐るゝに足らざるも、これを擔つぐ者あるが故に畏るべし。民國の政局、すでに變遷し、また彼を神輿とするの時代にあらず。

十九

●徐世昌は時中の人、時中つねに飛躍を試みるの人、民國以來十三年、政局の變化に、つねに彼の影あらざることなし。民國の歷史は、徐世昌の歷史なり。

東海を以て黃陂に比するに、東海は武人より起らざるに、軍閥

に崇拜さる。特に際だつのは、黄陂の遠く及ばざるところなり。唯だ廉潔の一事のみ、東海は遂に黄陂に及ばず。

●民國以來、廉潔を論ずれば、蔡鍔を第一とす。蔡鍔の歿後は黎黄陂一人ならん。黄陂は操行清白にして、公俸の外、一錢を貪ぼらざること、終始、渝はることなきは、東海と趣を異にす。

●徐世昌といへども、支那の大官人としては貪慾なりといふ可らず。北洋大官のうちの貧者といふべし。彼に三所の別莊あれども、彼ほどの地位としては驚くに足らざるべし。家資、百萬に過ぎずともいふ。家居、頗る儉素、儒生の生活に似たり。

●東海は、唯だ私財に節約にして、公資を浪費す。此の意味に於ても、彼は、官僚の好典型たるを失はず。公資を以て私恩を賣り、賄賂をなし、社交に雄飛す。

●東三省に總督たりし者、東海の後、錫良あり、また唐紹儀あり。東三省の人いふ、錫良は公私ともに儉、唐紹儀は公私ともに奢、而して東海は則ち公に奢にして私に儉なりと。

●徐世昌、奉天に在りしとき、年俸十二萬兩なるに、その日食及び僕婢の給料は、尚ほこれを會計局より取りしといふ。家居の僕從は皆、舊兵士にして、公府、陸軍在籍に屬し、俸給を要せず。幕客は數人、寫字あり、譯電あり、祕書あり、庶務あり、いづれも官吏にして、彼の幕賓を兼ねたり。

●彼は家居、弊衣を着け、長、僕に酷を避く。かくの如く節儉なれども、賄道には吝ならず。殊に公帑を損って私賄を爲すときには、尤も大膽なるを致す。郵傳部尚書たりしときには、およそ各方面の樞要に、皆、一二等切符若干を毎月贈る。

●東海は文事の外、嗜好少く、趣味の人にはあらず。飲酒も麻雀も好まざること、支那の紳士に、極めて稀に見るところ。嗣子なきの故を以て二妾を納るといへども、嘗て冶遊を爲さず。芝居に行かず、骨牌を玩はず。民國以來、時に朋友と伴ひ、琉璃廠を冷觀することあれども、稀に安價の古書畫を購出すに過ぎず。家に貴寶多けれども、皆清室、賜ふところの藏器にして、これを奉天の宮庫に取りしものなりといふ。

●彼は節儉にして、節慾の人といふべし。老來、もっとも規律的の生活を爲し、夜十時に寢ね朝は四時に起き、起居飲食、みな節度あり。日々、自から體操を行ふこと半時間。これを以て體力旺盛、歩行健捷にして、老人の如くならず、軀幹逞ましく、眼光、人を射る。

●彼は、つねに謹嚴なる態度を持し、鄉黨の師たるを失はず。生平、嘗て疾言、遽色せず。また詼謔を弄せず。平居、怡々として、下を御すること寛なれども、人と狎近せず。言は迂遠を

取り、繁文縟禮を喜ばず。故友子弟に對しては、莊嚴にして教誨す。
◉彼は飽くまで謹直人を以て終始す。信を世人に博する所以。毫も磊落の言行なし。小事には怯に、大事には進んで避けず。
◉東海は黄陂よりも、眞率ならざれども、引當てになる人と、世人より見らる。その精神は官僚なれども、他より批難さるべき隙を見せず。君子にあらずといへども、几帳面なる才士なり。豪傑にあらずといへども、常識に富む。

二十

◉徐世昌を以て、民國以來の群雄に對照するは頗る興味あり。彼は北洋系の元老なり。北洋系の開山祖師は李鴻章にして、最後の住職は徐世昌なり。今や、北洋系は、直隷、安福の二派に分裂、抗爭し、世昌、なほ健在なりといへども、また如何ともす可らず。
◉支那の國民性の象徴ともいふべきは、徐世昌ならずんばあらず。此の意味に於て、彼の人物研究は頗る感興あり。彼と條件を同じくするものは、支那に於ては、古今、ともに成功者たるを失はず。
◉彼は風采堂々として、俗骨、儒皮なり。權詐、迎合の術、洞悉せざるなく、出所、進退の機を確察すること頗る熟せり。練されたる貴人にして、理想的の支那人なり。
◉徐世昌は、支那人の特色と長所とを殆んど具備するの概あり、これに對して孫文は、新歸化の外國人の如く、支那人らしからず。支那人より見れば、完全に外國人の性質を具ふるものといふべし。
◉孫文は、いつまでも學生の如く、新卒業生の如く、天下を觀て難事なしとなすものの如く、社會を見ること教場に於けるが如く、理想に活き、理想の外に世界なし。事を舉ぐれば必らず失敗し、聲名、空しく高くして、一事の成るなし。
◉拍手に迎へられて、直ちに壇に登るものは孫逸仙なり。琵琶行の美人の如く、千呼萬喚して始めて出で來るものは徐東海なり。それとても彼が青島に隱れ、輝縣に隱くれ、天津に據るを見よ、身上の死活に關する大問題に遭遇せざれば遂に出で來らず。
◉君子、重からざれば威あらずといふは徐のことなり。孫は餘りに輕々し。徐には、一切、稚氣を帶びず。孫は滿身、これ稚氣なり。時としては青山機關部首領となり、時としては黄埔大元帥となり、俳優の場に登るが如く、一幕毎に面目改まる。
◉孫と徐と相似たるは、ともに謙遜にして、驕慢の態度なく、

孫は已に多く者を信用し、徐も亦た之の私人を愛護するにあり。但だ、孫は性急にして、徐は持重す。孫は率直にして、徐は喜怒、色に露はさず。徐は、已に反對する者に對して惡感を放たすといへども、早晩、終に、これを排除し去らずんば已まず。

●孫は事を喜び、革命黨に據る。小學兒童の沙戯を好むが如く、つねに事を起して、成敗を意とせず。徐は則ち事を省き、整理を主とし、老官僚に據る。青年は孫を喜び、中年以上は徐を重しとす。

●孫は、社會の改革を生命とす。故に、新思潮に歡迎さるといへども、實力とならず。徐は新黨に誤らるといへども、世人の信頼するところとなる。新らしきものは光輝あり、舊るきものには潛勢力あり。孫と徐との成敗の分岐點は此にあり。

廿一

●馮國璋は群雄の一頭目たるを失はず。然れども、英雄の資ありて婦人の行あり。その長短所ともに餘りに懸隔し、一人にして、矛盾せる兩性格を具し、野心ありて勇氣なし。一たび元首の職に任すといへども、統一の器としては問題にあらず。

●懦弱なるに於ては、馮と黎と相似たり。而して黎の如く正直

ならず。英雄の面目とするは、孫は明かなれど、孫は世故に長けたることころあり、その才智は實に稱するよりも逆し。後來段祺瑞の如き上にたるあれども遂には剛の一字を缺く。才無くして才を逞しくせんとし、慎重ならざるに於て、徐世昌の敵にあらず。

●馮國璋、夏口を攻めて下關に入りし時、すでに戰捷の後なるに、突然、火を放つて市街を焚く。戰捷つて蛇足的の示威をなす、古來の兵法に此の事なし。畢竟、彼は英雄に似たる庸人なり。

●彼は直隸人にして、直隸の將軍となる。彼が地盤は此にあり。然るに未だ一善政を行はずして、江蘇に移り、兵を養ひ、財を蓄へ、始めて政局の第一線に現はれ來る。南京は天下の形勝、地利と民富と共に備はる、此に據りて持重すれば、天下の雄たるを得。彼が南京に居りしときの年收二百萬元と稱す。一旦、輕々しく大總統の好餌に釣られ、これを捨てて北京に出づ。

●彼が南京に居りしときの態度、太だ拙なり。廣く商業を營み、殊に阿片を販賣して、孜々として利を計る。偶、火災に阿片を燒失して、世人に笑はる。慾の熊鷹、股から裂けるといはずや、彼は慾の熊鷹なりし。

●支那に於ては、軍閥は則ち財閥ならざるはなし。將軍にし

て、劍を右にし、算盤を左にするもの珍づらしからず。何んぞ一人の張國祥を責めん。但だ彼は、その計の拙なりしが爲に、世上に笑を貽すのみ。

◉督軍たるもの、富豪とならざるはなし。張作霖の如きも、質屋を私營す、これ公知の事實なり。然れども世人、敢て怪しまず。阿片を販賣するものも張國祥のみにあらず。

十二

◉軍閥が財閥を作る所以は、勢力を張り、自衛を計り、また併せて獨立の計を爲す所以ならざるはなし。古なほ今の如く、支那史上の藩鎭といふもの、また此の如くなりしなるべし。

◉張作霖は志小ならず、故に、財を散じて勢力を張ることを力むるを以て、その富は、案外に大ならずといふものあり。然れども東三省に擁有し、群雄のうちにて、軍資の尤も優勢なるは彼なるべし。

◉吳佩孚が張に對し、その苦しむところは軍資にあり。彼が軍資の地盤は、京漢鐵道にあり。彼の勢力を以て京漢鐵道を抑へて、その利益を徴收す。彼は、事實に於ける京漢鐵道の所有者なり。

◉支那に於ける軍閥が財閥たる所以を語るは、今の支那の政局を語る所以ならずんばあらず。支那は戰國にして、軍閥の問題は軍資にあり。兵を練り、武器を購入するをこれ力め、殖産、興業、教育すべて放擲して、軍資を得るを事とす、

◉京漢鐵道の收入を押收するは、尤も豐富にして、尤も確實なる財源たるは言ふまでもなし。吳佩孚は、京漢鐵道の中間たる洛陽に割據し、鐵道の監視者として適切なる地位に在り。

◉北京政府ほど貧乏なる政府は、古今、東西になかるべし。此の世界的大國にてありながら官吏の俸給をも支拂はず、外國人顧問にも俸給を給與せず。各省のうち、唯だ交通部のみ僅に俸給を支拂ふ。

◉交通部は鐵道を管轄するを以て、北京政府のうちの唯一の富者たり。近年、吳佩孚が、その收入を押收し、その額年々、數百萬元に達するを以て、交通部も漸く貧窮し、鐵道、一切の修繕工事をなさず、新設をなさず。旣設は、唯だ、その持續に任するのみ。

◉今の儘にして進行せば、京漢鐵道の壽命、長からず。若し黃河の鐵橋にても、腐蝕して墜落するに至らば、吳佩孚も始めて押收の手を緩めん。それまでは、此の鐵道は、支那本土の交通の大幹線にして、しかも改善を講ずるの途なきこと此の如し。

◉督軍は、幾多の利權を有し、それが悉く財源を爲す。貪官く

らゐは問題にあらず。若し、コムミッションなどを以て報酬の材料とするを得ば、將軍に定俸あるもいたなからん。

◉商人としての富を論ぜば、東三省のうちにても、張作霖以上に出るものは、黑龍江將軍吳俊陞なりと稱せらる。彼は、風采樸々たる木强漢なれども、貨殖に巧なるは、見掛に據らず。

◉袁世凱の富は二千萬元なりしと稱す。襄位の問題に、前後、その半を抛ち、なほ千萬元を剩す。巨富を擁するは、天下の大事件に備うる爲なりといはゞ、それまでなり。但だ、かくの如き巨富を得たる途、果して如何。

廿三

◉吾輩、今春、雪を衝いて內蒙古に入る。滿鐵線の四平街より轉じて、四洮線に入り、鄭家屯に至る。鄭家屯は、內蒙古の門戶を扼し、殷盛の都邑とす。吳俊陞の邸宅あり、その妹氏、此に隱居す。偶、吳、母の病を歸省するを以て、吾輩、彼に面晤するを得。

◉彼の出身は博徒なりと稱する者あり、その眞僞を詳にせず、彼は强勇にして、善く馬を相し、騎乘に巧みに、老來、猶ほ能く數十里を馳驅す、彼の部下の勇卒といへども、なほ彼に追隨するを得るもの少し。

◉吳はいはく、十七歲にして軍に從ひ、四十年にして、一兵卒より今日に至る。年五十七。生涯の過半は蒙古にあり、蒙古の一草一木といへども諳知せざるはなしと。彼が私に能く將軍と稱する所以は此に在り。

◉彼は純然たる武夫にして、無學なり。强ゐて揮毫を徵まるるとき、必らず龍虎の二字を大書す。然れども吉林將軍孟恩遠が唯だ虎の一字のみを書せしに比すれば、なほ龍の一字、多し。

◉吉林省は長白山に接し、虎多し、吉林の町には虎皮を賣る。猛將軍が、特に虎の一字を書すは、吉林なればなり。彼の虎字は、必らず最後の一線を縱に引く、所謂縱の虎なり、支那にては、大官名士に請托するもの、豫じめ、その潤筆を請ひ、これを壁間に掲げ、招待して以て宴を張る。

◉支那にては、權勢者の潤筆は、以て、その身を飾るに足り、世間に誇り、併せて權勢者に阿るに足る。將軍の筆跡、これを以て頗る威嚴を現はす。

◉日本の紳商、松花江上の森林伐採に關し、孟恩遠に、利權を求むるあらんとす。先づ、彼の虎一字の幅を作り、彼を招請し、山珍海味を以て盛宴を張る。孟將軍大に喜ぶ。事まさに成らんとして、孟、官を罷めて北京に歸り、紳商の計畫水泡に歸す。

◎吾等、吳俊陞を見れば、越後の古勇將柿崎和泉守を憶ふ。柿崎は謙信の急先鋒たり、老ゐて元氣ますく旺盛、蛇を捕へて鉢卷となせりと傳ふ。吳は支那の柿崎なるべし。但だ日本と支那と、柿崎の異なるところは、彼が財に雄なるにあり。

◎鄭家屯より四洮線、二分して內蒙古に入る。一は白音太來に向ひ、一は洮南に到る。その沿線、ところぐの停車場の敷地、吳將軍の所有地たりしもの少からず。これだけにても、彼の得たる利益の少からざるを想ふ。

◎白音太來及び洮南の市街地、目ぼしきところに吳將軍の地所と家屋と多し。或は、これを吳氏の町といふも妨げなといふものあり。その尤も奇異なるものを洮南の停車場とす。

◎洮南の停車場と、離れて機關庫、いかめしく建てるあり。此の二者を懸隔するの不合理なるはいふを待たず。蓋し豫定の停車場は機關庫と連接す、後ち吳將軍の地を買ひ、驛を設くるを以て、停車場と、機關庫と、遠く離るゝの奇觀を呈するに至る。

◎支那の文人、徐世昌を評侮して、その幕下の人物に論及し、東三省の將軍のうち、殊に吳俊陞を擧げて、彼が盜賊を討伐するに力め、その治內、ひとり保安を致すを稱揚せるあり。此の人にして、尙ほ且つかくの如し。その餘、多くの將軍、推して知るべきのみ。

廿四

◎蘇浙の戰、起るや、大總統曹錕は、王士珍を起して、調停に當らしめんとす。これ近來に於ける常例なり。王士珍は、閱歷、學問に於て、段祺瑞に讓らざるを以て、今に於ては、支那政界の一長老たるを失はず。然れども彼や、全然、消極的の人物、離局を收拾するの器才にあらず、

◎王士珍の謹愼にして和平なるは、徐世昌と相似たり。同じく直隸人にして、世昌と同鄉、同派の關係を有し、二人者の交誼も殊に親密なるものあり。然れども世昌の有爲なるに比して、士珍は無爲、恬退を事とし、その才、その德に及ばず。貧困にあつて得易からざるの君子人を以て稱せらる。

◎王士珍、字は聘卿。北洋武備學堂の出身にして、袁世凱の拔擢をうけ、江北提督となりて頗る令名あり、淸朝の末、進んで陸軍大臣となる、その經歷段祺瑞の右にあり、また淸朝遺老の錚々たる者なり。

◎彼が淸朝に對する恩情、淺からず。淸室の退位するや、痛哭して、その位を去り、袁世凱、屢、招けども堅臥して出でず。袁死定、踵いで迎うるに至り、始めて出づ。彼の出でざるは、

徐世昌の出でざると異なり、世昌の如く、一年後に出るの目算あるにあらず、眞に、世事を厭ふの動機に本づく。これを以て其出隱の後も、徒らに寄隱、不拡に安んじ、袁世凱が帝制復興に際しても、何等、阻止する能はざりし。

●張勳の復辟運動を起すや、彼は、清室の恩を思ふといへども、雷震春の如く、猜つて張勳に應ずる能はず、但だ日に張勳の門に奔走して、その參謀たるの觀をなせしに過ぎず。元來、王士珍は武辯のみ、政治家にあらず、胸中、何等の主張なき好々爺なるべし。

●王士珍の才は專ら軍事にあり。識見は狹隘にして、態度は通達ならず、これを以て世評に拘泥し、紛々たる黨爭の渦中に投ずるを好まず。陰謀を備ばず、競爭を喜ばず。その群雄の間に聲望あるは、但だ好人物にして、軍事上の才幹、閲歷あるが爲のみ。

●馮國璋、元首たるに當り、南北講和を主とるに於て、王士珍も亦た說を同じくす。且つ王が深く北洋將校の人望を得たるを知り、段祺瑞を罷め強ひて王を起して內閣を組織せしめしも、久しからずして辭して去る。

●段祺瑞再び起ち、徐世昌、元首となるの際、ともに屢、王を招けども、王は固辭して出でず。彼の性格は、段祺瑞の專制を

喜ぶと相容れざるものあり。彼は陰謀家なり。

●奉直戰爭の時、徐世昌、特に王士珍を起して調停に當らしめしも、王は辭して出でず。安直戰爭に、奉直戰爭に於て、遂に一つの[illegible]爭なり。王士珍またも調停を依頼せらる。彼は政治家としては、無爲、無能の人。質は、軍閥に於ける、顧役といふべし。

廿五

●奉直戰爭のとき、調停の任に擬せられしもの、王士珍を首として、趙爾巽、張錫鑾、張紹曾、鮑貴卿、王占元あり、所謂六調人なり。今や、蘇浙戰に當つて、また幾多の調人を出すたらん。支那の政局には、中間に彷徨して、周旋、調停を本業とする専門的政治家少からざればなり。而して戰局の調人は、必らず、それ等の中より出づ。

●調人は、政界の高等杜撰たるに非ざれば、則ち高等幇間たらずんばあらざるべし。これ等の政治家は、平生、無事の時に於ては、政界の高等食客たり、玄關番をなす食客にはあらずして、與半數、離半數、或は二階に、ともかくも客室に陣取り、賓客たるの格式を失はざるものなり。

●調人政治家は、首鼠兩端をなすものにもあらず。必ずしも、非關係の亞流たるに非るなり。寧ろ自由義たるに近し。支那の

政局を、縱斷するものを奉直の二派なりとすれば、此の兩性の間に介在する中性政治家ならずんばあらず。

●凡そ一口に調停といふも、そのうち種々の態度あるべし。仰いで調停するもの、並んで調停するもの、俯して調停するもの、これなり。幇間者流が喧嘩を仲裁する刹那、膝を折つて、袖にすがり、仰いで調停す。仰いで調停すれば權威なし。此に於て、調人のうち、顧役の王士珍なかる可らず。下僚は、專門の調人政治家これに當るべし。

●調人政治家といへども、初よりも調人として養成されたるにあらず。概ね政治的生活の中途に於て、去勢されたるものより出づ。去勢の動機は自動的もあり、他動的もあり。實際には自動的多し。また是れ一種の自衛術なり。

●平時に於ても、調人政治家は無用の用たるを失はず。唯だ、其の効用、顯著ならざるのみ。反對兩派の巨頭、互に、これ等の調人政客を利用す。

●調人政客は、各、其の顧客を有し、出入して世間を話すこと、幇間と異ならざるものあり。調人政客、下流に落つれば、幇間となり、上流に登れば顧役となる。非常の大事に於ける最上の調人は元老なり。北京、天津に巣つくり、以て、南北に往來する調人政治家多し、

廿六

●趙爾巽は袁世凱の嵩山四友の一にして、元老なり。その閲歷、徐世昌の先進たるを以て、特に、四友の中に列す。その人、官僚たるは徐と異ならずといへども、稍、輕薄にして重きをなさず。奉直戰の調人としても、王士珍の次位に居る。

●嵩山四友は、民國初年の元老政治家たるべき筈なり。徐世昌、ひとり元首となれりといへども、張謇は、實行に功にして、人物力弱、相下らず。趙爾巽は一頭地を下る。ひとり李經羲に至つては、四友に列するの資格なし。

●黎元洪の大總統たりしとき、李經羲、一たび大命を承け、組閣に當りしことあり。群雄のうち、一種、虛名を負ひ、清末に、すでに李鴻章の餘蔭を以て夙に高官に上り、黎のとき、時局收拾の才を以て擬せらる。阿片中毒者にして、何等、爲すあるを得ず。

●李經羲は、碌々たる才士にして、學問は僅に雜學にとゞまるに、自から智囊、左宗棠を以て擬し、時に馬を馳せて、禁烟を示す。彼は少年にして高科に登り、誇大妄想の爲に妄人となれるものなり。

●清朝以來の政客、なほ慶親王、那桐、錢良の徒あり。慶親王

はヘイカラ政治家、然れどもその外交政策、國力弱くして橫逆の來るを拒ぐに足らざるも、外國と事を生ずれば、他の侮を招く可らずといへるは、內田康哉に勝さるあり。彼の立言を共鳴したるは、外交に於ける徐世昌なり。

●此の立言を、偏狹に解すれば、袁世凱、段祺瑞の輩は賣國たるを免れず。徐世昌は西原龜三に近づかず。彼は事毎に強隣と交渉を生ぜんことを恐る。所謂強隣は則ち日本なり。

●清末、革命戰亂のとき、段祺瑞は獨逸の力を借り、那桐は日本の力を借り、以て民軍を鎭壓せんとしたるに、徐世昌ひとりこれに反對し、民軍に失ふところを以て、これを外國に失ひ、以て人民の惡感を招く可らずといへり。

●夫れ外力に仰賴して、以て、自ら相殘殺するの不可なるを知るは、徐世昌、識見なしとす可らず。然れども日本と歐米と、ともに外國たるに於ては同じ。ひとり日本を拒いで、歐米の力の侵蝕を恤からざるの意味、解す可らず。畢竟、日本の外交の拙にして、此に至れるならずんばあらず。

●獨逸が青島を占領すると、日本が占領すると、ともに、外國の手に歸するは同じ。徐世昌は、則ち青島が日本の手に落ちしとき、亡國の慘禍に戰慄すといふ。その初獨逸が理不盡に、青島を奪ひしとき、徐世昌は、果して痛哭したりしや。

●彼等の所謂愛國といひ、賣國といふもの、實に二[illegible]と此の如し。畢竟、但た、これに藉口して、政爭の具に供するのみ。徐世昌も亦た排日を賣りものにするに過ぎず。

●錫良は性急、率直にして才略なく、到底、徐世昌の匹儔にあらず。世昌が、荒らして去れる本に後任とし、汲々として節約を事とし、爲に新聞の攻撃を受くるに至れる如き、彼の、いかに愚直なるかを見るべし。

●錫良は、心地の純潔、操行の端嚴、立身の忠懇なるに至つては、近來の官人に稀なりといはる。官途にある卅年にして、超然として情實に通ぜず。民國以來嘗て袁世凱の門に至らず、宗社黨にも附かず、獨行の君子なり。

●微言は、支那政治家の得意とするところなり。侃々諤々の論あれども、實際には微言のみなり。袁世凱の下に、徐世昌が初めて國務卿たらんとせしとき侃々として、その非なるを痛言せしものは錫良なり。徐世昌これを嘲むといふ。

廿七

●北方の徐世昌に對し、南方には岑春煊あり。北に徐世昌を戴くと同じく、南には岑春煊を推さゞるを得ざりし。岑春煊は前朝の大官にして、夙に盛名をなし、一時袁世凱と匹敵するの勢

あり、その名日本人にも知られ、民國の六七年に至るまで、彼に對して徐世昌を擧ぐるものはなかりし。

●岑春煊は、資望、威力、人格ともに南方の雄なり。南方が結束の爲には、彼を推戴せざるを得ざりし。彼の志は、南方の獨立、聯邦の支那を造るにありて、徐世昌が、統一を理想とすると全く相反す。舊國會に對して緊密の關係を有し、舊約法を奉じて標幟とするを以て、北方の頭目と、當然、相容れざるものなり。

●彼は、清末より民國に至り、天下の第一流として、重望を負ふこと十五六年。一代の英雄たるを失はず。その人物、銳適にして殘忍、部下を御する苛酷に過ぐ。或はいふ、岑春煊は多慾にして仁義を行ふものなりと。徐世昌に比すれば、彼は豪傑らし。

●清末に、岑春煊は、先進の端方を排し張之洞を凌がんとせり。革命以後、北方、後進の諸雄と妥協するは彼の志にあらず、黎元洪、馮國璋等の黄口兒、すでに元首たるの後、大總統たるは彼に於て、もはや光榮とするに足らず。此に於て護法を標榜して、高く自から居り、遙に北方を睥睨するは彼の態度なり。

●岑春煊は出づべき辭を失ひ、已むを得ずして南方に據る。これに反し、つねに、出づべき辭を藏さつて南方に據るものを伍廷芳とす。彼の半生、およそ賣名に資すべきもの、知らざるなく、爲さゞるはなし。その人、鄙人なり、賣名の雄のみ。

●日清戰後、李鴻章が講和全權大臣として日本に來りしとき、彼なほ一青年にして、これに隨員となり、日本に才名を知らるゝことも既に三十年に及ぶ。年壯にして利殖に志し、再び公使となりて、富、百萬を超ゆといはれ、民國以來、屢、入閣し、司法、外交を歷て總理に至る。

●民國以來、彼は野に在るも、政府と民黨との間に往來してつねに政治に干渉し、屢々長電を發して政見を公表す。强に從ひ、弱を挫き、鋒を避け、衰を狙ひ、事後に先見を誇り、心、邪曲にして、口、正直なり。政治に秘ぬるに學問を以てし、巧みに一世を籠絡したりと自ら思へども、世人、遂に、その心事を看破せずんばあらず。

●南方の一異は別に陸榮廷あり。廣西に深居して能く西南を操縱す。儼然たる一勢力なり。陸や、伍廷芳がつねに自衞の爲に進軍喇叭を吹くと大に異なり、その深沈にして和平を好むは、徐世昌と相似たり。

●論者或はいはく、徐世昌を總統とし、陸榮廷を副座とせば、極めて適材、適處ならんと。說の當否は暫らく措く。陸の長所

は直隷にあり。而して徐は先づ北方を固めんとし、呉は南方を統一せんとす。ともに愛國家なりといへども、その眞骨頂、民黨に非ざるは、二者、ともに一なり。

廿八

◎民國以來、支那政局の妖星を梁士詒とす。張作霖の後援を以て、徐總統の下に、強ゐて國務總理となり、奉直戰爭の導火線をなす。その人物、才氣迸しるが如く、十五六年來、北京の政界に、彼の如き怪腕を見ず。

◎梁士詒が潛勢力を有するや久し。袁世凱の時、彼、公府祕書長を以て、その勢力、國務卿を凌駕し、政權、殆んど、その掌中にあり、吏官の任命、すべて袁と彼と商摧す。伊藤巳代治の翰長に比するに、その全盛、勝るも劣ることなし。爾來、支那の內治、外交、陰に陽に干知せざることなく、如何なる內閣も彼の助を藉らざることとなし。

◎時人いはく、梁、口を開けば、悉く大言、壯語ならざるはなく、恰も賣卜者の如し。また一の信話をなさず。世間の毀譽、褒貶、すべて意に介せざるものの如し。李鴻章が毀譽に頓着せざりしは、忍苦の精神に出づ。梁は則ち厚顏無恥なりと。

◎然れども梁士詒は、財に雄なるを以て、遂に時局を左右する力を有す。袁世凱が帝制を企てしとき、その[illegible]たりしも彼なり。雲南討伐に兵費なかりしとき、彼は、不換紙幣たる交通鈔三千萬元を發行して、一時を糊塗し、北京の金融をして窮境に陥らしむ。袁の歿後、彼は危機を豫見して、遂に北京を脱奔す。

◎段祺瑞、總理たりしとき、梁亡命して日本にあり。陰に、段の爲に盡力す。段、これを德とし、曹錕等に旨を授けて、特赦を請はしむ。梁、更に唐紹儀と計り、徐世昌を慫慂して出廬せしめ、國會の設立するや、選ばれて參議院議長となる。

◎梁は元と交通系の首領たり。帝制失敗の後、交通系の勢力、漸く曹汝霖に歸し、遂に、交通系に新舊二派を分つに至る。曹は安福派の領袖たり。梁、乃ち去つて奉天派に結び、張作霖に賴る。

◎梁は、天才の面影あり。經濟科の出身にして、英語に巧みに、外交の才を以て稱せられ、鐵路局に入つて利福を逞しくし、民國に入つて、公府祕書長を以て、交通銀行總理を兼ね、併せて諸鐵道の事に參與し、盛に利福を集む。

◎梁の欲望は小ならずして、一總理の椅子は彼を滿足せしむるに足らずして、竊かに大總統たらんことを思ふといふ。彼は支那政治家のうち才華無雙なり。但だ未だ時望に副はず。その命

才たるは、稍、伊東已代治に似て、伊東の學問文章なきを相違なりとするのみ。

●財を武器とし、巧みに財を操縦する政客は、梁の外、王揖唐あり。王は、梁士詒の奇才に比す可らずといへども、議員買收に怪腕を揮ふを以て知られ、安福派の一頭目たり、財の雄たるを失はず。

●民國議會の歴史は、日なほ淺し。而して議員買收の魔の手は、逸早く第一期の遠世凱に始まる。支那の交際は、賄遺を貴ぶ、紳士は、みな互相往來ならざるはなし。古來、賄賂の國、買收の歴史も亦早し。而して魔の手といふは、則ち王揖唐なり。

●買收は、勿論、彼等の發明に非ず、支那の國風なり。唯だ議員を買收するは、王揖唐に始まる。これかならずしも驚くべきことにあらず、民國以前、買收すべきの國會議員なければなり。

●王揖唐は、政黨受負、議員買收を以て、二百萬の富を造りしと傳ふ。中間、出でゝ、吉林巡按使となり、荒地を發賣して、一攫、巨富を得んとし、孟恩遠の爲に阻止せられ、辭職して、北京に歸り、後ち遂に孟を排斥す

●安福倶樂部の組織には、王揖唐、與かつて力あり、此の時、彼の所得また七十萬を超ゆと稱せらる。彼が段祺瑞の爲に用をなすは、專ら政黨を操縱し、議員を買收するの才能にあり。

●彼は合肥の人、段祺瑞と同郷なり。字を以て名とす。清末の進士にして、日本の士官學校に留學す。日本の議會政治の眞相は、東京にありしとき、見聞したるならん。支那の論者、或は、彼の議員買收を論じて、東洋に於ける最初の醜事となせり。日本の政黨史家、これを讀む者、爲に、筆を投じて面を掩はずんばあらざるべし。

●支那の議會買收は、長足の進歩をなせり。王揖唐以後に吳景濂と王承斌と出づ。去年十月五日の大總統選擧會に、曹錕の當選を見たるは、此の二人、議會買收の功にして、就中、吳の力多し。

●曹錕の當選は、世上、これを賄選と稱す。賄選は、天下、珍とするに足らず、元首の賄選なるが故に、特筆に値するのみ。賄選の字、さすがに簡にして適切を覺ゆ。此の時、一票の價值に五千元、政黨領袖は、それ以上なりといふ。

●吳景濂は、賄選の報償として、國務總理の椅子を得べき交換條件なりしといふ。藤戸の渡の故事は日本にもあり、殷鑑遠からず、事成るの後、曹錕、その約を履まさるのみならず、却つて憲政黨を組織して吳に對抗せしめ、吳を壓迫して、北京を脫

奔して、天津に蟄居するの已むなきに至らしむ。

●南方、革命の俊才にして、民黨を裏切り、豹變して北方に應ずるもの、吳景濂と陳炯明とあり。吳は政客にして、陳は武將なり。陳は、孫文と廿年の深緣ありて、これに叛むき、吳は廣州自由會議の議長たりし光榮の歷史を捨てゝ直隷派に附く。ともに護法の叛逆者たるを失はず。今、ともに窮境に立つも、また自から求むるところなり。

●此の外、尙ほ一箇の財星あり、唐紹儀なり。章炳麟嘗て唐を評するに、一洋行の買辦を以てす。彼が、傑物たると、達官たると、實業家たるとに論なく、彼が天分の性癖、到底、此の外に出でざるべし。

廿九

●民國十三年、今や、宗社黨の雄者なし、徐世昌と康有爲とは世人の稱して、宗社黨の首領となすものなり。張勳の復辟運動、陰に、その黑幕たるは徐世昌なりとするの世說あり。徐は淸室の元老、然れども時勢を見るに敏にして、頗る利害に明らかなり。復辟の容易に爲す可らざるを知ること熟せり。

●徐は政界を去るも、なほ長老たり。康南海は宣統帝の老師たるに過ぎず。南海の學問文章は一代の巨匠たるを失はず、功名を喜び、趣味は淵博なり、その居常、淸朝時代の大官人の態度を維持し、帝政の再來を夢みつゝあり。

●張勳は、復辟の事、成らざりしといへども、その人、快男兒たるを失はず。民國以來の快男兒は彼と段祺瑞となり。その趣を異にし、今、ともに亡しといへども、その事、傳ふべし。

●徐州會議に、諸將軍、復辟に同意するもの多し。張作霖の如きも同志なり。但だ張勳が兵を擁して北京に入りしときは、未だ復辟の決意なし。康有爲、萬繩栻の二人、以て千載一遇の機會となし、急に事を謀りて、彼に强請す。有名なる復辟の文は康有爲の草するところなり。

●事、此に至れば、さすがは張勳、成敗を眼中に置かずして、潔よく決行す。一擧、靑天霹靂、誠に痛快を極むといへども、事、餘りに、突嗟に起り、諸將軍、これに應ずるの餘地なし、而して此の事、一敗して、第二の復辟運動起らず。張勳の如き豪傑男兒も、また無し。

●北京の名妓、迎仙館の小鳳仙、絕代の美人にあらずといへども、蔡鍔を幫助して、北京を脫奔し、以て袁世凱の毒手を免かれしめたるを以て、艷名嘖々たり。蔡鍔が脫奔の一幕を曲敍すれば、絕好の探偵小說にして、ルパンを讀む以上の興味あるべし。

●袁世凱、密偵を放つて蔡鍔に尾行せしむ。蔡鍔これを知る。意を決して妓楼に登り、馬車を門に待たしめて、妓を招き、酒を飲んで午睡す。既にして突如として變裝して裏門より出で、別に豫め準備したる馬車に乗り、停車場に至る。密偵、屢伺ふに、たゞ午睡するらしく、馬車も待てり。既にして日、漸やく傾むき、初めて長蛇を逸したるを知る。

●袁、大に憤ほり、直ちに電命して、汽車に求むれども、蔡鍔を見ず。蔡鍔は、一氣に鐵路によらず、迂回曲折して南走す。途中變裝すること廿二度、到るところの電報局より袁に打電して、その罪狀を責め、袁をして憤悶せしむ、途に雲南に達し、直に四方に檄して、討袁軍を起す。袁の帝制を打破する第一聲は蔡鍔なり。

三十

●天津の居留地に隠棲する政界の三長老を、段祺瑞と、徐世昌と、黎元洪とす。その餘、安福派の失脚の群雄、及び從來の諸老政客、多く天津に集まり、將星の往來もつとも繁し。天津は、支那政局の伏魔殿ならずんばあらず。

●北京は、得意政客の居るところ。天津は失意政客の隠るゝところ。天津は政界の安全地帯、而して陰謀の策源地たり。純粋に老年を送らんとするものも、隠忍して機會を待つものも、ともに此に集まる。海外に逃走するの好埠頭にして、また北京を偵察すべき好望樓たり。

●支那人は、排外思想の民族なり。政治家は口に排外を唱へつゝ、その片足は、いつも居留地を踏む。交民巷と居留地となかりせば、民國以來、政變幾回ぞ、失脚政治家の大半の生命は失はれたるべし。

●彼等は大言壯語すといへども、必らず居留地に、豫じめ避難所を設けざるはなし。彼等は得意のとき、爲さゞるところなし、一旦、風雲を失すれば、一目散に、居留地に逃げこむ。北に天津あり。南に上海あり。殊に天津を主とす。

●北京郊外に湯山あり。北方の温泉として賑はる。清室、要安の別莊あり。吾輩、此に一游す。人目を惹くものは、その風光よりも、安福派政治家の別莊、櫛比するの光景なり。段祺瑞のは無し。曹汝霖の別莊、尤も風致あり。

●實に、湯山は、安福派の全盛、豪華の記錄ならずんばあらず。かくの如きは、支那にありては、必ずしも安福派のみと限らず。榮華は春の夜の夢の如し、驕る者、久しからず。これ等の華麗なる別館、空しく鎖して、園中の草、掬すべし、主人は、皆、去つて天津にあり。

●此の失敗に對して思ふ、かくの如き豪華を逞しくするが故に、失敗、立ちどころに至るか。或は、得意の長く居る可すらして、失脚の慘なるを知るを以て、太とく、短かく、此の豪華を逞しくするなるか。

●然れども、彼等は、到底、這般の榮華を忘るゝ能はざるが故に、回復を計つて已まず。勝てば官軍、負ければ賊軍。天下を取りしときの豪華、人を醉はしむ。謹厚なる光武皇帝といへども、好官と美女とを得んとせしが、立志の動機にあらずや。

●勝てば、湯山、もしくは公府。負ければ、天津、上海。而して豫ねて財産を備へて、その生活に當つ。故に、一たび志を得れば、失脚すといへども、元の木阿彌にはあらず。北京の廃衙に、蟄譯して以て歯滌を行るの快なしとするも、また貴顯の隱居たるの態度を失はず。

●政治家は、かねて生命と共に財産の保全を計るを要す。生命を交民巷、または居留地に托し、財産を外國銀行に托す。支那の群雄は、外國の保護の下に、鎬を削り、雄略を闘はしつゝあるものなり。

●群雄、失脚の後、外國に旅つて興復を計り、或は悠游して保養に従事す。彼等が外國に行くは、留學にあらざれば、失意の時。則ち外國は群雄の背景にして、また、その樂土なり。

●快男兒、張勳といへども、交民巷に往り、和蘭公使館に住す。段祺瑞の失敗のときは、その家に居て去らず。張作霖の戰敗れて、奉天に退くや、その妻子だけを日本の租借地に送り、自から戰死の覺悟を聲明したりといふ、これ等は群雄のうちの度胸あるものといふべし。

卅一

●天津の三長老のうち、現在に勢力をたすものは段祺瑞一人なり。彼は、徐世昌の聯米排日なるに對し、親日政治家として知らる。廿一箇條問題も、西原借款も、みな彼の時にあり。日本と關係もつとも深き政客にして、また現代、支那の群雄の第一人者たるを失はず。

●民國以來、段は三たび内閣を組織し、國鈞を秉ること久しく、大總統たらずといへども、大總統の資望あり。然れども、反對派の攻撃を受ること、彼の如く甚だしきはなし、或は、以て中國の悪魔、國民の公敵となすに至るといへども、終始、斷々乎として、所信を執つて屈せず、剛愎執拗、終に硬骨男兒たるを失はざるに至つては、代々の大總統、彼に及ぶものあらず。

●段祺瑞は徹底的の専制政治家なり。その人格は始終一貫、心口一致し、一利害を以て心を動かさず。前清のときより共和を

愛し、徐世昌が、共和を好まずして、大總統たると趣を異にす。世昌は共和を好まざれども、議會なかる可らずとし、祺瑞は、共和を愛すれども議會を好まず。徐は帝政の妥協家にして、段は則ち共和の專制家なり。

●徐と段との對照すべきは尙ほ多し。徐は議會を買收し、或は金錢を抛つて政黨を製造するを好まず、段は則ち安福俱樂部を以て、悍然として民意機關となして疑はず。徐は軍縮を主とし、段は軍備擴張を高唱す。徐は雲南、貴州、廣西の放棄を主とし、段は則ち南北の武力統一を主とす。徐は民黨に對し、姑息手段を用ひ、段は則ち一網打盡を思ふ。

●徐世昌は文官より起り文治派の頭目たり、段祺瑞は軍人にして武斷派の巨頭たり。袁世凱の練兵小站に、段、專ら將校教育に任じ、北方の軍人、概ね、その門流に出づ。その人物を以てすれば、徐は修飾を事とし、段は至誠の人たり。

卅二

●段祺瑞の人物、性行、評論に値するもの少からず。彼の逸事は多く傳はらずといへども、なほ、その面目を見るべきものあり。

●彼は安徽省、合肥の人、李鴻章と同郷、安福派の亂師たるべき出生を有す。彼の家は代々の農家なり、隨つて、彼の家風は素樸にして、毫も奢侈の風を帶びず、家を治むること謹嚴にして、婦女子弟、戲笑喧嘩の聲、外に漏るゝことなし。

●彼が江北提督たりしとき、官舍の餘地を拓き、水を引き、園林を治む。自から長聯を作つて柱に懸く、中に肅殺たる光景を好むの句あり。その人、想ふべし。彼は言笑、苟くもせずといへども、機嫌斜なるとき、その家人に當り散らすの癖あるを以て、家人みな彼を恐るゝこと虎の如し。

●彼は、政暇あれば書を習ひしも、巧を求めず、少しく習へば乃ち止む。袁項城の時、詩人墨客、その幕下に集まり、大官、悉く文墨に耽りて風を爲せしも、彼ひとり然らず、名流樊山、哭菴の如きも、彼に近づくを得ず。

●彼は聲色に耽らず、衣食住の嗜好少く、酒を飲むといへども、量を限る。觀劇の趣味なきにあらずといへども、女優を喜ばず、總理たりしとき、國務院の屬僚、女優を好むもの、みな彼の叱斥をうけて、女優熱、全滅したりといふ。

●民國以來、當路者、千萬元、或は、少くとも數十百萬の富を擁せざるものなし。彼は三たび總理となりて、その財產、他人の十分の一にも及ばず。北京の邸宅は、遂に改築するを得ざりし。借款の事に關係するもの、百萬の財を得ざるはなし、彼

は、部下の私黨を充滿せしめたるのみ、自から取るところなし、これを以て、總理たりといへども、威權、車馬は、大臣、次官よりも劣れり。

●彼は、何等、嗜好なしといへども、唯だ一つ、圍棋に耽溺す。局面に對すれば、殆んど身世百事を忘れ去る。棋客、王雲峯、吳祚麟の徒、その門下に羅致す。彼の如き勁厲なるものといへども、好むところに偏するを免れず。

●本因坊秀榮、支那に遊び、彼と對局せしことあり。その棋譜、當時、新聞に掲載す。彼の棋品は二段を授けられ、民國第一の名手といはる。およそ民族精神の衰ふるや、いかなる方面にも大家を出さず。支那の棋に於ける、高段の伎倆あるものなし。彼は鐵中の錚々たるものなりといふ。彼は、棋に於ても、群雄を壓倒するなり。

●彼の棋は、段棋棋にはあらざるべし、然れども、芳川顯正、將棋に於ける自から八段と稱して、その實力は三段に過ぎずといふと相類することなきを得るや。

●支那の記者、彼の棋を記するものあり、いはく彼の棋に於ける、伎、甚だ高からず、性、太だ負け嫌にして、敗戰すれば機嫌を損じ、家人に當る、故に、彼に對局するもの、その伎を盡さず、彼に、勝を讓ることを力むと。かくの如くなれば、彼は段棋棋なり。此の事、[illegible]人のもたらしたる[illegible]を見れば、高段にあらずといへども、凡手にあらず

●彼の率直なる、獨逸に留學せし頃、夙に孫文の著を讀み、爾來、孫文を崇敬すること太甚し。彼は民黨にあらずといへども、共和を好む。孫文始めて共和を唱ふるや、時人、以て危險思想となせども、彼は、ひとり然らず。他日、いはく、速に、彼の群に投ぜざるは、共和の黨人、玉石混交す、實に、それと伍するを欲せず、孫中山は、吾が崇拜して措かざるところたりと。

卅三

●段祺瑞が、寺内内閣と深契あるは、今更、言ふを要せず。西原借款の償却を待つは、百年、河清を待つに似たらん。藏相勝田主計は豪語していふ、西原借款は捨石のみ、百年の大計、これくらゐの捨石を打つ覺悟なかる可らずと。

●善隣の長策に貢獻するありせば、あれくらゐの犧牲は、惜しむに足らざるべし。恩を施して、徒らに排日を挑發するは、策の得たるものにあらず。

●寺内と段と、政治上に共鳴したるのみにあらず、二人の人格、互に酷似するものあり。段は支那の寺内といふべし。その

頑强にして、斷然として主張を貫ぬく、（一）誠實の人（二）、武斷主義の政治家、（三）正直過ぎて愚痴に陷ること（四）、趣味の狹くして、餘裕なきこと（五）、當代に於ける陸軍教育の祖師にして、大多數の將軍と師弟の關係を有す（六）、勤勵、恪勤にして、秋霜烈日の概あり（七、文學、藝術を閑事業視すること（八）、私德の廉潔にして、友情に篤きこと（九）、人格に威重あること（十）、一種、魅力を有し、自から首領の器たること（十一）、徹底的の專制家たること（十二）等は、その相似點の主なるものにして、但だ寺内は忠君愛國の權化たり、段は共和主義たるを相違とすべし。

◉此の如き有力なる武斷政治家たる段祺瑞をして武力統一を爲さしむるは、今日までのうちにて、南北統一の、尤も有望なるものたりしを疑はず。彼は寺内と同じく、厚重なれども偏狹にして、人物を過信し易し。寺内は西原を過信し、段は徐樹錚を過信せり。ともに失敗の因、此にあり。

◉支那の民族性は、共和にして、强大なる權力の下に始めて國をなす。これ黄帝以來、共和的なる支那人が、萬口一貫して、帝政の國たりし所以なり。帝政たると共和たると、人民の繁榮には關係なし、帝政たるを以て、國家を强固ならしめ易し。

◉段祺瑞は共和を主義とす。然れども、その政治思想たるや、國會を無用視し、專斷を以て國政を經營せんとするものあるを以て、事實に於ては、共和國に帝政を行ふものならずんばあらず。

◉彼の如き政治家、もつとも支那の國情に適す。必ずしも段祺瑞のみならず、今世の雄たる張作霖を見よ、吳佩孚を見よ。彼等は、皆、共和國の將軍にあらずや。政治組織を民國にしたるまでにして、施政に於ては、彼等は、皆、帝政なり。

◉支那は民國の名ありて、國民、皆、政治に參與するの事實、何處にかある。議會は、唯だ大總統、則ち覇者の爲の機關たるに過ぎず。實質は暫らく措き、形式的にも、國會が完全に、民意を代表すとは認められず、これに對して國民は、多く痛痒を感ぜず。

卅四

◉段祺瑞、曾て、一夜、微服して兵營を巡察することあり。數人の小卒、集まりて賭博するを見て、僞はつて、その群に投じ、わざと大に負く。小卒、みな喜ぶ。フレデリックの故事と相似たるものあり。

◉翌日、段、隊名を按じて小卒を招致す。これに謂つていはく、昨夜の賭博、樂しかりしか。今、再び一戰するや、否。小

兵等、大に恐縮して言ふところを知らず。叩首して命を乞ふ。段、乃ち丁寧に、賭博の不可なるを諭して、放還す。これより軍中法を畏れず、賭博、公行するに至る。

●越えて數日、段、命じて賭兵を捕へて法に處す。賭兵、服せず。前事を引いて說をなす、段いはく、彼等は初犯なり、吾、これを痛責するに忍びずして放還せり。丼せて廣く汝等を戒飭したるなり。今、汝等、法を知つて法を犯せり、これ明らかに禁令に違へるなりと。乃ち命じて、直ちに悉くこれを斬る。此に於て、軍中、肅然として賭博、已む。

●段は武斷的專制家なりといへども、その人、極めて親切、故に、賭卒を斬るの前、これを斬る所以を說明せり。實は、支那に於ては、これを說明するの必要だもなし。直ちにこれを斬つて可なり。吳や、張や、皆、說明せず。民は知らしむ可らずの意味も、一に此に在り。

●奉天の名勝として、東陵、北陵あり。東陵は滿太祖、北陵は太宗の陵墓なり。廟の古瓦、趣味、殊に愛するに足る。衛兵、ひそかに盜んで、これを賣る。換ふるに、新瓦を以てしてその數に充つ。

●三年前、張作霖、端無く、東陵、古瓦の盜賣の事を聞く。續いて翌日、北陵の本尊佛の瓔珞の珠玉、紛失することを聞く。

兵、東陵の衛長を拘致して銃殺し、翌夜、續いて北陵の衛長を銃殺に處す。これより東陵、北陵の衛兵、古瓦を賣るもの無く、市價、頓に暴騰す。

●此の事、衛長、責任なしといふ可らず、その外より盜めるか內より盜めるか、一切の審問だもせず、奉天の簡潔、直ちに衛長を殺す。何人も怪しむもの無く、却つて畏れざるはなし。

●刑罰は奉天の簡潔、恰かも雷公、霹靂斧を揮つて、一下、人を斃つが如くなるを貴ぶ、これ支那の國情たり。古より封境の肅然たりといふもの、かくの如くなさざるはなし。

●東三省の將軍、驍強なるは吳俊陞を推す。吳俊陞、馬賊の一隊數百人を招降して歸順せしむ。その頭目を採用して將校とし、小卒を官兵に編入することを約す。而して全く、これを欺きしことあり。欺くは戰爭に於ては差支なし。治政に施す可らず。

●馬賊等、欣然として吳の營に到る。吳、乃ち命じて武裝を解かしめ、營中に招致して悉くこれを銃殺す。此の事、馬賊なるを以て、彼の勇猛を稱するものありといへども、その態度は、餘りに詭的なり。

●吳佩孚の事例は、更に感興を引く。漢口に同盟罷工ありしとき、吳佩孚、乃ち、その首魁二十餘人を捕縛し、これに死刑を宣告す。時に外國留學より新歸來せる法律師某あり、極力、そ

の非理非法を痛論す。慨然としていふ民權の蹂躪かくの如し、然れどもこれに由つて、國人覺醒の動機となり、民權これより伸びん、而して同盟罷工は勃發するに至らんと。

◉吳佩孚は悍然として、民權說に耳を傾けざるのみならず、忽ち法律師を拘致し、首魁者と併せて、これを銃殺す。事後の影響は、法律師の豫言を裏切り、遠近、肅然として、同盟罷工、頓に滅す。

◉此の事、若し、日本又は歐米にあらしめば、佐倉宗吾や、ウキルヘルム・テルや、續々として輩出せずんばあらざるべし。支那には、古來、宗吾なく、テル無し。覇者の前には、人命は風前の燈よりも輕し。

◉日本の一名士、將軍の自動車に駕し、疾驅するの際、街上に誤つて支那人に觸れて引き倒す。車、顧みずして馳す。驚いて車を停めしめ、傷者を求むるに、既に逸し去つて、影を留めず。翌日、懇ろに求めて遂に傷者を發見せり。彼、敢て、報償を求むるの意なきのみならず、夢想だもせず。彼は却つて將軍の自動車に觸れたるを以て罪を獲るあらんことを恐懼し、苦痛を抱いて、素早く遁逃し、その探索さるゝを聞いて、いよ／＼恐怖して深く隱くれたるなりといふ。

◉江戸時代の將軍の御成りの砌止め、宇治の茶壺などは、今に於ても、支那には珍とするに足らず。將軍、出游して、或は旅亭にあり、護衞の行列、途を塞ぎ、僅に通行を止む、數十百の車馬、街上に停頓して將軍の歸り去るを、靜かに待つ。

◉奉直戰爭に、奉天の官憲、車馬を徵發す。日本街の町端づれに、巡警、支那の車の歸りを待つ。巡警の手を遁るゝものは、車を引いて、一目散に、草原を遁走す。車の顚覆するも顧みず、無暗に奔る。逃げおうせたるものどもは、車を擁して潛伏して出でず。徵發さるゝときは、その日償の過少にして、勞に酬ゐざるを恐るゝなり。

◉唐詩、出征及び徵發の事を詠ずるもの頗る多し。唐以來、すでに千年を經て、光景、毫も改まるを見ず。現に、蘇浙戰に於ける、徵發の光景の新聞に報ずるものを見よ。

◉北京に於ては自動車は萬能なり。町幅、僅に通行するを得るに過ぎざるの狹巷にも、なほ自動車を驅るを得べし。これに出會する俥、馬車、すでに小路の八九分を進出し來れるものといへども、なほ追ひ戾さる。

◉此の如き光景は支那以外には見られず。追ひ戾して差支なく、追ひ戾されて異議なし。かくするが當然なりと自他ともに信ず。若し、これを以て、非常に、氣の毒なりと力說するときは、却つて支那人の運轉手は笑ふ。客は、支那街を、肩身を狹

しくてあるく外に方法なかるべしなどといふ。

◉民國の支那は、かくの如し。財力は理に勝ち、權力は理に勝つ。財と權とは、則ち力なり。支那人、理をいふこと多し。渾べて戰前の事なり。强力が、目前に出現し來らざる時の事なり。强力は一切を解決す。

◉支那の統一問題は、一大强力の出現し來るに於て、始めて解決せらるべし。孫文が共和の新說を以て、此の大問題を解決せんとするは、吳佩孚の前の法律師に似たるべし。孫文といへども、近來、漸く悟るところあり、彼が、武力を得るに苦心しつゝあるを見よ。

卅五

◉全權公使小幡酉吉、支那の統一問題を論じて、各省人民、自覺して、自治發達して、軍閥を廢し、一省の自治、統合して、以て全邦の統一を見るを得べしといふ。また是れ一箇の立言たるを失はず、彼が支那に、前公使たりしの故を以て、世人の視聽を引くに足るものあるべし。支那に在る內外人には、殆んど反響を與へず。

◉民國以來、將軍が巨富を致すは、將軍が王の實を行へばなり。各省は殆んど獨立に近し。北京政府は名のみ。將軍の强大なるものは、中央を壓迫し、干涉し、北京政府を以て、自己勢力の標識機關となす。復辟運動も、直皖戰爭も、及び奉直戰爭も、此の標識機關の爭奪に由つて起る。

◉北京政府は、衰微せる周室の如く、群雄は戰國なり。誰か、復た鼎の輕重を問はん、北京の鼎、輕きこと天下、皆知る。北京政府は、また或は東山時代の足利氏なり、天下は應仁の亂世となり、吳佩孚と張作霖とは、細川氏と山名氏とに對照すべじ、そのいづれが山名たり細川たるは說くを要せず。

◉强雄が、北京政府を取らんとするは、將軍を擁して天下に號令せんとするに過ぎず。將軍の威嚴、更に降ること一段ならば復たこれを擁するの必要もなきに至らん。その時は、强雄、自から取つて代はること織田氏の如くなるべし。

◉北京政府の大御所は、洛陽の吳佩孚なり。曹錕の實權、吳に移るは久し。今や曹錕は、公方にして吳佩孚は則ち管領たり。北京の政務一々遠く洛陽の意向を聽く。北京と洛陽との距離は、東京より小田原に至るに十倍するのみにあらず。吳は、洛陽の片田舍にゐて、坐ながら北京を控制しつゝあり。

◉强食弱肉、擴張と併吞との天下なり、群雄の數は年々に減ず。これ民國、統一に歸致するの形勢なり。張作霖は奉天將軍よりして、その勢力を擴張して、吉林、黑龍江の二將軍をその

麾下に併呑す。東三省に三督軍の名、なほ存すれども、實は、東三省は一大督軍の下にあり。吳佩孚は直隸督軍よりして、直魯豫三省の巡閲使となり、更に七省巡閲使たらんとするに至る。

●北京政府は、蘇浙戰を認めて地方的私鬪となすといふ。誠に、かくの如くなるべし。然れども、北京政府が、かく言ふは、辭柄をなすに過ぎず。戰を止めしむることも能はず、これを討伐することも能はず、事實に於ては、傍觀するの外なきこと、全く周室が、群雄の戰伐を傍觀したると同じ。

●蘇浙の戰は、奉直を代表するものにあらず、齊燮元と盧永祥と、ともに實力を鬪はすものと見るべし、然れども、此の戰爭や、奉直勢力の消長に影響す。これを以て、吳佩孚と、張作霖と、孫文と、ともに動く。

●盧永祥は、新聞記者に語るに、張作霖の老猾なるを知るを以て、その一兵を借らず、相互の間に關係無しと言へり。齊燮元も亦た、吳佩孚の爲に戰ふべき因緣を有せず、此の戰、稍、吳の爲に致さるゝことを悟るといふ。

卅六

●戰國の世、群雄、互に私鬪をなすべきは、必然の事實なり。元首が、私鬪を停むるを得ざるが則ち戰國たる所以なり。一波生じて萬波動く、蘇浙戰より奉直戰を誘起し、海内、大波瀾を捲起さば、天下、統一に近づくべし。

●權謀術數行はれざるはなく、下克上、行はれざるはなく、合從連衡、講ぜられざるはなく、說客、時を得る。これ支那の實相なり。昨日の味方は今日の敵。敵も恐るるに足らず、味方も賴むに足らず。自己の威力を誇示するに足るのこと、自己の勢力を擴張するに足るのことの爲には、恩誼もなく、道理もなし。群雄割據の支那は、修羅場なり。

●陸建章は安徽人にして却つて直隸派の參謀たり。段祺瑞が陳樹藩を使嗾して己を逐はしめたるを恨み、直隸派に遊說して、江蘇、江西、湖北の三省連盟を作り、直隸派の組織、完備するに至る。曹錕は直隸人にして、却つて段祺瑞に屬したりといへども、段の智囊、徐樹錚が奉天の後援を恃み、漸く曹を輕んずるに及んで、曹は遂に段に離る。その後、曹も奉天と連合して段を破り、安福派を挫く。

●張作霖の段に抗したるは、徐樹錚を惡むが爲なりと稱す。然れども段、倒れて、直隸派の中、吳佩孚擡頭して、吳と張との二虎を生ず。二虎、兩立せずして奉直戰となり、張の敗るゝや、張は段と孫文とに結び、合從して以て、吳佩孚に當る。此

の合肥の説客は徐樹錚とす。

●李鴻章を開山とする北洋派は清末以來の、事實上の大政黨にして、固より絶對多數を占めたるものなり、これを大別して、官僚と、軍人とし、官僚の巨頭には徐世昌あり。軍人は、舊軍官、存するもの稀に、新軍官は北洋武備學生たり。軍人を直隷派、安徽派の二とし、馮國璋、王士珍を直隷派の巨頭とし、段祺瑞を安徽派の巨頭とす。馮の歿するや、王士珍は、出でて、その遺産を整理したるを以て、世人、或は、彼が起つて直派の牛耳を執るべきを期せしに、彼が恬淡にして退き去りしを以て、直隷派の總帥は、後進の曹錕の手に移れり。別に、張錫鑾、東三省に勢力を扶植し、奉天の一派を開く、これを嗣ぐものを張作霖とす。

●直隷派を直系、安徽派を皖系といふ。かくの如き名稱は十年來の事に屬し、馮國璋が袁世凱に抗せしに、端を發す。馮、北上して總統の職に就くに當り、直派の組織に從事す。一は、彼が段祺瑞を恐るゝこと虎の如く、段に當るべき自衞の心事に本づく。

●李鴻章、安徽人にして、直隷總督たること廿六年、儼然として安徽派の地盤を爲す。馮國璋の南下するや、直隷軍官の隨伴するもの多く、別に直隷の地盤を長江流域に開拓す。此の時、段祺瑞北京に在りて、軍政を統轄し、その間中、直、皖の差別なく、馮の爲す儘に任かす。馮の陰謀漸く行はるといへども、張勳、北方の主盟として專ら北方軍閥の統一を圖り、南方に抗せしを以て、局面、なほ無事を保つ。

●張勳、復辟の失敗は、世人、みな張は段の爲に陷らると稱す。張勳、倒れて北方軍閥、盟主なく、兩派、始めて決裂して、馮の陰謀、始めて行はれ、段は、馮の爲に先手を打たる。此に於て、徐樹錚、慌たゞしく、その才を振ひ、爲に、安徽派の擴張を圖る。徐世昌を擁立して大總統とし、以て、馮の鼻を折ると見せて、敵は本能寺にあり。暗中、實は、段を推戴せんとし、馮も、その陰謀を覺るあり、且つ、四圍の形勢、不利なるものありて、突發前に、徐世昌、大總統となる。徐が月桂冠を得たるは、嘘から出た誠なり。

●段、大總統たるに不利なるの形勢に立つも、なほ安福俱樂部の勢力あり、外には張作霖、兵力を以て北京を脅威して、段を後援するあり、馮は到底、志を得るの見込なく、空しく南京を捨てゝ、北京を取る能はず。灰吹、龍を出し、徐世昌の在位を見るに至る。

●安福俱樂部の計畫者は徐樹錚なり。徐樹錚は段祺瑞のらの石田三成ならずんばあらず、その才は以て親方を衞るに足り、さ

た以て親方の果を爲すに足る。安福の全盛も彼の爲、その覆顚も彼の爲

◉安福倶樂部の創立費は、段祺瑞の參戰費よりと、張作霖の奉天軍給とより引出せるものといふ。安福派成立の豫定計畫は、段祺瑞の大總統、張作霖の副總統、徐樹錚の國務卿たるにありて、これ皆、徐樹錚の陰謀なり。張作霖は、これが爲に出資者となれり。彼が北京に乘出して、中原の鹿を爭はんとするの野心は、此の時に始めて露はる。

◉然るに財神梁士詒、此の舞臺に出現して光明を放ち、徐樹錚の相場下がり、曹錕、天津に駐在するに及んで奉天將軍の貫目も減り、金幣制が外國側の反對を受るに至つて、段祺瑞も亦た行き詰まる。

◉此の如くして徐樹錚の陰謀、流產に歸し、安福倶樂部の成立は、王揖唐の私腹を肥やせり。事、此に至つて、段祺瑞は惡を倒したるのみにして、實は、數百萬金を擲つて、徐世昌の爲に選擧費を拂ひしに同じ。而して豪氣滿腹なりし張作霖は、遂に、徐樹錚に不平なき能はず。他日、張が安福派を打つて、段を倒し、以て威力を誇示したるは、譬へば大株主が、自分の會社を打潰したるに同じといふべし。

卅七

◉直皖戰爭には、段祺瑞、實に、張作霖は自分を援くるものと思ひたり。次に、奉直戰爭には、張作霖、實に、曹錕は自分を援くるものと思ひたり。而して前後、二者、ともに裏切られて敗北に歸せり

◉直皖戰爭は、張の男振りを示し、これに雁行して吳佩孚の擡頭するあり。吳の氣鋭なる、後進を以て、直ちに張に對立するの態度を示し、事々、張作霖の向を張るに至る。かくの如きは、張の豫期せざりしところ、張は、此の戰後、段倒れば張、自から第一人者たるべしと思へり。此の目算、外づるるに際し、須らく吳に、一擊を加へざる可らず。

◉張と曹とは姻戚の關係あり。奉直戰爭の前、曹銳、奉天に來りて張に面會し、曹氏を擧げて張を援くべきを約せり。張も亦た、姻戚の關係、當さに然るべきものと思ひたり。戰後、曹錕は、その事を知らざりしを以て、張の諒解を求めたり。姻戚といふも、固より舊來の關係にあらず、曹が直系の巨頭たるを以て、二者、政略結婚をなせしなり。

◉曹錕、實に、曹銳より密約の事を詳かに聞かざりしやも知れず。聞きたりといふを得ざるべし。或は、聞くも、なほ聞かず

となせるか、但し、いづれにもせよ、曹と呉佩孚とは異體同身の關係あり。曹は、寧ろ張を嫌つも、呉と斷つことを得ず。而して戰後、打算に明らかなるの曹、張一派、遂に、ともに斷つことをなさず。

◉呉佩孚は、實力の割合に知られざりしを以て、奉直戰前には、張は、稍、呉を輕視したるなきか。呉は、段を打ち、張を打つに及んで、一躍して、民國の大立者となれり。これまでは武將たるに過ぎざりしを、今や、政界の雄となる。張は、奉直戰を賭して、呉の爲に、地盤を築き上げたるの結果を見たり。

◉奉直戰、若し、張作霖の大勝に歸せばそは、彼として餘りにトン／＼拍子に過ぐべし。此の一敗、却つて彼に自省の機會を與へ、進取よりも退守に轉ぜしめ、これが爲に、初めて臥薪嘗膽の味を知らしめ、これに由つて、東三省を確保して、滿洲王たるの地盤を固めしめたり。奉直戰の不利なりしとき、黑龍江の呉俊陞、獨立の風評ありて、陣中の張を驚かしたることあり。此次の奉直戰には、彼に後顧の憂少かるべし。

◉長辛店の敗戰の後、張が、灤州より速に奉天に馳せ歸りて、本城を固めざりせば、若し、彼が、猶ほ自から戰局を統宰して、陣地に在らしめば、奉天の形勢如何に變化せしやも知れざるなり。彼は、此の苦がき經驗あるを以て、爾後、容易に、自から陣頭に乗り出すことを得ざるべし。

◉吉林の督軍、孫烈臣の歿するや、張作相を後任とし、張作霖の嗣子、張學良、廿四歲の美少年にして、師團長に進み、老將張作相の跡を承けて、錦州に在し、山海關に近し。以て直隸を控制す。滿洲王が事實に出現すべしとせば、作霖を太祖とし學良は太宗たるべし。此の王嗣子の責任、輕からず。張作霖もまた、その兒の路を濟るに汲々として、すべての機會を利用しつゝあるを見れば、その志、知るべし。彼は、あは好くば天下を取らんとし、天下を取れずば、その儘、滿洲王たらんとするものなり。

◉此の意味に於て、張と呉佩孚とは全く、その態度を異にす。呉は、未だ河南王たるの意思なし、彼は、一意、奉天を壓して群雄に覇たるの志、燃ゆるが如し。洛陽に居るは、兵器廠を固守し、且つ實力を養ふが爲にして、一家の地盤を作るが爲にあらず、彼が洛陽に在るは嵎を負ふの虎なり。耽々として遠く勁敵を睥睨す。嵎は、その究極の目的地にあらず。

卅八

◉從來、呉佩孚、軍事專門家たり、志、唯だ武を用うるにあるを以て、直晥の戰、實には徐總統の爲に利用せらる。次に、奉

鼓吹、また徐總統の爲に慫慂せらるゝなり。吳もと愚人にあらず、佛の顏も三度。彼、此に至つて、徐の老猾、奸計を看破し、忽ち徐世昌を逐ひ、黎元洪を迎へて、次に曹錕を擁立し、以て實權を取る。その名なしといへども、實は覇者なり。すべての計畫悉くプログラムの通りに進行す。蓋し、胡麻かしは以て永續す可らず、樹錚輩は、遂に、實力者に歸せずんばあらざるなり。

◉徐世昌、元首となるや、馮國璋、段祺瑞、同時に野に下り、徐の門下、錢能訓、首相たりしも優曇華の花の如し、靳雲鵬代はりて興る。安福の嫡系なり。段、野に在るも、政權は、段の天下なり。徐これを嫌ふ。此の時、靳雲鵬と徐樹錚とを段門下の兩虎とす。その武力、相敵し、均しく借款を用ひて武器を購ひ、勢力、互角の間に在り。徐世昌の得意は、離間、挑發の陰謀にありて、その妙腕、水も漏らさず、形迹、外に現はれず。もつとも[illegible]殺の妙を得たるものなり。果して雲鵬と樹錚と、燒餅喧嘩、嵩じて醜態、大に道路に聞ゆるに至る。

◉樹錚しつかり段の袂を攫む。雲鵬、他に味方を求めざるを得ず、遂には行く可からず、此に於て秋波を吳に送る。時に、吳佩孚得意の態度を以て南方より歸り、直ちに安福征討の大旗を高く揭ぐ。安福の賣國の罪禍といふは、借款と協定となり。質をいへば、すべての借款と協定と　悉く、その名を賈するものは靳雲鵬なり。吳は則ち賣國の巨魁を捉へてその附從を擊つものなり。大盜を幇助して小賊を誅伐するものなり。此の事を以て吳に質さば　彼といへども　當さに失笑すべし。

◉徐は、つねに二大勢力の均衡を得んとして、動搖する線上に立つて仕事をなすを獨得とするの策士なり。馮と段と對立のとき、徐、外患なし。馮死して頓に二大對抗の勢去り　段が已に迫り來らんことを恐る。此に於て雲鵬と樹錚とを挑發して、段の勢を殺ぎ、更に靳と吳とを結ばしめて以て段を倒し、その陰謀、成就す。

◉吳が徐樹錚を排斥せんことを、總統に要求すれば、これを許し、段がまた吳佩孚を排斥せんことを請へば　また　これを許し、恍として成見なきものの如し。實は、段と吳と、ともに、徐總統の術中に陷りて未だ悟らざりしのみ。吳高く　賣國賊征討の金招牌を揭ぐれば、段は即ち綱紀肅正の春秋大義を對擧し、生命を賭して相搏つに至る。世昌、乃ち新華宮に安居し、[illegible]を拋つて微笑す。定めて、孺子教ふべしといひたるならん。

卅九

◉吳佩孚の人物は、群雄のうちの變化少きものなり。而して普

く變化するものは、戦術に若くなし。直隷戦に於ける彼の行動を見よ。戦前に、彼は双方に向つて、勸解し、戦時には兵を按じて動かず。決戦には、則ち旗色の善き方に味方し、勝を助けて敗を攻む。戦後には首功に居り　天津會議には、曹錕の面前に呉佩孚を排斥するに至る。

◉段、殁落して、これに代はるは奉直の二大勢力なり。此に於て、新華宮の水竹村人新たに脚本を書き張作霖と呉佩孚とを、千兩役者として舞臺に登らしむ。呉佩孚、長江方面に力戦し、武力統一の成見を抱くこと久し。徐總統が張作霖を引いて自保せるは可なり。張が、付け上がりて、梁士詒の腰を押し、安福の特赦を請ひたるなどは、やり過ぎたるものにして、過ぎたるは及ばざるが如し。却つて雰圍氣を悪るくするの失計となり人心をして一致して呉に向ふに至らしむ。

◉奉直戦は、今更、此に詳論するを要せず、戦前の聲勢、質に民國以來の大戦となす。天下の兩雄、大軍を放つて京畿に戦ふものにして固より蘇浙戦の比にあらず。奉軍、十二萬ばかり、二十萬と號す。奉軍は兵數　兵器に於て直軍に勝さり、直軍は意氣に於て奉軍に勝る。

◉奉天軍、初より必戦の志なし、張作霖の意、中原を威嚇するにあり。戦線、頗る遠きに渉り、北京を遠捲す。此の時、張の爲に計るに、戦はざるを上策とす。彼に直ちに北京に進入し、大總統を擁して、天下に號令すべかりしなり。然るに誤、此に出でず、自から軍糧城に據つて戦線を統率す、彼は政略戦をなしながら、身は鐵火線上に立つ。彼の大失策なり。

◉呉佩孚は全部の精力を擧げて、敵の一部を打つ。彼は初より必戦の意氣あり。而して追撃戦は太だ手緩かりし。奉天軍の潰走するや、固より京奉線の鐵路のみにては間に合はず、原野を歩走して、頗る慘憺たるものあり、若し呉にして、輕騎を以て、直行して、敵を山海關に喰留めば、奉天軍は完きを得ざりしなるべし。

◉張は、政略戦より鐵火線に移り、呉は、寧ろ鐵火線より政略戦に移れり。戦の跡は、兩雄共に拙なり。張を尤も拙とす。戦略、戦術よりすれば、呉は、張よりも一日の長あり。張は純捍無比と稱すれども、昔し馬賊の團隊を率ゐて、雄闘したるまでにて、大戦は知らず、呉は、戦場に練り上げしものにて、大軍を統率することを知れり。

◉最後の山海關の戦、奉天軍は土俵際の打棄りを見せて全軍を保全するを得たり。奉天人或は、最後の快勝を誇説せんとするものありといへども、大局に於て、奉軍の大敗たるは論なし。北京に進出したる奉天軍が、山海關外に押し返されたるは、土

俵を割つたるなり。土俵を割つた後、敵を投げたればとて、軍扇を揚くを得ず。

●戰勝後の吳佩孚は、復た舊阿蒙にあらず、すでに徐政統の慣用手段を洞看せり。巧妙なる投手の魔球も、慣るれば打つこと難からず。徐は例に由つて、張作霖の官職を奪ふの命令を發せしも、そは一場の滑稽に過ぎず、吳の機嫌、とても直らず。吳佩孚は、戰勝の餘威を挾んで、舊國會の回復と、黎元洪の復職とを高唱し、堂々として徐世昌を逐ふ。これ則ち吳が徐の魔球に對し、見事に、ホームランを飛ばしたるなり。かくの如くして、一代の老奸徐世昌が、段を倒し、吳を倒し、順々に目上の瘤を除いて、以て、自己の政治生活の安全を計らんとしたる陰謀のプログラムは、玆に終を告ぐ。

四十

●奉直戰後の吳佩孚が、尤も注意するは軍備問題にあり。此の故に、黎以後、次いで今の曹錕に至るまで、財政、交通、崇文門監督等、およそ財政及び鐵道、關税の要路には、悉く自己の意中の人を擧げて、他をして一指を染めしめず。身は洛陽にありといへども、民國政府の金庫の鍵は、悉く、これを掌中に收む。彼は、今や、軍事專門家にあらずして、政治家の域に入れり。

●吳佩孚の人物、群雄に對照するは興味あり。およそ群雄のうちにて、彼ほど衆評の紛々として定まらざるものはなし。洛陽に、彼と會晤し來れるもの、十人なれば、悉く十個の評論あり、然れども、彼の生平の言行を以て考ふれば、その人物、必ずしも知り難からず

●彼は、寛厚なるに於ては曹錕に若かず、その眞實にして事に任ずるは曹に勝さるへし。精敏なるに於ては、とても張作霖に及ばず、身を以て衆に先んずるの概は、遠く張の上に出づ。淡白るに於ては、段祺瑞に次ぐ、然れども剛愎自信は、段以上なるやも知れず。爽亮なるに於ては、盧永祥に次ぐといへども、深謀遠慮あるは、盧に過ぐ、學問は徐樹錚に及ばさるも、學を重んじ、偏將を用ふるは徐と同じ。建設の才、閻錫山に及ばざるも、事をなすに終始完きは閻と同じ。その餘の諸雄は、吳の敵にあらず。

●唯だ齊燮元一人のみは、吳を凌駕するの志あり、將來の勁敵なるべし。齊は、南京の新聞の校正掛より出世して此に至るといふ。また是れ群雄のうちの立身の、殊に速かなるものなり。

●吳の幕下、王承斌は直隸派の一頭目とす、吳に次ぐの長老なり。然れども、その出身が遼陽なるを以て、世評、或は彼が奉天に內應するを疑ふ。吳、堅く信じて、その才を用ふ。特に與

ふるに直隷軍務督辦の要職を以て赤心を彼の腹中に置く。これを以て、王、粉骨してこれに酬ゆ。奉直戰に、力戰、尤も功あり。連戰三晝夜、少しも休息せず、敵の中堅を突破するに至る。後、曹錕の弟、曹鋭の直隷督軍となるや、吳則ち王を薦めて直隷省長とし、以て曹鋭を牽制せしむ。その人に任ずるの襟度、かくの如きものあり。

◉支那海軍、第一の宿將を薩鎭冰とす。海軍の大半は彼の僚屬たり。民國以來、夙に海軍總長に任ぜられしも、入閣を願はず、情願して、外任を請ふ。蓋し艦隊派の領袖たるものなり。奉直戰に、張作霖の潰走するや、海軍の爲に、その歸路を攻擊さるゝの報に接し、怱忙して山海關を出づといふ。この説、未だ全く信ず可らずといへども、薩が直隷を助けて張を倒すの功は著るし。

◉奉直戰前、張作霖の入京せしとき、某日の集會に、薩、特に椅子を移して、張と談論を試む。張は、稠人廣座のうち、竟に、顧みて他を言ひ、明らかに、彼と語るを屑よしとせざることを示す。薩、深く、これを憤ほり、報復の機會を待つ。奉直戰起るや、彼、即ち起つて、兩度の遊説を試み、海軍を動かし、艦隊をして速に北馳せしむるは薩の功なり。

◉當時、張作霖が、世に聞えし薩鎭冰を集會の席上に愚弄するの説、多少の評論を要す。恐らくは、張、故意に薩鎭冰を侮辱したるには非るべし。張といへども、それほどに沒常識ならず。張に惡癖あり、極めて我儘にして、また極めてブッキラ棒なり。身神不快なるとき、客に對しても口をきかず、突慳貪にして、人を人ともせざるは、奉天城中に於て、皆、目睹するところなり。惟ふに、彼の日、彼、薩鎭冰に對したるとき、たまに、生來の惡癖を暴露して、計らずも客の怒を買ひしならずんばあらず。

◉張は、生平、滿洲に居り、田舍大王にして、傍若無人なり。その機嫌よきときは、愛嬌、泉の如く湧く。機嫌惡しければ、石佛よりも頑なり。かくの如く我儘一杯なるは、政治家としては、確かに一の缺點なり。彼をして、早く北京にあらしめば、あれほどまでに、我儘にはならざりしなるべし。

四十一

◉吳佩孚は、華を去り實に就くの主張を有す。胸中固より功名心の燃ゆるあり。然れども、守ること堅實にして、寸を得れば寸を守り、尺を得れば尺を守り、歩々、地を占むるの概あり。張作霖の野心的なると、趣を異にす。

◉麻雀は支那の名物、賭博の第一戲にして、上海より廣東帶の

輸出、年々、數百萬金に及び、今に於ては、世界的賭博たり。支那にては、麻雀を知らざれば、紳士らしからず。張作霖は、殊に、麻雀趣味なるを以て知らる。酒、麻雀、女、支那劇、則ち支那紳士の風流條件なるべし。日本紳士も亦た、これにかぶれざるは少し。呉佩孚は、少しく酒を好むのみ、その餘は、皆、顧みず。此の意味に於ては、時流を拔くものといふべし。

●張作霖が麻雀に耽溺するは、彼が滿腹の鬱氣、彼を驅つて此に至らしむ。徒らに社交の爲にするものにあらず、酒色に沈湎するも、また彼が少壯以來の生活の馴致して、その性格をなすものなり。故に張作霖には、努力、奮闘はあり、煩悶は絶えてなし。

●呉佩孚は、規律的なると、修養的にして、勤勉なるとに於て、群雄の第一人なるべし。此の見地に於て、彼は張作霖と正反對の人物なり。彼は早く寢て早く起き、朝六時、即ち出でゝ自から練兵を督し、歸つて事務を視るや、裁斷流るるが如く遲疑せず。午餐に紹興酒三四合ばかりを傾け、陶然として午睡すること少時、また起きて、兵を見、事務を見る。かくの如くして、毎日、正しく繰返すこと時計の如く、閑暇あれば、乃ち字を習ひ、畫を習ひ、好んで竹を描く。

●呉佩孚は進士とはならざりしも、秀才に登第せり、南方、呼んで秀才將軍といふは、暗に、その學術の、大したものに非ざるを嘲けるなり。然れども、彼だけの素養あれば、恥かしからず。外國人、彼を推稱して、文武の全才なりといふは、お世辭なれども、群雄のうちにては、それに近かるべし。

●彼に對するの批評、紛々たるは既に言へり。或は、彼を以て、親米の巨頭となすものあれども、必ずしも然らざるは、着、事實に徴して知るべし。ともかくも、彼は、近來、漸く親日ならざる可らざるを覺悟せるものゝ如し。これだけ彼が地位の向上して、眼界の濶大したるを見るに足る。

●呉と張とは、共に滿を持して、競爭の白熱點にあり。而して二人者の態度の反映は、殊に感興を引く。張ほど規律的ならざるはなく、呉ほど規律的なるはなし。張は奥まりたる宮殿に居り、呉は身を以て全軍の先頭に立つ。張は天才的。呉は修練的。二者が精力の旺盛なるは相敵し、呉が、一生懸命にして眞面目なる努力は、則ち群雄の企及せざるところなり。

●呉佩孚の軍隊は、支那の陸軍の精兵なりと稱せらる。彼は、精兵主義なり、その直轄せる一師團には、特に理想的の訓練を施す。彼は、それに慊たらずして、更に少年義勇團を作り、武裝して、銃を執り、軍歌を唱へ、日々の訓練、壯年兵士に擬す。日本の幼年學校に比して、軍隊の幼稚園ともいふべく、彼は、

三ツ兒の魂に、芸人根性を植えつけんとするものなり。

四十二

◉奉直戰は、啻に民國以來の大戰たるのみにあらずして、その戰鬪の激烈を極むるに於て、古來、支那に稀有なるべし。復辟の戰爭には、張勳の敗軍、死傷百數十、而して段祺瑞の兵、死傷、僅に六人に留まる。奉直戰の山海關に至つては、彼我の死傷、實に六千人と稱す。その傷者の奉天に收容せられし實數を以て推測するに、奉天軍の死傷、眞に三千人に近かるべし。かくの如き激戰、或は支那に在つては、開闢以來ならん。また以て、天下分目の兩軍の意氣の盛なるを見るに足らずんばあらず。

◉長辛店の戰鬪の實見者、吾儕に語りていふ、支那兵の、かくの如く健鬪するを見るは、實に、意想外に出づ。支那軍隊の前途、恐るべきものあらんと。此說、また以て參證に資すべし。

◉蓋し、支那の兵隊、及び、その戰爭といへば、何人も、旗幟と鳴物とを連想せざるはあらず。鳴物入りの支那芝居の戰爭は、囂々として、事實の支那戰爭を連想せしむるものあり、大勢の兵士、旗を揭げ、劍を打ち揮り、呼號、叫喚し極めて騷々しき音樂につれて、舞臺を出たり、入つたり、入り亂れて雜鬧す。日本の芝居ならば、刀には、みな鞘あり。支那芝居の兵隊は、暇なく、我身ばかりを捩りまわし、兩手をひろげて、兩目、大聲を發して、どう〳〵めぐりす。芝居の兵隊は、定めて、古來の支那戰爭の寫實なるべし。

◉支那、滿洲の、街頭、招兵の廣告は外國人には、趣味を以て見らる。壯丁を募集するなり。身長、揃はず、年齡不定、體格檢査といふほどのものもあらず。雜然として人數を揃へたる軍隊なり。支那人は、日本人に比して長大なるを以て、卒然として見れば、支那軍隊の恰好は惡しからず。

◉支那の軍閥の武力を對照するは、殆んど困難なり。師團といひ、旅團といひ、規定の兵員ありといへども、事實には、兵數一定せず。訓練の標準に至つては、尤も一定するとなし、區々思の儘なり。將帥かねて軍資を以て私腹に貯へ、所定の兵を養はず。檢閱のとき、隨時他の兵を借りて補充するのみ。これ等の事は、皆公然の秘密に屬す。借兵の、間に合はずして、檢閱に尻尾を見する如きは、甚だ鈍なりといふべし。

◉其將校は、學術なく、兵語すら知らず。軍規は頗る寬大にして、汽車中の兵士、屢、放恣、狼藉を逞しくす。夜の芝居に、多數の兵士、來觀す。北京の劇場は、巧みに兵士を徹遂して、一隅に集合せしむるを例とす。

◉然れども招兵の軍隊は、登龍門なり。眞のデモクラシイは、

支那にては軍隊にあり。身を賣つて奴隷となるもの、出世の途なし、唯だ軍隊の一途あるのみ。曹錕も兵士より起る。吳俊陞は博勞より兵士となり、張作霖は馬賊よりして、滿洲王となる。牛太郎より出世したるものに、唯一の孫恩遠あり。

●現實を暴露したる支那の軍隊は、かくの如きものあり。支那に旅行したる外國人は、皆、これを知る。抑、支那人が軍隊に對する根本的の觀念、日本及び外國人と同じからざるものあるが如し。若し、軍隊の觀念に革命を生じ、心神の鍛錬を行ふに至らば、彼等が長大にして力量あるは、その强味なりとすべし。

●吳佩孚は、則ち支那軍隊の革命家たらんとする者なり。その調兵は、精神教育を施すこと、殊に深切を極む。彼の儒教的訓練に關する文章、軍歌等、頗る多し。蘇浙戰に、兵士、雨傘を携ふるものありといへど、吳の精兵には此の如き事なし。

●飛行機は、支那の人氣者なり。奉直、競ふて、飛行機を購入し、その數は、ともに甚だ多し。互に、偵知して、一機たりとも多からんことを希ふ。吾輩の觀察するところを以てすれば、奉直、今次、開戰の曉、定めて、空中に彼我多數の飛行機の、壯大なる偵察戰を現出するやも知れず。

四十三

●北條氏は、僅に從五位下相模守を以て天下の實權を握る。男兒の本懷とすべし。吳佩孚の志は、必ずしも北條氏と同じからずといへども、その洛陽に居るは、北條氏の鎌倉に據ると相似たるものなくんばあらず。彼は名を好まずといふよりも、實を求むるに切なるものにして隨つて總統問題の如きは、今の彼としては問題にあらず。

●馮國璋は南京の實力よりして北京に進出するに至りしも、南京を捨てたるが爲に遂に總統を失へるは、吳の目擊するところなり。洛陽は、天下の形勢にあらずといへども、京漢鐵道を控制し、兵器廠あり。彼の地盤なり。彼は地盤を確守するものなり。此の春、副總統說の起りしとき、彼自から避けて問題とせず、盧永祥を推擧す。世間、大總統に非ざるを以て、彼の欲せざるところなりといふは非なり、大總統といへども、彼は、動かさるべし

●歷代の大總統、眞に、虛器を擁せざるもの、果して何人かある。吳佩孚は、今に於て、强ゐて自から大總統たるは難事にあらず、彼の志は大總統の名よりも、覇者たるの實にあり。

●洛陽は、史上の故都、敗殘の都のみ。文學に見たる洛陽に

は、吉林、吳佩孚の如き實力者を見ず。彼は一省督軍兼東北[illegible]」に趣味を有せず、日々、夜々、唯だ兵士を見る。彼の頭中、軍隊あり、軍器あり、武力統一あり。

●然れども洛陽は、吳佩孚あるが爲に、天下の都たり。彼は行佛の如く、僻地に置くといへども、人、自から集まる。洛陽にホテルらしきものなし、賓客は直ちに彼を訪ひ、彼の家に逗留す。彼則ち、日夕、必らず食事を共にし、談論す。此の意味に於ては、彼は學者、志士の態度あり。張作霖と全く異るのみならず、群雄のうちにも相似たるものなし。彼には、熱[illegible]の精神あり。

●彼は、從來の支那英雄と異なるところ少からず。海外の學問、智識に通曉するにあらずといへども、自から新しき氣分を有し、支那の大官、督軍の雰圍氣を超越す。此の意味に於て、彼は、近代殆んど未曾有の傑物といふを妨げず。

●彼は、ものものしからず。昨歳、鄭家屯の滿鐵公所に於て、吳佩孚に面會せしとき、吳佩孚は、その名刺を侍者に携帶せしむるを見たり。督軍は、外國人に面會する外、名刺を交換するほどの場合、稀ならん、偶々、數枚の名刺、これを自から懷中に收めて可なり。

●帽子、ステツキ以外、如何に輕きものといへども、自から手にせざるが支那紳士の身分なり。吾輩、自らは外套を手にしたるとき、ボーイ、強ひてこれを持たせんといふ。日本の役人氣分は、支那の代官氣分と相似る。

●吳佩孚は、單に、これを精悍といふに當らず、精力旺盛なるに於ては、張作霖は、決して吳に讓らず、徐樹錚、盧永祥、倪嗣沖、齊燮元、[illegible]の輩、みな精力旺盛ならざるはなし。唯だ吳佩孚の趣味に至つては、今の支那に獨歩すといふを妨げず。その資質、簡單、率直、而して不斷の緊張、勤勉、努力は、張が才氣に任かせて眼前の事務を斬り捌くり、自から極めて不規律、放縱の生活を送る俗世的英雄の態度と好對照とす。

●吳の態度は、これを大銀行の總支配人たらしむるも可なり。彼には、毫末も、放縱なく、浮滑なく、身を以て規矩準繩となす、彼は節制の權化なり。彼の如き態度を續けて、彼が疲勞せず、神經衰弱にも陷らざるは、彼が精神純一にして、心身ともに、節制あるが爲ならずんばあらず。張作霖は、極めて精悍なりといへども、緊張と放縱と、交々、交替して來る。吳が、江水の日々、流れて已まざるが如く、疲勞と弛緩とを見せざるとは、別種の雰圍氣にあり。

●奉直二派は、今に於ては、奉直といふよりも、その內容を以て、これを洛陽と奉天とするに若かず。奉洛の繩張りは、萬里

長城を以て境し、關を超ゆるは容易ならず。張といへども、前年の如く、輕進して關に入らざるべく、その抗爭は持久戰にして、好敵手の二大力士が四ツに、しつかり組みたるが如く、一擲乾坤の決勝の見込少し、體力の問題たるべく、互に持頑を事とし、その爭點は、蒙古方面にあらん。

四十四

●支那の本舞臺の爭點が蒙古方面に移れるの事實は、古今、始めて見るの現象たらずんばあらず。山海關は直隷を攻むるの大手にして、熱河は則ち搦手なり。大手を攻めあぐみて、搦手に肉薄しつゝあるは、張の態度なり。

●吳よりも張の戰氣、強し。吳の眼中、武力統一あり、張の眼中、吳佩孚あり。若し二人者の明目張膽せる刹那に、その瞳を撮影せば、吳の瞳には、支那地圖を映出して、そのうちに張作霖の立てるを見るべく、張の瞳には、吳佩孚の肖像を一杯に映出するならん。

●張、吳の對抗は、或は、これを甲越の抗爭に比すべくんば、吳は信玄にして、張は則ち謙信なるべし。地理的趣味を以てするも、越が東北に僻處し、甲が中部に僻處すると、相似たるものあり。吳には、信玄の組織的精神あり、張には謙信の禁慾的態度なし。凄味は則ち吳よりも張に多し。

●二人者の抗爭をして、趣味のマラソン競爭たらしめば、兎は張にして、龜が吳たるは論莫し。兎は龜を侮どり、龜の悠々たるは脫兎を恐れず。龜は一圖に努力を續く、緊張の限り無き連續は、外觀には、却つて鈍にして緩と見ゆ。敏にして、目の爍やく兎は、奔り且つ顧眄す。張が陰謀、奇策の百出するは、則ちそれなり。

●張は報復の念、極めて強し。吳よりも、殘忍なるは、讀書せずして、心地に餘裕なければなり。吳は、文章の錬すべきなしといへども、その趣味、文化に存し、殊に、教育に注目するを忘れず。時に詩を賦し、胸裏、別に樂天地あり。北京は、今、大學熱流行す、吳は則ち私立大學の濫設を論じて肯綮に中るものあるが如きは、張に求む可らず。

●張は、軍人よりも政治家たり。外國人に折衝するの微妙なるは、機鋒百出す。譬へば、極めて銳敏なる懷時計の如く、機智、即妙に湧く。徒らに日本の外交家の如く、溫言、以て外國人を好遇するを事とするに非ず。直ちに敵の急所を衝くこと、匕首を以て胸を刺すが如く、顧維鈞のハイカラなしといへども、その膽力その精到、カラハンをして要領を得ざらしむるを以ても想見するに足る。

●張の多策は、その天分に出づ。戰國的生涯を經て、策ますます複雜を極む。彼は戰國策を讀みしてとなし、然どもその對、その謀、實に戰國策の讀者たらずんばあらずして [illegible]が東西英傑の風骨あると、大に映發す。これを以て、歐米人は、吳の人格を賞揚し、張の才智は東洋人の驚目に値す。或は、張を評して、信長と光秀とに併せ似たりといふは、酷論たるを失はずといへども、當らざるにはあらざるべし。

四十五

●往來、大本教の出口王仁三郎、突如として蒙古に現はれ、王國建設の夢想を實現せんとしたるは、世人の驚異するところなり。王仁を擁して外蒙古に入るものは盧占魁、實に馬賊の大王にして、自から西北自治軍總司令と稱す。

●王仁と盧占魁と相伴うて外蒙古に入るの目的は、一者、一ならず。王仁は王國を建設するが爲に、豫言者たり、救世主たり、到るところに奇蹟を示して、以て蒙人を驚かす。盧の目的は則ち別に存す。

●日本人にして、遠く、海外不毛の地に入り、天に續く大沙漠のうちに、新らしき王國を建設せんと、夢みたるものはあるべし。一兵を有せずして、その實行を企てたるは、開闢以來、王仁を以て嚆矢とすべし。その成敗、利鈍固より問ふところにあらざれ、誇大妄想といへども、此に至るときは、自から一箇の藝術的たるを失はず。古來、英雄は、悉く誇大妄想ならざるはなし、その精神、膽略の如何を見るのみ。

●莽蒼たる外蒙古の大乾坤に、王仁が、長髮を、萬里の風に靡かして、長嘯するを想像すれば、感興湧く。盧占魁の志業、人物、却つて王仁に比すれば放誕的ならず。

●彼等の終局は悽慘たり。張作霖は命を下して、盧等を召致し、その一味を、悉く、白音太來の附近に銃殺す。皆言ふ、盧は、張の爲に賣らると。蓋し王仁は大本教の新王國を建てんが爲、盧も亦た、その繩張を擴張せんが爲、畢竟、馬賊の大王國を建てんが爲、ともに前人未發の新天地を求めて此に至る。これを挑發し、刺戟して、陰に、その背景をなすは張作霖なるや勿論なり。計、稍、洩るゝに及び、則ち盧を倒して口を滅す。王仁は、外國人たるが故に幸に免かれて歸るを得る。

●大軍を長驅せしめて、外蒙古の大沙漠を渉るは、張作霖の欲せざるところなり。然れども外蒙古を取り、以て、背後より直隷を扼して、これを「羽がひじめ」にせんとするは、彼の望むところなるべし、此に於て、多智なる彼は、馬賊の巨魁、盧占魁を放つて、徐ろに外蒙古を侵略せしめて、已、其の利を收

めんとす。王仁は、偶、此の機會に便乘するに過ぎずといへども、盧は、また、これを以て、その行動を修飾するに足るの佳客となす。

●蘇浙の戰渦、延いて、洛陽と奉天とに及ぶ。張が、勢力を伸張せんとするは、蒙古方面にありて、熱河を舞臺とせずんばあらざるべし。王仁の新王國問題は、張作霖の侵略政策の機微を語るものにして、その事實の、奇怪にして、變化に富める、實に、東亞に於ける、國事的探偵小說の絕奇なるものたるを失はず。

大正十三年九月九日、秋晴の重陽に、駒籠の書樓に於て

黑頭巾再記。



平福穂庵

―本朝畫人傳の四―

村松梢風

一

穂庵の父は、平福太治右衛門といつて、其の家は羽後國秋田領角館の豪家だつた。平福家は先祖代々久しく其の土地に住まつて、魚、乾物、米等を商つてゐた、家道も豐だつたが、舊い家系と門閥とで、町人とは云ひ乍ら士族同様の格武を有つて生活してゐた。太治右衛門の父――穂庵の祖父に當る人は、特に商道熱心だつたので、家道は益々富むばかりだつた。その祖父も、一面には可成りの趣味家で、いろ／＼の旦那藝を仕込まれてゐたが、謡曲は堂に入つて、殊に鼓を善く打つた。角館の領主は、秋田の佐竹の分家で、俗に北家と稱へてゐた、其の領主と穂庵の祖父は藝友達だつたが、お能の席へ出ると、殿様よりも上座へ着かなければならないのでどうも弱ると云つたくらゐ上手であつた。

其の子の太治右衛門は、子供の時から非常に繪が好きだつた。世間の子供の遊びに耽る暇に、太治右衛門は何時でも紙と筆を持つて、繪を描いて樂しんでゐた。十五六歳になると、益々繪が好きになつて、自分では私かに繪師になり度いと考へてゐた。處が、親はそれを許さなかつた。

「繪師になるよりも、もつと大切な家業がある」

と、父親は言つた。そして、太治右衛門が道樂に畫く繪をさへも「町人の身分として似合はしからぬ事だ」と言つて禁じてしまつた。併し太治右衛門は繪が習ひ度くて止められなかつた。

其の頃角館に武村文海といふ人があつた。酒屋の隠居だつたが、繪が好きで、若い時から獨學で四條圓山等の畫を學んで、

晩年は可成り善く南蘋風の畫を描いてゐた。畫の外に彫刻もやつた。元來文海は意匠に富んでゐる人だつたので、彫刻などにも面白い作があつた。例へば、鼬の木彫りで、首を拔くと中が眼鏡入になつてゐる――などといふ趣向の物だつた。

太治右衛門は、親に隱れて、文海の處へ通つて畫を習つてゐた。文海の家も同じ町内で、一寸横町をはいつた處にあつて、ごく近いので大變便利だつた。太治右衛門は師匠から文則といふ名を貰つた。

其の内に父が沒して、太治右衛門は家督を相續した。今では自由に己の好な事をして世を渡つても、誰も小言を云ふ者はなくなつた。とにかく彼は家業が嫌ひだつた。乾物だの米だのをいぢくつてそれで錢を儲けるといふ仕事に對しては、彼は何の興味も持つてゐなかつた。大體金儲けといふことが不得手でもあつた。好きな事といへば無論繪である。繪師になつて身を立てるといふことなら、それは一番理想的だが、悲しいかな手腕がない。繪を習つたとはいふものゝ、親に隱れてひま〳〵に稽古したくらゐの腕前で、中年の今からどれ程勉强したところで一人前の畫工になり得る自信は無い。幸ひ資産があるから遊んでゐても食ふことには困らないが、併し堅氣の町人として無職で暮すわけにもいかなかつた。

太治右衛門は、いろ〳〵思案した結果、自分の好きな道を應用することのできる商賣を始めるに限ると考へた。そして思ひ付いたのが染物屋だつた。染物屋と云つても普通の紺屋ではなく、主に婚禮の衣裳などの模様染めのやうな、精巧な物ばかりを取り扱ふことにした。

都合のよいことは、妻のきくが其の商賣に非常に興味を有つてゐたことだつた。きくは同國横手の商家大和氏から太治右衛門に嫁して來たのだつたが、天性器用で、押し繪などは至極上手だつた。で、染物の方も夫と共に非常に丹精を凝らしてやつた。模様の上繪は太治右衛門が自から描いた。染めの方で、職人の手では出來ない處は、きくが暇にまかせて丹念に染め上げるのだつた。だから實に美事な模様が染つた。

此の商賣は相應に太治右衛門の藝術的欲望を滿すことが出來た代りに、手間が掛り過ぎるので案外に利益は尠なかつた。おまけに、出來の惡い時には品物か或は代金で辨償するといふやり方だつたから、ます〳〵もつて儲からなかつた。

太治右衛門はさういふ性格だつたから、從つて多藝多趣味だつた。交遊も廣かつた。其の時代は、德川幕府も末期に近づいて、政治上では内憂外患交々到り、天下の人心が動搖し始めてゐたが、之れは譬へば深淵の底に生じた渦卷のやうなもので、

まだ水面には現れなかつた。文化文政の爛熟期の後を享けて、世を擧げて風流文雅を口にするほどの時代だつた。わけても日本の中心を去ること甚だ遠い秋田領の、山深い小さな城下町では、人々はたゞ靜かに太平の睡りを續けてゐるのだつた。水澄みて魚棲まぬといふ玉川のその水上にある角館は、羽後一國の京都と云はれたほどに美しく、て靜かな小都會だつた。其の土地には文人墨客が頗る多かつた。

太治右衛門の文朗は、それらの文人墨客の交遊の中心になつてゐた。平福家の二階は常に一種の倶樂部のやうになつて、每日いろんな人がやつて來て遊んでゐた。そんな事のために費へる金も少くはなかつたが、文朗は一向氣にも留めなかつた。彼の家の井戸は非常に良い水が出るので、町内でも、評判の井戸だつた。で、夏などはよく近所の人が水を汲みに來た。文朗は、自家造の酒を井戸の傍に置いて、水を汲みに來た者には勝手にそれを飲ませることにしてゐた。水汲みはます〳〵多くなつた。さういふ人物であつた。

穂庵は、文朗の獨り子だつた。弘化元年辰年の生れで、幼名を順藏といつた。順藏は三歳の時重い疱瘡に罹つたが、幸ひ生命は取り留めることができた。其の後は無事に育つて行つた。

文朗はよく口癖のやうに

「俺は繪を描く子が欲しい」

と言つたものだつた。自分が、好きな繪を思ふ存分に學ぶことができなかつたことは、終生の恨事だつた。併し、自分は今更何んと思つたところで仕方がない、此の上はせめて自分の生んだ子に繪を描く者があつて欲しい。そして、自分の果し得なかつた望みを、吾が子に襲がせて、立派な繪師に仕上げて見度いものだと常々考へてゐた。

彼の希望はやがて實現されさうに見えた。順藏は智慧付きの早い兒だつた。三四歳位の頃から子守に負はれて士族屋敷へ遊びに行つたが、或る時、負はれた兒の手に誰れかゞ紙片へ書いた物を持たして寄越したので、見ると「栴檀は二葉より芳し」としてあつた。

四つか五つ位の時分から、順藏は親から筆と紙を貰つて繪を描き始めた。其の筆づかひが、幼い者とは思はれぬくらゐ確かだつた。寺小屋へ上つて、童子教や實語教を讀むことを教へらた。さういふ本には挿繪が澤山あつた。順藏はそれを手本にしては書いた。紙が無くなると本の餘白へもつてつて繪を描くので、どの本でも一杯に繪が描かれてしまつた。七八つ頃になると、繪草紙や錦繪を手本にして俳優の似顔繪なぞを頻りに描いた。

平福家の隣りに、極く貧しく暮してゐる家があつたが、其の家の子も順藏と同じ位の年頃で仲のいゝ遊び友達だつた。寺小屋へも一緒に通ふのだつたが、或る時どうしたのか隣家の子供は寺小屋を休んでゐた。

「お前なぜ寺小屋へ行かないんだ？」

と順藏が尋ねると、其の子は悲しさうな顔をして

「本が買つて貰へないから、寺小屋へ行くことができない」

と言つた。

順藏は子供心にも友達の不運に同情した、が、子供の身では本を買つて遣る力はない、そこで考へた末に、自分の本を手本にして、文字から挿繪まで少しも異はぬやうに寫し取つて隣家の子に與へた。隣家の子は喜んで其の寫本を持つて寺小屋へ通ふのだつた。

八歳位の頃から順藏は父の師であつた武村文海に手本を貰つて正式に繪を學び始めた。

天才の萠芽は夙くも現はれて來た。順藏は、十一歳の時には摩利支天の像を畫き、十三歳の時には西園雅集を畫いて見る人を驚かした。それは最早立派な畫で、到底小兒の筆であるとは思はれなかつた。

其の頃、順藏は師匠から文池といふ名を貰つた。

二

文朗は、豫ての理想通り我が子を繪師に仕立てる積りだつた。それについて、いつ迄も順藏を手許に置いては上達が遅れると思ふので、誰れか良い師に附け度いものだと考へてゐると、或る日、秋田藩の儒臣で、明徳館の教授となつてゐる森田眠岑が遊びに遣つて來た。眠岑は文學に長じ、傍ら墨竹を善くした。矢張り角館の出身だつた。

文朗が、自慢乍らに悴の描いた繪を二三枚取り出して眠岑に見せると、眠岑は一見したばかりで驚いて言つた。

「是れは奇才である、小兒の筆ではない、後世畏るべき者になるでせう、處で、御子息は畫家になさるお考へですか」

「見込みがあれば、繪をやらして見度いと思つてゐるのです」

「見込みは十分あるでせう、併し、本當に修業をさせるなら、何時迄も御手許に置いては爲めにならん、何んなら拙者が預つて當分面倒を見て上げてもよい」

と眠岑が言つたので、文朗は大いに喜んで、悴を秋田へ遣ることにした。母は可愛い獨り兒を手放すことは辛かつたが、苦情も言へないので承知した。順藏は十三歳だつた。

角館から秋田迄は十三里あつた。順藏は秋田へ行つて、森田

の家で起き臥しをするやうになつた。が、大體ふところつ兒で甘やかし放題に育てられてゐるので、我儘で、手數の掛ること夥しかつた。其の代り肝が太くて、親の膝下を離れても格別淋しい顏もしなかつた。來た日から順藏は平氣で大飯を食つた。が家に居る時の習慣で、魚は骨を取つて遣らなければ食べなかつた。初めは森田の妻女が骨を取つて遣つたが、何時迄も人に委せてゐるので、或る日妻女が

「十三にもなつて、魚の骨を取つて貰はねばならぬやうなことではいけません、自分で取つてお上んなさい」

と小言を云つた。すると順藏は默つて魚を眺めてゐた。細君は仕方がないので又骨を取つて遣つた。

そんな風だけれども、學問は優れて出來た。學問の傍ら畫も習つた。重に畫譜類の物を手本にして稽古した。或ひは京都へ行つた人が土産に持つて來た新畫などを借りて、それを模寫したりした。畫譜の中では「公長畫譜」の影響が最も強く現はれてゐた。

順藏は、十五才位の時分にはもう立派に一人前の繪を描いた。既に筆路老成して、少しも乳臭を帶びた點は無かつた。其の頃南部藩に鈴木月嶠といふ四條派の畫家があつたが、たま〱月嶠が秋田へ漫遊して、順藏の畫を見て驚いて、手本を畫いて與へたりした。

順藏は十八歲の春迄まる五年の間森田の家に居て其の薰陶を受けた。其の年の春一先づ師の許を去つて郷里へ歸つて來た。が順藏は京都へ遊學したいといふ希望を持つてゐた。其の事を兩親に話すと、父はとにかく、母は、倅を秋田へ遣つて置くのさへ心配で〱たまらなかつたのに、何百里も離れた京都迄も遣るといふことは頭から不贊成だつた。が、當人が何んでも行き度いと云ふので、其の事を一應森田眠岑に相談すると、眠岑は順藏の京都遊學に大贊成で

「いつ迄も田舍に居ては勉强が出來ない、本人が京都へ行き度いと云ふなら、出して遣つた方がいゝでせう」

と言つて反對に父母を說くのだつた。そこで父親は倅を遊學に出すことに決心して、漸う妻をも納得させた。丁度折よく、秋田西方寺の住職雲窓和尚が、宗祖の大法事で京都の本願寺へ行くことになつたので、順藏を一緒に伴れて行つて貰ふことにした。雲窓和尚は、緇徒の身ではあるが中々畫も善くした。すると、廣島の南畫家小西皆雲が秋田へ遊歷に來て居たが、これも京都へ同行することになつた。

順藏の母は、可愛い獨り子を初めて長の旅路に出して遣るので、心配は一と通りでなかつた。着物の襟へ御札や小判を入

て遣つたりして大騷ぎをした。

文久元年十二月廿八日だつた。順藏は我家を發つて、二人の道伴れと一緒に、雪の深い國を後にして旅路に上つたのだつた。

仙臺領を越えて南部へ向つた。途中で中尊寺へ參拜した。南部では、曾て手本を貰つた鈴木月嶺を訪ね度いと思つたが、同行者の都合で共の暇が無かつた。それから松島日光を見物して江戸へ出た。江戸でも旅宿を取つて見物したばかりで、誰も知名の人を訪ねては見なかつた。江戸を發つて、東海道を上つた。横濱で、順藏は初めて異人を見て珍らしく感じたので、それを寫生して國元へ出す便りの中へ畫いて遣つたりした。

京都へ着いたのは、文久二年の三月三日だつた。丁度花の盛りだつた。王城の地の繁華な有樣や、東山、嵐山の景色、さては鴨川の水の流れ——眼に觸れる物が悉く感激をもたらして、順藏の胸に若々しい功名心を煽らずにはゐなかつた。順藏は間もなく獨りで下宿をして新らしい生活を始めた。

先決問題は、何ぴとかの許へ入門することだつた。

「誰れが一番いゝだらう？」と、順藏は考へた。

其の頃京都の畫壇には、老大家では鹽川文麟、横山淸暉等がゐた。どちらも四條派であるが、文麟は岡本豐彥の門から出て、淸暉は松村景文の門から出たのだつた。それに次ぐ者としては鈴木百年、中島來章等の名前が高かつた。百年は松年の父で、圓山、四條の風に文人畫の趣味を加へて一家をなし、來章は圓山應瑞の門下で、圓山派の正脈を傳へてゐた。

併し、是れ等の諸派の畫は何れも甚だ振はない觀があつた。それは文人畫の流行に壓倒されてゐるからでもあつた。岸駒、景文、豐彥等の巨匠が相ついで沒した後の京都の畫界を支配するものは、圓山、四條、岸等の派ではなく、文人畫の勢力だつた。文人畫の流行は一代の風潮となつてゐた。順藏が初めて京都へ行つた文久二年といふ年には、文人畫の大家貫名海屋、小田海僊等がまだ存命してゐた。それに續いては中西耕石、日根野對山等が活動の中心となつてゐた。

世を擧げて文人畫の流行に投じてゐる時代だつた。鹽川文麟の如き大家ですら、其の影響をうけて、雲烟出沒彷彿模糊たる山水を描いてゐた。さういふ時代ではあつたけれども、順藏は文人畫に走る考へは無かつた。彼は何處迄も古來の正統の畫を研究しようと思ひ立つた。

京都へ來てから、多くの大家の畫を見たり、其の人を訪問して畫論を聞いて見たりした。が、さて此の人を師と仰ぎ度いと思ふ程の人に出遇はなかつた。或る人が順藏に向つて、

「早く誰れかの門に入つたらいゝでせう」と言ふと、順藏が

何う思つてゐたか、一人も思はしい先生が無いので困ります。文麟、寛齋はもはや老年だし、百年、米僊等も、師匠としたい程偉いとも思はないのです。大體上方の大家は、案外無學な人ばかりで驚きます」

と答へたので、さすがに其の人も、順藏の若年に似氣ない見識に一驚を喫してしまつた。

順藏は到頭師匠を取らなかつた。其の代りに、毎日のやうに、諸方の風景を寫生して歩いたり、神社の繪馬を寫したり、寺の什物の古畫を見て模寫したりなどして、古人と自然とを師として研鑽することは怠らなかつた。祇園祭や伏見の祭禮の時には、半紙をふところに入れて町を歩いて、家々で店先きへ飾る名畫の屏風を見ては模寫して廻つたりした。

其の年の秋、順藏は、文池といふ名を改めて、自ら穗庵といふ號をつけた。それは天智天皇の「秋の田の刈穗の庵」の御製から考へ出した名であつた。けれども人は矢張り以前の文池の名で彼を呼ぶことが多かつた。

與吉は、月に二回宛郷里から音信があるので、其の都度托して寄越つた。其の二回の音信といふのは、一度は藩の使で、いま一度の方は秋田と京都との間を毎月往復する商人だつた。さう云ふ風だから與吉は穩當だつた。彼は何の心配もなく毎日寫生帳をふところに入れては方々を歩き廻つた。

彼は非常に寫生が好きだつた。だから、人の顔を見て似顔を描くことにも殊に妙を得てゐた。毎日其處らを出歩くので、四條邊の茶屋の女達などはいつとなく彼の名前を覺えてしまつて、

「文池はん〳〵」

と彼が通ると呼び留めて「あての顔描いておくれやす」と言つて、自分達の似顔を描かせるのだつた。

其の年の秋は紀州へ行つて、那智の瀧を寫生して歸つた。

三

郷里では、穗庵が遊學してから一年ばかり經つと、母親が、吾兒戀しさの餘りヒステリーを起してしまつた。彼女は夫に向つて、何んでも彼んでも悴を呼び戻して貰ひ度いと云つて承かなかつた。太治右衛門も仕方ないので、

「それでは、俺が行つて連れて歸ることにしよう」

と言つて、國元を發つて京都へ向つた。日數を重ねて京都へ着いた。太治右衛門は先づ悴の下宿へ落ちついた。一年餘りの間に急に大人らしくなつた順藏の無事な顔を見て父親は喜んだ。「これだから世間の風にあてなければいけない」と父は語

へた。積る物語りに夜を更かして、故郷へ安着を報らせる手紙の中にも此の事を書いて、「どうせ來た序でだから緩る〳〵名所名物でもして、それから忰と一緒に歸國する」と言つて遣つた。

當座は父子二人で名所見物に日を送つた。名所も見物してしまつたが、文朗は歸國しようとは云はなかつた。彼は相變らず忰を引張つては毎日方々遊び歩いてゐた。芝居へ行くにも、茶屋小屋へ行くにも、必ず父子で出掛けた。淀から船へ乘つて、大阪迄芝居を看に居つたりした。

文朗は、大變美男だつたので、實際の年齢よりも餘程若く見えた。それと反對に文池は、幼時の疱瘡の痕が顔に殘つて一面に白あばたがあつて、醜い顔ではなかつたけれども自然容貌が老けて見えた。だから二人を父子と見る者はめつたに無く、大概のものが兄弟だと思つてゐた。

「文池はんのお兄いはんどすか」

と言はれると、文朗は喜んで、すつかり兄貴氣取りで、文池を引つ張り廻して歩いた。

文朗は京都が面白くて、故郷で、夫と忰の歸國を一日千秋の思ひで待つてゐる妻の事は忘れてしまつた。國元では、月々二回宛、今度は忰の學資金のほかに、親父の滯在費までも送らなければならなかつた。

文朗は非常な大酒家だつた。忰の穂庵も父に劣らず飲んだ。親子はいゝ飲み相手でもあつた。或る時も國許の商人で平藏といふ男が京都へ仕入れに來て、平福父子の宿を尋ねると、文朗は喜んで毎日平藏を相手にして飲んで暮した。併し平藏はもう仕入れも濟んだので國元へ發足しなければならなかつた。いよ〳〵出發といふ日は、宿で十分に飲んで文朗が途中まで見送ることになつた。一緒に宿を出て、三條の橋の手前迄來ると、文朗は立ち止つて、

「平藏さん、お前此の家を知つてるか」

と言ふ。見ると飲み屋である。

「否え、存じません」

「さうかへ、ぢやあ一寸寄つて見よう、此の家の酒は評判の良い酒だ、灘の生一本の酒なんかは國へ歸つちやあ飲めないから、飲んで行きなさるがいゝ」

と言つて文朗はずん〳〵先きに立つて其の店へ這入つてしまつた。平藏も後から續いて這入つた。

「何んと平藏さん、いゝ酒だらうが」

「結構な御酒ですな」

「さあ〳〵、遠慮なく飲んでおくれ、恁んなのは國へ歸つちや

あとでも飲めないから、今の中に飲んで置きなさるがいゝ」

其處でも十分に飲んで外へ出た。橋を渡つて少し行くと、文朗は又立ち止つた。

「平藏さん、お前此の家を知つてゐるかな」

と言ふ。見ると矢張り飲み屋だ。

「存じませんな」

「京都へ來てゐて、此の家を知らないやうでは話せんな、是れは評判のうまい物屋さ、無論酒も上等だが、とにかく肴が凝つてるよ、一寸寄つて見よう、國へ歸つてしまつちやあ、そんな凝つた肴で飲み度いと云つたつて飲めやしないからな」

と言つて文朗がずん／＼其の家へ這入つてしまつたので、平藏も仕方がないから續いて這入つた。酒肴を誂へて飲み始めた。

「なんと平藏さん、酒も良いが、此の吸物はどうだ」

「成る程、是れは結構で御座いますな」

「さあ／＼、遠慮無く飲んだり／＼」

其處でもまた十分に飲んだ。そして二人が表へ出た時には、もう日が暮れかけてゐた。平藏は到頭發てなくて、また候宿屋へ引き返して泊つてしまつた。

國元からは便りのある毎に歸國を促がして來たけれども、文朗は一向そんな氣もなかつた。さうして、父と一緒に足掛三年も京都で暮らしてしまつた。

穗庵は、或る年、扇面へ猩猩を描いて、これを故鄕の恩師武村文海の許へ送つた。文海は其の頃は中風を發して口が利けなくなつてゐたが、其の繪を見ると、落涙して、吾が弟子の上達を喜んだ。

其の頃俄かに世の中が騷々しくなつて來た。朝廷と幕府との軋轢は日を追ふて劇しくなり、京都の市中は、勤王黨の浪士と、幕府の兵卒や密偵との、爭鬪の舞臺と化してしまつた。辻斬り、强盜、暗殺、さういふ血なまぐさい事件が毎日到る處で行はれた。文久は三年で改元されて元治となつた。

其の物騷な世の中になつても、平福父子は京都に留まつてゐた。穗庵は相變らず帖面をふところに入れては寫生をして歩いた。暗殺された者や所刑を受けた者の死體が曝し物になると、穗庵は態々出掛けて行つてそれをも寫生して來るのだつた。四條繩に竹矢來を結つて、其の中に幾つも並べて高い處に曝されてある生首だの、町中で大砲にうたれて微塵になつてゐる死體だの、そんな物の繪まで穗庵は描いてゐた。父の方は、道樂に、市中の落首や流行唄を集めて歩いたりした。

さうかうするうちに、王政復古となり、續いて鳥羽伏見の戰

爭が始まつた。さすがに呑氣な父子の者も此の上京都に留まつてゐることは出來なくなつた、父子は手に手を取つて、北陸道を通つて國元へ逃げ歸つた。

それは明治元年の事で、穗庵が國を出てからでは足掛け八年目の春だつた。

當時秋田藩では、尊王黨と佐幕黨との二派があつて、初めのうちは佐幕黨に傾いてゐたが、天下の大勢が定まつて來てからは尊王黨が勢力を恢復して、藩議もこれに一決するに至つた。折しも奥羽鎭撫總督九條道孝、副總督澤爲量、參謀醍醐忠敬、大山格之助等が、大村藩の兵を率ゐて向つたので、秋田藩ではそれを迎へることになつた。官軍は秋田領内の久保田に駐屯して此處を根據地とした。

秋田藩では、總督以下の人々を應接をしなければならなかつたが、何分言葉の通じる者が無くて弱つた。すると或る人が、

「角館の平福太治右衛門父子が、最近京都から戻つて來たが、彼等は久しく京住居をした者であるから必ず京言葉に慣れて居るであらう」

と言つたので、早速平福父子が呼び出されて通辯の役をうけたまはつた。處が穗庵に繪を描くところから大變官軍の參謀連からも重寶がられて、軍事用の見取圖などを描かせられたりした。

世態が一變した。明治政府が樹立されて、天下は太平に歸した。

京都から歸ると間もなく穗庵は結婚した。妻は、せつと云つて、矢張り角館の人で、其の家は絲屋を營んでゐたが、せつの父親は非常に親孝行な人でお上から褒美を貰ふこと三回にも及んだ、せつが平福家に嫁いだ時は十七歳だつた。

平福家は相變らず染物屋を營んでゐた。穗庵は其ので繪や上繪をしよつちう描かされた、彼は其の仕事が厭で堪まらなかつた、さうかと云つて、畫では獨立の生計は立たなかつた。明治の初期は、依然として文人畫の時代で、奥原晴湖が閨秀の身で貴顯の間に斡旋し、遒健の筆を揮つて一代に持て囃されるといふ風であつたが、其の他は悉く畫運衰微のどん底に沈んで、狩野、圓山、四條等の畫家は、何れも世間から顧る者がなく、立派な手腕を持ち乍ら口を糊することさへ困難な時代であつた。

穗庵は京都から歸つて來ると、畫風が非常に變化した。彼の畫は大體は四條派であつたが、其の頃になると、初期の南指や南嶺の風が全くぬけきつて、おのづから一派の風格が具はつて來た。殊に彼は動物を描くことに於て妙を得てゐた。

彼はよく何處ともなく旅行に出た。家に居ると染屋の手傳ひをさせられるので、それを逃げるためでもあつた。

「一寸行つて來る」

と言つて出た儘、半歳位戻らぬやうなことも珍らしくなかつた。

四

太治右衛門は、素より文人肌で、一向に理財の道を知らない人だつたので、平福家の家道は何時となく衰運に向つてゐた。殊に明治の代になると、世間の狀態が一變して來たので、昔通りの遣り方では立ち行かなくなつて來た。其の太治右衛門も、明治十年に歿した。

相續人の穗庵は、親に輪をかけたやうな性格で、放縱で、金錢に慾の無い男だつた。

其の頃秋田に瀨川といふ實業家があつた。元來は盛岡の人だが、秋田へ來て、鑛山や海産物の事業を經營して、盛大にやつてゐた。其の瀨川が、穗庵の人と爲りを愛して常に後援して吳れてゐるのだつた。

或る時瀨川が穗庵に向つて、

「あなたも左うして繪を描いてゐても、繪が賣れなくては仕方がない。一つ、商賣違ひだが、私の店で働いて見てはくれませんか、相當の月給を差し上げることにしませうか」

と言つた。

「御親切は誠に有難いが、私にはとても算盤は彈けません、あなたの店に入れて貰つたところで、何も出來さうな仕事がありません」

と穗庵が言ふと、瀨川は笑つて

「君に算盤を彈いて吳れとは云ひませんよ、なに、あんたで十分出來る事もあるんだ、まあ、人の相手をして酒でも飲んでて吳れりやそれで勤まるといふ仕事なんだ」

「や、そいつは結構ですな、他の事は出來ないが、酒を飲むことなら幾日でも續きます、さういふ仕事があるなら是非御採用を願ひ度いものです」

「ではお話しするが、實は函館の店ですが、あすこは中々交際の面倒な土地で、其の方を上手にやらんと非常に商賣に影響するのです、で、誰れか一人適當な外交係りを置き度いと思つてゐたところなので、それにはあなたなら酒は飲めるし、畫はあるし、交際上手だから誠に適任だらうと思ふのだが、一つ函館へ行つて見る氣はありませんか」

と云ふので、穗庵は大喜びで承諾して、函館へ出掛けて行つた。

つた。それは明治十年頃のことだつた。

外交係りとしての穂庵は確かに適任だつた。圓轉滑脱の如才無さもあり、人に好かれても嫌はれる恐れはなく、わけても京都仕込みで酒席の斡旋は手に入つたもの、端唄も歌へば淨瑠璃も語り、酒は何升飲んでも醉ふことを知らないといふ豪の者だつた。だから瀬川は確かに人を見るの明があつたわけではあるが、生憎な事に穂庵は、それを主人の商賣の上にだけ應用してゐるといふことが出來なかつた。彼は直きにいゝ氣になつて、外交上の必要以外の方へ一層多く發展するやうになつてしまつた。其の結果彼は大きな借金を拵へて到頭瀬川の外交係りを罷めてしまつた。

穂庵は借金で首が廻らぬやうになつて、瀬川の外交係を罷めて了つても、まだ函館にくすぶつてゐた。彼の郷里の家では、穂庵が函館で不始末をやらかして困つてゐることを聞いたので、うつちやつても置けなかつた。それに母は、悴が一人前になつた今日でも、未だに子供の時と同じやうに可愛くてならなかつた。そこで、借金拂ひの金をとゝのへ、母がそれを持つて悴を迎ひに行くことになつた。母は雪合羽を着て、馬に乗つて、函館をさして出發した。彼女は恁んな旅をすることは生れて初めてだつた。が、氣が張つてゐるので、船に乗つても醉はなかつた。

穂庵は母親が行くと、

「よく來て下さいました、折角此處まで來たことだから、暫く函館を見物して、少し暖かになつてから歸りませう」

と言つた。母も其の氣になつて、半歳ばかり函館で滯在して、暖かになつてから母子二人で歸國の途についた。歸途は、悴と一緒で氣が弛んだせいか、母は劇しく船醉ひをして苦しんだ。母子の者が無事に戻つて來たので、家では人を呼んで盛んに歸宅祝ひを擧げた。

其の後は、穂庵も神妙に畫作をしてゐた。

穂庵が、初めて中央の畫壇に認められるやうになつたのは、明治十四年に、龍池會へ乞食の圖を出品した時からであつた。龍池會は、それより二年ばかり前に初めて生れた美術家の團體で、現今の日本美術協會の前身であるが、創立當時、美術界各方面の大家を網羅して、不忍辯天の社内で作品の展覧を催すのが例だつた。それが我邦に於ける美術展覧會の始祖であつた。穂庵の乞食の圖は、意匠卓絶して、筆力超凡なので人の眼を聳いた。會の元老柴田是眞は、穂庵の畫を見て

「田舎に是れ程の繪かきが居やうとは思はなかつた」

と言つて激賞した。

其の頃から、我邦の畫界の形勢が一變して來た。久しく世人から閑却されてゐた繪畫の趣味が、社會が平靜の狀態に戾ると共に急激に復活して來た。諸派の畫家が、俄かに擡頭して來た。只、それ迄獨り隆盛を極めてゐた文人畫だけが、反對にそれを一轉期として沒落の非運に向はなければならなかつた。それは世人の嗜好の循環に原因してゐることは勿論であつたが、同時に米人フエノロサを中心としたところの反文人畫運動が、社會に與へた影響も甚大であつた。

明治十五年、政府は第一回繪畫共進會を開き、十七年に、其の二回を開いた。

穂庵は、第二回繪畫共進會に、韓清忠の圖を出品して、名譽會員に推薦された。

其の翌年彼の郷里の家は火災に逢つた。其の日穂庵は他所へ行つて、何か繪を描いてゐたが、其の留守中晝なかに出火して、間も無く全燒してしまつた。穂庵は元の場所へ家を建つのを止めて、旭川に臨んだ町端れの家を買つて移つた。其の家は元の藩の役所だつた建物で、頗ろ堂々たるものだつた。

明治十九年に穂庵は上京した。いよ〳〵彼は中央の畫壇に志を伸ぶる決心をしたのだつた。長男恆嶽と門人竹村節村を郷里から伴れて來て、向島の佐竹家の別邸に滯在してゐた。すると間もなく節村が病氣で國へ歸つたので、其の代りに三浦山靜といふ門人を呼び寄せた。

穂庵は、磊落な人にも似合はず、門人や悴共に對しては非常に嚴格だつた。だから、明け暮れ師匠の側に附いて居なければならないことが、弟子の山靜に取つては甚だしく苦痛だつた。それに山靜といふ男は、大きいゝ體を持つてゐたけれども、我儘で怠け者だつた。兄弟弟子でも竹村節村のはふは極く溫厚だつた。國で師匠の家に居る時分、山靜は、節村が溫和しいのに付け込んで、一緒に膳に向ふと、節村の分まで飯のお菜を食つてしまふのだつた。子守をさせられると、子供の持つてゐる菓子を奪つて食つてしまつた。子供は泣き出して、山靜に負ぶはれて外へ出ることを厭がるのだつた。或る時は又恁んなことがあつた。餘所の家の庭に梨の木があつて、それが見事に實つてゐた。山靜はそれを見て食指頻りに動いたが、人の家の果物を盜むわけにも行かない。そこで一策を案じて、飼ひ猿を連れて來て、猿に梨を取らせてそれを自分が食ふのだつた。さういふ腕白な人間なので、師匠は漢學の先生の所へ通はせたけれども、彼は怠けてゐて學問は一向勉強しなかつた。だが、繪は達者だつた。それで穂庵も愛してゐた。其の時分は、山靜も女房を持つて、一人前になりかけてゐた。

東京へ來たばかりの時分、或る日山靜は外から歸つて來ると、

「先生、お土産を買つて參りました」

と云つて、澤山の壽司を、包みを開いて師匠の前に出した。

「ほう、壽司だな、どうも有難う、併し何んだな、珍らしい事だな、貴様が私に土産を買つて來るなぞといふことは」

「餘り旨さうな壽司でしたから、先生に差上げやうと思つて、わざ〳〵買つて參りましたのです」

「さうか、それは感心々々。成る程是れは旨い壽司だ、さあ、お前も食べろ」

「へえ……私は澤山で」

「澤山といふことはない、自分が買つて來たものだから、お前も遠慮しないで食べるがいゝ」

「へい……でも、私は澤山で」

「おかしいな、貴様のやうな大食の奴が、今日に限つて食べられぬといふ法はない、さては食べて來たのだな」

「へい、實は――」

と云つて山靜は頭を掻き乍ら白狀した。彼が今日戻り道に吾妻橋の側迄來ると、路傍に壽司屋があつた。例に依つて腹が空いて來たので、壽司屋へ這入り込んだが、東京の壽司を食ふのは是れが初めてたので、値段をきいてから食はふと思つて、

「壽司は一つ幾らです」と訊くと

「どれでも五十文です」と壽司屋の亭主は答へた。

「成る程東京は高い」

と山靜は吃驚した。其の筈だつた。秋田邊では其の時分十錢のことを百文と稱へてゐた。だから五十文と云へば五錢のことだつた。そこで山靜は、其の高價なのに駭いたけれども、自分の胃の腑に相談して見るまでもなく、幾ら少くも十個は食はなければ腹の蟲が承知をしない。錢は惜しいが這入つた以上は仕方がないと觀念して

「では五十錢だけ握つて下さい」

と云つて注文した。待つてゐる處へ、壽司が出來て來たのを見て山靜は再び仰天した。それは盥ほどのお皿に壽司が山のやうに積み上げてあるのを、兩手で捧げて彼の前へ持つて來た。山靜は駭いて、一體五十文といふのは幾許のことかと尋ねて見ると、それは五厘のことだつた。して見ると百個の壽司が來たのだから、澤山ある筈だつた。山靜は一氣の勇をふるつて壽司を食つたが、いかに何んでも百の壽司は食ひ切れなかつた。そこで食ひ餘しの分を包んで貰つて、土産に持つて來たといふわけだつた。

山靜は稀有の健啖家だつた。或る時も天麩羅屋へ這入つて、天丼を三杯食つたがまだ少し足りないので、四杯目を註文しようと思つてゐると、亭主が呆れた顔をして、

「お前さん國は何處です」

と訊かれたので、極りが惡くなつて止めてしまつた。

そんな男だけれども、山靜は、師匠と二人暮しでゐるのが窮屈で、それに女房もあるので、國へ歸り度くて仕方がなかつた。が、理由も無く歸り度いと云つたところで、師匠は許して呉れさうもないから、彼は一計を案じて、國許の友人に頼んで、「母大病直ぐ歸れ」といふ僞せ電報を打つて貰つた、穂庵は、まさかそれが僞せの電報であらうとは思ひも付かないので、大いに駭いて、即刻仕度をとゝのへて歸國をさせることにした。旅費も十分に與へたが、彼は弟子の道中を心配して、自分へ宛てた封筒の上書きを何枚も認めて山靜に渡して、途中の何處と何處へ着いたら忘れぬやうに手紙を寄越せと固く云ひ付けて遣つた。山靜の郷里は秋田縣の本庄だつた。其の頃はまだ東北には汽車の便はなかつた。山靜は、それでも殊勝に、云はれた處々から師匠の許へ音信をした。が、其の音信が、山形縣の新庄迄行くと、後はバッタリ來なくなつてしまつた。

山靜、師匠の許を逃げ出すことは逃げ出したが、母の大病といふのは元より跡方もない事だから、國へ歸つたところで仕方がなかつた。そこで新庄迄行くと、其の土地に知合の人が居て「まあ〳〵暫く遊んで居るがいゝ」と云はれたので、足を留めたのが縁となつて、到頭國元から女房をも呼び寄せて、新庄に永住することになつてしまつた。

五

穂庵は僅かの間に中央の畫壇で認められた。當時東京で一流の大家と云ふと、是眞、曉齋等の元老を除いては、荒木寛畝、瀧和亭、野口幽谷、菅原白龍、松本楓湖、川邊御楯、橋本雅邦、村瀬玉田、川端玉章、平福穂庵、以上十名程で、是れを十大家として舉げるのだつた。が其の中でも、雅邦、寛畝、穂庵等が特に頭角を抜いてゐるのだつた。

穂庵は、下谷西黒門町に、一戸を借りて其處へ引き移つた。門構へで、中庭に離室があり、母屋は八疊三つ、六疊と四疊半が各三四室、都合十室位あつて、一見堂々たる家屋だつたが、家賃は六圓だつた。

其の頃、山口瑞雨（米庵）永井一禾等が入門した。

矢張り其の時分の事、或る日穂庵の家の玄關へ突然訪ねて來た男があつた。門人が取次ぎに出ると、

「自分は繪を研究してゐる者だが、先生にお目に掛り度い」と言ふ。

座敷へ通して、對面して見ると、年頃は二十二三だが、眞つ黒な顏で、垢じみた浴衣を一枚着てゐる。

話しをして見ると、秋田市の者で、名前は寺崎廣業と云つて、是れ迄國元で小室怡々齋秀俊に就いて畫を學んでゐたが、穗庵の弟子にして貰ひ度いと思つて上京して來たといふのだつた。

「それは折角のお出でだが、お斷り申す、他人の門人を、先師に斷りもなく、私の門人とするといふわけにはいかない」

と言つて斷然謝絶したけれども、其の男は是非其門人にして貰ひ度いと言つてゐて動かなかつた。其のうちに日暮れになつて來た。

「兎に角今日は歸んなさい、泊る處が無ければ、小遣ひを上げるから、近所の旅籠屋へ行つて泊つて、又明日お出でなさい」

それでも其の男は動かないのであつた。仕方がないので泊めて遣ることにした。が、翌日になつても何處へも行かないので、ついずる／＼べつたりに、門人同樣にして置くことになつてしまつた。

さうして廣業は穗庵の家に内弟子みたいになつて暮らしてゐたが、秋になると、師匠に向つて、

「先生、私は暫く遊歴をして參り度いのですが、どうかお許し下さい」と言つた。

「遊歴もいゝが、あれはやつて見ると中々困難なものだ。家で畫いてると違つて腕も達者でなければいけないが、第一風采が肝心だ、乞食のやうな姿をして行つたつて人が相手にしない。まあ／＼そんな事は見合はせたらどうだ」

と言つて師匠は留めたけれども、廣業は是非遊歴に出度いと言ふ。

「それ程やつて見度いなら、まあ行つて見るがいゝ、が、一體何の方面へ出掛ける積りなのだ」

「野州へ行つて見ようと思ひます、日光へ行つたことがありませんから、あの造を見物して來たいと思つて居ります」

「さうか、日光を見て來れば無駄ではないな、ぢや體を氣を付けて行くがいゝ」

と言つて穗庵は、自分の袷を出して弟子に着せて遣つた。廣業は、日光をさして出掛けて行つた。

が、一年ばかり經つと、廣業は飄然として舞ひ戻つて來た。相變らず眞つ黒な顏をして、去年の袷を着て戻つて來た。そし

て[illegible]の家で厄介になつてゐた。

柴田是眞は、龍池會へ出品した乞食の圖以來、穗庵の畫を推賞してゐた人だが、穗庵が上京してからは、個人的の交際に於ても極く親しく交つてゐた。是眞は、穗庵の性格を非常に尊重してゐた。其の頃河竹默阿彌の娘島女は是眞の門人として出藍の譽れを得てゐたが是眞は常に島女に向つて、

「俺が死んだ後は穗庵先生に就いて學ぶがいゝ」

と言つてゐた。それは、一つは、是眞と穗庵との間に性格の共通點があつたからでもあつた。藝術上でも、人間の氣分の上でも、餘程似通つてゐた。是眞の人物並びに其の畫風が都會的であるやうに、穗庵は東北の片田舍の生れではあるけれども、性格や作品の傾向は著しく都會的色調を帶びてゐた。

是眞と交際する關係から、穗庵は、默阿彌、團十郞、菊五郞などとも親しく交つてゐた。

とにかく是眞は穗庵に對しては特に深切だつた。其の時代の世間の畫態として、畫家に與へる潤筆料等は極めて僅少なものだつた。だから一流の大家と雖も折貧乏してゐた。是眞も矢張り貧乏してゐたが、さういふ物質上の心配についても、穗庵に對してよく好意を示して呉れるのだつた。其の頃日本橋の榛原の主人は有力な是眞の後援者で、是眞はよく榛原の仕事を引き受けてしたものだが、榛原の主人は、是眞の良い門弟に毎月廿五圓の學費を與へて援助したほどだつた。其の榛原から、是眞の周旋で、穗庵の處へもよく團扇の繪を頼みに來たりした。

或る時榛原から「かけす」といふ鳥を描いて貰ひ度いと云つて、其の鳥を籠へ入れて持つて來た。かけすは一名かしどりとも云つて、野鳥だが、仕込むと人語を眞似る鳥である。其のかけすはよく馴れてゐて、人が側へ行くと「馬鹿アーー」なぞと云ふのだつた。

「いゝ材料だから、お前達かけすを寫生して見るがいゝ」

と、穗庵は門人達に言ひ付けた。三四人の門人が籠のまわりを取り圍んで寫生しようと思つたが、何分相手は鳥のことで少しもじつとして居ないので、どうやつて見ても形が取れない。一枚も描かないうちに午飯になつてしまつた。みんなで食事をしてゐると、向うでかけすが

「馬鹿野郎ーー」と言つた。

「どうだ、繪は出來たか」

「出來ませぬ」

「見ろかけすが馬鹿野郎と云ふぢやないか。一時間も二時間も掛つて、一枚も描けないとは何んだ。動いてゐる物だから、よく見て置いて描いて見ろ」

「へえ――」
飯を食つてしまふと門人達は又寫生を始めた。よく見て置いても矢つ張り描けない。それでもしまひに、どうやらかうやら描き上げて、
「先生、御覧下さいまし」
と差し出すと、穂庵は眺めて
「是れぢやあ違つてゐる、此處はかうでなければいけない」
と言ひ乍ら、筆を取つてチョイ〳〵と直すのだつた。
穂庵は非常に寫生に長けてゐた。動いてゐる物の刹那を捉へて描くことに妙を得てゐた。だから動物の圖は最も得意であつた。
或る時、神田明神の縁日で、穂庵は門人の山口瑞雨を伴れて參詣に行つた。すると狼の見世物があつたので這入つて見た。狼は、檻の中に入れてあつたが、香具師の男は、其の檻の中へ竹の棒を差し込んで狼を怒らせて見せた。狼はすさまじく吼えて、飛び付いて來て棒の先に噛み付いた。其の見世物を見て家へ歸つた。瑞雨の家は車坂にあつた。師匠に別れて家へ歸る時
「山口今晩家へ遊びにおいで」
と穂庵が言つた。其の晩瑞雨が出掛けて行くと、穂庵は直ぐと
「どうだ、狼を寫生して來たか」と言つた。
「否え、描きません」
「何故描かないのだ、繪かきがあんない〻材料を見て來て、寫生して見ないといふことがあるものか」
「でも、とてもあんな處は描けません」
「駄目な奴だな、俺は今何枚も寫生して見た處だ」
と言つて穂庵は、猛り立つ狼の寫生畫を何枚も出して見た。
瑞雨が見ると、それは彼の記憶と少しも違はない狼だつた。

六

男世帶なので、暮し向きの事は、時々弟子に金を預けて置いて、それで買ひ物をさせたりなどしてゐた。
金を預けられた者は、買ひ物をした後で、其の計算をして師匠に見せなければならなかつた。と云つたところが、高々三圓か五圓の計算に過ぎなかつた。
「煙草が卅錢でございます」
「よし〳〵、それから」
「魚屋が二十八錢、米屋が一圓二十錢、それから酒屋へ二圓五十錢、締めて四圓十八錢になります、處で五圓お預り致してありますから差し引き」
と説明し始めると、穂庵は分らなくなつてしまつて頭をか〻

えながら「ふーう」と大きな息を吐くのだつた。彼は金の勘定はとても出來ない男だつた。經濟觀念が缺乏してゐるので餘計貧乏をしなければならなかつたのであつた。

其の頃或る人の處へ遣つた穂庵の手紙。

毎度御懇情奉深謝候、漸く一昨日襖類出來歸宅仕候、御書面拜見仕候、決して羽折の方旁々に付御心配被下間敷候、其内に都合致し受戻し可申候間、流れに不相成樣御高配奉願候、御病氣之由如何、折角御保養可被遊候、御見舞に參上仕度候へ共那波氏此頃イツ方に居り候哉奉伺候、一向面會不仕候、只今車代にも差支無據御無沙汰致居候、不惡御思召被下度候、絹地尺三四の幅、花鳥山水人物中通り畫なれば、一葉の揮毫料三圓位より試問、一圓半、一圓迄にて先方の好次第に可仕候、但し絹地は別に有之候、來月下旬ならでは出來候事無覺束候、いづれ拜眉の上御噺し可申上候、烏渡御報並に御伺迄

匆々

一月廿一日夜　穂庵拜

銀海大人

穂庵は可成着物道樂だつた。が、拵へたばかりの着物を一度も手を通す間もなく質に入れてしまふやうなことも珍らしくはなかつた。門人達は始終質屋の使をさせられた。

或る年の暮、穂庵はどうしても百圓の金がなくては年の瀬が越せなかつた。で、毎日俥を乘り廻して百方金策に奔走したがどうしても百圓といふ金は出來なかつた。萬策盡きてぼんやりしてゐる處へ、池田琴峯がやつて來た。琴峯は當時二流の上の部といふ畫家だつた。

「やあ、どうしたい」

「どうもかうもない、三十五圓なければ年が越せないんだよ」

「俺は百圓なければ年が越せないんで弱つてる處なんだ、で、君は幾らか出來たのか」

「ちつとも出來ない、仕方がないから、夜逃げでもしようかと考へてるわけなんだ」

「左うか――」と言つて穂庵は考へてゐたが「それでは、茲に三十圓だけあるから、是れを持つてつて遣ひたまへ」

と言つて三十圓の金を琴峯の前へ置いた。

「併し、此の金を借りて行つたら君の方が困るだらう」

「否、俺の處は、どうしても百圓なければいけないんだ。併し君の方は三十五圓で年が越せるといふんだから、是れ丈持つて行つたら何んとかなるだらう、此の金で、一人だけでも助かる方がいゝ、構はず持つてつて遣ひたまへ」

と言つて、其の金を琴峯に遣つてしまつて、後で着物を質に

入れて翠谷と一杯飲んだ。

其の頃穂庵は東陽堂の仕事を引き受けてはよくやつてゐた。東陽堂は、日本橋米澤町で、主人は東健二郎と云つて、當時唯一の美術出版元だつた。石版刷りの繪や、古畫の複刻物などがよく賣れてゐた。繪畫叢誌も其處から發行されたのだつた。後に穂庵は自分の代りに廣業を其の店へ入れてやつた。廣業は其處で古畫の模寫などをさせられてゐる間に、次第に手腕を認められて來たのだつた。

明治二十一二年頃から、穂庵は體の具合が惡るくなつた。手足が痺れるやうになつた。醫者から酒を禁じられた。國へ歸つて靜養した方がよからうと云つて勸める人もあつた。穂庵自身も、歸國して養生をしたいとは思つたが、また考へて見ると、中央の畫界から退くのも殘念だつた。折角得た地歩を捨てゝ去るのも忍びなかつた。が、體の事を考へると、心配でもあつた。とつおいつ迷つて、決しかねてゐた。

「歸國したものか、東京に留まつてゐたものか――」

それはどうしても自分では判斷が出來なかつた。最後に彼は易を見て貰はふと考へた。それに依つて進退を決する積りにした。

穂庵は、或る時伏羲の圖を描いて、高島嘉右衛門の處へ倅の恒嶽に持たせて遣つて、占つて貰つた。すると「雷火豐」の卦が出た。

「非常に好い時である、直ぐに歸國をなさらなければいけない」

と高島は言つて寄越した。それで忽ち歸國と事が決して、先づ門人達の身の振り方をそれ〴〵始末をして遣つた上で、西黒門町の家を引き拂つて、一時恒嶽と二人で東陽堂へ寄寓した。歸國するにしても先立つ物は金である、で、東陽堂から頼まれてゐる仕事を大急ぎで片付けようと考へたのだつた。併し其の計劃はなか〳〵豫定通りには進まなかつた。

仕事も面倒だつたが、全體東陽堂は容易に金を出さないので評判の店でもあつた。穂庵の門人達はよく其の店へ仕事に頼まれて行つたが、朝から晩まで寫し物をさせられて、それで日當卅錢ときまつてゐた。

廣業は其の時から腕が良かつたが、それで師匠の代りとして東陽堂へ入社した時、月給十圓だつた。同じ頃、大橋音羽が、當時は渡邊音羽と言つてゐたが、十五圓の月給で美術記者として入社した。

其の家には、非常に廣い西洋間があつた。穂庵は其處で仕事もすれば、起き臥しもしてゐた。

「早く國へ歸り度い」

と、よく穂庵は弟子などにも言つてゐた。「雷火豐」といふ卦の事がしよつちう氣にかゝつてゐた。が、金が出來ないので、歸ることが出來なかつた。

穂庵は、到頭半歳以上も東陽堂で暮してしまつた。

彼が秋田へ歸つたのは、明治廿二年の十二月だつた。

故郷の自然に親しんでゐると、何んとなく體の具合も良いやうに思はれた。

其の翌年、東京で内國勸業博覧會が開かれることになつた。穂庵はそれへ出品の目的で乳虎の圖を描いた。其の時彼は荒川鑛山の瀬川の家に行つて描いてゐた。一枚失敗して、二枚目に描き上げて出品した。

其の繪は非常な評判となつた。穂庵が一代の傑作の一つでもあつた。同じ時に、京都の岸竹堂も矢張り乳虎の圖を出品した。竹堂の乳虎も、穂庵に劣らぬ傑作だつた。竹堂は、其の虎に睛眼を入れると同時に、發狂したといふ噂が傳へられたほどだつた。

此の二人の乳虎の畫は、どちらも銀賞を得て、宮内省の御用品となつた。

其の時京都の幸野楳嶺が、審査員として出張して來て、穂庵の畫を見て非常に敬服して、「是非此の人に會ひ度いものだ」と言つたが、穂庵はもう東京に居ないと聞いて大いに落膽して、其の事を書面に認めて穂庵の處へ寄越したのだつた。

其の年の十月、穂庵は秋田市へ行つて、那波といふ土地の舊家の家作に住まつてゐたが、突然中風を發して半身不隨の狀態に陷つた。郷里から家族の者が驅け付けて行き、急を聞いて門人知友の人々も集まつて來て手厚い看病をしたが、到頭恢復することが出來なくて、十二月の十一日といふ日に沒してしまつた。行年四十七歳であつた。

七

穂庵は大酒家といふので評判を取つてゐた。が、平常家では德利を附けさせるやうなことはなかつた。定まつた晩酌などゝいふことは決してしなかつた。

「俺は酒を飲み度いと思つて飲んだことはない、が飲めば幾許でもはいる」

と言つてゐた。が餘り大酒をするので、よく母が意見をするので、餘所で飲んでも家へ歸つて來る時には醉はないやうな振りをしてゐた。或る時も例に依つて飲んで、歸つて來ると母が

「又御酒を飲んで來たね」

と言つた。

「否、今日は少しも醉つて居りません」

穂庵は、ごまかした積りだつたが、着物を着替へさせる時、帶を解くと、懐ろへ一杯へどが吐いてあつた。

飲めば、歌をうたつたり、踊つたりして非常に陽氣だつた。隠し藝なども隨分ある方だつたが、義太夫には一番凝つてゐて、本式に稽古をして、藝名を餘樂と名乘つて、時々素人義太夫の高座へ上つた。後ろ襖などは自分で繪を描いた立派な物だつた。一體藝好きなので、東京に居る時などはしよつちう芝居を看に行つた。芝居の眞似なども一寸うまかつた。當人それが大自慢で

「俺が、これで菊石さへなければ、とうの昔役者になつてたんだ」

彼は非常に偉きな體で、廿貫以上目方があつた。色が白くて、顔に愛嬌があつた。眼がクリ／＼して、反ツ齒で、團子鼻で、頭がテラ／＼に禿げてしまつて、そして其の愛嬌のある顔に白菊石があつた。

一番末の女の兒は、よく父に揶揄つて

「頭に毛の無いはいゝけれど、何んで火箸で穴を明けた」

穂庵は此の娘を眼を無くする程に可愛がつてゐた。女の兒はそれが一人だつた。

男子は四人あつて、恒藏、善藏、健藏、貞藏、と云つた。長男の恒藏は父と一緒に東京へ行つてゐたが、非常な勉强家で、傑れて學問が出來た。東京へ出た時恒藏は十八歳だつたが、向島の佐竹邸から、朝の三時四時に起きては神田の英語學校へ通つた。傍ら井上圓了の哲學館へ通つて、其處を卒業して後、根本通明の門に入つた。穂庵は恒藏に大いに望みを嘱してゐたのだつたが、惜しいかな恒藏は早世してしまつた。次男の善藏は、父に似て繪が好きだつたが、どういふものだか穂庵は「貴樣は繪かきにはなるな」と言つた。長男の沒後次男が家督を相續して、其の人は現在實業界に身を入れ、横手織物會社の專務取締役として活動してゐる。

末つ兒の娘にだけは甘かつたが、男の子供に對しては非常に嚴格だつた。併し彼は子供が好きだつた。東京へ出てゐる時でも、絶ず子供に宛てゝ手紙を寄越して「勉强をしろ」と言つた。家に居る時は殊に勉强を嚴しく言つた。

子供が學校から歸つて來ると、父は自分で机を持つて來て、座敷の眞ん中へそれを据へて、

「さあ、復習をするんだ」

と言ひ付けた。學校の復習をしてしまふと、直ぐに今度は漢學の先生の處へ遣らされた。漢學の稽古から戻つて來ると、父は又前のやうに机を持ち出して來て、

「さあ、復習をするんだ」

と言ふのだつた。

　四男の貞藏も、幼い時から繪を描くことが好きだつた。貞藏は紙さへあれば繪を描いてゐたが、或る時大きな繪が描いて見度くなつて、唐紙の裏の白地へ一杯に描き散らした、父が發見したらきつと叱られるだらうと思つて小さくなつてゐると、穂庵はそれを見たけれども何んとも言はなかつた。それで貞藏は安心して、方々の襖や板戸にまで繪を描いてしまつた。父は矢張り何んとも言はかつた。

　貞藏が學校から歸つて來ると、父は例に依つて机を持ち出して來るのだつた、小供の机を置く部屋には、穂庵の書齋の隣りの



室だつた。貞藏は仕方無し机に向つてゐるけれど、直きに復習は飽きてしまふので、紙切れを探し出して來て諸り繪を描いてゐた。父は大概机に凭つて讀書をするか手紙を書くかしてゐた。貞藏は其の父の顔をこちらから寫生するのだつた。それが面白くて毎日やつたので、しまひには空で父の顔が描けるやうになつた。

　其の子が十四歳で小學校を卒業すると、穂庵は初めて自分で手本を描いて與へて、正式に繪を習はせた。其の貞藏が、後年の平福百穂であつた。

　穂庵は、非常に似顔を描くことが上手だつた。或る時も郷里の方の懇意な家へ行くと、其の家に可成り年取つた下婢が居たが、片目で、餘程面白い顔付きだつた。で穂庵が座興に其の似顔を描いたところが、非常に佳く出來たので、みんなで面白がつて見てゐた。すると丁度其處へ下婢がやつて來たが、皆が付

か面白がつて見てゐるので「何んだらう」と思つて自分も覗き込んで見ると、おかしな顔の女が描いてあつたので思はず笑ひ出したが、よく〳〵見るとそれは紛れもなく自分の顔だつた。下婢は急に怒り出して

「人を馬鹿にしてゐる、私は只今限りお暇を戴きます」

と言ひ出したので、榛厓も大いに弱つて、下婢の前に叩頭して漸く勘辨して貰つたことがあつた。

京都から歸つて間も無い頃、榛厓は或る人の依頼で四條河原の納涼の圖を描いた。それは彼が記憶に殘つてゐるところの實景に據つて描いたのだつたが、其の中へ豆のやうに描きこんである無數の人物の中の一人を郷里の人で、京都へ仕入れに行く商人某の似顔にして描いてあつた。それが一見して其の人であることが知れるので、人々は其の才に驚嘆したのだつた。此の圖は榛厓が若書きの中でも傑作の一つとして殘つてゐる。

明治十年箱館滯在中は、瀬川の威光で融通が利くので、彼は大いに狹斜の巷に出沒したものだつたが、其の時彼が馴染の藝妓で、函館切つての流行つ兒であつた女の肖像畫を、浮世繪風の密畫に描いた、婉曲な筆致の中におのづからの氣韻が現はれて、浮世繪とも異ふ妙趣があつた。

榛厓はよく人に向つて「僕の嫌ひな物が三つある」と言つた。何と何が嫌ひなのかと聞いて見ると、手紙書くこと、唄描くこと、それと眞物が嫌ひだと云ふのだつた。妙な取り合はせだと思つたが、眞物は生得嫌ひだつた。扇面を畫くことは、嫌ひだ〳〵とは云ふが、描かせれば人よりも上手だつた。手紙を書くことも上手だつた。が、これは何故嫌ひになつたかと云ふと、大概用件が借金の申込みとか、或ひは返濟の云ひ譯とかいつたやうな種類ばかりだつたので、嫌ひになるのも道理であつた。

さしも畫家を誇つてゐた平福家も、文則と榛厓と二代續いて費消つたので、榛厓の代の晩年に至ると殆んど一物も殘らぬやうになつてしまつた。榛厓は、東京へ出て大名を成してからでも、一文も郷里へ仕送りをしたことはなかつた。郷里の家は彼の母が中心になつて、彼女自身で手を下して染物をやつてゐたが、そんなことでは生計は立たなかつた。それでもどうやらかうやら維持することが出來たのは、瀬川、那波などといふ榛厓の後援者が最後迄よく面倒を見て呉れたお蔭だつた。彼の母は聢りした婦人だつた。が矢張り、貧乏に適應することは下手な方で、不用の物を賣り拂ふことはしないで、貧乏してゐる中でもよく物を買ふのだつた。或る時家に一錢も金が無くなつた。すると彼女は、簞笥の抽斗から、佛壇長火鉢の抽斗と家ぢうの

抽斗を引き拔いて

「少しはお金が出さうなものだ」

と言つて探してゐるうちに、何處かゝら一圓札が一枚出て來たことがあつた、其の程度の貧乏だつた。

穗庵は、平常は極く磊落だが、畫作の場合になると、非常に謹嚴で、そして怒り易かつた。東京に居た時分のこと、憲法發布の祝典で神田區の山車の幕の絵を頼まれて描いた。圖は神武天皇だつた。大圖なので門人達に手傳はせて彩色をさせた。山口米庵や佐藤行美等に山下の彩色をやらせたところが、それが恐ろしく不出來だつたので、穗庵は大いに怒つて「何んだ是れは、まる弱でぢやないか」と云つて、棚板でもつて弟子をぶんなぐつた。

東京から歸つて來てから、日蓮上人入滅の圖を描いた。其の時は自宅で描いたが、描く前には必ず口を雪ぎ手を洗つてから筆を把つた。可笑しなことには、描いてゐながら放屁を催して來ると、態々起つて部屋の外まで出て大きなのを放つて來るのだつた。

此の圖は角館の長松某の依頼で、祈願の爲め、某寺へ寄進の目的で筆を執つた物で、巾五尺長さ三尺五寸の大幅に、人物六十一人、皆當時の門弟信者の似顔を模すと稱せられ、實に一代の大作であつた。

其の畫は故あつて寄進を果さず、現在も個人の所有となつて傳はつてゐる。

追記

平福穗庵は明治年代に現はれた畫人中でも、特に傑出した一人であつたが、奥羽の片田舎で其の生涯の大部分を經た爲めに、中央の畫界に光彩を放つた期間は極めて短かゝつた。それが爲めに、本傳の中にもあるやうに、當時既に十大家中の錚々たる部に數へられた程の、巨手である割合に、一般社會からは認められることが少なかつた。一つは、明治中葉以後の畫運接降時代を前にして、匆忽として逝つてしまつたことも、其の重なる理由であつた。現在でも、穗庵の作品が、其眼者階級の間に於て提敬され、推重されてゐる割合に、所謂美術愛好者流や、一般世人の間では、其の大に氣付くことが少ないやうな傾きの見えるのは、同一の理由に基いてゐる。或る畫境に置かれた藝術家が、境遇の如何に依つて、實質以上に盛名を馳せるやうな幸運に惠まれたり、或ひは眞價の何分の一位しか知られずに世を終つてしまふやうなことは、何れの土地何れの時代にも

ても常に稀らしくない事である。同時にまた已むを得ない事でもある。が、斯様な運不運、利害得失の不公平は、必ず左う永くは續かない。死後の數十年、或ひは百年を經過して、過去の時代の史的整理が完成すると、あらゆる總勘定が付いて、公平な標準が取れて來る。さうして人は作品の價値だけを正當に評價するやうになる。此の場合に於ては、作品の量や、環境の如何は問題でない、反つて多量に不精撰の産出を遂げた者が價値を失し、肩書きだの位階だのといふものは物を云はなくなる。

穗庵翁なども、謂はゞ損な時世に生れて、而も損な立場に身を處した人であつた。それであれだけ大をなしたのは、全く實力の賜物である。翁の沒後卅有餘年しか經過してゐない、が、そろ／＼史的整理が出來つゝある。近來繪畫研究者の間に於て、穗庵の畫が專らやかましく論じられ、其の斷簡零墨と雖も人は爭つて是れを需めるやうになつてゐるのも、當然の歸結であると云はねばならない。

私はかね／＼穗庵翁の傳記を書いて見度いと考へてゐた。是非傳ふべき人であるといふことが、私をして其の希望を抱かしめた最初の動機であることは勿論だが、一つは、穗庵翁の子に平福百穗先生があるから、百穗先生を煩はせたならば、正確な材料が、比較的らくに手に入るだらうと考へたのだつた。それにもう一つ都合のよいことは、私自身は百穗先生と一面識も無かつたが、本誌の主幹瀧田樗陰氏は、平福氏と同様秋田の出身で、百穗先生とは現に斷金の交りをしてゐる間柄であるから、旁々以て便利である。で、昨年以來、瀧田氏を介して、穗庵翁に關する傳記材料をば百穗先生から仰ぐことに、約束だけは出來てゐたが、種々の故障で一年有餘延びてしまつた。すると、今年の七月になつてから、瀧田氏から僕に話しがあつて、

「此の頃、平福さんが宅へ見えられて、其の時のお話しに、最近令兄が上京して居られたので、穗庵の事をいろ／＼聞いて置いたといふことだつた、近日都合のいゝ時私と一緒に平福さんを訪問することにしてはどうか」

といふのだつた。早速其の事に頼んで、日を期して百穗先生を訪問することになつた。七月廿日頃の暑い盛りの日だつた。朝早く東中野の假寓を出て、省線電車で代々木迄行くと、丁度約束の時刻に達したので、本郷から出て來た瀧田氏と其の父君とが先きに着いて私を待つて居られた。三人で又もや品川行の電車に乘つて澁谷で降りた。それから今度は玉川行の電車に乘り替へるのだつた。玉川行きの客で電車は非常に混んでゐた。肥つてゐる瀧田さんは暑がつて、立ち乍ら扇をバタ／＼使ふの

である。世田ケ谷といふ處で其の電車を降りた。田舍めいた一本道の町が續いてゐる。

停留所から一寸先きへ行つて横丁へ曲ると、町裏は閑靜な住宅地だつた。大きな角の門柱に、「白川舍」といふ小さな表札が打つてある。門内には孟宗竹が疎らに植えてある。門から玄關先き迄圓石を敷いた道が附いてゐるが、其處には一面に鷄頭の種が蒔き散らされ、それが一尺位に、或ひは五寸位に、紅い鷄冠を付け始めて伸びてゐるので、人は中央を歩くことができないのである。それが百穗先生の畫室だつた。住居はそこから少し離れた上目黑にあるとかで、私達が行つた時にはまだ先生は來て居なかつたが、三四人ばかり門人が居て、奥の方へ通された。

廣い二間續きの座敷で、南北兩面に庭園を控へてゐた。南面の庭は廣くて、一面の芝生で、中央には一樹一石もなく、遠く離れて竹の植込みがあつた。其の傍らには、萩の茂みと、芒が一むら二むらとあり、處々に山百合が靜かに咲いてゐた。北側も竹の庭だつた。此の方は丈の低い小篠が庭一面に茂るに委せてあつた。

やがて主人の百穗先生が見えられた。私達は、洋服の上衣を取つたり、はだ脱ぎになつたりしてゐる始末で、私は初對面だが、別に固い挨拶も交さず、直ぐに氣軽に話談を初めた。後で聞くと百穗先生は四十八歳とか云はれたが、見掛けは僅か五つ六つ位若く見える、大兵肥滿で、色飽く迄白く、健康な血色が皮膚の下に透けてゐる。頭髮は前の方がすつかり禿げてゐる。そしてクリ／＼した眼は、明敏な光を放つてゐる。手首が、赤ん坊の手のやうにくびれて、柔かに肥つてゐる。それは私が、其の場で見たばかりの、穗庵翁の肖像と生き寫しだつた。

穗庵翁の作品や書簡などを百穗先生は、持つて來て私の爲めに見せて下すつた。私は曾て二三點穗庵の繪を見たことがあつて、其の印象が永く消えずにゐたのだつたが、今度で見る物は確かに以前見た繪の比ではなかつた。數幀拜見した中でも一絲「陰清談」の一幅は際立つて傑れてゐると思つた。それは三尺幅位の紙本で、布置結構一點の難も無く、甚だ清晴き畫面を瞻めてゐると、實に涼味を感じるやうな氣持がした。十五六才頃の畫だといふ畫帳や、十八才にして京都へ遊んだ當時の書簡だの合作の繪などを見ると、穗庵翁がまつたく天才藝術家であつたことが肯かれた。これらはどれを見ても、既に立派に一人前の畫工の作だつた。些かも乳臭を帶びてゐなかつた。古人には往々かゝる例も實在したが、現今は絶えて聞かないことである。古への、あゝした時世が早熟の天才を生んだのだらうか、どうも

解し難い氣持がする。

北側の肱掛窓に凭りかゝつて、平野水を飲みながら、私は穂庵翁に關する談しを聽いたのだつた。

染物屋當時の話から思ひ付かれ、平福さんは態々お宅迄お弟子さんを使に遣つて、一枚の古い婚禮衣裳を取り寄せて私達に見せられた。それは當時穂庵翁の兩親が手を下して染めた物で、翁が上繪を描いたといふ、親子三人合作の美事な櫻花の裾模樣だつた。近年百穂先生が郷里の方で手に入れられた品ださうである。それを見ながら私は圖らずも光琳の事を考へた。光琳の家は、東福門院の御殿所を勤め、關東將軍の御服所の御召料をも納めてゐたが、其の營業は矢張り染物が主だつた。光琳も若い時分には染物の下繪や上繪を描いてゐたといふはなしである。穂庵が　偶然にも光琳と同じやうな境遇に置かれたといふことが、私には面白く思はれた。穂庵自身も、其の時自分のしてゐるやうな仕事を　昔光琳が、やらせられたのだといふことを考へて見たかどうだつたか、それを聞いて見たなら猶面白からう、などと私は考へてゐた。

瀧田さんは、昨年物故された氏の慈母の一週忌の法事を營む爲め、近日一家を擧げて秋田へ歸省されるので、郷里への土産に百穂先生の繪を持つて行く筈で、今日は豫ての約束とかで扇子や團扇を澤山用意して來てゐた。處が、私の仕事で時間が無くなつてしまつたので、扇子と團扇は預けて歸ることになつた。

「だが、村松さんに上げるのを一枚描いて戴き度いんですがね」

と瀧田さんは言つて、僕の爲めに特に用意して來て呉れた美しい絹張りの支那團扇を出した。

「描きませう、處で、何を描かうかね」

「女達磨がいゝでせうな」と瀧田さんは言下に答へた。

隣室の方には　毛氈が敷いてあつて、繪の具皿だの筆だのが澤山積んである。壁際には山水を描きかけた絹張りが立て掛けてある。

平福さんは自身で墨をすつて、其の團扇へ美しい女の顏を描いた。髮の毛を描くと、今度は朱筆で法衣を描いた。

「ほつすは無しにしやうか」

と平福さんは、樗陰氏に向つて言ふ、

「否、矢つ張り、ある方がいゝでせう」

「肩に擔いでる處にしようかね」

「矢張り普通がいゝでせう」

前の方へ淡墨でほつすが描かれた。

「落款は左の隅へ入れやうか」

「いや、矢張り右の方がいゝでせう」

「さて、印はどれがいゝかな」
「あの、竹の斷といふ字のかいゝでせう」
すつかり出來上つた。瀧田さんは團扇の柄を持つて眺めながら、僕に向つて
「濃艶ですね、併し、餘り濃艶過ぎやしないかな」と、一寸首を振つて言つた。
用事が濟んだので、是れから玉川へ行かうといふことになつた。私は新入の團扇を新聞紙で包んで貰つてそれを持つて、みんな一緒に外へ出た。瀧田さんの父君だけは停留所で別れて先きに歸宅された。三人は玉川行きの電車に乘つた。電車の中は先刻と同じやうに混んでゐて非常に暑かつた。
私は何年振りかでこちらの方へ來たので、沿道の景色を珍らしく思つて見た。町並みが盡きると、農家らしい家が路ばたにときれ／＼にあつて、其の邊には非常に美事な孟宗籔があつた。東京の近郊で竹林を見るのは珍らしい氣がした。處どころに横道があつた。狹い道の兩側がくされたおどろの垣根で、地面には落葉が一めんに散つてゐて、櫟か何かの茂つた樹がかぶさつてゐるので、眞晝だのに小暗く奧の方が見えたりした。そんな處に、農家の背戸口が附いてゐて、樹木の下の外流しで、おかみさんが半裸體で食器などを洗つてゐたりする。

廣々と畑が續いてゐる處へ出た。すると瀧田さんは面白い思ひ出ばなしを私達に聞かせるのだつた。それは今から十五六年も前の事で、或る夏瀧田さんは水野葉舟氏と二人で矢張り此の電車へ乘つて玉川へ遊びに行つたが、其の時瀧田さんは上等のパナマ帽子を冠つてゐた。パナマの帽子といふ物を生れて初めて買つて、而も今日が其の冠り初めだつた。すると、何んといふ意地の惡い風だらう。突然吹き込んで來た風が、其の瀧田さんの命から二番目の大事の大事のパナマ帽を、窓から外へ吹き飛ばしてしまつた。「あッ」と思つて手を伸ばした時には、帽子は宙をクル／＼と舞つて、遠くの畑の中へ飛んでしまつた。仕方がないので葉舟さんと二人で次ぎの停留所で降りて、炎天の田舍道をテク／＼戻つて、確かに此の邊と思ふ處を探して見たが見當らない。半時間も二人で汗を流して畑の中を探し廻ると、最後に、帽子は思ひも寄らぬ處へ飛んでつてゐて、それでも無事に瀧田さんの頭へ戻つた。「確か此邊の畑でしたよ」と瀧田さんは窓外の畑を指差して言ふのであつた。
平福さんも私も大笑ひをして、お蔭で暑さを忘れてしまつた。終點で電車を降りて、少し歩いて水光亭といふ家へ私達ははいつた。二階座敷へ通された。其處は川からは一寸離れて高

たが、庭に大きな松の樹が澤山あつて、風通しがよくて涼しかつた。

お約束の鮎の料理でビールを飲み乍ら、世間話をして時間を過した。平福さんは、近年餘り酒盃に親まないといふはなしだつたが、ビールなら構はないと見えて、可成りに飲まれた。瀧田さんは幾らでも飲む人である。私は餘り飲めないので一番先きに飯にした。

まだ日の高いうちに其處を出て、河原の方へ歩いて見た。据へ付けの納涼船が澤山出てゐて、どの船にも客が充滿してゐる。傾いた陽が川水の上にキラ〳〵耀いてゐる。碧い淵になつた處では男も女も一緒になつて水泳をやつてゐる。河原の中央の砂つ原では、若い男が二人並んで仰向きに寢て、全身を砂の中に埋めて首だけ出してゐる。生首を並べたやうな其の首の前へ、一人の友達が花を手向けてゐる。細君らしいのが二人、側らで腹を抱えて笑つてゐる。と、やがて一つの首が煙草を飲み度いと言つたので、友達が敷島に火を點けて啣へさせて遣ると、首は旨さうにスパリ〳〵と煙をふかした。

私達は夕陽を脊に浴び乍ら電車の方へ戻つて來た。

○

穗庵の事はそれで最早十分に分つたやうな氣はしたが、傳記を書く場合には、材料を成る可く多く蒐集する必要がある。私は、故翁の門人で現存して居られる人からも、話しを聞きいものだと思つた。其の事を百穗先生にお尋ねすると、現在殘つてゐる人と云つては、山口米庵氏と永井一禾氏だけだらうとのことだつた。山口氏は大概名古屋に居られ、永井氏は須磨に常住されてゐる。私は取り敢へず米庵先生に書面を差し出した處が、早速御返事があつて、近く上京するから東京で會つて話しをしようとのことだつた。其の約束に基いて私は八月中ばの某日、米庵先生を牛込藥王寺のお宅に訪ねてお目に掛つてお談しを聽いた。弟子の眼に映じた師匠の面影が、矢張り本傳の中に織り込まれてゐるのである。其の時米庵先生は、穗庵翁が記憶がよくて寫生に長じてゐたといふ話をされて

「其の後ですが、雅邦さんの處へ遊びに行つた時、私の師匠は斯々でしたと話した處が、雅邦翁が、それは全く天才だ、私なども其の眞似は出來ない、たゞ芳崖が矢張りそれだつたと云つて、芳崖が他所で雪村の虎を見て來て、雅邦の處へ來て大變感心して話し乍ら、其の記憶に依つて原物通りの繪を描いて見せたといふ話をしましたつけ。――とにかく左う云ふ風で、穗庵といふ人は、活動してゐる物の刹那を捉へて現はすことが上手でした。此の特質がつまり息子の百穗君に遺傳してゐるのです、

百穂君の文展で特選になつた七面鳥でも、障壁でも、其の例になる物です。遺傳と云へば、私などから見ると、師匠の全部が百穂君に遺傳してゐるかのやうに思はれるくらゐです、容貌でも風采でも音聲などでも、すべてが穂庵翁其の儘です、殊に近年は百穂君の年配が亡くなつた當時の師匠と同じ位ですから、百穂君と會つてゐると、まるで師匠と話しをしてゐるやうな氣持がするのです。勿論畫風は大層異つてゐるが、是れは時代が異ふからのことで、本質的には非常に共通してゐるのです、若し穂庵翁が現今の人だつたならば、必ず百穂になつたことであらうと私は考へる、ですから、百穂を研究しようといふ人があれば、其の人は是非共穂庵から研究して見なければ本當の事は分りません」

と、話された。

其の翌日私は瀧川杉蔭氏を訪ねて、氏の秘藏に係る穂庵翁の遺墨十數幀を見せて貰つた。それ〴〵故翁の特色を發揮した美事な作ばかりだつたが、就中、百穂先生が對幅を描かれてゐる「幽瀑圖」と「嵐山之春雨」の圖の如きは、稀れに見るの逸品で、其の印象は今も猶髣髴として眼前を去來してゐるのである。

水郷の秋の行樂

松川二郎

蘆荻や眞菰の一面に茂つた渚。

静かな、寂しい、しかし詩趣に富んだ蘆の花。その花を雪のやうに散らして、さやさやと渡つて行く風の音。

白い頬かぶりなどをして、丈よりも高いその蘆を刈つてゐる男。

錆のある藍色をたたえて、洋々と流れてゐる水、その上を悠悠とのぼつて行つたり、下つて行つたりする白帆。

ぱつと足元から飛び立つて、ピピと啼いて行く川千鳥。

さびしく、人のはらわたにまで沁みこむやうな夕日の光。

秋も半ば頃となると、私はさう云ふ光景を想うて、ひとり心をそゝらせた。とても家の中に落ついて、本を讀んだり物を書いたりしては居られぬやうな氣がした。蘆荻のかげを追ふて、渚から渚へと、旅をして廻るのが常であつた。「水郷」は夏のものであるかも知れぬ、人は多く暑を遁れ涼を求めて「水郷」へはしるが、私は寧ろ水郷の秋を愛する。水郷の趣味は秋に限られてゐる、――と云つては餘りに己れの好む所に傾き過ぎるかも知れぬが、少くも水郷の眞の面白味は、夏よりも秋にある。夏の水郷は唯だ青々として涼しいばかりであるが、秋の水郷には一種の「さび」が加はつてくる。私はその「さび」が好きなのである。それに秋は川魚の肥るときである。鯉や公魚がまるまると肥えて、水郷の旅客の「舌」をよろこばせる時である。鮭や鱒が海から川へとのぼつて來る時でもある。

「水郷」と云へば、東京の人は直に霞ヶ浦の潮來をおもふが、彼處らなどがほんとうの「水郷」といふものであらう。京阪地方では長命寺觀音のある島村を中心として、東は安土山から西は野洲川の河口に至る琵琶湖の東南岸地方が、矢張りひとつの大きな「水郷」である。殊に野洲川の兩岸は小竹の籔が多く、獨得の野趣を帶びたところである。東西相對して二大水郷といふべきである。が「水郷」としての趣は矢張り潮來附近の方が一段とすぐれてゐるやうに思はれる。

――潮來を中心として、東京郊外の水郷情趣と、そこの旗亭や旅館で食はせる川魚料理に就て、思ひ出づるまゝを敢て取止めもなく、そこはかとなく書きつけて見る。

津の宮

潮來へ行くには、大抵は香取の津の宮河岸から小舟を雇つて、向ふ岸の水門を拔けて與田浦に出て、加藤洲の十二橋の下をくゞつて行く。佐原から横利根を經て行く汽船便もあるが、その航通は一日數回に限られてゐるのと、所謂三角形の二邊の和は他の一邊よりも大なりで、津の宮から眞直ぐに與田浦を横斷つて行く方が、時間も早いし興味も深いのであつた。そしてそれが矢張り昔からの順路で河岸の村田屋といふ旅館は「利根川圖志」などにもちやんと出てゐた。彼の大鳥居は、安藝の宮島のと同じやうに水中に建ちて、利根の川波は、その頃も二階づくりであつた旅館の棧脚にまで、ひたひたと打寄せてゐたのである。桂月氏の「關東山水」(明治四十二年出版)にも『鳥居の傍、水に臨みて、一の旅館あり』とあるを見れば、その頃は未だ堤防はなかつたのであらう、私が知つてから(十二三年前)

の村田屋の眺望は左程すぐれたものではない。大體の風光は固より「關東の山水」に說く所と異らぬけれども、本屋の二階の客間か、又は大廣間になつてゐる中二階から、その大きな堤防を越えて辛じて望み得るの程度だから、今は甚だぎごちない眺望となつた。對岸の茅屋なるものも、たゞ屋蓋ばかりが見えてゐるに過ぎない。しかし、或る外人の紀行に曰へる、——

Lulled to sleep by the murmur of ripples and awoke by the fisherman's quiet song. の趣きには少しも變りがなく、且つこゝでは丁度河水が、西から東へ向つて流れてをるので、朝日夕日の川面の輝やきは、實際何とも云へない美くしさだ、私はそれを此處の特色として、矢張り捨てられない氣がするのである。

鯉と鯰と、それから「サイ」といふ魚が此家の——と云ふよりも、それは下利根全體の名物であつた。鯉は利根の代表的川魚として、昔から有名でもあり、實際に肉味も他に秀でてゐるやうである。「サイ」は他國では聞かぬ魚である、魚偏に「才」と書くそうであるが、康煕字典にはそんな字はない、ちよつと鯉にも似てをるが、寧ろとびうをの鰭をもぎ取つたやうな形、と云つた方が解り易いかも知れない。主ら「あらひ」として用ゐる外、煮たり燒いたりは餘りしないやうであるが、肉が白くて中に赤味を帶び、「あらひ」としてはなか〳〵上等である。春の彼岸頃から櫻の散る頃迄が此魚のシユンで、津の宮では「彼岸サイ」と云ひ、潮來邊では「花見サイ」と稱して、食通の珍重するところである。その形態及び肉味から推して、此「サイ」は似鯉と同一か、若しくは極めて近似の種屬だらうと私はおもつてゐる。

「津の宮のすゝきの洗ひも、隨分暫らく食べないな。水鄕めぐりをやつて、たらふく川魚でも食べてくるかな。」

さう云つて今年の八月中旬、久しぶりに村田屋を訪づれると、主人の顏が變つてゐた。新らしい主人は佐原の人で今年の春前經營者から讓り受けたのださうである。脂粉をぬつた、艶めいた女はひとりも居なくなつて、突立つたまゝ而も下總辯丸出しで、客に物をいふやうな女中がこれに代つてゐた。私は淋しい氣がした。運ばれた膳の上には玉子燒、玉子のお汁、瓜もみ、その他等々……。

『何だか山の中を旅するやうな氣がするね』と、私は苦笑した。

『どうも相濟みませぬ、二三日來全たく魚が捕れないものですから。』

主人といふのが頭を掻きながら、わざ〳〵自身にやつて

た。

『それは又どういふ譯かね、此頃のやうな天氣つゞきでは、時化といふこともあるまいのに？』

と、詰るともなく追及すると、舊暦の孟蘭盆で漁夫が仕事を休んでゐる爲だといふ。聞いて見れば無理もない話ではあるが、川魚料理を賣り物にする水亭で、生洲のひとつも有たぬといふを、私はさびしい氣がした。潮來の角菱あたりでは、流石にかういふ例は絶無であつた

十六島

私は一度、津の宮の渡しを對岸に渡つて、昔の「十六島」の間を徒歩して、潮來まで行つて見たことがあつた。十六島は、利根川が押流して來た土砂の堆積によつて生じたデルタで、もとは無數の小砂洲の聚落であつたらしいが、島と島とはいつか連絡し、開墾せられて、今は一望茫々たる水田と化したのである。南北一里半、東西三里、全體から云へば歪狀三角形——丁度鰈のやうな形をした一つゞきの島となつて、大利根はその左側を流れ、右側は北利根に依つて霞ケ浦と外浪逆浦とを連絡し、横利根は頭部を周つて、大利根と霞ケ浦とを連絡してをる。外緣に大堤防を築いて、さながら城砦の如く、この長堤を周れば七里、此の間に十七八の小部落が散點し、二千の人口こゝに住み、年々三千石の良米を産出してゐる。然しながら、その悉くが陸地となつてをる譯ではない、外浪逆の水、尾端より入つて深く灣入し、與田浦、市和田浦といふ二つの入江をつくり、分流は是より八方に通じ、全體の五〇％は依然として「水」である。津の宮から潮來へゆく和船は、此の與田浦を横斷し加藤洲の十二橋を經て北利根に出る。佐原からゆく汽船は横利根を經て牛堀に出で、そこから潮來に下るもので、兩水路はそれぞれ特色があつて、兩岸に茂る眞菰を、舷側で掻き分けるやうにして行く横利根の運河航路にも、また捨てがたい一種の趣きはあつた。

大利根の向ふ岸は茨城縣だと、一概に考へてゐるやうだが、こゝでは横利根、北利根が常陸下總の國境を成し、所謂「十六島」（今は新島村及び佐原町飛地、香取町飛地、大倉村飛地）は千葉縣に屬してをるのである。渡しを渡つたところが津の宮新田で、それから篠原新田、中洲、扇島など昔の俤をその名に留めた淋しい部落を通過して、一里半ばかりで潮來とは一衣帶水の北利根の土手に出るのである。右を見ても左を見ても水草茫々、行き暮れて水郷の孤屋に一夜の宿を借るも亦風流乎、など考へて出かけたのであつたが、生憎に路は紛ふ術もなき一本道

路で、田は未だ頗ぶる高い。水國に道路の必要はない。網の目のごとく八方に通じた溝渠はすなはち道路で、田舟はその唯一の交通機關である、此國の人々は用達しにも、田草取りにも、すべて舟で往來をしてゐる。とぼとぼと、野中の一本道をたどる者は私ひとりで、一里半の道程、殆んど行人に會はず、犬の姿も見ず、鷄の聲を聞かなかつたが、橋の多いのには一驚を喫した。幾つあるかと試みに數へたら、大小併せて四十七。丁度赤穂義士と同じだけの數を渡つたのであつた。二時間足らずに四十七の橋を渡つたのは、私の旅行生活中のレコードである。

川は即ち道路であるが故に、橋は、その下を棹して通過し得るやうに、凡てが高く架せられてある。稻の穂波の上に橋だけが高く浮かび出てゐる、行く手に點々斷續して見える橋、又橋。それは私の辿りゆくべき道路の指標となつてゐるのだ、彌よ以て踏迷はむすべもない。

一望千里と見えた美田も、中を掻き分けて見れば、まだまだ開墾は半途にある。稻田と廣川とは、犬牙錯綜の狀態で相交つてをるのであつた。稻田と稻田との間には、必らず短冊形の水田(みづた)(水ばかりの田)が介在してゐる。土地が低きにすぎ、水が多きにすぎるのである。水田は即ち、一部の土を取つて田を築いた痕跡なのである。稻穂はすでに熟して黄色く色づき頭を垂れて波打つてをるのに、ところどころ、頭は少しも垂らず青々と葉ばかり茂つた稻田がある。其はおもふに、種を下したばかりの處女地である。元來が沼澤地で、土に酸性が多いから、處女地は作物の生育が悪い、そこで斯くは犠牲的に種をおろして、土地を馴らしてゐるものらしい。『石灰を投じて酸性を中和すればいゝ』とは、學問の教ゆるところであつても、此の廣漠たる沼地に、止め度もなく石灰を投ずることは、多分經濟上に於てゆるされない事なのであらう。

『土地、殊に沼地の開墾といふことは、容易な努力ではないな。』

私はつくづくとさう感じた。この水國には未だ電燈がない。川ひとつ越せば何處にも電燈が來てをるのに、彼等はまだランプの世界で、この努力をしてをるのである。この開墾がいつの頃から始まつたか、私は知らない。然し百餘年を經たと思はれる松の老木を見た。察するに、開墾の歷史はその松よりも更に古いに相違ない。而も事業は尚ほ半途である、多くの沼湖地がのこされてをる。沼地の開墾といふことは、容易な努力ではないな、彌よ私はさう感ぜざるを得なかつた。

水國の初秋をいろどるものは黄いろな小さい「ジヤランボ」の花と、眞白の大きな蓮の花であつた。「ジヤランボ」は小さな

囲い菜を行つた水草で、殆んど水面といふ水面を埋めてはびこつてゐる。蓮田は稲田と稲川との間に、ところ〲に介在してをる。蓮田と云ふよりも蓮の林と云つた方が適當なくらゐで、莖（正確にいへば葉柄だが）の高さは何れも七八尺から、大きいのは一丈にも達してゐる。但これは水面上の長さで、水面下のことはわからない。葉の直徑は三尺、花の大きさは一尺から一尺二三寸に達する。

『こんなに莖や葉を大きくして、蓮根は採れるのかしら。まさか蓮の葉を栽培してをる譯ではあるまいがな』

と思つたくらゐ、實に素晴らしいはちすである。

安政年間にできた地圖を見ると、中洲といふ部落は、名のごとく中洲であつたが、今は長島部落との間に丸江湖を殘して、陸つづきとなつた。ただ長島部落との間には、與田浦が深く入りこんでゐるので、渡船を以て交通してゐる。入江の幅三町ばかり、渡小屋があり渡し船もあるが、をやぢ何處へ行つたか姿が見えない。向ふ岸の小屋に居るのかとおもつて、『オーイ』と二三度呼んで見たが、返事もなければ、影も見せない。『はてな、家へ晝飯でも食ひに行つたのかな』と、小屋に腰うちおろして煙草を二三本ふかせたが、をやぢなか〲やつて來ない。『苟くも天下の交通機關を預かる身であり乍ら、ちと呑氣すぎ

るな』と、心中漸やく平らかならざる時、不圖おもひ出したは、芭蕉が「奥の細道」の旅中の風流——那須野ケ原に踏み迷つて野馬飼ふ男に道をたづねると、此の馬に乘りて行かれよ、馬の止まる所にて馬を返し玉へと馬を貸してくれた、芭蕉その馬に跨つてゆくと、やがて人里に出た、すなはち何程かのあたひを鞍壺に結びつけて、馬をかへしたと云ふ一件であつた。

『船頭がゐないからとて、手をつかねて待つといふは、我ながら餘りに智惠が無さすぎた。自ら漕いで渡るも、是亦風流、是亦一興だ。』

と、船頭の居ないのが急に嬉しくなつて、自らとも綱を解き棹を取つて、船を出した。水は淺さうに見えても案外に深く、それに底が泥土だから、十間ばかりも出るともう棹は利かなくなつたので櫂と取替えた。棹のうちはスイスイと、心持よく船が動くけれど、櫂となると、なか〲さう簡單にはゆかない。漕ぎつゝ櫂で舵をとるのだが、右へ向けようとすれば左へ、左へ向けようとすれば右へ、兎角大氣豫報と同様反對に出たがるものである。その癖一直線に進まうとすれば、圓舞のやうにぐるぐるとよく廻る。もう十年も前の話だが、或女をつれて稲毛へ遊びに行つたことがある。夏の夜で月が美くしかつた。

『何ていゝ月でせう。船を浮かべて海へ出たら、どんなに好い

でせうね。』

と女が云ふので、ぢやあ左樣しようと、宿に命じて船を借りさせた。『あなた、漕げるの？』と女が危ぶむのを、『無論さ』とばかり、三年も船頭をやつたんだてな顏をして漕ぎ出した。尤も、全然無經驗ではなかつた、私が佃島の海水館といふ旅館にゐた頃、同じ社に勤めてゐた相馬由也が來て、

『君は船が漕げるかい？』

ときくから、全然知らぬといふのも見識にかゝはるとおもつて

『少しぐらゐは漕げるさ』と答へた。ぢやア一つ出かけようといふ事になり、小舟を一艘借りて、果物と麥酒を二三本用意して乘出した。私は初めから相馬君に漕がせる積りでゐたのだが、彼は又彼れで、私に船を漕がせて自分は林檎の皮でも剝いてゐる計畫だつたのだから、始末がわるい。結局二人とも少しも漕げないことがわかつて、大急ぎで取てかへさうとした時は、もう遲かつた。流れに乘つた船は、委細かまはずドンドン走り出した。疾走してくる汽船の舳先を横切つて、危ふくはね飛ばされ相になつたり、汚穢ぶねに衝突して强か怒鳴りつけられたりして、とゞの詰りは水上署の船に曳かせて、悠々と引揚げて來たのである。然し斯樣な經驗は敢て誇るに足らぬと思つたから、女には話さなかつた。海が淺いのだから、愈々動かないときは降りて押すことだと、多寡を括つてゐたのである。初めの間は大分成績がよかつたが、砂であつた海底が岩と變り、その岩が斷崖を成して急に水の深くなつたのを知らずに、グイと船を深海へ押出してしまつた。驚いて船を淺瀨へ漕ぎ戻さうとすると、最早船も櫂も私の命を奉じない、奴等は各個に勝手な運動をはじめる。

『船頭さん、何がはじまつたの。眼がまはるぢやありませんか。』

今が今まで『逆卷く怒濤の中までも……』などゝ云つてゐた女から抗議が出る。生憎退潮だから、船は沖を指して流れる。かうなるともう夢中だ。蚊のやうな痩腕に滿身の力を籠めてエイヤ〳〵。ガタン！、櫓臍がはづれると櫂をくらつて、ざぶーん。

落ちたのは櫂ではない、拙者である。

女は悲鳴をあげて、救ひを呼んだ。ほんとうに恥知らずの奴ツたら有りやしない。――水に落ちても、拙者泳ぎは水府流の達人である。素早く浴衣を脱ぎ捨てるや否や、片手で船を摑み、片手で抜き手を切つて、船を淺瀨へ淺瀨へと押して行つた。私は確かにその通りやつてゐたに相違ないのだが、女は、私が鮑貝のやうにピツタリと船にくツついたまゝ、手足を自

きつゝ、船と共にズンズン沖へ流れてゆくものと看て取つたらしく、狂人のやうに恥も外聞も忘れて騒ぎ立てたのである。兎に角、漁夫船が出てきて、私たちは渚邊へ引戻された。

往事茫々夢のごとし、そのエフといふ女にも、相馬由也にも、もう十年ばかり會はない。『今頃はどこにどうして居やるやら……』と考へつつ、どうやらかうやら中程まで漕ぎ進んだ時、向ふの茅の間から、ツイと一隻の船が現れて、ズンズン此方へ漕いできた。

『しまつた！』矢張り船頭は向ふの小屋に居たのだ。しかし、今更引返す譯にもゆかない、萓夫船泥棒と間違へられることもあるまいと度胸を極めて、船の摺れちがふ時、

『船頭さん、急ぐ旅だから、ちよつと船を借りたよ。』

と聲を掛けると、

『あ、宜うがすとも。向ふへ着いたら船が流れねえやうに、よウく杭にしばり付けておいてお呉んさいよオ。』

『おツと承知だ。渡し賃も船の中に入れておくからね。』

それで終りツ。田舍の人は氣のいゝものだ。

白銅いくつかを紙に包んで、上へ「渡し賃」と書いたが、自分で漕いで渡賃も變なものだと思ひ「船の借賃」と書き直して、置いて來た。

そこからは、もう潮來の人家が見える。一段と高く、きららとトタン屋根の光つてゐる大きな建物（それは菖蒲踊で有名な玉樓である）を目標として、まつすぐに進むと北利根の土手へ出た。潮來の町で一番大きな建物一番目に立つ建物は妓樓である、それが如何にも潮來の町らしくてよいと思つた。

潮來と牛堀

潮來の名物は菖蒲踊で、此の踊有つてはじめて水郷潮來の名も知られてをるのであるが、菖蒲踊のことは六月號「踊と唄の地方色」に書いたばかりだから、こゝに重ねては申上げない。菖蒲踊は本來の潮來節「ションガイナ」に、「ヨイヨイヨイヤサア」の囃句を添へて一卷として あること、既述の通りであるが、近年は更に、その終りへ「大漁船節」といふのを加へることにした。此の頃流行の特別二大附錄つきと云つた格である、その大漁船節といふのは『一ツとせー。一番潮來できめこんで牛堀おしこむ大矢聲、コノ大漁船』に始まつて、十とせーに至るかぞへ唄にて、全たく松岸名物の「大漁踊」を模倣したものだ。今殘つてをる妓樓は菖蒲樓、玉樓、福家樓の三軒で、娼妓は何れも十二三人づゝをる。其は菖蒲踊ををどるものは娼妓だから、是れ位の人數が無いと、踊りにならない爲であらう。藝

妓は今館で二十四五人居るが、その内半数は中村屋の抱妓で、中村屋と高浦楼に軒つゞきの同じ家である。中村屋のおと丸、ひで丸、小ゑん、つるよしの市松、此の四人年若くして美人、ー真菰の中の菖蒲だとの評判である。

潮來途上所見二首

向ふ通るは小ゑんぢやないか
風呂敷づゝみは、西瓜かね。

×

八百屋のやうだよ玉楼の二階
かぼちや冬瓜がころごろと。

旅館は、ほかにも二三軒有るには有るけれど、東京の人達の行つて泊る旅館は、先づ三層楼の「角菱」である。二階三階の各室からは、居ながらにして水郷情景を、恣にすることができる。設備は、都會の人を對手にする旅館としては、寧ろ甚だ整つてをらぬが、料理のうまいことは稍や特筆に値する。霞ケ浦の湖畔では、土浦の大きな料理屋を除いたら、まづ此の家などを第一に推さねばなるまい。十八番は鯉のあらひにこくであるが、生白魚の酢味噌、公魚の「フライ」や魚でんもなか〳〵旨い。生の白魚の酢味噌は土浦あたりの旅館でも食はせるが、東京の人には珍らしく、評判のよい料理の一つである。公魚は霞ケ浦の名産で、そゝツかしい學者は霞ケ浦の特産などゝ書いてゐる位、昔から名高いものである。（宍道湖ではアマサギと稱す）然しこれは潮來附近では捕れない、天王崎から内で捕れるのである。白魚と倶に隔月禁漁の制が敷かれてをるが、何時行つても食べられるといふ譯にゆかないが、味は鯉とおなじく秋先きが一番よい、丁度今頃がそのシュンである。土浦では白燒きにしたり、粟漬にしたりして賣つてをるが、矢張り生のまゝを「フライ」か魚でんにして食べるのが、一番旨いやうである。

この外霞ケ浦では鯔・鮒・鰻・鯰・さくら蝦などが捕れる。角菱ではよく鯰を使ふが、その料理法は、一旦白燒きにしておいて煮るやうである、これも一寸變つてゐて、珍らしもの好きの旅客の「舌」を喜ばせる。主人がなか〳〵の食道樂で、東京へんの旨い物屋を食べあるいて、自ら庖丁を取つて研究もしてをるらしい。

潮來の眺望は、稲荷山に盡きてゐる。稲荷山の黒い森は、香取神宮の櫻の馬場から遙かに望見せられるが、今この境内の一角に立てば十六島眼下に在り、十六島を隔てゝ香取の高丘と相對してゐる。高さ三十米突に足らぬ小丘であるが、視野洞然として頓に展け、寧ろ驚くべき雄大な眺望を行つてをるのであつ

た。

牛堀は北利根及び横利根より霞ヶ浦に入る門口で、土浦・高濱・鹿島鉾田・佐原・銚子等に行く船は、一として此の關門を通過せざるはない。霞ヶ浦の交通上には最重要な點を成せる水上の三叉路である。水に臨んだ旅館「千歳屋」が汽船發着所となつてゐて、水はひた／＼と楼脚を洗ひ、川蒸氣は悉く横付けにされる。この旅館の楼上の眺望は、潮來の稲荷山に比して優るとも劣らず、水に近いだけに、蘆荻ぼう／＼として眼前に茂り、水郷的情景は特に濃やかである。割烹は角菱を推し、眺望は千歳屋を推す。試みに採點表を示す。

	（風景）	（料理）	（氣分）
津宮の村田屋	六點	五點	五點
潮來の角菱	七點	九・五點	七點
牛堀の千歳屋	九點	六點	八點

「氣分」といふのは、女中・調度・設備等より來たる感じであつて、經營者の人格の反映と見ればよい。田舍まわりのこと故、點は「風景」以外は充分あまくしてある。

麻生・浮島・阿波

麻生の天王崎は、北岸の相見崎（或は歩崎）と倶に「霞ヶ浦二大觀」と稱せらるゝ景勝地で、牛堀の北方わずかに一里半である。潮來から牛堀・麻生・玉造・小川を經て常磐線高濱驛まで乘合自動車（一日一回）が通じてゐるし、外に馬車の便もある。麻生町字古宿の鼻が、鈍三角形をしてずッと湖中に突出したその尖端が乃ち天王崎であつて、小さな社と大きな松とがある、湖上一里をへだてゝ浮島が長く／＼横はつてゐる、右も森々、左も森々、少々ピントの合はないやうな風光で、到底、相見崎觀音の大觀に比すべくもないが、晴天に十里の湖上を越えて、はるかに筑波を見晴らかすのが特色で、その美觀は蘆花氏が「水國の秋」に力説してゐる。兎に角牛堀あたりで霞ヶ浦の風光を論ずるのは、葦のずいから天井をのぞくの類である、少くも天王崎迄は行かなければならない。

高須崎の松も、この海岸では屈指の名所と云てよろしからう。「高須崎の夜雨」は霞ヶ浦八景の隨一で、琵琶湖の唐崎の松の弟分ぐらひの價値はある。――否唐崎の松も今あるのは、つい數年前名稱を相續したもので、形容甚だふるはない。今日は高須崎の松の方が兄貴分である。本幹の周圍二丈、樹高五間、枝張二十餘間、形態は、もとの唐崎の松にそつくり、稀有の名木である。土地避遠にして人に知られざるが、彼れの不幸である。源義家が、鹿島參詣の途次、波間に漂流してゐる小松を拾

ふて植えたものだと言傳へられてゐる。——義家は本職は軍人だが　副業には植木屋もやつてゐたらしい。奥羽征伐の往復、各地にいろ〳〵の植物を植えてゐるが　それが又悉く發育がよくて今日迄彌榮えに榮えてゐるのが多い。水戸藩主光圀、齊昭など此松を詠じた歌がある。齊昭の歌は頗ぶるまづいものであるが、彼は同様に金子三十兩を保護金として下附し、玉造町の人大場某之れを預かり、その利子三兩をもつて年々手入を行ひ、保護して來たといふは佳話である。

高須崎は玉造町の西南半里、柏崎と對して風光がよく　蘆荻蕭々たる水郷的情景にも富んだ地である。高須から湖上十町田伏に渡る渡船があり、田伏から南へ半里を歩めば、例の相見崎觀音である。霞湖の風光を探らんとする人には、此邊は是非一遊をすゝめたい。

麻生には大黒屋、柏屋、湖月樓といふ三軒の旅館がある。都の人が行つて泊る宿は大黒屋だが　湖月樓といふ小さな旅舍のわきからは浮島へ渡る渡船が出る。私は一度そこから浮島、阿波、十余島を經て大利根の左岸神崎町へ出て見たことがあつた。十余島といふのが、矢張り十六島に酷似した水郷なのである。

浮島は短徑二十町、長徑二里の細長い島で、貫之の歌に、

さくら川瀬戸の白波しげければ
霞ぞながす信太の浮島。

といふのがある。古くは却つて世に知られてゐた名所と見える。今は稻敷郡であるが、もと此地方は信田郡と稱し、島と本土との間に紐のごとく横はる瀬戸を「櫻川」と呼んでゐる。松が多く、茶山花が多く、蜜柑の木が多く、ちよツと變つた島なのである。島外の者と婚儀を結べば不祥事があるとて、むかしは島内だけで結婚が行はれてゐたと云ふ。産物は大根である。浮島大根と稱して、霞ケ浦幾灣の町村は、專ら此地から大根の供給を受けつゝあるといふことである。「利根川圖志」に、

此島の三郎左衞門宙の挨といふ物を所持せり、石にもあらず金にあらず土にあらず。何にもせよ珍らしきものなり。

とあり。尋ねて一見せむかとも思つたが、藤澤遊行寺が「天狗の爪」と同様、相模常陸地方には往々、發見さるゝ、巨魚の齒の化石に相違あるまいと獨斷して、私は通りすぎてしまつた。阿波村の大杉神社に參拜。神佛混淆禁止の結果今は大杉神社となつたが、もとは「大杉殿」或は「大杉大明神」と稱し、關東地方流行佛の一であつた。神體は勝道上人の彫んだ不動尊だ相であるが、古來降魔の神尊として崇められ、元禄文治の頃大杉明神に常陸坊海存と混じて源

義經を扶け、平家の横暴を懲らしたといふ傳説がある。今は厄除け、五穀豐穰の件も司どられて、依然繁昌して在します。

新川と大利根の間に狹まれた一區域が、むかしの「十余島」で、今は古名をそのまゝ十余島村となつてをる。安政時代の地圖と較べても、地形は可なり變化してゐる。その頃余津谷附近は島であつたし、大浦沼は大きく平須沼は小さかつたのであるが、今はそれが反對になつてゐる。押砂は往時の河床、曲淵は河岸であつたことを、その名から推測されるが、兎に角地形は變つてゐる。到る處沼あり、沮洳地あり、秋の水郷の旅としては、此の附近もなかなか興味がある。

阿波から神崎迄約二里、新川の手前からすでに、神崎明神の黑い大きな森は見えてゐる。

神崎

神崎は利根川の河港で、むかしは頗ぶる繁昌した地である。

こゝは神崎森のした
舵をよく取れ船頭殿。

の俗謠は、弘く人口にくわいしやしたものである。神崎の森といふのは、神宮寺山つづきの高さ三十米突餘の獨立丘阜で、うつさうとして老木が茂つてゐる。利根川右岸の丘陵群からは、一里ばかりも北へ斗出してゐる爲め、利根川はその麓を回つて、約半里の大カーブを描いてゐる、乃ち往時此の森の影（東側）に大きな渦卷があつて、利根川航路の最難所として、舟子の膽を寒からしめた所なのである。神崎の「まき」は無くなつたが、この唄は尙依然として漁夫たちの間にうたはれてゐる。

神崎の町は、利根川沿岸の河港町の中でも、特に感じの好い町であり、且つ明神山の眺望は、頗ぶるすぐれたものである。樹が茂つてをる爲め、充分展望を恣にすることを得ないのが遺憾だが、實際あれだけの眺望をもつた地は、先づ利根沿岸には絕無である。

妾や神崎明神森よ
なんじやもんじやで氣が揉める。

といふ俗謠は、佐原あたりの花柳界では盛んに歌はれてゐる。

「鹿島日記」には、

かうざきの神社に詣づ。社の前にナンジヤモンジヤと呼ぶ大樹あり、いと年經たる桂の木なりけり

神代より茂りて立てる湯津桂
榮えゆくらん限りしらずも。

とあり。「利根川圖志」には、其の枝葉の寫生圖の出てゐる程、有名な珍木だつたのである。樟樹と判明した今日では何の

經行もないが……。

ユツカツラと云へるは、勿論古人の見誤りである。「なんじやもんじや」の木は諸所にあるが、皆な樹種は異つてゐる。東京青山ケ原にある「なんじやもんじや」は一ツ葉タゴだし、筑波山中の「なんじやもんじや」はアブラチヤンだし、籔肉桂を「なんじやもんじや」と呼んでゐる地方もあるらしい。牧野富太郎氏の說に從へば、神崎明神の「なんじやもんじや」が正眞正銘の「なんじやもんじや」で、外の「なんじやもんじや」は凡て贋物だといふことである。すると「なんじやもんじや」は樟の別名だといふ結論に到着しなければならぬが、それは少し可笑しい。見馴れぬ木、名前のわからぬ木は凡て「なんじやもんじや」としてしまつたもので、その樹種には樟、タゴ、籔肉桂などいろ〳〵ある所に、却つて面白味があるのではないか。强て眞物と贋物とに、區別する必要は無ささうにおもふがどんなものか。

樟は亞熱帶植物で、關東地方には珍らしい樹種だから、「なんじやもんじや」と呼ばるゝに至つたのだが、伊勢大廟などには澤山ある木である。水戶黃門光圀が命名者だといふ說の如きは餘り信用は出來ない。のみならず、大利根沿岸に限つて、私はところ〳〵で樟の大木を觀てゐる。神崎から二里程はなれた滑田野の前にある小川の森の中にも、この種木があるし、もつと溯つては布川町徳満寺の境内にも素晴らしい樟の大木がある。大利根の下流地方が未だ海であつた時代に、樟の實が遠く暖國から波にのつて打寄せて來たのではないか、と思はるゝやうな分布狀態を取つてをる。それに神崎明神を、背景として數へる森は、樟と椿を主木とせる天然混交林で、椿にも周圍六尺餘の巨木が多い。隣りの神宮寺山などと比べて、樹種も林相も格段な相違である。植物地理の上から見ても、明神山はちよつと面白い山だとおもふ。

問題の「なんじやもんじや」は、幹の周圍二十尺ほどもある稀有の巨木であるが、今は枯れて古株が殘り、それより四五本のひこばえが出てゐるのみである。

明神山下の旅館山田屋は、料理旅館であるが、おつとりとした、落つきのある感じの好い家である。表口は冬は油障子などがはまつてゐて、田舍々々した構えであるが、内部の設備になかなか整つてゐる。女中なども綺麗で上品で、料理も頗ぶる上手にする。土浦の櫻井などゝよく似た感じの好旅館だ。

山田屋採點表―風景ゼロ、料理九點、氣分十點。

神崎の名物は鮭と酒。

利根川の鮭は、布佐、布川附近が昔から有名な產地で、昔然

の「鹿島紀行」にも布川の鮭のことは書いてあるし、「利根川図志」の著者赤松宗旦は布川の人だから、殊に鮭に就ては特筆大書して、

利根川の鮭は布川を以て最とす。之を布川鮭といふ。銚子口より小見川、息栖までは潮水泝る、佐原も猶鹽氣あり、故に其肉赤色薄く味甚劣れり。これより淡水を泝ること六七里の安食村に至りて味佳也。更に三里上りて小文間に至る、此間の漁を布川村持とす。この處鹽氣全く去り、魚肥え脂つき肉紅にして臙脂の如く、味亦勝れたり。是より以上は魚疲れて色味減す云々。

と云つてゐる。その漁法も特色のあるもので、「無相流し」と稱して、鮭が網にかゝると鈴の鳴る仕掛になつてゐた。この方法は布川では今もなほ踏襲してゐるが、鮭の味は、今日では佐原神崎間で漁れたものが、最も美味だとせられてゐる。水の具合が變化したのであらう。

酒は布佐の「花婁」、神崎の「香取」「東郷盛」、湖東の「文華」、土浦の「白鹿」、佐原の等々と、この水郷地方からは多くの酒が産出せられるが、神崎の「香取」は土浦の「白鹿」とともに、地酒中の逸品と稱して不可なきが如しである。

「鮭の漁れる頃に、是非一度いらつして下さい私。お待ちしてをりますよ。」

山田屋のお常は、繰返し繰かへしさう云つた。私は不幸にして、未だ利根川の鮭の味を知らないのである。うんゆくとも、屹度行くとも。

手賀沼

手賀沼も、東京から日歸りのピクニックには好いところである。狭いところは五六町廣い處で十一二町、長さは東西三里もあるといふ大沼で、大利根はその北を、半里乃至の一里の距離をとつて平行するやうに流れてゐる。この間の細長い窪地を、我孫子から分岐する成田線が通つてゐて、沼からは五六町からせいぜい十町餘のところを駛つてゐるのだけれども、丘に隔てられ林に遮られて、車窓からは湖北驛と布佐驛の附近に於て、わづかに一瞥し得らるるにすぎない。

手賀沼は鴨撃ちの猟場として知られてゐる程あつて、蘆荻は非常に多い。手賀の神の附近にも多いが、東へゆくに從つていよいよ多く、布佐附近に至つてますます深い。鴨や雁などの多く降りてをるのも、矢張り其の邊である。わが身ひとつの秋にはあらねど……、さう云つた感じが浸み浸みと胸に湧いてくる寂びのある沼である。

子の神といふのは我孫子から東南十町、沼の北岸にある萬行佛で、寺の名は延壽院とかいふのだが、本尊は甲子大黒である。男女ともに腰から下の病、――脚気、レウマチスなどに験があるとて、なか／＼參詣が多い。そして信者は、柊の葉を護府に戴いて歸つたりする、本尊が柊の木に彫つてあるから、その葉にも何程かの効能はあるのであらう。お禮參りには金の草鞋を持參する。それが積んで山を成してゐるのは奇觀である。この寺地上から俯瞰するのが、手賀湖畔第一の風光とせられ、驛前の名所案内地圖には「誰が爲か晴れし手賀湖の夕凪にさかさ富士見る子の神の丘」といふ誰の作かも知れない歌まで書添へてある。成る程晴れた日には、對岸の森の上に富士山が見えるのである。

手賀沼は鰻と鯰の實庫で、その味特に美なるを以て、食通の間に知られてをるが、遺憾なことには、湖畔には此の名物を料理して食はせる家がない。漁獲した魚は、專ら東京へ送られるのであるが、手賀沼の鰻は「江戸前」として取扱はれてゐるのである。

尤も、七八年前迄は本郷屋といふ料理屋が一軒あつた（今の飯泉といふ茶屋）のだが、とてもやり切れぬとあつて、我孫子驛前へ移つて鰻の蒲燒屋をはじめた。左角から二軒目の「子神屋」といふのがそれで、手賀沼に遊ぶ者に、多くは例に依つて、此家で鰻を食べて歸るのであるが、鰻は確かに上等であるが、タレが惡いのと、燒いたのみで蒸してないから、その味たるや太だ田舍くさく、感心のできない名物である。もつとも値も馬鹿やすし。

柴又の「川甚」の鰻は、多分此の手賀沼の産などを仕入れてゐるのであらう。東京は川魚の珍重せられず、川魚料理の流行らぬところであるが柴又に「川甚」あつて、僅かに川魚趣味者の渇望を充たしてゐるのである。市内市外を通じて、川魚料理では先づ第一指を此家に屈しなければなるまい。取扱ふ材料はおもに鯉、鰻、鯰の三種であるが、鯰の鍋や「あらひ」は東京では珍らしくもあり、お得意でもあるやうである。鯰の肉は色が白く脂肪分がすくなく、味はちよいとコチに似て、美味いといふよりもさつぱりした風味のもので、鯰のあらひは川魚料理中でも通な方に屬する。然し「あらひ」にするにはドロを除くのに骨が折れるので、大抵の家では之れをやらない、否やれないのである。「あらひ」は一般に夏のものとなつてをるが、鯰のあらひは二月三月頃が一番旨い時季なのである。鯰については次章に、も少し詳しく述べる。

川甚は元は江戸川の水打際に在つて、座敷から川面を瞰めた

氣分が好かつたのであるが、河川改修の結果、帝釋天のうしろへ移轉したので、今は昔の趣きはなくなつた。水郷とか水櫻とかいふ文字は、お世辭にも使へなくなつたことを遺憾とする。

栗橋の土手にある稻荷屋は、鯉料理で古くから知られてゐる。こゝは風景も好く、近郊では屈指の家である。

和泉の玉翠園

『多摩川べりには、隨分澤山の料理屋があるやうだが、一番風景が好くて、食べ物も旨といふ家は、どこだらうかね。』

とは、屢ば人の話題にのぼるところであるが、さう云ふ場合、私はつねに、

『和泉の玉翠園だらうね。まづ彼家の右に出づる家は、あるまいとおもふね。』

と答へた。多摩川べりに料理屋が多いと云つても、主なるところは玉川電車の二子附近と、京王電車の調布河原とであるが、どつちかと云へば風光は調布河原の方が秀れてゐる。殊に玉華園は松の疎林の間に在つて、風情に富んだ旗亭だ。向ふ岸は即ち管の土手（稻田堤ともいふ）で、春は二里の長堤に一連の花幕を張つて美くしい。その美くしい眺望を以てするも、和泉の玉翠園に對しては及ばさること太だ遠いのである。

和泉は調布河原の下流一里、二子からは上流一里半、略ぼその中間に位置して、京王電車の國領停留場から南へ三十町、『玉川碑、玉翠園』と並べて書いた指標に導かれて行けば、譯なく達することができる。

『玉川碑といふのは何だらう？、東京近郊とか日がへりの旅とかいふ書物にも、つい見かけたことのない文字だね。』

と云ふかも知れない、それは近年東京府が、玉翠園の門前に建てた新らしい記念碑で、多摩川に晒らすたづくりさらさらにと云ふ、彼の白河樂翁公の歌を刻みつけた石碑である。つまりそのあたりが布晒しの古蹟といふ譯なのである。河つぺりだから布も晒したであらう、斯樣な記念碑は何處へ、いくつ建てたからとて、些か不都合はないわけのものである。

玉翠園は東京に近い割に、比較的都の人に知られず、いつ行つても閑靜で、のんびりとした氣持の好い家だ。

『こんな家は、餘り世間に知らせずに、そつと隱しておいて、時々自分達だけが行つて娯しむ方がいゝ。』

玉翠園の客は、期せずして皆からいふ風に考へて、秘密にしてをるのかもしれない。全たく世間の俗人共にむざ／＼教へてしまふのは惜い氣もせぬではない。

丁度そこで、多摩川は大きく曲流してゐる。ほゞ一直線に西

から流れて來た水は、北の方から其の河床の中央めがけて斗出した臺地の岬脚に遮られて、右へ折れ、斜めに東南へ流れて行つてゐる。玉翠園はその從崖の上に在つて、松の老木の一むらが、すく〳〵と半空に抽出して、その老幹の間に多摩の水流が白くきらきらと光つてゐる。眺望の特色は、川を縦に見晴らしてをることである。それにまたバックが非常に秀れてゐる、對岸には例の相模の丘陵脈が、長く長く連亙して、背後には丹澤山塊が群起し、そのギザギザした連嶺の上、富士の七合目以上が最もあざやかに抽出してゐるのである。それは一寸甲州の「和田峠の富士」を想はせるやうな光景である。然し餘りに、繪のやうになりすぎてゐるのが、缺點といへば缺點だ。

こゝの最も好いのは黄昏時で、日落ちて數分の間、文字通りに山紫に水明かな光景は、實際何とも云へない美しさである。

『この武藏野の中では、他に比類のない風情だ！』私はさう斷言して、敢て良心の呵責を受けないつもりである。

玉翠園自慢の料理は、鯉と鯰である。特に鯰のすつぽん煮はいさゝか推奨するに足る、或ひは此家でも、一番得意な料理であるのかもしれない。年中その生洲に、鯰の姿を斷つことはないやうである。私は可なり鯰を好むが、東京では鯰など食はせる家は數ふる程しかない、この點から云つても、玉翠園は私に取ては大切な家なのである。

東京に鯰料理の行はれないのは、鯰の味を知る人がすくないからである。私は女中に料理の註文をしてゐると、一緒に行つたS君、

『君ちよつと待つた、鯰つていふのは、あの鯰のことなのかい？』

と怪訝な顔をした。鯰は鯰さ二いろはないと答へたら、『俺は御免蒙らう』と來た、はゝあ食はず嫌ひだよ瞞されたと思つて食つて見給へと云ふと。

『俺はかう見えてもいかものは嫌ひなのだ。』とある。鯰をいかもの扱ひは驚ろく。然し東京の人は、十中の八九まで斯う來るに相違ない。

鯰は川魚界一方の重鎭だ。風味から云つも、又威風堂々たるその容貌から云つてもである。人間の「鯰ひげ」は滑稽に感ぜられるが、鯰の鯰ひげは甚だ威厳に富んでゐる。彼れの如く魁偉な容貌を具へた川魚は、決して外には居ない。全體の殆んど半分を頭部で占めてゐる釣合のとれない程偉大な頭部を持つてをる點で、彼は猛獸王「ライヲン」に酷似してゐる。容貌の武張つてゐる通りに、彼れは實際にも武張つたやつで、その前胸兩側には鋭利な兇器を備へて、漁りに摘まうとすれば、猛然と

して斬つけるから、川魚夫も容易くは、彼れに對して手が出せないのである。鯉鮒の類が小さな蟲や水垢、水藻などを食糧としてをるに反して、彼れは專ら小蝦や小魚の類を取つて食ふやうである。彼れの腹中を割いて見ると、二寸ぐらいの魚を呑んでをることは珍らしくない。

表皮は脂肪に富み、ぬらりくらりは「瓢箪なまず」の諺にうたはれてゐるが、その肉質は色白くして、味は甚だ淡白である。鰻の肉の甚だあぶらつこいのとは、天地霄壤の差がある。あらひ及びすつぽん煮の外、ぶつ切にして葱の五分と一緒にぐつぐつ煎て、葱ま のやうにして食べても旨い。然し私はその卵だけは好きない、卵巣と輸卵管とを一緒にして、煮て珍重する人があるけれども、鱈のくもわたなどとは、比較にならない野暮くたい代物である。

因に、鯰のすつぽん煮は山谷の重箱が十八番の料理。

玉泉園採點表。――風景十點、料理八・五點、氣分九點。

料理は實は九點くらい與へたいのだが、夏の鮎料理を考慮すると、斯く減點しなければならぬとを遺憾とする。家の氣分は大變いゝ、經營者は和泉の舊家で、本業は百性ださうである。華々しい廣告をして客を引かうなどいふ考は、毛頭持合せぬらしい。おつとりとした落着いた氣分は、恐らく其處から來てゐる 好き勝手な料理を注文して、鱈腹飲み且食らひ、飯まで食つて、女中にも祝儀をくれて、それで五圓札一枚におつりが來ようといふ、馬鹿氣た安直さである。二階の鍵の手になつた角の室は、此の家の特等席で、見晴らしがよく、多摩支流の細い流れが楼脚をめぐつてゐる。その細流の向ふは一面の眞菰で、ざわざわ、さわさわと風に青い波を打つてる、實に野趣滿々の姿である。

二子の龜屋

玉川電車の二子の渡し附近には、左岸の土手に玉泉亭、柳屋、水光亭その他何々。一町ばかり離れた遊園地のある臺地の一端に喜月。それから右岸の二子に龜屋がある。二子は厚木街道(或は大山街道)に當つてゐるために、昔から開けてゐたところらしいが、其の風致は調布多摩川附近に比較して、すこしも秀いてゐるとは云へない、唯だ東京に近いといふ理由で繁昌してゐるのである。

五六年前迄は、何と云つても玉泉亭が中心勢力であつたが、柳屋が改築して規模を大きくし、内部も美しくしてからは、矢張り左様はゆかないやうである。然し私は昔の柳屋の方が好きだつた。客室は平屋で凡てが川に面して一列に連なつてゐた。

十間になつた長い廊下を、土地の娘らしい物馴れない女中が、カタコトと下駄の音をさせて、酒や料理をはこんでくるところに趣味があつた。いかにも郊外の旗亭らしい、趣きのあつたものである。百疊敷の大廣間などができると、のんびりした氣分は、入れ替りに消え失せるに極つたものらしい。今は私は「喜月」を第一に推す。庭が斜面になつてゐて、ひろびろとした水田や人家の聚落を越えて、遙かに多摩の水面と相模の丘陵とを望むところに、却つて物しづかな且つ晴れ晴れとした趣きがあつた。それに此家に限つて、道玄坂藝妓は遊山でなくはいるといふ特種慣例があつた。——今はどうか知らないが、昨夏あたり迄はその制度が行はれてゐた。

二子多摩川には四五人の藝妓がをるがそれは皆目黑藝妓だ。毎朝目黑から出張して、夜になると歸つてゆくのである。喜月だけは自ら高くとまつてゐるのか、或ひは組合から除けものにされてをるのか、更に仍その目黑藝妓はこの家には足踏みをしない。そこで喜月は機敏に道玄坂と妥協して、さういふ特別の制度を作つたものらしい。と云へば大變安く遊べる如くにもおもへるが、見番から直接に招ぶのでなくて、道玄坂の或る料理屋又は待合を通じて招ぶのだから、若干の關稅がかゝる、結局は遊山を拂ふと同じ位の額を、何かの名目で支拂はねばならない。だから喜月は遊んで氣分のいゝ家ではあるが、安い家ではない。

鮎屋は佇家で、建物も古いし、門口に大きな松の木のあるなど、古色蒼然としてゐる。それに、いつ行つても閑寂だ。川ひとつの差で宛ら別天地の感がある。

鮎屋にかぎる、落付があつて感じが好い。風景だつて、左岸の上手から、摑みどころのない平板な右岸の風光を望むよりも、却つて鮎屋の二階あたりから、左岸の崖地を望む方が、少しごちやごちやはしてをるけれど、遙かにすぐれてゐる。

さう云つて畫家や文士の間には、今でも鮎屋を贔屓にしてをる者が多い。然し夏は矢張り鮎でも食はせる外、特色ある料理と云つてはない。私はこゝで一度「うぐひ」を食べたことがある。三月の下旬、久地の梅はまだ蕾が固かつた、歸りに二子塚などを観て、夕飯を食べに寄つたのであつた。客は私ひとりであつた。

『この頃は何もございませんで。それにお客様も滅多にないものですから……。』

女中が申譯をしながら持つて來たのが、その「うぐひ」の煮びたしだつたのである。

『いや珍らしくて結構だよ。東京では滅多に、この魚をつかは

ないからね。』

私は實際お世辭でもなく、さう云つて、それを食るやうに食べた。晝飯抜きで腹のへつてたせいもあるが……。「うぐひ」は鮎に似た魚で、水の中で泳いでゐる姿などは、一寸見誤りやすい。殊に身を翻してギラリと銀光りのする横腹を見せるところなど、よく似てをるが、ひれや肌に赤い條があつて、顔はやや下卑てゐる。全體すつきりとはしてをるが、鮎のやうに瀟洒と云ふ姿でない。それに、下等な川魚に特有の「魚臭さ」がある。肉が引締つてゐるので、大きいのはあらひとてなか〳〵乙なものだが、ちと生ぐさい匂ひがするから馴れない「舌」には向かない。素焼きにして置いて煮びたすのが、一番萬人向であるらしい。普遍的な川魚で多摩の沿岸の料理屋でも多少は使つてゐる。鮎のまだ出ない四月頃が、「さくら」と稱して此魚の一番美味い時代で、金澤地方ではなかなか珍重せられてをるものである。私の父は舊加賀藩士であつた。加賀は川魚趣味のすこぶる發達した土地で、その趣味に習慣づけられた私の父は、川魚が好きであつた。また其の料理法にも巧みであつた。私が今日鮎を語り「ゴリ」を語り、鮒やうぐひに就て語り得るのは、全たく父のおかげであり、川魚を好むのも、趣味の遺傳といふものであらうか。

川魚雑俎

多摩河畔の料理屋には、二子多摩川でも、調布多摩川でも、料理で客を引かうとしてをるやうな家は、殆んど一軒もないと斷言しなければならぬのを、私は淋しい氣がする。試みに川甚や稲荷屋と比較してみるに、

	(風景)	(料理)	(氣分)
調布玉華園	八點	六點	七點
二子喜月	六點	六點	七點
同　龜屋	六點	六點	八・五點
柴又川甚	―	十點	八點
栗橋稲荷屋	九點	八點	八點

その割合は中の下といつた處である。料理屋も客も、たゞ夏の鮎だけが目的である。

『鮎さへ食はせておけば、客は満足してゐる。』

料理屋はさう考へてゐる。客亦それに満足してゐる。ところが、多摩川の鮎と來ては、甚だ旨くないのだから慘めである。

『宅では旅の鮎は一切つかひません。多摩川で漁れた鮎ばかりです。』

と自慢にしてをる家のが、必らずしも旨からず。こつそり東京

の問屋から仕入れた氷詰の罐詰ものを使つてゐる方のが、却つていくらか旨いとは。逆さまな話ながら、此の事實を奈何ともすることは出來ないのである。

『多摩川の鮎がまづいつて？そんな事があるものか。』と力味返る男。大抵は多摩川以外の鮎を食つてゐない。

多摩川は鮎川としては、我國屈指の河川である。昔からまづいのか、此頃急にまづくなつたのか、それは私にはわからない。兎に角多摩川の鮎は發育がわるくて、香氣がうすい。鮎は香魚と書くくらゐで、その獨得の風味は彼の未熟のバナナのやうな芳香から來てゐる。芳香のない鮎の肉は唯だ脆弱で、締りのない。甚だ他愛ないものである。——多摩川へ行けば何時でもその實驗ができる。

鮎の香氣は、その主食物たる硅藻（俗に水垢）から來ると云はれてゐるが、或ひはさうかも知れない。硅藻の少い湖水に育つた鮎は旨くなく、琵琶湖の特産で飴だきにされる小鮎（鮎の子ではない、あれ以上に發育しないのである）に、香氣の少ないのも、理屈が合つてる。——小鮎は元來、どこの産でも香氣の乏しいものではある。

多摩川に「ゴリ」（カジカのこと）は居ないのか、と思つたら、矢張り居るには居るのだ。鯊を啖食し「はぜ」を好む東京人が。何故「ゴリ」を捨てゝ顧りみないのであらう。市中には鯊汁を專門にする家さへあるのに、多摩河畔に軒をつらぬる料理屋に、たゞの一軒も「ゴリ」料理を試むる家がないのは。何故だらう？。「ゴリ」汁の旨さは、鯊汁の比ではないのだがね。それに「ゴリ」曳きといふ川漁は、なかなか興味のあるものだ。長い丈夫な麻繩に、一尺置きぐらゐに拳大の石を結びつけたものを、大勢で丁度地曳網のやうにして、川の淺瀬を引廻しつゝ、だんだん岸へ引揚げてくるのである。石と石とがかち合つて、ごろごろと川底に鳴る凄じい音に驚いて、石のかげに潜んでをる「ゴリ」は、岸ちかく追はれてくる、それを手網ですくひ取るのである、一曳きに一升ぐらゐ捕れることがある。共同作業であるだけに、サラリーマンの多い東京には、おもしろい川遊びの一つであらうとおもふ。何を苦しんで不味の鮎をのみ、鵜のやうに狙ふことかは。

餘談、更に餘談に亘る嫌ひがあるが、鮒に似た小魚に「たなご」といふのがある、鮒とおなじく川にも、沼にも、處きらひなく住んでゐる奴で、鮒釣りにゆくと、半分以上はこの魚が引かゝる、東京近郊では殊に中川筋にこれが多いやうである。鮒に似てゐるが、すつと偏たい形で、背すぢの色が薄く、腹に綺麗な薄桃色を帶びてゐる。室生犀星氏が「川魚の記」（七月號）

に對の一種と書いてゐる。べんべこには、此の「たなご」のことであるらしい。私の父は前にも云ふ通り金澤生れだけれど、矢張り「たなご」と呼んでゐた。川魚の好きな加賀の人でも、此「たなご」ばかりは、毒があるとて決して食べない。金魚や緋鯉を食べないと同じやうに。いやな苦味があるのださうである。

然るに、此の頃魚學專門家田中茂穗氏の談によれば、「たなご」を食べる地方があるらしい。寒中殊に一月頃は苦味がなくて、美味なものださうである。鳥の肉は臭いと云つて一般に食べないが、冬期はその臭氣が脫けるので、鳥の肉を食べる地方があるのと似てゐる。然し「たなご」の有毒說も、まんざら根據がないではないらしい。或る醫學者の研究に由ると、「たなご」には肝臟ヂストマの寄生が多いさうである。或ひはさういふ古人の經驗から、生れ出てゐるのかもしれない。「たなご」の苦か味とは何んな苦が味か、白魚も生のまゝのは苦が味があるが、その苦が味は却つて酒徒には喜ばれる。「たなご」は鮒とちがひ骨の柔かい魚であるから、フライなどにして旨いであらう。且つ煮えたぎる油の中ではヂストマも死ぬであらう。

更に又、「たなご」の旨いといふ說は、私に取つては一の二ュースであつた。

多摩の上流氷川

多摩川の上流、青梅鐵道の終端驛二股尾から溯ること四里日原(にっぱら)川が多摩の本流に合流するその三叉點に跨がる溪村「氷川」も亦、一の水鄕と稱して不可ないであらう。氷川は實に、すぐれた水鄕であるのみならず、多摩川の風光を探るものは、是非ともこゝ迄は溯上しなければならぬ、極めて重要な地點なのである。と同時に珍味を求めてあるく、「舌」の旅客に取つても、逸することの出來ない土地である。

多摩川三十五里の內、河口から青梅に至る十六里の間は、河川學上の所謂下流中流に屬し、青梅に至つてはじめて「上流」の態(かたち)を見せてゐる。石河原は漸くつきて、河床にも、兩岸にも、巨岩磊塊として橫はり、急湍あり、碧潭あり。その河谷は、青梅二股尾附近は未だほんの入口なるが故に、やゝ廣角度ではあるが、更に又V字型の溪(ケイ)谷の形式を見せてゐる。京阪地方の木津川にも比すべき、明るい美しい谿である。

二股尾をすぎ、軍(いくさ)畑の渡船場をすぎると、兩岸の山勢頓に急峻を加へ、谷また相逼つて、山容水態漸く奇。殊に右も、左も、級の鮮苔を積み重ねたごとく、層々として茂る檜山の美しい林相は、旅客の目を喜ばしめる。三田村の檜林は東京府下で

ち眺範囲とせられてをるものである。然しこゝらでも河、多摩渓谷の眺は仙境に入つてゐない。吉野附近の瀑布をすぎ　御嶽に至つて山勢愈々急峻、是よりして山周り谿谷し水声佩環の如してふ趣が加はり、到る處に激湍開け、奇巌聳ち、杉檜の人造林の間に、モミヂ・ノウルシ・カキ等の紅葉性の濶葉樹か介在してくる。坂下の釣橋、数馬の奇勝、楓渓の激湍などは、就中喧傳せられてをる。

氷川の景情は、日本の山村といふよりも、支那の山水畫にちかく、曾て山東省の柳樹嶺を越えて、張林河に沿うて下つた時に過つた村々を、想ひ起させるやうな處であつた。四邊を圍む山々は、いづれも錐の穂の如く、すくすくとそゝり立つてゐる。かゝる間に、旅館三河屋の裏座敷は多摩の本流に枕み、愛宕山の箭峰と對し、滴たるごとき積翠にかこまれて、恰も幽邃そのものゝ姿で建つてゐるのである。水は楼脚をめぐつて流れながらその姿を見せず、急瀬の音のみがとどろくと高鳴つてをるのも、却つて一しほの趣きであつた。

「この山の中に　此の座敷はちと贅澤だ。といふよりも寧ろ意外だな。」

誰しも斯く感ぜざるを得ぬ程　入口の極端に見すぼらしい三河屋は、設備の整つた旅館であつた。調布河原や　二子附近に

井の辺で來ても、すこしも遜色がないなら、これに油堂あり、鳩ノ巣まではやつて来てゐるし、庖丁も川魚には珍しい洒落ありてゐる。

氷川名物は「ヤマメ」と「川のり」である。

むかしは七八寸から一尺位の鮎が漁れて、その美味、旅客の舌を喜ばせてゐた相であるが、羽村に市水道の大きな堰が築かれてからは、羽村から上流に鮎は上れなくなつた。今日も時たまとれぬではないが、一年のうちに幾尾と、真に數ふるほどの數で、從つてその價も安い時で五六十錢はする相である。

「ヤマメ」は普通五六寸から、大きいのは一尺もある。地方によつて「ヤマベ」とも「アメゴ」などとも呼ばれてゐる。銀灰色の細かい鱗を有つた魚で、横にうすいろの縞がある。その形體鱒に酷似し、鱒の子だと云はれてゐるが、確かなことは專門家にもわかつてゐないらしい。冷めたい水——即ち山間の渓流に棲む魚で「イワナ」と倶に、夏期の山岳巡禮者をよろこばせてゐる珍味である。山深み渓細るにつれて、水は冷めたくなる、するともはや其處には漸く鮎の影を斷つて、「ヤマメ」の世界となる。更に一層水の冷たい山奥に入ると「ヤマメ」は姿を消して「イワナ」の世界となる。多摩川は水源地近行つてもイワナは居ないが、イワナは「ヤマメ」ほど旨い魚でないから、

多摩川にイワナが棲まずとも、私は敢て遺憾と爲ないのである。

多摩川に於ける「ヤマメ」の棲息區域は 棚澤附近から上流であるらしい。新高橋の茶屋で食はせる川魚は鰻、ハヤ、コトウ、などで 彼のへんではまだ「ヤマメ」は捕れないといふことである。氷川では、多摩川の本流でも、日原川でも澤山「ヤマメ」が漁れる。しかし日原川の「ヤマメ」は不味く、本流でとれたものでなければ不可いと云はれてゐる「ヤマメ」の一番旨い食べ方は、皮付きの儘刺身にして、蓼酢でやるに限るやうだ。

次は鹽燒き、雲丹燒きであらう。煮たり汁の實にしたりしたものは、全く「ヤマメ」の美味を失ふてゐる。

兎に角、東京から日歸りで、はつらつたる「ヤマメ」に、澤山の珍味を味はふことのできるといふは、東京人の幸福と云はねばなるまい。—— 氷川は非常に山奥の如く思はれてゐるが新宿から二股尾迄は二時間足らず、二股尾から氷川迄四里、二人乘の小型自動車があつて約一時間で達することが出來るのである。

「川のり」に就いては、已に古の旅に細說した通り大谷川の日光附近、芝川の白糸附近、その他九州の或る地方等、その産地は極めて稀れなもので、産地に於ける産額亦極めて寡少な爲、殆んど他地方には移出せられぬ。「海のり」の如き芳香を有せぬが、その色は宛ら深山の風氣を象徴せらるゝもの丶如く、噛みしめるとシヤリシヤリと音がして、一種特別な乙な味ひが出てくる。海のりが俳趣味なら、川のりは茶人趣味である

氷川に川のりを採つて、世を送るをやぢがある。彼れの曰く、「日原川の方が澤山採れるのだが、わしは本流ばかりで採つてゐる。同じ川のりでも日原川で採れるのは、不味うていかん。川のりはどの岩にも着くといふ譯ではない。白い綺麗な岩を選んで着くものだよ」と。

「冬は山獵にでも出かけるのかね」ときくと、

「わしは生物の命を奪るのが嫌ひでの、それで川のりを採つて、暮してゐるですわい。」

成る程さう聞けば 彼れの顔には、どこか仙人じみたところがあつた。

三河屋採點表—風景八點、料理九點、氣分九點。

氷川の秋は紅葉黄葉の美があり しめじ 初茸、岩茸など山の珍味を味ふにも好いところである。

前原一誠捕縛物語

岡垣義忠

前原一誠は明治維新革命史を色彩る快傑にして、若くして、久坂高杉と相並んで松陰門下の三俊と稱ひられ、天晴れ明治新政府の大立物と謳はれた西郷、江藤等と等しく、尊王征韓の議を唱道し、皇國の前途座視するに忍びずと、兵を擧げ、事成らずして國賊の汚名を蒙つた不運兒である。只、西郷の如く、江藤の如く、秩序正しい兵備の完を盡した擧兵に比して、烏合の不平士族僅々四百餘と謀り、兵を擧げ、僅に一旬に過ぎぬ戰に破れたが爲めに、史上を飾る程の華やかさを持たない。從つて、彼の擧兵は明治史の一部に、萩の亂として殘るに過ぎず、其の最後も、西郷、江藤等より更に慘々しいものであつた。

明治十年十月二十六日、熊本の神風連と呼號して萩の明倫館に兵を擧げ、戰破れて、一雙の小船に同志六名と海に脱れたが、途中風浪に支えられ、出雲日御崎宇龍海岸の漁夫等に捕縛せらるゝに至つた。今その就縛の際、御用聞として探偵に從つた士江富平の口述を記して、在りし英雄の最後を忍ばんとする者である。

一

「嫌に續いて降りやがるな。」

と私語いて富平は障子を開けた。昨日の朝から降り續いた雨は未だに上ろうともせず、激しい西風に吹き捲くられた海は、恐ろしい音をたて乍ら荒れ狂つて居る。ふと富平は、その雨の中を港口から、一◇の船が、浮き沈み乍ら漕いで來るのを發見けた。

おや、難破船かしらと富平は尚眼を離さずに覗つと其れを見て居ると、船は時々、大きい浪を喰つて潮烟りを立て乍ら、それでも可なり早い速度で、だん／＼と港に入つて來た。さうして丁度港の中央と思はれる權現島の岸に着いたと思ふと、碇を落して止まつてしまつた。

可笑しな船だなと富平は尚も其れを見護つて居たが船は、そのまゝ雨の海の上に繋がれたまゝである。この波に、この雨風の中に、よしや航海中、一時風を避けるため入港したにせよ、渚にも着けず、波の餘り靜かでもない權現島沖に繋いだまゝ動かないのは不思議に違ひなかつた。富平の胸にふと一昨日H縣廳から御達しのあつた山口の脫賊の事が浮んで來た。

「ウム、須佐から船で逃げたと云ふから、殊に依ると其奴等かもしれない。」と富平は思當てると、全身が何とも形容し難い緊張さに漲ぎるやうに覺えた。さうして急いで區會所へ行かうと家を出た。

區會所の福性寺迄はかなり遠い。それよりかつい近い組長の安田の家へ行つた方が手近だと思つたので道を變へて急いだ。綱干場の角に掛かると後から、傘もさゝずに走つて來る男があつた。

「おゝ慶公ぢやねいか、何處へ行くんだ。」

富平は聲を掛けた。

「ウム難破船だ。組長さん家へ知らせに行くんだ。」

慶三郎は走り乍ら答へた。

「ウム、お前は何處で見つけたんだ。」

富平は後から元氣よく云つた。」

「渚でよ、組長さん家へ來ればよくわからあ、」

慶三郎は云ひ殘して宙を飛んで行つた。組長の安田の家では、主人の市郎兵衞と、用係の木村慶右衞門と、組長の阿部忠三郎の三人が將棋をさして居たが、慶三郎の報せに驚ろいて區會所へ行かうと戶口を出掛けて居た。

「安田さん。難波船ですね。」

富平は落付いて云つた。

「富平さんか。又厄介な事になつたよ」

市郎兵衞は、未だ單なる難波船と思つてゐるらしく答へた。

「厄介も厄介、大變な代物が這入つて來たものだ…………宇龍の街も今夜は戰爭がぶつぱじまるかも知れませんで。」

富平は、彼等の愚鈍を嘲笑けるやうに云つた。

「何、戰爭。」

皆は眼を丸くして富平の顏を見つめた。

「さあ、あの船は難波船でもなんでもねえんで。あゝやつて此の雨風の中を上陸もせずに權現島の沖に繋がつて居る處を見ると俺あ一昨日御達しの山口の脫賊だと睨んだですよ。」

「なるほどなあ。其途の人は違はあ……しかし、その山口の脫賊とすらあ、いよ〳〵大變だ。」

慶右衞門は云つた。

「此奴あ、いよ／＼大事になつたぞ。兎も角區會所迄行こふ。富平さんも一緒に來て下さい。」

市郎兵衛は先に立つて歩き出した、皆は後から續いて行つた。

區會所では、戸長の長岡五郎右衛門が住職と茶を飲んで居た。

「長岡さん。大變な事が起つた。」

眞先に這入つて行つた市郎兵衛は云つた。

「何、大變、どうしました。」

「さあ、最前、慶三郎の報せで權現島に難波船が着いたと云ふので皆で此處迄出掛けやうとして居ると、富平さんが來て、どうも、あの船は只船ぢやねい。殊によると一昨日御達のあつた山口の脱賊ぢやないかと云ふのですが。」

「ウムそいつは大變だ。だが皆はどう思ひなさる。」

戸長は、青みがかつた顔を上げて一同を見た。

「富平さんの云はれる樣に、この雨風に上陸もしねえで沖に繋いで居るのは、どうも怪しく思はれますね。」

忠三郎が云つた。

「兎も角、問屋當番を行かせて樣子を見て來らせたら如何でせう」

慶右衛門も云つた。

「さうしやう。慶次郎前御苦勞だが、當番の木村へ行つて來れ、それからな高木どんの家へ行つて直ぐ區會所へ來て下さいと云つてくれ大急ぎでな。」

戸長は慶三郎に命じて

「もし、それで山口の脱賊としたら、すぐ杵築の警察署へ報せなきあならんがね。」

と不安らしく云つた。

「まあ、當番の報せを待つてからにした方がようごはすぜ。餘り騒ぎを大きくすると、彼奴等が悟つてこつそり上陸して逃亡する憂ひがありますし、それに浦中の人を驚かせる事になりませうから。」

と富平は宥める樣に云つて

「もし、いよ／＼さうときまつたら、俺あ又いゝ考もありますから」

と自信あるらしく云つた。

二

問屋當番の木村の代りとして船の樣子を見て來た若者の話によると、船中には、異樣な人物六七人が儼然として居て、上陸を勸めたが應ぜなかつたと云ふので區會所では焼もな

く脫獄であると云ふ事に一決した。

　副戸長の高木儀助は、一名を同伴して杵築警察署に急報すべく二里の道を急いで出掛けた。富平は區會所を出ると其の足で岬近い杢兵衛の船小屋を訪れた。

「杢兵衛さん内かエ。」

　富平は、元氣よく聲を掛けた。

「やあ、富平さんですか。」

　杢兵衛は、大敷網を繕ふ手を休めてニコ〳〵と富平を迎へた

「杢兵衛さん、英い事が起つたぞ。」

　富平は上框に腰をおろし乍ら云つた

「英い事つて。」

「さあ、權現島の沖へ、山口の暴徒が流されて來たのだ。」

「ヘエ。」

「でな、お前に一つ賴みてい事があるんだ。他ぢやねえ。今から一つ船を出して貰らひてえんだ。」

「あの船を。」

「樣子を見て來やうと思ふんだが、ウマク行けば向ふの船に乘込んで充分探ろうと思ふでの……濟まねえが一緒に船を出してくれめいか。」

　富平は落付いて烟草に火を點じた。

「成程、そいちは面白い……だが、その姿ぢやいけまい」

　杢兵衛は網を其處に投げ出して立ち上つた。

「ウム、お前と同じやうに、船頭に化けなきあいけねい。濟まねいがお前の着物を貸してくんねえ。」

「ウン、それがいゝ」

　杢兵衛は押入れから、刺子の胴着を出して富平に與へた。

「直ぐ出掛けるだらう。」

「さうだ」

　富平は借りた胴着を手早く着けると懷から手拭を拔いて頰冠りをした。二人は小屋を出て其處に上げられた小船を押出して海へ出た。

　彼等は、なるべく岩影を漕いで一度港口へ出掛けて改めて入港した船のやうに見せて漸次、怪しい船に近づいて行つた。雨はやうやく小降りになつたが、波は依然として高い。やがて、目的の船の側に着いた。見ると、甚吉の報せの様に六七人の士族らしい男が高聲に話し乍ら、富平等の船を見て居た。

「船頭さん、荷物かへ、客船かへ。」

　富平は聲を掛けた

「客船だ」

　船の艫に立つて居た船頭らしい男が答へた。

「さうかえ。それならお客さんは上陸しなさるかいゝ。此の荒れに、斯んな處に繋いぢや船が損むばかりだ。」

「有難う。だがお客さんは急ぎだで、上陸されないからな。」

「何處まで行くのだ。」

「…………」

「明日もこの荒は凪ぎまいぜ。東風に廻らないと。」

「…………」

「だが上陸せぬなら、そのまゝぢやいけまい。」

と船を寄せて富平はひらりと其の船に飛つた。

「苫を葺いて進ぜやう……何、俺あ、杵築からの歸りだが、この荒に逢つてやつとさで歸つたところよ。もう此處まで歸らあ、家へ歸つたも同じさ。相互だ。遠慮しなさんな……杢兵衛さん、繋いで置いておくれよ。」

と艫方から苫を葺き始めた。一同の中でも、大將らしい大肥た男は、胴の間の中央に横臥して居た。其の横に足を延べて酒徳利をさげてゐた男の、延べた片足が白布に卷かれて居るのを、慧眼な富平は見逃さなかつた。

「船頭、此處は何と申す處ぢや」

舳の方で舟舷に肘を當てゝ、富平の苫を葺くを見て居た男が澁い太い聲で問ふた。

「ヘイ宇龍港と申しますヘイ」

富平は如才なく云つた。

「さやうか、大社の在る處ではなかつたかの。」

「大社で御座いますか。こゝから二里ばかり東の杵築と云ふ所で御座います。」

「ウム左様であつたかのう。一度參詣した事があつたが」

「旦那は御信心で御座いますかねへ…。」

客は默つてしまつた。

「先生、親切な船頭でありますね。」

痩せた黒紋付の男が臥て居る大將らしい男に云つた。

「ウム」

大將は臥ながら答へてじろりと富平を見た。その應揚な落付いた態度に、富平は「此奴、只者ではない」と思つた。舳の方を葺き終つた富平は

「船頭さん、此處は風の當りが強い處だ、俺あが案内するから彼處まで漕いで行きやせう。」

と元氣よく云つて自分の船に歸つた。

「陸へ上げてはならぬぞ」

一番舳の方に居た男が云つた。

「大丈夫……反つて陸から離れますソイ。」

富平は、杢兵衞と漕ぎ初めた。怪しい船の船頭も碇を上げて後から續いた。

「杢兵衞さん、雲上寺下かいゝ」

と富平は小聲で云つた。

「ウム彼處なら、陸から便利がいゝからな。」

杢兵衞も口の中で答へた。船は下綱掛と云ふ風避けのする波の靜かな處に繋かれた。暮れ早い秋の日は、雨のために一層早く暮れて、薄暗が波の上を靜かに包んで來た。

折柄、陸の方では、一勢に大鼓を鳴らし、濱にはどん／＼と火を焚き始めた。

「船頭、大層陸は騷しくなつたやうだが何事だ。」

船の中から黑紋付の大髷にした男が問ふた。

「へイ…………宇龍の秋祭で御座います。」

「あゝそうか。」

客は安心したらしく云つた。宇龍では、戸長等の發案で漁師の為め、祭の太鼓を出して左義囃の行列をなさしめ、濱では、どん／＼火を焚いたのである。

「時に船頭さん、水がなくつて困つて居るが、近くに水はないかしら」

怪しい船の水夫が富平に問ふた。

「お易い御用だ。宇龍の方へ行かないでも、あの岸下を一寸行けばいゝ、此の船に乘らつしやい、俺等が案内しやう。」

富平は氣輕に答へた。

「旦那水汲みに行つて來ますから。」

水夫は黑紋付に恐る／＼云つた。

「一人で行つてはいかぬ。若い奴と一緒に二人で行くがいゝ。」

「へイぢやア二人で出掛けませう。」

二人の水夫は富平等の船に飛び乘つた。富平は、杢兵衞の耳へ口をあてゝ

「いゝか陸へ上つて俺があの若い奴を捕まへるから、お前はあの老人を縛してしもふんだぞ。」

と云つた。杢兵衞は

「ウム。」

と元氣よく答へた。やがて船は、雲上寺の岸下に着いた。夕闇の暗がりの岩傳へに富平は二人の水夫を案内し乍ら岸下の細道へ出た。

「御用だ」

富平の捕繩は手早く若い水夫の首へ掛かつてしまつた。

「手前も御用だ」

杢兵衞は老人の方の手首を把んだ。

「何をするんだ。俺ア何も知らないに。

若い方の水夫は、もがき乍ら云つた。

「默れ。矢釜しい。歩かねいか。」

富平は引きづる様にして歩き出した。

「逃げて見ろ、命ちやねいぞ。」

杢兵衛は滿身の力を籠めて老水夫を引張つた。

區會所に着くと、もう、多くの警官が詰めて物々しい評定をして居た。

「富平さんぢやないか、」

戸長は富平の顔を見ると嬉しさうに云つた。

「此奴二人は、あの船の水夫ですが、水汲みに事寄せて捕まへて來ました。嚴重に調べてやつておくんなさい。」

と富平は、二人の水夫を縄付のまゝ其處に引張出した。

三

翌朝は雨は上つて小春らしい天氣になつたが波は依然と荒れてゐる。警官の應援隊も來て一層緊張して來た。富平は、昨夜、自分が二名の水夫を縛したので、船から一名の帶刀した者が上陸して、其邊を警戒の爲め巡廻して居る者に水夫の行衛を問ふて浦役人の宅へ案内を頼んだが、戸長は通勤者だし、川係は、不在だ、明日上陸にならば案内しますと答へたら、止むを得ず船へ歸つて行つたと云ふ事を聞いて、心から悦んだ。そうして、すぐ署長に會つて自分の謀を打明けた。

「成程、面白い。充分に手配りをして置くからウマク頼む。」

署長は富平の奇謀を感歎し乍ら同意した。富平は昨日の様に漁夫に扮裝して杢兵衛と舟を漕いで行つた。

「旦那方御早う御座います。昨夜、船頭さんが歸つて來なかつたそうで御困りで御座いませう。」

と聲を掛けた。

「おお昨夜の漁夫か。水夫が歸船せないので出帆する譯にもまいらず困却して居る。昨夜お前達と一緒に上陸したのだが如何したものだらう。」

「丁度左議長の噂で人群みの内で見失ひましたが……旦那、殊に依ると、何處か隱れて居りますかも知れませんぜ。」

富平は眞實らしく云つた。

「浦役人は出仕して居るかどうぢや。」

「へいもう出て居ります」

「さやうか……では横山氏、一ッ掛け合つて來て貰ひたい」

痩せた黒紋付の男が後をむいて云つた。

「では行つてまひりませう。水夫、案内を頼む」
と舳の方から帯刀した眼光の鋭い男が立ち上つて富平の舟に乘り移つた。富平はすぐ此の男が、昨夜、大社の事を聞いた男である事を知つた。今一人、その從僕らしい男も乘移つた。
「ぢや頼む。」
横山と云はれた男は應暢に船の中央に腰をおろした。
「さあ、杢兵衛さん漕いだ。」
「合點だ」
二人は漕ぎ始めた。朝霧のなかに元氣のいゝ櫓の音をたて乍ら船は間もなく濱に着いた。
「浦役人の詰所は遠いか。」
濱に上ると横山は尋ねた。
「區會所は一丁ばかりで御座います。」
「うむさようか。」
富平は眞先に歩いて行つた。區會所の入口にかゝると
「旦那をお連れ申しました。」
と態と大きな聲で云つた。
「あゝ富平さんか、御苦勞だつたね」
と小使の小男は出て、奥座敷へ案内した、用係はやがて出て來た。

「之れは、早朝より、罷越して迷惑で御座るのう。」
横山は應暢に挨拶した。
「この大荒に御航海さぞ御難儀で御座いませう。」
と用係は云ひ乍ら、膝の前の火鉢に手をかざして
「小使、小使　火を……」
と小使を呼んだ。「ハイ」と答へて、小使は、火鉢を持つて出たが、いきなり、其の手の火鉢を横山の眉間を目掛けて打ち付けた。
「御用、御用だッ」
襖の陰から五六人どや〳〵と警官が表はれて横山を取り圍んだ。
「何をするのだ。汝等に亂暴する者ではない。」
と叱呼し乍ら、横山は灰烟りの中に拔刀して見構へた。
「神妙にしろ。」
富平は其の背後から捕繩を掛けた。從僕も警官の爲めに縛せられてしまつた。
「それ輿を」
富平は叫んだ。すぐ用意の輿が門口に置かれた。
「ウム、貴樣は御用間であつたのか」
横山は縛せられたまゝ、口惜しさうに富平を顧みた

「旦那、濟みませんでしたなあ。」

富平はにやりと笑ひ乍ら、尻目にして、門口を出た。

横山等は直ぐ輿に乘せられて間道傳ひに松江に押送せられた。彼は、山口第二十區の區長で威望近郷に振つた者で一誠の片腕となるべき驍將であつた。

區會所を出た富平は、直ぐ濱に出て半兵衞と共に又船を漕いで行つた。

「只今御上陸の旦那は、何れに御出になつたか見失ひました。今御一人御上陸になりましては。」

と勸めた。

「見失つたと申すのかハ………もう上陸しなくてもいゝ。」

黑紋付の男は斯う云つて側の大將らしい男に盃を渡した。船中では一同酒を始めてゐる最中で、舳の方では、絹縮の半天を被つて居る若い男は、いゝ聲で詩を吟じて居た。

「水夫、酒があるなら買つてとらす。一斗でも二斗でも持來せい。」

薩摩絣の好男子が充血した目を上げて云つた。

「ヘイ、ちや酒を以つて出直して來ます。」

富平は斯う云つて船を戻した。濱へ上ると、直ぐ詰所へ急いだ。其處では署長を初め警官の係多が、一味の捕縛に就いて評議して居た。

「署長さん、もう船の奴等は上陸しないかも知れませんぜ。皆酒を飮んで歌を唄つて居て一向相手にならない處を見ると。」

富平は、皆に今再び船へ行つて見た樣子を語つた終りに斯うつけ加へた。

「どうでせう。一層のこと、彼奴等を勸めて出帆させ、港口で船をひつくり覆して、溺れる處を捕縛しちや」

「さあ、それは容易のやうだが、水中の捕縛は、陸上より倚難しからうで………夫に明日になれば、縣廳から役人も來る事になつて居るから、まあ明日まで待たうか。」

署長は富平に氣の毒さうに云つた。

「明日まで待つて彼等がこつそり上陸しちや何もならんですがね。」

富平は、つまらなさうに、斯う云つて、立つて窓の方へ歩むで行つた。開かれた窓からは折柄の日に照らされてゐる洪上寺下に繫がれた賊船を、口惜しさうに眺めた。

四

翌日五日の午後三時過ぎ、且つて前原と松陰の塾に共に學んだ島根縣廳中局の清水清太郎が數名の警官を隨へて來着した。

さうして清水は一通の書を認めて富平に持たせて船に屆けさせた。

「旦那、松江の縣廳から役人が來られて、之れを前原と云ふ旦那に上げて吳れとの事で御座います。」

と富平は、舳の方の絹綺の絆天の男に渡した。

「先生、清水清太郎からの書狀と申します。」

絹綺は、大將に斯う云ひ乍ら差出した。

「ウム清水からか。」

大將は落付いた態度で徐に其の書を讀み初めた。富平は、自分が想像に違はず、あれが首領の前原一誠であつたのかと感歎し乍ら見て居た。讀み終つた前原は、夫れを隣りに座して居た痩せた男に手渡して、

「奥平氏、兎も角、貴殿、上陸して清水に逢つて來て貰ひたい。」

と云つた。

「承知しました。」

と奥平は、清水の書に目を通し乍ら云つた。前原はすぐ矢立の筆を出して返書を認めた。

「水夫、御苦勞だ。吾輩を陸へ送つて吳れ。」

奥平は腰に刀を佩し乍ら云つた。

「ヘイ承知致しました。」

奥平は前原の書を受けてすぐ富平の船に乘つた。

清水等の旅館藤村仁之助へ奥平を案内すると、清水は、最前より待兼ねてゐた處であつた。

「やあ、之れは奥平殿か。」

清水は先づ聲を掛けた。

「之れは清水殿か、御役目大儀で御座るのう。」

挨拶が濟むと奥平は前原の返書を差出した。

華香拜讀仕候平生久要の心を不忘深銘心肝候今日の情態實不忍候親故に闕下に諫死の決心に候處風波に阻まれ發露此に至る萬事付天命捕縛相就候處不計得足下書萬死中に得一生心事萬端不盡筆紙幸御賁臨相成候得者區々の心情可致縷述候間乍憚暫次にて御來臨首祈余は拜眉の上萬縷

明治九年十一月五日

一誠　頓首拜

清水清太郎殿

讀み終ツて清涙を拭いた。

「先生は船中で餘程御疲勞で御座ろうな。」

「左樣風雨中の航海に船中の者等しく、疲勞致して御座る。」

奥平は答へた。

「事此處に至り申した。奥平殿、尙先生を船中に置くに忍ばな

い事だ貴殿須自分の上、更ら何卒上陸に御なめ下されい。清水に誓つて囚徒扱は致さぬから。」

清水は威儀を正して云つた。

「ウム、然らば直に歸船して其由申傳へるで御座る。」

奥平は直に暇をつげて歸船した。

夕刻富平が案内で前原等は一同打揃ふて上陸した。清水は濱に出て之れを迎へた。さうして旅館に入らしめ休浴せしめ、饗應を盡して懇談した。

一行は、前原一誠、奥平謙助、山田頴太郎、佐世一精、馬木本行の五名であつた。前原は軀幹肥大、容貌魁偉、顔面薄痘痕あり、前の參議兵部大輔としての貫禄を備へて居た。身には紺縞の袷を着し博多帶を絞め羽織は着せずに居た。奥平は稍痩形の色淺黒く容貌峻嚴、言語明晰な人で、身に木綿縞の袷を着け、同じ羽織を着けて居た。山田は年齢三十四五、脚部に銃傷を受け、顔色稍蒼白を帶び越後紬の袷を血染にして居た。佐世は二十七八歳の好男子、腕に微傷を負つて居た。山田と共に前原の義弟である。馬木は二十歳前後の色白の美少年、紺縞の絆天を被つて居た。

翌朝になつて、愈々彼等五名は松江監獄に押送される事になつた。前原と奥平は旅館の主人の乞を入れて紀念の詩歌を書き残した。

馬をさして鹿と云ふてふ世の中にわが
まごころは神ぞ知るらめ　誠

事既至斯無可傷　天之利也復奚疑
於今一死無遺憾　恰乃神洲未憾時
源　居正

門に待つ輿に乗らむとした前原はふと警戒の警官の中に漁夫姿の富平を見つけた。

「おゝ、お前は御用聞きであつたさうなの、船に來て苫を葺いて現れた時から怪しい男と睨んで居たが、立派な度胸だ。」

と微笑し乍ら聲を掛けた。

「旦那は偉い御方で御座いますさうで、御氣毒で御座居ましたなあ。」

富平も思はず眼が涙に濕むを覺へた。

「さあ出掛けやう。」

五丁の輿は警官の幾人に守れて門を出て行つた。晩秋の晴れゆく落葉の山路に、馬木らしい朗々たる詩吟の聲と共に次第に遠く消えて行くを、いつまでもいつまでも富平はその潤んだ眼で見送つて居た。

完

婦人公論

秋季特別號

十月一日發行

(現代を象徴する『金』の本體の研究)

『金』號

(人生を支配する『金』の魔力の解剖)

定價一圓　送料三錢

美術季の言葉

今の畫壇

森田恒友

今の畫界は亂れて居ると一と口に言ふ人がある。觀ようによつては確かにそうである。日本自からもそうであり、世界的にも、其代表國と目される佛蘭西の畫界に就いて見てもそういふことが言へるかと思ふ。

だが、之れは單に亂れて居ると見べきかどうか、亂れて居るとすればどういふ風に亂れて居るか、之れは今の畫壇を注視する人の感じ方、考へ方の問題でもあつて、一概には言はれぬことかと思ふ。

一と口に亂れて居るといふ譯には行かぬが、而し今の畫界には、たしかに混沌たる潮流が幾つか流れて居ると見ることは出來る。外國のことは兎も角、今日本の畫壇の中にもそういふ潮流があつて、それが此の五六年來美術季の展覽會毎に目立つものにもなつて居る。現在日本の畫壇の洋畫の方にも日本畫の方にもそれがある。

特に日本畫界に現著にそれがあるといふものは、今の青年日本畫家の心には、製作上の要求が傳統的に流派の中に安んじて居ることが出來ず、新らしい表現を要求する心が切になつて來たことから、自然いろ〳〵な表現が生れて來て居ると見るべきで、斯ういふ要求心の發生には時代といふものが根本に在り、明治から大正に渉つての畫家の仕事が、自づから徳川期のものと表現方を異にするようになるのは自然の勢と見ねばならぬ。

畫心といふものは古今東西を通じて動かし難いもの、作品は多

違に作品であるのだけれど、表現にはどうしても時代によつて多少の相違を來すことは免れ難い。

假令ば京都の鐵齋翁は稀な長壽を保つて今猶盛んに畫筆を採つて居り、翁の畫心は尊ぶべきものであるに相違ないが、今の青年畫家の多くが、翁の如き表現其まゝに滿足するかどうか、恐らく現在青年畫家の多くは、翁の畫心を尊ぶにしろ、翁の技を踏襲しようとはせぬかと思ふ。日本畫が藝術的に表現方が開放された時代として、さまざまな形が生れるのも自然の現象とせねばなるまい。

現在日本畫界の青年作家の作物には、洋畫的表現の顯著なものが隨分あり、中には斯ういふ表現に何故油繪具を彩らぬかと思はれるものも可成ある。そういふ日本畫表現の考量を無視したもの、日本畫の傳統精神を放棄したものに賛することは出來ないが、ひそかに私はこれを時代的現象として止むを得ぬものと見て居り又其中に成長する力のあることをも認めて居る一人である。現在のところ、日本畫の材料と、それ等の人々の自然觀とは喰ひ違ひがあり、それが表現上にしつくり行かないのだと見るからで、自然觀と材料とがこなれ合ひ、歩み合へば、こだわつて居るものが去り、さつぱりと出て來る一つのものがあると思つて居る。猶自由な自己の自然觀に從つて、自由な材料を採るべきだと思ふ私の信念からしても、今の畫壇を單に亂れてとはしない。寧ろ私は稀な興味ある時でないかとも思つて居る。

古い鑑賞家は今の畫界の自由さを亂れて居るとしても、新しい鑑賞家にとつては、隨分自由な時だと思ふ。あまりに自由が來たものだから作家にも踏みはづしもあり、鑑賞家にも眼違ひのこともあらう。唯藝術の核心に眞率に觸れ得る人が、作家も鑑賞家も幸するとしたい。

現代の佛蘭西繪畫が、デルスニスといふ人の手によつて、二三年續けて今年も日本に來たし、又二科會では二三の佛人を會員に加へて、その人等の作も今秋の上野に展ぜられた。斯ういふことが回を重ぬるに從つて、我畫界に始めほどの刺戟もなくなり、佛蘭西畫壇を無上のものにのみ考へた我畫壇の一部も、段々自分の國の美術に就いて考へて來、洋畫家中には存外日本の古美術を考へるようにもなつて來た。現代佛蘭西畫家の多くの作に現はれて來た簡約の味ひと、古來日本の美術に現はれて來た簡約味とを比較して見ると自づから微笑されるものもあり、兎も角彼我の歩みよりは新畫界の興味にもなり、利益にもなりつゝある。本場の洋畫が日本に歩み寄り、こつちの日本畫が洋畫的表現を採るのを、今はよいとも惡いともせず、唯此の趨勢が反つて自覺を早く來すと見てよいかと思ふ。

回顧と瞻望

文學博士　笹川臨風

火たるの猛り荒びたる日は、美術の秋に魁する院展二科展の招待日で、其夕は二科會の饗宴が催されるのであつた。文展に先ちて開會すると云ふ戰術は、院展婆目の展を開いたので、院展、二科展ともに九月朔日に蓋開けするを吉例とする。固より會場の都合もあるが、試に涼秋十月帝展と時を同うして、開會して見たところで、以前のやうな見慘めな目に逢ふことはあるまい。然し初物賞玩の意味から九月匆々の開會は、美術季の幕開きとして、人氣を呼んでゐる。さて客秋の招待日に於ける大地震動には少からず驚かされたが、あのやうな大事變にならうとは露知らず、一兩日も過ぎたら、再び開會するだらうなどと思つたのは、全くの空頼めで、二日二夜の大火災に、上野は人の山を築いて、山下の猛火は山上の一角をさへ舐めた。若し此の大凶變が一昨年の秋に起つたとすれば、平和博の殘骸がまだ累々として存在してゐたから、東叡山全部は火焔の包む所となりて、展覽會は勿論、音樂學校、美術學校、博物館、圖書館を焦土となして、谷中、日暮里、根津、駒込、巣鴨まで一望の燒野原となり、復興の足場となるべき山の手まで同じ災禍に罹つたであらう。不忍池の水は池の端の火勢を頓挫して、根津、谷中への延燒を喰止め、上野は避難民の蝟集する所となつて、一時の安全を得せしめたのみならず山内にある學藝の府庫は皆完きを得、貧弱ながらも秋の美術季を飾る唯一の竹の臺陳列場なるものも、美術展覽會が開かれるべきものであらうか、幸に燒火から免れたのである。然し何年後に果して各種公私の建災後の當時に於て、今秋の美術季を豫想したものが一個何人あつたであらう。絶望落膽の聲は到る處に聞えてゐたのである。

然るに一年後の今日美術展の開催を見るに至つたのは、帝京復興の氣象旺然たる其賜物に外ならない。實にや帝都の復興氣運は目覺しいものである。市民の風俗に就いて、彼是れ非難の

矢を放つものもあるが、洗ひざらしの浴衣に襷がけで、都腰卷に手拭の姉さん冠りをした震災風俗から震災前の風俗に還らんとする處に復興の氣運が搖曳してゐるではないか。悄氣ず、へこたれてず、意氣銷沈せざるところに何とも云へぬ賴もしさがあるではないか。斯くして、例年の美術季は震災當時の秋を除いただけで、連續して上野の秋を飾ることゝなつた。是れ獨り美術家の幸のみならず、一般民衆に取りても祝福すべきことである。

震災が民衆心理に及ぼした影響は多々あるが、其中に人心の荒び切つたことを否むわけにはゆかぬ。夫妻相離れ、親子兄弟相失ひたるもの、家を燒き家財を亡へるものが、どうして心の平衡を保つことを得よう。さなくとも無人の野を行くが如き火災に脅かされ、連日連夜不斷の餘震に神經を尖がらせ、咖率天より奈落に急轉直下したやうに感じた罹災地民衆の心が落寞となり、荒びて行くのは當然である。娛樂機關の恢復、趣味設備の必要は目前に迫つてゐる。此際に當りて美術季に於ける展覽會は燒野原の花園である。復興第一年の美術季であるから、美術家諸君の意氣も亦當然旺盛でなくてはならぬ。

震火災で滅亡した藝術品の多數なるを憶ふと、藝術の生命は永遠なりてふ成語を疑はざるを得ない。應仁の大亂には洛中洛外の目星しい建築物は宮殿第宅社寺と云はず兵燹の燒く所となつた。何等の記錄もないが、藝術品の燒け亡んだものはどれほどあつたらう。今日偶々存するものは、云はば燼餘の極めて少數であらう。其姓名の靑史に留りて的確の作品の傳はらないものは少しとせぬが其中には應仁大亂まで儼として存在したものもあつたらう。又今日優秀なる作品として渴仰し置かない其以外に猶それ以上に優れたものも多かつたであらう。然し此等は永遠に藝術史の上に痕跡を止めぬのである。江戸時代に入りて、江戸には大火が極めて多くあつた。明曆三年に於ける本鄕丸山の出火、天和二年に於ける駒込大圓寺の出火、安永元年に於ける目黑行人坂の火事、文化三年に於ける芝車町の火事、文政十二年及天保五年兩度の神田佐久間町の火事等は諸侯伯の邸宅を初めとして、幾萬の民舍を燒いゐる。此等の際にも燒亡したる藝術品の目錄は少しも傳はつてゐないが、定めし其の多くを亡失したことであらうと思はれる。紀文と相並んで江戸の遊蕩史を飾つた奈良茂家にも相當の名器古書を傳襲してゐたので、其品目は譜產目錄に載つてゐる。然るに此等の名器古書は擧げて文政十二年の大火に烏有と歸したのであつた。他の諸家に於ても亦同樣に池魚の殃に遭ひて家寶を燒いたことの多かりしは推して知るべきである。必ずしも古きを溫ぬるを用ひない。今次の震

火災に焼けた藝術品の正確なる目録は詳かでなく、又細大漏さず之を傳へんことは不可能であらうが、我等の調査したところでは、世間に喧傳するが如きも僅々其一端に過ぎず、事實は驚くべき多數である固より一々現物に就いて綿密に鑑査したのではないから崑山の火と同様、玉石倶に焚けたことはあつたであらう。然し名品の燒亡したものの夥多であり、度々の火災に焼け殘つたものが無殘に亡び行つたことを思ふと、藝術の生命も亦決して永遠でないことをつくぐ〵長大息せざるを得ない。

典籍の如き、版畫の如き、當時に於ては相當多數世間に公けにされたものすら、全く失はれて其影を留めぬものが少からずある。人間の大事業として史上に其名を殘してゐるもので、現存せぬものも多々ある。所詮はか弱い人間の仕事であるから、時の流轉と大自然の破壞との前には頗る無力と云はねばならぬ。藝術も亦其御多分に漏れぬ。然し果して金剛不壞のものが宇宙間に存するであらうか。畢竟するに壽命の長短こそあるが、いづれは破壞さるべきものであると悟つて見ると、獨り藝術の永遠性を缺くのみを嘆ずるにも及ぶまい。まして作品は失はれても、其作に依りて起つた波紋の大きなものは少くないのである。

失はれた作品の中には作家が寧ろ其の亡んだのを喜ぶのもあらうが、心血の凝つた名作品の永遠に人間界より去つたのも少くない。所藏者はとかくに之を公開することを好まない風があつて、其名の聞えて之を知る人の稀れなのもあるし、名さへ傳はらないで暗の中に葬られたものもある。此等の優秀なものを一堂に聚めるのは鑑賞家の爲に甚だ便利であるが、一堂に聚めたが爲に擧げて悉く之を烏有に歸すると云ふ禍もある。散在してゐたならば、其の或ものは殘存すべきに、一所に蒐藏したために、帝大に於ける稀覯の珍籍は滅亡してしまつた。斯うなると一所に纏めるのがよいか、諸方に散在させ置くのがよいか、一寸分らなくなる。それはとにかく蒐集家は宜しく門外不出と秘藏することなく、隨時公開して洽く鑑賞家の清賞に供すべきである。名作の光は斯くして發揚せられる。然し所藏家の或ものは鑑賞家のとやかくけちをつけたがるを厭ふものが少からずある。けれどそは餘りに狭量と云はねばならぬ。弘く世上具眼の士の鑑識に任せて珠玉と魚眼との別を明にして置くべきが當然ではないか。秘鑰のかゝつた奥深い藏の中に埋もれて燒け亡びた名品の爲には永へに痛恨の思を禁じ得ぬ。

抱一、是眞、容齋の如き近代畫家の作品は其大部分を失つた。浮世繪畫家の肉筆及版畫も下町の全燒とともに多量に燒け亡せ

た。雅邦、長章の如き明治以後の巨匠の畫も相當に描けたらしい。現代畫家の作品にも滅亡したものは多いであらう。其うち惜むべきものもあらうが、又惜むに足らぬものも少からずあらう。景氣の好い時分に、唯わけもなく投機的に市價の釣り上つたために、現代畫家の作品も隨分市中に散在してゐたから、此等は一炬に附せられた筈である。

一時の景氣におだてられたり、逆上せたりした現代畫家も、不景氣來とともに急に其元氣を失つた。其不景氣の擧句に震火災の突發であつたから、美術界の悲況を豫想したのも無理はない。然し實の所を云へば、美術界も亦既に甚しく行詰つてゐて、何等かの方法を以て轉回せねばならなかつたのである。

轉回すべき必要に迫られてゐるからとて、行詰つた美術界が震火災に當面して轉回し得らるゝと考へたなら、それは餘りに買被り過ぎてゐる。沮喪した意氣を恢復して復興に向はうとはするだらうが、此場合に於ける復興は多く復舊で、新氣運を作るものではない。

纎弱な神經質な藝術にはもう飽き〱してゐる。まやかしものゝ、胡麻化し藝術からは不快な感情以外に、絶えて何等の感興を惹き起さぬ。中には研究心の滿ち滿ちた、藝術的良心に富んだ、其進路も正當な藝術家のないではないか、相當の頭があつて、腕の不相當な、相當の腕があつて、頭の不相當なのを少くせぬ。畫の題材を摑むことの出來ぬ、摑んでもこなし切れぬものすら多い。美術界は盛境のやうで、實は實に於て頗る貧弱な感がある。

今の畫人が古人の名畫を評するのを聞くに、此くらゐの畫なら描けさうなと云ふことを善く唱へてゐる。臨模なら誰でもやれる。換骨奪胎なら小手の利いたものは能くする。技巧は善くすべし、しかも果して其畫の精神を理解し得たかと反問したい。それだけの氣品を備へ得るかと尋ねてみたい。腹の出來た古人と腹の出來ない今人とを比較すれば 此の質問に對する答へは容易である。臆面もなく古名品を批評してのけるところに彼等の肚裏空虛なるを覺えるのである。滿幅に紅紫を糊塗して寸落の餘韻を留めざる畫に對しては次第に興味を失つて來る。心凝り形釋けて畫と冥合する境に到るものは果して幾何あらうか。

小我を以て何物をも觀、何物をも釋き、何物をも描かんとしてゐる。獨り主觀的小我のみならで、客觀的小我を表現して、此を以て大自然の神髓、森羅萬象の眞諦を捉へ得たとしてゐる。及ばざること抑も亦遠いかな。

古人の糟粕を嘗めるを屑しとせざるは大に可とすべきである

が、今人の糟を食ひ滓を啜るもの、西人の後塵を拜するもの比々皆然りである。斯くして獨創の天地は果して何處に求むべきであらうか。

南畫家の南畫には殆んど進捗の餘地がない。徒に依りて葫蘆を畫くもの累々として算を亂してゐるが、新南畫は起らねばならず、南畫の手法は新人に依りて措撥されねばならないのである。新南畫提唱以來十年にして、其氣運に向つて來たのは、甚だ多とせねばならない。然し南畫に於て學ぶべきは、其手法、溌墨ばかりではない。氣韻の流露精神の表現は其の最も大切なものであつた。此か爲には南畫の源泉に遡るを善しとする。斯くして古南畫から汲み取つた韻致手法は新しく試みられた畫中に調理せられて、必ずや清新の香と味とを將來するであらう。

版畫に於ける色彩の諧調も參酌工夫したならば必ず餘師があらう。西畫に其の影響はあるが、日本畫に之を見ないのは、版畫に對する輕蔑が然らしめたのであらう。此場合に於て其の版畫は初板の初摺りのものでなくてはならぬ。尤も中には北齋の富士三十六景の中、凱風快晴の如き、後板にて却つて初板以外の面白味を見せたものもないではないが、概するに、初板と後板との間には著しいけぢめがある。摺に於ても亦同樣である。版畫に於ける藝術的功果を知らうとするには、是非とも初板と初摺とに依らねばならない。

佛蘭西美術の展觀を見て、直に感ずるのは、油畫其を自由自在に柔かにこなして、極めて明快な色を出してゐることである。此の明るい感じは、色彩を取り扱ふ畫家に於て最も注意すべきことである。當然明快な色を出すべきところに、くすんだ陰鬱な色を出して、功果を減殺するものが、往々にしてある。外國美術から學ぶべき、之も其の一つであらう。

以上擧ぐる所は偶々其二三の例を抽出したに過ぎず、又專ら日本畫に就てのみ云々したのである、行詰つた藝術の爲に、進路を開くべき手段は多々あらう。然し少年高科に登るものは多いが、高才逸足に至りては寥々として殆んど聞えない。東西兩京の畫壇を見渡したところで、新進の俊髦と目すべきもの果して幾人あらうか。帝國美術院の委員の顔觸を見るとき、頗る寂寥の感に絶えぬ。

復興の帝都は果して區劃整理を斷行して、理想の大東京市を現出し得るに至るべきか、蓋し疑問である。震火災直後に區劃整理案を施行したならば事は極めて容易であつたらう。然し後藤子の大風呂敷なる十五億圓五年計畫案は不幸にして先づ提出せられ、之に次ぐに衆議會の如き無用有害の制度が置かれ、前軛後轄して、風呂敷は次第に縮小することゝなり、徐々實行

期に移るに及んでは燒跡の地價既に昂騰して震災前以上になつてゐる。是に於て區劃整理の困難は少々ならぬことゝ思はれる。

江戸は開府以來常に殖民地の如き觀があつて、三百年の間も、明治大正の間も依然として殖民地觀であつた。江戸時代の大火後にも區劃整理の件はぬではなかつたが、殖民地狀態から脱却することは出來なかつた。若し殖民地觀から離れて井然たる都會となり得べき時があるとすれば、今を措いて、他に求むべき機會はない。然し果して、相當に滿足し得られるやうな新東京が現出するであらうか。

よし相當の新東京が現出するにもせよ、極めて殺風景な無趣味な都會であつてはならぬ。舊東京が非藝術の都會であつたことには少からず遺憾を感じてゐた。大川に架する鐵橋を見ても市内に散在する公園を見ても、名園の破壞を見ても、建築物の沒趣味を見ても、到る處に非藝術の空氣は漲つてゐた。新東京は藝術的に建築されねばならない。獨り之を施設者と技術家とのみに委ぬべきでなくして、藝術家はよろしく之に參加すべきである。藝術家自身が參加せずとも、藝術に理解あるものが參加すべきである。

否寧ろ藝術家の參加は帝展に於ける役員問題に付いて見ても

明治神宮寶物殿の壁畫に關して考へても甚だ煩に堪へぬ。美術界に於ける大御所黒田淸輝子の歿後は、洋畫界の分野すら混沌としてゐて、勢力の歸着する所を知らない。多智なる和田英作君は其一方に割據し得るも、全體を統帥することは難い。岡田三郎助君の溫厚長者の風ありて、敵なきは、或は一時主帥と仰がれるやも知れねど實力ありて、輿望を負ふのは、どうしても藤島武二君であらう。彫塑界に於ける朝倉文夫君は美術界切つての大親分で、唯に彫塑界の第一人者のみでなく、正に美術界に於ける第一人者であらう。黒田子の後繼者は西洋畫になく、日本畫になくして、彫塑界にありと云ひ得られよう。日本畫に在りては、偏狹に非ずんばお山の大將、一會一團體すら纏め兼ぬるのが多いのであるから、彼是れ云ふだけ野暮であらう。之を要するに銘々得手勝手の美術家をして都市計畫に參加させたところが、議論倒れで益はない。然し美術に理解あるものゝ參加と、美術家の意見發表とは新東京の現出に於て、蓋し大に得るものがあらうと信ずる。

美術季のことば

駒籠閑人

院展を見てから、二科展に入ると、雰圍氣が違う。院展にはブルジョアの氣分があり、二科展はプロレタリヤの氣分がある。

去年、大震災の當日は、招待日であつた。わたくしどもは、院展を見て二科展に入つて、食堂で、午餐の中途で大地震に面した。あの組み合はせた天井の桁が、掻きまはすように搖れた光景、食堂に一ぱいにひろがつてゐた人々が蜘蛛の子を散らすよりも遙かに逃げ出した後姿、佛蘭西から來た多くの畫や、彫像が倒れたり、裏がへしになつて壁に掛つてゐたこと、まざまざと眼前に見えるようだ。今年も、同じような時刻に、二科展の食堂に入つて、去年の思出に耽つた。

院展と二科展とが、同日に開會するのは、いろいろの方面から見て、好い對照だ。

震災後の一年間は、或意味に於て、美術家が大分、海外に發展した。貿易は著るしく輸入超過であるに反して、美術家ばかりは緊張の態度を以て海外に出て行つた。生活を見つめた緊張は、どれだけの傑作を產んだかは、一つの問題でなければならぬ。

石井柏亭、吉田博、丸山晩霞等の諸君は歐米及び南洋の方面に向ひ、太平洋畫會の展覽會も、始めて滿洲で開催された。支那と聯合での、中日美術展覽會は北京の春を賑はした。滿洲の新美術に對する趣味は擡頭して來たようだ。北京の展覽會では、わたくしも、その頃、てうど、漫遊中であつたが、試みに支那側の畫家の感想を聞くと、山水風景は中華勝さり、西畫は日本勝さつてゐると言つてゐた。

●

柏亭君の白頭は一つの名物だ。未醒君は著るしく瘠せた

に依つて紅顔、少年の如きは有難代だ。

若くして大名を成すものは、現代では美術家ばかりだ。帝展の出品者に、鑑別をうけねばならぬ人々の中には、四十代といふは、殆んど稀だ。加藤首相は清浦さんより十ほど年下だが、閣員の平均年齢は六十ばかりで、却つて前内閣よりも古くなつた。帝展の審査員は、三十三四からの人々がゐる。審査する方が若いくらゐになつた。憲法發布以前の日本の名士が皆若かつたときの氣分は、今では美術界ばかりに見られる。

學士院の人々と、美術院の人々とを對照すると、美術家の方が、ずつと若い。もつとも美術家にも高村光雲君の如き七十五歳の老大家もゐる。役者の松助と、略ぼ年齢が近かい。松助の聲名は隨分、長いではないか。名優だ。今の調子なら、ロダンの年までくらゐは、その聲價を維持するだろう。松助は、實際に、檜舞臺に立つてうでを見せるのだから偉らい。

美術界の老大家といへば、刀工にして帝室技藝員たる宮本包則翁は今年九十六。實に松方公以上だ。古今極めて稀な長壽の美術家だ。もつとも近年に於ける頭腦明晰の程度は松方公に及ばないやうだが、元氣はある。耳が遠いので話しにくい。何不自由のない舊家に生れて、少年の時から刀が好き、天國の刀を見て、刀工になりたくて溜まらず、親が許さないので脫奔して備前の長船に入門したのが始まりだつた。鈴□□君にたゐなら、初から刀工にはならないと言つてゐる。去年の八月まではとにかく毎日、刀をうつてゐた。老來、健啖衰へず、軍談と水蜜桃とが好物、それで水蜜桃を自分の庭に栽ゑて、果實を樂しんでゐる。健啖が、暑中でも、さわらないのを見ると、その體質の強剛が想ひやられる。伎巧よりも、意氣の人だ。

●

光雲翁は、學校の先生としても、その外、萬事、是々非々の白紙主義で押通す、融通の利く人だ。大臣にでもなれる人だつたらうと、その道では言つてゐるものもある。赤い鳥に籠城してゐる鈴木三重吉君も、その類だ。世事にかけても能く切れる、喇叭を吹かせてもうまい、馬に乘つてもうまい。八方に融通が利く。

高村光太郎君は、餘りに澤山書いたから、製作を見せるのに躊躇するに至つた。政見を多く發表した政治家は、實際に當ると、世評は、ともかくとして、自分でも逡巡して、腕のさゑが見られない。尾崎、犬養のやうになつて仕舞ふ。光太郎君は、犬養のやうに老ゐ込んでしまわないうちに、思ひ切つて、製作を、どし〳〵出すが可い。

柏亭君は、鷲湖を祖父とし、鼎湖を父とし、三代續いての

畫家だ。むかしの繪所時代は別として、此の意味では、むかしから珍づらしい。先年、父と祖父との年忌の記念に、自著、配布した皆湖及び鼎湖の本に據つて見ると、彼が、畫風と、事務の才と、兩方ともに輸通が利いて、そして始末の好い堅い、あたりの好い性格が、その遺傳に本づくことが想像される。わたくしは、こういふやうな意味の著書は、千部の供養にもまさると思ふ。こういふ風に、美術家諸君も、その家系、遺傳の研究に資すべき記念の書物を出すが可い。

●

東海道、松田驛から奥の、有名な大雄山、最乘寺といふよりも、道了權現のお寺、その道了さんのお堂は、全部が素晴らしい見事な彫刻を以て造り上げてある。「彫總」といふ名で、この無名の大家がお寺に記念されてゐるが、小倉惣次郎氏の祖父だといふことだ。

藝術家の研究は、その血統、遺傳に關する點が興味があり、そして、その點が、これまでの美術史や、美術家の傳記には、まだよく研究されてゐない。

●

露西亞探偵物語といふ明治の終頃に出たる探偵本がある。その插繪を森田恒友君が描いてゐるが、近來の、彼の畫風と較べて興味のあるものだ。

藤井浩祐君の話には、ことに、その說どさが現はれて、聞いてゐるうちに、ひとりで微笑まれる。山本鼎君の話は、呼吸がうまい、獨語に巧みだ。谷崎潤一郎君の小說のような氣分がある。二人の藝術氣分が、共に、よくその話にあらはれてゐる。

先年、阪本繁次郎君の原稿を見たことがあつたが、全篇、劈頭から結尾まで、一つの句切りがない、隨分、珍づらしいものだ。外國には、こんな文章はあるまい。

先日、朝倉文夫君の舊友に逢つたら、彼が少年時代から、非常に器用な人で、殊に左利きで、中學では擊劍の選手、そして左手の横面が得意だつたそうだが、彼が出世作を思ひ出すと、如何にも、彼の器用さが首肯される。

●

黑田子歿後の洋畫界は、とにかく統一を失なつた。世間早くも、太平洋畫會の擡頭を傳へるが、これまた何人をして首領たらしむべきやは問題である。黑田子が、晩年、研究會の爲めに奔走したのは惜しむべきことだつた。藝術家は藝術を見つめてゐれば可い。世間を見つめると、あのようなことになる。よく行つても作食大臣以上にはなれない。この以後、畫壇の牛耳を執る人は、美術界の大御所で滿足しなければならぬ。もつと早[illegible]も、始終、畫をかく氣はあつたそうだが、捨てたのではな[illegible]

たが、とう〳〵できなかつた。

藝術や、文章は教師になると、いつの間にか鈍くなる。教師には門から、その人がある。美術學校の教授に、第一流の作家を網羅することは考へものだらう。

少年の食物

木村荘八

私は初めて繪を見たのは何が最初か、一寸おぼへてゐません。多分好んで見たのはポンチ繪だつたらうと思ひます。窓から乞食が變わらで室内の人の飮みものを飮む繪だとか、團十郎が尻に帆をかけて大阪へ行く？　繪などおぼへてゐます。先是、私の家の二階の廣間には大きな墨繪の龍を描いた額（三間幅位ひのもの）がありましたが、好きではありませんでした。私の室には何にも額はありませんでしたが、兄キの室へ行くと、そこのはいつてふり向いた上の壁のところには――あれは如何云ふ性質のものだつたらう？　何しろ石版畫には相違ない。或ひは當時の市會議員の像かも知れぬ？、さう云ふ、澤山に人のゐる、それが各々小判形の中にベタ一面人のゐる額がかゝつてゐました。紙が黄ろく〳〵すんでゐたことゝ星亨がゐたこと、その顏は今もおぼへてゐます。中に私の父もゐるのでそれでヘンに好意を持つてゐた額です。――之等が私にとつて最初の、座右の繪です。

それから同じ室の床の間に、大字で「來者不拒、去者不追」と二行に書き下ろした草書の大幅がかゝつてゐました。右の行の不がふとく書いてあつて左の行の初めの去が、この土のところのが十が大變太く、大きく書いてあつた。――恐らく私は此の幅を十八年間眺めたものかも知れません。今思へば年中かけつぱなしで、おかしなものだが、何しろ必らず此の幅は兄キの室の床の間にあつて、あの床の間にはあれがあるものと思つてゐました。尤も時々何だか薄い繪だとか、歷代天皇の像だとか、正月には七福神とか、僕の五月には鍾馗、妹の三月には雛などと

かけかはつたことはある。然し一時のことで、直ぐ又ドカンとした來者不拒……に代ります。又來者不拒が一番ぴつたりとした、と云ふより氣に入つた、これが出てゐると氣のすむ様な、いつものかけじでした。

——この文言が長らく讀めませんでしたし、讀んでもらつても、わかりませんでした。否、讀むものなどとも別段思ひません。見てゐると不の字のふがそれ一字だけいつでも「ふ」と讀めて氣に入るし、去の頭の大きいのが何となく面白くて仕方ない。來る者は拒ます、去る者は追はず、と。之れをかう讀んで、それからその意味を何となく了解したのは極く〻〻後のことです。

私はその家と十八の年に別れましたが、別れて淺草の家へ引越しましたが、却つて、引越してから來者不拒のかけじを度々思ひ出しました。

實は此の來者不拒、去者不追と云ふのがその後段々と好きになつて、感想などにも時々此の句を入れた。入れたくなる場合がありましたし、第一、懐しいせひもある。來者不拒、去者不追。かなり本當のことゝその情操を感じたこともあります。

その後今では別段何とも思ひません。かう云ふかんばんをかけたいとは更々思ひませんし、少し皮肉な見かも知れないが、

或ひはあのかけじは誰か悟り切れない坊さんか政治家のしくじりなどが氣やすみに書いたものではあるまいか？などゝ評かる。どつちみち人事の極く消極的な追句だと思ふが、それとも何か偉い人の或る時の述懐か何かなら私の此の云ひ様はいけない。まあさう野孤禪ばかりでもあるまいけれど、思へば私の父など、成程、この來者去者の件では常住苦勞もしたし、種々經驗も多かつたと思ひます。

では若しもそんな風で父が此の句に感心して何所かゝら買つて來たか？乃至誰かに書いてゞももらつたか？——そんな因緣のものなら、わるいと思ふが、思へば父や母のしたことには時々極く小さなことなどに、却つて後々不滿の種となることがある。父はもうゐませんが母はゐますから、早速あのかけじのことは聞いておいて見ませう。少くもその家にあつたいはれを。

私は兎に角、この來者不拒を影に、朝に夕に、見たものである。で沁みこんでおぼへてゐる。後生氣が起るが、子供の室には先づ思ひなしのものはかけないことである。余事ながら。

此所に學校の教科書を想起します。その中の火事の絵が好きでしたが、第三課「富士登山」と云ふのはフジトさんと云ふ人だと思ひ、何だか寂しい氣がしました。直きに和紙が洋紙になつた様でしたが、和紙の方がやはらかで好きでした。

多分芳年の筆と思ふ一つ家の圖を想起します。――之れは大版二枚がけ位ひのタテに長い版畫でしたが、下では鬼婆が乳をぶらさげて出刃をとぎ、上からは身もちの眞白な女が眞赤なゆもじをして、結かれてさかさに吊るされてゐます。之れが近所の大平と云ふ本屋に出てゐましたが、度々見て、いろんな想像をしました。只怖いせひでしたらう、買つてもらひたい氣はしませんでした。時々見たくなつて見に行つたものである。

大寺小將の雪の中に立つてゐる圖を思ひ出します。それは錦繪の三枚續きを澤山裏表に貼り込んだ、四冊の畫帖でしたが、主に芝居繪であつた。只時々戰爭繪が出て來てしげ〳〵と見た。大寺小將は黑の外套を着し、その外套の胸に胡粉が一杯ついてゐましたが、それがブツ〳〵盛り上つてゐるので好きでした。オーデラ小將と云ふ音にも妙に魅惑があつたらしいが、その他原田十吉の門破とか、馬を連れた福島中佐など。――この福島中佐には別にガラスの玉で中に水と紙の粉と福島中佐の人形とが仕組んである玩具を持つてゐて、殆んど一日に一度や二度はきつとその玉を振つて見る。するとパラヲヲと馬上の小さな中佐へ大雪がふりかゝります。じつと見てゐる間に段々靜まる。シーンとして、遠くへ行つた樣の氣になる。

當時私の家はそつくり硝子戸の作りに、その硝子が一こま〳〵赤、青、黄、紫、白、と、五色の市松になつてゐました。二階で日なたにゐると廣間の疊へ不思議な色模樣が映ります。その西日を受けた赤などの色は余りに氣持のいゝものではありませんでしたが、私はよくその中の一つ色を選つては左ひちがひに飛んで歩いて、そこで遊んだことがあります。

海や山などは私は殆んど中學へ行く迄知りませんでした。芝公園へ行くと深山へ入つた樣の氣がしたものです。大てい家にばかりゐて、繪は始めから好きでしたから殆んど小さい時分からよく描いてゐましたが、同時に鳴物が好きで、種々の樂器を好んで鳴らしました。手風琴、吹風琴、ハーモニカ、明笛など。或ひは樂器で遊んだ時間が子供の中は一番多かつたかもしれません。それに次いでは繪をかくことでした。

極く小さい頃のことはおぼへてゐませんが、度々半紙に筆で八百屋ものゝ戰爭の繪を描いたことを記憶します。きつとその茄子が鎧を着てかぼちやを負かしてゐる。横手に上野の戰爭の樣な黑い柵があつて、血は筆に墨をふくませておいて紙の上へぷつと吹かけたものです。全くその繪が出來上つてから血を吹きかける時には、勇壯の感がして――今でも昔の通り思ひ出せます。

まだ十歳にはならなかつたでせう。十歳と云へば尋常三年で

すから、尋常三年には多分軍艦や波を描いたゞらうと思ふ。一體私にあんなに八百屋もの〻戰爭の繪を敎へたのは、私の叔父だが、叔父は又何からあゝ云ふ畫因を知つてゐたものだらう？恐らくそんな繪草紙類があつたものでせうが見たいものです。——此の叔父は猶細工ものが上手で、小さな木組をうまく扱つてそつくり二階建ての家などをこしらへてゐましたが、私はそれに眞似て木をけづつて軍艦をこしらへました。

所が近くの虎屋横町に住むナンプセーカンと云ふ、私の兄の友人が、更によく軍艦をこしらへることを知つてゐて、殊にナンプセーカンは出來上りの木の船へペンキを買つて來て塗つた。一體此のセーカンが然し有りやうは大のいたづらつ子で、表てなどで「ナンプセーカン」と聞くと私達こどもは逃げたものである。然し偶々家へ遊びに來て兄キと何かしてゐるのを見ると、幾艘もペンキ塗の軍艦をこしらへて、私の家の物干しへ矢張りペンキで「旭造船所」と書きました。私は此の讀み方を兄キに聞きましたが、うれしいと思ひました。

私は先づ「美術」に就てはこのナンプセーカンと、それから前に云つた叔父とに、大ひに啓發されたことを感じます。——叔父にはその後今も逢ひますから、よくその事を云つては昔の八百屋合戰の圖を描いてくれと賴むが、只笑つてゐて、描いてくれない。「ナンプセーカン」氏にはさつぱりその後逢ひません。

私は千代田學校と云ふ學校へ上がつてゐましたが級の中では繪の好きな方でした。——それともう一つ好きなものがあつたが、唱歌室のオルガンで、余り彈いて見たいので一度忍び込んで彈いたことがある。胸がどき／＼した。

級の中では繪も相當描く方でしたが、決してうまい方ではなかつた。つい名を度忘れして思ひ出さないが或る同級の子に波を切る軍鑑の繪を非常にうまく描くのがゐた。私はそれを見てゐると筆端に不思議な新鮮さを感じました。まざ／＼と回想します。

その頃繪好きの同志か集まつて、私の家の三階でよく繪の描きつこをしましたが、その中に一人新粉と云ふのがゐました。濃い鉛筆で繪を描いて上からゼラチンをかける。それを油繪だと云つて、ぴか／＼光らせて見せたのである。——私はそれ以來何枚繪をかいて、何度ゼラチンをかけたか分りません。只新粉の繪は濃くて立派なのに自分のはどうも薄くて、うまく油繪の様に行かない。殊に一度驚いた樣な、家の人に見付かるといけない？と思つたのは、新粉がいきなり女の裸かを描いて、それを「油繪」にしたことです。きやつ／＼と云つてゐたが、多

分少なからず作のせいでせう。私より年長でした。

その後この新叔は死んだと聞く。非常に僕を刺戟した、最初の繪かきである。

何でもその頃と思ふ。銀座の——何所だかわからないが、兎に角勸工場へはいつて、そこで戰爭の油繪と、それから今思へばモザイク風に描いた、顔や胸などの繼ぎ〻〻になつてゐる繪を見ました。私はその勸工場で大阪の羽衣双六と云ふのを買つて來ましたが、正月のことで、今云つたモザイクの油繪が珍らしくてたまりませんでした。

當時家兄は、神田の京華中學へ通つてゐましたが、兄の中學の友人に伊藤？何とか云ふ人がゐた。度々その人から肉筆の水彩繪ハガキが來て、殊に兄キ達は、仲間で風見と云ふ廻覽雜誌をやつてゐました。——その表紙と口繪とに或る號へ「伊藤さん」が、表紙には女の上を向いた大きな顔と、口繪に煉瓦建てのある風景を描いてゐました。忘れもせぬ「ワツトマン」と云ふざらざらした紙へ描いてあつて、その繪の爲めに風見はあけにくい位ひでしたが、私はそれを見た時、頭がカアーツとする程亢奮しました。何度その繪をと見かう見したか知れないし、「伊藤さん」が或る日來た時には、どんなにその一寸猫背の様な、カラを付けないで服の襟を外してゐる、その風貌も何も彼も、尊敬したか知れません。兄キの室へ行つてはその風見を幾度も見たものです。例の來者不拒のある室へ。

と、矢張りその時分のこと、兄キが此度は何だか大きな紙へハムレツトの芝居を見たと云ふのでそのハムレツトの場面を繪に描きました。——一體家兄は初めは私よりずつと繪がうまかつたので、度々繪はかいてゐた。私は丸で頭が上がらなかつた。然し此度のハムレツト程まとまつた大作は、したことがありませんでした。

私はそれを痛く感心して、殊に畫面に澤山圓柱があつて、靴下からもゝまで足の形ちの通りぴつたりと付いた服を着てゐる、その足の人が澤山並んでゐます。之れを實に氣に入りました。それ迄外國の繪では見たこともあるが、日本人で描いたのは先づ見たことがない。それを兄キがずん〳〵描いてゐるので自分は小學校だ。中學校へ行くと、伊藤さんや兄キの様にあんな風に繪が描ける様になるのか、いゝなあと思ひました。兄キはその繪を然し中止した様だつたが——定めしこん事をかいたら、兄キはいやがるだらう。僕には只忘られぬことである。

私は毎號出る度毎に少年世界と、たしか少年もその頃發刊されたと思ふ、それと、小波さんの世界お伽噺と、兩國に片桐と云ふ氣持のいゝおかみさんの本屋があつて、そこからツケで買

ひました。太陽の表紙が如何にも大人々々してゐて尊敬心を拂つたおぼへがある。少年世界では江見水蔭さんの探險が好きなのに山中古洞さんの挿繪が嫌ひで、拘泥したおぼへがあるが、之れは前期のことか。――世界お伽噺では新版を本屋で買ふと先づその挿繪を一通り見ることにして、ガリバーの繪だとか眞黑學校の繪などは實に好きでした。會長征伐は怖いと思ひました。それから寨也氏、不折氏等の挿繪は尊敬しました。――雜誌少年に就ては、表紙のペン畫が好きでしたが其の作者の北澤樂天さんか之れは又豎者で、ウラメシイ英學校の先生の目口をもらつては、大ひに苦心してはめ繪や判じ繪を所しました。一度も出ないのでがつかりしました。それに答案に預め[illegible]希望を記せとあるので、銀時計と書きました。あゝ、鳥兎早々、北澤さんに心から御挨拶しませう！

その第二號か三號かに板ばさみと云ふ冒險か何かゞあつた。おれは幾度讀んでもよくわからないので悲しくなりましたが、――既でに紙數盡く。之れにて。

未だ觀ぬ美術展覽會

佐藤春夫

今年の展覽會もまだ見ない。私はこの三四年來、秋の展覽會を一度もみない。美術の秋に反くことも久しいものである。しかし今年はきつと見に行かうと思つてゐる。ごく親しい友人の作が初めて美術院へ入選したので、それを見物に行くのは友人として喜ぶべき義務だと思つてゐるのである。

一たい私は、美術に對してこんなに冷淡ではなかつた筈である。どうしてこんな風になつたのか自分でもわからない。いや、私は美術に對してはまだ充分な熱情を抱いてゐるつもりだ。ただ美術界の催しに冷淡になつただけである。

さう言へば冷淡になつたのは、特に美術界の催しだけではない。私は心のなかでは注意を支拂ひながら實際に於てはついそのままに通りすぎてしまふやうな事がずい分と澤山ある。[illegible]

會もやはりその種のものの一つである。私が特に反感を抱いてゐるわけではないだけに、氣がついてみると、一種さびしいやうななさけない氣持がする。いつのころからか私はあまり忙がしすぎるやうなことになり、世上一般の行樂に心ならずも遠ざかつたのである。逸人のやうになつて私は世事を忘れたのではない。名は文學といふ俗務のために、私は好きな澤山のものを見たり聞きたりすることも出來なくなつてゐる。敢て問ふが美術界の人々は決してそんな事はないだらうか。さうだとすれば羨しい事である。

ともかくも私は、美術展覽會を世上の行樂の一つに數へることには躊躇しないのである。「あそこは人を見るには繪が多すぎるし、繪を見るには人が多すぎる」かも知れないけれども、私はそれを俗惡呼はりして遠ざかるほどの隱士ではない。美術のほんとうのよい補備の質はあそこの果樹園にのみあるとも信じないが、新時代の一つのお祭りぐらゐには有意義ではないか。さうして私はお祭を充分に樂しむやうな氣持であり、それだけの閑も持ちたいものと思つてゐる。

役人とお金持と新聞記者とを第一日の招待客として、買ひ手とパトロンとを集め、また人氣を第一とするところの一般の展覽會を呼ぶに、お祭の一種としても不可ではあるまい。……さうしてこれを好ぶところの都人士の趣味も亦進歩したと言はなければならない——これを皮肉と思つてはいけない。皮肉ならもうごくふるい。私はまともに言つてゐるのである。

哲學研究者文藝愛好者必讀書出來

◇大關增次郎氏新著◇

（カント二百年隨一の紀念出版）

好評三版

カント研究

（（哲學研究者がカントへの隨一の手引書!!））

《萬朝報評》：批判哲學の創開者として近世哲學史上に巨木の如く聳え立つカントの哲學の體系をその思惟開展の順序に從ひ考究檢索したもので全篇を（一）批判哲學の根據つけ（二）自然形而上學（三）道義の形而上學（四）宗敎哲學（五）判斷力批判の五編に分ち更にそれを部編章に分類して微に入り細を穿ち徹底的に哲學者の欝然たる哲學體系を探究し盡してゐる總頁數壹千百頁尨然たる大冊で近來稀に見る出版である。

菊版 最上製美本 全壹冊箱入 壹千百餘頁 七圓八十錢 送料卅六錢

吉田絃二郎新著

四版

小說集 島の秋

四六判 最上美本 全壹冊 四百餘頁

金壹圓八拾錢 送料十二錢

（著者自信ある創作集）

◇稻毛詛風氏新著◇

●島の秋●別れ行く人々●眠られぬ男●土堤店の息子●雪の夜の旅●磯こよみ●落葉の路●二つの甕●を收む。

（久しく品切の所增刷出來御申込を希ふ）

拾參版

改訂增補 オイケンの哲學

四六判最上製 正價金 壹圓六拾錢 送料十二錢

《哲學雜誌評》：本書はオイケン哲學の努力と方向と主張とを極て鮮かに力強く敍述せる快著である私は玆に著者がオイケン哲學の紹介といふ極めて困難せる仕事に對して可成の成功を納めてゐる事を著者の爲に喜ぶ者であるオイケンを根本的に研究せんとする者この著述より入るがよい。

東京市神田區表神保町七番地 大同館發行 振替貯金口座東京八七貳番



百姓

悅田喜和雄

私は六七回家を逃げ出した。

私が一番初めに家を逃げ出したのは二十二の年の春であつた。私はそれまで他處へ行つたことはなかつた。行つても三里ほど離れた母の實家位であつた。そして、そこへ行つても泊るやうなことはなかつた。遠方だと云ふので朝少し早くから行つて其日歸るのであつた。それが今では、村でも高飛びするたい長になつて了つた。

最初に家を逃げ出した時は隣郡の、五里ほどあるかなり田舍では大きな町へ、家の用事で行つた時である。家の者は皆が承知で朝早くから起きた。もつとも私は皆の知らないうちからちやんと用意して荷物は家の外へ隱してあつた。母は早くから辨當の用意をする、父は小使錢を出す、と騷動して全部の用意が出來ると、まだ暗いうちに私は家を出た。家を出るともう、私は門口に隱してあつた荷物を背にくゝり、違つた方向へ行つて了つた。こんな手で三回逃げ出した。其他は夜、小便所へ出た振で逃げたり其他の方法もとつた。しかし、何度逃げ出しても辨が惡いんで、もう大丈夫捕へ

られるやうなことはないと思ふとすぐそこから電報で行く先を知らせる。もつとも行く先は始めから一と處なので私か知らせなくても、あゝ又行きやがつたなアと父母達にはすぐわかつてゐただらうが、そして、少し居るうちに家の方から『歸れ！』の電報がやつて來る、と歸る氣になつて、又歸る、今度行つたら家へは手紙もハガキも出さないと思つてゐても行くと出す氣になる、又『歸れ！』と電報が來る、又歸る。歸ると又、本も讀めないし書くことも出來ない、だうかして一日も早く家を逃げ出さう逃げ出さうと毎日日課のやうに逃げ出すことばかり考へるのである。

三ケ月あまり前に逃げ出したのは、隣村に、四國八十八ケ處の札處の二十三番の藥王寺といふ寺があるのである。そこへ詣に行く、と云つて、そこへ行つてから逃げ出したのである。もうづつと前から考へてゐたので、家の者に話してから正式に出ようと思つてゐたのであるが例の私の性分でだうしても話せなかつたのである。妻には寢間話にしたが妻も本當にしなかつたらしい、私も又、本當にしてもよし、嘘にして聞き流してもどつちでもいゝと思つてゐた。だうしても自分の氣とよく合つてゐるのは前々のやうに逃げ出すことだ、と思つてゐた。

妻はその時實家の方へ行つてゐなかつた。それを丁度よいをりとしてゐたのである。

舊の二月の二十日であつた。ひがんの中日ではあり祉日ではありするので、家には共よいの十九日の晩餅を搗て、明日の二十日には正午から仕事休みとなつてゐた。休みは正午からであるがお詣だからと云つて私は朝から、昨夜の餅を辨當にして家を出た。それから藥王寺へ行つて詣たことは詣たがすぐ自動車に乘つて道を替へた。父母達はもう妻もあることぢやから前々のやうに逃げることはないと思つてゐたゞらう、しかし私は少しも前とかわらなかつた。

今度こそ歸らない、と、思つてゐたが三ケ月ほどすると又歸つて了つた。しかし、今度は、うまく家の方をかたづけて、ずつと家を出やうと思つて歸つたのであるから今までと違つて少しは心はかたまつてゐる。

歸らない前に、家は今海軍へ行つてゐる弟にめんどうを見てもらうようにしたい、そして、私はぜひ家を出して貰ひたいと、向ふからこちらへ手紙を出すたびに書てあつたのであるから父母達も何か考へはもつてゐるだらうが何にも云はない、私は父母達から何か訊かれたら話すだけの用意はしてゐる。うまく話さうとは思つてゐるがどうしても私の方からは切り出せない、叔父や一部の親類の人はもうあきらめたらしい。しかし、第一の父母の心がわからない、又、嫂も子を孕んでゐるから重吉も落付いた。と思つてゐるかも知れない。しかし、私の家を出ると云ふ心は今まで以上につよくなつて來てゐる。又二ケ月ほどしたら正式に家を出やう、と思つてゐるのにどうしてもそのことが父母達に話せない、又その内によい折があるだらう、と思ひながら一日延び二日延び、お了ひには又逃げ出すんだ。しかし、どうでもよい、とりしめて本でも讀んでやらう。と又其本も同じだ、ずん／＼延びて行く、今度こそ歸つても家の仕事はせずに本を讀んでやらう、と思つて本を十冊ほど買つて來たが、歸つて着物を着替へるとすぐ、

「長い間遊んで來たんじや早やう働け！」と父から仕事を云ひつけられてその日から働てゐる

本が讀めないのが情なくてたまらない、私が一寸の休みの時、たとへば晝に歸つた少の休の時でも本を見てゐると、

「本を見ないでも眼をつむつとれ、本讀んだつて何になりや、眼をつむつとつたら身體が疲れんだけでもとくぢや！」から怒鳴るのである。いくらどうなつても怒鳴ればこちらも負けないが、ふとそんなことを思ひだして淋びしくなることがある。

町へ肥取に行く時、肥桶を擔で歩てゐて、「われら（お前）が本や讀だつて何になりや、犬の糞のつゝぱりにもなれへんは！」本を讀んでゐる時母からから怒鳴られたことを思ひ出す、――本當に何にもなつてゐないかも知れない、こんなにして、こんなに本を讀んで、自分には本當によい物が、書けるやうになるか知ら？　と思ふと淋しくさへなつて

來る。と云つて讀まなくては尙淋びしい。

本を持つて仕事に行つて、仕事が忙しくて一日中本を讀ないで濟すと、大きな損をしたやうで淋びしくてたまらない、それを、だうせ忙しくて讀めないんだからと思つて持たずに行くと、讀む時間があるやうな氣がして、持つて行つて讀めない日の一倍淋びしいのである。又、少しでも多く讀めた日は一日の勞働の疲れも忘れて了ふ位いうれしいのである。

『今日奥の田へ水取（水を田に入れる仕事）に行けよ』朝飯を食ふ時父から云ひつけられた。

水取に行くと、精だして取上げて池の水がなくなると、又水が池に溜つて來るまで休むことが出來る、その間に本を讀むので私は大變好きな仕事の一つである。

二三日前に町へ肥取に行つた時、肥擔しながら十五六頁讀んでそれから時間があれば二三頁でも讀んで半分以上讀んでゐる本があるので、父からそれを聞くと、何よりそれを今日中に讀み上げたいと思つた。

飯を濟すと、本を懐に入れた。そして、家を出て便處へは入つた。便處でもすぐ懐から出して讀みかけた。

便處で本を讀んでゐるところを見つかつたら大變だと思つて頁を繰る時でも、なるべく音をたてないやうにした。

人音がすると、『エヘン』と咳拂をしたり、片手で、オトシワラをガサ／＼云はせて、便處へ這入つてゐることを他の者が知るやうにした。そして便の用は濟んだのに、誰も這入つて來ないのをさいわいにずん／＼讀んだ。ある處まで讀んで便處から出ると、丁度家の上の方から、馬の草を三四束刈りて、提げて來た父に出くわした。

『まだせんち（便處）にゐたのか？』と云つて、父は痩せた細長い顔で、大きな眼をキロ／＼させて私の顔を覗た。

私はすぐ顔を反向けてぼと／＼歩いた。そして、家から一町ほど離れると、又懐から本を出して讀みながら歩いた。

2

『行かんか、でんよ！』私は妹のおつるをかう呼んだ。

おつるは私達三人兄妹の内一番末子である。今小學校の六年生である。四五年前の夏、おつるの鼻のさきにおできが出來て、そのため鼻が赤くなつてゐた。それを今海軍に行つてゐる私のすぐ下の弟が『鼻赤』と呼びだした。一時はおつるの名が鼻赤に變つてゐた。すると父、父が、私の家の親類に傳吉といふ、私達がでんの小父さんと呼んでゐる鼻の赤い人がある。その人から引いて來て、おつるを『でんさん』と呼びだした。始めはおつるは非常に嫌つてゐたが厭がれば厭がるほどわざと云ふからもうでんさんになつて了ふより仕方なかつた。もう今では『でんさんよ』と云へば何處にゐても『やあ！』と返事するやうになつて了つた。

『いや！』私が昨日から讀さしにしてゐた本を探してゐると、父と一緒に、縁がわで涼んでゐたでんはかうがんばつた。

『いやつがあるか、いけ〳〵、草もとらん澁しとつて、蜜柑や柿が熟れると取つて食ひやがる、行け！行け！』と父は眼玉をむき出してでんを睨んだ。でんはしかめづらを俯向て足の上に置てゐる手拭を揉んでゐた。

妻が笠を冠つて出かけたので

『何處の畑まで除つたんな！』と云ひながら私は本を開けて昨日讀んでゐたところを探しながらぼと〳〵、妻の後から家の上の果樹畑の方へ上つて行つた。

『今朝あつこまで除つたんじや、こんどはあつこへ行かんけ、夕方日が入つてからあつちへ行つたら涼しいてえゝ』妻

はかう云つて、柿のある方の畑を指さした。

私は本を懐に入れて、今日こそ草除りをしながらこれは讀み上げよう、と思ひながら、妻に後れないやうに歩いた。

父が――これで父親が云ふてゐた通りに出來た。父親は、上を甘諸畠にして、下の畦には柿を植たら云ひよつたんじや――といつか父から聞かされてゐた、その柿の下へ行つた。そして、本をそこへ置き、少し上から草除を始めた。馬屋肥や藁を入れてあるので、踏むとグツと足がは入つて、腐りかゝつたじめ〳〵した藁片が草履の中へ入つて來る。氣持が悪るいのですぐ傍にある木片を取つて、それを腐つた藁の上へ置き、その上を踏んで草除をはじめた。草を除くと下から大きなみゝずが出て、する〳〵と足の上を上り越して、下の畑の方まで辷つて行つた。

『俺もうだうしてもお盆が濟んだら行くは、家に居るとかなわん、本が一つも讀めんし、書くことも出來んのつて、』私はすぐ一間位離れて草を除つてゐる妻に云つた。

『あんたが行くんだつたら妾も一緒に行く』妻は笑ひながら云つた。

『行く云ふたつてお前もうぢき子が出來るんだらうが、子が出來たら又迎に戻つてやる！』私は草を除きながら妻の方を見ないで云つた。

『一緒に行く、一人居るんいやもん！』妻がかう云つたので妻の方を見ると、妻は頭を上げずに草を除つてゐた。

『行く云ふたつて腹が大きいのにだうなりや、腹が大きいのに汽車や汽船に乗つたら悪いだらうが？』

『知らん！』妻はかう云つた。

『悪くなかつたら一緒に行つてもえゝけんど！』

『いや一人居るん！』妻はやはり頭も上げずに云つた。

『一人居るのがいやら平岐（實家）へ行け！』私がかう云ふと、
『いや、去ぬ位ならきえへんもん！』妻は頭を上げて私の顔を見て、笑ひながら云つた。
『去ぬんがいやなら一人居れ！』
『いや！』
私はいつになくのんびりした氣持になつて來た。こんな時なにかよい物が書けさうな氣がした。ふと、よいことに思ひついた。十日ほど前に十枚ほど書きかけてそのまゝになつてゐた小說のお了ひの方を今の自分達夫婦の氣持をそのまゝ書たらえゝだらうと思つた。と、
『ウオイ！』と變な聲で云つた。
私は頭を上げてあたりを見た。妻もあたりを見てゐた。
誰も見えないので又草を除り出した。
――バッサ――と柿の木の上の方で音がして、太い柿の幹に、コツンと石があたつて、草を除つてゐる傍へ落ちた。あたりを見たが誰も見ないので、誰かのいたずらだらうと思つて、又草を除りだした。
――バサ〳〵〳〵――上の柿の葉が鳴つて、雨のやうに小さい土が降つて來た。又頭を上げてあたりを見たが誰も見えない。しかしでんだらうとは思つた。
『でんか？でんか？』私はかう呼んで見た。
又バサ〳〵柿の葉をうつ音がして、パラパラ土が降つて來た。
『誰な？誰なッ！』私は腹が立つて來て怒鳴つた。

『ハハ、ハハヽヽヽヽハハ！』と笑ひながらでんがによつくり上の畑から首を出した。そして、今度は笑ひながら妻に土を投げつけた。

『すな！』かう云つて私はでんを睨みつけた。

『みな聞たつた。みな聞たつた。ウチ一時間も前からあつこに隠れてみな聞たつた。知らんの！』でんは嬉しさうに笑ひながらかう云つて大きな蜜柑の木の方を指ざした。

『悪いんおつるさんが、耳腐るエよ！』と妻が上にゐる妹を見て笑ひながら云つた。

『みな聞た、云ふたらんならん！』でんは又かう云つた。

『云ひよ、なんぼでも云ひよ、』妻は草を除りながら云つた。

私は何だか、隠れて聞てゐたといふことや、それを父母達に云ふと云つてゐるところから嫁と小姑との關係を思ひ出したりして、おかしくなつて來たので笑ひながらでんの方を見ると、でんは

『イイ！イイ！……』と云つて大きく口を開り、眼をむいて、顔をつきだすやうにした。

『あほう！』私はかう云つて笑つた。

『があきや、をどれ！（腹立つた時に使ふ方言）』と云つてでんは又、私に土を投げつけた。

『すなエ！あほう！』私はかう云つてでんを睨みつけた。

『えゝいがあきや！』でんはやめずに又私に土を投げつけた。土は頭にあたり、首から入つて腰のあたりまで入つて來た。

『うどますぞがあきや！』私はムカツと腹が立つて來たのでそこらあたりの土を握つてでんの方へ投げ返した。でんは、

私の血相を見て逃げてゐたので、私の投げた土はでんにはあたらなかつた。

少しするとでんは又出て來た。そして私の顔を見ると、口を閉り眼をむいて、

『イイ！イイ！……』と云つて首を差出した。

『あほう！』私は又急におかしくなつてかう云つて笑つた。

『イイ！イイ！…』と云つてでんはやはりおかしい顔をするので、又私は土を握つて投げつけた。こんどは逃げようとしたでんの背にあたつた。

でんはもう出て來なくなつた。土があたつて痛かつたのでこりたのだらう、と思ひながら草を除てゐた。と、又姿を見せないで土を投げだした。

『こりや！』と怒鳴つけると、見えない處で『イイ！イイ！』と云つてやめずに土を投げた。

『おつるさん、そんなことするもんでない、おつるさん！』と妻が大人らしく云つた。

私は默つて草を除てゐた。でんはまだ土を投げてゐたが妻も相手にせずに草を除てゐた。

『イイ！イイ！…』頭の上でかう云つたので頭を上げると、でんはす早く逃げて了つた。

私達が默つて草除つてゐると、又來て、

『イイ！イイ！…』と云つた。頭を上げると又逃げて了つた。

もうイイ！を云つても頭を上げなかつた。すると傍まで來て土を投げだした。それでも相手にしなかつた。見もしなかつた。

『すなよ、おつるさん、きたないわエ！』妻がかう云つた。

でんは、妻が弱と思つて妻ばかりに土を投げて私には投げなくなつた。

私は、相手にすると、面白がつてやめないと思つたので、知らぬ顔で草を除つて居た。

『いかげんならえゝはへおつるさん、かか（母）に云ふぜ！』妻がかう云つたので妻の方を見ると、妻の冠つた手拭には土が載つてゐた。妻は片手で顔へ土が來ないやうに防ぎ、片手で草を除つてゐた。私が見てゐるうちに、でんは又土を投げた。妻の頭へ土があたつた。

『云ふぜ、云ふぜ！』妻は親の傍でだゝをこねる子のやうな聲で云つた。

『すな、でん！』私は見かねてかう怒りつけた。でんは又、『イイ！イイ！…』をした。そして、私の方を見ながら、妻に、柿の落ちた腐つたのを投げつける眞似をして見せた。

『をどれ！』と云つて私は土を握つて投げつけた。でんは逃げて了つた。そして、又すぐ來て、

『イイ！イイ！』をした。私はおかしくなつて俯向て笑つた。

私が頭を上げると、又でんは私の方を見ながら妻に柿を投げつける身がまへをしてゐる。見るからするのだ、と思つたので私はすぐ俯向た。と、

『アッ！』と妻の聲で云つて

『ありや、ありやきたないなア！』と云つてでんが笑つた。

私は頭を上げて妻を見た。妻の冠つた手拭には、赤子の糞のやうな色の腐つた柿の汁が一面にくつついてゐた。妻はその腐つた柿の汁を除けようともせず、片手で顔を隱して、動かなかつた。

泣てゐるのかな？と私は思つた。

私は、どんなにせられても仕かへし一つしない妻が可哀相に思つた。又、小姑だから自分はどんなにせられても默つてゐなければならない、としてゐるのだと思ふと一層可哀相であつた。と云つて敵うちにでんを毆つてやるのも何だか馬鹿らしいやうな氣がした。

『そらな、泣たはよ、そらなでんさん泣たはよ』私はから云つてでんをからかつた。

でんは泣きさうな顏を私の方へ向けてむりに笑つて見せた。そして、すぐ又泣き顏になつて、私の方へ向いて土を投げる眞似をした。

『馬鹿！』私はから云つた。するとでんは土を投げた。私はもう默つてゐた。でんは何か云ふとすぐ泣て了ひさうな顏をしてゐた。相手にしたら又でんが泣いて了ふと思つたので、私は俯向てせつせと草を除つた。

姉は土を投げなくなつた。私は頭を上げて妻の方を見てみた。妻はやはり手で顏を隱して俯向たまゝ動かない、一寸横眼ででんを盜み見すると、でんは上の畑の畦の太い柿の幹に凭れて何かいぢつてゐた。

私は、惡いことをせられても、たゞせられるまゝにしてゐなければならない妻の氣持や、妻をやつつけて、自分も泣きさうになつてしまつたでんの氣持を考へて見たり、又、自分の氣にくはないことがあると、ふくれ面をする妻や、なんでもやりかけると、泣てしまふまでやめないしつこいでんの性分など考へながら妻やでんの方へ尻向にちがつた方へ草を除つて行つた。

しばらくして、

『いらん、いらん！』と云つた、泣くやうな妻の聲に、私はそつと妻の方を見た。妻はやはり同じ風に顏を隱して俯向てゐた。そのよこから、でんが自分の手拭で、妻の頭にくつついてゐる柿の腐つた汁を拭つてゐる。

『いらん、いらん、ほつといてつか！』と云ひながら妻は俯向たまゝ身體を振つた。でんはぼかんと立つてゐた。そして自分の持つた手拭をいじりだした。私は知らぬふりで又草を除りだした。二人が可哀相に思へてならないので、だらかしてやらうか、と思つたが又こちらが口をだして、二人を泣かしては大變だと思つたので默つてゐた

でんの聲は聞かなかつたが、『まどい、まどい！』と云つた妻の泣聲などを聞た。しかし見なかつた。私はある處まで除つて了つて、又妻の方へ向て除て行くやうに向きをかへると妻一人になつて草を除つてゐた。

又少しして

『いらん〳〵、いらんげなんじや！』と妻が云つたので頭を上げると、でんが妻の傍に行つて、新しい手拭を持つて立つてゐた。

でんは、やがてその手拭を、せつせと草を除つてゐる妻の背中の、たすきの間へ挾んだ。

『いらん〳〵、おつるさんちやじきこんなんじや！』と妻が泣き聲で云つて、身體を振つた。たすきの間へ挾んでゐた手拭は落ちた。でんは拾ひ上げて、又繰返した。

『いらんげなんぢや、新のもどせや云えへんげ！』と云つて妻は又身體を振つた。

『いふたんないけ、新のもどせ云ふたんないけ！』と云つてでんはしつこく又挾んだ。

『何しよるあほう、せつせと草でも除れ！』私はかう怒鳴つけた。

でんは妻の背中へ持つて行つた手拭を、びつくりしたやうに、あわてゝひいた。そして泣きさうな顔をして立つた。

私がでんの顔を見て笑ひでもすればでんは泣てしまふだらうと思つた。

私は又、でんや妻の方を見ないやうにして草を除つた。

少しして妻やでんの方を見ると、二人はせつせと草を除つてゐた。と

『茶が沸たぞ、飯たべんか?』と云つて家から父が呼んだ。

『ヘイ!』と妻が返事した。

私は、もう少し除ればこゝだけは済むと思つて、やはりやめずに除つてゐた。妻もでんも頭を並べてせつせと除つてゐた。と又、

『早よう戻らんかへ!待つとんぢや!』と父が少し怒るやうに云つた。

『もうじき去ぬ、もうちつと除つたら済むんぜ!』私はむつとしたのでどんぎり聲を出して云つた。父は黙つて了つた。

でんと妻は頭と頭がくつつき合ふやうにして草を除つてゐる。私も二人の方へ向てせつせと除つて行つた。

三人は次第に倚合つた。三つの頭は三角になり、三つの手は一尺ぐらいの狭いところで面子とんぼのやうに動いた。

私は並んでゐるでんと妻の二つの手を草を持つた手で押へつけた。そして、

『あぶない、あぶない』と聲を云つた。

でんは妻の顔を見た。妻はでんの顔を見て笑つた。二人は笑ひながら力を入れて押へられた手を引た。私は手がなくなると又草を除りだした。

『あゝあねさん!』から云つて、でんは私の手を両手で押へた。妻もでんのすけだちに來た。私の右の手は三つの手で押へつけられた。私はわざと平氣にかまへて、左の手で草を除た。

『ほれ、あねさんそつちの手も押へ!』とでんが云つた。

妻は笑ひながら私の左の手を押へた

『うは！』と云つて私は顔をしかめて泣き眞似をして見せた。

『なんぼにも離すなよあねさん！』でんはかう云つた。二人はかにでも押へたやうに嬉しさうに押へつけてゐた

どうしてもはなさないので私は、二人の手に唾を吐きかけた。二人はあわてゝ手を取つた。その間に私は逃げた。

五六間下へ來ると、

『殘つた處除りに來いよ、オラ（俺）知らんぞ、ほつとくぞ！』とでんが云つた。

『知らんでよきたない、』と妻と笑ひながら云つた。

『除つて來い、除つて來い！』私はかう云つて家へ下りて來た。

少しして、妻とでんとは笑ひながら家へ還入つて來た。

『おつるさん手ふかんけ！』と云つて妻が手拭を出すと、

『これあにや（兄）にかけたろか、』と云つてでんは洗つて濡れて雫が垂れてゐる手を上げて見せた。

『なつせ、ふき！』妻はかう云つてでんの傍へ行つた。でんは妻か拭てゐる手拭の片端で自分の手を拭つた。

飯を済せてからでんが妻の傍へ行つて、二人がしきりに小聲で話してゐた。やがて二人は空豆を出して、煎（いり）だした。

豆を煎ると、その豆を手拭に包んだりしてゐた。

『いかんけ、これ持つて！』でんは妻にかう云つてゐた。

『又喧嘩やすなよ、嘲れるぞ他處の人に！』私はかうからかつた。

『喧嘩やしえへんもんなアおつるさん！』妻が笑ひながらかう云つた。

『イイ！イイ！……』と云つてでんは私の方へ向いてへんな顏をした。

『喧嘩やしえへんなア！』妻はから云つて、でんと肩組するやうにして家の上の果樹畑をの方へ上つて行つた。

私はさつき少しも本の讀めなかつたことを思ひながら、ふら〳〵でんや妻の行つた方へ上つて行つた。

3

四五日前から考へてゐた小說がかなりまとまつた。今度こそ腕味噌を揮つてよい物を書こやらうと思つてゐたのが書けさうになつて來た。

仕事が濟んでから洋燈の下で腹這ひになつた。ペンを持つて原稿用紙にむかつたが、傍で他の者がぶつ〳〵話すのが耳にたつて書けない、邪魔になると思ふと、思へば思ふほど耳にたつ。

『やかましわい、寢エ、寢エ！』私は頭を上げてから怒鳴つけた。

『われ（お前）が寢よ、俺等仕事しよんでないか、わりやドン腹うとさつて！』と母が云つた。もうさつぱり頭が駄目になつて了つた。ごた〳〵してまとまらなくなつた。と同時にいら〳〵して來た。私は顏を俯せてしまつた。

『寢エよこら、油がいるのに、朝つちやドン晝まで寢くさス譯に！』しばらくして父が寢床の中から云つたので、私は自分がうつらうつらしてゐたのに氣かついて頭を上げた。そして、原稿用紙に眼をやつたが駄目だつた。ペンを持つて原稿用紙を見てゐると、だんだん眼蓋がたれて來て眼が見えなくなる、やがてばつたり閉じて了ふ、非常によい氣持になる。うつら〳〵する、と、氣がつく。

——ナニ！こんなことでは駄目だ　かうなまけてゐてはいつまでたつてもよい物は出來ない、いつまでもかゝやつて

ゐては駄目になるよりない、やはりかうした馬鹿になつて了ふよりない――目をこすつて原稿用紙に向ふ、頭をごりごり掻きながら頭の中でまとめてゐる物を、一つ一つにこわし、頭の中の風呂敷をひろげ、並べて見る。――よしよし！よい物にしてやる――ペンを持つ。さて書くとなるとなか〳〵ペンが下せない、ペンを持つたまゝ原稿用紙を睨んでゐるうちに、父が又眼を醒して、

『寝エよ、早よう寝な明日えゝ起んぞ！』と云つた。

『寝んか、寝んか？』と云つてでんは一番に立つた。

『寝るけ？おねさん、寝とつて早よう起きんと明日のちやめし朝飯がないんぜ、早よう起きて炊かんならん！』母もかう云つてしてゐた縫物をかたづけだした。

『今夜蚊帳いらんなア？』母が妻にかう云つてゐるのに氣がついて頭を上げた。

――エヽイ！又眠つてゐたぞ、これでは駄目だ、何にも出來ない、努力が足りないんだ、たまで努力しないんだもの、かう思ふと私は情なくなつて來た。死んだがましだ、とさへ思つた。

何分身體が疲れてゐるからだ、晝一生懸命働て、夜書くつてそりや無理だ、誰だつて出來はしない、明日は朝から仕事をやめて書てやらう、さうしよう！　さう思ひながらやはりぼんやり原稿用紙を見てゐると妻が、

『もう休まんで！休まんで！』と云つた。

『オヽ、寝よか』私はかう云つて立つて、ペンと原稿用紙を持つて寝間へ這入つた。

寝るとなか〳〵眠れない、傍に寝てゐる妻の寝息が氣持惡いので妻の方へお尻向した。そして、眠れないので足を延ばしたり縮めたりした。蚊帳の外へ頭を出して頭をひやしたりしたがどうしても眠れない、早く眠らないと又明日がお

じやんになると思ふといらいらして來た。

書くことを考へてゐるといつか知らないうちに眠つて了ふものだ、と思つて、さつき出してゐたものを又、頭の中で並べて、ずんずん考へた。といつの間にか眠つたのだらう？

『ごぜんあがらんで、ごぜんあがらんで？』と妻が云つたのに氣がつくともう朝であつた。

『うん！』私は寢たまゝかう云つた。

『又一緒に食べんとおこられるべよ！』妻は又かう云つた。

『俺頭が痛いんじや、』私はかう云つて腹這になつた。

『頭が痛いんならごぜん食べてから寢たらえゝんないで！』

『いや！食ひたうない、』私がかう云ふと、妻は立つて行つて了つた。私は又、仰向に寢返をした。

父も母もでんも朝飯の爐を圍んだらしい、コトコト茶碗や箸をいじる音がしだした。

『重吉は？重吉、重吉？』父はかう呼んだ。

『…………』私は默つてゐた。

『まだうとさつとんか、しようのない奴じやなう、晩には遲にまで起きてゐやがつて！』父はかう怒つた。

『頭が痛い云ひよんでよ』妻がかう云つた。

『本のぞくのってじや、あほうが！』母が又かう怒つた。

『食ひつぶしじや、罰あたりじや！』父が又かう怒つた。

私は默つてゐた。『怒れ怒れ、いくらでも』といふ氣になつてゐた。

皆は飯を食つてゐるやうな音がしてゐた。

私は——今日こそうまく行くぞ、うんとよい物を書てやる。と、りきんだ。

又昨夜から頭の中でいぢつてゐた風呂敷をひろげた。そして、一つ〳〵並べた。

或青年が、ふと精神に異狀をきたし人を毆打する。それから監獄へ行く、その神經質の青年の日常生活から書かねばならない、やはり百姓の二男だ、事件の筋を考へるとわざとらしくなるやうでいやになつて來た。寢返りをして橫寢になつた。と、突然頭もとの障子が開た。

『お藥呑むで？』から云つて妻がそこへ座つて、大きな茶碗に、黑い藥の一杯入つたのを出した。

『うん、何な？』私は恥かしいやうな氣がしたのでてれ隱しにから訊た。

『オトギリ草煎じて來たんでよ、』妻はから云つた。

『そこへ置て呉れ！』私は又仰向になつた。そして、眼を閉じて云つた。

『早よう呑まんと、冷めたらきかんでよ！』と妻は云つてそこの障子を締めた。

私は考へた。

——靑年は時々こんなことがある。ある人の顏が眼の前に出て來る。それは村の人全部が尊敬してゐる名譽ある人だ。其人の白い眉、禿た頭、鼻の上のおばた、白い髭、金で包んだ糸齒、靑年は齒を喰ひしばつて、二三度つゞけさまま、い、い、たゝきをする。もう後前がわからなくなる。其顏をめちや〳〵に毆きこはわして了ひたくなる。後で正氣づいて、あゝ馬鹿なことを考へてゐた。自分は、しかしからやりかねない、自分はもう人の集る處へは行けない、並んで座つてゐる其人を敲きつぶして了ふかも知れない、怖い〳〵。と思ふことが靑年には折々あつた。こゝまで考へると、又行きつま

つて了つた。

書いたらかう考へるよりはよいだらう？書き出すと、思つたよりたやすく、よい物が書けるものだ。それから私は腹這いになつてペンを持つて原稿用紙にむかつた。

さて、又書けない、頭がだうかしてゐるのかもしれない、頭をゴリ〳〵掻た。原稿用紙の上にフケが落ちる。と、「フッ〳〵」と吹く、又頭を掻く、いくら頭を掻ても書けない。

と、妻の置てゐた藥を見た。藥の中で蠅が一匹泳でゐる——捨てたろか？私はかう思ひながら見てゐた。と、悪くもないのに嘘をついたら嘘がきいて藥まで運んで來たことがおかしくなつて來て、一人で笑つた。同時に又、捨てちやいけないと、云ふ氣がして來た。

私は中の蠅を捨てて、藥を呑んだ。そして仰向になつて眼を閉じた。

又考へたがだうしてもよくなりさうにない、——だうしたのか知ら？身體が疲れてゐるから駄目なのか知ら？毎日麥飯にたくあんで十四時間も働てゐちや、よい物が出來ようはずがない、第一根氣がなくて長い物は書けない、少しも早く家を出ることだ、出るとなると今度こそ父母達に話こんで妻もつれて正式に出よう、しかし、父母達の方では自分一人で妻と子供を養つて行くといふことについては隨分心配するだらう、これといふ取得のない自分だから、だうしても向ふへ行つたら、〇〇さんの厄介だ。油蟲みたいなものだ。情ないな！ナニ！そんな馬鹿なこと考へないで、よい物を書くことだ。又青年のことを考へた。と、いつの間にか眠つて了つた。氣がついて小便に出ると、もう正午近くなつてゐた。腹が空たので、土間の棚から、でんの受持の鷄卵を三つ盗んで寢間に這入つた。

卵を食つたが、考へたくもなく、書きたくもなかつた。眠らうと思つて仰向になつて眼を閉じた。考へまい、と思つ

てもやはり青年のことが頭に浮んで來る。その青年がなぜ村での名聲あり信用ある老農と云つたやうなよい人を嫌つたかといふと、よいことが頭にうかんで來た。その名聲ある老人は名聲を笠に冠つてゐた。そして、その笠を冠つて、やはり村會議員、實行組長、農會長、と云つたやうなものを全部かき集めてゐた。そして、それらの名聲あるものの選擧があるとその古笠を冠つて又、村の百姓家を一戸一戸まわるのであつた。青年はわけもたなく、その名聲の笠がしやくにさわつた。これまで考へると、私は腹這になつて書きだした。いつになく、皆の飯に歸るのが遲かつたのも幸だつた。難なく十六枚まで書けた。そして、それでもよい短篇に出來てゐた

私は題を喧嘩とした。――嬉しい！と一人で云つた。そして、出來上つた短篇を横の木の上に上げてから仰向になつた。もう嬉しい氣持で一杯になつた。勞働もうんとやらう！私はから思ひながら手を延して、さつきの小說を取つて見た。又もとの處へ置た

皆が飯に歸ると、私も一緒に飯を食つた。そして、一緒に仕事に出た。

4

私は、七夕祭のだんごを食ひ過ぎて、それから輕い赤痢のやうなものになつて行つた。

いつもは、朝少し頭が痛んでも無理して仕事に出る。輕い時は汗をかくとそれつきり癒つて了ふ。正午からうんと痛んで働けなくなつて來た時は寢る、寢ると少したつと眠つて了つて眼が醒ると癒つてゐる。

食ひすぎは私の一つの宿痾である。よく食ひすぎをやる。すこしうまい物をするとすぐでんにからかわれる

『そら明日は兄やが頭が痛ぞ！』私はでんにかう云はれても默つてゐる。明日はきつとでんが云ふ通り頭が痛む、輕い

時に恥しいからがまんにするが、やりきれない時は恥しいも何もない、云はずにはゐられない。たゞあれのたべすぎは腹が痛まない、食ひすぎると、きつと、後頭部がサク〳〵して、キリ〳〵こめかみが痛む、そして吐氣がする。すると、自分でも食ひすぎと云ふことがわかるから、口の奥へ指をつゝこんで行く、するとすぐ吐く、吐いて寢てゐると、いつか眠る、目が醒めるといつか癒つてゐる。毎月二三回はきつと食ひすぎはやるが、一日以上寢たことはない、それが今度は三日目にやつと一人で寢て居られるやうになつた。最初の晩、私は憶てゐなかつたが、後で妻が、夜が明けるまでに二十三回便所へ行つたと云つてゐた。

三日目にはもう二時間か三時間位の間を置て、便所へ行くやうになつてゐた。私が寢こんで了ふと、つききりになつて私の看病してゐて呉れた妻も三日目はもう朝から仕事に出た。其内もし、腹でも痛みだしたら大變だ、誰もゐなかつたら困るといふのででんが一人家にゐることになつてゐた。もつとも、これは全部隣家へも内密にしてゐた。もし下痢してゐるといふことがわかつたらそれこそ大變だ、避病院へ行かなくてはならないと云ふので怖がつてゐた。それで母が、『他處の人が來ても皆仕事に行つた云えよ、兄やは？云ふたら、兄やも行つたつて云ふとけよ、さうせんと、あのそら、知つとるだらうが、戸塚越の避病舍へ行かんならんのぞ、』でんにかう云つてゐた。

私も便所へ行つても、出る時はきつと誰も來てはゐないか、と注意して便所から出るのであつた。

皆が正午飯に歸つてからのことであつた。

中野の八つになる女の子と、六つになる男の子は今朝二人が、二時位間を置て死んだと云ふ話であつた。それもやはり七夕祭のだんごからだと、云ふ話だつた。そして、今日一時に埋葬しないと、明日になれば警察の方からやかましくて埋葬はさせまい、と云ふ話だ、と云つてゐた。夕方母が悔みに行くと云つてゐた。

皆が正午飯を済せて仕事に行つてから、便所へ出て見ると、でんは何かの復習をしてゐるらしかつた。私は物を云はずにそばを通つた。

少しして私が便所から歸つて寢てゐると誰か來た。北の方から下駄の音がして來たから隣家の小父さんだらうと思つた。

『居るかへ?居るんかへ?オ、おつるさん居るんか、皆何處へ行つたな?』隣家の小父さんの聲でかう云つた。

『仕事に行つた。』でんは答た。

やつてるなア!と、私は思はず苦笑した。

『中野へ誰が行く云ひよつたら?』小父さんは又訊た。

『かゝ(母)が行く云ひよつたげ!』とでんは云つた。

『おつるさんよ、水や呑まれんぞ、水呑みよつたら、あの中野の子供のやうに二人が一遍に死ななならんやうになるんじや!』小父さんはかうでんにも注意してゐた。

『かゝ戻つたら一緒に行かんか云ふといて呉れよ、』しばらくして、小父さんはかう云ひ殘して去んで了つた。

私は、本でも見てやらう?と思つて、手を延ばして本を取つて、讀まふとして本を開くと、新しい本の匂ひは鼻の穴をノミでえぐるやうに強くついた。ムカ〱して來て、氣分が惡くなつて來るのですぐ止した。もうたゞ眼を閉じて仰向になつてゐるより仕方なかつた。

今日まだ一日に二十回三十回と便處へ行くのだつたらもう步けなくなつてゐるだらう、と思つた。そして死ぬかも知れないとも思つた。これが身の重い妻にでも傳染したらだうだらう?しかしこれは傳染する病氣じやないだらう、食ひ

すぎで鶏をこわしたからだらう?こんなことを考へてゐると母が歸つて來たらしい。コト〳〵鍋をいじるやうな音がしだした。と、又隣家の小父さんが來たらしい。

『かゝ(母)戻つたか?』小父さんはでんに訊た。

『えゝ!』でんはかう答へた。

小父さんは土間へ這入つて來たらしい。

『暑いなアおんやん(小父さん)』と母は云つた。

『たいがい暑いでないけ、用心せんといかんなア、ちつと位の仕事のことは云はれんなアお前、中野みんせ二十人も一緒に死んだんないけ、そしてお前、外にもあんな病氣がじうに(澤山)あるつがなア、だうしても避病舍へ行くやうになるだらうぞなア、氣をつけんといかん、傳染する病ひは怖ろしい。』

『さうじやなア氣をつけんとなア!』母はかう小父さんの話のふいんをとつた。

『バアやん(小母さん)行く時には、呪じや南天の葉を懐い入れて行かうぞなア、さうせんと傳染したら大變じや、中野の子供やかしは、一日に四十遍も五十遍も出るんじやつはへ!了ひにはお前!お尻が開たまゝじやつがなア』

『さうかへ!それがまア!四十遍も五十遍もせんち(便處)へ行つてたゐるかへなア!阿だ遍續けて行つても身體が耐るのに、』と母が云つた。

『早ようから行かうぞよ、日が入つて了ふとあんな物はうつりやすい云ふけに!、』と小父さんは云つた。

『もう行くかへ、お八つも食はずに?』

『さうするかへ、食べずに行く方がえゝぞへ、そんならおたへこしらへして來るわつて』と云つて小父さんは去んだ。

母が上つて來て私の頭もとの障子を開けた。
私が母の顏を見ると、
『重吉よ、怖しいぞ、避病舍へ行く云いよるぞ、』と母は立つたまゝ小聲で云つた。私が眼を閉じると、母は靜かに障子をしめた。
しばらくすると、私は便がしたくなつて來た。隣家の小父さんが來ないうちにと思つてあわてゝ出た。早よう、早ようと思つても、チビ〳〵と出ては後腹がにがる、又チビ〳〵出る。私が便處から出ないうちに隣家の小父さんは來た。
『出來たかへ？』と戶外から小父さんは大きな聲で云つた。
『えゝ！もうすぐじや、』と母が中から云つた。
『南天の葉持つて來たぞよ、』おたへもこれ、大けなやつ持つとんじや』小父さんはから云つた。
『そりやありがたう、用心に喪びなしじや！』母はから云つたがなか〳〵出來ないらしい、私は便處の中から、早く行けばよいのに、と思つて身體をもぐ〳〵させてゐた。
『これをしてなア！もし傳染つたと思ふたらこの南天の葉を鹽と一緒に揉んで、その汁を吞むとえゝさうな』
『さうかへ！なんでも南天の葉は食いすぎにはえゝつなア！』
『えゝそりやこれ吞みや、なんたる者でもすぐに吐て了ふはへ！』
『食いすぎは上へ吐て了ふか、下へ下げて了ふたらそれで癒るんじやなア、』
『さうじや、けんどなア、なか〳〵さううまくはいかんわいな、鍋ずみなア、鍋の尻についとるすみよ、あれを取つて

呑んでもえゝんじわへ、そりやすぐ吐くはへ！』

『へんな物が藥になるものじやなア！』

『他處へ物を上げるのに南天の葉をつけるぞなア、それはこゝのことにはへ、もしその男ふたご馳走を食つて食いすぎた時にはすぐにその南天の葉を採んで汁を呑むやうにしてあるんじや！』

『さうかへ！』と母はふんをとつた。

『それに魚に笹をつけるぞなア、魚を食いすぎた時にはあの笹を煎じて呑むとえゝんじやつがなう！』二人は話しながら出て行つたので私は便處から出た。

私はそれから二時間位眠つたのだらう、頭もとの障子が開いたので眼を醒すと母は立つたまゝ私の顔を覗てゐた。

『重吉よ、ちとよくなつたか？』と母は訊た。

『えゝだいぶようなつた。』と私は云つた。

『隣のなう、ますみさんも五六日前から寢よんじやつは、腹がくだつて！』と母は笑いながら云つてから障子を締めた。

私は寢返をして眼を閉じた。いつになく母がやさしいな、と思つた。

5

下痢は四日目に癒つた。五日目から働きだした。——本を讀まなくちや、と思ひながらいつだつて讀んだことがない。日でりはずん〳〵續いて、水を取る田は次第に多くなつて來る。身體はだん〳〵疲れて來た。本を讀むとすぐ眠むくなつて眠つてしまふ。道を歩きながら讀んでゐても、眠りながら讀む、いつの間にか次の頁にうつるところまで讀んで

ゐるので氣がつく、何を書てあつたかを考へて見る。何も頭に殘つてゐない。又始めから讀む、めいつて行く頭を、——ナニ！、——とりきんで讀みだす。三四行は頭に入つたが後は同じくさつぱり、何が何やらわからない、もう止さうこんな頭で讀んだつて何にもなりはしない、たゞ神經が疲れるだけだ。

それから本を懐に入れて歩く、——家まで五六町ぐらひはある、六町ほと〳〵歩く間には何が何でも七八頁は讀める——かう思ふと、たゞでふら〳〵歩くのが馬鹿らしくなる。又本を懐から出す。

讀み出すと又同じである、うつら〳〵して一つの字が二つになる。活字が二重になつて來る。字と字の間がなくなつてたゞ白い紙に黒い棒をひいたやうになる。やがて何にも見えなくなる、ふと氣がついて眼を開ける、眼の縁がいたくて頭の中はサク〳〵動悸がうつてゐる。本にはどんなことを書いてあつたか、ぼうつとした頭には何にも殘つてゐない、もうこれつきりこんな頭になつて了つては何にも出來ない、書くことなぞは、尚さら出來ようはずがない、頭の病氣か知ら？

私は又本に眼をうつした。又讀みはじめた。今度は聲を出して讀んだ。

家の門口まで來た時、私は本を懐に入れた。

私が家に這入ると皆は私を見た。もう皆は正午飯を食つてゐた。誰も何にも云はなかつたが妻が、

『おがらんで！』と云つて與れた。

私の膳は妻が拵へて與れてあつた。

『今頃なんな、遲い！』でんが私の顔を覗きながらかう云つた。

『そんなに早ようから戻れるか、仕事しよんじやもん！』私はかう云ひながら飯を食ひかけた。

『また、あれ本讀みよつたん違ないなア！、』でんは母の助けでも乞ふやうに、首を傾けて、母の顔を見て云つた。

母は口をもぐもぐさせながら私の顔を見た。

『あほうぬかすな！』私はかうぺんを怒鳴りつけた。

『のらくらよ、やくざ者！』しかめづらしてでんはかう云つた、

『うどますぞ！（やつつける意）』私はムカツと腹が立つて來たので爐に立てゝあつた火箸を取つた。そして、投げつけようと思つて振り上げた。

『いや！』と大きな泣くやうな聲を出して、でんは茶碗と箸とを持つたまゝ身體を小さくして戸棚の戸にひつついた。

『なにしよんな重吉、仕事つて云ふたら後へ後へ寄つて、でんでもわれ（お前）よりましじやは、やくざ奴！』母はかう云つた。

私は振り上げた火箸を力まかせに、でんに投げつけた。しかし、火箸は戸棚の戸にあたつただけで、でんにはあたらなかつた。でんは音にびつくりして大きな聲を出して泣き出した。

『なつしよんで！あぶない！』妻はかう云つたが私は妻の方へは顔を向けなかつた。

『飯ついで呉れ！』私は顔を反向て妻の方へ茶碗を出した。

『あぶないは！あほうな奴じや！』と云つて父は白い眼をして私の顔を見た。私は視線を避けた。

『われらが本や讀んで何のクソになりや、ドあほう、そして、偉さうに、小説書くじやのなんじやのつて、われらにそんなものが書けてたまるか、ドあほう！』母は又私を睨んでにく〱しく云つた。

私は、ムカツと腹立つと同時に涙がパラパラ落ちた。もう眼が見えなくなつた。持つてゐた茶碗と箸を爐の中へ投げこんだ。其後へ又膳箱も投げこんだ。

爐のまん中へたれてゐる大きな木と竹で作つた自在にかゝつてゐた茶釜にあたつて大きな音がした。同時に灰の煙がうずまいた。

私はまだそれでも氣だらなかつた。父母達にまだうんと腹をたてさせたい氣がした。

――寢てやらう、寢てやらう――私は心の中でかう呟て立つた。そして、足に力を入れてわざと床板を踏み鳴らして寢間へ行つた。

『なんのことなきアーのら〳〵してろくに働きもせずに居つて、一寸でも云ふとあたりくしくさる、罰あたりじや!』父はかう云つてゐた。

――いくらでも云へ、いくらでも聞てやるぞ云へ〳〵!――私は足も手も伸びるだけ伸ばして仰向になつてかう云ふ氣で聞た。

『罰あたり、嗚が子を姫んだら姫んだやうにわれが一倍働てやらいで嗚がたまるか、それにやつぱりわれが遊んで何でも嗚にさすんじや、のらくらのやくさ奴!』母がかう云つた。――云へ〳〵、もつと云ふことないか、いくら云つたつて、俺はそんな小言にうごかされるやうな男じやないぞ!――私はいくら父母達から云はれても腹もたゝず、悲しくもなかつた。かへつて、云へば云ふほど氣持よかつた。

『あねさん、ほつとかんせよ、あれに洗はせたらえゝんじや、洗つてやつたりしたら癖になるんじや、ほつとかんせ、茶碗やつて破れたら破れたんで後はしたらえゝんじや、さら(新)やると癖になるんじや!』父は妻にかう云つてゐた。

『ほつとかんせ、ほつとかんせ、癖になるはへ、ほつといて仕事に行かんけ!』母もかう云つてゐた。

『こら重吉、仕事に行けよ、腹立てゝうとさる(寢ること)つちやなんな、草刈にでも行けよ!』父は又かう云つた。

私は默つてゐた。

妻がコト〳〵音をさせてゐた。私が爐の中へ投げこんだ茶碗や膳箱をかたすけてゐるらしかつた。

『あら！茶碗破れとるなア！その、そつちの大きな方で食せたらえゝんじや、それ入れといてやらんせ、』母がかう云つた。

『親が働きよんのに子が遊ぶつちやなんな、仕事に來いよ』母は又私にかう云つた。

私はやはり默つてゐた。

父も母も仕事に行つたらしかつた。たゞ妻がこと〳〵音をさせてゐた。

私は氣ぬけがして馬鹿らしい氣がして來た。同時に皆に濟ないやうな氣がして來た、ことに妻が可哀相に思へて來た。

──たよりにしてゐる夫はのらくら、それに自分は子を姙んでゐる、少しぐらい身體の工合が悪くても無理して働かねばならない。實家の方へ逃げて歸ると云つたつて、子を姙んでゐる身でさうは行かない。本當に可哀相だ、うんと働いてやらなくちや──こんなことを考へてゐると頭もとの障子が開いた。私は恥かしいやうな氣がして、あわてゝ眼を閉じた。

『仕事に行かんで、一緒に仕事に行かんで、仕事に行かんと又怒られるでよ、』妻はそこへ坐つて云つてゐた。

『オヽ！』私は仰向に寝て眼を閉じたまゝ云つた。

『起きなはれ、起きて鎌研でつかはれ！』妻は尙かう云つた。

私は妻に濟まないと思ふと涙が出て來た。さつきのことを詫びやうかと思つたが、なんとなくてれくさい氣がしたので

『オヽ、先き行つとれ、後から行くは！』と云つてやはり眼を閉じてゐた。

『おいでなはれよ、先き行つとるでよ！』妻はかう云つてから障子を締めて行つた。

妻が立つて行つてから、私は寝たまゝ大きな欠伸をした。そして、身體を伸びるだけ伸ばした。

私が起きて行つて戸外へ出ると、でんが桑をつんで來た。でんは私の顏をゾロ〱見た。私は何だか敗かされたやうな氣がして、恥かしくなつたので、そのてれ隱しに、

『でんよ、茶沸かせ、飯たべるんじや!』と云つた。

『食べほら、まだ沸とるは冷めとれへんは!』とでんは云つた。

でんは家へ這入つた。私は戸口の小便所へ小便をした。

私が這入つて行くと、でんは私の膳と、飯の入つたザルを出してあつた。

私は膳を前に置いて何と考へるともなく、たゞぼんやり坐つてゐた。

『食べほら!』でんは私の顏を見て、ニヤ〱笑ひながらから云つた。

『でんのあほうよ、又火箸投げつけられるぞ!』と私は笑ひながらいつた。

『食べほら!』でんは又云つた。

『どら、飯食つて又寢たろか!』私はまけん氣でから云つた。

私の膳箱には新しい茶碗と皿が入つてゐた。

私が飯を濟ませて、門口の小川で鎌を研でゐると、でんが來た。

『兄やよ、豆やろか!』でんはから云つて、煎つた空豆を呉れた。

私は鎌を研ぎ、擔棒を持つて仕事に出た。

6

本が讀めないのに困つて了ふ。時間があつて讀まふと思つて讀みかけるとすぐ眠つて了ふ。努力しないと駄目だと力んでも駄目だ、目蓋が承知しない。二三年前まではうんと元氣だつた。晩の十時頃から朝の三時までぶつ通した夜は少なくなかつた。そんな時は仕事をする時によく居眠りした。田で鍬の柄を杖にして居眠りしたり草を刈つてゐて木の蔭で休んでそのまゝ一時間もたわいなく眠つたりしたことがあつた。その時分は、晝はいつでも眠むくて夕方からは洗つたやうに眼の熱がとれて眼がさへてゐた。それに此頃はだうしたのだらう、仕事をしてゐると眠くなくて、一寸本を見るとすぐ眠くなつて來る。本が眠り藥になつて了ふ。だうしたんだらう？やはり努力がたりないからだらうか？…身體が疲れるから駄目なのか知ら？働き過ぎるからかも知れない、いや、やはり努力が足りないんだ、人間は二時間位熟睡したら十分だ、と誰れからか聞たことがある、だうしても努力がたりないんだ。努力せずにこぼしてゐたつてしかたない。

——自分にはだうしても、元氣がない、物ごとをやりぬくと云ふ力はない、ずる〱のびにのばしておしまひには薄弱の幽靈(いうれい)でぐにや〱に消て了ふんだ。本當にくされ男だ。一寸云つたらよい家出のことでも他の者には話せてもだうしても父母達には話せない、二三日前に妻から聞た話であるが——妻と母とが草刈に行つてゐた時、母が妻に「重吉は又行くかい（家出）云ひよるかへ？』と訊たらしい。妻は『知らん！』と云つたらしい、處が母が、『お前も行くのなら、お前が持つて來た荷物をみな持つて行つて貰ふ、家にはいらない、』と云つたと妻が云つてゐた。妻にこの話を聞てからなんだかこの『荷物も全部持つて行け』と云つたのが怖い氣がする。荷物を持つて行けと云つたつて、持つて行かなかつたらそれまでだ、まさか父母達が燒て了ふやうなことはないにきまつてゐる。燒てしまつたつてそれには少も怖れはしない、しかし、何だかそれが怖しい氣がする。それじや父母達の前では目が開かないか？って、さうでもない、臆病だ

つて出來る。そして、喧嘩となればどんなことでも云つてのける。喧嘩でなくても、百姓の仕事の話や、世間話であればいい平氣で出來る。たゞ自分のことになれば、喧嘩の時か、泣きながらでないと云えないのである。だうした人間だらう、やくざなくされ男だ！私は妻が起きた時から、眼を醒してこんなことを考へてゐた。

今日町へ肥とりに行つたら、町の叔父の家へ行つて、何度もたのんであることだが、も一度たのんで、ぜひ叔父の方から父母達に話して貰つて、うまく家出のけりをつけやう！かう考へてゐると、妻が

『お茶沸たでよ！』と云つたので寢床から出た。

私は町へ肥取に行つて、もう正午飯に近くなつた頃町の叔父の家へ行つた。丁度叔父は、此四五日あまり暑さがひどいので仕事に行くのを休んでゐた。叔父はいつも土方をしてゐた。

私は叔父と暑さの話や、色々の話をした。しかし、私の話をきり出す折がなかつた。その内もう、自分でその話をすることがいやになつて、止すことに心で決めてゐた。と叔父が、

『いつ頃行くんな？』と云つた。

『家にいたつて本も讀めんのつて、お盆が濟んだらすぐ行かうか思ひよんぜ！』

『さうか、こちらでは勉强も出來んはなう！』

叔父はかう云つた。

私はそれから少し他の話をして叔父の家を出た。出た時はなんだか嬉しい氣であつたが、少しして考て見ると又淋びしくなつた。――叔父がさう云つて呉れたつて父母達が承知して呉れなかつたら正式には出られない、かへつて叔父が、又重吉がたのんで來たのだな、と思つていゝかげんなことを云つたのだと思ふと腹がたつて來た。しかし又、叔父

だつて父母達が好かないことを話して呉れと云ふのだからいやだらう、話せないのもつともだ、とも思つた。

えゝい、思ひきつていつか折を見て、自分で話こんで見る、私は心でかう決めて家に歸つた。

7

『家を出ること話しするんであつたら、妾が居らん時にしてつかはれよ！聞くのが氣の毒なのつてなア！』妻に私が、家を出ることを父母達に話す、と云つたら妻がかう云つた。私は妻のそのことばで、助けられたやうな氣になつてそれからは平氣で延してゐた。

雨は降つて水は澤山出來、田植も濟んだので、妻はお盆が濟んで四日ほどして實家へ行つた。七日は泊つて來ると云つた。それで私は七日の内に父母達と話ししなくちやならないのであつた。話さう話さうと思ひながらだうも話す時がない。いつか笑ひごとのやうに云つてやら、と思つて折を見てゐたがだうもうまくゆかない。

或日私は馬の草刈に行つた。一荷刈つて家へ歸ると母は布團のやうなものを縫つてゐた。その傍で、でんも何か縫つてゐた。

『アゝ』と欠をしてから、私は、土間のあがりたてから中の間へ仰向に寢そべつた。

『でんよ、何縫ひよんな、』と私は仰向に寢たまゝで云つた。

『…………』でんは默つてゐた。

『でんさんはかいゝ（母）の手傳じや！』と母はでんの顏を見ながら云つた。

『でんさんいつ學校へ行くんな！』私は又きいた。

『もう十二三日じや』
『九月の一日からか？』
『九月の二日からじや！』とでんは云つた。
『俺も九月になつたらすぐに〇〇へ行から、家におつてもしかたない、』私がかう云つたがでんも母も默つてゐた。
『うち、かゝ（母）九月に入つたらすぐに〇〇へ行くぜ！』私はやはり仰向たまゝで割合らくに云へた。
『行きたけりや行けだ、けんどわい（お前）一人行けるもんじやなし子から喚からつれて行つてどんなにして食つて行けや、いつまでも〇〇さんのお世話になつたつて末に困るだらうが、まアとゝ（父）にも相談してみいじやけんど、俺等やつていつまでも生きづくめじやないんじや、親が死んで了ふて、弟の處へ年とつて仕事が出來んようになつて戻つたつて困るぞ！』母は思つたよりおとなしくかう云つた。私は何だか嬉しい氣がした。
『でんも行くか、』私はかう云つた。
『…………』でんは默つてゐた。
『若いときはあつちい走り、こつちい走して面白いだらうがそれじや年とつてから困るぞ、若いときにもつと働とつたらよかつたと思ふたつてもう遲いんじや！』母はこんなお説敎をはじめた。私は氣持が惡るくなつたので、
『でんよ、泳に行くか！』と云つてから立つて家を出た。
妻が實家へ行つてから四五日たつたが、母に一寸云つてお說敎せられたきりでまだ父には話さなかつた。しかし、私はもう父母達に話すことはやめにしてゐた。妻が歸らないうちにお金を盜み出して、それを旅費にして逃げだす心算にした。（八月二十七日）



父の百ヶ日前後

牧野信一

一

彼が、單獨で清友亭を訪れたのはそれが始めてだつた。——五月の晝日中だつた。

「先に斷つておくがね、僕今日は用事で來たんぢやないよ。……藝者をよんで、そして僕を遊ばせてれ呉。」

彼は、玄關に突ッ立つて、佛頂面でそんな言譯をした。彼の姿を見ると、女將は眼を伏せて、默つて頭をさげた。それで彼は、一寸胸が迫つたので、慌てゝそんな氣分をごまかす爲に、決して云ひたくはなかつたのだが、强ひて晴々と笑つて

「僕だつて、斯うなれば時には獨りの遊びをしたいからなア！」などゝ妙な聲を張りあげて呟いだ。——斯うなれば……その言葉がもう胸にセンチメンタルな響きを殘した。

清友亭は、彼には慣れた家だつた。地震で潰れたり燒けたりしない前の半年位の

間、續けて來た日もあつたのだから、殆ど一晩おき位ひに此處へ來たのだつた、と云つても誇張にはなるまい。父親がお蝶といふ女と親しくなり、そして父親の事業の相談が忙しく東京などからお客が多かつたのだ。母が嫉妬深くて夜十二時近くなると、屹と彼を清友亭に差し向けた。母と彼と一處に乘り込んで、父の顏を赤くさせたことも度々あつた。

「旦那の百ケ日は、もうあさつてなんですつてね。早いことと……」

女將は、何となく手持ぶさたらしく、窓に腰かけた彼を手をとるやうにして正座に落つかせた。

「よくあさつてだなんて知つてるね。僕はおとゝひ迄そんなことを忘れてゐた。」

いくら慣れてゐる清友亭だつたにしろ、彼は自分が主になつて然も獨りで斯ういふ處に來たことはなかつたので、眼の据え處にさへ迷つた。彼は、食卓を前にして、瘦軀を延して、かしこまつてゐた。

「忘れる人はありません。――それに昨日お宅から通知がありました。」

「何の通知？」

「御招待――。」

「こゝに、はゝア！　阿母かしら？」

問ひ返すまでもなく彼は、心にその通りに思つたのだが、輕く空とぼけた。彼はそんな風に、わざとらしい淡々さを裝ふのが癖だつた。そして

「奧樣は仲々氣のつくお方ですよ。」などゝ、女將の口からカラお世辭を云はせたのは、寧ろ彼の猿智惠だつた。そんな馬鹿な心を働かせてゐるうちに、彼は、はつきり親身の者の姿が倒立して描けるやうな氣がするのだつた。

憐れな母親だ――彼は、さう思つて、如何にも自分には冷い觀照眼があるものゝやうに思ひ違へて、イヽ氣な迷想に

う。

「うちの阿母は、隨分可笑しな人だね。道徳を說くのは好いが、悲しい時、彼女は嫉妬心が强い、——卽ち臨終の前に馬脚を現し……。」

「もう濟んだことです。」女將は彼を叱るやうにさへぎつた。女將は、彼の心根の姿までを見極めてゐた。

「僕、今日は獨りでのうのうと醉ふんだ。」

「これからは、あなたが當主なんですからね、しつかりしなければいけませんよ、少しはお母さんの心にもなつてあげなくては……」

「さういふ評判だつてね、親父が亡くなつて以來、家が益々傾いて來たんだつてね？ 長男が何となく見得を切るのが惡いさうなんだよ。」

「惡い〳〵、お母さんがしつかりしてゐらつしやるうちは……」

お世辭かな！ と彼は邪推した。何としても彼には、この女將が彼の母をそんなに好く思つてゐるとは考へられなかつた。

「僕はね、この間君が阿母の見舞に來てゐたところを傍で見てゐた時、可笑しくつて仕樣がなかつた……。」

うつかり彼は、そんなことを云つて取り返しのつかぬ思ひをした。家庭のボロを好い氣になつて喋つてゐる自分の姿を考へて、救はれぬ思ひをした。それにしても、若し何處かに自分のやうな男があつて、傍からさんざんに其奴を嬲て、聞手になつて、その破境を眺めてゐたら、さぞ面白いだらう——などゝ思つた。

「家の阿母は何處がしつかりしてゐるかね？」

彼は、微笑を含みながらさう云つた。

「通つてゐますよ——。」

「だつて君は、さうは思はないだらう、……通つてゐるんなら有り難いが、少くとも君の眼に映じた彼女の印象はどうだ？」

「もうお醉ひになりましたね。」

彼は、未だそんなに醉つてはゐなかつた。ほんとうに彼は、この女將の見た自分の母親は、いゝ加減彼の輕蔑と一致するだらうと思つてゐるのだつた。

彼は、父の在世當時の幾つかの場面を追想した。それは皆な、低級な新派劇に見受ける光景と大した差違はなかつた。……事業熱に浮されてゐるお調子者の父親、母親はうわべでは舊家の格式を重んじ、夫や悴を古風な教育に屈服させようと努めるのだが、夫は彼女を輕蔑してゐた。

「十何年も外國で暮して來た男だ、妻を棄て子を棄て、家財を蕩盡して——。家柄もへつたくれもあるものか、家の方が一級下の身分なんだつてよ、そんなことを鼻にかけてる阿母なんだ。」彼女の夫は悴に、醉つてそんなことを云つたこともあつた。「やきもちやきなんだよ、〳〵、いゝ年をして……。」

そんなことを父が喋ると、面白がつて笑ふ彼だつた。そして獨りの心で、憂鬱になる彼だつた。彼は、既に嫁を娶つてゐる年輩の不良青年で、頭にも腕にも何の覺えもなく、漫然と父母の膝下に生きてゐた彼だつたから、父が妾を持つて家庭に風波が起つても、母の命令で父を迎へに遊里へ赴くことを、内心寧ろ花やかに思つてゐた。

こんなこともあつた。

「随分遅いなア！ また迎へに行つて來ませうか。」と思ひらしい口振りで彼に云つたが、叶はあの賑やかな父の居るところへ行つて一處になつて遊びたいのだ。彼は、友達とは何回かさういふ處へ行つたことがあるが、父と一處に酒に陪ふのが好きだつた。それに、父の席だと、藝者達が好い具合に彼をもてはやして呉れるので、彼はそれが嬉しくて仕様がなかつた。

「私も一處に行かう、作れてツておくれ。」と彼の母は云つた。

「それは好くないでせう。」彼は機嫌の悪い顔をした。「僕だつて實に迷惑なんですよ。清友亭なんぞへ行くのは——。」

「だから……」と母は一寸笑つた。「私も一處に行かうよ。今夜こそは、滿座の中で阿父さんにきつぱり意見してやる——。」

彼は、ゾツと身震ひした。……定めし阿母は、やるこ̀とだらうな——と思つた。

「お止めなさい〳〵。柔かく當らなければ駄目ですよ。……阿父さんに氣の毒だ。」

母と彼は、俥を連ねて清友亭へ驅けつけた。

「私は一寸買物をして行くから、お前は先へ行つてゐてお呉れ。」

母は途中でさう云つた。

彼は廊下でお蝶と出逢つた。彼は堪らない氣遅れを感じた。一寸挨拶が出來なかつた。

お蝶は嬉しさうに笑つて云つた。「今お宅へお電話を掛けるところ——。お迎ひの催促、トン子さんもゐますわよ。」

「大變だ〳〵、阿母が來る〳〵！」

「えツ！」とお蝶はたぢろいだ。

彼は慌てゝ父の座敷へ走つた。そして同じことを叫んだ。父は、尻をまくつて、出たらめな奴さんを踊つてゐる最中だつた。

「私はあつちへ行つてゐます。」とお蝶が云つた。

「いゝよ〳〵。阿母が納得するやうに話してやらう。みつともねえ！　五十代の夫婦だ。」

「……………」

彼は默つて、正面の父の席に坐つた。この前の時彼は、父とお蝶の前でトン子といふ若い藝者を推賞したら、或はその爲かも知れない、座敷の隅にちやんとトン子が坐つてゐた。彼は、惜しいことになつたと思ひ、トン子と父の顔を意味あり氣に一寸眺めた。

「馬鹿奴！」　父は笑つて、彼に云つた。

「來た〳〵。」と彼は小聲で囁いだ。廊下に、妙に冴へた足音がしたのだ。お蝶は逃げ出した。父は、彼の方を向いて大きく口をあけて見せた。

女將に案内されて、母が仕方がなく來たやうなしなをつくつて入つて來た。女將と初對面の挨拶などした。

「いろ〳〵御厄介になります。お騒がせして申しわけありません。」

女將は返答に困つて、お辭儀ばかりしてゐた。父と彼は、交互に盃のやりとりをした。

「皆な歸らないでもいゝよ。今日は家内中での遊びだ。」と父は云つた。母さへその氣になれば、それは一寸面白い――と彼は思つた。

「シンイチに氣の毒です。」と母は開きた直つて云つた。「勉强が出來ないと云つて、毎日これは滾してゐます。これは夜

でなければ勉強が出來ない質です。」

「さうか？」　父は彼を振り返つた。彼はにや〳〵と笑つて、盃を重ねた。

「私にばかり注さないで、お父さんにはつきり斷つたらいゝでせう。」

「………」

「親がこの態では、子供のしつけなんて出來る筈がありません。」　母は、醜くゝ落つき拂つてそんなことを云つた。

「御免〳〵、親父が馬鹿なら阿母が賢夫人だから、丁度いゝぢやないか。親父のやり損ひは愛嬌としてしまへ。――」

彼は、自分が玩具にされてるやうな不快を感じた。だが斯うなると彼は、上ッ面ばかりが安ッぽく狡猾になつて

「いゝですよ、阿母さん。」とワザと調子の低いしんみりとした聲を出して

「私だつてもう小供ぢやないんだから……」と云ひかけて、殘りは萬事胸に心得てゐるといふ風に、笑顔をもつて點頭いて見せた。何を心得てゐるんだか、さつぱり心に何の目當も無いのに――。その芝居は、愚かな母をうまく煽動した。母は、お前の可憐な心持は好く解つた――といふつもりらしく眸に力を込めて、微かに點頭いた。そして夫の顏を凝と視詰めた。

そこで彼は、父の立場を氣の毒に思つて

「それで……」と母に向つて云つたが、何と云つていゝか何んな言葉も續かなかつたので、たゞ如何にも物解り好さ氣にニヤ〳〵しながら、隣家から驅けつけたお座なりの仲裁人の氣持で、好い加減に口のうちで

「まアまア！。」と呟いだ。

何とかして母の氣分を紛らせて、父と母とお蝶と藝者達と、そして自分とが皆な有頂天になつて笑ひさんざめいたら

さぞさぞ面白いことだらう——彼はそんなことを考へた。さう思ふと彼は、四角張つて自分の前に端座してゐる母の格構を打ちくつろがせるやうに計ることが、難題であればある程興味深く思はれた。遊女は凡て汚らはしき者と思ひ切つてゐる母である。彼が嘗て、遊里を讃賞する詩をつくつたのを母に發見された時には

「腹を切る度胸があるか？」母は斯う叫んで脣を震はせた。

「ある一瞬間の心のかたちを、詩に代へたまでのことだ。」と彼は答へた。たしか彼が二十歳の時だつた。

「そんな子供は、私は生まない。」

「生まないと云つたつて、私は此處に斯うしてちやんと坐つて、息をしてゐる。」

「この親不孝者奴！」

母は夢中になつて、納戸へ驅け込んだ。間もなく母は、古ぼけたつゞれの袋に入つた懷劍を携へて來て、彼が繪草紙で覺えのある櫻井の驛の楠公の腕の如く、ぬッと彼の鼻先へ突きつけて

「さア！」と云つた。人間の心持が高潮に達した時は、芝居的になるものだ。演劇のワザとらしさを笑ふのは不自然な業かも知れない——この時そんなことを思つたのを彼は今でも記憶してゐる、

「これは私がこゝの家に嫁に來る時持つて來た岡村家の女の魂だ。」

「女の魂？」彼は思はず憮然として問ひ返した。

「こゝの家はどうか知らないが、女だつて貴樣のやうな腰拔にヒケを取るやうな女は、岡村の家にはゐないぞ。」

自分の里のことは何から何まで立派なものと据えておいて「こゝの家〳〵。」と此方の一味ばかりを、何の場合にでも弱蟲の例證にしたがる母の愚か、グッと彼の胸に醜く迫つた。

「私はこゝの家の長男だ、――口が過ぎる。」

「腰抜ざむらひの子か！」

「何だと…」

彼はカッとして、いきなり母の手から懐剣をもぎ取ると、キャッと云つて、鞘で空をはらつた。すると母は非常に慌てゝ

「もういゝ／＼。」と云ひながら彼の腕を確りとおさへて離さなかつた。彼は湯殿へ駆け込んで泣いた。

その時のことを思ふと彼は、自分に皮肉な嘲笑を浴せずには居れなかつた。「この愚かな負けン氣は母の系統だ。」

何年か經つた或る時酔つたまぎれの戯談に彼はそのことを父に話した。父は、膝を叩いて笑つた。――尤も彼は、父が嬉しがるやうに、出來るだけその時の母の言語や動作に尾鰭をつけて芝居もどきに喋つたのだ。そしてその時の自分のことは毛程も洩さぬのみか、返つて自分はその時も笑ひながら傍觀してゐたのだといふやうに白々しく仄めかしたのだ。

「斯んなところでは話が出來ないから、兎も角私達の顔をたてゝ家へ歸つて貰ひませう。」

母は更に切り口上で父に詰ると、彼に同意を求めて、

「ね、ジンイチ。」と云つた。彼は仕方なく

「それが好い、それが好い。」と親切ごかしの諧同をした。そして尚も母に逆に阿る爲に、見るからに苦々し氣な表情をして一座を眺め回した。彼が密かに想ひを寄せてゐる若いトン子は、部屋の隅に縮こまつて、この不氣味な光景をきよつとして眺めてゐた。彼は、彼女に大變氣恥しい思ひをした。……「ひとつこゝで非常に凛々しい[illegible]……

律氣者と見せて彼女の心に印象せしめてやらうかな？」彼は、うつかりそんな馬鹿な想ひに走つてゐた。そして彼は、あまりに小さく利己的にこだわるわが心を省みて、氣持が惡くなつた。「腰拔けさむらひ！」胸のうちで、彼はそつと自分を叱ッた。

「シンイチだつてあゝ云つてゐるぢやありませんか。さア歸りませう。」

いやに俺の名前を引ッ張り出すな！——彼はそんなに思つて迷惑した。

その時まで默つてゐた父は突然

「煩せエなア！俺ア斯うなれば何と云つたつて今晩は歸られねえよ。」と怒鳴つた。それと同時に、さつきからむしやくしやしてゐた彼の心はポンと晴れやかに割れた。——親父！無理もない／＼。これから家へ歸つて大ッぴに意見されちや誰だつて堪るものか、居直れ／＼——彼は心でそんな風にけしかけた。普段母の前では、何の口答へもせず我儘放題にさせておく父の態度を、彼は歯がゆく思つてゐるのだ。

母は啞然として、彼の方を向いた。彼は母の味方だと云はんばかりに、物々しく眇細をして何となく點頭くやうに母の視線をうけた。

「歸つてくれ／＼、手前えの顔を見るのも厭だア！」父の聲は上づッてゐた。母に亂暴なことを云つたことのない父だつたから、餘程の決心の上で無氣になつたらしい、言葉が止絶れるとその厚い唇が性急に顫えてゐた。自家でなら、もつと／＼さんざんにやられても默つてゐる父なのに、やつぱり周圍の眼を慮つて斯んなに逆せたのか！彼はそんなに思つて一寸父を輕蔑した。

「まア默りなさい。」母は落ついて口を切つた。「私はあなたに罵られるやうな惡いことはしません。自分勝手なことばかし

ゝてゐて人を馬鹿呼ばゝりをすると云は何事です。云ふことがあるんなら、第一あたり前の言葉で話して下さい。」

「ぶん撲るぞツ！」

「言語道断だ！」さう云つて母はセヽラ笑つた。

「面を見るのも厭だア。あゝ厭だ〱。」父はさう叫んでドンと卓を叩いた。

「大旦那！何を云つてゐらつしやるの！」見るに見兼ねて初めて女將が口を切つた。「そりや奥さんが斯ういふ處へいらしやるのは惡いでせうが……」

その聲を耳にすると母は直ぐに、眼眦を鋭くした。女將はいくらか亢奮して、頓着なく續けた。おそらく父の味方だつたに違ひない。「奥さんや若旦那の心持にもなつてあげなさい。――」

彼は思はず首を縮めた。そして、怖ろしい鬱ツ面をしてゐるものゝ何となく間の拔けてゐる父の横顏を、そつと偸み見た。――「阿父さんは藝者などに大旦那〱なんて煽てられて、いゝ氣になつてゐるんですよ。」いつか彼は母にそんな告げ口をして、母を厭がらせてやつたこともあつた。

女將にさう云はれると、さすがに父も苦に返つて氣拙さう苦笑した。で一寸靜かな調子になつて

「貴樣が斯んなところに出しやばるといふ法がないんだ。――折角の賢夫人も笑はれ者になつてしまふぞ。」

「僕が惡かつたんだ。僕が阿母さんを無理に此處に伴れて來たんだ。」と彼は云つた。

「この年になつて何が樂しみで斯んなところへ遊びになんて來るものか。」父は彼には見向かず、母に稍々ねんごろに話した。その種のことは折々父が泌々といふことで、それは彼には嘘とは思はれなかつた。尤も父の喋ることは、どんな馬鹿〱しいことでも、それはそれなりに感情を、彼の如く僞つたりすることはないらしい――彼は常々父をさう思つ

てゐた。が、彼は、露悪家ではない（それ程氣の利いた心の働きを持つてゐる彼ではない。）けれど、父のそんな質を好きがつたり、尊敬したりする程の孝行な悴ではなかつた。父が若少し續けようとすると、

「そんなことは、もう聞きたくもありません。」

母は、語尾に傍から見ると、實に異樣な力を込めて云ひ放つた。……「どうせ親がろくでもないんだから、子供だつて……」

彼は、アツと思つた。――ひとり自分はいゝ子になつて、具合よく母を瞞着してゐたつもりだつたら、やつぱり母にはこの俺の心根が見へ透いてゐたのか！

さうは氣附いたものゝ淺猿しい彼は、憤ツとして口をとがらせた。父は、その彼の心の動きを悟つたらしく、寂しさうな苦笑を浮べて、貴樣がこゝで阿母に逆ふのは淺はかの至りだ――といふ困惑の色を現した。

「歸ると仕ようかね。」父はさう云つて、冷くなつた盃をグツと飲みほした。

彼は、後架にたつた。袂で顏を雁ゝたお蝶が、廊下の、庭に面した薄暗い窓の隅に凝ツとたゞずんでゐた。

二

「僕かかうやつて、……」彼は、輕い冗談でも云つたつもりで、ひようきんに胸を張り出した。

「どうだらう？　似合ふかしら？　似合はないだらうな。修業をすればなれるかね？　だが何としても親父のやうに、」

事業にかこつけることが出來ないのは、弱つたなア！」

冗談にせよ、父親を引合ひに出したのを、女將は一寸あきれたらしかつた。彼は、自分が如何程武張つて、そんなこ

とを云つたところで何の自分にそんな甲斐のないことを知り拔いてゐるのだが、獨りで斯ういふ處へ出入することが、自分にとつても不自然な氣持を起させない位ひにしたかつたのだ。

「ハツハツハ……五十三で死んでしまつては親父も氣の毒には氣の毒だが、それもまア好いだらうさ、あと十年生きたところで僕が親父を嬉しがらせることがあるとは思へない。……尤もさういふ考へ方はあまり好くはないが――」變にすらすらと彼は口を切つたが、終りに近づくと愚圖々々と口のうちで、ごまかしてしまつた。

「今でもトン子さんのことは、思つてゐらつしやるの？」

「あゝ思つてゐるね、大いに思つてゐるね。」

それ程でもなかつたが彼は、やけにはつきりした聲を擧げた。だが、さういふと同時にふつと周子のことが浮んだ。結婚してもう四年になるか！　わけもなくさう思つた。

「それで？」

「それで今日來たといふわけでもないんだがね……」

彼は、さつき使ひを頼んで、お蝶に來て呉れるように云つた。お蝶は、彼の家へ手傳ひに行つてゐるので今直ぐには來られないが、といふ返事だつた。

「東京からお客様ださうです。」

「ふゝん。」――叔父達だな、と彼は思つた。

「今日はお歸りになつた方が好いでせう、お忙しいんでせう。」

「生意氣云ふな！」彼は首を振つた。女將は、失笑を堪へた。――「來られないんなら、夜でもいゝから來て貰はう、さ

う云つてやつておいてくれ――兎も角藝者を大勢呼んでくれ。今晩は俺は家には歸らないんだよ、誰が迎へに來ようと歸らないんだよ。阿母が迎へにでも來れば面白いがなア……」

三

「五六日うちには、屹度歸つて來るから……。」彼はさう云つて息を一つのんで「安心してゐていゝ。」と付け足した。

お蝶は、默つて點頭いた。

「僕にだつて相當の了見はあるんだから――。」彼は更にさう云つた。ところが、相當の了見、そんなものは可笑しい程さつぱりと何んな形でゞも彼は持ち合せてゐなかつた。

母や親類の者共が、どんなにお前を排斥したからとて、斯うなれば最早自分が父の代理が務まるから、決してお前の身の立たぬやうにはしない――彼は、さういふ意味のことをそれとなくお蝶に傳へたつもりなのだつた。

「若旦那ひとりが、賴みです。」お蝶は眼を伏せて微かに呟いた。

彼は何の分別もない癖に、そんなことを云はれると、何となく自分が出世したやうな喜びを感じて

「阿母などが何と頑張らうと、僕は既にわが家の主人公なんだからなア。」などゝ云ひながら尤もらしい顏付をして、ゆるゆると煙草の煙りを吹き出した。

「無論ですわ、奧さんが若旦那に相談をしないといふ法がありませんよ。」

お蝶は、斯ういふ風に彼の母を非難すると彼が益々有頂天になるのを知つてゐた。お蝶や今迄父のところへ出入してゐた北原や石川などゝいふ老人を前にすると、彼は無暗と概念的に母を攻擊するのだつた。

陸ではそんな風にするもの〻、彼が家に歸つた時母がいろいろと——例へば、持家は悉く燒けて仕舞つたこと、地代は震災以來一つもあがらぬこと、父が莫大な負債を殘して行つたこと、それを銀行に何と始末することか、方々に投資した財産を何うして回收すべきか？お前はもう東京へは出ずに家の後始末をしなければならない——といふこと……そんな相談はいろいろと彼に持ちかけるのだが、彼は何の返答もしなかつた。横を向いて、間の拔けた顔をしてゐるばかりだつた。暗い相談ばかりを選んで持ち懸けられるやうな不平を感じたりするのだ。——どんな悲しい破境に陷つても、何か其處に面白い明るさがなければならない、例へば家が破産と決つたら、整理するなんていふことは止めて、あるだけの物で各々享樂した方が増だ——父が死んで以來彼の頭は常規を脫してゐるに違ひない、そんな幼稚な享樂派の文學青年でもが云ひさうなことを、稍ともすれば心から考へたりするのだつた。

つい此間も、母は彼に斯んな事を云つた。

「この先お前はひとりで、暮しが出來ると思つてゐるの？」

「……」彼は出來るとは思はなかつたから默つてゐた。そんな抽象的な（彼は、面白くない話になると直ぐに抽象的だなど〻決めて、手前勝手な憂鬱を感ずるのが癖だつた。）……そんな女々しい豫想に怯かされるなんて恥とする——母の言葉でほんとに彼は怯かされたもので、虛勢を示したのだ。

「出來ると思ふんなら、東京へ出るのもいゝでせう、だが私にはそれは信じられない。お父さんはお前にこそ云はなかつたらうが、お前は學校を卒業してから、もう何年になると思ふ、學校を出た年には新聞社へ務めた、その時だつて學生時分に比べて月々三倍も餘計なお金を取寄せた、その後何年か家にごろ〳〵してゐたが……。

「止して下さい、止して下さい、何をして來やうと、それでやつて來られたんだから好いぢやありませんか……」彼の

ものは凡て俺の物なのだ、母親などが女の癖に、既に一人前の男に生長した長男に向つて、兎や角云ふのは非禮なことだ――彼はさういふ圖太い了見を示した。その種の返答は、父の在生中は母に向つておくびにも云へない彼だつた。今となつたら少しはこの俺を尊敬したら好いだらう、第一實印をこの俺に渡さないといふのからして間違つてゐる……彼は、そんなに思つたりした。

「此頃はまた東京だ、東京と聞くとゾツとする、女房や子供は家に置きッ放しで、何をしてゐるんだか解つたものぢやない……」

母が一寸無氣になつて、さう云ふと、彼は意地の悪い笑ひを浮べた――勿論、何をしてゐるか解つたものぢやないよ、東京へ行けば獨りでのうのうと出たら目な享樂に耽つてゐるんだぞ――彼は、母を脅迫したつもりなのだ。地震で家が潰れて以來彼は東京へ出て、以前關係のあつた新聞社の社會部の下級社員に採用して貰つたのだ、そして小膽な彼は汲々として働いてゐるのだ、母達の懸念とは全く反對に、母や妻や子供のことばかし案じながら、文字通りに善良な日を過してゐるのだ。

「お父さんが丈夫な時分は好いだらう、私だつてお前が思つてゐる程のお金持ぢやないよ、それだのに此頃は、この前に務めた頃に比べると五六倍も餘計なものを……」

「僕は、これから東京で事業を起さうと思つてゐるんです。」彼は、てれ臭さのあまりそんな出たら目を口走つた。彼は新聞社へ入つた當座は、お調子者だから氣輕くぽんぽんと飛び廻るので大分うけも好かつたのだが、近頃では次第に同僚達に安ッぽい肚を見透かされて、今では社内の輕蔑の的になつてしまつたのだ。

その癖彼は、自家に戻ると母や細君やお蝶の前では、夢にもない大きな法螺を吹くのだつた。例へば もう半歳もす

れば社會部長に昇進するとか、社長に最も信用のあるのは自分だけで、現在では社長の第一級の秘書を務めてゐるとか、だから一ヶ月のうち半月は休んでもいゝのだとか、だからそれは一家一族の名譽にもなることだから、金錢などを念頭に置いてゐられる場合ぢやないとか……

「事業はお父さんで懲りないのか。」

「僕だつて一つ位の事業はやりたいものです。萬一僕が一つや二つの事業に失敗したからとて、それが何です。親父は幾つとなく事業をやつて皆失敗したぢやありませんか、僕だつて僕だつて……。」

「そんな資本金はもう家にはない。」

「親父が皆な費つてしまつたんだ、阿母さんだつて一處になつて面白い思ひをしたに違ひない。一等馬鹿〳〵しいのは僕だけだ。」清友亭位ひで少々費ふのが何だ――彼は、母が意に留めてゐないところにこだはつた。

「……」母は、あきれて横を向いた。そして唇を嚙んだ。

四

彼は、お蝶に酌をされながらチビチビと酒を飲んでゐた。縁側には、五月の明るい陽が一杯射してゐた。周子は、眠つた子供を抱いて、お蝶のことを姐さん〳〵と稱んでゐる若い藝者の百合子を相手に、縁側の隅で呑氣な雜談に耽つてゐた。彼が清友亭へ來て以來、一週間近くにもなる。酒に飽きると、稀に彼は母の家をのぞいたが、一時間も居ずに引き返した。いつの間にか、周子も子供を伴れて此處に來てしまつたのだ。

「あたしだつてもう家には歸れないんだから、あなたが東京へ歸るんなら一處に伴れてつて下さい。」周子は、彼とお蝶

との話に氣づいて呼びかけた。周子は、彼の味方になつて叔父と母の前で爭ひをしたのだといふことである。それが爲に彼が内心どんな迷惑を感じてゐるか、彼女は知らなかつた。

「東京へいらつしやる、いらつしやらないは別として、若い奧さんまでが此處に來てしまつてゐるのは好くありませんよ。」

「何だか私たちが、蔭の糸を引いてゐるやうにお宅の方に思はれる氣がします。」

女將とお蝶は、迷惑がつてさう云つた。周子は苦笑ひしてゐるばかりだつた。彼は、憎々しく周子の樣子を打ち眺めた。

周子が來て以來、夜になつても賑やかな遊びも、トン子の顏を見るわけにもゆかないのは彼は不服だつたが、斯んな風な狀態で周子達と共々此處に引籠つてゐるのも「一寸アブノルマルな感じがして惡くもない。」などと思つた。嘗て「眞劍」とか「緊張」とか「深刻」とかいふ文學的熟語に當てはまるやうな經驗を持つたことのない彼は、一寸夢見心地になつて自分の現在の境遇を客觀して見たりした。　父の急死から一家の氣分が支離滅裂になり、長男が慌てふためくこと、彼の細君が常に彼の母に反抗し始めたこと、母は自分の兄弟達と相計つて愚かな長男を排斥して善良な弟を擁立しようとすること、長男が嫉妬心を起すこと、そして彼は父の馴染だつたお茶屋に細君と共々滯留して、お蝶達を集めて不平を鳴してゐること――そんなことを思つて見ると彼は、今更のやうに自分が「非常」な境遇に面接してゐるやうな氣がするのだつた。そして小說とか芝居とかに見る「惱める主人公」に自らを見立てゝ、自ら「深刻」なつもりのヒーローになつて安價な感情を煽りたてた。彼は、ワセダ大學に在學當時、クラスの文藝同人雜誌に加つたことがあつた。そして彼等の議論に接して憧れを抱いたことがあつた。彼等は非常に「眞劍」だつた。口を開けば必ず「藝術」と

叫び「現の悩み」を歌ひ、「血みどろに生きる」ことを誇つた。「十三人」といふ名前の雜誌だつた。彼は、去年一年間家を追はれて熱海に暮した時、退屈のあまり「十三人」の頃の自分のことを長く書き綴つたことなどを、ふと思ひ出した。……彼は、今の事件を小說的に書くことを考へて見た。すると彼の氣持は、おどけて散亂してしまつた。事件などには、何の興味も持てなかつた。父の死、破產、長男のこと、母のこと……それだけで、キレイに片づいて了ひ何の細い感情も伴はなかつた。折角の「深刻」も「緊張」も後かたなく吹き飛んだ。

「さうだね、周子は兎も角あつちへ行つてゐた方が好いねエ。」

「あなたまでが、そんなことを云ふんですか。」周子は頑な、眼つきで、恨めしさうに彼を視詰めた。

「あゝ、さうか〳〵。」彼は、輕々しく點頭いて「まア、そんなことはどうでもいゝや、皆な心配するねえ、おいチビ公！　貴様ひとつ踊りを踊つて見ろ。」

藝妓をしてゐるお蝶の養女お光をつかまへて、彼は威張つた。が、彼の氣持は未だ一寸小說の空想に引つ掛つてゐた。ふと「十三人」の頃のことなどを思ひ出してゐた。同人にはなつてゐたが彼だけは仲間脫れにされてゐた。「彼奴は人生を遊戲視してゐる」とか「末梢神經の奴隷だ」とか「甘くて浮氣な文學青年だ」とか「人生の暗い悩みなんてに氣附かないのだらう」とかあんな奴がどうしてわがワセダ大學の文科などに入つて來たのだらう、幼稚な戀を描いてゐるとしたら慘めなものだ」とか「カフエーにでも行つて歌でも歌つてゐればいゝんだ」とか「不眞面目で、酒飲みで……」とか、そんな風に彼等から片づけられてゐたが、そして彼はそれでは一寸味氣ない氣もしたが、人生を遊戲視してゐるも、してゐないも、そんな理屈は考へたこともなかつたし、彼等からさう云はれると、或はさう云ふ種類の人間かなア？と思はれもした。といふた處で、何とするわけにもゆかず、有耶無耶に彼等から離れて仕舞つたまでのこと

だ。そして、洞ろで悲しいやうな心を抱いて東京を離れた。

「あゝ。」と彼は思はず溜息を洩した。「俺は何といふ阿呆な人間だらう、何といふ頼母しくない男だらう。」そんな風に鞭打つて見ても、何ら感情が一點に集中して來なかつた。彼等の所謂「藝術的」にも「眞劍」にもなつて來なかつた。

「あなた！何を考へてゐるの？」

「いや、兎も角、お前達を伴れて東京へ行くとなると……」

「心細いの？」

「うむ……」

だが彼は、別に心細くもなかつた、と云ふてその反對のものでもなかつた。

「古い十三人のお友達だつてあるでせう、その人達の中には一人や二人は、あなたの思案にあまることは、相談になつ呉れる人だつてあるでせう、河原さんといふ人や石黒さんといふ人や……」

そんなことを云はれると、彼は急に變な心細さに襲はれて

「お前に斯んなことを云ふのは、惡いことだが――」と口のうちに辨解しながら

「俺は、實は彼等をあまり好んでゐないのだ。」と云つた。それは彼の、小人らしい卑しい自尊心だつた。正直な心では、寧ろ斯う云ひたかつたのだ――俺のやうな男とは、彼等の方がほんとには附き合つて呉れないのだ、普段びよこびよこしてゐる罰で、斯んな時には慘めなものだ

「そんな考へだから駄目なのよ、そこのとこだけは沒くなつたお父さんは偉かつたんぢやないの。隨分大勢の人が出入

りしたが、誰とでも親しく、そのことをお母さんからあんなに厭がられても、誰にだつてお父さんは厭な顔なんて見せたことはないぢやありませんか。」

「死んだと思つて、讃めるな。」

「あなたの心は曲つてゐる――お父さんが繰り反し／＼云つてゐた通り、お蝶さんの方と家を持つたのは、あれは確かにお蝶さんの爲ばかしぢやないのよ、確かにお客の爲よ、自家だとお母さんが厭な顔をするもので……」

「俺ア、手前んとこの親父は大嫌ひだ。」

「今は、あなたのお父さんの話をしてゐるところぢやありませんか。」

「熱海へ行つてゐる時分、貴様は俺の親父の惡口ばかし云つてゐたらう、顔を見るのも厭だなんて云つたらう。」

「あなただつて云つたぢやないの。」

「默れ、貴様の了見は下品だ――第一俺は手前の阿母が、これまた氣に喰はないんだ、あのペラペラと薄つぺらな舌を突き出して愚にもつかない自分好がりの文句を喋る格構は想像しただけでも鳥膚になる――アヒル婆アだ、貴様も好く似てゐる……。」

「自分の阿母さんは、どうだ。」

「……」

お蝶と百合子が、まアまアと云つて彼をなだめたが、彼は諾かなかつた。

「貴様の親父は惡黨だ――金を返してくれ、金を返してくれ、あの紙屑爺のおかげで家では二萬圓も損をした。」

「うちのお父さんのおかげで、あなたのお父さんは借金することが出來たんだ、あなたのお父さんみたいな無頼漢は、

小田原でさへちやんとした人は相手になんてしませんよ。」

「さうだらうよ、さういふ人のところに、巧みな甘言を用ひて附け込んだ貴樣の親父は、惡漢だ。質が好くないといふものだ。手前えなんぞは何處の馬の骨だか解つたものぢやないぞ！」

初めのうちはそれ程無氣になつてゐた彼ではなかつたが、ふと二萬圓といふ言葉が浮ぶと、父が死んで以來心の調子の狂つてゐる彼は、そんな種類の金のことなぞを耳にしても、カッと取り逆せて夥しい癇癪を起すのだつた。そして、そんなに古臭い、彼の母でもが云ひさうな文句を叫んで、何の罪もない周子を虐待した。口先でばかり巧みなお座なりを喋つて、娘の緣家先などを餌食にした周子の父親の心根を想像すると、その片割れである周子の色艶までに憤懣を起したりした。「男ならば、それであればこそキレイな親情を示していゝわけだ。」周子にそんなことまで云はれたこともあつた。

つい此間、彼が母と共に父の書類を整理した時、偶然周子の父親の名前になつてゐる借金證書を發見して、二人とも啞然とした。自分勝手に周子などゝいふ女と結婚したのが、父や母に對して慚愧の至りに堪へぬ氣を起したりした。

「周子の家の方は、一體この頃どうなつてゐるんだらう？」母はいくらか彼に遠慮しながらそんな風に訊ねた。

「どうだか僕は、少しも知らない。」彼は不機嫌に呟いだ。尤も彼も母も、前から周子の父親があまり質の好くない人間であることは薄々知つてゐた。

「あんな家は駄目だ、失敬だ、……俺に對して失敬だ。」彼は常規を脫した聲を擧げて、母に媚を呈した。

「どうも困つたものだ。」母はさう云つて、見るからに不快氣な、乘鉢な格構をした。すると彼の胸に、もう一つ別な心が浮んだ。……困つたとは何だ！何でもを自分のものと考へるのは圖々しいや……そんな風に思つて彼は、一寸母をセ

セラ笑つた。そして母が今迄周子に執つた態度を回想して、あれぢや周子が口惜しがるのも無理はないと思つたり、また母から見たら、さぞさぞ周子までが心悄いことだらう、何と淺はかな母親よ――など丶思て反つて母に同情を寄せたりした。

「あの親父は、實に酷い奴ですね。」彼は、輕い遊戲的な氣持だつた。

「だから御覧なさい、周子だつて似てゐるところがあるぢやないか、あの子はなかなか怖ろしい心を持つてゐるよ。」

「どうも僕にも氣に喰はないところが！」

「あれぢやお前が時々癇癪を起すのも無理はないと私は思つてゐるよ、生意氣だつたらありやアしない！あんなのが女優志願なんてするんぢやないかしら！」

「志願したつて仕様があるものですか、あの顏に白粉を塗つたらのつぺら棒だ――。」

「クツクツク……」母は、嬉しさうに笑つた。「まつたくね！遠國の者は氣が知れないからね。」

「もつとも彼女には惡い氣はないですよ、惡氣でもある位なら、い丶んだが……」彼は巧みに母を操つてゐる氣がした。

「そりやアさうね、その日暮しのそだちをして來た者は御苦勞なしだよ。……だからお前がそこをしつかり教育さへすればい丶んだ。」

「なまじイ、家からなど貰ふと反つて氣詰りでせうね。」彼は多分の皮肉を含めたつもりだつたが、母にはそれが通じなかつた。

「さうともさうとも。」と母は易々と點頭いた。するとまた彼は、自分だけで周子に憤懣を覺へた。自分よりか、この阿母の

方が矢ッ張り好人物なのかな？　そんな氣がした。

「これからはお前の代なんだから、痩せても體面を汚さぬようにしなければいけないよ。」

彼は、もう少しで噴き出すところだつた。

――彼は、若き男でありながら卑屈な姑根性なるものが、よく解る氣がしてならなかつた。母の態度に、それを見る時、それを興味深く思ふこともあつた。飽くまでも執念深く發揮すれば面白いが――そんなに思つて不足を感ずることさへあつた。若し自分が、女に生れて、そして年を取つたら、古めかしい型通りに卑屈で頑[illegible]な、さぞさぞ意地の惡い鬼姑が出來あがることだらう――彼はそんな空想に走つたりもした。

「あそこの母親もね……」

「フッフッフ、……」

自分達だけは小高い丘に坐つたつもりで、他人を冷笑することの好きな母と子は、不氣味な親しさに溶け合つて、卑しい笑ひを浮べた。

「あたしはあなたを見損つた。實に男らしくない人だ。」周子は、お蝶達の前もあつた爲か、蒼い顔をして唇を慄はせた。「今迄お金のことなどに就いては、如何にもキレイな顔をしてゐたのは大嘘なんだ。親同志が話し合つてしたことを……」

「親同志、なる程ね、得をした親の方はいゝだらうが、此方は損をしたんだからね、……」彼は落付き拂つた態度をした。だが、なる程今迄は周子の前では、度胸が大きく金錢などに就いては非常に高潔振つてゐたことを思ひ返して、一寸我身に自ら矢を放つた思ひがして小氣味好かつた。

「……何か藝術家だ！　友達などに會ふと體裁の好いことばかし云つてゐるくせに……。」
「お前にも今迄は體裁の好いことをワザと云つてゐたんだよ。」
「大うそつき！　そんな嘘つき藝術なんて……」
「あゝさうだ／＼。俺は藝術家でもなんでもありませんよ、私には、あなたのやうに高尚な氣分なんて生れつき持ち合せないんですからなア――だ。」

大分醉の回つて來た彼は、ほんとにさういふ氣で、憎々しくふてくさりながら、ニユツとひよつとこ面をつくつて、周子の鼻先へ突きつけた。

「死んでしまへツ！」周子は金切聲を擧げて叫ぶと、思はず彼の頬を力一杯擲りあげた。女が、さういふ形で極度に亢奮したのを見ると彼の心は全く白々しくほぐれてゐた。そして、得體の知れぬ快さを覺えた。

「理屈はいりませんから、先づ第一にお金を先に返して貰はうかね、エツヘツヘ……」

彼は、もつと／＼周子を怒らせてやりたくなつて、にや／＼と笑ひながら

「お金は返せば濟むことです、私が享けた恥はどうして呉れますか？」

「御尤も／＼。――だが一萬圓は一寸好いね。あゝ、思つても好いね……」さうふざけて云つたが、ふと彼はわれに返ると、頭は夢のやうにとりとめもなく煙つてゐるばかりだつた。

「あなたが、そんな見下げ果てた了見だからあたし獨りが家中の者から馬鹿にされるんです。あなたは自分の妻といふものに對して、一體どういふ考へを持つてゐるんですか、それから先に聞かせて貰ひませう。」

「あゝ、面白い／＼。」彼は、妙に花やかな氣持になつて、ふらふらと立ちあがつた。

「お光、俺と一處に踊らう／＼。――周子も、もう止せ／＼、……ところで、梅ケ枝の手水鉢――といふ唄を皆なで合唱しよう。」

周子は、唄のことは知らなかつた。それで、醉つ拂ひにからかふのは止めようとでも思つたらしく、赤い顔をして横を向いた。

この機會を取り脫しては、また厄介だと悟つたお蝶は、二三人の若い藝者に三味線を引くことを命じた。「梅ケ枝の――」ではなく、彼の知らない賑やかな囃しが始まつた。お光が氣乘りのしない掛聲をして、鼓を打ち、太鼓をたゝいた。

「あゝ清々といゝな！この分なら親父の二代目だぞ……」

ふつと彼は喉が塞つた。

彼の醉つた頭は、意久地もなく無反省に、明るく溶けてゐた。

「合掌！」わけもなく彼は、そんな氣がして、思はず靜かに眼を閉ぢた。

――父上、私は何もいりません、私はあなたの凡ての失敗を有り難く思つてゐます。

暫くあなたに伺ひませんでしたね、――この世に在ることも、無いことも、そんな區別はもう止めに仕様ぢやありませんか！どうですか、解るでせう、……少しも私は悲しいだの、寂しいだのなどゝは思ひません、愉快ぢやありませんか！今日は、またひとつ大いに飲まうぢやありませんか。

いつか私が、あなたから招ばれて、どうも阿母や周子たちが困つた顔をするので、それでも私は行きたくつて堪らず、とうとう彼等を僞つた私は、テニスのシャツ一枚でラケットを擔いで、自轉車に飛び乘つて、こゝに驅けつけたこ

とさへありましたつけね、お客人や藝者達に私はあの時隨分キマリの悪い思ひをしましたが、あなたは平氣で、少しも笑ひませんでした。笑はないあなたを反つて私は可笑しく思つたりしましたぜ——

まア、そんなことはどうでもいゝんだ。あなたは貧乏になる時の私を大變心配してゐたらしいが、そんな臆病は今の私にはすつかりなくなつてゐます、……あなただつてほんとは貧乏だつたんぢやないですか！あの時分は……。

彼は、そんな他愛もない文句を、とりとめもなく思ひ浮べたが、それはたゞ徒らに喫す煙草のやうに何の心に懸はりなく、心は白く淡然と明るく澄んでゐるばかりだつた。

お光は、精一杯喉を振りしぼつて、雛のやうな叫び聲を擧げて、切りに太鼓を打ち續けた——

お光、お前も可愛想だよ、馬鹿〳〵しいからそんなに精を出すのを止めろよ、何としても俺ぢや駄目だぜ。お前達もこの先どうなつて行くのか？そしてこの先この俺もどうなつて行くのかな？………

彼の、もろい頭は更に感傷に走つてゐた。

お蝶も、皆なと一處になつて三味線を引いてゐた。

その時、隣室に寢かせてあつた彼の三才の子供が甲高く、怯えた泣聲を擧げた。——不興氣に、ぽかんと一座のこの光景に見入つてゐた周子は、慌てゝ隣室へ驅け込んだ。

彼は突然、くしやツと、一見すると笑つたやうに口もとを引きつらせた。それが彼の、泣き癖なのだつた。彼にグツグツと喉を鳴らしながら、一杯涙の溜つた眼を梟のやうに睨開いてゐた。そしてお蝶達が隣室に遠慮して三味線の手を止めやうとすると、彼はきゆツと唇を歪めた儘仰向いて、もつと續けろ〳〵といふ意味のことを、何かを叱くやうな背構に差し出した兩腕を切りに上下に振り動かせて、彼女等にすゝめた。

五

「阿母さんだつて、決してあなたの爲にならないやうな事を考へてゐなさるものですか。第一ですね、斯んな場合にあなたが家をあけて、その上あんな場所に泊り込んでゐるなんて外聞が惡いぢやありませんか。」

「僕は、歸つてはやるが、阿母とも岡村清親とも、顏を合したつて口は利かないよ。承知だらうね。」と彼は念をおした。清親といふのは彼の母の二つ年上の兄だが、彼はこゝで「叔父さん」といふのが業腹だつたので、わざと長たらしく姓名を呼んだのだ。

「私が一處だから大丈夫さ。」宮原は彼を作れ歸りさへすれば役目が濟むとでも思つてゐるらしい無責任な調子だつた。宮原は彼の父が在世時代から、彼の家の細々した走り使ひなどをしてゐた父より餘程年上の年寄である。一寸宿屋の番頭のやうな型の男で、カラお世辭が巧みで、父の居た頃は彼は殆ど言葉を交したこともなかつた。

「話だけは、はつきり決めて置かなければなりませんよ。その上でならあなたは東京へ行かうと、自分の好きなことをやらうと差支へありません。」

「話とは何だ？好きなことをやらうとやるまいと餘計なお世話だ。それに、もうこれからはそんな餘裕のある身分ぢやない。」

「そんなことあるものですかね、あなたさへ確りしてゐれば、安心なものさ。」

「僕は何も心配なんてしてはゐない、確りするもしないも、僕は僕だ、……」

「若いうちは、元氣があつて羨しいね。」

「チエッ！何云つてやがるんだい。」

宮原はどんな酷いことを云はれても怒らない男だつた。それをいくらか彼は、附け込んでゐた。

醉つて足もとの危い彼は、宮原に促されて不精無精に清友亭を出た。周子も暫間、宮原に伴れられて歸つたが、何としても厭だと云つて今は宮原の家に居るといふことだつた。

彼は、宮原の後ろに從つて、假普請で建付きの惡い格子を閉めて自家の玄關を入つた。彼の胸は怪しく慄へた。子供の時分、運動會で出發點に竝んだ時、これに似た氣持を經驗したことがある――などゝ彼は思つた。

清親と母は、物思ひに沈んでゐるだらうと思つた彼の豫感を裏切つて、割合に明るい顔をしてゐた。清親は正面に大胡坐を掻いて、酒を飲んでゐた。そして彼の顔を見ると、確かに笑つてゐた顔を急に六ツケ敷く取り直した。

彼は挨拶もなく、敷居傍にぬツと坐つた。その彼の態度を、母が苦々しく感じたことを悟つた彼は、更に太々しく默つて煙草を喫つて、悠々と煙を吹いた。

「おーい、俺にもお酒を持つて來てお呉れ。」

彼は、臺所の方へ聲を掛けた。

「何しに歸つて來た？」と清親は眼を据ゑて彼を睨めた。

「何しに歸つて來たとは何だ！」彼も清親のやうに太く重い作り聲で、訊き返した

「何事です。」と母は飛びつくやうな聲を擧げた。「叔父様に挨拶をしなさい。」

「厭なことだ。」彼はさう云つて、凝と清親のたるんだ頬のあたりを視詰めた。彼が母方の者に斯ういふ態度をしたのは始めてゞ、その爲に清親や母が何れ程自尊心を傷けられたか？と想像すると彼は愉快だつた。だが胸の鼓動は異樣に高

かつた、宮原は、あつ氣にとられて切りに煙管をひねつてゐた、

清親と母は輕蔑された憾みを火の如く烈しく炎やしてゐるだらう……さう思ひながら彼等の亢奮の上何蒼ざめた顔色を、等分に眺めた彼は「馬鹿奴、こゝのところは俺は親父とは違ふんだぞ！」と云つたつもりの力を込めた。

「何しに歸つて來たんだ。」餘程氣が轉倒したと見へて、清親はまた同じことを繰り返した。

「自分は何しに來てゐるのだ。フヽンだ。」

彼は茶飲茶碗に酒を注いで、一息に飲み下さうとしたが、とても不味くて、そんなことは出來なかつた。彼は、たゞ狐のやうな虚勢を示すばかりだつた。今迄は清親と會へば、いつも行儀よく膝も崩さず、「叔父樣」と呼び「私」と稱してゐた彼だつた。それも母の教育で、彼女は自分の身内に對しては飽くまでも嚴めしい禮儀を強ひるのだ。それもいゝだらう、それならば何故此方の者のこともさうしないのだ……彼は、清親と母が、父が居る時分でも、父が留守だと、父を冷笑的に批評してゐたのを知つてゐた。

「御挨拶をしなさい、挨拶を――。」

母は事更に言葉をそこに引戻さうとして、彼を詰つた。

「厭だと云つてゐるぢやないか。誰がくそ――」

彼は洒々として天井に顔を反向けた。親父の兄弟の惡口なら喜んで聞く癖に……何が禮儀だ。

「岡村清親なんて出しや張るな！」

「叔父をつかまへて呼び棄てにするとは何事か！」清親はカツと口を開けて怒鳴つた。母は眼眦を逆立てゝ彼を睨めた。

――斯うなれば何と怖かされたつてビクともしないぞ――彼はそんな力を容れた。

「貴樣が家をあけて、誰が家のことをすると思ふ、清親叔父さんだからこそ斯うして親切に面倒見て吳れるんだ。自家の兄弟なんて幾らあつたつて、役に立つ人は何もないぞ。」

母はキンキンと響く聲で滔々と喋り始めた。その言葉の内容の如何に係はらず、この種の母の文句を耳にすると、彼は無性に肚がたつのが癖だつた。理性もなにもなく、たゞ嫌ひな料理を無理矢理に鼻の先へ突つきつけられるやうな嘔吐感を催すのだ。

「生意氣な口をきくなら、何から何までキチンと自分で始末したらどうだ、手紙一本だつて滿足には書けない癖に——お金の勘定は誰がして吳れたと思ふ？誰か……」

彼には母の言葉がはつきり聞えなかつた。耳も頭もガーンとしてゐるばかりだつた。用ひ古したレコードの雜音を聞くやうな不快を覺へるだけだつた。

母も母なら、清親も清親だ——眼の前でそんなに母から勞力を吹聽されて、てれもせず平氣でゐられる清親風情奴——などと、彼は思つたりした。清親は、母に代辯させてゐるやうなつもりで、眼に得意らしく、頤をしやくり上げた儘澄してゐた。

「叔父さんにお禮を云ひなさい。」

「誰が賴んだ！餘外なお世話だ。」彼は叫んで、一寸立ちあがり、ドンと一つ角力のやうに脚を踏み鳴して、直ぐまた坐つた。德利位ひ倒れるかと思つたのに、徵兵檢査は體重だけで落第し、それ以來五百目も增へない十一貫なにがしの彼の重味では清親の盃の酒さへ溢れなかつた。

「貴樣などは自家に歸る資格はないんだ。何處へでも出て行け。」と神のやうに祀つてゐる清親は叫んだ。

「俺の家だ。」

「私の家だ。」一言毎に母は清親に味方した。成程この家は、母のものださうだ。そんなことはつい此間まで彼は知らなかつた。――俺は阿母にだつて出來るだけのことはしてあるんだ。――そのことか何か知らないが嘗て父が彼にさう云つたことがある

「俺の兄弟だつて、それは皆な役に立たないが、阿母達見たいに意地の惡いところはない。」父はさう云つたこともある。

「僕はこれで、仲々意地が惡いよ。」彼はにやにや笑ひながら云ひ返した。彼が、父の思ひ出の斷片は悉く醉つた父子のことばかりである。

「さうかね。」と父は一寸考へた。「貴樣の顏は一體俺に似てゐるのか？それとも阿母系統か？」

「顏は親父系統で、心は阿母系統かな！」彼は、出たら目に笑ひながらさう云つた

「そんなことはありませんわ。」とお蝶が傍から口を出した「心は…………」

「もういゝ〳〵。」と父は樂し氣に手を振りながら「お前えは俺程の度胸がないからな。」

「ハッハッハ………阿父さんの度胸は一寸的が外れてゐるんぢやないの？」

「損をしても驚かない度胸だよ。」

「さうでもないでせう。やり損ひをすると五日も六日もムッとした顏で寢てばかし居たことがよくあつたぢやありませんか。」

「あれはね。……」と父は一寸笑顏を消して「あれはね、損を後悔するわけでないんだよ、何と云つたらいいかな、俺

は時々さういふことがあるんだ。何をするのも厭になるといふやうな、無茶苦茶に氣が鬱いで……ターミナル・ペッシミストとでも云ふのかね、柄でもないんだがね。」
「樂天的厭世家(オプティミスティク、ペシミスト)！そんなものがあるか知ら。」
「そんなものがあるものか！」
「止さう〳〵。そんな話は——」彼は、ふつと厭アな氣がして、庭に眼を反向けた。
「貴樣には友達はないのか。」暫くして父はそんなことを訊ねた。
「あるにはあるけれど……」彼は、さう云つたものゝ氣が滅入つた。
「親類の連中なんて當にはならんよ。」
彼には父が、どうしてそんなことを云ふのか好く解らなかつた。
「僕だつて皆な嫌ひだ。」
「嫌ひだ、で濟むうちは好いが……」
「清親なんて云ふ奴は、何て厭な奴だらう。」
「貴樣がそんなことを云つたつて仕樣がないぢやないか——」
そんな話から、いつか友達のことに移つて行つた。イギリス人に親しい二人の友達を持つてゐることなどを父に話したりした。
その時分同人雜誌の會合が毎月一度宛あつて、彼は厭々ながら稀れに上京した。——どうしたハズミだつたか、父は、來て呉れるやうな友達があるそんなら、一遍此方へ皆なを招待したらどうか？といふやうなことを云ひ始めた。この

前彼等に合つた時、
「近いうちに一遍タキノの小田原へ行つて見やうぢやないか。」といふ話があつたことを彼は不圖思ひ出したので、
「ぢや今度行つたら聞いて見やう」と父に答へた。
「皆な主に何をしてゐる人なの？」
「新聞社とか婦人雜誌社とか中學の先生とか……」
「雜誌や先生は厭だが、新聞社はいゝな。」
「皆な相當に偉いらしいですよ。」
「東京の新聞社ぢや大したものだらう、尤も俺は日本の新聞社は何處も知らないが、――ヒラデルヒヤの學校にゐた時分の友達で、ペン・ウヰルソンといふ男が今でもニューヨーク・ヘラルドの論說記者をしてゐる、つい此間も手紙を寄した、そら、お前が子供の時分にオルゴールを送つて呉れた人だよ。」
「さうさう、Twinkle Twinkle Little Star, How I wonder what you are といふ……さうさう、今でもあるかも知れませんよ。」彼は變に細かく叙情的な聲をした。
「いつかペンに手紙を書いた時、俺の伜も今では大學を卒業して、新聞記者になつてゐると云つてやつたことがあつた。それはさうとお前はいつの間にか止めちやつたんだね。」
「僕、新聞記者は嫌ひになつてしまつたからさ。」
「ぢや、何になるんだ。」
「來年あたり歐洲へでも行きたい。」彼はてれ臭くなつて出放題を云つた。

「一二度行つて來るのも好からう。」父は常に自分が外國で永く暮したことを鼻にかけて、こんな話になるとワザとらしい淡々さを示すのだつた。自分は東京へ行くのさへ億劫がる癖に。「俺も來年は一寸行つて來やうかな。」

彼は、わざ〳〵同人連中を迎へに東京へ出かけた。汽車賃がかゝるから厭だと云つて半分の者は、いざとなると止めてしまつた。殘りの五六人が來た。その時周子は、河原や石黒といふ名前を知つたのだ。父は、そんなことは明らかにせずにお蝶の家の方に招待しやうぢやないかと云つたが、彼は、餘り打ち溶けてゐない友達だつたから遠慮した。その頃彼は海へ近い方に、獨りで勉強と稱して新しい家を占めてゐたので、其處に泊つて貰ふことにした。

「借金をしたつていゝから、大いにやつてくれ。」人を招くことの好きな父は、調子づいて、母に厭な顔をされた。

毎月の同人雜誌に出した創作の批評をする會合なのだ。會合の宿を一度も彼はしなかつたので、厭味を云はれたこともある。六七人來た。彼等と酒を飮んだのは、彼は始めてだつた。その晩は「批評會」は止めようと、彼等の一人が云つた。

彼等は、直ぐに醉つた。彼は、珍らしいことには何時までも醉はなかつた。彼が好む學生氣分の少しもない連中で、「俺はボーナスを幾ら貰ふ」とか「扇風機を買はうと思つてゐる」とか、また「日本の文壇なんて相手にしまいぜ」とか、主に彼等はその場限りの話に打ち興じてゐた。その最中に、すつと下手の唐紙が開くと、そこに羽織袴の父が、かしこまつて一禮してゐた。彼は、ハッと胸を衝かれた思ひがした。

「僕、△△新聞の齋藤茂三郎。」少しばかり醉つたひとりがさう云ひながら、父の傍へ行つて

「あなたがタキノのお父さんですか、お父さんとは見へませんなア。」

「どうして袴なんかはいて來たの？何處かの歸り？」彼は赤い顔をして、そつと父にさゝやいた。誰が命じたのか彼

は知らなかつたが、父の會席膳も用意されて來た。

「タキノも東京へ來んけりや駄目ですぜエ、こんな田舍に引ッ込んでゐちや……」

「どうぞ、よろしく。」

「田舍も稀には好いですがなア、血氣の青年が親の傍に居るなんて……」

「さうですとも〳〵。」と父は快げに贊同した。「何とか使ひ道はないものですか？」

「僕の社に世話をしませうか、僕は現在では議會方面を擔任してゐますが、もう一人や二人は若い記者が必要なんですがね……」

「うむ、そりやいゝですなア、男は政治方面に入り込まなければ嘘です。」

「歸つたら早速取り計ひませう。」

彼は、凝ッとして其處に坐つてゐられない氣がした。親父が子供のことを、何分よろしく――なんて、さぞ〳〵苦な肚のうちで笑つてゐることだらう。

「この土地はこれで花柳界の方は仲々……ださうですな、社の連中の噂にも稀には出ますよ。」

「とても……」、さう云つて父は一寸顏を赤くしたが、幾らか酒が回つてゐるらしく急に元氣な聲を擧げて「どうです諸君！　出かけて飮まうぢやありませんか……」などと云つた。

「よう、よう、贊成〳〵。僕らはもう學生ぢやないですからなア。」

「僕ア……」と彼の父も云つた。「頭はこう禿げてゐるが……」

「いよう、タキノの親父は素的だなア……」

齊藤は、見るからに上べの冷笑を浮べて、からかつた。

父は彼に、耳打ちをして、何故こゝにもお酌を呼ばないかと詰つた。彼は意地惡く聞へぬ振りをしてゐた。——父は彼に、嚴しく促されて、挨拶だけ濟すと、待せてあつた俥で歸つて行つた。「あとからお蝶の方へ來いよ、お蝶の方へ。」

そんなことを、玄關に出た時まで彼に傳へた。父の俥の音が消ゆると、一同はドッと笑ひ聲を擧げた。

彼等が歸つた後も、晩酌の時になると父は屢々嬉しさうに彼等の噂をした。齊藤からはその後何の返事もなかつたが、彼は父にはさうは云はなかつた。その後たつた一度東京で彼等に會つたが、誰の口からも一言も小田原の話は出ないので、彼は寧ろホッとした。彼は、父が死んだ時、友達のうちで父を知つてゐるのは彼等だけだつたが、誰にも通知は出さなかつた。

「自家の親類は皆な薄情だから、俺に若しものことがあると困るのは貴様だけだぞ。どんな相談相手だつて自家にはたいよ……」

父は、よくそんなことを云つて彼に厭な思ひをさせた。

六

「貴樣などは長男の資格がないんだ、親不孝奴！親の葬式の始末も出來ない癖に……」

清親はさう云つて一氣に彼を壓倒しようとした。

「俺が死んだつて、後の始末なんて誰にもして貰ひたくないッて、——よ」彼は胸が涙ぐましく詰つて、危く清親に不覺の敗北を取りさうな細い聲に縺つたのに自ら氣づいたから、突然家中に鳴り響く大聲で

「親父が、僕にさう云つたァ〱。」と滅茶苦茶に喚いた。

「狂ひだ。」と母が云つた。

「貴様達が親父を殺したも同様だ。」達といふのは周子をも含めて、清親が云つたのだ

「さうだ。」と母も云つた。

「俺は周子如き女に甘くはないんだぞ。」彼は眞心から叫んだ。清親や母は、周子にそゝのかされて彼が母に反抗するのだ、といふことを蔭で云つてゐるさうだ。

「手前の女房に馬鹿にされる奴も、まさかあるまいよ。」清親は憎々氣な冷笑を浮べてせゝら笑つた。

「それぢや何故、俺のことを蔭で、そんなに云つた。……卑怯な奴等だ、そんな連中は、母とも叔父とも思はない。」彼は口惜しさばかりが先に立つて、言葉が出なかつた。

「女房さへあれば、いゝのか。」清親は更に嘲笑つた。

「……」

彼の極度に亢奮した心は、またふつと白けて、おどけて芝居のことを思つた。若しこれが新派劇だつたら、俺の役は一寸好い役だな！　して見ると母も清親も、この儘舞臺に伴れ出したら相當の喝采を拍すだらうよ――などゝいふ氣がすると同時に、彼はわけもない冷汗が浮んで、心は蟲のやうにジュッと縮み込んで、そつと清親と母の姿を眺めた。

「俺は、もう一生家には歸らない。周子とは、そんなら別れた上で、貴様達と喧嘩するぞ。」彼の氣持は妙に轉倒して、そんな拙いことを清親に云つた。

「勝手にしろ、自分の女房と別れるに人に相談はいらないよ。」

「………」彼は、また文句に詰つた。ほんとに間子とは別れやうか、思へば俺だつて彼奴の親父などは癩に觸つてならない――そんな事を彼は思つてゐた。

「親父の位牌を背つて出て行つたらいゝだらう。」

「………」彼は涙を振つた。

「獨りもいゝだらうし、親子三人作れもいゝだらうし………」清親は、勝利を感じたらしく快げに呟いた。

「何だと、もう一遍云つて見ろ。」彼は、何の思慮もなくカツとして、極くありふれた野蠻な喧嘩口調になつて腕をまくつた。

「何遍でも云つてやらう、百遍も云つてやらうか！」

「うん、面白い、さア百遍云つて見ろ。」

「何といふ事だ。」母は傍からさへぎつた。とても清親が百遍それを繰り反せる筈はなく、さうなるとこゝだと云はんばかりにしちくどく追求しやうとする彼の卑劣な醉ひ振りを母は應へねばならなかつた。

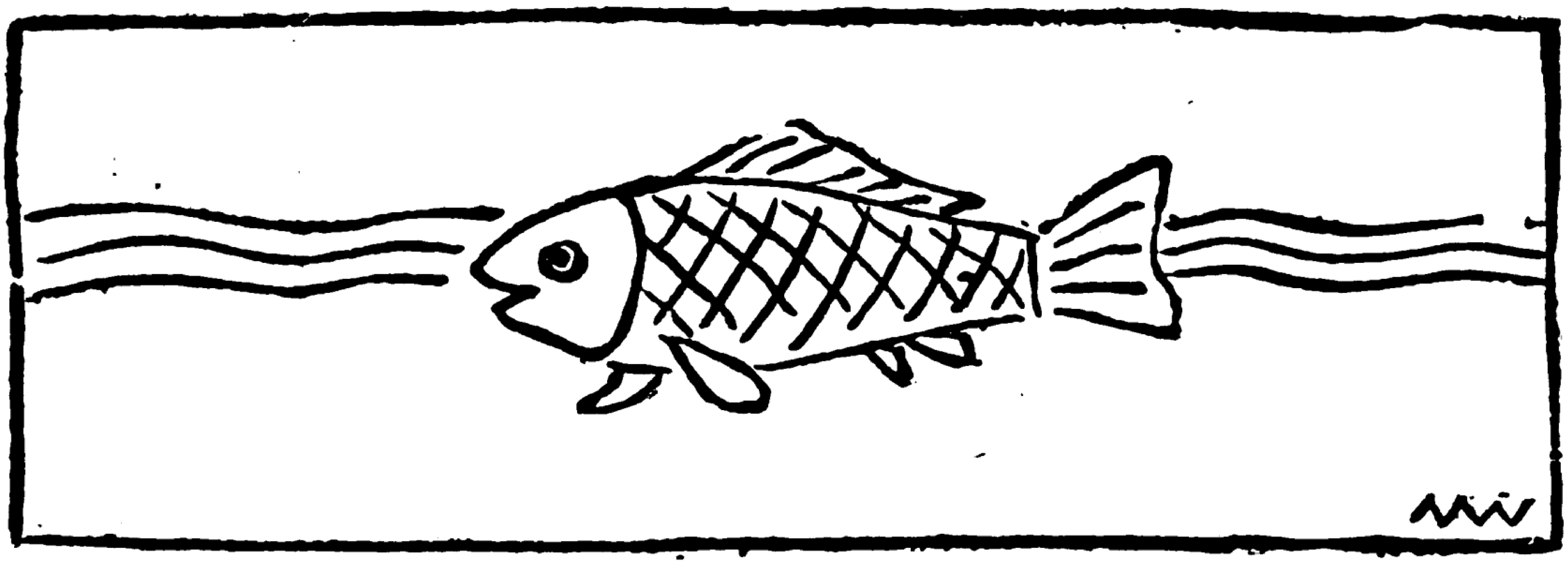
「百遍聞かないうちは承知しねえ、自分から云つたんだ、さア云へ〳〵。」

これにはさすがの清親も、一寸芝居の嘘つき者の如く參らせられて、思はず胸を後ろに引いた。で清親は、ムツと側を向いで

「文句があるんなら、醉はない時にして貰はう。」とブツブツと小言を呟いた。「何だ昔二十才の癖にして酒など飲みやアがつて………」

「何でもいゝから、百遍云つて見ろ！さア俺が勘定をするから始めろ〳〵……」

「お默りなさい。」母は鋭い聲で叫んだ。
「墮落書生、親父が死んでも悲しくもないのか。」と清親も怒鳴つた。
「親父が生きてゐる時分、よくも俺の親父を輕蔑したな、覺えてゐるだらう。」
「父の喪は三年だ。」と母が云つた。
「貴樣には、これ程云はれても何の應へもないのか！」清親は嚴然と坐り直した。
「――平氣だ。さつぱり悲しくなんてないね。さて、これからまた清友亭へでも出掛けると仕樣かな……」
「罰當り奴！」
「親父はさぞ悦ぶことでせうよ、清親さんのお世話になつたら……」いくら口惜し紛れの皮肉だとは云へ、もう少し解かな言葉もありさうなものなのに、それでも彼は一ツ端の厭がらせを浴せたつもりらしく、ツンと空々しく横を向いた。
「呆れた大馬鹿者だ。」
「ごまかすねえ、皺ツ面。」彼は拳固で卓を叩いた。「百遍云はうと云つたのはどうしたんだ？　さア云へ／＼。」
　到頭清親と彼とは、つかみ合ひを始めたのである。彼より、三倍も肥つてゐるとさへ思はれる清親にかゝつては、一ひねりにされるだらうと覺悟はしたが、思つたより强かつた自分を、彼は別人のやうに感じた。だが忽ち彼は首ツ玉を押へられて、難なく寢床の中へ投げ込まれた。一たまりもなく頭もろとも夜具に丸められて身じろぎも出來なかつたか、飽くまでも口だけは達者に
「覺へてゐろ！」とか「百遍聞かないうちは承知しないぞ。」などゝ、いつまでも連呼してゐた。（一三・八）



寂しければ

——第二話——

久保田万太郎

一

『いや、これは……』

豊島屋さんは暖簾を離すなり

『ま、どうしたといふ……』

頓驚にわざとさういふと、そのまゝ、わたしのまへに来て腰を下ろしました。

『…………』

だまつて、笑つてたゞ、わたしは頭を下げました。

『いけないよ、あなたは……』

豊島屋さんは外套のボタンを外しながら、

『み限るならみかぎろ。——愛想をつかすなら盡かせ。——はつきりさういつてくれ

ゝば此方だつて……』

『いゝえね、それが……』

『聞きません。――いゝえ、言譯は聞きません。』

切口上にかぶせて

『それなら、それで、此方にも覺悟があります。――そのつもりであきらめもします。――迷はせツぱなしに、ぬうツと、俺は知らないよ。――そんなことは知らないよ、と、ぽオんと突つ放されたんぢやア、此奴……』

『……………』

『うかばれませんよ。――誰だつてうかばれませんよ、佐伯さん。』

『何とも申譯がございません。』

わたしは、わらつて、また、もう一度あたまを下げました。

『といつて素人をおだましよ。――といふことを御存じですか？』

『一向に。』

『御存じないでせう？――ないわけだ。――――あたりまへだ。――あなたのやうな罪のふかい人の知つてゐるわけがない。』

『罪のふかいは……』

『いゝえ、ふかい。――罪がふかい。――あなたは罪つくりだ。』

『……………』

『と、まア、うらみのたけを交綱の……』

急に豐島屋さんはわらつて

『いや、その後は……』

ガラリかはつて叮嚀にあいさつしました。——醉つてゐるのかしらふなのか。——どこまでほんたうでどこまで嘘か分らないのが豐島屋さんの不思議なところです。

連れてわたしも

『その後は……』

改めていひました。

『彼是（かれこれ）、これで、一年ぐらゐお目にかゝりますまい？』

手を伸ばして、豐島屋さんは、品（しな）がきをまへに取りました。

『いゝえ、もつとになります。』

『もつとに？』

『あれは九月の末でしたか、十月のとツつきでしたか、鮫洲の川崎屋へおともしたことがありました。——あなたと、天野（あまの）さんと、武傳（ぶでん）さんと、こゝの親方と……』

『さう／＼。——かへりに、降られて、品川へ引つかゝつた……』

『えゝ、あのとき。』

『あれがお附合のねがひ納めで、あれからずつと、何といふこともなく、その……』

『それだもの、あなた……』

豊島屋さんは引取つて

『天野さんでも、武傳さんでも。――藤屋さんでも、鶴菱の大將でも。――顔が揃ふと、いつも、誰がいひ出すともなく、佐伯さんはどうしたらう、どうして顔をみせないだらう？――口惜しいけれどあなたのうはさだ。――嘘だと思つたら親方に聞いて下さい。――あすこにぼんやり、首を出してゐますから聞いてみて下さい。

『いゝえ、もう、それは……』

料理場の中の帳場のはうから主人はいひました。

『いまもう、如才なく申上げました。』

『散々、もう、いまゝでにも叱られました。』

わらつて、わたしは、顔を上げました。

仲見世の裏のしがらきといふ小料理屋。――ほんの腰かけの、門に衝障子を立て、暖簾をかけた、そのあたりにざらにあるとりなしのうちですが、つかふ材料なら、主人の調理なら、外のさういふうちとは一つにならない。――一つにならないといふよりも、次第のまるつきりちがつた、本筋の、いへば、まア、江戸まへの、きび〳〵したものを喰べさせるうちでした。――そのはずで、根をあらふと、主人といふものはむかし公園で名代の萬梅。――默阿彌さんの「霜夜鐘」にも出て來るあの萬梅の親方に、子供の時分、やかましく仕込まれてこの稼業になつたといふ來歴を持つてゐました。――したがつて、來るお客も、さういふ恰好の、たとへば雷門から廣小路へかけての大きな店方の旦那たち、魚河

岸、大根河岸、さういつたところの問屋さんたち、吉原の貸座敷の主人さんたち。——名のある役者だの、落語家だの、幇間だの。——幾らかづつさういふはうに年期を入れた、堅気離れのしたいろんなたぐひの人たちが、定連といつたかたちで、始終、入替り立ちかはりしました。——たまに、通りがかりの、ふりのお客が入つて来ても、勝手がちがふので、すぐにかへつて行つてしまひました。

四五年まへ、空堀町のある店の外交に、わたしは、はじめてこゝへ引つ張つて来られました　まだ深川にゐた時分でしたが、

「姉さん、浅草のどこかに、腰かけで、大へん乙なものを喰はせるうちがあるつていふぢやアないか。」

何ごころなくいふと

「よく御存じですね。」

浅草に古く住んでゐたそこの外交は、いつそ、不思議なやうに、

「誰からお聞きになりました？」

「誰からか聞いた。」

「一度おともをしませう。——あゝいふうちは、おたくのまへだが、一寸、ありません。」

相手は急に熱心に、

「あなたのやうな方なら必と嵌まる……」

「一體、どこにあるんだい、浅草の？」

「仲見世の裏です。——仲見世の横を曲つたところです。」

『あんなところにそんなうちがあるかい？』

『あります。——もう一つ先の横町へ行くと、ごたく、西洋料理だの、支那料理だの、白粉をつけた女のゐる小料理屋だのが軒別ならんでゐますけれど、そこの横町は、どういふものかしもたやばかりの、寂しい、白つぱくれた、間の宿のやうな往來になつてゐましてね。』

『うちは廣いのかい？』

『廣いどころか！　あれで、さア、客の入るところだけで五坪もありますか？』

『五坪といつたら、君……』

『どうにもなりやアしません。』

相手はうなづいて、

『入ると、まア、ふたツ側に、細長い、たんさく形のテエブル。——といふよりは、お粗末な、テエブルの恰好をした臺がならんでゐます。——その兩つ側に腰をかけるつきりです。——だから十人。——無理をして十五人たかだかです。』

『でも、それだけ入るかい？』

『入ります。——それは、まア何とかなります。』

『…………』

『それには來る客が、一つばしの古い馴染ばかりで、お互にみんな、氣ごころをよく知合つてゐます。——だからいさくさはありません。——立込めば立てこんだで、さア、此方へ入らつしやい、いまもうこゝが空きます。——今晩は、また、大へんごゆつくりなお出かけですね。——と、まア、萬事がさういつたかたち。——何のことはない、倶樂部。

――そこら近所の、錢のある、口の奢つた連中の、とんと、まア、倶樂部です。』

「ぢやア、まんざらでもないだらう。』

「まんざらぢやアありません。――筋はたしかです。――これはと思ふやうな道樂ものが毎日のやうに來て酒を飲んでゐます。』

「…………』

「必といゝ。――必とあなたの氣に入る。――そのうちに是非行きませう。』

「…………』

「あなたは悪く段取ることがお嫌ひでせう。――だからさういふ方には持つて來いだ……』

相手は自分で自分の話にさそはれ、どつちが掻い出したとも分らなくなつたあげくが、こつちでさうもいはないのに行くことに決め、日を改めて、わざ〳〵、さアとばかり出向いて來ました。――おはづかしい話ですが、そのころ、遣つたり貰つたりにうき身をやつして、うちを外に、始終ぶら〳〵してゐた時分ですから、相手のいふなりに、ぢやア行かうといふことになりました。――で、こゝのうちを覺えました。

そのうち、淺草の、いまの宅へ越すことになりました。――相變らず、まア、とりとめなく暮す、一つには、近くもなつたので、繁々そこへ足を向けるやうになりました。――さうなると、だん〳〵、顔なじみも出來、主人とも心やすくなり、飲食をするといふよりも、わたしには、屈托なしに時間を消すことの出來るこの上ない場所になりました。――――混むのは、やつぱり、夜で、あかるいうちはまるでといつていゝくらゐお客が來ません。――そこを覗つて、思ひにあまることでもあると、わたしは、晝間そこへ出かけて行きました。暗い、だれもゐない、ガランとしたなかに、

一人、暖簾のそとの寂しい日ざしをみながら、ぼんやり、屢々さかづきをふくみました。　さういふとき、此方から話しかけないかぎり、主人のはうからは、何とも、決して、口をきいて來ませんでした。……ですから、その後、それまでの自分とすつぱり縁を切り生れかはつた料簡で逼塞することに決めても、そこへだけはとき〴〵かよひました。――で、屈托なしに、二時間でも三時間でも暮しました。――大ぜい出來た顔なじみのなかでも、小路の角の吳服屋の旦那といふ人と不思議にうまが合ひ、ときにはこの人にあひたいばかりでこのうちのまへに立つやうにもなりました。――その吳服屋の旦那といふのが豊島屋さんです。

が、去年、家内の亡つたところで、わたしはそこともふッつり縁を切りました。――親一人子一人の、清一のことを思ふと、自分だけ勝手に、うか〳〵、酒浸しにいつまでなつてもゐられない。――さうした心もちが秋かぜのやうに身にしみました。――當座、わたしは、その近所へ足ぶみをすることさへ避けました。――でも、わたしとしては、そのくらゐにしなければ自分のふせぎがつきません。――四十を越して、まだ、義理だの人情だのにくだらなくからむわたしの性來。――その性來ゆゑに、わたしは、親代々の店舗を人手にもわたしました。――遣つたり貰つたりの修羅道にも落ちました。――一生をらちくちもなく棒にふりました。……

では、どうしてその日そこへ立廻つたのか？――ふいとしたそれは出來ごころ。――全くの出來ごゝろで、いつも出谷までのる電車を、ついした表裏で雷門で下り、久しぶりに、切れるつもりもなく仲見世のはうへきれました。――いへば、しぐれ氣味の、底冷のする、しづかな、しみ〴〵した、何となく人の戀しい日でした。――だれかに逢はないものかと電車のなかでもさう思ひました。――それには、伯父の代りに樂研術の寄さきへ顔を出したかへりで、時計をみる

と、まだ、二時をはつたばかり。――このまゝうちへかへつたところで、清一は、まだ、學校です。――婆アやが一人、ぽつねんと明るいところで解きものでもしてゐるくらゐが落ちです。――婆アやを相手に世間ばなしをしたところではじまりません。………

何とかして夕方までのつなぎをつけたいと思ひました。――といつて、まさかに、二時間も三時間も、あてもなく、ほツつきあるくわけにも行きません。――講釋を聽きに入るのもあんまり知慧がなさすぎます。――結句、以前を出して――さういへば一ばんいゝ――さそはれるやうにそこの暖簾をくゞりました。

もと〳〵、額一つ、柱懸一つかゝつてゐない、さば〳〵しすぎるほどさば〳〵した、構はないといへばこの上なく構はないうちの中だけに、料理場の、行儀よくならんだ猪かぶり、手際よくかさねたいろ〳〵の皿小鉢。――掃除だけはたしかの、すが〳〵といつも濡れてゐる三和土の土間。――右をみても、左をみても、どこといつて一年まへと違つたところのないのがどんなに可懐しかつたでせう。――間もなく、贔屓分に、主人みづから運んでくれた銚子を取上げて、猪口にそれをつぎながら、連れられてはじめて深川からこゝへ來たときのことを、ふとわたしは思ひ返しました。――と、いまさらのやうに、その後わたしの上に來たいろ〳〵の廻合せが、はつきり、わたしの胸にみじめに浮びました。

これはいけない。――さう思つて、わたしは、いそいでこの熱い奴に口をつけました。

と、

「いや、これは………」

暖簾のそとに、そのとき、[illegible]さんが來ました。

つひでながらいへば、天野さんといふのは、雷門で名代の、あの、青柳といふ菓子屋さんの旦那、武傳さんといふのは、大根河岸の、青物問屋の若い主人さん。――鶴菱の大將といふのは、洲崎の、引手茶屋の、これもやつぱり若い主人さん。――藤屋さんといふのは山の宿の材木屋さん。――といつても、店をもう息子さんにわたした隱居さんの身分。――一中ぶしの稽古と、とき〴〵材木屋さん仲間の合口をさそつて旅に出ることゝの外には何にも苦勞のないお老人。――といつたところで、まだ、六十には二三年もあいだがあるのですが……

二

『ところで、さて、旦那は何をあがります？』

料理場へ下りて、主人は、わたしのところへ味噌吸をもつて來ながら豊島屋さんにいひました。

『何でもいゝ。――まかせます……』

豊島屋さんは面倒臭さうに品がきをわきへ退きました。

『穴子をあがりますか？』

『穴子と？――えゝ、いたゞきませう。』

『佐伯さんへも、いま、さし上げますから……』

『贅澤を申して相濟まないわけですが……』

豊島屋さんはわざと揉手をして

『燒くよりも、わたしは、おんなじことなら煮て一つ』

『煮てさしたげます。』

主人もわざと鸚鵡返しに、

『あちらからのさういふ御註文で……』

『だからあなたが來なくちやアいけないんだ。』

豊島屋さんはわたしのはうへ顔を向けて

『このごろのこのうちの寸法のつかなさ加減……』

『…………』

『とにかく、このごろの、このうちの光景といふものを、わたしは、あなたにお目にかけたい。――何といふか、わたしは、あなたにお目にかけたい。』

『それは……？』

『いふと、大將好い顔をしませんがね……』

『大丈夫。――こゝまでは聞えません。』

料理場の俎のまへから、主人は、わらつていひました。

『聞えたつていゝ。――聞えて腹をたてたつていゝ。』

豊島屋さんは引取つて

『いくら腹を立てたつて、わたしは、武傳さんだの鶴菱さんだのやうに愛想は盡かさない。――愛想を盡かして足はぬかない。――どこまでも、わたしは、先途をみ届ける……』

『武傳さんと鶴菱さんのみえないのはそんなわけぢやアありません。――あの方々は、こゝのところ、柳橋のは取られてゐるんで、それでみえないんです。』

『だから、つまり、柳橋にみ返られたんぢやアないか?』

『此奴はいけない……』

わだかまりのない聲を出して主人はわらひました。

『ですが、かうして……』

わたしはいひました。

『こゝに腰をかけて、かうやつて、ぼんやり一人でいたゞいてゐる分には、一年なんて月日は、どこへ經つたのか分りません。』

『それは、あなたが、このごろどんな客が入りこむか御存じないから……』

豊島屋さんは遮ぎるやうに

『もしや、あなた、古熊といふ名まへをどこかでお聞きになつたことはありませんか?』

『古熊?』

『花川戸の鼻緒屋です。――が、鼻緒屋は看板で、ありやうは鬼熊でとほつてゐる天下の高利貸です。』

『あゝ鬼熊。――鬼熊なら聞いてをります。』

『聞いておいでゝせう?』

豊島屋さんは念を押して

『あいつらが。――あの鬼熊が、このごろ、どう迷惑しやアがつたか毎晩のやうにやつて來ます。』

『…………』

『私も一人ぢやアありません。――公園で待合をしてゐる若い妾と、藝妓屋のあの娘の家とが、いつも、取合についてゐます。』

急に、豐島屋さんは、料理場のはうを向いて

『だが、親方、彼奴らは、まア、うぬらを何と思つてやがるんだらう？――いけ大風な……』

『旦那とは學校が違うんだから無理です。』

外して、主人は、わたしへしたやうにお膳と銚子を自分で豐島屋さんのまへに持つて來ました。

『今日は、姐やは……？』

『いま、一寸、髮を結ひに……』

『おめかしか。』

さういひながら、豐島屋さんは、伏せてある猪口を返しました。

『さうとは知らず……』

わたしはわらつて、

『久しぶりに來たんで、これは、贔屓分に親方が自分でうごいてくれる。――さうとばかりわたしは思ひました。』

『それはどうも……』

『しかし、一ころからみると、親方も如才なくなりましたよ。』

豊島屋さんは述懐するやうに、

『以前は手がなくつたつて、自分からうごくどころか、氣に入らなければ返事もしなかつた――うまいものを食はしてやつたら文句はねえだらう。――諸事さういつたかたち。――それが、このごろは、ときによると世辭のやうなことまでいひます。』

『それは仕方がありません。――毎日みなさんの中で揉まれゝば、あなた……』

『それ、その通り……』

『旦那にはかなはない。』

主人は、わらつて、料理場へかへりました。

『だが、その、鬼熊。――吉熊といふ男は、ほんたうにさう阿漕なことをするんでございますか？』

わたしは豊島屋さんにいひました。

『するにもしないにも、あなた。』

豊島屋さんは向直つて

『あんな、あくどい、太えことをする奴はありません。』

『……………』

『弱いもの苛め。――どうせ高利でも貸さうといふ奴だからそれは分つてゐます。――が、遣りかたが何としても悧い。――まるでペテンです。』

『……………』

『まア、あなたならあなたに目ぼしをつけますね。――此奴をものにしようと思ふと、手蔓をさがして、何とか、まづ、あなたのうちへもぐりこむ算段をします。――さうしてもぐりこむことが出來るやうになると、理屈をつけちやア、せつせいろんな使ひものを運びます。――貰つてばかりゐられないから返しをする。――と、かぶせて、また、その返しをする。――だん／＼附合の出來たところで、ちと、どうぞ手前どもへお話しに。――それが高じて酒一つ。――一度でも一しよに茶屋つ入りをしたら最後、あとは、その、待合をさせてゐる妾と二人であなたを引ずりひん廻す。――泳がせるだけ泳がせる。――いくらあなたのおたくが御内福でも。――御内福なら御内福のやうに手詰つて來る。――それは、まア、廓の金ですからね……』

『…………』

『といつて、いまさら、拔きさしの出來ないものは出來上つてゐる。――どこへ行つて算段のつけやうもない。――あぐねて、實は、と、うち明けると、えゝもうお安い御用、そんなことは、遠慮なく、ずん／＼いつて下さい。――此方はそんなつもりで附合つてゐるんぢやアないんだから。――いふなりに、幾らでも、器用にあがきをつけてくれるので、つい、一度が二度、二度が三度――纏めてかへせばいゝでうか／＼借りる。――千兩づゝ借りても五度となれば、此奴、五千兩です。……』

『…………』

『で、時分はよしと思ふと、さて、佐伯さん……』

『…………』

『あなたとわたしの間でそんなものゝ入るわけはない。だが、店の手前、何かそこにしるしがないと、主人としてあん

まりだらしがないやうに思はれます。――水臭いと思召すか知らないが、さう取らずに、ほんの覺えだけ一ふで書いて頂けますまいか？――さういはれゝば、あなただつて、それは困るとはいへないでせう。――氣のつかないことをしました、いえ、もう、あなたのはうでさう被仰らなくつてもとか何とか、義理にもさういつて、そこで、一札入れる。――それを稼業と知つてゐても、それまでの行きがゝりが行きがゝりだから、人情でまさかとあなただつて思ひます。――また、決してさきでも稼業と思はせない……』

『………』

『返せばいゝ。――返せばいさくさはありません。――が、もと〳〵さういふ奴につけ込まれるだけに、あなたのはうにもどこかスキがある。――返さうと思つても、此奴が、右から左へうまく返せない。――つい延びる。――さきも催促をしない……』

『………』

『一年でも二年でも經つていよ〳〵どんづまりになる。――あなたは、もう、上げも下げもならなくなる。――潮さきをみて、こゝと思つたところで、さて、佐伯さんと、改めて、まへの一札をもち出す……』

『………』

『無論はじめの五千兩ぢやアありません。――何十倍何百倍。――まさかそれほどにはならなくつても吃驚するやうな額になつてゐます。――が、吃驚したところで後の祭、泣いても、くやんでもゝう追ッつかない……』

『………』

『思ひきり手許へ引つ張つて置いて急に突つ放す。――その手にのつて家屋敷をなくしたもの、泣きの涙で住みなれた

土地を賣つたもの。――わたしの知つてゐるだけでも五人や六人できゝません。』

『…………』

『馬道の戸倉屋。――御存じでせう？』

『えゝ、あの、古い下駄屋の……』

『あのうちの店の閉めたについて世間ではいろ〳〵にいつてゐます。――お家騒動に怪談までからませてゐます。――うそです。――やつぱり鬼熊に引つかゝつたあげくです。』

『…………』

『あすこの養子といふのが、素つ堅氣のくせに、因果と、手慰みが好きでしてね。――止せばいゝのに、始終、稼業人のなかへ入つて千の二千のと大それた勝負をやります。――鬼熊の奴、そこへ目をつけました。』

『…………』

『そのはうなら瑣の家を玉につかへばわけはない。――といふのは、瑣の家といふ奴、いまこそ藝妓屋の亭主で綺麗な顔はしてゐても、以前をいへば、常盤座の水野の出てゐた時分の書生役者。――身状の悪いために芝居を出され、はうばうほッつきあるいたあげく、ほんものゝごろんぼうになつて、一しきり、公園ゐまはりの弱いもの苛めをしてあるいてゐた奴です。』

『…………』

『よつて集つて、その仲間が、肚を合せてかゝたんだからたまらない。可哀想に、戸倉屋は、何のことはない、賭場荒し。――そこへしや〳〵り出た鬼熊は、手もなく、窮場を助けるとみせて銅脈を仕込む悪侍。――二長町でやれば、さ

しづめ縱助か新十郎といふところ。――恩にきせて書かした證文をみてにつたりわらつた奴です。』

『なか〳〵なことを……』

『それは、もう、どこまでも根を張つて、惡いことにかけちやア拔け目はありません。』

『旦那は藤屋さんのを話をお聞きになりましたか?』

穴子にそへて熱い奴を、それ〴〵、豐島屋さんとわたしのまへに持つて來ながら主人はいひました。

『藤屋さんの話?』

豐島屋さんは、すぐ、主人のはうを向きました。

『藤屋さんのお仲間の材木屋さんで吉熊のために氣の違つた方のある……』

さういひながら、主人は、もう一つの臺の、離れた腰かけのはうに腰を下ろしました。

『いゝえ、知らないよ。』

『あれは一昨日の晩でしたか、天野さんがみえて、やつぱり吉熊のうはさの出たとき、藤屋さんがさういつて話しておいでゞしたが……』

『はて?』

豐島屋さんは眉を顰めるやうにして、

『どこの材木屋だらう?』

『こつちも、おくで、肴をこしらへながら聞いてゐたんですから、よくは分りませんでしたが……』

『やつぱりいかさまに引かゝかつた奴か?』

『さうぢやないらしいんです。——茶席か何かの普請を引受けてやつたらしいんです。』
『分つた。』
豊島屋さんは思ひつくものがあつたやうに
『大森のはうに、彼奴、途方もないものをこしらへたと聞いた。——住居にね……』
『…………』
『其奴んだ。』
『さうかも知れません。』
『で？』
『幾らかゝつてもいゝ。——金に糸目はつけない。——み込んでまかせるからどうでも好きにやつてくれ。——その材木屋さん、年は若いが、音無しい、こくめいな、至つてさういふことに熱い方ださうです。——それには、茶席の普請は、好きでそれまでにもたび／＼手がけ、仲間の方のなかでもくはしいでとほつてゐる。——み込んでまかせるからどうでも好きにいはれたもので、喜んで、稼業を離れて大工とも打合せ、随分無理もして、約束の日限までに、とにかく、これならといふものをこしらへ上げて、どうぞ御覧を、といふ段取まで運びました。——と、みて、こんなみつともないものはうけとれない……
『吉熊がさういつたのか？』
『いきなりさういつたさうです。』
『ふざけたことをいひやアがる。——彼奴になにが分るんだ。』

『ホア、さ。――ですから……』

『……………』

『ぢやアどこかいけないのか、どこが氣に入らないのかツ――訊いてもそれはいはないんださうです。』

『いへるわけがない。――わたしにいはせれば、鬼熊が、茶席だ何のいふのからして可笑しい。――それこそ茶んちやら可笑しい。』

豐島屋さんはわらひもしないで

『ほんたうだぜ。』

『ですが、旦那、いくら泣きを入れても、あやまつても、何としても先方はうんといはない。――こんなみつともないものはうけとれない。――それ一てんばり……』

『……………』

『無論そんなふうですから金は一文だつて寄越しやアしません。――やり直せといはれても、それまでが根かぎり、お入用おかまひなしにやつたしごとです。――その上どうやり直しようもありません。』

『……………』

『音無しい方だけにすつかり氣に病んでしまつたらしいんですね。――打捨つて置け、そんな相手に引つかゝつたのは此方の運の悪いんだ、深入りすればするほど傷が大きくなる。――まはりの人たちがさういつて止めるのを、もう一度行つて話してみる、押切つて、無理に出て行つたんださうです。――で、そのとき、どういふ話になつたのかそれは分りません。――かへつて來ると、そのまゝぼオつとして、いふことの辻褄が合はなくなりました……』

『…………』

『で、醫者にみせて、刃物でも持ち出すといけないといふことになつて、さつそく腦病院へ入れたといふんですが……
……』

『氣の毒に……』

しみ〴〵豐島屋さんはいひました。

『あんまり理屈が合はなすぎる。——大野さんも、藤屋さんも、みなさんさういつておいでゞした。』

主人は何とつかずわらひました。

『ねえ、親方。』

急に豐島屋さんは主人に

『やつぱりさうだぜ。』

『…………?』

『昨夜の騒ぎね。』

『へえ。』

『あれは、何だぜ、鬼熊のやつぱりさくりやくだぜ。』

『さア?』

『必とさうだ。』

豐島屋さんはかたくうなづいて

『わたしのにらんだ目に狂ひはない。』

『ですが、瓊の家といふ人は、定りでいつもあんなことばかりいつてゐます。――昨夜に限りません。』

『それは知つてゐる。――彼奴が手前痴でばかり何かいふのはわたしだつて知つてゐる。』

『…………………』

『だが、昨夜のは、それぱかりぢやアない。――手前痴の嫌からせばかりぢやアない。――たしかに、かげに、何かのいはくがある……』

『…………………』

『でなければ、あゝいふ運びのつくはずがない。』

『でも、昨夜は、はじめつから瓊の家さん一人。――外にはだれもお連がありませんでした。』

『だから瓊の家一人の料簡だとはいへないぜ。』

『其奴は、まア……』

主人は怯んだやうにわらつて

『でも、長谷川さんに、何のうらみがあるとも思へませんが……』

『わたしはあるとふむ。』

『…………………』

『瓊の家は知らないことだ。――瓊の家は、たゞ、吉熊の手さきになつて働いただけだ。』

『しますと？』

『戀の意氣地さ。』

『戀の……？』

『分つてゐるぢやアないか。——長谷川さんの當の相手のどこかに古顔が引つかゝつてゐるのさ。』

曙島屋さんは、さういふなり、わたしのはうを向つて

『佐伯さん、これはどうです？』

『…………？』

うなづいて、わたしは、飲みかけの猪口を下に置きました。

『昨夜、こゝに、こゝのうちはじまつての騷ぎがありましてね。』

『…………』

『猪口はとぶ、コツプはとぶ……』

『…………』

『といふのが長谷川さん。——この春ごろからこゝへ來はじめた方だからあなたは御存じない。——すぎると、ときに、ずつこけることもありますが、平生は、どつちかといへば、內輪な、無駄をいはない、ごくの育ちのいゝ若旦那……』

『…………』

『この長谷川さんに御婦人が一人附いてゐます。——一しよに、いま、おん仲むつまじく暮してゐる……』

『…………』

『もとこれが仲の町でなにかしといはれた人です。……』

『仲の町で？』

『名まへをいへば、必と、あなたは御存じだ。——か、まア……』

豐島屋さんはかぶせて

『とにかく、その婦人のために、片つ方は身も皮もぬいでかゝつてゐる。——親御とも緣を切れば、自分があとをやるはずになつてゐる店のこともみ向かない。——と、まア、いつたかたち。——れつきとしたうちのあるのを、わざ〳〵、不自由つたらしく二人で世帶をもつてゐるといふ仕儀です。』

『……』

『と、そこへ敵やくの出て來た奴。——玫の字です。』

『……』

『聞かせに、それとなく、ちら〳〵氣障なことをいひます。』

『……』

『つまり、あの女には、まへにどういふ男があつたとか、どういふ世話をしてゐた男があつたとか。——それを知らないで、いゝ間のふりに、亭主きどりをしてゐる奴の面がみたいとか……』

『……』

『が、音無しい人ではあり、それには先方の次第も知つてゐるので、柳にうけていまゝで相手にならなかつた。

、昨夜です。』

『…………』

『ぱつたり二人がぶつかつた。——不味いな、と思つたのは、両方がいゝ加減もう酔つてゐた……』

『…………』

『一とたてお客のかへつたあとで、外には、吉原の婦美孝が鉄治といふ爺さんをつれて飲んでゐるだけ。——長谷川さんは、いま、あなたのゐるところにゐて、瓊の家は向うの端にゐました。』

豊島屋さんは居どころを指さして、

『わたしは、やつぱり、こゝにゐました。』

『…………』

『で、瓊の家は、美婦孝を捕へてしきりにとろ〳〵いひます。——婦美孝がいゝやうにうけながすのを、嵩にかゝつて、聞いてゐられないやうなことまでいろ〳〵いひ立てます。——是でもか〳〵といつたかたちに……』

『…………』

『買つて出るのは知つてゐます。——が、うつかりしたことをいへばそれつきり、どろ車を横に押してくるか分らない。——だから、こつちは遠方で、かけ構へのないかほで、たゞそのふせぎだけつけてゐました。』

『旦那は、昨夜は、さういつても酔つておいでになりませんでしたね。』

横合から主人はいひました。

『酔つてなかつたからさう出来たんだ。——酔つてたらたゞぢやアすまなかつた。』

豊島屋さんはわらつて

『もつとも、わたしなら、あゝいふ荒事にはしないが……』

『わたしも眞逆と思ひました。』

主人はいまさらのやうに

『俎のまへにゐると、だしぬけに　ガチヤアンといふ音が聞えました。――おやッと思つてみると　長谷川さんが、眞つ青な顏をして、空いた銚子を摑んでそこに立つてゐるぢやありませんか……。』

『しかし……？』

わたしは豐島屋さんにいひました。

『そのときにあなたは……？』

『さ、それですよ……』

豐島屋さんは歎息するやうに

『間違ひの出來るときつていふものは仕方がないものです。……』

『…………？』

『いつにないこと、電話だといつて店からむかへが來ました。――よく〱でなければ　店から、そんなことをいつて來ることぢやありません。』

『……………』

『行つて、すぐ　五分とたゝないうちにかへつて來ました。――その五分とたゝないうちにそのしたらです。』

『平生、あんな　おだやかな優しい方が……』

主人（あるじ）は、また、口を出して

『さうやつて、その、立上つたところのかたちのついてゐるのにわたしは驚きました。――やつぱり江戸つ子だと思ひました。』

『つまらないことをいつてゐる……』

『いゝえ、ほんとうに。――さすがの瑣の家さんも、一寸（ちよいと）氣を嚥まれたかたちでした。』

『それはさうだらう。――わたしにしたつて……』

『が、よく〳〵だつたとは思ひます。』

『それはよく〳〵さ。――われ〳〵がそばで聞いた分には、多寡（たか）が女出入（をんなでいり）の、どうだつていいことだ。――が、長谷川さんにすると、どうだつていいぢやアすまされない。――うそにもあんなことをいはれたら立つ瀬がない。――土足で魂をふんづけられるやうなものだ。』

『…………』

『いたはりのない奴にかゝつちやアかなはない。――彼奴らは人に泣きをみせちやア手を叩いてゐる……』

『で、納りはどうつきました。』

割込んでわたしは訊きました。

『どうもかうもありません。』

豊島屋さんはこたへて

『瑣の家は婦美孝にまかせて、此方（こつち）は、わたしと、銀治といふその爺さんと二人で、外へ直ぐ連れ出しました。――い

きり立つのをやうやく吾妻橋まで引張つて行き、褒治をつけて、無理にそこからタクシイに乘せてうちへ送りました。』

『どちらです、お宅は?』

『何でも割下水の近所です。——無事にかへつたかどうか、いまにもその爺さんが來れば分ると、實は、先刻から待つてもゐるわけなんですが……』

『けど、旦那、あの爺さんには今日それをこゝへいひに來るだけのしがくはつきません。』

『でも、あれだつて幇間だ。——そのくらゐな寸法は分るだらう?』

『分れば、從ひをして、うで小豆やをはじめるなんて心細いことはいひません。』

『…………』

『請合ひます。——必と來ませんから。……』

『いゝえ、來る。——わたしは來ると思ふ。……』

『旦那、賭けませうか?』

『よし、賭けよう。』

『が、それよりも……』

わたしは豊島屋さんにいひました。

『その長谷川さんといふ方、もしや吉原に由緣のある方ぢやァありませんか?』

『よく御存じですね?』

豊島屋さんは思ひがけないやうに

「さうです。――ほんたうのお宅は吉原です。」

『ぢやアあの、富貴樓の……？』

『どうして、あなた、御存じです？』

豊島屋さんは眼をみ張つて

『これは不思議だ。……』

長谷川といふさらにある名まへだけに、わたしは、はじめは疑ひました。――が、やつぱりさうでした。――やつぱり拈華さんでした。

暖簾を分けて、いそいで、少婢（こをんな）がそのとき髪結からかへつて來ました。

『……雨がふつて來ました。』

（十三年九月）

先月につゞいてわたしは雨紅といふ主人公を中心にした第二の話を書いた。引續き第三の話を書いてゐる。勿論、第一の話、第二の話、第三の話を通じてすべて讀んで頂きたいのがわたしの望みではあるけれど、第一の話は第一の話として、第二の話は第二の話として、第三の話はまた第三の話として、わたしは、とくにそれ〴〵離して書いてゐる。といふ意味はついとほりの續きものとしてばかりこれをみて頂きたくない。（作者）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區通神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛社
京都市七條停車場前	共盛社
同　新町通り七條南入	大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◎定價　金八拾錢郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾八錢）

冊數／國別	内國	國外
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附録號増刊號は各倍冊に付普通號一冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は内國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社
正路喜社　豐國通信社　日本廣告社
信帽社　金蘭社　・星社

注意

一誌代郵税　[illegible]
一振替貯金　口座番號は東京三四番　長野三二〇五番なり
一郵券代用　は謝絶す　但し郵便局に不便の地に限り割増にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　御希望の方は振込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領票にあらざれば雜誌發送せず
　一金二圓以上五圓迄　金七錢（集金委托料）
　一金拾圓迄　金八錢（及送料共）
一中央公論及婦人公論　代金取纏め御拂込みの場合には各誌割當にて金額御指定を乞ふ
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正十三年九月廿九日印刷納本
大正十三年十月一日發行（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木鳥

發行所　東京市丸ノ内ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話　長丸ノ内三〇二二（當分不通）
牛込五〇六九
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舎

CHUO KORON *(The Central Review)*

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

